

# 兵庫津遺跡 第62次発掘調査報告書



2017年

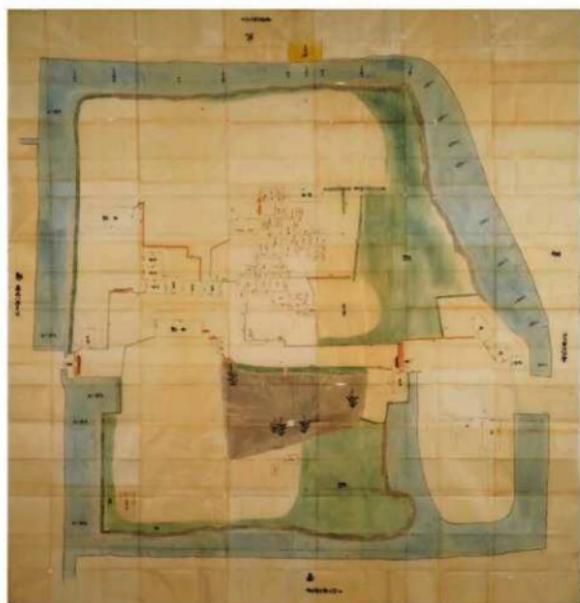
神戸市教育委員会



揖州八部郡福原庄兵庫津絵図（部分）（元禄9（1696）年）

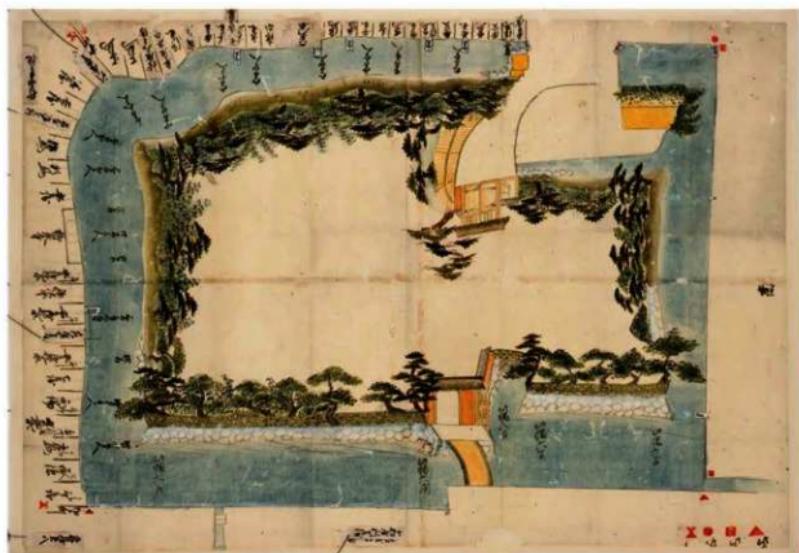
個人蔵・神戸市立博物館寄託

巻頭カラー2



尼崎藩兵庫陣屋図〔大判〕  
(江戸時代後期)

個人蔵・神戸市立博物館蔵寄託



兵庫陣屋絵図(江戸時代後期)

神戸市立博物館蔵



調査地遠景



兵庫城（築城期）

巻頭カラー4



遺構出土 桃山陶器



遺構出土 中国陶磁器

# 兵庫津遺跡 第62次発掘調査報告書



# 序

古代からから港町として栄えていた兵庫津に兵庫城が築かれたのは、今から430年ほど前のことです。

織田信長に反旗を翻した荒木村重の花熊城を攻め滅ぼした信長の重臣池田恒興は、戦の後、兵庫津の中心部に城を築いて町全体の復興に力を入れました。

できあがった新しい町は、商人や職人たちが暮らして商売を盛んに行い、戦のときには、町ぐるみを要塞化して防御できる城下町と呼ばれるものでした。

今回調査を行った兵庫津遺跡62次調査では、ちょうどこの兵庫城築城の時期にあたる城郭と周囲の城下町がみつかりました。

城は従来考えられていたよりも重厚な構造で、町は街路で整然と区画された町屋が建ち並ぶ様子が確認され、近世においても兵庫津が全国でも有数の港町として繁栄することができた基礎が明らかにされました。

最後になりましたが、本調査が関係者および地域住民のみなさまの多大なるご理解とご協力によって、実施することができましたことを厚くお礼申し上げます。

平成29年3月

神戸市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、神戸市兵庫区中之島2丁目において、平成25・26年・27度に神戸市教育委員会がイオンモール株の委託を受けて発掘調査を実施した、兵庫津遺跡第62次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 現地での調査は、平成26年2月20日から27年3月31日までと平成28年2月26日から28年3月14日にかけて実施したもので、神戸市教育委員会文化財課 斎木 嶽・谷 正俊・富山直人・内藤俊哉・浅谷誠吾・川上厚志・藤井太郎・閔野 意・中谷 正・山田侑生・荒田敬介・岡田健吾が担当した。現地調査終了後より平成28年度にかけ神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理および報告書の作成を行った。
3. 本書写真図版のうち現地での遺構写真撮影は神戸市教育委員会文化財課 丸山 潔および調査担当者によるもので、航空写真は㈱アコードによる。また遺物写真撮影については、杉本和樹（西大寺フォト）と丸山 潔、金属製品のX線透過写真撮影については、文化財課、中村大介によるものである。
4. 本書の記述は調査担当者が分担し、文責は目次に記した。遺物実測・トレースについては、㈱文化財サービス・衛測点堂に委託したほか、浅谷・川上・中村が行った。また全体の編集については、斎木・中谷・内藤が行った。
5. 本書「第7章」の、自然科学的調査中、樹種同定については㈱パレオ・ラボ、珪藻・花粉・プランクトン・オパール・寄生虫卵分析については古代の森研究舎、出土鉄滓の分析については、日鉄住金テクノロジーズ、また街路遺構の土壤検査については応用地質㈱にそれぞれ作業を委託した。
6. 本書の作成にあたり、同志社大学 増田富士雄氏、大阪教育大学 廣木義久氏、元京都府立山城郷土資料館 橋本清一氏、堺市立泉北すえむら資料館 森村健一氏（当時）、（公財）元興寺文化財研究所 狹川 真一氏、東海大学 丸山真史氏より玉稿を賜り本文中に掲載させていただくことができました。記してお礼申し上げます。
7. 関連する絵図や文献史料については、高久智広氏（神戸市立博物館）に、出土した木簡や墨書き器の釈読にあたりては、独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏をはじめとする史料研究室ならびに歴史研究室の方々の御教示を受けました。また赤外線写真撮影については、同所の中村一郎氏によるものである。
8. 本書に使用した標高は東京湾平均海水面（T.P.）を、方位座標については平面直角座標系第V系（世界測地系）を使用している。
9. 調査成果の報告としては、「兵庫津遺跡第62次調査」「平成26年度神戸市埋蔵文化財年報」と第1~4回現地説明会資料「兵庫津遺跡第62次調査」がある。また、いくつかの雑誌や講演会等の資料に成果速報をおこなってきたが、その後の検討・整理作業等によって内容を変更した部分がある。本報告をもって正報告とし訂正する。また、出土木簡については、「木簡研究」第三八号（2016）に報告されている。内容については現在においても十分なものであるが、報告にあたり出土遺構等の呼称を変更しているためご注意願いたい。
10. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸主部」・「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の1の地形図「神戸」「兵庫」「御崎公園」「中突堤」「兵庫突堤」「和田岬」を使用した。
11. 発掘調査で出土した遺物および図面・写真等の記録類は、神戸市教育委員会（埋蔵文化財センター）において保管している。
12. 現地での発掘調査および遺物の整理・報告書作成にあたっては、前出の方々以外にも下記の関係機関ならびに諸氏にご指導、ご助言をいただきました。ここに記して感謝いたします。（敬称略）  
(独法) 文化財研究所奈良文化財研究所 神戸市立博物館 神戸市文書館 大阪歴史学会 城郭談話会  
池田千冬 岡田章一 奥村 弘 織野英史 金田 隆 北垣聰一郎 黒田慶一 寒川 旭 千田嘉博  
高妻洋成 出口晶子 出口正登 中井 均 藤田裕嗣 松井哲洋 松尾信裕 松木 哲 宮武正登  
三好 俊 森田克行 山上雅弘 脇谷草一郎 鶯尾寧一 (50音順)

## 目 次

第1章 はじめに .....	1
第1節 調査に至る経緯と経過 .....	1
第2節 遺跡の位置と歴史環境 .....	6
第3節 周辺の調査 .....	8
第4節 周辺の遺跡 .....	10
第2章 調査区の設定と調査方法 .....	12
第1節 調査区の設定 .....	12
第2節 調査の方法 .....	12
第3節 基本層序と遺構面 .....	15
第4節 神戸市兵庫津遺跡でみられる砂嘴堆積層(増田富士雄・廣木義久) .....	17
第3章 新町地区の調査 .....	29
第1節 遺構面 .....	29
第2節 第Ⅰ期 検出遺構 .....	29
第3節 第Ⅱ期 検出遺構 .....	32
第4節 第Ⅲ期 検出遺構 .....	37
第5節 第Ⅳ(古)期の遺構 .....	52
第6節 下層確認トレンチ .....	58
第4章 関屋町地区の調査 .....	59
第1節 遺構面 .....	59
第2節 第Ⅰ期 検出遺構 .....	59
第3節 第Ⅱ期 検出遺構 .....	59
第4節 第Ⅲ期 検出遺構 .....	62
第5節 第Ⅲ期(古) 検出遺構 .....	68
第6節 下層確認トレンチ .....	76
第7節 第Ⅳ期 検出遺構 .....	78
第8節 西部 V期 検出遺構 .....	83
第5章 兵庫城地区の調査 .....	89
第1節 概要 .....	89
第2節 第Ⅰ期の遺構 .....	89
第3節 第Ⅱ～Ⅳ期の遺構 .....	97
第4節 兵庫城石垣等石材の材質(橋本清一) .....	145
第5節 築城以前の遺構 .....	155
第6章 出土遺物 .....	157
第1節 土器・陶磁器・瓦 .....	157
第2節 兵庫津と堺の陶磁器(森村健一) .....	161

第3節	金属製品	169
第4節	木製品	175
第5節	土製品・石製品	197
第6節	骨製品	199
第7節	転用石造物	201
第8節	兵庫城跡出土の転用石造物について(狭川真一)	209
第7章	自然科学的調査	213
(1)	兵庫津遺跡第62次調査出土木製品の樹種同定(㈱パレオ・ラボ)	213
(2)	兵庫津遺跡第62次調査出土炭化材の樹種同定(㈱パレオ・ラボ)	221
(3)	兵庫津遺跡第62次調査の古環境と利用植物(古代の森研究舎)	225
(4)	兵庫津遺跡(第62次調査)出土鍛冶関連遺物の分析調査(日鉄住金テクノロジー㈱)	235
(5)	兵庫津遺跡第62次調査出土の動物遺存体(丸山真史)	243
(6)	兵庫津遺跡第62次調査に伴う土壤分析業務(応用地質㈱)	259
第8章	まとめ	267
第1節	はじめに	267
第2節	町屋域の検討	267
第3節	兵庫城の構造と変遷	270
第4節	結びにかえて	276
土器類觀察表		279
遺物実測図		307
写真図版		405
付 図		

### 挿図 目次

図1	調査区位置図	6	図19	新町地区 第Ⅱ期町屋建物平面図	34
図2	兵庫津遺跡62次調査地と遺跡内調査地点	9	図20	石列・貝殻堆积造構 平面・断面図	35
図3	兵庫津遺跡の位置と周辺遺跡図	10	図21	SK1213 平・断面図	36
図4	調査区設定図	12	図22	大型石組造構SK1201 平・断面図	36
図5	新町・閑屋町水帳絵図と検出遺構の照合	13・14	図23	SB1331 小区画平面図・イロリ平・断面図	38
図6	調査区内土層柱状図	16	図24	新町地区 第Ⅲ期遺構平面図	39
図7	兵庫津遺跡の位置	17	図25	第Ⅲ期 町屋群A~C平面図	41・42
図8	発掘地点における地層観察のトレーンチ(a,b)の位置	18	図26	第Ⅲ期 町屋群D北部平面図	43
図9	地層断面(B)とその内部構造のスケッチ(A)	19	図27	第Ⅲ期 町屋群D(中部)平面図	44
図10	地層断面と下部層のフォーセット面の走向・傾斜	21	図28	第Ⅲ期 町屋群D(南部)平面図	45
図11	地層断面のスケッチ	23	図29	第Ⅲ期 町屋群E平面図	46
図12	砂嘴堆積物の写真	23	図30	第Ⅲ期 町屋群F平面図	47
図13	穀のファブリック	24	図31	新町地区 第Ⅲ期 道標平・断面図	48
図14	疊種(岩石種)組成	25	図32	SX1304平・断面図	50
図15	兵庫津遺跡付近の表層地質断面	27	図33	石列SX1301・石組井口SE1304平・立面図	51
図16	新町地区 第Ⅰ期 遺構平面図	30	図34	Ⅲ期町屋群B下瓦整地層断面図	52
図17	新町地区 第Ⅰ期 遺構平・断面図	31	図35	Ⅲ期(古)町屋群B・町屋群D北部平面図	52
図18	新町地区 第Ⅱ期 遺構平面図	33	図36	第Ⅲ(古)期 町屋群D(中~南部)平面図	53・54

図37 新町地区第Ⅲ(古)期遺構平面図	55
図38 第Ⅲ(古)期 町屋群E平面図	56
図39 SB1423・1424内 イロリ 平・断面図	57
図40 下層確認トレンチ遺構平面	58
図41 関屋町地区 東部 第Ⅰ期 遺構面平・断面図	60
図42 関屋町地区 東～中央部第Ⅰ・Ⅱ期 遺構面平・断面図	61
図43 第Ⅲ期 町屋群G 平面図	62
図44 関屋町地区、第Ⅱ期(中～東部)遺構平面図	63
図45 関屋町地区 第Ⅱ・Ⅲ期 町屋群I 平面図	64
図46 関屋町地区東部 第Ⅲ期遺構平面図	65
図47 SB2341土間 平面図	66
図48 第Ⅲ期 町屋群I(北部)平面図	66
図49 SB2341 イロリ 平・断面図	67
図50 第Ⅲ期(古) 町屋群G・H 平面図・SE2961 平面図	69・70
図51 第Ⅲ期(古) 町屋群E(北部)平面図	71
図52 第Ⅲ期 町屋群I(南部)平面図	72
図53 SE2451貼建物 平・立面図	73
図54 第Ⅲ期 町屋群J(北部)平面図	74
図55 第Ⅲ期 町屋群J(南部)平面図	75
図56 町屋群J下層確認トレーナー 平面図	77
図57 関屋町地区 東部 第Ⅳ期 遺構平面図	79
図58 SE2401・SE2402 平・立面図	80
図59 SE2406・SE2407 平・立面図	81
図60 関屋町地区 東部～中部 第Ⅴ期 遺構平・断面図	82
図61 V期の遺構平面図	84
図62 V期の遺構平面図(整地土除去後の遺構)	84
図63 柱列遺構平面図	85
図64 柱穴土層断面図	85
図65 SX2501 平面・立面図・土層断面図・断削土層断面図	86
図66 SK2514 平・立面図	87
図67 SE2503 平・断・立面図	88
図68 SE2504 平・断・立面図	88
図69 新町地区水銀鉛鉱(部分)	89
図70 SD3101(新1・旧)平面図	90
図71 SD3101東側(Ⅲ)内遺構平・断面図	91
図72 SD3101東側(新1)北部石積オルソ写真	93
図73 SD3101東側(新1)中央部舶材土留オルソ写真	93
図74 第Ⅰ期遺構平・断面図1	95
図75 第Ⅰ期遺構平・断面図2	96
図76 第Ⅱ～Ⅳ期平面図	97
図77 兵庫城石垣断面図	98
図78 内堀平面図	99
図79 内堀断面図1	100
図80 内堀断面図2	101
図81 内堀石垣平面図(北半)	103・104
図82 内堀平面図(南半)	105・106
図83 内堀石垣立面図1	107
図84 内堀石垣立面図2	108
図85 内堀石垣立面図3	109
図86 南外堀平面図	114
図87 南外堀断面図	116
図88 南外堀石垣平面図	117・118
図89 南外堀城外側石垣立面図	119・120
図90 南外堀城内側石垣平・立面図	121・122
図91 東外堀平面図	125
図92 東外堀断面図	126
図93 東外堀平面図(北部)	127・128
図94 東外堀平面図(中央部)	129・130
図95 東外堀平面図(南部)	131・132
図96 東外堀石垣立面図1	133
図97 東外堀石垣立面図2	134
図98 東外堀(新)小区画平面図	137
図99 東外堀(新)小区画断面・立面図	138
図100 城郭内遺構平・断面図	141
図101 城郭内遺構平・断面図2	142
図102 城郭内遺構平・断面図3	143
図103 兵庫城地区第Ⅳ～V期遺構平・断面図	144
図104 石材調査位置図	145
図105 兵庫城と六甲山地周辺の地質図	145
図106 石材の円周度の段階図	146
図107 石材の方向と傾きの模式図	148
図108 石垣1(内堀域内側石垣)立面図	149
図109 石垣2(内堀域内側石垣)立面図	150
図110 石垣3(東外堀域内側)立面図	151
図111 石垣4(南外堀域内側)立面図	151
図112 石垣5(南外堀新域外側)立面図	152
図113 石垣6(南外堀旧域外側)立面図	152
図114 石積遺構平面図	154
図115 梁築前遺構配置図	155
図116 下層土留遺構平・断面図	156
図117 「廢長十年撰津国絵図」(部分)・兵庫津・堺	162
図118 堺環濠都市道路230地点	165
図119 金属製品(1)	171
図120 金属製品(2)	172
図121 金属製品(3)	173
図122 下駄別の割合	176
図123 木製品実測図(1)	179
図124 木製品実測図(2)	180
図125 木製品実測図(3)	181
図126 木製品実測図(4)	182
図127 木製品実測図(5)	183
図128 木製品実測図(6)	184
図129 木製品実測図(7)	185
図130 木製品実測図(8)	186
図131 船材(1)	188
図132 船材(2)	189
図133 出土木簡(1)	193
図134 出土木簡(2)	194
図135 出土石製品・石製品実測図	197
図136 出土硯実測図	198
図137 出土骨・貝製品実測図	200
図138 出土石造物(1)	201
図139 出土石造物(2)	202
図140 出土石造物(3)	203
図141 出土石造物(4)	204
図142 出土石造物(5)	205
図143 出土石造物(6)	206
図144 転用石造物出土地点	208
図145 第62次調査内堀と外堀等の主要珪藻分布図	227
図146 第62次調査の内堀と外堀の主要花粉分布図	229
図147 各街路におけるせん断抵抗角の分布範囲	261
図148 粒径加積曲線グラフ(街路1)	263
図149 粒径加積曲線グラフ(SE2441町屋)	263
図150 粒径加積曲線グラフ(Y区ロ-1街路2)	263
図151 偏光顕微鏡による観察状況	265
図152 兵庫津道路内で確認された町屋遺構	267
図153 町屋建物の平面配置	268
図154 兵庫城郭南側平面図(新段階)	271
図155 兵庫城変遷図1	274
図156 兵庫城変遷図2	275

## 写真目次

写真1	重機掘削作業	3	写真61	南外堀側(Ⅲ)城外側石垣1	115
写真2	クレーンによる写真国化作業	3	写真62	南外堀側(Ⅲ)城外側石垣2	115
写真3	トライヤーのウイーク受け入れ	4	写真63	南外堀側(Ⅲ)城外側石垣3	115
写真4	不発弾確認作業	4	写真64	南外堀側(Ⅲ)城外側石垣4	115
写真5	写真撮影作業	4	写真65	南外堀側内側石垣西入角	115
写真6	現地説明会開催風景	5	写真66	南外堀側内側石垣東入角	115
写真7	石垣埋戻し作業	5	写真67	南外堀側内側石垣西出角	115
写真8	ボールによる写真測量	15	写真68	南外堀側内側石垣東出角	115
写真9	土層軸写真作業	15	写真69	南外堀側内側土橋2以西堆積状況	123
写真10	造構型取り作業	15	写真70	南外堀(新)城外側石垣断面	123
写真11	造構切取り作業	15	写真71	南外堀(新)城外側石垣(転用石材)1	124
写真12	新町地区北部土層堆積状況(オルソ写真)	16	写真72	南外堀(新)城外側石垣(転用石材)2	124
写真13	SE1103	32	写真73	南外堀(新)城外側石垣(転用石材)3	124
写真14	瓦溜め造構	32	写真74	南外堀側外側石垣g-g'列	124
写真15	落ち込み造構(羽口・鉄錆等)	37	写真75	南外堀側外側石垣f-f'列	124
写真16	焼土層	37	写真76	東外堀側(Ⅲ)城内側石垣シノギ角	126
写真17	SX1304 遺物出土状況	49	写真77	東外堀側(Ⅲ)城外側石垣土橋1入角	126
写真18	SX1304 木製品出土状況	49	写真78	東外堀側(Ⅲ)城内側石垣土橋1入角	126
写真19	同上 北壁	49	写真79	東外堀(新)城外側石垣	135
写真20	同上 底面と南壁石組	49	写真80	土橋1南面石垣東入角	135
写真21	SB2202炭化材出土状況(オルソ写真)	67	写真81	土橋1南面石垣東側	135
写真22	SB2423炭材	74	写真82	東外堀側(Ⅲ)城内側石垣	135
写真23	SK2401	78	写真83	土橋1中央石列	135
写真24	SB2461	78	写真84	東外堀(新)小区画(東石垣胴木組)	136
写真25	SK2402	78	写真85	東外堀(新)小区画(新)北石垣胴木組	136
写真26	SK2410	78	写真86	土橋1瓦敷造構	136
写真27	SE2401断割り	80	写真87	土橋1瓦敷造構出土状況	136
写真28	SE2402断割り	80	写真88	SE3201	139
写真29	SE2402掘出土状況	80	写真89	SK3105	140
写真30	SB2423炭材	81	写真90	SK3401	140
写真31	SB2423炭材	81	写真91	石垣の石材	145
写真32	柱穴列(左)東から(右)西から	85	写真92	SX1307出土墨書き器	157
写真33	SD3101東側(新1)	89	写真93	南外堀(新)出土火人	159
写真34	SD3101東側(新1)	90	写真94	内堀側(Ⅲ)出土記年瓦	160
写真35	SD3101南側(Ⅲ)	90	写真95	漳州窯青花不死鳥文盤	168
写真36	SE3101	92	写真96	漳州窯青花芙蓉手不死鳥文盤	168
写真37	SD3101東側(新1)矢穴	92	写真97	錢貨X線透過画像	174
写真38	SD3101東側(新1)北部裏込	93	写真98	本簡赤外線写真(1)	194
写真39	SD3101東側(新1)中央部胴木組	93	写真99	本簡赤外線写真(2)	195
写真40	SK3101遺物出土状況	94	写真100	本簡赤外線写真(3)	196
写真41	内堀側(旧)二列石垣上層転石検出状況	102	写真101	馬家墓所地蔵石仏	207
写真42	内堀側(旧)主郭側二列石垣前列裏込	110	写真102	福知山城の石垣	210
写真43	内堀側(旧)副郭側南堆積状況	110	写真103	清盛塚十三重石塔	211
写真44	内堀側(旧)主郭側二列石垣後列胴木	110	写真104	真光寺一通上人墓五輪塔	211
写真45	内堀側(旧)主郭側二列石垣前列シノギ角	110	写真105	頭部を五輪塔とした釣貫鋼柱材の出土状況	212
写真46	内堀側(旧)主郭側二列石垣前列胴木	110	写真106	兵庫津道路第62次調査出土木製品の光学顕微鏡写真	219
写真47	内堀側(旧)主郭側二列石垣前列胴木	110	写真107	兵庫津道路第62次調査出土火化骨の走査電子顕微鏡写真	224
写真48	内堀(新)主郭側石垣北西出角	111	写真108	兵庫津道路第62次調査区より産出した珪藻化石	233
写真49	内堀(新)主郭側北西入角	111	写真109	兵庫津道路第62次調査より産出した珪藻化石と寄生虫類	233
写真50	内堀側(旧)主郭側石垣南西入角	111	写真110	兵庫津道路第62次出土大型植物化石	234
写真51	内堀側(旧)主郭側石垣南西出角	111	写真111	鉄製品製作関連遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果(1)	239
写真52	内堀側(旧)主郭側石垣土橋西入角	111	写真112	鉄製品製作関連遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果(2)	240
写真53	内堀側(旧)副郭側石垣土橋東入角	111	写真113	鉄製品製作関連遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果(3)	241
写真54	内堀側(旧)副郭側北東石垣入角	111	写真114	鉄製品製作関連遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果(4)	242
写真55	内堀側(旧)副郭側北東出角	111	写真115	トリガイ	252
写真56	土橋3断面	112	写真116	カメ腹甲傷	252
写真57	土橋2上内面(新)埋土	112	写真117	二枚貝	253
写真58	内堀(新)主郭側石垣(土橋3以北)	113	写真118	巻貝(大型)	254
写真59	内堀(新)主郭側石垣(土橋以南(狭小部)石垣)	113	写真119	巻貝(小型~中型)・爬虫類	255
写真60	土橋3部分内堀(新)主郭側埋没石垣	113	写真120	魚類	256

写真121	鳥類・小型哺乳類	257	写真126	顕微鏡写真(No.4)	266
写真122	中型・大型哺乳類	258	写真127	尼崎藩兵庫陣屋図(中判)副郭南側	271
写真123	顕微鏡写真(No.1)	266	写真128	尼崎藩兵庫陣屋図(大判)副郭南側	271
写真124	顕微鏡写真(No.2)	266	写真129	兵庫陣屋跡町割図	272
写真125	顕微鏡写真(No.3)	266			

## 遺物実測図目次

図1	新町地区出土遺物実測図1		図54	閔屋町地区出土遺物実測図23	
図2	新町地区出土遺物実測図2		図55	閔屋町地区出土遺物実測図24	
図3	新町地区出土遺物実測図3		図56	閔屋町地区出土遺物実測図25	
図4	新町地区出土遺物実測図4		図57	閔屋町地区出土遺物実測図26	
図5	新町地区出土遺物実測図5		図58	閔屋町地区出土遺物実測図27	
図6	新町地区出土遺物実測図6		図59	閔屋町地区出土遺物実測図28	
図7	新町地区出土遺物実測図7		図60	閔屋町地区出土遺物実測図29	
図8	新町地区出土遺物実測図8		図61	閔屋町地区出土遺物実測図30	
図9	新町地区出土遺物実測図9		図62	兵庫城地区出土遺物実測図1	
図10	新町地区出土遺物実測図10		図63	兵庫城地区出土遺物実測図2	
図11	新町地区出土遺物実測図11		図64	兵庫城地区出土遺物実測図3	
図12	新町地区出土遺物実測図12		図65	兵庫城地区出土遺物実測図4	
図13	新町地区出土遺物実測図13		図66	兵庫城地区出土遺物実測図5	
図14	新町地区出土遺物実測図14		図67	兵庫城地区出土遺物実測図6	
図15	新町地区出土遺物実測図15		図68	兵庫城地区出土遺物実測図7	
図16	新町地区出土遺物実測図16		図69	兵庫城地区出土遺物実測図8	
図17	新町地区出土遺物実測図17		図70	兵庫城地区出土遺物実測図9	
図18	新町地区出土遺物実測図18		図71	兵庫城地区出土遺物実測図10	
図19	新町地区出土遺物実測図19		図72	兵庫城地区出土遺物実測図11	
図20	新町地区出土遺物実測図20		図73	兵庫城地区出土遺物実測図12	
図21	新町地区出土遺物実測図21		図74	兵庫城地区出土遺物実測図13	
図22	新町地区出土遺物実測図22		図75	兵庫城地区出土遺物実測図14	
図23	新町地区出土遺物実測図23		図76	兵庫城地区出土遺物実測図15	
図24	新町地区出土遺物実測図24		図77	兵庫城地区出土遺物実測図16	
図25	新町地区出土遺物実測図25		図78	新町地区出土軒丸瓦実測図1	
図26	新町地区出土遺物実測図26		図79	新町地区出土軒丸瓦実測図2	
図27	新町地区出土遺物実測図27		図80	新町地区出土軒平瓦実測図	
図28	新町地区出土遺物実測図28		図81	新町地区出土軒平瓦・丸瓦実測図	
図29	新町地区出土遺物実測図29		図82	新町地区出土丸瓦・瓦管・雁振瓦・刻印実測図	
図30	新町地区出土遺物実測図30		図83	新町地区出土鬼瓦実測図	
図31	新町地区出土遺物実測図31		図84	閔屋町地区出土軒丸瓦実測図	
図32	閔屋町地区出土遺物実測図1		図85	閔屋町地区出土軒平瓦実測図1	
図33	閔屋町地区出土遺物実測図2		図86	閔屋町地区出土軒平瓦実測図2	
図34	閔屋町地区出土遺物実測図3		図87	閔屋町地区出土丸瓦実測図	
図35	閔屋町地区出土遺物実測図4		図88	閔屋町地区出土鬼瓦実測図	
図36	閔屋町地区出土遺物実測図5		図89	閔屋町地区出土鬼瓦・平瓦・実測図	
図37	閔屋町地区出土遺物実測図6		図90	兵庫城地区出土軒丸瓦実測図1	
図38	閔屋町地区出土遺物実測図7		図91	兵庫城地区出土軒丸瓦実測図2	
図39	閔屋町地区出土遺物実測図8		図92	兵庫城地区出土軒丸瓦等実測図	
図40	閔屋町地区出土遺物実測図9		図93	兵庫城地区出土軒平瓦実測図1	
図41	閔屋町地区出土遺物実測図10		図94	兵庫城地区出土軒平瓦実測図2	
図42	閔屋町地区出土遺物実測図11		図95	兵庫城地区出土丸瓦実測図1	
図43	閔屋町地区出土遺物実測図12		図96	兵庫城地区出土丸瓦実測図2	
図44	閔屋町地区出土遺物実測図13		図97	兵庫城地区出土鬼瓦等実測図	
図45	閔屋町地区出土遺物実測図14				
図46	閔屋町地区出土遺物実測図15				
図47	閔屋町地区出土遺物実測図16				
図48	閔屋町地区出土遺物実測図17				
図49	閔屋町地区出土遺物実測図18				
図50	閔屋町地区出土遺物実測図19				
図51	閔屋町地区出土遺物実測図20				
図52	閔屋町地区出土遺物実測図21				
図53	閔屋町地区出土遺物実測図22				

## 写真図版 目次

- 卷頭カラー 1 横浜八部郡福原庄兵庫津繪図(部分)
- 卷頭カラー 2 1. 尼崎藩兵庫陣屋跡[大判](江戸時代後期)  
2. 兵庫陣屋跡[江戸時代後期]
- 卷頭カラー 3 1. 調査地遠景  
2. 兵庫城[築城期]
- 卷頭カラー 4 1. 遺構出土桃山陶器  
2. 遺構出土中国陶磁器
- 写真図版扉 調査区遠景
- 写真図版 1 1. 調査区空中写真  
2. 調査区空中写真
- 写真図版 2 1. 新町地区 北部Ⅰ期遺構面  
2. 同左南西部北部Ⅰ期遺構面  
3. SK1120(カマド)  
4. 同上 構築材  
5. SK1109(カマド)  
6. 同上 構築材
- 写真図版 3 1. SK1104(カマド)  
2. SK1105  
3. SK1117  
4. SK1108  
5. SK1107・SK1101  
6. SK1115  
7. SE1103  
8. SP1101～1105
- 写真図版 4 1. 新町地区 Ⅱ期遺構面全景  
2. 同上[北部]  
3. 同上[東部]
- 写真図版 5 1. SB1203  
2. 町屋群A[Ⅱ期]  
3. SB1208・1209
- 写真図版 6 1. SB1210・1252  
2. 街路2断面  
3. 同上
- 写真図版 7 1. SB1201  
2. SB1210・街路石列  
3. 石敷遺構
- 写真図版 8 1. 鎌冶遺構SK1213  
2. 石組遺構SX1201  
3. SE1304
- 写真図版 9 1. 石列・貝殻集積遺構  
2. 同上細部  
3. 同上断面  
4. 貝殻集積ピット
- 写真図版 10 1. 新町地区 Ⅲ期遺構面全景  
2. 同上
- 写真図版11 1. 町屋群A焼土面[Ⅲ期]  
2. 同上 完掘状況
- 写真図版12 1. 町屋群B焼土面[Ⅲ期]  
2. 同上 完掘状況  
3. 町屋群C[Ⅲ期]
- 写真図版13 1. 町屋群D・E・街路2[Ⅲ期]  
2. 町屋群D・街路2[Ⅲ期]
- 写真図版14 1. 町屋群D・街路2[Ⅲ期]  
2. 町屋群E・街路2[Ⅲ期]
- 写真図版15 1. SB1314  
2. SB1315  
3. SB1325
- 写真図版16 1. 町屋群F  
2. SB1335
- 写真図版17 1. SB1334・1333  
2. SB1332
- 写真図版18 1. SB1331焼土面
2. 同上 遺物出土状況  
3. 同上 南西隅小区画  
4. 同上 イロリ  
5. 同上 間仕切壁
- 写真図版19 1. SB1331・街路2・SB1361  
2. SB1331[Ⅲ期]
- 写真図版20 1. SB1408 上面瓦整地層  
2. 同上 細部  
3. 同上 断面
- 写真図版21 1. SB1453・1454 上面瓦整地層  
2. SB1453・1354  
3. SB1455
- 写真図版22 1. SB1423・1424[Ⅲ期]  
2. SB1424[Ⅲ期]
- 写真図版23 1. SB1413[Ⅲ期]  
2. SB1414[Ⅲ期]
- 写真図版24 1. SB1415[Ⅲ期]  
2. SB1416[Ⅲ期]
- 写真図版25 1. SK1333  
2. SK1302  
3. SK1305  
4. SK1306  
5. SK1201  
6. SK1209  
7. SE1306  
8. SE1203
- 写真図版26 1. SE1310  
2. SE1309  
3. SK1313  
4. SK1329  
5. SK1315  
6. SK1325  
7. SK1327  
8. SK1204
- 写真図版27 1. SB1463・1464  
2. 下層確認トレンチ1  
3. SB1482
- 写真図版28 1. 下層確認トレンチ2  
2. SB1331・街路1 断割りトレンチ  
3. 街路1 断割りトレンチ
- 写真図版29 1. SX1304遺物出土状況  
2. 同上 完掘状況
- 写真図版30 1. SX1301  
2. SX1301・1304
- 写真図版31 1. 町屋町地区 Ⅰ期遺構面全景  
2. 同上[西部]
- 写真図版32 1. SK2106  
2. SX2105  
3. SK2102  
4. SK2209  
5. SK2208  
6. SK2213  
7. SK2203  
8. SE2101
- 写真図版33 1. 町屋町地区 Ⅱ期遺構面全景  
2. 同上
- 写真図版34 1. SE2201  
2. 町屋群J[Ⅱ期]  
3. 同左[Ⅲ期]
- 写真図版35 1. 町屋町地区 Ⅲ期町屋群焼上面  
2. 町屋群G・H[Ⅲ期]
- 写真図版36 1. 町屋群I焼上面[Ⅲ期]

	2. 町屋群J 燃土面(Ⅲ期)	2. 同上
	3. 町屋群J 燃土面(Ⅲ期)	1. SK2501
写真図版37	1. 町屋群G 燃土面(Ⅲ期)	2. SK2504
	2. 町屋群G・H周辺焼失壁材	3. SK2505
	3. SB2301	4. SK2506
写真図版38	1. SB2302	5. SK2513
	2. SB2303	6. SE2504
写真図版39	1. 町屋群H(Ⅲ期)	7. SK2514
	2. SB2410(Ⅲ期)	8. SX2515
写真図版40	1. 町屋群J(Ⅲ期)	写真図版60 1. SD3101南側(新2)
	2. 町屋群J(Ⅲ期)	2. SD3101南側(新1)
写真図版41	1. SB2341	写真図版61 1. SD3101東側(新1)中央部
	2. 同上 イロリ	2. SD3101東側(新1)中央部胴木組
	3. 同上 カマド	3. SD3101東側(新1)中央部土留転用材(船材)
	4. 同上 梁架材	写真図版62 1. SD3101東側(新2)北部
	5. 土間間仕切壁	2. SD3101東側(新2)北部
写真図版42	1. SB2445	3. SD3101東側(新2)北部胴木組
	2. SB2446	4. SK3107
写真図版43	1. SB2447	5. SE3101
	2. SB2445窓口部分石列	6. SD3101東側(新1)中央部石積
	3. SB2447 カマド	7. SD3101東側(新1)北部胴木組
	4. SB2445 イロリ	8. 同上 脇木組
	5. SB2445 カマド	写真図版63 1. SD3101東側(新1)
写真図版44	1. SB2324	2. SD3101東側(新1)北部胴木組
	2. SB2323	写真図版64 1. SD3101南側(新1)中央部
	3. SB2324 カマド	2. SD3101南側(旧)中央部
	4. SB2323 カマド	写真図版65 1. SD3101東側(旧)北部
写真図版45	1. 町屋群G(Ⅲ期・古)	2. 同上
	2. 町屋群H(Ⅲ期・古)	3. SD3101東側(新1)北部
写真図版46	1. SB2401	写真図版66 1. SD3101東側(旧)北部
	2. SB2402	2. SD3101東側(新1)北部石積検出前
	3. SB2403	3. SD3101東側(旧)北部石積検出後
写真図版47	1. SB2404	写真図版67 1. SD3101東側(旧)北部
	2. SB2405	2. SD3101東側(旧)中央部
	3. SB2409	写真図版68 1. SK3102 2. SK3103 3. SK3104・3105
写真図版48	1. SB2410	写真図版69 1. 兵庫城全貌 2. 同上
	2. SB2409 イロリ	写真図版70 1. 南外堀・内堀 2. 土橋1・副郭
	3. SB2404 カマド	写真図版71 1. 内堀(新)副郭側石列
	4. SB2405 イロリ	2. 内堀(新)副郭側石列下層
	5. SB2409 カマド	3. 内堀(新)
写真図版49	1. SB2441～2443	写真図版72 1. 内堀(旧)主郭側石垣 2. 同上
	2. SB2441	写真図版73 1. 内堀(旧)主郭側石垣 2. 同上
写真図版50	1. SB2445～2447	写真図版74 1. 内堀(旧)主郭側石垣細部 2. 同上
	2. SB2441 カマド	写真図版75 1. 内堀(旧)副郭側石垣 2. 同上細部
	3. SB2441 イロリ	3. 内堀(旧)主郭側石垣裏込
	4. SB2446 無文鏡出土状況	4. 内堀(旧)土橋2
	5. SB2445 転用磯石	5. 内堀(旧)副郭側石垣掘形
写真図版51	1. 町屋群J(Ⅲ期)	写真図版76 1. 内堀(旧)土橋2 2. 内堀(新)土橋3
	2. SB2421	写真図版77 1. 南外堀
	3. SB2422 カマド	2. 東外堀
	4. SB2424 カマド	写真図版78 1. 南外堀域外側石垣
写真図版52	1. SB2422	2. 出角部転用石材
	2. SB2423	3. 転用石材(石仏)
写真図版53	1. SB2451	4. 同右上
	2. 同上 堆列	5. 同上
写真図版54	1. 町屋群J下層確認トレント	写真図版79 1. 南外堀域内側石垣
	2. 同上	2. 同上
写真図版55	1. 閣屋町地区 中央部Ⅳ期遺構面全景	写真図版80 1. 南外堀(新)堆積状況
	2. 下層確認トレント(Ⅳ期)	2. 東外堀(III)城内側堆積状況
写真図版56	1. 閣屋町地区 西部Ⅴ期遺構面全景	3. 内堀(III)堆積状況
	2. 同上	1. 東外堀(新)小区画(新)
写真図版57	1. SX2501	2. 東外堀(新)小区画(新・旧)
	2. 同上 土層断面	写真図版81 1. 東外堀(II)城内側石垣
写真図版58	1. SX2501	2. 東外堀(II)城内側石垣

2. 東外堀(旧)城内側石垣  
写真図版83 1. 東外堀(旧)城内側石垣  
2. 同上  
3. 同上
- 写真図版84 1. 東外堀・土橋 1  
2. 東外堀(旧)城内側石垣・土橋 1 南石垣  
写真図版85 1. 瓦敷遺構  
2. 同上細部  
写真図版86 1. 東外堀・土橋 1 ・副郭周辺[上層]  
2. 副郭南部  
写真図版87 1. SK3404  
2. SK3405  
3. SE3403  
写真図版88 1. SE3402  
2. SE3401  
写真図版89 1. SE3501  
2. 下層土留遺構  
写真図版90 1. 新町地区 江戸時代中期～後期 出土遺物  
2. 新町地区 SB1308・1309・1353・1355 出土遺物  
写真図版91 1. 新町地区 SB1304・1305・1310 出土遺物  
2. 新町地区 SB1311～1318 出土遺物  
写真図版92 1. 新町地区 SB1322～1325 出土遺物  
2. 新町地区 SB1331～1334 出土遺物  
写真図版93 1. 新町地区 SB1331 出土遺物  
2. 新町地区 石組遺構 SK1325 出土遺物  
写真図版94 1. 新町地区 石積遺構 SX1301 出土遺物  
2. 新町地区 大型石組遺構 SX1304 出土遺物  
写真図版95 1. 新町地区 下層 出土遺物  
2. 閣屋町地区 下層 出土遺物  
写真図版96 1. 閣屋町地区 江戸時代焼土層 出土遺物  
写真図版97 1. 閣屋町地区 SB2341・2342・SR2411～2447 出土遺物  
写真図版98 1. 閣屋町地区 SB2301～2305・2309 出土遺物  
写真図版99 1. 閣屋町地区 SB2321～2327 出土遺物  
写真図版100 1. 閣屋町地区 SB2421～2427 出土遺物  
写真図版101 1. 閣屋町地区 SB2410・2413・2414 出土遺物  
2. 閣屋町地区 江戸時代初頭遺構 出土遺物  
写真図版102 1. 閣屋町地区 SB2341 出土遺物  
2. 閣屋町地区 SB2441 出土遺物  
写真図版103 1. 閣屋町地区 西半部下層敷地層 出土遺物  
2. 閣屋町地区 SX2501 出土遺物  
写真図版104 1. 閣屋町地区 SE2504 出土遺物  
2. 閣屋町地区 SK2504 出土遺物  
写真図版105 1. 兵庫城地区 SK3101 出土遺物  
2. 兵庫城地区 SK3103 出土遺物  
写真図版106 1. 兵庫城地区 SD3101 南側 出土遺物  
写真図版107 1. 兵庫城地区 SD3101 東側(新1) 出土遺物  
写真図版108 2. 兵庫城地区 SD3101 東側(III) 出土遺物  
写真図版109 1. 兵庫城地区 内堀(新) 出土遺物  
2. 兵庫城地区 内堀(II) 出土遺物  
写真図版110 1. 兵庫城地区 南外堀(新) 出土遺物  
写真図版111 1. 兵庫城地区 南外堀(旧) 出土遺物  
2. 兵庫城地区 東外堀(II) 出土遺物  
写真図版112 1. 兵庫城地区 東外堀(新) 出土遺物  
写真図版113 1. 兵庫城地区 東外堀(新) 区画出土遺物  
2. 兵庫城地区 副郭南側遺構 出土遺物  
写真図版114 1. 兵庫城地区 SE3501 出土遺物  
2. 兵庫城地区 下層土留遺構 出土遺物  
写真図版115 1. 町屋出土輸入陶磁器(色絵) 1  
2. 町屋出土輸入陶磁器(色絵) 2  
写真図版116 1. 朝鮮王朝陶器  
2. 焼塙壺  
写真図版117 1. 人土形  
2. ミニチュア土製品等  
写真図版118 1. 転用面子・有孔円盤
2. 渔劳具(土鍤・蛸壺・浮子)  
写真図版119 1. 蘭羽口  
2. 墨書き羽口  
写真図版120 1. 町屋 出土軒丸瓦 1  
2. 町屋 出土軒丸瓦 2  
写真図版122 1. 町屋 出土軒平瓦 1  
2. 町屋 出土軒平瓦 2  
写真図版123 1. SE1304 出土遺物  
2. 町屋及び兵庫城地区 出土平瓦(凸面タタキ)  
写真図版124 1. 兵庫城地区 出土瓦  
写真図版125 1. 兵庫城地区 出土軒丸瓦  
2. 兵庫城地区 出土軒平瓦  
写真図版126 1. 遺構出土 鬼瓦 1(表面)  
2. 遺構出土 鬼瓦 1(裏面)  
写真図版127 1. 遺構出土 鬼瓦 2(表面)  
2. 遺構出土 鬼瓦 2(裏面)  
写真図版128 1. 船材  
写真図版129 1. 漆器  
2. 横櫛(表面)  
3. 横櫛(裏面)  
写真図版130 1. 玩具類  
2. 和船(ミニチュア)  
3. 下駄  
写真図版131 1. 判子(側面)  
2. 判子(印面)  
3. 各種木製品  
4. 鏡箱  
写真図版132 1. 工具  
2. 調理具  
3. 結合具  
4. 調節部品  
写真図版133 1. 銅鏡  
2. 秤量具  
3. 武器・武具  
4. 文房具・道具・祭祀具・容器  
写真図版134 1. 装身具・化粧道具  
2. 球體具  
3. 茶道具  
4. 漁具・不明品  
写真図版135 1. 木滴・硯  
2. 骨製品 1(化粧道具)  
写真図版136 1. 骨製品 2(玩具)  
2. 骨製品 3(用途不明品等)  
写真図版137 1. 丸形地蔵菩薩立像(正面)  
2. [背面]  
写真図版138 1. 長足五輪塔と一石五輪塔  
2. 長足五輪塔と一石五輪塔  
写真図版139 1. 長足五輪塔  
2. 同左部分  
3. 角塔婆  
4. 長足五輪塔  
写真図版140 1. 長足五輪塔  
2. 石龕仏  
3. 石仏  
4. 石仏  
写真図版141 1. 一石五輪塔  
2. 角塔婆  
3. 長足板五輪塔  
4. 角塔婆

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯と経過

### 1. 調査に至る経過

神戸市では、平成16年に神戸市中央卸売市場の再整備事業として、南北に走る市道高松線によって東西に分断された市場施設を東側に集約・移転することで老朽化した建物や設備の新設や操業の短縮・効率化を図るとともに、西側の跡地については、跡地利用検討委員会の報告を踏まえ、大型の商業施設等を誘致して地域を活性化に利用するための整備計画が進められた。

当該地は、兵庫津遺跡の範囲に含まれることから、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲については、発掘調査が必要と判断された。しかし、現地には遺跡が確認される以前の昭和30年代から建てられた市場施設や市営中之島住宅が存在しており、これらの構造物の基礎が広い範囲で地中の埋蔵文化財を損壊していることが予想された。

このため文化財課では、文化財の遺存状況を確認するために平成17年より4回にわたって試掘調査を実施した。(平成17年度・平成18年度・平成20年度・平成21年度)

この結果、予定地内の埋蔵文化財は、東側の幅約30mについては全損しているものの他の部分については、基礎や地中梁の間や下面に残存していることが判明した。

また平成24年度には、土地活用事業による土地売却に先立ち、神戸市産業振興局から委託を受けた(財)神戸市都市整備公社の依頼により、土壤汚染部分の掘削に伴う埋蔵文化財発掘調査(第57次調査)が実施された。またこれに合わせて、今までの試掘調査によって解明できなかった兵庫城の残存状況とその範囲についても調査が行われ、調査面積は合わせて約4,600m<sup>2</sup>(延べ12,000m<sup>2</sup>)となった。

さらに、同年には活用事業者の選定の結果、イオンモール株式会社による計画が決定された。その後、提出された建設設計画をもとに事業者であるイオンモール株式会社と文化財課との協議の結果、工事により埋蔵文化財に影響を与えると考えられる約24,000m<sup>2</sup>を発掘調査対象として、兵庫津遺跡埋蔵文化財発掘調査にかかる契約を締結した。これまでの発掘調査から、掘削が湧水点以下におよぶこと、さらに全体が砂層など軟弱な地盤であること、工事掘削深度が未定であったことなどから調査区全体に土留め工事が必要とされたため事業者によるシートバイルの打設工事を待って、平成26年2月より現地調査を開始した。発掘調査は13ヶ月におよび織豊時代の兵庫城をはじめ同時から近世後期に続く町屋群や築城期以前の遺構などを確認して、平成27年3月に調査は完了した。その後平成28年2月には、計画された建築物の設計変更に伴い新たに地中の埋蔵文化財に影響を与える部分について発掘調査が行われ、建設工事が着手された。なお杭部分以外の掘削の及ばない部分については現状保存とし真砂土で保護した上で埋め戻している。

### 2. 調査組織

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導を得て実施した。調査組織は、以下のとおり。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

工樂 善通 大阪府立狭山池博物館長(平成27年8月12日まで)

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館長(平成27年8月13日から)

菱田 哲郎 京都府立大学文学部教授

### 現地調査

平成25年度

教育委員会事務局

教育長

社会教育部長

文化財担当部長

(文化財課長事務取扱)

埋蔵文化財担当課長

(埋蔵文化財係長事務取扱)

文化財専門役

文化財課担当係長

埋蔵文化財センター担当係長

事務担当学芸員

中谷 正

調査担当学芸員

遺物整理担当学芸員

保存科学担当学芸員

雪村新之助

東野 展也

安達 宏二

千種 浩

丸山 潔

丹治 康明

前田 佳久

斎木 嶽

井尻 格

谷 正俊

富山 直人

内藤 俊哉

中村 大介

平成26年度

教育委員会事務局

教育長

社会教育部長

文化財担当部長

(文化財課長事務取扱)

埋蔵文化財担当課長

(埋蔵文化財係長事務取扱)

文化財専門役

文化財課担当係長

同 (兵庫津遺跡調査担当)

斎木 嶽

安田 滋

山口 英正

井尻 格

谷 正俊

富山 直人

内藤 俊哉

川上 厚志

中谷 正

荒田 敬介

遺物整理担当学芸員

雪村新之助

東野 展也

安達 宏二

千種 浩

丸山 潔

前田 佳久

斎木 嶽

安田 滋

池田 純

中村 大介

富山 直人

浅谷 誠吾

岡野 豊

山田 侑生

黒田 勝吾

中谷 敬介

岡田 健吾

黒田 勝正

### 現地調査・出土遺物整理・報告書作成

平成27年度

教育委員会事務局

教育長

社会教育部長

文化財課長

埋蔵文化財係長

文化財専門役

文化財課担当係長

同 (兵庫津遺跡調査担当)

埋蔵文化財センター担当係長

事務担当学芸員

中谷 大介

調査担当学芸員

報告書作成担当学芸員

川上 厚志

荒田 敬介

佐伯 二郎

遺物整理担当学芸員

雪村新之助

東野 展也

千種 浩

前田 佳久

丸山 潔

松林 宏典

斎木 嶽

安田 滋

山口 英正

池田 純

井上 麻子

内藤 俊哉

浅谷 誠吾

岡田 健吾

佐伯 二郎

中谷 正

### 出土遺物整理・報告書作成

平成28年度

教育委員会事務局

教育長

社会教育部長

文化財課長

埋蔵文化財センター担当課長

埋蔵文化財係長

同 (兵庫津遺跡報告書担当)

事務担当学芸員

井上 麻子

報告書作成担当

内藤 俊哉

浅谷 誠吾

中谷 正

荒田 敬介

岡田 健吾

佐伯 二郎

中谷 正

雪村新之助

日下 優

千種 浩

安田 滋

前田 佳久

松林 宏典

斎木 嶽

安田 滋

山口 英正

池田 純

井上 麻子

内藤 俊哉

浅谷 誠吾

中谷 正

荒田 敬介

岡田 健吾

佐伯 二郎

中谷 正

中谷 大介

### 3. 調査の経過

調査の経過は、次のとおりである。

調査区の南・北・東面の土留工事の完了を待って平成26年2月20日より調査を開始する。まずX区の西側から残土処分をしながら重機掘削を行う。現地では、既に土留め工事と上層の盛土掘削工事が立会調査などと並行して始まっており、さらに下層に存在する遺構面への重機掘削と人力掘削となる。2月25日より順次遺構検出および遺構掘削を開始する。X区中央部では盛土直下に粗い砂利層が続いているのが確認される。

3月6日、Y区の南東部より重機掘削を開始する。翌7日X区の重機掘削を完了する。

3月12日よりY区の遺構検出を開始、3月18日には、X区のクレーンによる空中写真測量と全景写真撮影を実施する。その後、実測作業等を進めながら、下層の遺構面にむけて整地層を掘削、Y区では順次遺構検出および遺構掘削を行う。

4月1日にはY区北部で検出された上層の遺構面の調査を完了し下層へ掘削を始める。

4月7日Y区の重機掘削が完了する。

4月17日、クレーンによる空中写真測量と全景写真撮影さらに下層への遺構検出作業を行う。

4月23日、X区の西部では、下層面(中世)の調査がはじまる。

5月1・2日、Y区の江戸時代中期の町屋群を写真撮影。

5月8日、X区西部では15~16世紀の遺構が検出される。東部で江戸時代前期の町屋や街路が検出される。

5月15日、X区の町屋周辺より、連なったまま出土した土錘の切取り作業を行う。Y区では焼失した町屋群が検出される。

5月23、X区クレーンによる空中写真測量と全景写真撮影、その後第4面にむけ掘削を行う。

6月2日には、文化財保護審議会委員の工柴善通氏、菱田哲郎氏、黒田龍二先生が現地指導のため現場來訪。

6月4日、「トライやるウィーク」で発掘体験作業の生徒(西神中学校・櫛谷中学校・神出中学校各2名)を受け入れる。遺構掘削作業や水洗選別作業などに取り組んでもらう。

6月19日、検出した町屋群の遺構や遺物について大阪歴史博物館の松尾信裕氏の現地指導を受ける。6月20日X区で検出された、地盤の傾斜した町屋や地震の痕跡の可能性がある土層について産業技



写真1 重機掘削作業



写真2 クレーンによる写真図化作業

術総合研究所の寒川 旭先生による現地指導を受ける。調査の結果、地震痕跡とは認められず。

6月26日、X区およびY区の空中写真測量を実施する。また6月25日には調査によって確認された近世の街路や焼失した町屋群などについて記者発表を行い、28日には第1回現地説明会を実施する。参加者380名。

7月1日、X区は第5面への掘削を始める。Y区では、焼失町屋群の炭化物層の除去をすすめ完了した建物から写真撮影・実測などを始める。

7月29日、Y区の町屋内で検出された鍛冶炉の型取り作業にかかっていたところ、X区にて不発弾が見られる。現場作業を中止したうえで、夜半まで兵庫県警と自衛隊による確認作業が行われる。翌30日、さらに自衛隊の爆発物処理班による確認および保全作業が行われる。

7月31日、発掘調査作業を再開する。

並行して調査区南の調査終了部分に不発弾処理の作業場所の仮設工事が行われる。8月4日、X区西で井戸の断割り調査を開始。

8月24日、周辺200mの範囲を立ち入り禁止にして自衛隊による不発弾の処理作業が実施される。9:00より作業開始、15:26に安全化宣言。

9月1日、Z区の重機掘削を開始する。9月2日X区西端の石積護岸遺構の石材について橋本清一先生の現地指導を受ける。9月3日、X区石積護岸遺構部分については工事による掘削が及ばないため、埋戻し養生作業を行う。

9月22日、基礎杭部分についてグリッドを設定し最終面までの調査を開始する。

9月25日、Z区の遺構検出を開始する。

10月4日、X区の西～中央部の終了にあたり基盤の砂礫層および下層の堆積状況の確認のため断割りトレンチを掘削して同志社大学 増田富士雄先生の現地指導を受ける。Z区では、石組み水路（悪水抜溝）の掘削を開始する。10月7日、X区の中央部より埋戻し作業開始する。東辺部分では下層の町屋の検出作業。



写真3 トライヤーのウィーク受け入れ



写真4 不発弾確認作業



写真5 写真撮影作業

10月9日、Y区の織豊期と考えられる町屋群について松尾信裕氏の現地指導を受ける。10月15、Z区西部の重機掘削を開始する。

10月22日、松尾信裕氏、文化財保護審議会委員の工樂善通氏の現地指導。記者発表を行う。10月25日、第2回現地説明会を開催。参加者330名。

11月12・13日、「トライやるウィーク」(本多聞中学校・多聞東中学校・高取台中学校・王塙台中学校・押部谷中学校・竜が台中学校・歌敷山中学校・長田中学校・平野中学校各1名)を受け入れる。

11月18日・11月28日、Y区北東部の石垣遺構の石材について橋本清一氏の現地指導を受ける。

12月5日、ヘリコプターによる空中写真測量を実施。

12月8日、出土遺物について堺市立泉州北すえむら資料館の森村健一氏に現地指導を受ける。12月9日、出土した石造物について元興寺文化財研究所の狭川真一氏より現地指導を受ける。12月11日、X区の調査終了。

12月25日、Y区北東部の一部で埋戻しを始める。12月27日内堀城内側石垣のシノギ部が確認される。1月19日、Z区の石垣部分のラジコンヘリによる空中写真測量を実施。

1月20日、検出した城郭遺構について奈良大学の千田嘉博氏、金沢城調査研究所の北垣聰一郎氏の現地指導を受ける。1月22日、滋賀県立大学の中井 均氏の現地指導を受ける。

1月23日、工樂善通氏、菱田哲郎氏、神戸大学海事博物館の松木 哲氏の現地指導を受ける。

1月31日、第3回現地説明会を開催。参加者1,103名。

2月13日、雲雀ヶ丘中学校の1年生80名が現地見学。2月27日、今城塚古代歴史館の森田克行氏の現地指導を受ける。石材について橋本清一氏の現地指導を受ける。

2月24日、研究者に現地公開。意見交換会を開催する。

3月4日、ヘリコプターによる空中写真測量を実施。石垣や礎石に使用された転用石材の記録作業を始める。3月11・12日、狭川真一氏の現地指導を受ける。

3月20日、中井 均氏の現地指導を受ける。3月24日、森田克行氏の現地指導を受ける。

3月28日、第4回現地説明会を開催。参加者252名。

3月31日には、調査を終了し埋戻し作業がおこなわれる。その後現地において、記録類や取り上げた遺物の整理を引き続き現地事務所にて行い、4月21日に器材搬出等を含めすべての作業を完了する。



写真6 現地説明会開催風景



写真7 石垣埋戻し作業

## 第2節 遺跡の位置と歴史環境

兵庫津遺跡は、神戸市中央部の海岸部に位置する古代から近世にかけての複合遺跡である。地形的には、北に旧湊川、南に和田岬という砂嘴によって挟まれて形成された湾内に発達した浜堤列とその間に存在する湿地の上に立地する。

兵庫の津（港）は、畿内の西端の重要な港湾として、古くは「大輪田船息」「大輪田泊」と呼ばれ文献上にもたびたび登場する。特に、平安時代後期に平清盛により経ヶ島が築造され日宋貿易の拠点とされたことは著名である。

平家没落後は、一時荒廃していたようで鎌倉時代初めには、太政官に対して東大寺の重源により魚住・一州（川尻）の港とともに修築の申請が出されている。

鎌倉時代後期になるころから兵庫（島）と呼ばれるようになるが、僧叡尊の活動を伝える史料に「兵庫鷗」の記載があらわれる。その後、延慶元（1308）年には、港の修築と東大寺鎮守八幡宮の修復のため閑所を設けることを伏見院により許可される。さらに暦応元（1338）年には、興福寺が幕府より関税徵収権を認められ南北2つの閑が成立する。このような寺社勢力の庇護を背景として兵庫津は、瀬戸内海運の主要港として栄えた。

このうち、北閑を領有していた東大寺の記録が多く残されており、中でも文安2（1445）年の「兵庫北閑入船納帳」は、各地から寄港する多数の船と様々な物資の流通が記録される大変貴重な記録となっている。

一方で、室町時代前期には、將軍足利義満による明との国交樹立に伴い通商の窓口としても整備され、「教言卿記」など当時の日記には、義満の兵庫下向の記事がたびたび登場するほか「藏御所」とよばれる貿易を目的とした施設も置かれていた。

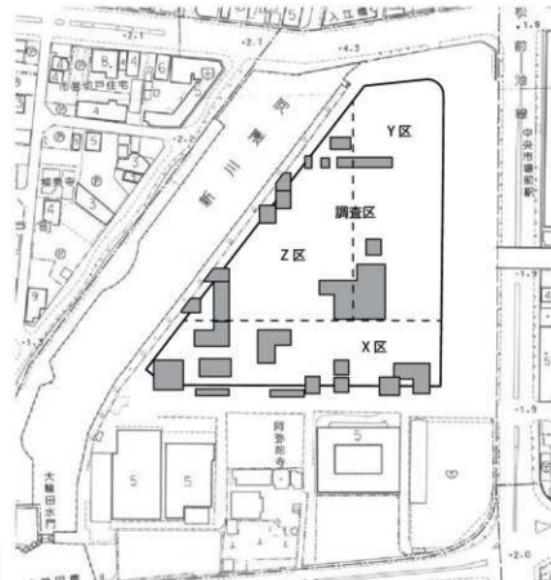


図1 調査区位置図  
(S=1:3,000)

(アミ部分は57次調査) X・Y・Z区は調査時の地区割り

その後、15世紀半ばに起こる応仁・文明の乱により港としての機能は一旦荒廃し、国際貿易港としての機能を堺に譲るとされていた。しかし、近年の発掘調査の成果では、15世紀後半から16世紀にかけての遺構・遺物量は依然多く、この時期に兵庫津の町の衰退を裏付ける資料は見つかっていない。室町幕府の力が衰え戦乱の世になると、兵庫津は商品の流通といった経済的な面ばかりでなく、兵員や軍需物資の輸送などの兵站的な面からも戦国大名達によって着目されるようになり、天王寺屋などの有力な豪商が保護育成されていった。

やがて天正8(1580)年に兵庫の町は織田信長方の軍勢による花熊城攻めの際に攻撃される。落城後、城攻めの中心となった信長の家臣の池田恒興とその子らによって、現在の中央市場跡地周辺に兵庫城が築かれ、城郭化が進められる。町を取り巻くように巡らされた都賀堤と堀割や遺跡の北西の寺町はこの名残とされている。

やがて本能寺の変、慶長の戦をへて羽柴秀吉の権力基盤が固まると池田父子を美濃に移し、自身は大坂に入り兵庫津には甥の三好孫七郎(後の秀次)を配した。天正11(1583)年と推定される秀吉が孫七郎にあてた史料には、「兵庫城・三田城両城可請取之由」と「兵庫城」の名前が初めて登場する。

慶長元(1596)年に発生した「慶長伏見地震」によって大きな被害を受けたことが当時の記録によって指摘されていたが、発掘調査によても地震の痕跡が検出されている。「言経卿記」の「兵庫在所崩了、折節火事出来候、悉焼了、死人不知数了」の記載や須磨寺の『当山歴代』の「兵庫も一間残(らず)クツレ、其内より火出、則家マテ火送候、人死ス数者不知候」などの記述によって窺われる。その後、復興した兵庫津は、関ヶ原の戦い後も豊臣家の蔵入地として存続し、兵庫城には豊臣秀頼の重臣であった片桐貞隆が代官として配され、片桐陣屋と呼ばれていた。慶長12(1607)年來日した朝鮮通信使の副使慶選(慶七松)の記録には、この陣屋と思われる施設で且元の弟片桐貞隆に供應を受けた記述がみられ、そこには周囲に堀を巡らして3重の門を備えていたという意味の「周以城池、門設三重」の記事がみられる。

慶長20(1615)年、大坂の夏の陣によって豊臣家が滅亡した後、幕府領に編入されたが、元和3(1617)年には尼崎藩領となり奉行が兵庫陣屋に置かれ、治められるようになる。現存する「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」(元禄兵庫津絵図)は、兵庫津奉行が尼崎藩に提出した絵図の控えである。

この時期兵庫津は、当時の経済の中心地で大消費地でもあった大坂の外港としてだけでなく、西国との人の往来、物資の流通量の増加に伴って物資の集積地として、浜本陣など独自の制度も生みだされ、また朝鮮通信使の上陸地とされるなど港湾都市としての重要性が高められていく。さらには、西国街道の宿場町として陸路の面からも交通の要衝として発展を続け、宝永8(1711)年には人口2万人をかぞえる国内でも有数の都市となる。これに伴い町場も拡大していく絵図などでも海岸部や湿地帯の埋め立てや北東にあたる西出町、東出町への居住地の進出などが認められる。

明和6(1761)年には、上知によって幕府領になり、兵庫津の町は大坂町奉行所の支配となる。陣屋は勤番所となり与力が常駐することになるが、敷地が広すぎるとの理由で主殿部分を中心とした施設を残して他は町場として払い下げられてしまう。江戸時代後期の絵図には、埋め立てられ水路状に狭められた陣屋の堀が描かれている。

幕末、外国船が頻繁に日本の近海に姿を見せるようになり、嘉永7（1854）年には、ロシア使節チャーチンが大阪湾に侵入するという事態が起こった。これを機に大阪湾岸の防備増強が図られ、文久3（1863）年には兵庫津の両端にあたる湊川崎と和田岬では砲台の建設が着手された。

その後、慶応3（1867）年に諸外国との通商条約に基づき兵庫開港をむかえるが、実際に港として整備されたのは、東側に位置する神戸村の海岸であり、以後外国との貿易を担う港湾施設を中心として外国人居留地など都市の拠点は東の地域へと移動することになる。波止場や旧居留地の建物などの歴史的景観は今なおミナト神戸のシンボルとなっている。

明治元（1868）年には初代兵庫県庁が兵庫勤番所跡に置かれるが、狭小で業務に支障をきたしたため、また重要な業務である対外折衝などに地理的に便利なことから4カ月ほどで坂本村（現在の地）に移設される。その後建物は、明治元年に地元において設立された教育機関の草分けである兵庫郷学校が明親館と改称し移転している。

しかし明治7（1874）年になると新川運河の開削によって北西の3分の1ほどが削平され、現在はその姿を止めていない。

### 第3節 周辺の調査

兵庫津遺跡においては、1985年における第1次調査の実施より、これまでに70次以上の発掘調査が行われており、多くの貴重な成果が確認されている。

これらの中から、注目すべき主な調査成果と今回報告する62次調査区の周辺の調査について、その概要を見ていきたい。

まず、1988年に大手前女子学園調査団による第2次調査は、兵庫津遺跡における本格的な発掘調査の始まりとなったものである。この調査では遺跡の南西端部分において実施されたもので、15世紀後半から19世紀前半にかけての4時期の生活面が検出された。また15世紀後半の汀遣構と、18世紀後半にこの遺構が埋め立てられ町場化していく過程も確認されている。

その後、1997年に兵庫県教育委員会によって実施された第13次調査は、国道2号線への共同溝設置工事に伴う調査である。延長800mにわたって遺跡を北東から南西に横断する大規模なもので、遺跡のなかでも比較的海岸線から離れた部分において16世紀の石列を伴う倉庫が確認されたほか、江戸時代後期の船入江に伴う石組みなども確認できた。

翌1998年には第14次調査が実施され、宝永の大火に伴う焼土層の確認をはじめ、近世の町屋群が累層的に検出することができた。また、第13次調査でもみつかっている16世紀の倉庫と考えられる石敷き建物も確認された。2001年度には現在の真光寺に隣接する部分において第26次調査が実施され、元禄絵図に描かれたとおりの規模の旧境内に伴う堀や道路などが確認され、絵図の正確さについてもあらためて証明された。

さらに2002年には蛭子神社の境内において第29次調査が実施された。近世の兵庫津における重要な施設である柳原惣門の跡が調査され、柱痕跡から高麗門であったことやその規模などが確認された。

また2003年に遺跡の南部で行われた第32次調査においては、奈良時代後期～平安時代前期にかけての港湾施設に關係すると考えられる溝・柱穴などが確認され、今まで不明であった古代の「大輪田泊」について考える上で貴重な手掛かりをもたらした。

2004年の第35次調査では、兵庫陣屋に築かれた勤番所に伴う北側の石垣が確認され、絵

図の変遷にみられる堀削の埋め立てと町場化について確認された。また、第36次調査では、墓地を伴う寺院跡とともに、都賀堤の外側に存在した濠と俵積みによる護岸の跡が見つかった。2006年には、第14次調査地より西に200mほど離れた第42次調査においても17世紀後半から18世紀前半の遺物を伴う良好な焼土層の広がりが確認された。2011年の第53次調査は、第14次調査の南に隣接する部分で実施されたが、同調査で確認されていた16世紀の石敷き建物と同様の遺構が検出され複数の倉庫が存在していたことがわかった。

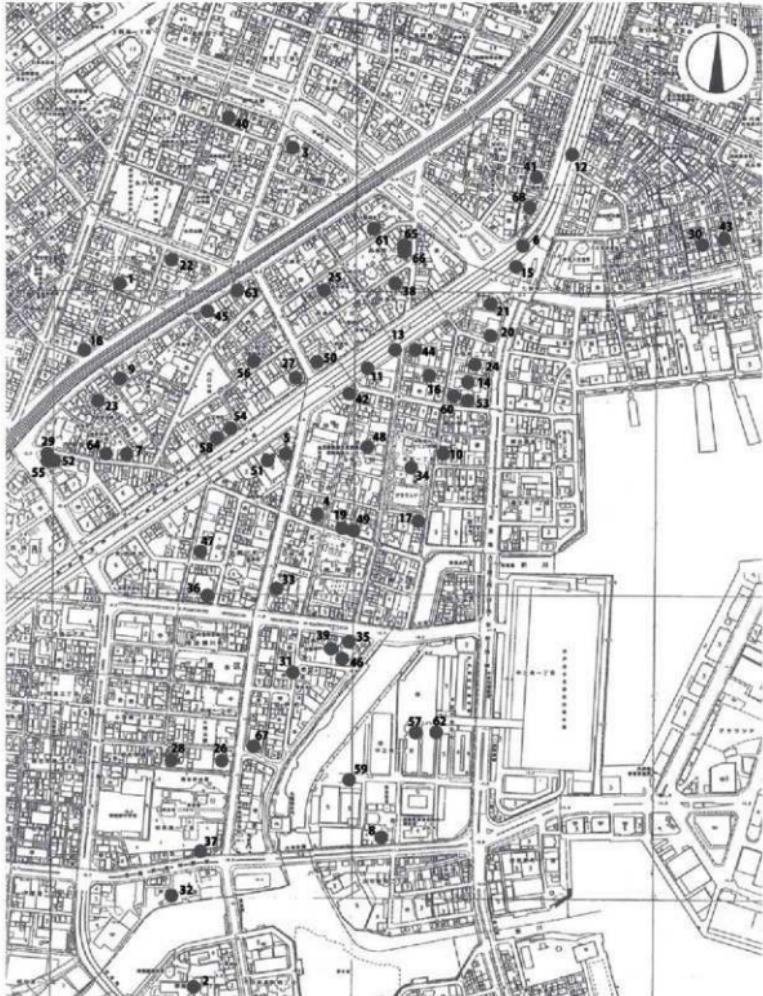


図2 兵庫津遺跡62次調査地と遺跡内調査地点（数字は調査次数）

2012年の第54次調査では、17世紀初めから19世紀にかけての岡方地区での町屋と街路の変遷が4時期の遺構面によって確認された。

そして、2012年より神戸市中央市場の移転に伴って行われた第57次調査は、今回の調査と同一の敷地において実施された調査である。この調査では、兵庫城の石垣が部分的にではあるものの、はじめて確認されることとなり、城郭の構造が知られることとなった。

さらに2013年には、南に隣接する部分において第59次調査が実施され、石組みによる護岸施設とともに多くの14~16世紀の遺物が出土した。

このように、第1次調査から30年ほどの調査成果の蓄積によって兵庫津遺跡の様子が徐々にではあるが明らかにされている。

#### 第4節 周辺の遺跡

兵庫津遺跡の周辺には、数多くの遺跡が存在することが知られている。なかでも、兵庫津遺跡に関連する遺跡としては、北側に平安時代後期の平清盛によって開発された「福原京」に関連する遺跡として、大溝や建物群がみつかっている楠・荒田町遺跡が存在し、さらに北方には、平氏の邸宅群があったとされ、調査でも園池遺構や建物群が確認された祇園遺跡や雪御所遺跡がある。

また中世後期に、荒木村重によって築城された花熊城が存在したとされる花隈城遺跡が北東1.5kmに位置するが、現在のところ城郭の遺構については確認されていない。さらに神戸港を挟んだ江戸町周辺には、幕末に兵庫（神戸）開港によって居留地とされた旧神戸外国人居留地遺跡が存在する。

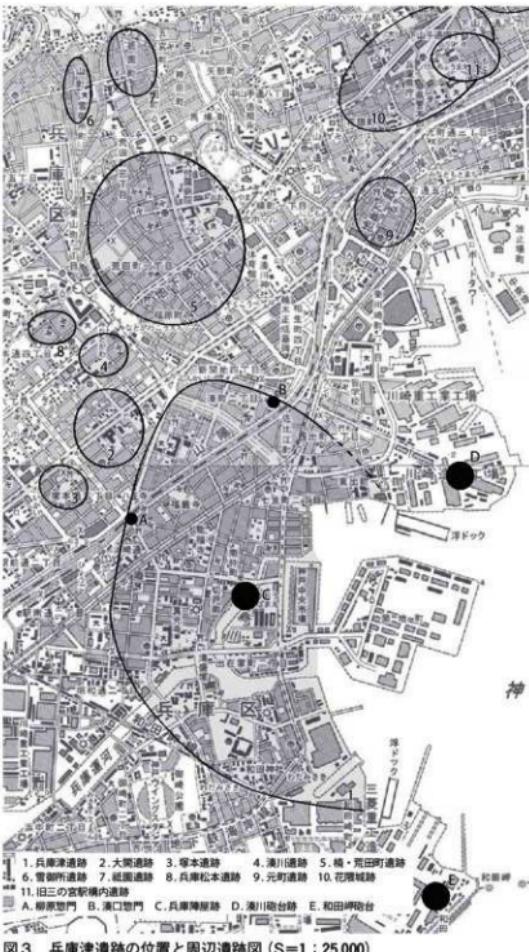


図3 兵庫津遺跡の位置と周辺遺跡図 (S=1 : 25,000)

## 兵庫津遺跡関連年表(14世紀以降)

1308	延慶元	東大寺、伏見上皇より造る修築と東大寺修復のため兵庫津に間を設け開墾の徵収を許可される	(北側の成立)
1311	延長元	東大寺の開闢に阿波の商人と兵庫の開拓たちが参画	
1315	正和4	開拓の徵収をめぐり淀川から播磨間にかけての水運業者が東大寺の間に乱入	
1338	應永4	開拓船の兵庫の徵収を幕府より認められる(南閻の成立)	
1401	延永8	足利義満、明と国交を結ぶ	
1402	延永8	明の使節が兵庫に到着し、義満が兵庫に向うとする	
1420	永安27	兵庫の外港の事後処理のために米日した朝鮮の使臣が兵庫に荷港する	
1432	永亨4	吉田義教、日明貿易を西船で兵庫へ下向し朝鮮を見送る	
1433	永亨5	開拓船の商人に備え奉公による他の修整「兵庫移入人夫」の徵収	
1445	文安2	兵庫北端人の納稅の問題が現れる	年間約2,500艘の入港数
1451	永徳3	兵庫城に於ける通商船の登録を出現	
1467	延喜7	兵庫城に於ける通商船の登録を出現 元の文政7年(1477)	
1469	文政7	大内軍兵庫城に上陸・占領する。	
1470	文政10	軍の赤松・山名は豊臣が大内軍と戦い兵庫津を奪還するも町は被害甚大	
1470	文政10	南閻が復活する	
1474	天保2	兵庫大寺が兵庫津の豪農正直屋に付属状態をだす	
1474	天保2	兵庫大寺が兵庫(伊丹)の城主となる	
1478	天保6	兵庫の守護大木村家が磯田信長に背く。信長勢が花畠城を包囲し兵庫津も攻撃	
1480	天保8	花畠城落城	
1481	天保9	磯田恒興、花畠城を破りして兵庫津を築く	
1482	天保10	磯田父子による兵庫津の支配。部賀従などが基かれ城下町の整備がすすむ	
1482	天保10	本願寺の出来	
1483	天保11	兵庫氏が美濃大垣に転封。三好(臣)秀次の支配となる	
1485	天保13	秀吉の滅ぼしとなる 以降、紀州の守護官として	
1494	文禄3	正直屋宗寿の守護官を解き増田長政を代官として置く	
1506	慶長5	豪農大木村景泰により兵庫津被害甚大	
1600	慶長5	門・原の城にわたり朝鮮征伐が代官となる	
1602	慶長7	慶長7年兵庫矢田郡忍阪郷忍阪道子帳」が作成される	
1603	慶長8	江戸幕府が構かれれる	
1607	慶長12	朝鮮通使使節が兵庫港に寄港。水を汲んだ頃と三重の門を有する兵庫城の記載あり	片桐且元の弟 片桐貞豊が接待
1614	慶長19	大坂冬の陣	
1615	元和元	一国一城令の制定	
1617	元和3	大坂夏の陣	
1618	元和4	戸田氏良が尼崎に入封。兵庫津も尼崎藩領とされる	
1635	慶長12	尼崎城改城といまる	
1642	慶長19	片桐通使使節「片桐通使使節」の記載あり	
1644	慶長20	尼崎城改修の記載	
1660	宝永3	尼崎城が兵庫に兵庫奉行を置く	
1696	正和9	「兵庫六郡郡守の兵庫津絵巻」が作成される	瓦葺の町家が描かれる
1706	宝永5	宝永の大火。北浦方地盤を中心とする尼崎が及び	
1711	宝永8	青吉氏に替わる松平氏が尼崎藩主となる	
1712	正徳2	兵庫奉行の一宮・兵庫五石門が着任。新たに60石からなる「番ヶ」を定める	
1769	明和6	明和の土砂崩により幕府領に入られる(明和の土砂崩)	与力2名、同心3名 人121912人。 池田屋(廢城)の記載 「鶴番所」の記載
1796	寛政8	兵庫津の支派である兵庫津奉行の兵庫・西宮に上加方を任せる。陣屋の一部に兵庫勤番所が置かれる	
1862	文久2	この頃、尼崎藩の人口が1ビッグをむかえる。	
1867	文久3	「兵庫津所会議」刊行される	
1868	明治2	兵庫津城は新潟県が置かれるが4ヶ月で移転	
1874	明治7	兵庫新川運河の工事開始	
1875	明治8	都費販の開運	

## 主要参考文献

### 『兵庫津全般』に関するもの

小糸川淳「世界日支交通貿易史の研究」1941

中谷保二「阪本陣の研究」1956

安田智右門「北風道事 残燈照古抄」1962

中部よし子「近世における都市間の流通の変化一兵庫と大阪の場合」『大阪と周辺諸都市の研究』清文堂室川版1994

新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史歴史編近世』1992

神木哲男・崎山吉廣編著「歴史海潮のターミナル一兵庫の津の物語」神戸新聞総合出版センター1996

歴史資料ネットワーク編「歴史のなかの神戸と平家地域再生へのメッセージ」神戸新聞総合出版センター1999

藤田明良「中世における港町兵庫のあゆみ」

大手前大学歴史研究所「兵庫津の総合的研究一兵庫津研究の最新成果ー」2008

神戸市立博物館「特別展 よみがえる兵庫津ー徳島都市の命脈をたどるー」2013

大阪歴史学会「特集 歴史のなかの兵庫津と兵庫城」「ヒストリア」240 2013

兵庫県立考古博物館「特別展 江戸時代の兵庫津」2016

### 発掘調査報告書

岡崎正雄・岡田章一・淡江英志編「兵庫津遺跡」1 県立明教育委員会2002

岡田章一・豊田淳子・淡江英志編「兵庫津遺跡」2 県立明教育委員会2004

藤本史子編「見津津遺跡ー御崎本町地区発掘調査報告書ー」人手前大学史学研究所2006

内藤俊哉編「兵庫津遺跡 - 第35次発掘調査会員要」- 神戸市教育委員会2006

藤井太郎編「兵庫津遺跡 - 第36次発掘調査会員要」- 神戸市教育委員会2006

阿部功輔編「兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2008

佐伯二郎・兵庫津遺跡第45次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2008

黒田泰正・佐伯二郎・内藤俊哉編「兵庫津遺跡発掘調査報告書第一回 - 20・21次調査」神戸市教育委員会2010

石島三相編「兵庫津遺跡 - 第51次発掘調査報告書」- 神戸市教育委員会2010

井尻格編「兵庫津遺跡第50次発掘調査報告書」- 神戸市教育委員会2010

阿部敦生・川上厚志編「兵庫津遺跡第52次発掘調査報告書」- 神戸市教育委員会2011

内藤俊哉編「兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書」- 神戸市教育委員会2012

川上厚志編「兵庫津遺跡 - 第57次発掘調査報告書」- 神戸市教育委員会2014

この他、兵庫津遺跡の発掘調査成果については、各年度の神戸市教育委員会「神戸市埋蔵文化財年報」を参照されたい。

## 第2章 調査区の設定と調査方法

### 第1節 調査区の設定

調査は、作業の工程から調査範囲を3分割して順次実施した。調査時は、着手順にそれぞれX区・Y区・Z区とした。

X区は、調査地の南側にあたる幅(南北)50m、長さ(東西)190mで面積約8,350m<sup>2</sup>の調査区、Y区は、調査地の東側で幅(東西)60m、長さ(南北)150mで面積約8,100m<sup>2</sup>の調査区、Z区は、南北130m、東西100mで面積約8,550m<sup>2</sup>の三角形をした調査区となる。

なお、それぞれの調査区は、江戸時代中期の元禄兵庫津絵図にみられる旧関屋町を中心とする町屋区域(X区)、旧新町を中心とする町屋区域(Y区)、兵庫城の城郭を利用したとされる陣屋の区域(Z区)にあたる(図1)。この状況は、江戸時代後期の新町と関屋町で保管されてきた水帳絵図においても同様である。調査の記述については、町屋群などの遺構の連続性を考慮して町ごとに行うこととし、一部で調査時の区割を変更した。水帳絵図と調査区の照合(重ね合わせ)は次頁を参照されたい。

### 第2節 調査の方法

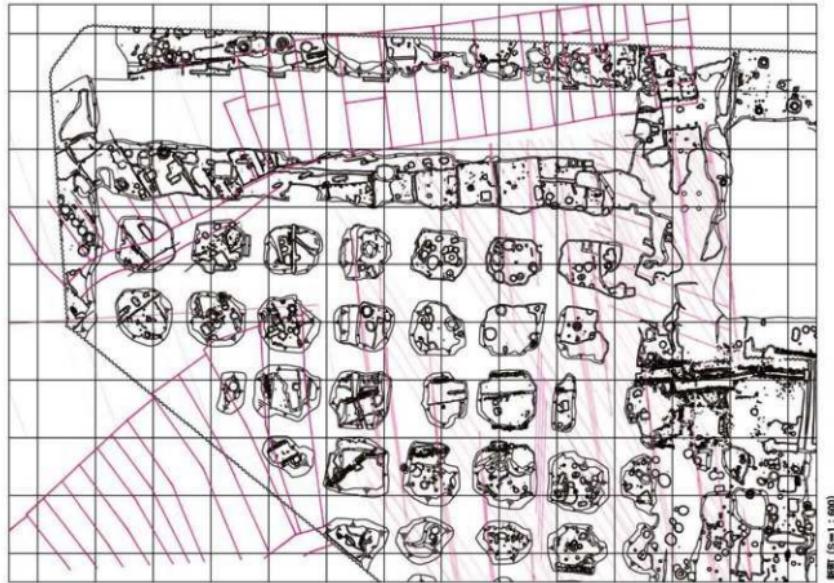
調査は、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲およびこれらの関連を確認する部分を対象に実施した。これまでの調査の成果より、脆弱な地盤と多量の湧水が予想されたため調査区全体にシートパイルによる土留工を施した。調査は、最初にバックホーで上層掘削および積み込みをして、ダンプで残土を搬出した。また人力掘削で出た残土については、ベルトコンベアで調査区外へ運び、バックホーを使用して残土を搔き揚げ、同様に搬出等を行った。その後の遺構面検出、遺構掘削は人力で行った。また、良好な遺構埋土や焼土層については、土嚢袋で取り上げ篠い・水洗選別を実施したが、その数は1000袋を超えた。調査区南部では、最終遺構面の記録終了後は、バックホーにより断割りをおこない、遺構面の立地等を確認するため下層の土層堆積状況を観察した。

この他、調査時に検出された遺構のうち出土状況や構造が特に良好であると判断されたものについては切取りや型取り保存を実施した。

検出遺構の図化など記録作業の際には、周辺の街区基準点と東京湾標準水位からの標高を設置した。記録写真は、モノクロフィルムとポジフィルムを使用し、35ミリカメラ、6×7カメラ、4×5カメラ、デジタルカメラで調査担当者が撮影した。全景写真撮影については撮影台を設置する方法のほか、高所作業車(スカイマスター)を使用



図4 調査区設定図



鶴巣町 (S=1:600)

現存する水供給図にみられる裏地割り（後版）と他の水供給図で検出された町屋通構と開道を  
検討するため図面を「重ね合わせ」をおこなった。

組合で使用した図面は、神戸市立博物館蔵「天保9（1838）年」および神戸市  
公文書所蔵の新可水供給図「天保9（1838）年」よりトレースして作成した。

水供給図に記載されたのは、江戸時代後期のものであるが、通  
構図は、町屋通が良好に計画された裏地割り（裏水抜き）であるが、位置関係の直交など、通  
構図では、江戸時代後期のものを使用だが、位置関係の直交とするため城郭部  
分では、新可水供給図を含めている。

組合によって、新可水供給図では、中央の街路が元水供給などと並べても西に曲る角度を複  
数の組合に影響が生じた。このため組合を中心とし全体を半分ずつそれぞれ方向を修正して結合  
した。

図5 鶴巣・鶴巣町水供給図と検出通構の重合

して行った。

また、図化測量および遠景、モザイク写真作成のためクレーン、ラジコンヘリ、ヘリコプターによって写真撮影を実施した。これにより調査区全体を50分の1の平面図化または炭化材や遺物が大量に出土する遺構については、ポール等を使用した細密なデジタル図化作業を行った。これとは別に城郭の石垣については、20分の1の写真図化と合わせてレーザーによる3Dデータの取得も実施した。

### 第3節 基本層序と遺構面

調査地は、地表面(T.P.1.8m前後)から深い削平を受けているものの、建物による損壊を免れた部分の基本層序は、近現代の整地の盛土が0.6~1.0mほどの直下に薄い旧表土および戦災の整地層が残存し江戸時代後期の遺構面となる。

新町地区の基礎により損壊を免れた部分では、焼土や砂の整地層をともなう3~6面の遺構面が確認され明褐黄色砂の砂礫層となる。なお明褐黄色砂の検出面はT.P.-0.4~0.8mである。

関屋町地区の東辺部でも基礎により損壊を免れており、新町地区同様3~6面の遺構面が認められる。関屋町地区中央部では江戸時代中期の遺構面の直下もしくは薄い整地層を挟んで1~2面の遺構面が認められ砂礫層の遺構面となる。砂礫層の高さはTP.0.5~0.2mである。また西部では、高さはTP.0.5~0.2m灰黄色砂の最終面まで、南西方向に向かって15~16世紀の遺物を多く含む暗灰色系のシルトや粘土が堆積し遺構面が1~2面存在する。この高さではほぼ湧水点に達しているようで、遺構埋土を掘削すると内部には急速に湧



写真8 ポールによる写真測量



写真9 土層転写作業



写真10 遺構型取り作業



写真11 遺構切取り作業

水によって満たされる。黄灰色層以下の堆積について、遺構や遺物は確認されなかった。

城郭部分の大半においては、現代の盛土下もしくは江戸時代後期の遺構面の直下において城郭の整地によって削平されたと考えられる砂礫層が露呈しており、近世から中世の遺構が同一面上において検出されており下層には遺構や遺物は確認されない。

なお、今回の調査区においては、広大な調査地内が攪乱によって寸断された上、町屋群の建替えや補修によるとみられる盛土造成・整地が短期間のうちに頻繁に行われた結果、同時期の基盤層が特定できず、通常の遺構面ごとの調査が困難となった。

このため、検出した遺構について比較的広範囲で確認できた焼土層や遺構の切合い関係、さらには出土遺物などを考慮したうえで、共存関係を認められる遺構についてそれぞれI～IV期の時期区分に帰属させ、これに基づき報告をおこなう。各時期は概ね、I期・江戸時代後期以降、II期・江戸時代前期～中期、III期・織豊時代後期～江戸時代初期、IV期・織豊時代前期（兵庫城築城期）に相当する。閑屋町地区の中～西部や東部のトレーンチではさらに下層に築城期以前の遺構が2面（2時期）確認されておりV期とした。

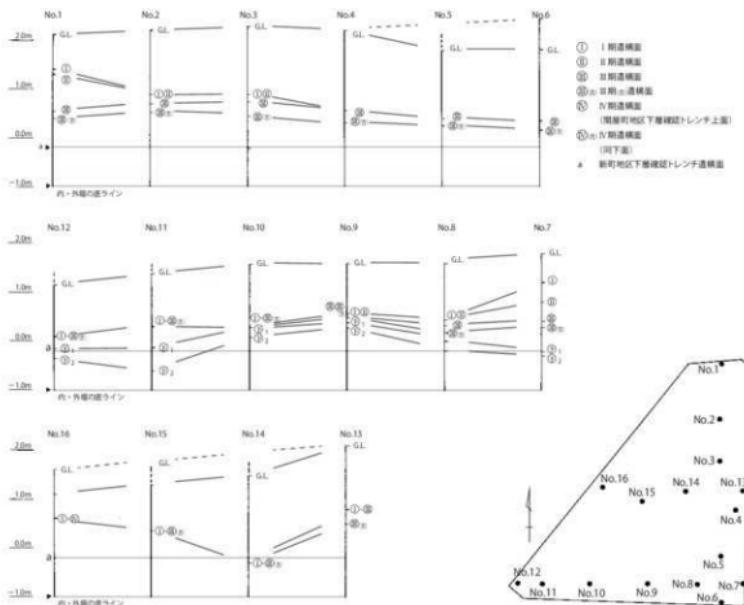


図6 調査区内土層柱状図

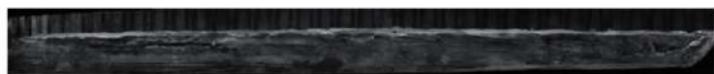


写真12 新町地区北部土層堆積状況（オルソ写真）

## 第4節 神戸市兵庫津遺跡でみられる砂嘴堆積層

増田富士雄（同志社大学理工学部）

廣木 義久（大阪教育大学）

### 1. はじめに

2014年10月、神戸市兵庫区にあった神戸中央市場の跡地で実施された神戸市教育委員会による兵庫津遺跡の発掘調査に際して、出現した地層の観察を行った。この地層の堆積相や堆積構造、さらに地下地質の解析から、遺跡の基盤をなす砂礫層を主体とする地層は潮流や沿岸流によってできる細長く伸びた砂州状の離水した地形、すなわち砂嘴（さし）あるいは砂礫嘴や礫嘴を構成するものであることが判った。この砂嘴は西方の須磨海岸から東方に、和田岬一帯にかけて発達していたもので（増田ほか、2014a）、兵庫津遺跡でみられる砂礫層はその先端部に位置している。今回の観察では、砂嘴を構成する地層の内部構造が良く観察できたという点で学術的意義が大きい。ここではその構造と堆積物の特徴を報告し、そこから読み取ることができた事を述べる。

### 2. 兵庫津遺跡の露頭と完新統の砂嘴

兵庫津遺跡は兵庫区中之島にあり、標高-0.5~1.2mの低地に広がる（図7）。ここは神戸中央市場の跡地であり、兵庫城のあったところで、主に江戸時代の遺跡とされる（神戸市教育委員会、2010）。地層の観察は、その発掘地域内に掘られた東西約50m、深さ約1.5~2.5mのトレンチ（図8のトレンチa）と、長さ約35m、深さ約1~1.3mのトレンチ（図8のトレンチb）と、それに付随する長さ10m程度の南北のトレンチの壁面、および発掘現場での小露頭で行った。

この遺跡の基盤となる地層は砂礫層からなり、地形的には微高地を形成している。さらに大きくみれば、北に湊川の三角州の高まりが、南に和田岬の小規模な砂嘴がある（宇多ほか、2000）。南の和田岬から西の須磨海岸にかけての海岸は、現在では人工改変が進んでしまっているが、旧地図によれば長い海浜が広がっていた。そして須磨海岸から兵庫津遺跡の発掘地、さらに三ノ宮にかけての低地には、現在の静岡県の三保半島のような大きな砂嘴（スピット）が広がっていたことが知られている（増田ほか、2014a）。それによればこの砂嘴は、繩文海進の海面上昇に伴って陸側に向かって移動しながら、その長さを東方に延ばして大きく発達し、



図7 兵庫津遺跡の位置  
地図は国土地理院発行25万分の1地形図「神戸首部」と「神戸南部」より作成。A-B,C-D,E-Fは図15の地質断面の位置を示す。

大阪湾の最高海面期の6000年前から5000年前(Masuda et al., 2002)には山地との間に内湾や干潟を有する長さ5km以上、幅200~1000mの大型の砂嘴として復元されている。この砂嘴はその後の海面がやや低下した縄文時代後期から弥生時代にかけ、内側の内湾や潟が湊川の三角州で閉塞され山地からの土砂で埋積され、大阪湾側の海岸はやや砂嘴的な要素を残しながら和田岬への浜堤海岸として海側へ低地が広がっていったと考えられている(増田ほか, 2014a)。今回観察した兵庫津遺跡の地域は、その大きく発達していた砂嘴の先端部に位置している。

砂嘴という名称は、一般には砂から構成されるものだけでなく砂礫からなるものにも使用される(武田, 2007)。この報告でも、砂嘴の堆積物は砂礫層であるが、砂礫嘴あるいは礫嘴と呼ばずに砂嘴と呼ぶことにする。

### 3. 地層の解析法

地層の観察には、堆積相解析(増田, 1988, 1989)を用いた。堆積相解析は、岩相、堆積構造、粒度、断面形態、重なり様式、側方変化などから対象とする地層が、どのような營力下でどのような場所で形成されたのかを推定する方法である。特にここでは構成する砂礫堆積物について、その礫種(岩石種)組成や礫形態についても調べた。計測に際しては採取した礫をフライにかけ、直径4.0~8.0mmの礫と直径16.0~31.5mmの礫に分け、それぞれの階級区分毎で集計した。礫形態についてはその円周度をKrumbein(1941)の方法で調べた。

表層地質については、関西圏地盤情報データベース(関西圏地盤情報ネットワーク・関西圏地盤情報協議会)を利用して解析した。解析範囲は、須磨海岸・和田岬・三宮を結んだ三角形の地域で、須磨区、長田区、兵庫区のうちで沖積層が分布する低地の地域である。この地域において地質柱状断面図をさまざまな方向で多数作成し、その断面図に対してShazam層序学(増田ほか, 2013)の解析法を用いて遺跡の地質地盤状況を明らかにした。

### 4. 観察された地層の内部構造

観察された地層は主に砂礫層からなり、その厚さは1.5m以上である。この砂礫層は岩相から上部層と下部層とに2分できる(図9A)。上部層は層厚が20~60cmで、最大でも1m程度である。下部層は厚さ1m程で、最大で1.6mに達し、それ以下は地下に埋没する。上部層と下部層の境界は明瞭で、幅1~3mの浅い谷状かほぼ水平な侵食面を示す。その境界面は南北断面でも下部層に切り込んだ谷状を示す部分がみられる(図10B)。

観察された地層が示す最も明瞭な特徴は、下部層に認められる東方向に低角で傾斜する斜交層理である(図9・図10)。この傾斜層はフォーセット層理とよばれる堆積時に自然に形成されたものである。フォーセット層理は、東南東~北北東に5~15°で傾斜する。トレンチbの南壁面の8箇所で測定した結果(図10)、フォーセット層理の傾斜方向は單一ではなく系統的に変化している。つまり、露頭面の西から東に向かって、傾斜方向が東北東



図8 発掘地点における地層観察のトレンチ(a,b)の位置

→東北東→北東→東南東→北北東→北東→東北東→北東と変化しており、傾斜方向が東方向から北方向へ変化し、また東方向に戻り、そこから再度北方向へと変化するというパターンを繰り返している。このことは、この疊層は東～北に傾斜する斜面に堆積したもので、その斜面が疊層の堆積とともに、東傾斜から北傾斜へ変化して再び東傾斜に戻るというパターンを繰り返しながら、全体的に東方向へ移動していったことを示している。見

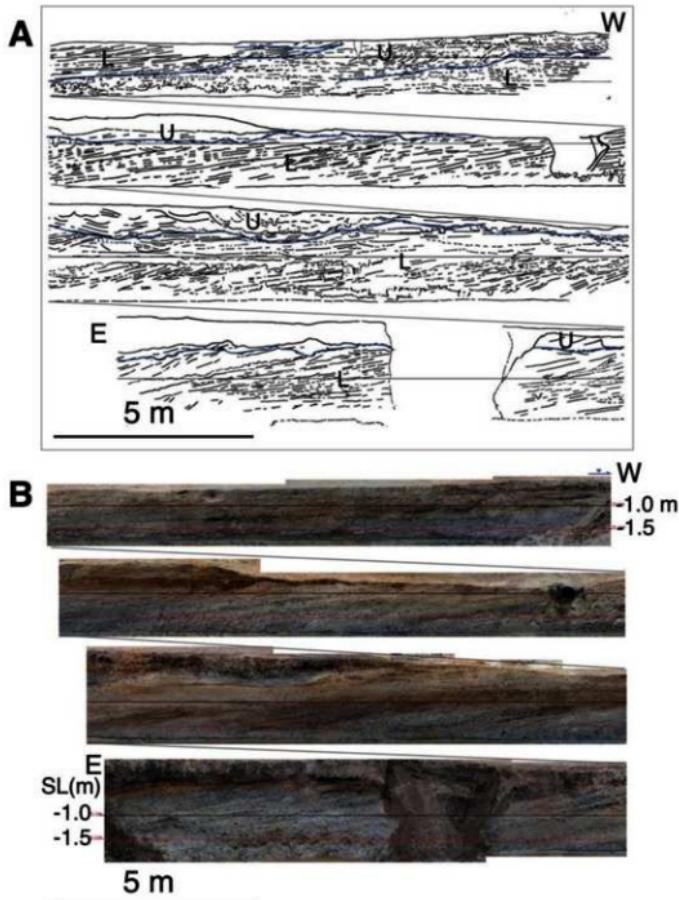


図9 地層断面(B)とその内部構造のスケッチ(A)  
スケッチ内の青線は上部層(U)と下部層(L)の境界を示す。トレンチa(東西断面)の南壁面。

かけの層理構造も東傾斜の部分では明瞭なフォーセット層理が観察できるが、北方向へ傾いた部分ではトラフ状になつたり見かけ状水平に近くなつたりしている。そしてその付近ではフォーセット層理間に明瞭な侵食面が認められ、それを挟んで見かけの構造が大きく異なっている。

この遺跡の基盤の地質を構成する砂礫層は、すでに述べたように、これまでの研究から大規模な砂嘴（スピット）によって形成されたものであるとされている（増田ほか, 2014a）。砂礫層は規模の大きなフォーセット層理を示し、かつ、斜面の傾斜方向が規則的に変化しながら発達している。この特徴は砂嘴堆積システム（Hiroki and Masuda, 2000; 廣木, 2002）で形成されたことを強く示している。砂嘴は海岸線の方向が陸側に急変するような所に発達する細長い砂や砂礫の高まりからなるが、その細長い高まりはしばしば陸側に嘴状に湾曲する（King and McCullagh, 1971；堆積学研究会, 1998）。その嘴状の砂嘴は海面下にスピットプラットフォームと呼ばれる斜面をもち、それが沿岸方向に付加成長することによって伸長しては嘴状に湾曲することを繰り返しながら発達する（Meistrell, 1966; 廣木, 2002）。そのようにして発達したスピットの例が、“トドワラ”で有名な北海道の標津町に発達する野付岬（野付半島）である。砂嘴は伸長の時期と湾曲の時期を繰り返し発達するため、その斜面の方向が系統的に変化する。砂嘴本体の内部構造はその斜面の傾斜を反映した傾斜層、すなわちフォーセット層理からなるが、そのフォーセット層理の傾斜方向は砂嘴の伸長・発達に応じて系統的に変化した結果、形成されたといえる。トレントbの南壁で認められたフォーセット層理の傾斜方向の変化は、伸長・発達に応じて傾斜方向が系統的に変化する砂嘴の発達に伴って形成されたと解釈することができるのである。この解釈に従えば、この礫層が堆積した当時、この付近は海岸線付近であり、そこでは西から東へ伸びる砂嘴が発達しており、そのスピットの先端は北方向に湾曲した嘴状をなしていたことが想定される。

上部層は平行葉理や斜交葉理がみられる砂層や礫層である。その上部は人工的に平坦化されている。この地層は堆積相の特徴から波浪が卓越した海浜の堆積物であることを示している。トレントa（東西断面）の北壁面の東端部の露頭上部の観察では（図11）、3つの堆積相ユニットに区分できる。ユニットAが下部層、ユニットB、Cが上部層である。

ユニットAは、8~15°ほど東に傾斜した砂礫層や細礫・中礫層からなる。層理は傾斜角や傾斜方向が変化することにより全体的に低角のくさび状を呈する。ユニットAはすでに述べた下部層の砂嘴のフォーセット面を構成する堆積物である。ユニットAを特徴づける低角のくさび状を呈して傾斜する層理の堆積物は、砂嘴海岸の海浜下部から水中斜面上部の堆積物である。砂嘴が基本的には東に向かって発達したことはその傾斜方向からわかる。

ユニットBは、下部が平行葉理の発達した粗粒砂層、中部がやや傾いた平行層理の中礫層、上部が不明瞭な葉理をもつ中粒~粗粒砂層からなる。中礫層の礫は直径3cmの“すかし礫”からなり、礫のインブリケーション構造が認められる。この礫層の層理面は東に14°で傾斜し、礫は18~52°で南方向に傾斜する（図13右側）。このことは、これらの礫が東方向にゆるく傾斜する堆積面上で、南から北に向かう流れによって堆積したことを示している。上位の砂層は細礫混じりで、褐色の不規則で不明瞭な葉理が発達する。

ユニットBの平行葉理が発達した砂層や透かし礫を含む砂礫層や不明瞭な不規則な葉理砂層は、海浜の前浜から後浜の堆積物の特徴（増田, 1989, 1999）を示す。淘汰の良い砂層

や逆級化構造をもつ平行葉理砂層や透かし礫層がそれである。前浜堆積物で、その平行葉理面はかつての前浜面である。前浜面の傾斜方向を反映する平行葉理の傾斜方向（東方向）から、この地層の堆積時には南北方向に伸びる海岸線と東方向に海の存在が想定できる。すでに述べたように、砂嘴の水中斜面を反映したフォーセット層理の特徴から、西から東へ発達する砂嘴本体と先端部が北方向に湾曲した嘴状をなした砂嘴の発達様式が想定される。こうした砂嘴の発達に伴って海岸線と海の方向は、砂嘴本体部においては東西方向と南北方向に海、砂嘴先端部では南北方向と東方向に海が想定される。ここで得られた、南北方向に伸びる海岸線と東方向の海からなる前浜面の変化は、北方向に湾曲する砂嘴先端部の堆積環境と整合的である。ユニットBの礫層は荒天時に後浜に堆積したオーバーワッショの堆積物あるいは暴浪時に堆積した前浜堆積物と考えられる。そして、ユニットB上部の砂層は後浜に堆積した砂層で暴浪時に打ち上げられた堆積物とそれから風によって再移動した砂層から構成されたものと解釈できる。

ユニットCは極粗粒砂～泥質の中粒砂層からなり、東方向に緩傾斜する斜交葉理が発達する。分級の良い砂層と不明瞭な葉理構造は海浜砂丘の堆積物の特徴を示す。ユニットCの下部に含まれる直径5 cmの礫は、暴浪によって砂丘と後浜との境界付近に運び込まれた

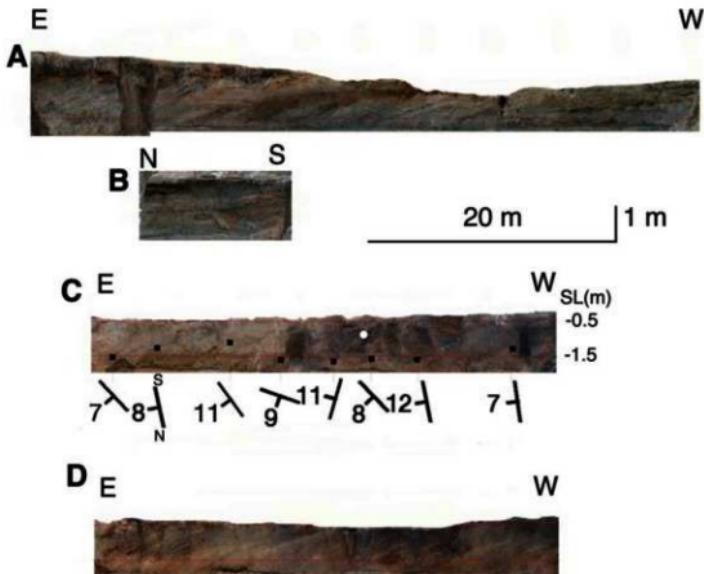


図10 地層断面と下部層のフォーセット面の走向・傾斜

Aはトレンチa（東西断面）の南壁面、Bはトレンチa（南北断面）の西壁面、Cはトレンチb（東西断面）の南壁面、Dはトレンチb（東西断面）の北壁面。A～Dはフォーセット面の構造を強調するために、写真を縦方向に伸ばしてあることに注意。なお、Aは図9（B）と同じ。Cのフォーセット面の走向・傾斜の記号は、傾斜方向が写真的構造と視覚的に一致するように、紙面下が北となるように表示している。また、写真Cの白丸地点は、種のインプレケーションを測定した地点を示す。Dの写真是傾斜方向を統一するため東西反転させてある。

ものであろう。

海浜堆積物、特に前浜堆積物の典型的なものは、トレンチaやトレンチbの上部で多く確認できる(図12C・D)。また、このトレンチ以外の発掘現場の露頭でも、疊浜の堆積物と考えられる反対方向のインプリケーション構造を示す疊層(図12E)など、砂嘴の上部に発達した海浜堆積物が認められる。さらに、これによく似た海浜堆積物は、兵庫津遺跡の南西方向にある須磨区の古川町遺跡(図7、増田ほか、2014a)、東方の東灘区の北青木遺跡(増田、1999、増田ほか、2014b)や本庄町遺跡(増田、2003)からも報告されている。

## 5. 観察された堆積物中の疊の特徴

観察された砂疊堆積物を構成する疊の特徴も、これが砂嘴堆積物であるという説明を支持している。

### (1) フォーセット層理を構成する疊

フォーセット層理を構成する砂疊層には、しばしば疊間に細粒の充填物のない、いわゆる“すかし疊”層が認められる(図11、図12A・B)。その場合、疊の表面には粘土が付着していたり、マンガンの水酸化物(坂本・増田、1989)でコーティングされたりしている。また、フォーセット層理を構成する疊は、傾斜する層理面に対してインプリケーション構造を有する(図13)。今回、トレンチbの南壁の中央部(図10Cの白丸地点)において測定した、フォーセット面の走向・傾斜と扁平な疊のインプリケーション構造の傾斜方向(図13の左側)は、フォーセット面の傾斜が東南東で、扁平な疊がほぼ水平へやや西北西に傾斜していた。この結果は、この砂疊層がフォーセット面を重力に駆動されて流れ下る“なだれ”のような粒子の集団移動(粒子流)によって堆積したことを示している。すなわちこのフォーセット構造は砂嘴の海中斜面で形成されたものであることを示している。

### (2) 疊種組成と円磨度

フォーセット層理を構成する疊層の疊について、疊種(岩石種)組成と円磨度を調べた結果(表1・表2・図14)、次のようなことがわかった。疊の調査地点はトレンチbの南壁面の中央部(図10Cの白丸地点)である。

疊種は、チャート、流紋岩、凝灰岩類、花崗岩類、石英脈、砂岩の5種類が認められた。直径4.0~8.0mmの疊については、花崗岩類が42.2%、チャートが40.7%、流紋岩・凝灰岩類が12.6%を占めた。また、直径16.0~31.5mmの疊については、チャートが75.8%、流紋岩・凝灰岩類が13.7%を占めた。顕著なのは、直径4.0~8.0mmの疊においては花崗岩類が多いが、直径16.0~31.5mmの疊においては花崗岩類が少ないことである。

これらの疊の由来を周辺の地質から推定してみよう。チャートおよび流紋岩・凝灰岩類の疊は、阪神地区南部を南西-北東方向に走る須磨断層・長田断層の南側に分布する更新統大阪層群および段丘堆積物(藤田・笠間、1983; 藤田・前田、1984)の砂疊層や疊層に由來したものと考えられる。花崗岩類の疊は、阪神地区南部の六甲地区に分布する花崗岩類がその母岩といえよう。直径4.0~8.0mmの疊においては花崗岩類が多く、直径16.0~31.5mmの疊において花崗岩類が少ないので、六甲地区的花崗岩は風化程度が強く、マサ化が進んでいるためと解釈される。今回採取した疊層に含まれる砂粒子がカリ長石、斜長石、石英からなることからも、六甲地区的風化した花崗岩から大量の碎屑物が供給されていたことがうかがえる。以上のことから、調査地域の疊は、主に、六甲地域を構成する花崗岩類と

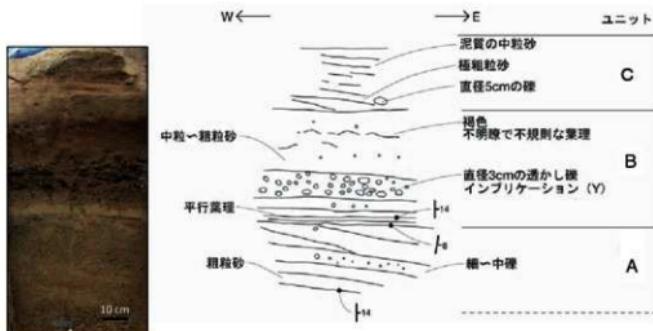


図11 地層断面のスケッチ

トレーンチb（東西断面）の北壁面の西端上部における地層のスケッチ。図中の走向・傾斜の記号は紙面上が北として表示してある。スケールは露頭写真内に示す。ユニットAが下部層、ユニットB・Cが上部層。

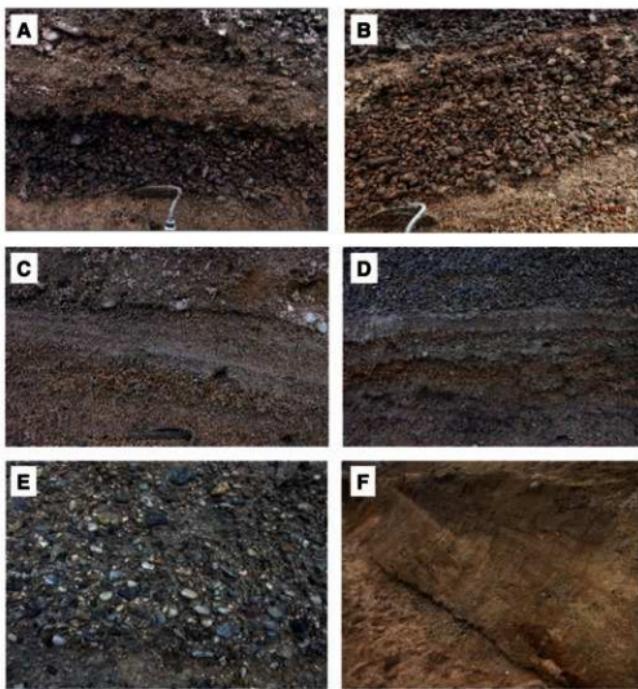


図12 砂礫堆積物の写真

A・Bは砂礫層に挟在する礫支持（透かし礫）の中礫層。ねじり縫の刃の長さは約12cm。Aは上部層（トレーンチa）、Bは下部層（トレーンチb）；C・Dは海浜堆積物の平行理含礫砂層（トレーンチb）。写真的横幅はともに約1.3m。Eは海浜下部（前浜）の礫層。波浪で形成された互いに反対方向に傾斜したインブリケーションを示す。トレーンチbの北方約40m地點。Fはフォーセット構造を示す下部層と水平な上部層からなる砂礫層の露頭（トレーンチb）。高さは約1.5m。

第四系中の礫層に含まれていた礫に由来することがわかる。

礫の円磨度は礫の大きさによって異なるのが一般的であるため、ここでは直径16.0～31.5mmの礫についてのみ調べた。粗粒な花崗岩類の礫の円磨度は0.55で円礫に相当し、チャート、流紋岩、凝灰岩類、細粒の鉱物粒子からなる花崗岩類の礫の円磨度は0.64の超円礫であった(表2)。これらの礫は非常によく円磨された礫であり、河川での円磨作用だけでなく、海浜や浅海域での波浪による円磨作用が加わっているといえよう。

礫の岩石種組成および円磨度から、これらの礫は、六甲地区から南へ流れ下る河川によってもたらされたものが海岸線沿いに沿岸流や潮流によって運搬され、波浪によって移動して堆積したものと考えることができる。これらの結果も、砂礫層を堆積させた堆積システムが砂嘴であるという解釈を支持している。さらにこうした考察から、これらの礫が堆積した当時は、現在の阪神地区に見られる地形と同様の地形が発達していたことが推察される。すなわち、六甲山地の南側に東西に伸びる海岸線が発達しており、六甲山地から

図13 矽のファブリック

フォーセット面、層理面および扁平な矽のインプレッション構造の方向を示すステレオ投影図(下半球投影)。左図は、トレントbの南面中央部(図10Cの白丸地点)、右図はトレントbの北壁面東端上部(図10Dの東端)で計測。

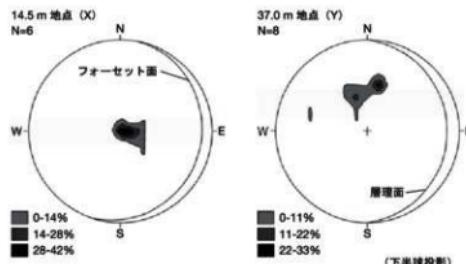


表1 矽の岩石種組成データ

岩石種	16.0～31.5 mm		4.0～8.0 mm	
	個数	(%)	個数	(%)
チャート	72	(75.8)	161	(40.7)
流紋岩・凝灰岩類	13	(13.7)	50	(12.6)
花崗岩類	7	( 7.4)	167	(42.2)
石英脈	3	( 3.2)	17	( 4.3)
砂岩	0	( 0.0)	1	( 0.3)
合計	95	(100.1)	396	(100.1)

岩石種	16.0～31.5 mm			4.0～8.0 mm		
	個数	円磨度		個数	円磨度	
		平均	標準偏差		平均	標準偏差
チャート	72	0.60	0.099	161	0.45	0.097
流紋岩・凝灰岩類	13	0.65	0.134	50	0.44	0.123
花崗岩類(粗粒)	2	0.55	0.050	153	0.34	0.068
花崗岩類(細粒)	5	0.64	0.080	14	0.48	0.101
石英脈	3	0.50	0.216	17	0.39	0.143
砂岩	0	-	-	1	0.80	0.000

表2 矽の円磨度データ

円磨度はKrumbein (1941) の円磨度印象図に基づいて測定した。

南に流下する河川（旧新湊川・旧妙法寺川）により六甲山地を構成する花崗岩類および第四系中の礫が供給され、礫浜からなる海岸線が発達していた。その東西に伸びる海岸線が北方向に屈曲する所では、西から東へ向かう沿岸流により東方向へ伸びる砂嘴が発達し、その先端部が北方向へ湾曲する砂嘴が発達していた。兵庫津遺跡は、この砂嘴の先端部で、それが北方向へ湾曲した場所に位置しているのである。

## 6. 砂嘴層の内部構造から推定される海水準変動

観察された地層は、上部層が海浜堆積物、下部層が砂嘴の水中部分の堆積物であることを述べた。上部層と下部層の境界の標高がトレンチ内で変化していることから、砂嘴の発達過程で海水準の変動があったことがわかる。

トレンチaでは上部層と下部層の境界面の高さが変化しているのがよくわかる（図9A）。特に西側では（図9Aのスケッチの一番上の断面）、最下部の下部層の上に上位層が重なる。その部分では露頭面で観察される中上部の地層はそのほとんどが海浜堆積物であるのに対して、その東側では、再び、海浜堆積物に乗り上げるようにフォーセット層理が発達した下部層が上位に重なっている。この地層の重なり様式は、海水準の低下とその後の上昇を反映したものである。

トレンチbでも海水準の変動を読み取ることができる。露頭の西部から中央部はフォーセット層理を示す下部層が全体にみられ、礫堆積物の計測を行った中央部の地点（図10Cの白丸地点）とほぼ同じ高さ（標高）に位置するトレンチの東端（図11の地点）では、海浜堆積物がみられる。フォーセット層理はすでに述べたように海面下で形成されたものであるに対し、同じ高さに海面上あるいは海面付近で形成された堆積物がみられることは、この一連の地層群が形成された終盤に海水準が低下していったことがわかる。境界面の標高変動からは、砂嘴の発達時期に1.5m以上にもおよぶ海水準の変化があったことを示している。

こうした海水準の変動が、砂嘴が東に伸びる時期と北に巻き込む時期をつくった一因である可能性が大きい。それ以外に供給される土砂量の変動も砂嘴の構造変化をもたらす要因になる。土砂量の変動は、地震や大雨による河川からの土砂流出の増減にも影響されるし、また海水準の変化にも影響される。砂嘴の形成の水路実験（宇多・山本、1992）によれば、砂嘴が直線状に発達するのは前面の水深が一定の場合で、先端がかぎ状に曲がるのは前面の水深が深くなり前進する速度が落ちて、波浪の影響をより強く受けた場合である。この地域に縄文時代に存在した大規模な砂嘴が、兵庫津遺跡の付近で先端を大きく曲げて発達を停止させたのは、海水準の低下による供給土砂の低下と、前面の海底が深くなっていたことが原因とし

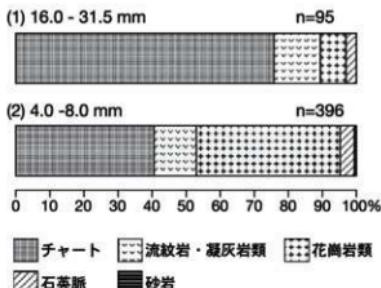


図14 砂種（岩石種）組成  
(1) は礫径16.0～31.5mm、(2) は礫径4.0～8.0mmでの計測結果。  
nは測定個数。計測地点は、トレンチbの南壁面の中央部（図10Cの白丸地点）。

て考えられる。地下地質からみても（図15）、この地域の海成粘土層の上面深度が大きくなっていて、当時の水深が大きくなっていたことがわかる。

一方、砂嘴の頂部標高は後浜の頂部標高に近いことが知られている（武田、2007）。この地域にかつて存在した大型の砂嘴は、その頂部標高が2～4mと高いことから、5000年前～6000年前の最高海面期（現在の海水準より2～3m高い時期）に形成されたと考えられている（増田ほか、2014a）。今回の調査地域では、海浜堆積物の多くは、標高-0.5m付近にみられるが、トレーナでは-2mにまで下がっている部分がみられる。一方、露頭上部まで下部層が分布するところもあり、海水準が標高-0.5m以上にあった時期も存在したことがわかる。すでに述べたように、この地点は砂嘴の先端部であることから、その形成時期は、最高海面期以降でおよそ-1mにまで海水準が低下する時期を含んでいることがわかる。過去の大坂湾の海水準変動（Masuda et al. 2002）から推定すると、この砂嘴は4500年前から3000年前くらいまでは存在していたといえるかもしれない。

## 7. 地下地質

兵庫津遺跡の基盤をなす砂礫層を、この近傍の表層地質からみてみよう。地質ボーリングデータベースの解析から、この地域の表層に分布する沖積層には次のような特徴があることがわかった。

この地域の地下浅所には、厚さ2～5mの砂礫層が広く分布している（図15）。さらにその下位に厚さ1～5mの砂層がみられる。これらが砂嘴を構成していた地層で、上方粗粒化するサクセッションの特徴（Hiroki and Masuda, 2000; 廣木, 2002）を示している。また、砂嘴堆積物の底面は平坦な海底面にダウンラップして堆積するため、比較的平坦となるが、上面は地形面を反映して凹凸となっている。兵庫津遺跡付近の地下では、さらに下位に、現在の大坂湾の海底の泥層に連続する泥層が陸側に向かってくさび状に分布している（図15A-B）。この泥層は第13海成粘土層（Ma 13層）で、その分布から約6000年前から5000年前の最高海面期には現在よりも陸側に海が侵入していたことがわかる。そしてその海成粘土層の陸側末端部に砂嘴堆積物が認められる。砂嘴が最高海面期とその後までに残されたことがわかる。海成粘土層の基底面は海進時の波食作用で平坦化したラビーンメント面（図15のRS、増田ほか、2013）である。この地域ではいわゆる“沖積層”（増田ほか、2013）の基底の不整合面は、標高-15m付近の礫層内に想定される（図15のSB）。砂嘴の主部の地質断面（増田ほか、2014a）でみると、礫層の厚さは東方に向かって小さくなり、砂層が厚くなる。兵庫津遺跡の地域では、すでに述べたように砂嘴の先端部にあたるため、砂嘴の主部よりも礫層が薄くなり砂層が厚くなっている。

## 8. まとめ

神戸市兵庫区の兵庫津遺跡の基盤をなす砂礫層は、繩文海進期から最高海面期（6000年前～5000年前）、さらにその後繩文時代末期くらいまでは存在していた砂嘴堆積物である。この砂嘴は西方の須磨地域から東北東に延びていた大型の砂嘴で、兵庫津遺跡の地点はその先端部にあたる。今回の兵庫津遺跡の発掘現場で観察された地層や堆積物は、これらが砂嘴を構成していたものであることを強く示している。

謝辞：調査の機会を与えていただいた神戸市教育委員会の千種 浩氏、斎木 勝氏、元神戸市教育委員会の丸山 潔氏に感謝します。また、表層地質の解析に用いた地盤情報データベースの利用許可をいただいた関西圏地盤情報データベース運営機構に謝意を表します。

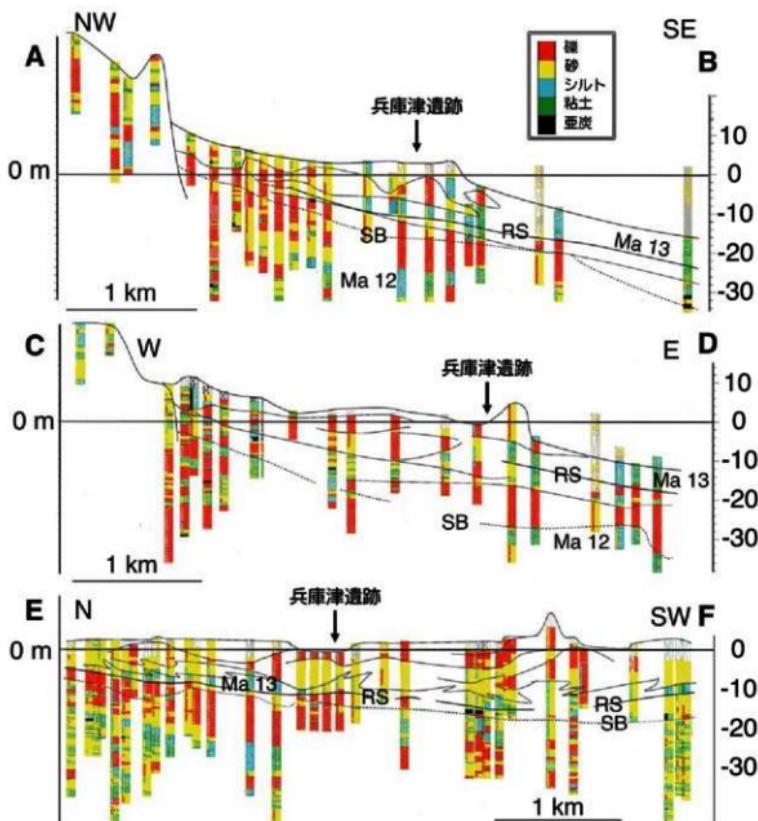


図15 兵庫津遺跡付近の表層地質断面

断面位置は図7に表示。兵庫津遺跡の基盤をなす砂礫層が細長い分布を示すこと、この砂礫層の下位に現在の大阪湾底の泥層に連続する海成粘土層（Ma 13層）が存在することが特徴である。SBはシーケンス境界で沖積層の基底面、RSはラビーメント面で海進時の波食面である。Ma12は第12海成粘土層である。

## 《参考文献》

- 藤田和夫, 笠間太郎, 1983. 神戸地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅). 地質調査所, 115p.
- 藤田和夫, 前田保夫, 1984. 須磨地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅). 地質調査所, 101p.
- 廣木義久, 2002. 大規模漂質フォーセットベッド: 輪嘴-沖合灘州モデル. 地学雑誌, 111(5), 609-625.
- Hiroki, Y. and Masuda, F., 2000. Gravelly spit deposits in a transgressive systems tract: the Pleistocene Higashikanbe Gravel, central Japan. *Sedimentology*, 47, 135-149.
- King, C.A.M. and McCullagh, M.J., 1971. A simulation model of a complex recurved spit. *Journal of Geology*, 79, 22-37.
- 神戸市教育委員会, 2010. 兵庫津遺跡-第51次発掘調査報告書. 神戸市教育委員会, 162, P.L.30.
- Krumbein, W.C., 1941. Measurement and geologic significance of shape and roundness of sedimentary particles. *Journal of Sedimentary Petrology*, 11, 64-72.
- 増田富士雄, 1988, 1989. ダイナミック地層学-古東京湾域の堆積相解析から-「その1基礎編」、「その2発展編」. 応用地質, 29, 312-321; 30, 29-40.
- 増田富士雄, 1999. 北青木遺跡の海浜堆積物. 北青木遺跡発掘調査報告書-第3次調査, IV, 66-74. 神戸市教育委員会, 148p.
- 増田富士雄, 2003. 神戸市本庄村遺跡で観察された浜堤の形成過程を記録した地層. 本庄村遺跡第9次発掘調査報告書. 神戸市教育委員会, 55-62.
- 増田富士雄, 2014. 神戸市東灘区深江北町遺跡第12次調査地での自然堆積層. 深江北町遺跡第12・14次調査, 埋蔵文化財発掘調査報告書. 神戸市教育委員会, 171-182.
- Masuda, F., Iizuki, T., Fujiwara, O., Miyahara, B. and Yoshikawa, S., 2002. A Holocene sea-level curve constructed from a single core at Osaka, Japan (A prelim note). *Memoirs of Faculty of Science, Kyoto University, Series of Geology & Mineralogy*, 59, 1-8.
- 増田富士雄, 佐藤智之, 伊藤有加, 櫻井皆生, 2013. Shazam層序学をボーリングデータベース解析へ適用する試み: 大阪平野の表層地質研究を例に. 地学雑誌, 122, 892-904.
- 増田富士雄, 佐藤喜英, 櫻井皆生, 伊藤有加, 2014a. 神戸市古川町遺跡にみられる砂礫浜海岸の堆積物とその古地形上の位置. 古川町遺跡第2次発掘調査報告書. 神戸市教育委員会, 29-38.
- 増田富士雄, 谷口圭輔, 佐藤喜英, 2014b. 神戸市東灘区北青木遺跡第7次調査における堆積物と地層. 北青木遺跡第7次発掘調査報告書. 神戸市教育委員会, 107-124.
- Meistrell, F.J., 1966. The spit-platform concept: Laboratory observation of spit development. In Schwartz, M.L. ed: *Spit and Bars*. Dowden, Hutchinson & Ross, 225-284.
- 坂本吉宏, 増田富士雄, 1989. 更新統下絶層群の砂層や疊層にみられる暗褐色斑点物質: バーネス鉄等のマンガン鉱物. 地質学雑誌, 95, 873-876.
- 堆積学研究会, 1998. 堆積学辞典. 朝倉書店, 東京, 470p.
- 武田一郎, 2007. 砂州地形に関する用語と湊口砂州の形成プロセス. 京都教育大学紀要, 111, 79-89.
- 宇多高明, 山本幸次, 1992. 砂嘴形成海域の海底地形と砂嘴形態の関係について. 地形, 13, 141-157.
- 宇多高明, 西原在浩, 加三千宜, 2000. 大阪湾に面した神戸市和田岬の形成機構に関する一考察. 地形, 21, 329-340.

## 第3章 新町地区の調査

### 第1節 遺構面

調査区の北辺および東辺沿の4~8mほどの部分が旧建物による損壊を免れており遺構面が良く残っていた。また、中央部においても幅8mほどで、南北方向に細長く比較的の遺構面が残る部分がある。一方調査区の西側については、旧建物の基礎が格子状に最終面以下の深さに及ぶため、その合間に数m角の島状に遺構面が残る状態である。

### 第2節 第I期 検出遺構

前述のように全体に深い削平を受けている調査区において、この時期の遺構が面的に存在しているのは、調査区の北辺沿いの部分および南西部に島に点在する残存部分である。それ以外の部分においては、井戸などの深く掘り込まれた遺構が削平を免れ点在する。

主な検出遺構としては、町屋建物およびこれに伴うと考えられるカマド、井戸、石組み遺構、胞衣壺埋納遺構、瓦溜め遺構などがある。

**町屋建物** 明確な町屋建物は検出されなかった。屋地割りを踏襲した方向に並ぶピット群が調査区の北西隅部分を中心に検出されている。この他、カマドとみられる遺構が点在している。削平を受けた町屋建物が存在していたものと考えられる。

**カマド遺構** 第I期に属するカマド遺構は上面からの深い削平に耐えうる比較的大規模なものとなる。構造材（芯材）に石を積むものSK1109・1110・1113やSK1103のように瓦類を組むものなどがみられる。壁の内側は熱により堅く焼け縮まる。

SK1113の燃焼部の掘り込みは、比較的浅く、底部に平な石を据える。

SK1109は、径1.0mの石積みされた堅固な造りのカマドである。円形の連なった形状から2連のカマドかと思われたが、底部で焚口が切り合っていることから造り替えられたもののように西側が先行する。

**井戸** 石組みや瓦質の井戸枠をもつ井戸が各所に検出された。比較的長期間使用されていたものも存在し時期判定が難しい。同様の構造をもつ井戸でも、廃絶時期については大きなバラつきがみられ、新しいものは、戦前まで使用されていたようである。

石組みの井戸には、自然石を組んだものと井戸側になる面を丸く加工したものとが存在する。切り合いや出土遺物から前者が古いようである。

SE1103は、円形の石組井戸状の遺構である。内径0.5m、深さ1.3mで自然石を積み上げる。井戸のようにも思われるが底部に桶などの施設もなく湧水層まで達していない。深さがあまりなく、底部に水溜の桶などを持たない遺構については、後述する石組遺構と判別がつきにくい。

**石組遺構** SK1108は、円形の石組遺構である。自然石を1段円形に組んだもので内径は0.5mを測る。貯蔵施設と考えられる。

**瓦積遺構** SK1105は、内法東西0.9m、南北0.7mで深さ50cmを測り、上部を板材、下部を瓦積みによって長方形に枠組された施設である底面は、素掘りのままである。規模や形状から貯蔵目的の石組遺構に類する遺構と考えられる。

**胞衣壺埋納遺構** 調査区北辺の東部において直径20cm前後のピット群が検出された。蛸壺が直立して出土しており胞衣壺の埋納遺構と考えられる。すぐ近くには、カマド遺構SK1103が存在することから、町屋建物の土間にあたる部分であると考えられる。

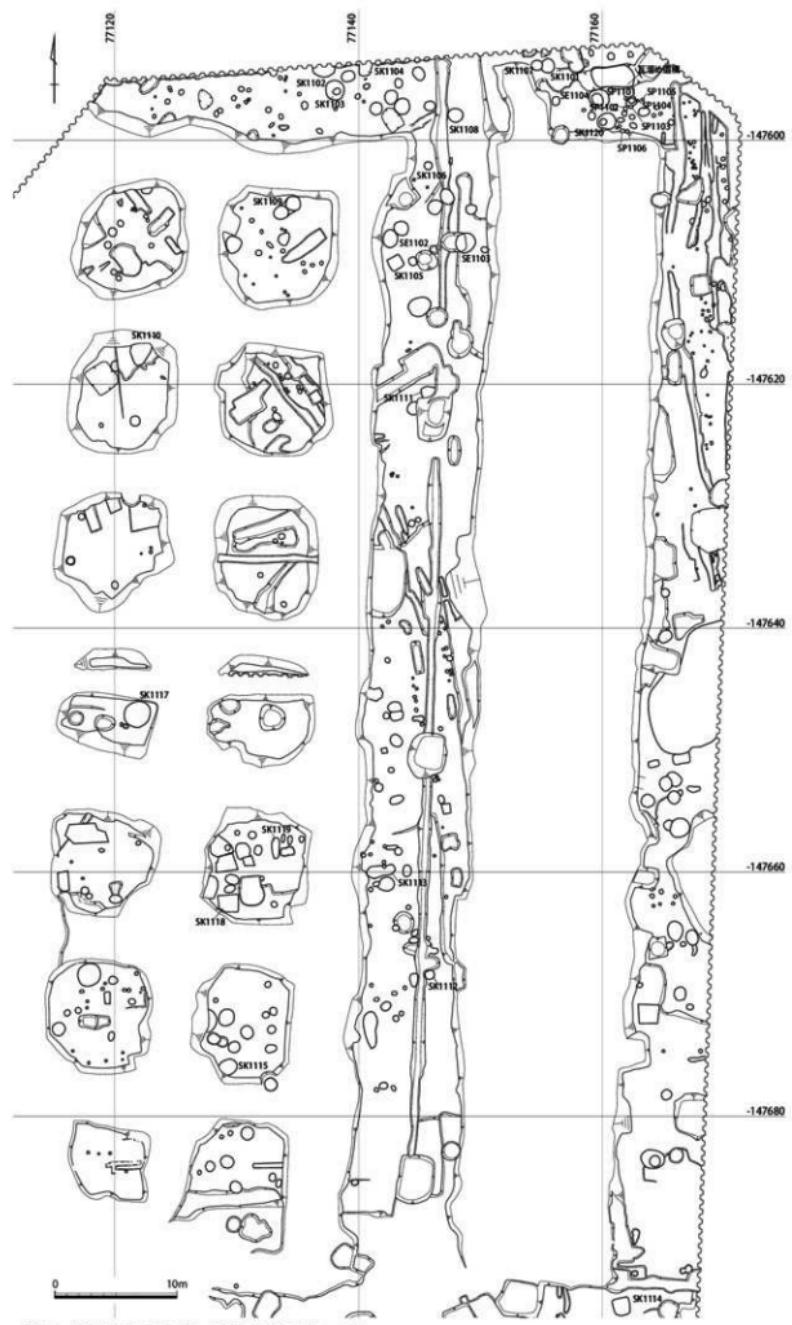


図16 新町地区 第Ⅰ期 遺構面平面図 (1:400)

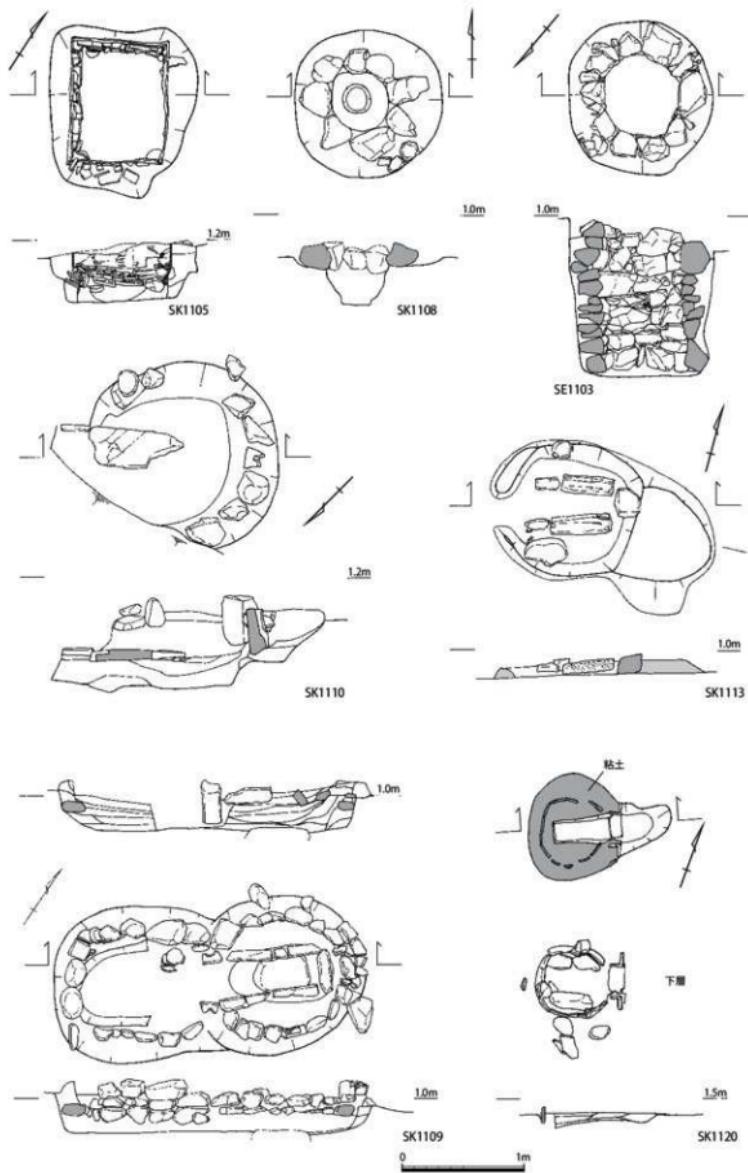


図17 新町地区Ⅰ期 造構平・断面図 (SK1103・1105・1108・1109・1110・1113・SE1103)

**瓦溜め遺構** 調査区北辺の中央部に位置する、東西4.5m、南北2.0m、深さ50cmの遺構である。瓦類が多量に投棄されている。

### 第3節 第Ⅱ期 検出遺構

I期同様に、削平を受けておりこの時期の遺構が面的に存在しているのは、調査区の北辺沿いから東辺北部にかけての部分と西部に島に点在する残存部分である。

主な検出遺構は、町屋建物およびこれに伴うと考えられる石列やカマド、埋桶遺構、石組・瓦積遺構、土坑などである。また、貝殻の集積された堆積や遺構などが数ヶ所で確認された。

**街路遺構** 新町地区においては、4本の街路遺構を検出した。今回検出遺構として街路と呼称したものは、自然発生的な「道」ではなく、町屋群によって構成される街区を画するために人工的に造られた道路遺構である。

とくに街路1は、元禄兵庫津絵図には、兵庫陣屋正面の出入り口に続く道として描かれた築城当初は兵庫城の「大手筋（道）」となっていたことが推定される。幅9mほどある広いもので、断面はX区の街路と同様に砂や粘土、砂利などを数cm単位で積み重ねて敲き締められている。取り付く町屋建物から築城期から連綿と続くことが確認された。この遺構については、土壤の土木工学的な分析を実施している。第7章を参照されたい。また、街路2についても北部で元禄絵図に描かれた堀と並行して北西方向に緩くカーブしていくことから堀の造成に伴い造られた街路であると考えられる。

街路3は、街路2の北側で北東に枝分かれして、街路6に繋がる幅1m前後の細い街路である。街路6は、調査区の東壁沿いで一部確認できた南北方向の街路である。

**町屋群** 調査区の北部において、削平を受けているものの、複数の町屋建物からなる町屋群が確認できた。町屋群とは、方向性、規格性、屋地の地盤などを共有すると考えられる町屋建物の集合体をさす。

調査地を南北にはしる街路2の北部で東側に取り付くと考えられる町屋群Bと西側に取り付く町屋群Cを検出した。さらに調査区の東側や中央部においても、残された礎石などから1～数棟の建物が存在したと考えられる。

この町屋群の敷地割りは、時代を巡ってもほとんど形を変えることなく踏襲される。

**町屋建物** 町屋群Bにおいて3棟、町屋群Cにおいて2棟の町屋建物を検出した。他に街路3と4の繋がる部分に1棟の町屋建物、中央部において蔵と考えられる建物を1棟検出し



写真13 SE1103



写真14 瓦溜め遺構

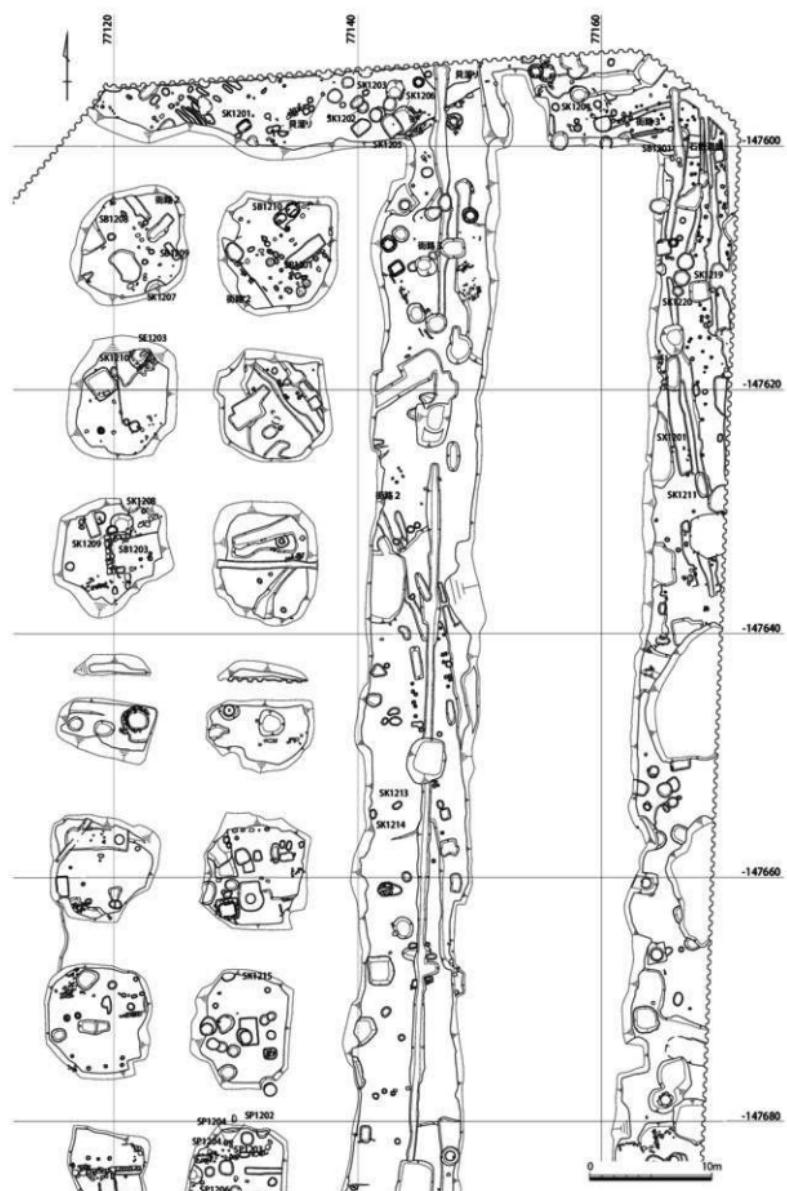


図18 新町地区第Ⅱ期造構平面図 (1:400)

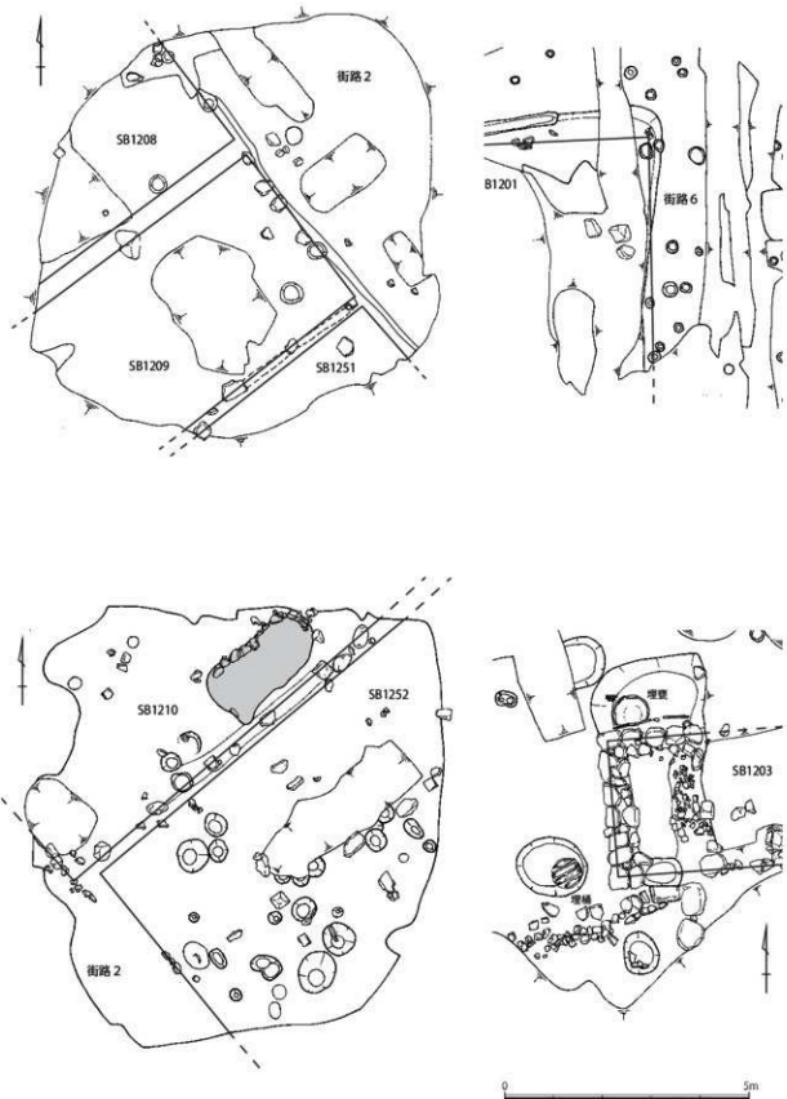


図19 新町地区 第Ⅱ期町屋建物平面図 (SB1201・1203・1108・1109・1110・1152)

た。これ以外にも明確な建物が確認されなかった部分においてもカマドとみられる遺構が点在していることから町屋建物が群として存在していたものと考えられる。

SB1201は、北辺と東辺の一部および北東角部分を残し大半が攪乱によって削平を受けているため内部の構造は不明である。北側の礎石の一部が認められる。

SB1203は、建物の西辺と南北辺の一部を検出した。南北3.2m、東西2.5m以上を測る。一部加工した石材を2段以上組み上げて礎石（基礎）としていることから蔵などの建物であったと考えられる。

SB1205では、北面から南東方向に走る幅20~30cmの溝が並行して多数検出されている。埋土には、焼土を含み整地の痕跡と考えられる。

SB1208は、街路2に取り付く町屋建物である。間口3.0m、奥行6.0m以上で、間口側に壁材と礎石、南壁側に礎石が認められる。他に礎石の抜き取り穴と思われるピットが数基検出された。

SB1209は、SB1208の北に隣接する町屋建物である。間口3.4m以上、奥行6.0m以上で間口側に壁材が残る。礎石や抜き取り穴が間口側に一部残るのみである。

SB1210は、街路2の東に取り付く町屋建物である。間口3.0m以上、奥行8.0m以上で、南壁側に礎石が認められる。またSB1252は、SB1210の南に隣接する町屋建物である。間口6.6m以上、奥行8.0m以上で間口側に礎石と抜き取り穴、北南壁側に壁材と礎石が認められる。建物内部にも礎石が多く残る。

大型石組遺構 SX1201は、街路4の西側に接するように存在する大型の石組遺構で東西幅1.8m、南北長9.8を測る。西辺ではほぼ全面に自然石を積み上げた石組みがみられるが、他の3辺では石は疊らで東辺には釘止めされた板材による枠が見られる。底部は素掘りのままである。また南から1.8mほどの部分で石組みによって区切られている。

石組遺構 SK1204は、小型の石組遺構である。内法40×30cmの長方形で自然石を3~4段組んだもので深さ30cmを測る。

瓦積遺構 SK1203は、内法東西0.9m、南北0.5mで深さ35cmを測る。南北の側面に瓦片を積んでいる。底面は素掘りのままである。

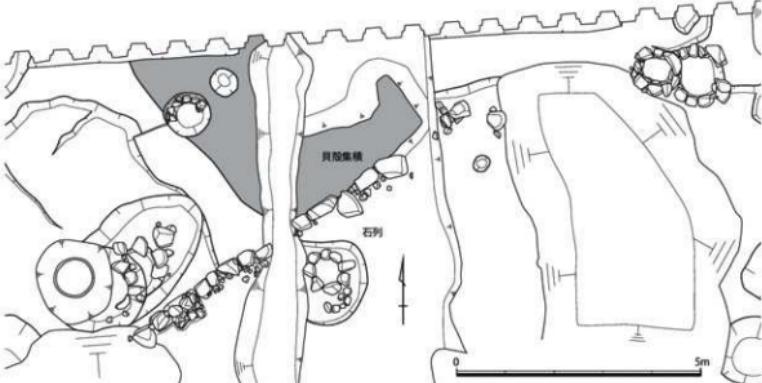


図20 石列・貝殻集積構 平面・断面図

**石敷遺構** 調査区の北西部において検出された、1.0m × 2.0mの長方形の範囲の石敷遺構である。

拳大の石で枠を造り固めた中を数センチの砂利を充填している。削平のため検出はできなかったが町屋建物内の土間に設けられた流しなどの施設の一部と考えられる。

**貝殻集積遺構** 北辺の中央部では、北東から南西方向の敷地割りを示す石列1201の北西側で3.5×2.0mの範囲でトリガイの貝殻の集積が確認された。貝層は厚さ10~25cmほどで、他にも、径25~40cmの円形の小土坑に貝殻を充填させた遺構がみられる。貝類の詳細は、第7章を参照されたい。

**鍛冶関連遺構** 調査区の中央部で検出された鍛冶炉SK1213は、長径0.80m、短径0.60m、深さ0.16mを測る平面不整な梢円形の土坑状の遺構である。

全体に被熱に伴う赤変がみられる。長辺側である。

北側に残長約輔の羽口が出土した。周囲は不整形に掘り込まれ、鍛造剝片を非常に多く含む炭化物混じりの砂が堆積している。炉の西側に四角く変色した部分

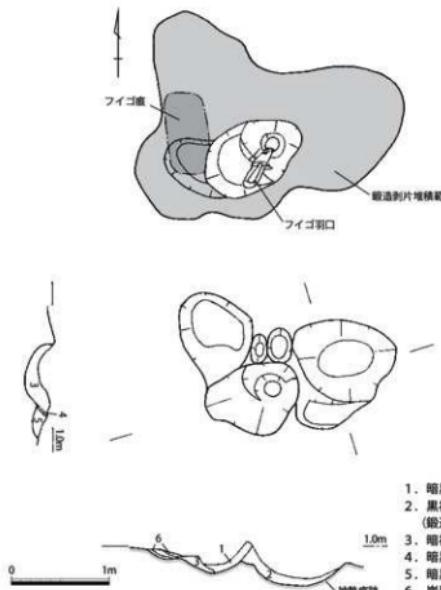


図21 SK1213 平・断面図

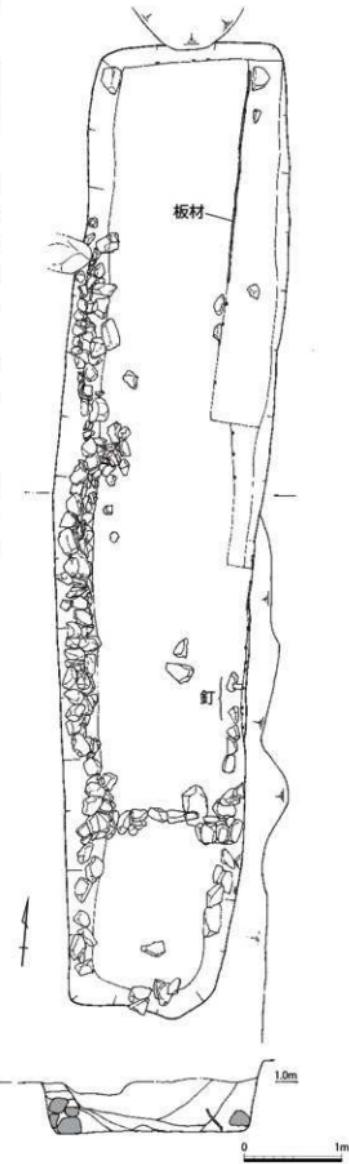


図22 大型石組遺構SK1201 平・断面図

が認められる。轍の設置された痕跡を示す可能性がある。分析の結果などから小鍛冶を行った遺構と考えられる。

削平のため、この遺構が設置された建物は不明であるが、後述する第Ⅲ期の町屋建物SB1313の上層で検出されており、ほとんどの場合、町屋建物は同規模で後世に引き継がれていくことから、おそらく同様の町屋建物の内部に存在したと考えられる。

なお、出土した鍛造剝片などは自然科学分析を実施した。第7章を参照されたい。

落ち込み状遺構 貝殻集積遺構の南側は、落ち込み状の遺構となっており整地のために多量の鉄滓や轍の羽口などが投棄されていた。出土した鉄滓や羽口の付着物質を分析した結果、鍛造作業により生成したものであることがわかった。

#### 第4節 第Ⅲ期 検出遺構

主な検出遺構は、街路遺構、町屋群およびこれに伴うと考えられる石列やカマド、埋植遺構、石組、土坑などである。

**焼土層** 調査区の中央部から東にかけて火事によって焼け落ちた町屋の焼土層が存在する。特に町屋群B・D・EとFの南部では焼けた壁材等によって整地された層の下から炭化物の堆積が層厚数cmで認められる。炭化物は良好な状態で、柱材や板材、豊材などが含まれていることが確認された。炭化材については樹種同定を行った。第7章を参照されたい。  
**街路** II期とほとんど同じ状態で街路が存在している。街路3は拳大の石が縁石として両側に並べられた状態がみられる。

**町屋群** 検出された町屋群がほぼ出揃う時期である。30棟以上の町屋建物を確認した。調査区北部で西にカーブする街路2の北東側に東に向口を持つ東西棟の町屋群A、街路を挟んで南北側に向口を持つ町屋群Bが、さらに南北方向になった街路2の西側に町屋群C、東側に取り付く町屋群のうち街路3以北を町屋群E、南を町屋群Fとした。

**町屋建物** 調査区の全域において町屋建物からなる町屋建物を検出した。上層にII期の建物が確認できたものについては、位置および間口規模などはほとんど同じである。新町地区については、擾乱が町屋群を横断する形となるため奥行については、同じ1棟の建物かどうかを含めて断定することが困難である。

SB1304は、調査区の北西端において西にカーブする街路2北側に取り付く町屋建物である。間口15.0m以上、奥行6.5m以上で、西側に土間、東に床貼りの部屋を配する。土間・床境にカマドをもつ。



写真15 落ち込み状遺構 (羽口・鉄滓等)



写真16 焼土層

SB1308は、良好な焼土層に覆われた町屋建物である。壁材と思われる木舞等の炭化物が倒れこんだ状態で検出された。SB1208とほぼ同位置に検出された。間口の規模も同じである。礎石の残存は良好でとくに建物の北側には密に東石状の礎石を0.7~1.0m間隔で配している。さらに南側にはカマドを設けていることから南側が土間、北側が床貼りになると考えられる。床面からは、唐津製品だけでなく、志野・織部など瀬戸・美濃製品も出土している。

SB1309は、SB1308の南に隣接する町屋建物である。建物の中央にカマドが造り替えられながら存在する。規模は上面のSB1209同様である。

SB1310は、街路2の東側に取り付く町屋建物で規模等はⅡ期のSB1210と同じである。南壁から幅1.4mが土間になる可能性が高い。SB1252と接する南壁に土台状の壁や礎石がみられる。

SB1351は、SB1353の北に隣接し、街路2に取り付く町屋建物であるが、削平のため詳細は不明である。南壁の礎石列が確認された。

SB1353は、間口6.2m、奥行13.0m以上を測る。間口部分に礎石の抜き取り穴が並ぶ。内部にイロリがある。

SB1354は、間口5.0mの町屋建物である。間口から8.0mでSE13がある。この奥にも礎石が認められる。時期を違えるか、別の建物が存在した可能性がある。

SB1311は、間口7.0m以上、奥行9.0m以上であるが、攪乱のため北壁の西端と南東角周辺の一部が確認された。

SB1312は、街路2の西側に取り付く町屋建物で間口7.2m以上、奥行12m以上で間口側南壁側に礎石と壁材を良く残すSB1313は、間口7.0m、奥行12m以上で、南北壁側に壁材と礎石が認められる。

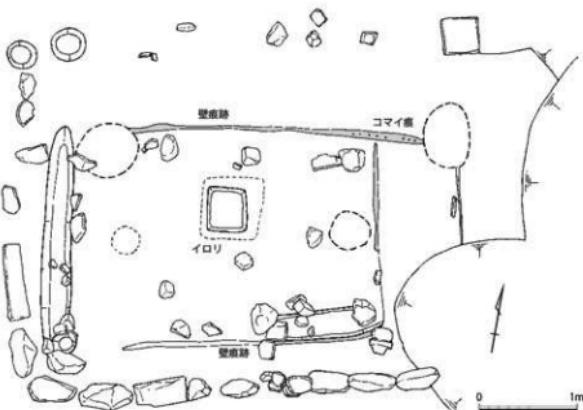
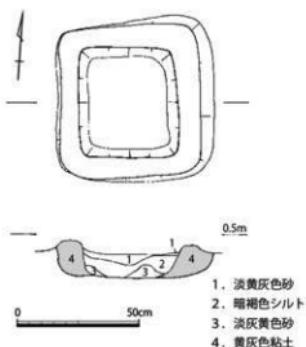


図23 SB1331 小区画平面図・イロリ平・断面図

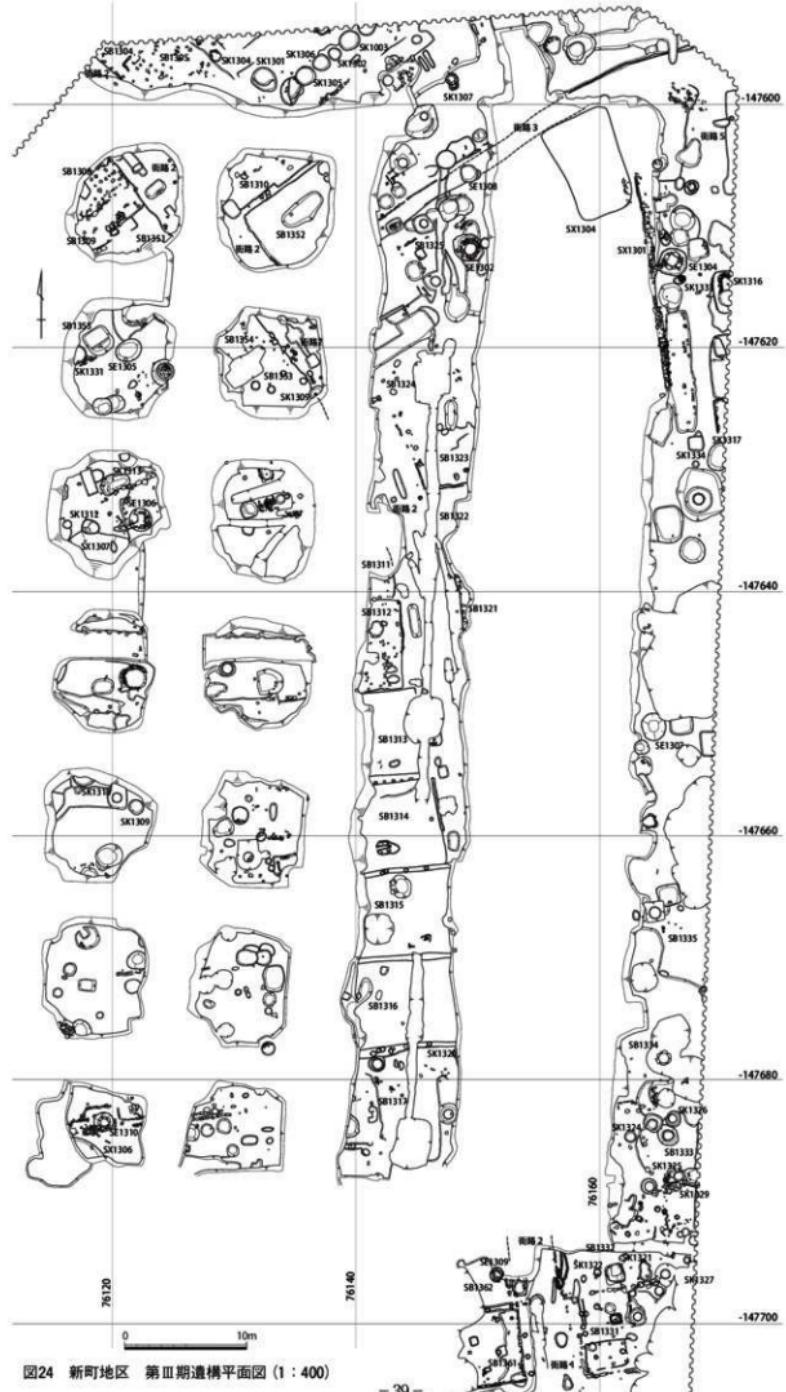


図24 新町地区 第Ⅲ期造構平面図 (1:400)

SB1314は、間口7.2m以上、奥行15m以上町屋建物である。

SB1315は、間口6.4m以上、奥行8.0m以上で、間口側と北南壁側に礎石が認められる。中央やや北寄りにイロリを、南壁沿いにカマドをもつ。

SB1316は、幅7.2m、奥行8.0m以上の町屋である。で、建物の間口・裏側を削平されている。南壁側に土台状の壁と礎石が認められる。建物の南壁側より3.0mが土間でこれより北が床敷きになるようである。

SB1323は、SB1324は、間口9.6m、奥行7.5m以上を測る。南壁より2.0mで壁による区画（間地切）がみられる。

SB1325は、間口5.5m、奥行11m以上を測る。調査区の南東隅に位置する町屋建物で、街路2に間口を、また南壁を街路3に接する。

SB1331は、良好な焼土層に覆われた町屋建物である。街路1および2に面しているが、間口は街路2に取り付くようである。間口6.8m、奥行8.0m以上を測る。街路に面する前に縁石を巡らしている。東側を搅乱によって大きく削平されている。

東西の礎石列によって南北に区切られており、北側を床貼、南側を土間としているようで、北側に内寸60cmのイロリをもつ。さらに南側の西端を壁で20×3.0mに間仕切りされた小区画を作り中ほどにイロリを設ける。壁にはコマイが組まれた痕跡が明瞭である。

また、上面に堆積した焼土中からは、唐津窯の碗・皿・徳利などがまとまって出土している。

SB1132は、SB1331の北に隣接する町屋建物である。間口6.8m、奥行11.0m以上を測る。南北の壁に1m前後の間隔で礎石を配する。また街路2に面する部分に10~20cmの礎を並べる。

SB1233は、間口7.2m、奥行10m以上を測る。建物内部は、北壁から3mほど南で東西方向の礎石列によって区分されている。

SB1353は、間口6.2m、奥行11.0m以上を測る。間口部分に礎石の抜き取り穴がみられる。井戸 SE1309は、内径0.5m、深さ0.8m以上の石組井戸である。一部に五輪塔の転用石を使用している。

SE1310は、石組井戸で底部は木桶を使用している。内径0.6m、深さ1.1m以上を測る。使用されているほとんどの石材は、五輪塔の転用石である。底部の井戸枠には、木桶を使用している

埋桶遺構 SK1302・1305・1306は、埋桶遺構である。掘形の中央にそれぞれ内径70cm、140cm、100cmの木桶が据えられている。側板と底板の一部が残存していた。

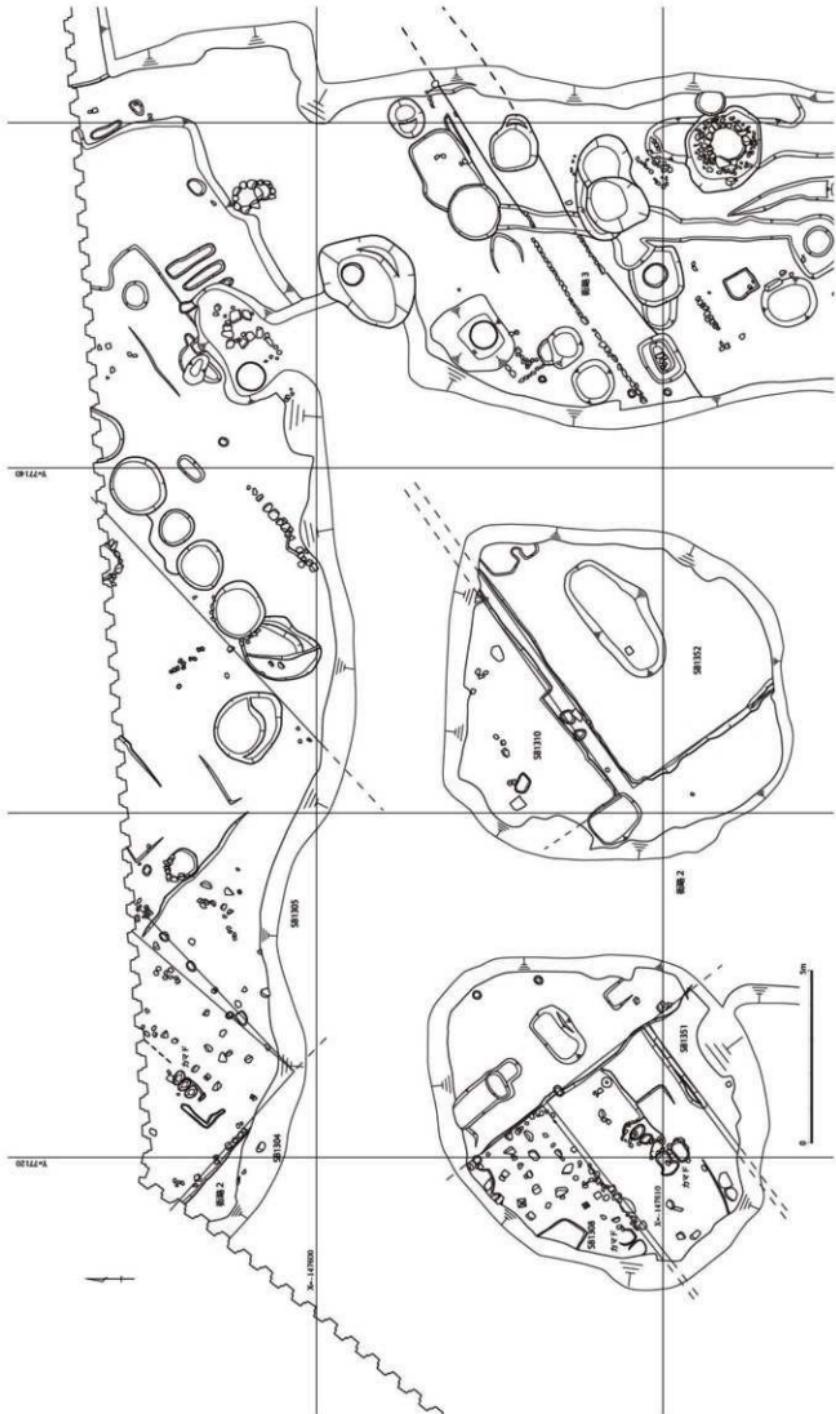
同様の埋桶遺構が切り合って存在することから、次々に造り替えが行われていたようである。検出された木桶はいずれも火災に伴う被熱によって炭化している。

SK1305では、底より30数cm炭化していない部分がみられ、魚の骨片などが含まれていることからゴミなどが堆積していたものと考えられる。

石組遺構 SK1325は、南北2.0m以上、東西2.0m、深さ100cmの掘形をもつ石組遺構である。内法は東西1.0m、南北0.7mの石組みである。石組みは東面の上段が崩れているものの10~60cmの石を中心として4段程度が積まれている。石積みは密であるがとくに面を取るなどの加工は施されていない。底部は素掘りのままである。

SK1327は、南北2.0m、東西1.5m以上、深さ80cmの掘形をもつ石組遺構である。内法は東

图25 满田湖町断面图



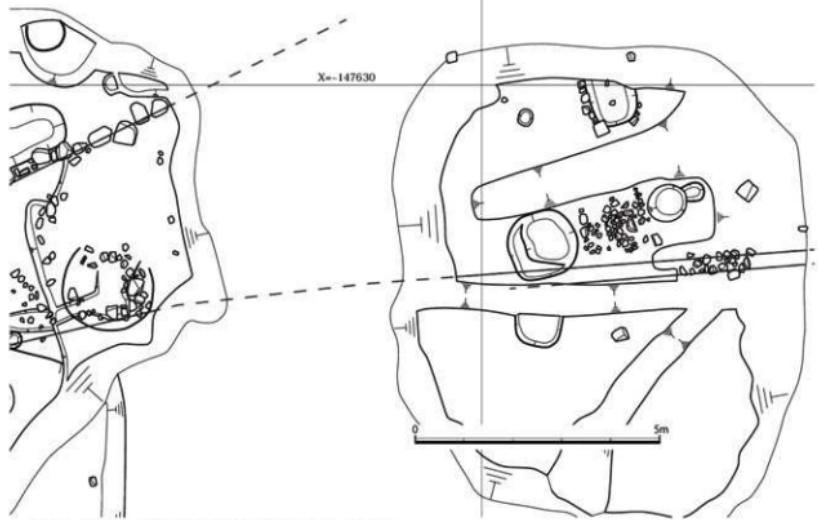
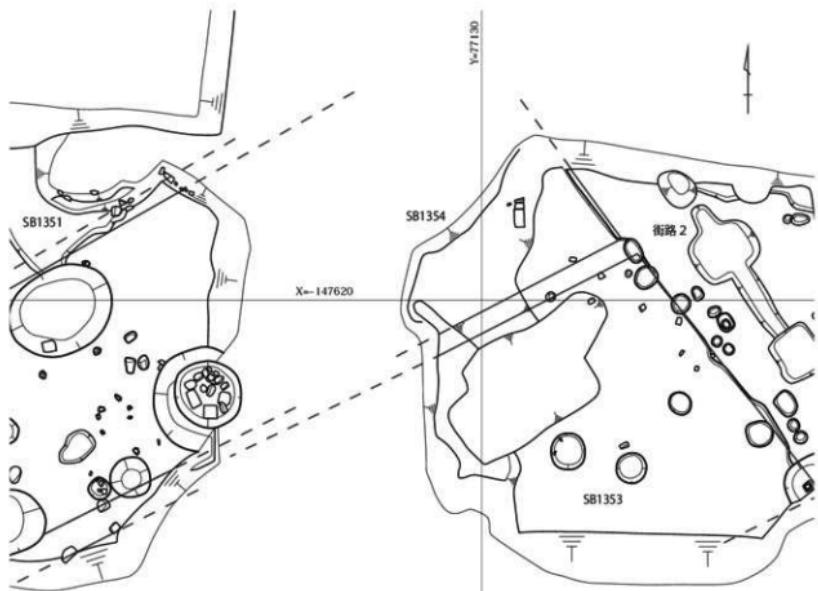


図26 第Ⅲ期 町屋群D北部平面図 (SB1353~1355)

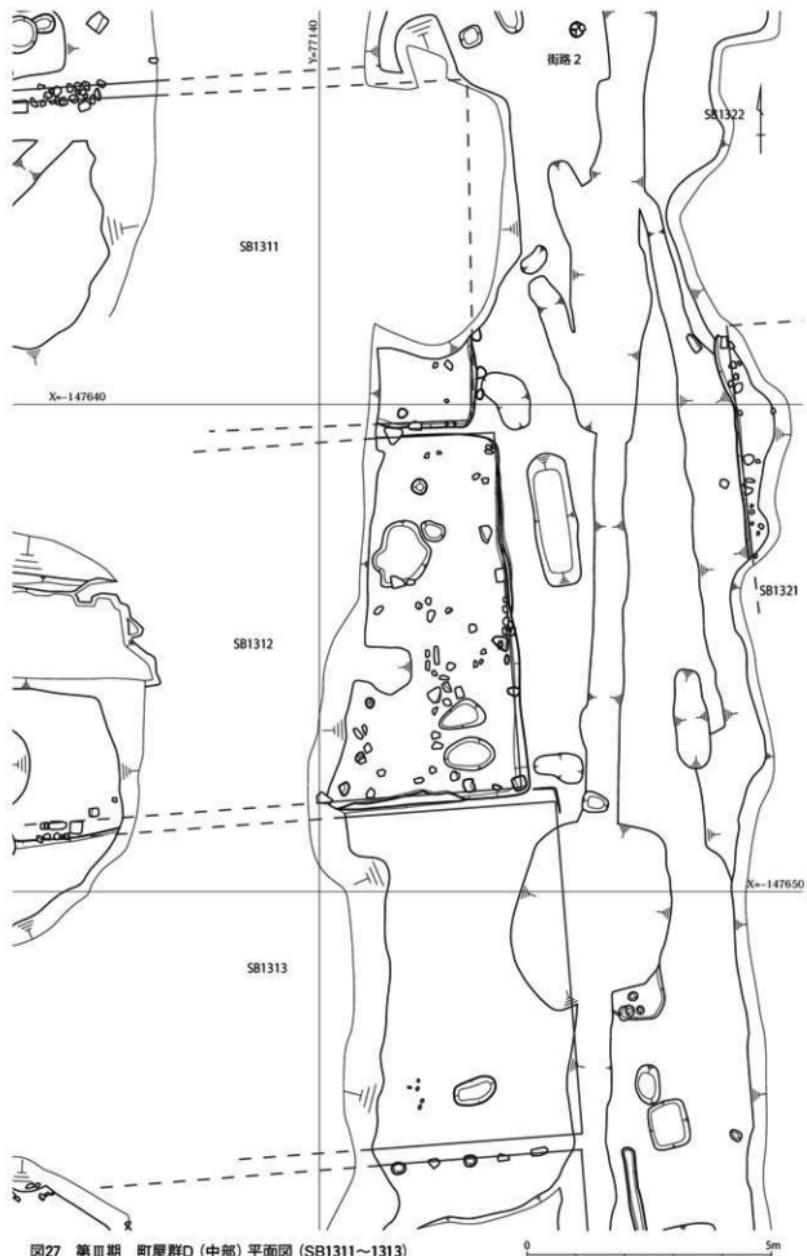


図27 第Ⅲ期 町屋群D(中部) 平面図 (SB1311~1313)

0 5m

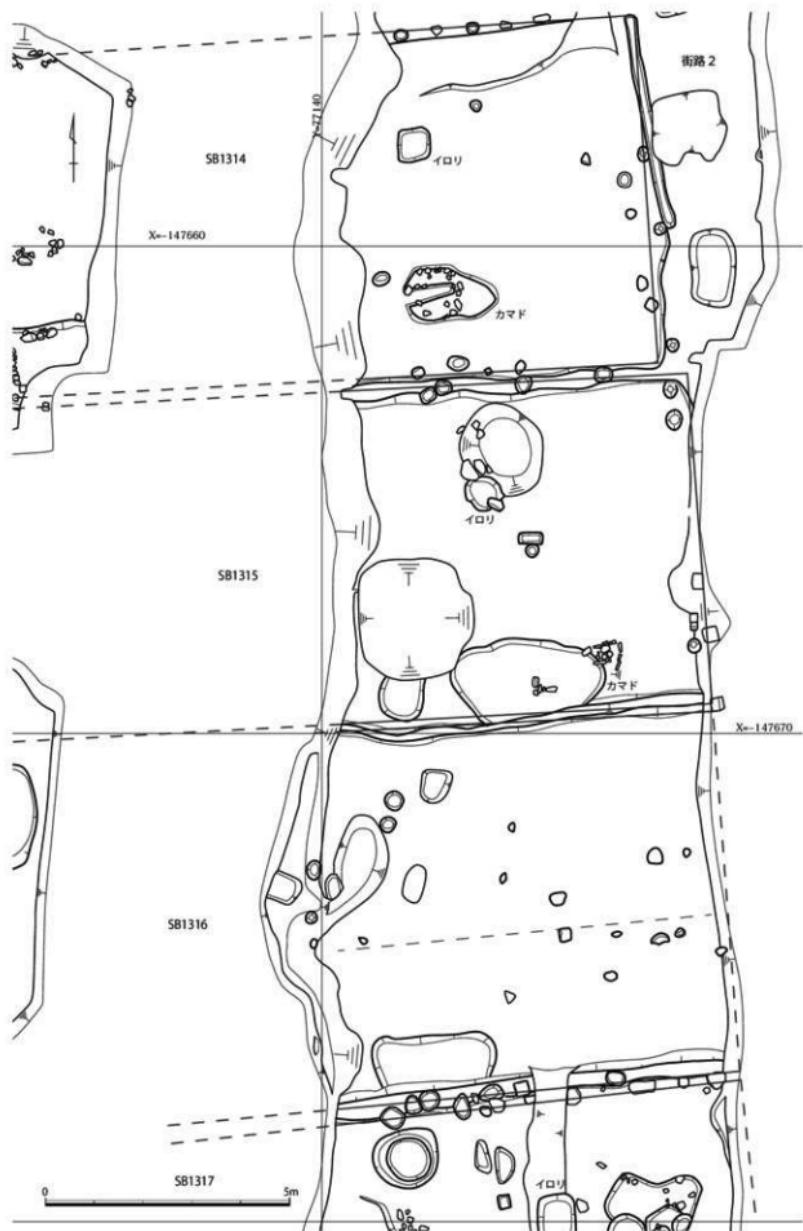


図28 第Ⅲ期 町屋群D(南部) 平面図 (SB1314~1316)

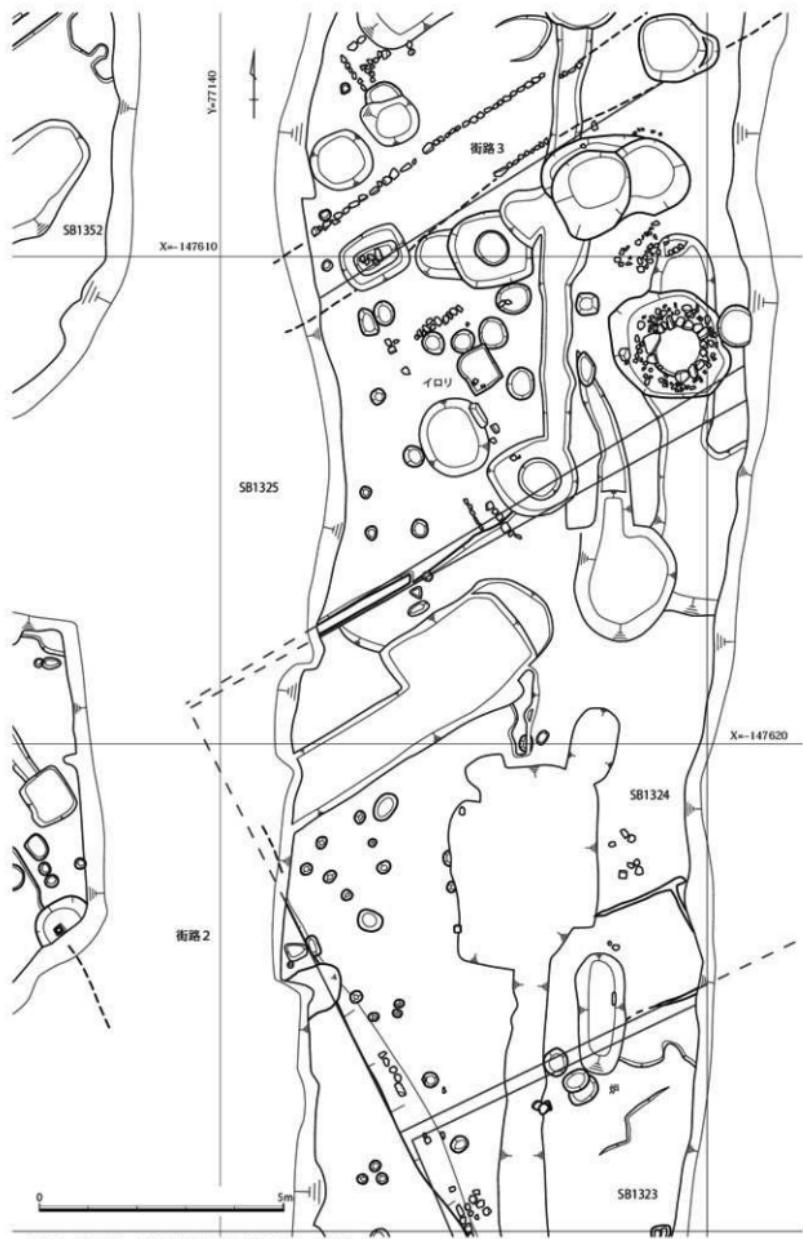


図29 第Ⅲ期 町屋群E平面図 (SB1323~1325)

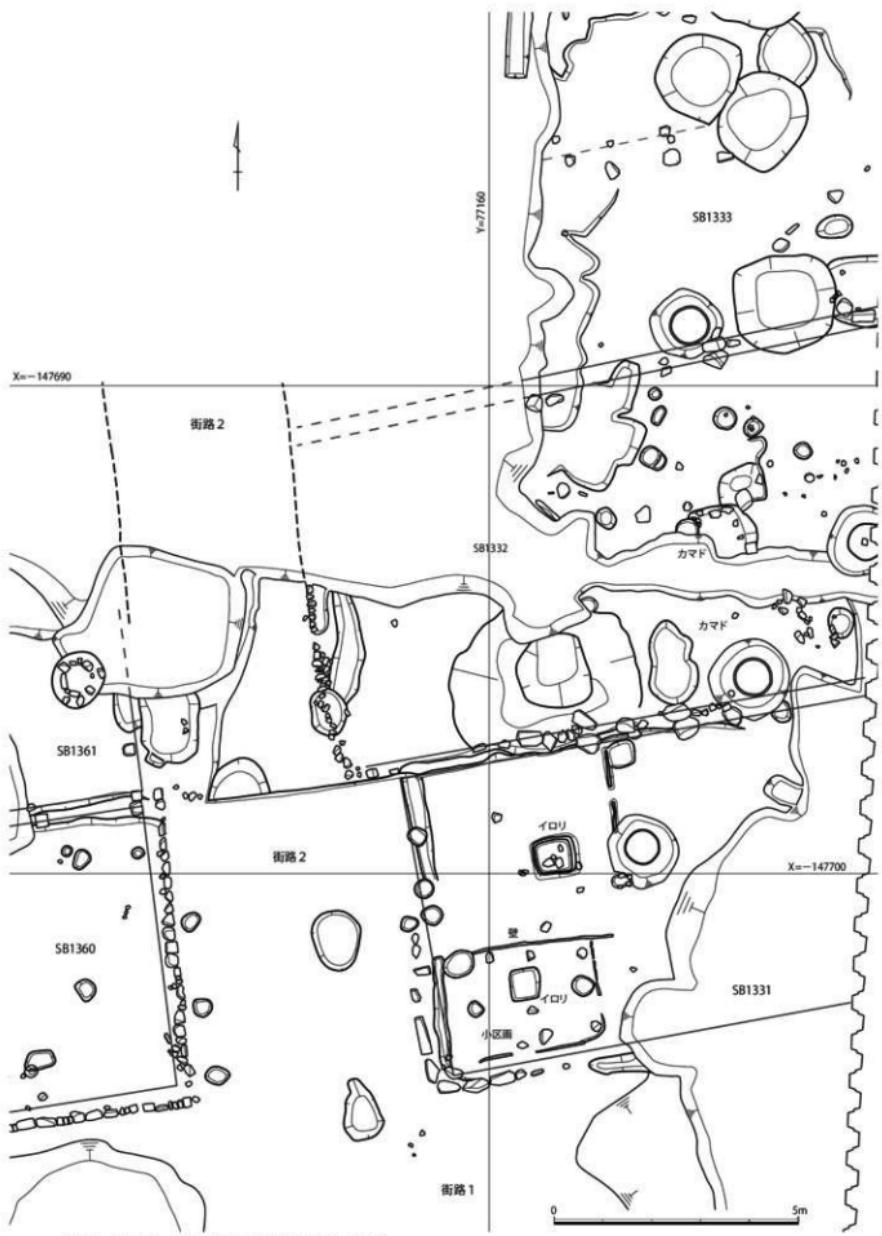


図30 第Ⅲ期 町屋群F平面図 (SB1331~1334)

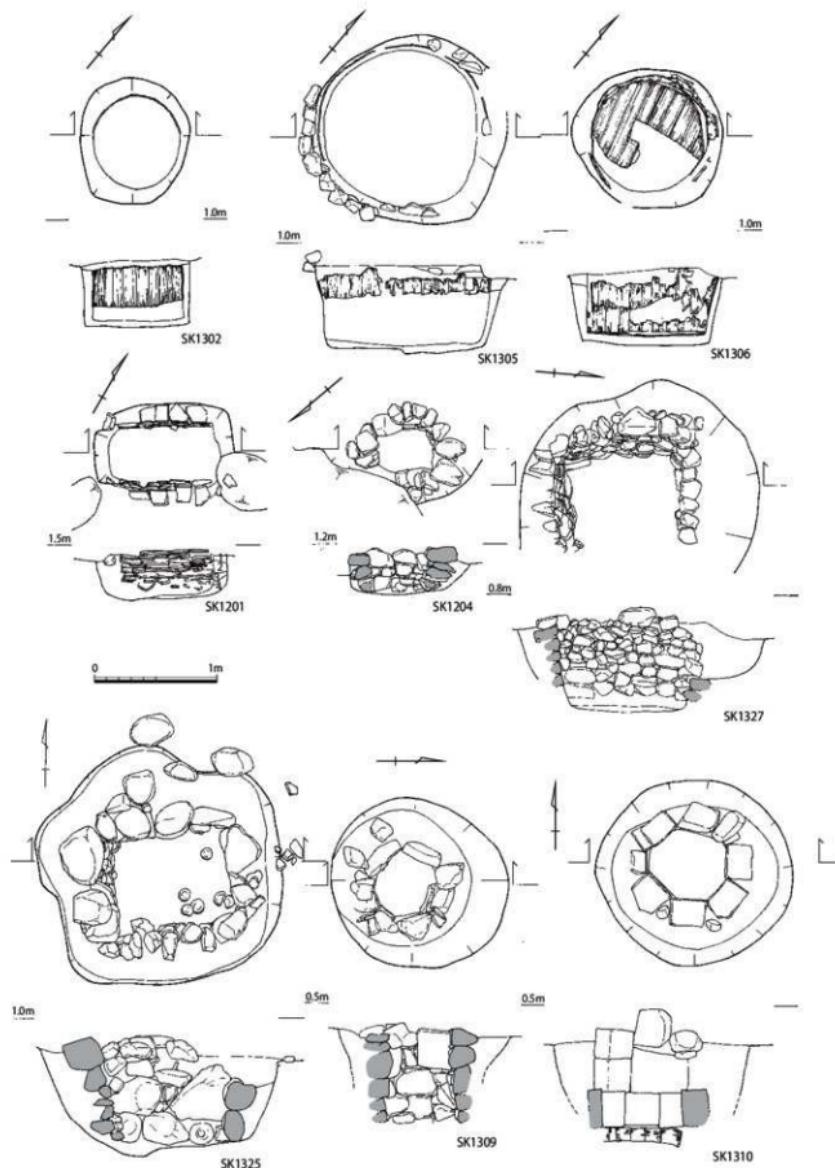


図31 新町地区 第Ⅲ期 遺構平・断面図  
(SK1203・1204・SK1302・1305・1306・1325・1327・SE1309・1310)

西0.9m、南北0.7m以上の方形の平面形をした石組みである。石組みは10~30cmの石を中心として7~8段程度が積まれている。石積みは密であるがとくに面を取るなどの加工は施されていない。底部は素掘りのままである。

SX1301 調査区の東辺の大型石組み遺構SX1304のすぐ西側で検出された石列である。西側に面を持つ2~3段にはほぼ垂直に積まれた石組列が南北方向に長さ約20m確認された。すぐ西側から擾乱によって削平されている。

水帳絵図との照合の結果、この石列が屋地境になっていることが判明した。屋敷地の地盤に段差があった可能性がある。

SE1304 内径0.9mの規模をもつ自然石を利用した石組みの井戸と似た構造をもつ遺構である。石組みが段々と狭まっていき1.2m下の底部には、人頭大の石が敷きつめられている。また、西側の上部に瓦質の管や雁振瓦などを打ち欠いて使用した導水施設が西に向いて取り付く

SX1304 調査区の北東部において、南北7.0m、東西短辺2.7m・長辺4.7mの矩形の大型の石組遺構が検出されている。深さは70cmで底部は、素掘りであるが滯水による粘土層の堆積がみられ、木製品や材などが出土した。木製品には下駄や曲物、箸などがあり、長さ2.8mの大型の船舵の未成品材も出土している。

石組は東西南の3面に築かれており、北側はスロープ状に掘り上げてある。石組みは複数回の積み替えや崩落が認められることから比較的長期間使用されたと考えられる。

水帳絵図との照合の結果SB1325の屋地の裏手にあたる。



写真17 SX1304 遺物出土状況



写真18 SX1304 木製品出土状況



写真19 同上 北壁



写真20 同上 底面と南壁石組

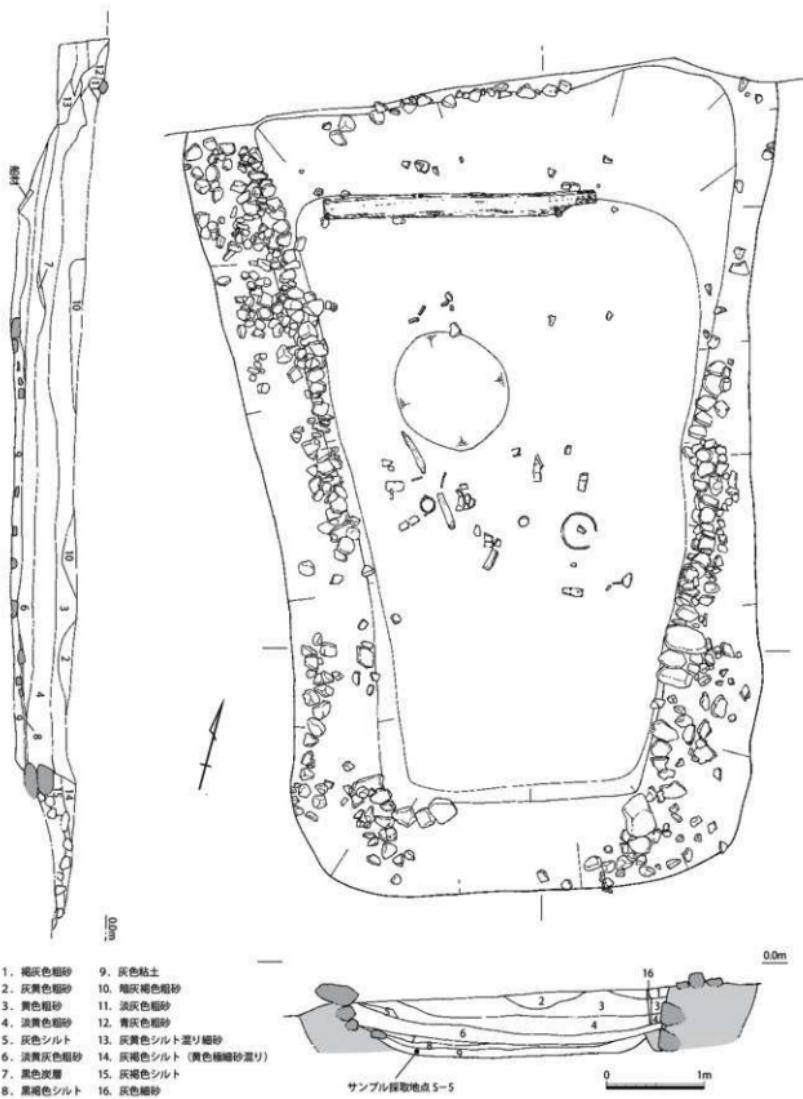


図32 SX1304平・断面図

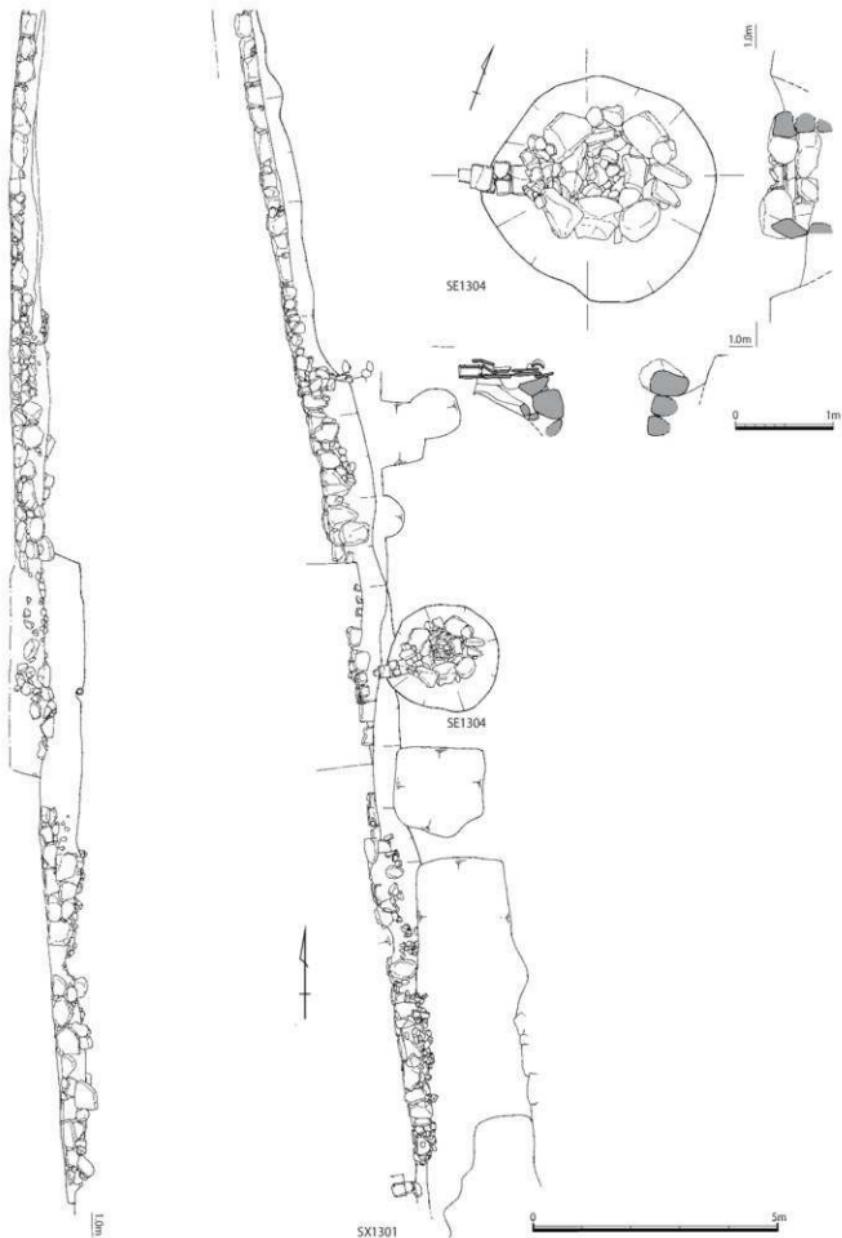


図33 石列SX1301・石組井戸SE1304平・立面図

## 第5節 第III（古）期の遺構

III期に属すると考えられる町屋群のうち町屋建物が建てられていたと考えられる部分については、整地が明瞭に行われていることから、層位的にさらに古い段階の細分が可能であった。ただ出土遺物からの時間幅はあまりみとめられないことから、数～10年前後と考えられる。整地には、砂が多用されるがSB1308・1309・1351の下層では、瓦を敷き込んだ整地層がみられた。

**町屋群** III期の古段階においてもIII期とほとんど同位置で同規模の町屋群が確認された。以下、主な町屋建物についてみる。

**町屋建物** SB1408は、建物の位置は上層とほとんど変わらない。間口部分に壁材との礎石列が良好に残る。五輪塔の転用礎石がみられる。

SB1409も間口部分に壁材との礎石列が良好に残る。SB1408との境に内寸45cm角のイロリが検出された。

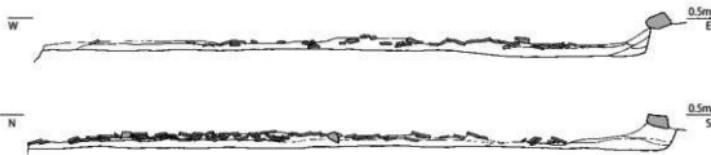


図34 III期町屋群B下瓦整地層断面図

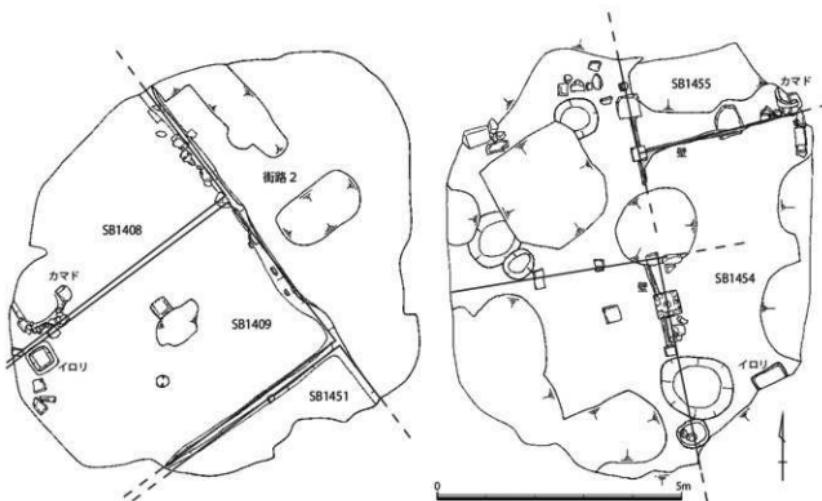
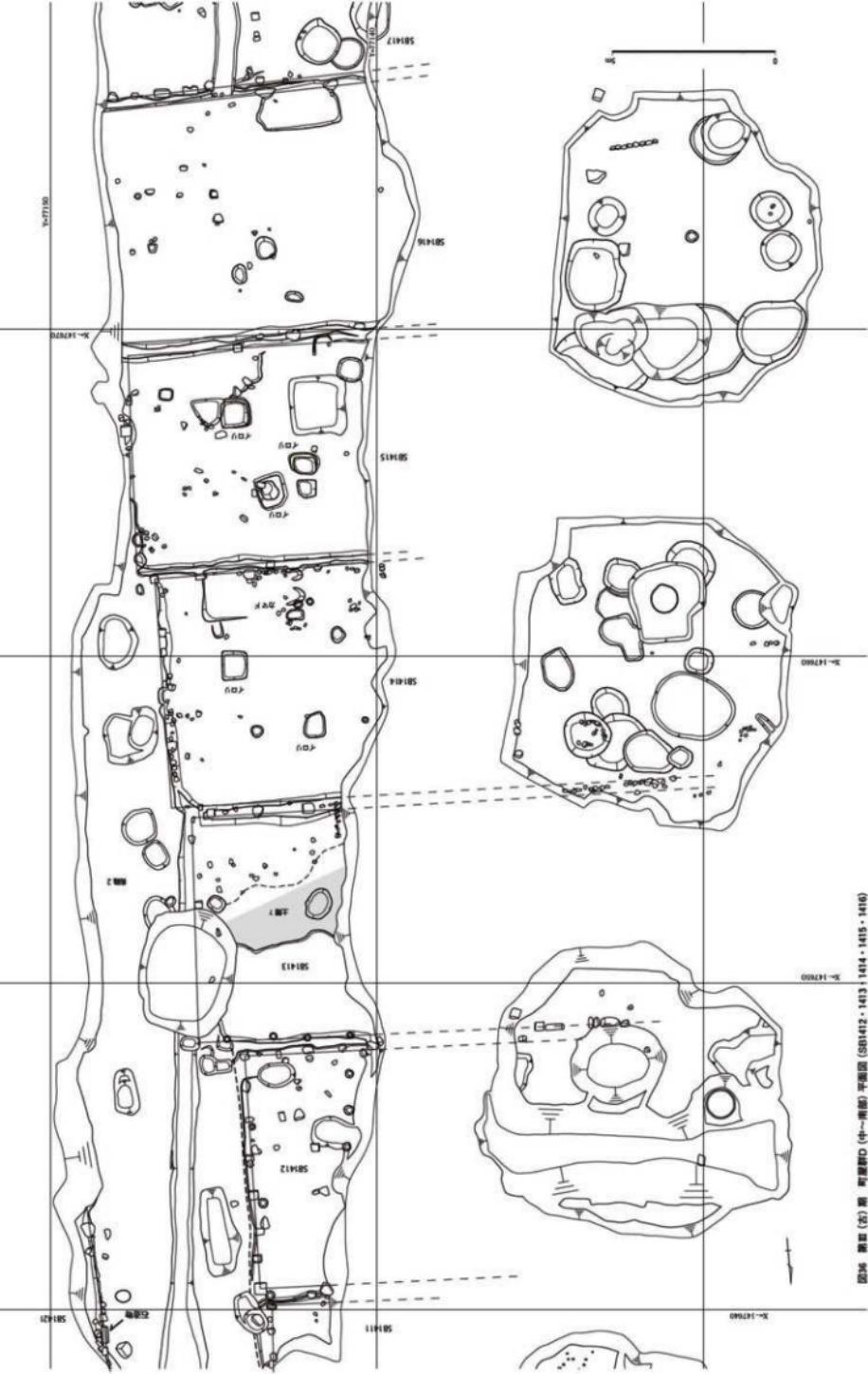


図35 III期（古）町屋群B（SB1408・1409・1451）・町屋群D北部平面図（SB1454・1455）



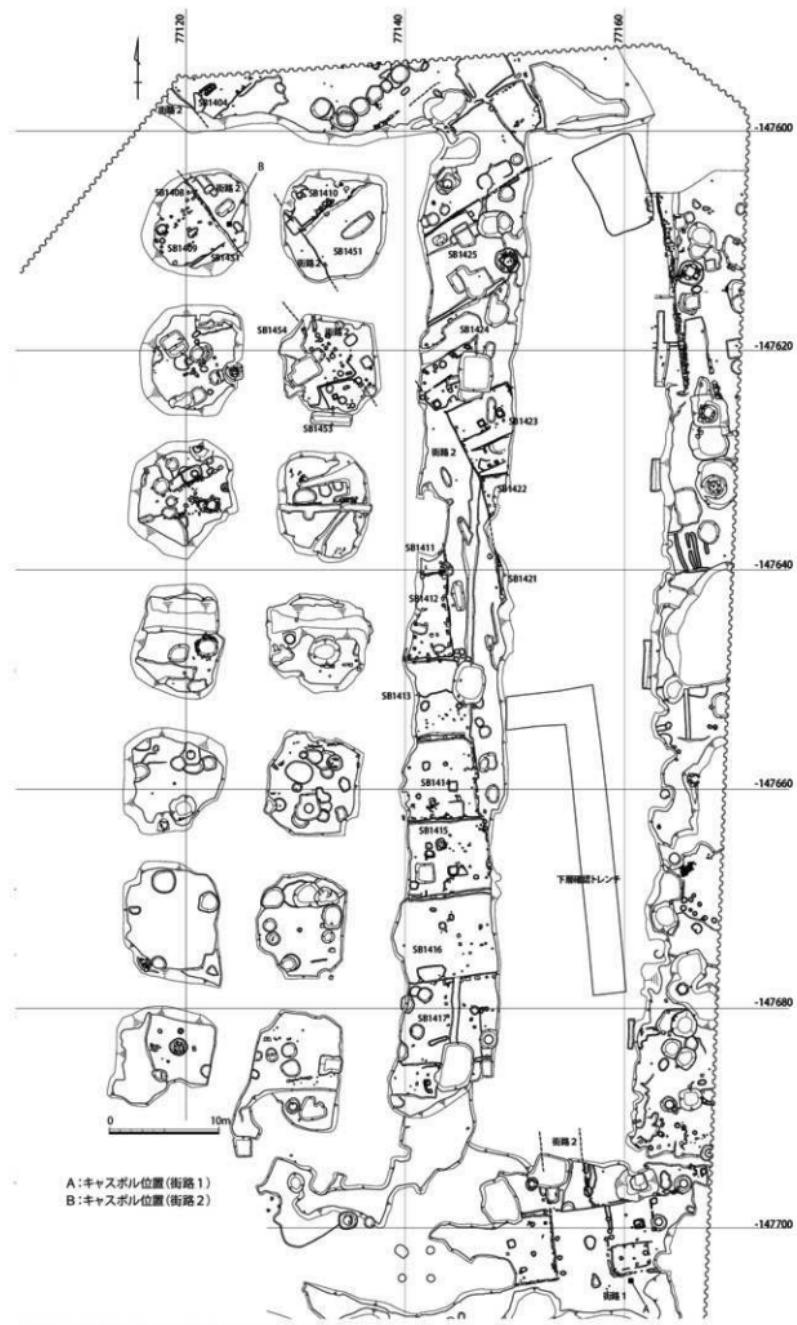


図37 新町地区第III(古)期遺構平面図(1:400)

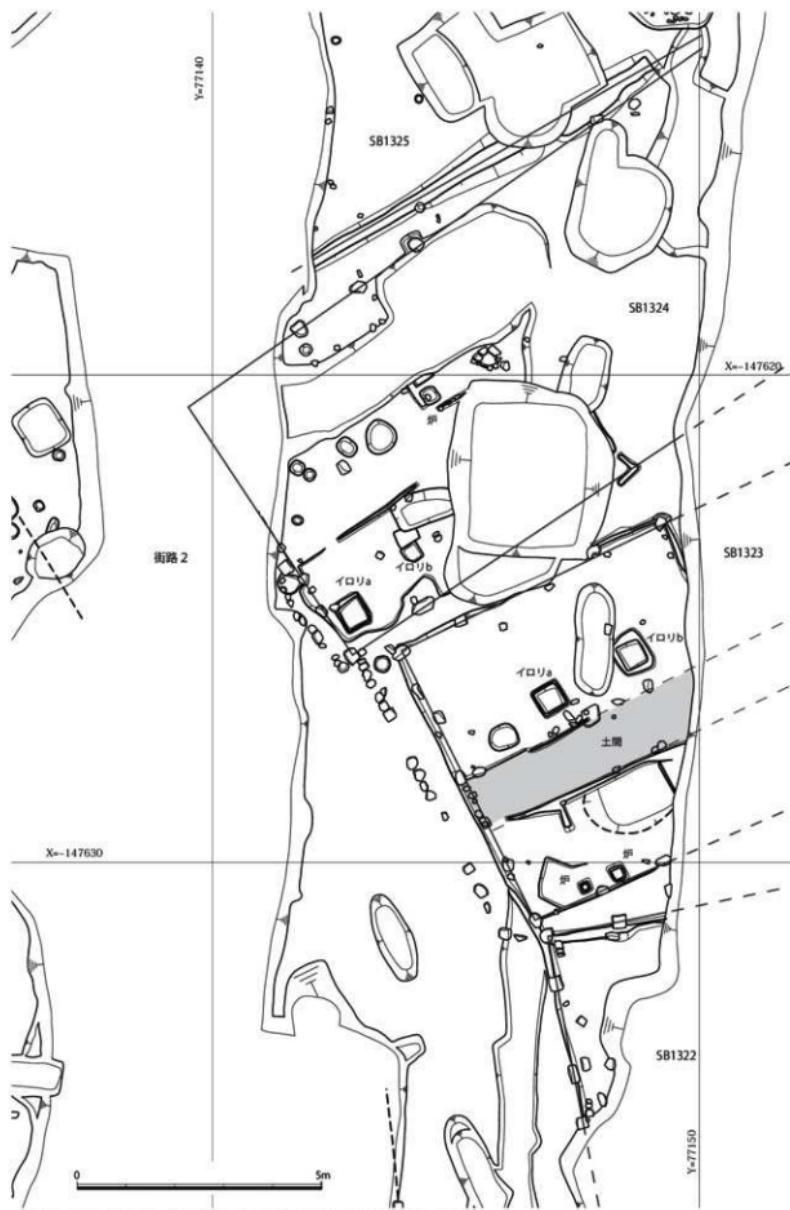


図38 第III(古)期 町屋群E平面図 (SB1422・1423・1424・1425)

SB1412の間口部分には五輪塔の転用石を多用した礎石が1m前後の間隔で並べられ壁材も認められる。中央に東西方向の幅1.2mの通路状の区画がみられる。タタキなどは顯著でないが土間になる可能性がある。この通路の両側の区画には砂が敷かれていて、うち南側の区画には東石と考えられる礎石が1mの間隔で配されている。

SB1413においても、中央部に土間状の粘土の堆積が認められる。この建物も両側の区画への砂の敷き込みと北側に集中する東石がみられる。

SB1414は、間口および南北壁の礎石列が比較的よく残存する。建物の南側に造り替えを伴うカマド、北側にイロリを2基検出した。明確な版築は認められなかったが南側が土間であったと考えられる。SB1415は、間口および南北壁の礎石列が比較的よく残存する。建物の北側に造り替えを伴うイロリが4基、南壁に接してカマドが設けられている。SB1416は、建物の両端を擾乱によって削平されている。南北両壁に壁材が残り、建物内部にも礎石がみられる。SB1417は削平のため規模は不明である。SB1416・1417の敷地の奥には別の建物SB1463・1464を確認している。

SB1421は、削平のため北西隅部分のみが検出された。街路2に取り付く間口部分に文字の刻まれた転用礎石がみられた。

SB1422は、建物の北西隅周辺のみを残す。街路2が西に緩くカーブする箇所にあたるため隣接するSB1423とのあいだに3角の隙間を設けている。

SB1423は、間口6.2m、奥行6.5m以上を測り、礎石や壁材を良く残す。北側の区画にはイロリを2基、南側の区画には小型の炉がみられる。SB1412・1413同様に中央に土間をもつ町屋建物と考えられる。

SB1424は、間口7.2m、奥行6.5m以上を測る。建物内部の擾乱のため区画が明確ではないが、中央部にカマドが確認されていることから、この建物についても中央に土間をもつ可能性がある。

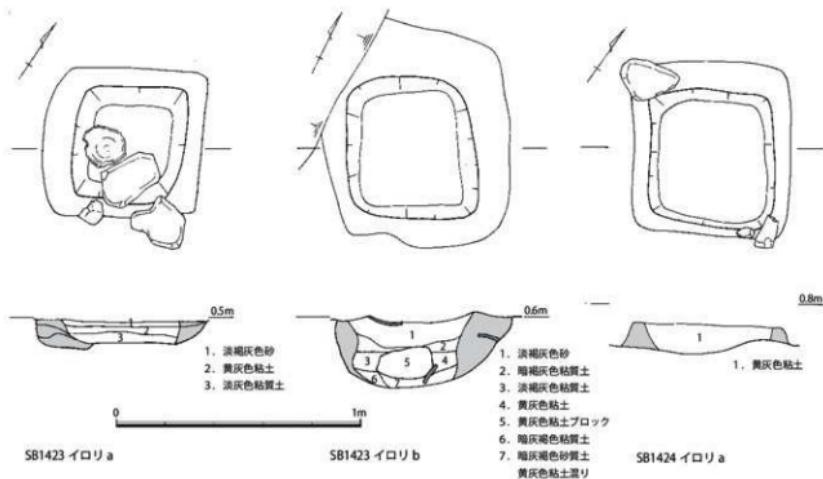


図39 SB1423・1424内 イロリ 平・断面図

## 第6節 下層確認トレンチ

調査区の中央部分において、築城期およびそれ以前の遺構面の状況を確認するために下層についてトレンチを設定して調査を実施した。

第IV期に対応すると考えられる街路遺構および町屋遺構を確認した。町屋の屋地割りや建物の方向は上面で確認されたものに揃うが、街路の位置については、東方向にずれたかたちで検出されている。

街路 街路2の古い段階と考えられる南北方向の街路である。トレンチの北端で検出されているⅢ期の街路2と比べると東側面が約5m東にずれていることがわかった。

街路の造成土はこの街路に被っていることからこの遺構面の廃絶後に嵩上げされた際に、全体に西寄りに付け替えられたようである。

町屋建物 街路の東側に取り付く町屋建物をトレンチ南部で3棟(SB1481～1483)、北部で2棟(SB1484・SB1485)検出した。

SB1481はトレンチ北端で検出された町屋建物で間口3.0m以上、奥行1.0m以上を測る。間口側の壁材が一部残存する。

SB1482は、SB1481の北に隣接する町屋建物で間口が4.6m、奥行1.4m以上を測る。間口側と南壁側には、壁材および礎石列が残る。南壁側より2.0mほどに土間・床境と思われる東西方向の礎石列がみられる。また礎石には、一部五輪塔の転用が認められる。

SB1403は、SB1482の北に隣接する町屋建物で間口5.0m、奥行2.0m以上を測る。他の2棟ほど顕著ではないが、間口側および南北壁の壁材の痕跡が認められる。

SB1484は、SB1483とSB1485の間に存在する町屋建物である。礎石列と方形の浅い掘り込み跡(整形)が認められた。

SB1485は、トレンチの北端で検出された町屋建物で間口1.0m以上、奥行2.2m以上を測る。南壁側に礎石列が残る。この礎石にも、一部五輪塔の転用が認められる。

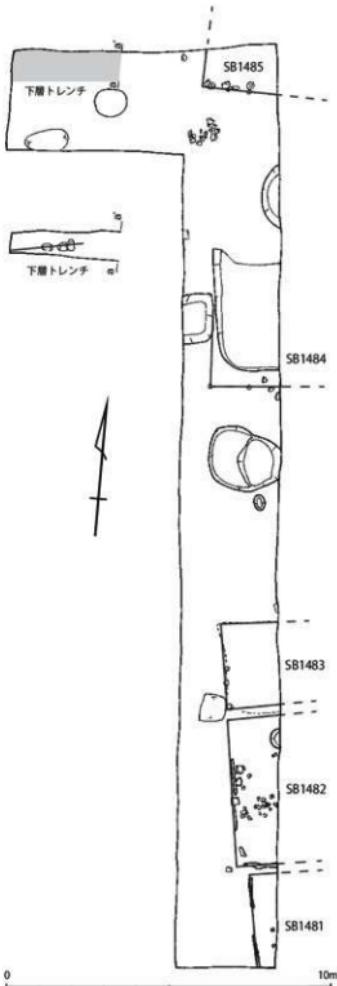


図40 下層確認トレンチ遺構平面

## 第4章 関屋町地区の調査

### 第1節 遺構面

元禄絵図に描かれた陣屋正面に通じる街路より南の地区が関屋町にあたる。調査区においては、南側の幅90~170m、長さ390mの東西に長い部分にあたる。

調査区の東部においては、新町地区と同様に調査区の東辺沿の4~8mほどの部分が旧建物による損壊を免れており遺構面が良く残っていた。それ以外は全体に削平が激しく、新しい時期の遺構は井戸や石組遺構のどが残る程度である。中部でもやや削平が浅い部分には焼土層がみられる。焼土層は、火災により発生した焼土塊を多量に含んでおり火災直後の整地層と考えられる。この焼土層の下には、火災により焼失した建物の建築材などの炭化物層が存在する。

調査区中央部で砂利層の基盤がやや高まり西側へ向けて緩く落ち込んでいくため、中央部、西部において遺構面の様相がやや異なる。ここでは、湿地状の堆積が認められ、室町時代後期の遺構が検出された。

### 第2節 第Ⅰ期 検出遺構

調査区の東辺沿いの部分を中心に遺構が確認された。主な検出遺構は、町屋建物に伴うと考えられるカマド、石組遺構、井戸などである。

**町屋建物** 新町地区と同様にこの時期の明確な町屋建物は検出されなかった。屋地割りを踏襲した方向に並ぶピット群が調査区の北西隅部分を中心に検出されている。この他、カマド(イロリ)とみられる遺構が点在していることから、この時期においても町屋建物が群として存在していたものと考えられる。

石組遺構は、SK2101は、内寸1.7×1.2m以上の自然石を3段ほど積む石組遺構である。

SK2102は、内法0.7×1.5m以上の長方形の石組遺構である。自然石の平らな面を利用して内面を四角く整えている。底部は素掘りのままである。西側を擾乱により削平される。

SK2107は、内径0.6m前後、深さ50cmの円形の石組遺構である。西側を方形の土坑によって削平されている。

SK2108は、内径0.3m、深さ50cmを測る小型の石組遺構である。

**埋甕遺構** 数か所で確認された。正置される遺構とSK2105のように逆さに据えられる遺構がある。逆さに伏せたものは、排水施設と考えられる。

SK2106は、甕の下半部を埋め込んで上部に石組を施した遺構である。

### 第3節 第Ⅱ期 検出遺構

I期同様に、削平を受けておりこの時期の遺構が面的に存在しているのは、調査区の中央部から東辺部にかけての部分である。

主な検出遺構は街路、町屋建物およびこれに伴う井戸石組遺構、土坑などである。

**街路** 調査区を東西方向に通る街路3本と南北方向の街路2本を検出した。街路4は、街路5から丁時状に西に東西方向の街路で、幅3.0~3.8mで長さ約50mが検出された。あとの2本は断片的に痕跡が確認された。

南北方向の街路は、大半が調査区の東外側で従前の建物による掘削が深く調査対象地外とされた部分にかかり西側の縁のみが検出された。

街路の構造は、新町地区的街路同様、砂や粘土、砂利などを数cm単位で積み重ねて敲き

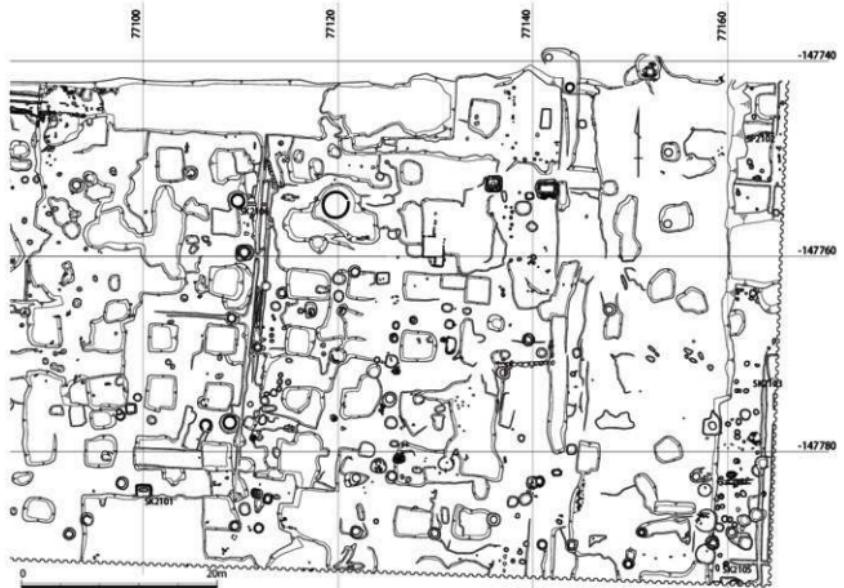
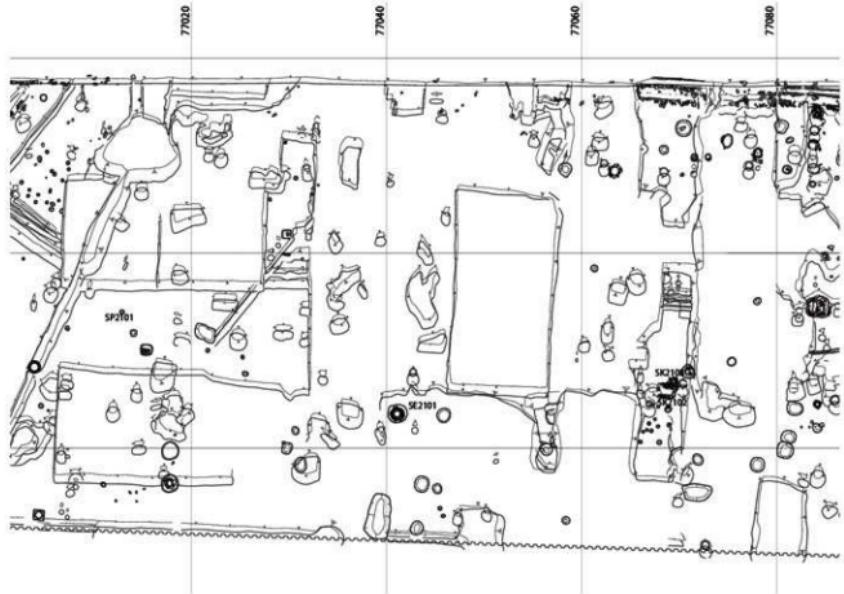


図41 間屋町地区 東部 第Ⅰ期 造構面平面図(1:500)

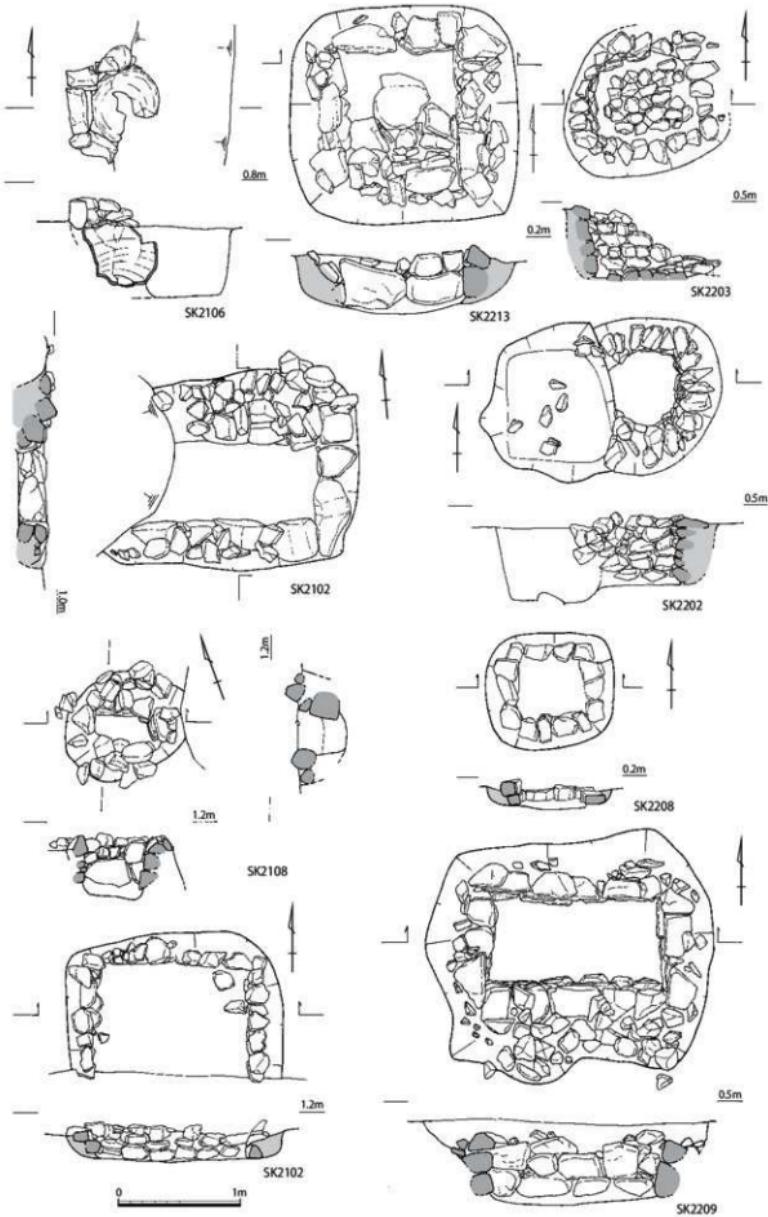


図42 閑屋町地区 東～中央部第I・II期 造構面平・断面図  
(SK2101・2102・2106・2107・2108・SK2201・2203・2208・2209・2213)

締める版築構造をとっている。

**町屋建物** 調査区の東辺部において4棟分と考えられる町屋建物を検出した。これ以外にも明確な建物が検出されなかった中央部においてもカマド（イロリ）とみられる遺構が点在していることから町屋建物が存在していたものと考えられる。

SB2244～2247については東側の街路4に取り付く町屋建物である。礎石列や壁の残痕は認められるもののカマドやイロリなど内部の施設は確認できなかった。

**石組遺構** SK2203は、内径0.9m、深さ50cmの石組遺構である。小型の石を積み上げており、底部にも敷石を施す。

SK2208は、内法1.0m四方、深さ40cmの石組遺構である。SK2209は、内法0.7×1.4m、深さ50cmの長方形の石組遺構である。大振りの自然石を2～3段積み上げている。他に石組遺構としてはSK2202・2213などがある。

#### 第4節 第Ⅲ期 検出遺構

基本的には、調査区の東から中央部にかけて良好な焼土層が広がりその直下より検出される。短期間のうちに2～3回の建て替えや嵩上げが認められる。

街路遺構 II期で検出した街路4・5を踏襲する部分に同規模の街路が確認された。

**町屋群** 街路5の西に取り付く町屋群が街路4に区切られるかたちで2群と街路4の南北両側に取り付く町屋群が2群が確認され20棟以上の町屋建物が検出された。

**町屋建物** SB2201は、調査区の中央で街路4の北側に取り付く町屋群（SB2301～SB2303）の一番東の町屋建物である。南北に細長く間口は4.8m、奥行は6.4mを測る。礎石の残存は少ない。SB2302は、SB2301の西隣の町屋建物で間口4.8m、奥行7.8mの規模をもつ。土間の前方に西壁に接するように中ほどに2～3連の焚口をもつカマドが、また西側の床貼り部分には内寸50cm四方のイロリの遺構がある。

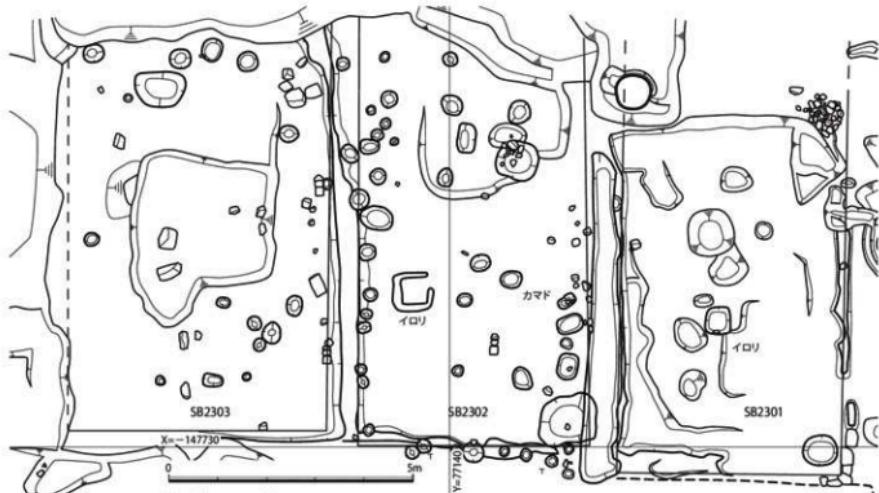


図43 第Ⅲ期 町屋群G 平面図 (SB2201・2202・2203)

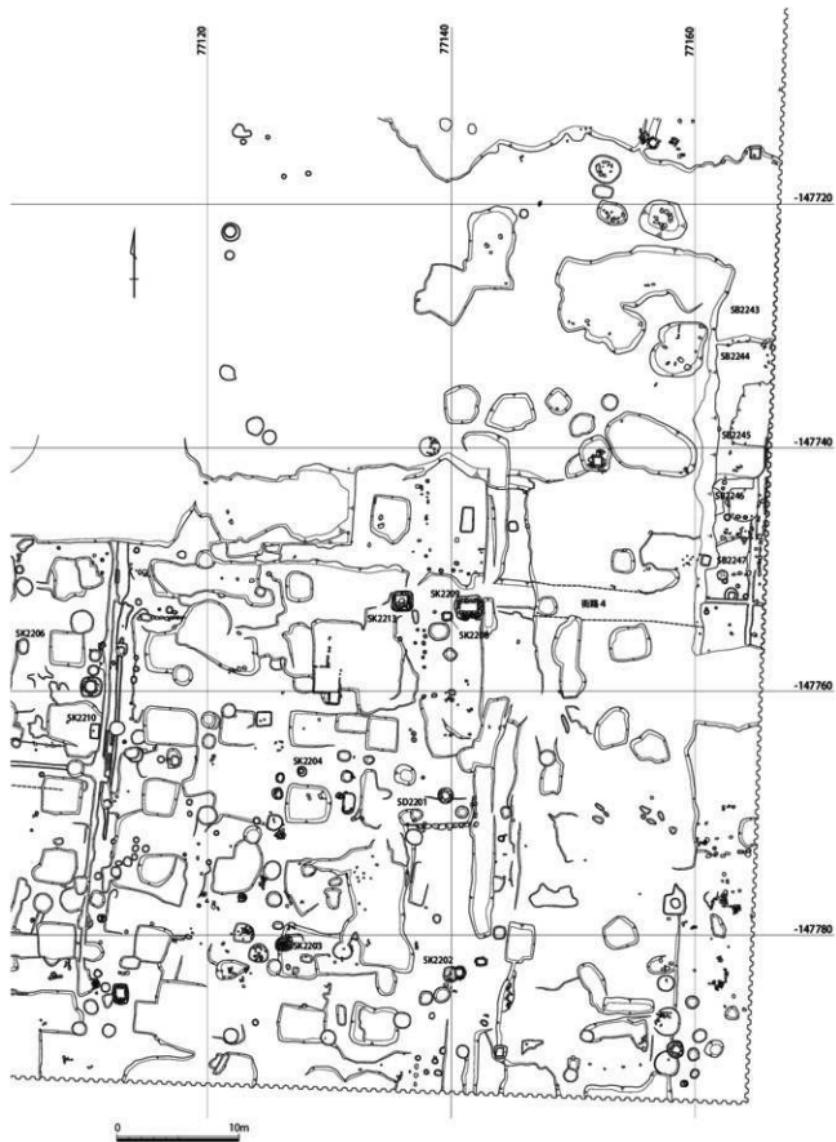


図44 関屋町地区 第Ⅱ期(中～東部) 造構平面図(1:400)

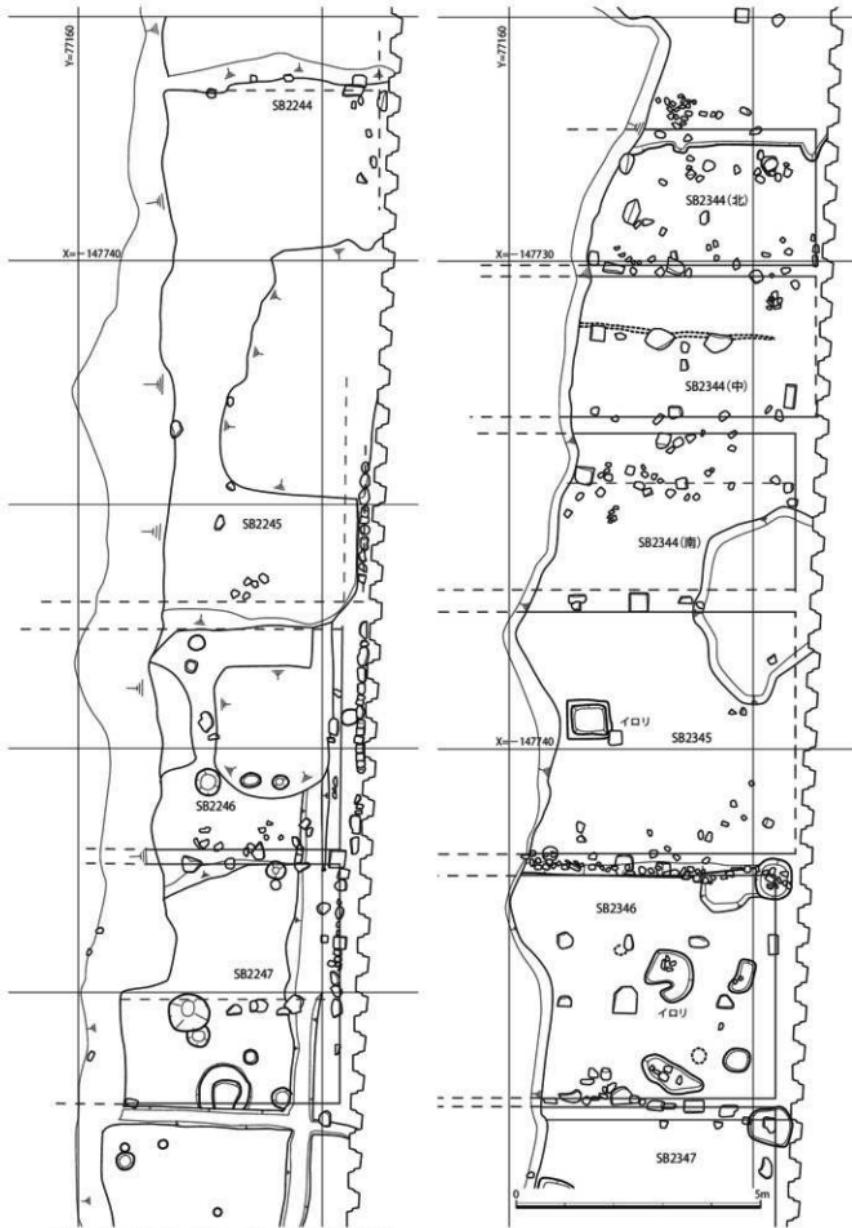


図45 関屋町地区 第II・III期 町屋群 平面図

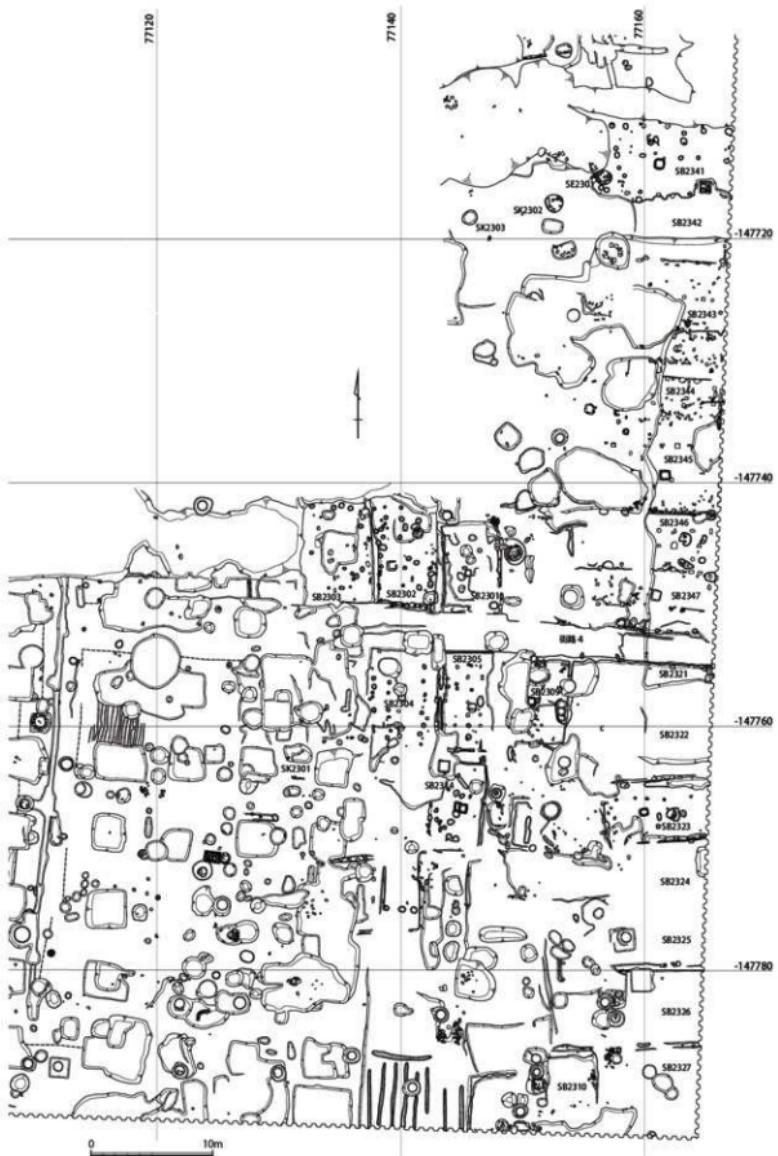


図46 間屋町地区東部 第Ⅲ期遺構平面図 (1 : 400)

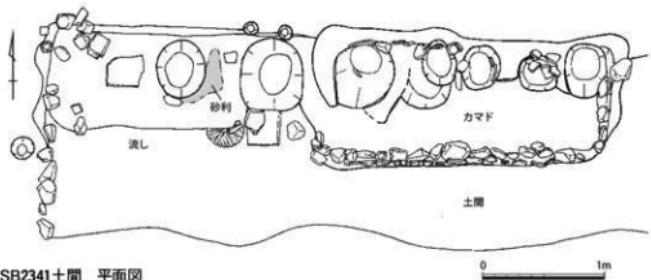


図47 SB2341土間 平面図

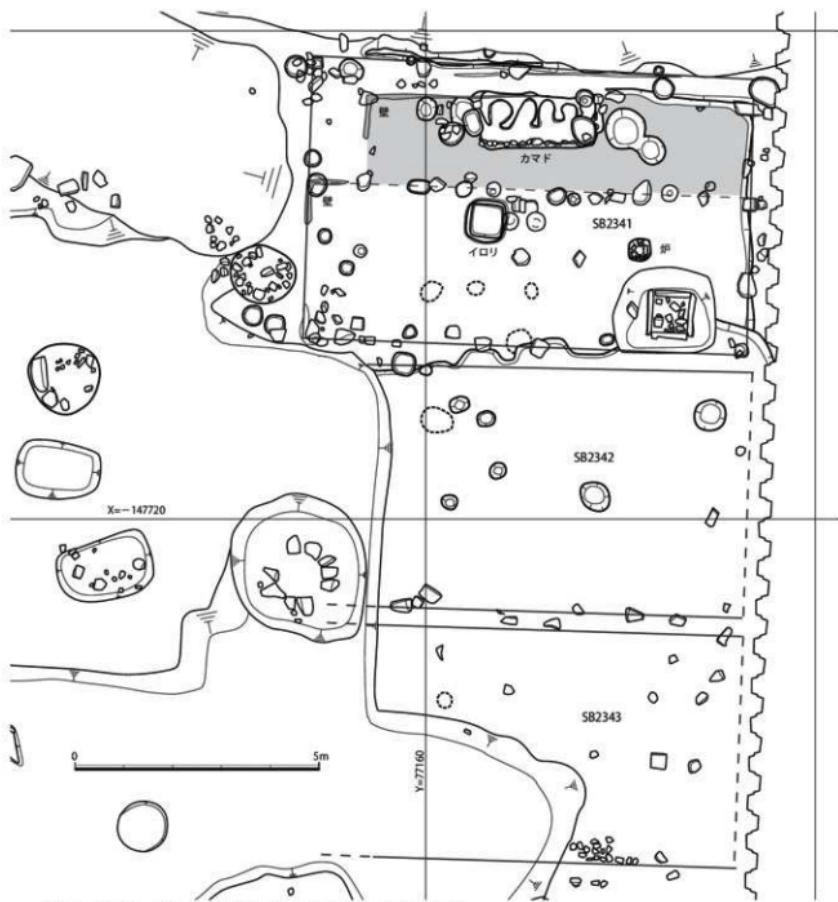


図48 第三期 町屋群(北部) 平面図 (SB2341・2342・2343)

この2棟においては、良好な焼土層の堆積がみられ、壁材に使われた木舞が街路に倒れて炭化した状態で出土した。また屋内では硯石などが文箱に入れられた状態で炭化した様子も観察された。

SB2203は、5.8m以上、奥行8.0mの規模をもつ町屋建物である。

SB2341は、北側に土間を持ち、南側を床貼りとする構造をもつ町屋で、間口5.0m、奥行9.2m以上の規模である。土間には南壁に接して瓦片を並べた区画を設けて5連の焚口をもつカマドが造り付けられている。さらに西側にならんで集石を施す流しと考えられる施設が確認された。またこれらを囲う北および西の間仕切壁では、コマイが5~50cm間隔で組まれた痕が明瞭に残る。また、床貼部分では中央部の土間・床境に内寸40cm四方のイロリが検出された。縁を漆喰状の粘土で造られ、底には瓦片を貼り付けている。

SB2342~SB2343にかけては、東壁より3~5mで旧建物による削平を受けている。

間口部分の前面に街路5との境とみられる列石が確認された。列石には一石五輪塔などの転用石造物が使用されている。

SB2344は、さらに古い段階では規模の大きい1棟の建物のようであるが、この時期より江戸時代後期の水帳絵図に見られるように北、中、南の三棟に分かれるようである。

SB2345は、中軸のすぐ北にイロリをもつ。こちら側が床貼りの部屋になるようである。

SB2346では、中央部でイロリ、南側でカマド状の焼土溜りが確認された。

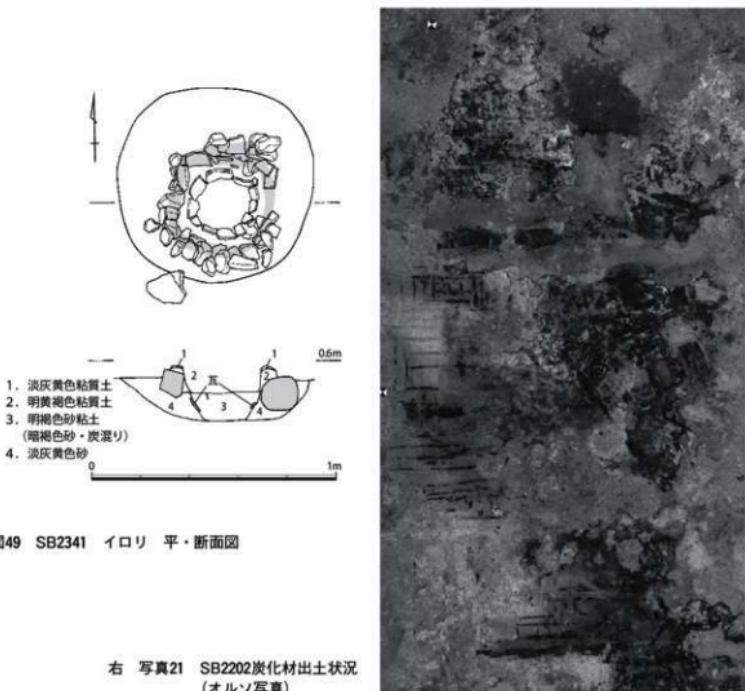


図49 SB2341 イロリ 平・断面図

右 写真21 SB2202炭化材出土状況  
(オルソ写真)

## 第5節 第Ⅲ期（古） 検出遺構

Ⅲ期とした遺構面から20~50cm下層では、東部から中央部にかけての広い削平が取まるために町屋群が比較的良好に確認できた。町屋建物については、補修や建替え以上に建物の様相の変化が認められるためⅢ期（古）と時期区分した。ただ新町地区同様出土遺物から時期差は少ないものと考えられる。

町屋建物 SB2401~42403については、位置、規模ともにⅢ期と同様である。SB2401は、建物の北東隅に3連の焚口をもつカマドが南壁に接して設けられる。東西と北の壁材と思われる粘土が良く残る。うち北壁に2列の石列が認められる。他の部分では礎石の残りは悪い。さらに西に町屋建物SB2411・2412が並ぶが削平のため詳細は不明である。

SB2402は、建物の中軸で壁による区画が確認された。土間と床貼りが分けられているようである。西側で東石となるような礎石が散在する。また東側の半分に数ヶ所カマドの痕跡がみられる。

なお、SB2401とSB2403の間は60cmほどの隙間がみられる。断面凹型に固く踏みしめられたような痕跡もあり、通路などとして使用されていた可能性がある。

SB2403は、東壁の礎石、北壁沿いに礎石の抜き取り穴が残る。建物の南東隅に2~3回造り替えが行われたカマドをもつ。

SB2404・2405・2409は、街路4の南に3棟並んで取り付く町屋建物である。SB2404は、間口が5.4m、奥行6.5mで中央部に内寸50cmほどのイロリを設けている。礎石はほとんど抜き取られている。粘土状の土による東壁の痕跡がみられた。

SB2405は、間口が5.4m、奥行8.0mで中央部に内寸60cmのイロリを設けている。東壁が上層に存在した町屋建物のカマドなどの掘り込みによって搅乱されている。

SB2409は、間口が4.3m、奥行7.0mで中央部に内寸55cmのイロリを設けている。また東壁に接して3連の焚口を西に向けるカマドを設ける。

さらにSB2405の南には幅0.9mほどの通路を挟んで間口4.2m、奥行7.0m以上の町屋建物SB2414が存在する。

SB2441は、Ⅲ期と同様の規模で、北側に土間、南側に床貼りと平面配置も同じである。カマドの位置もほとんど変化は無いが周囲の区画は無くなり少し大振りの3連のカマドが南壁に向かって造り付けられている。

SB2442は、間口が5.2m、奥行10.0m以上を測る。間口部分に15~30cmの大きさの石列を検出した。街路との縁石もしくは間口の礎石列になると思われる。南壁から1.8mで土間・床境と思われる礎石の抜き取り穴の列が見られるが土間特有のタタキなどは認められない。南壁に接して北と西に焚口をもつ2基のカマドが確認された。また中央の土間境に内寸70cmのイロリを設けている。

SB2443は、間口が5.0m、奥行10.5mで北西寄りに内寸50cmのイロリを設けている。礎石、抜き取り穴が一部残る程度である。

SB2444は、間口が9.4m、奥行9.0m以上の規模をもつ町屋建物である。南側3.4mが壁で区切られており、その中ほどには内寸40cmの炉を設けている。礎石には、大型の五輪塔の転用石が見られる。

SB2445は、間口が5.2m、奥行6.0m以上で、タタキなどの痕跡は認められなかったものの南側にカマドの造り替えが集中していることから土間になっていたと考えられる。中央部

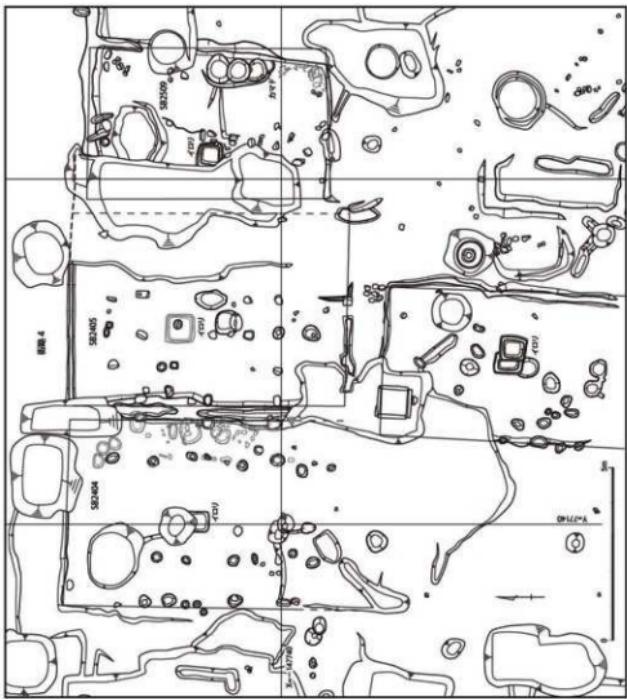
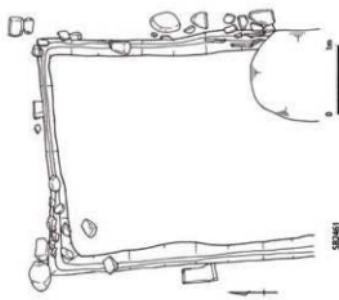
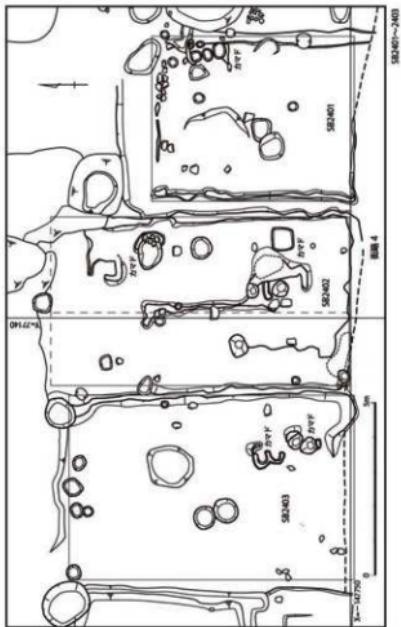


图50 梅园村(古) 阿婆殿 G·H 平面图 (SE2401—2405·2409·2414·SE2401 平面图)

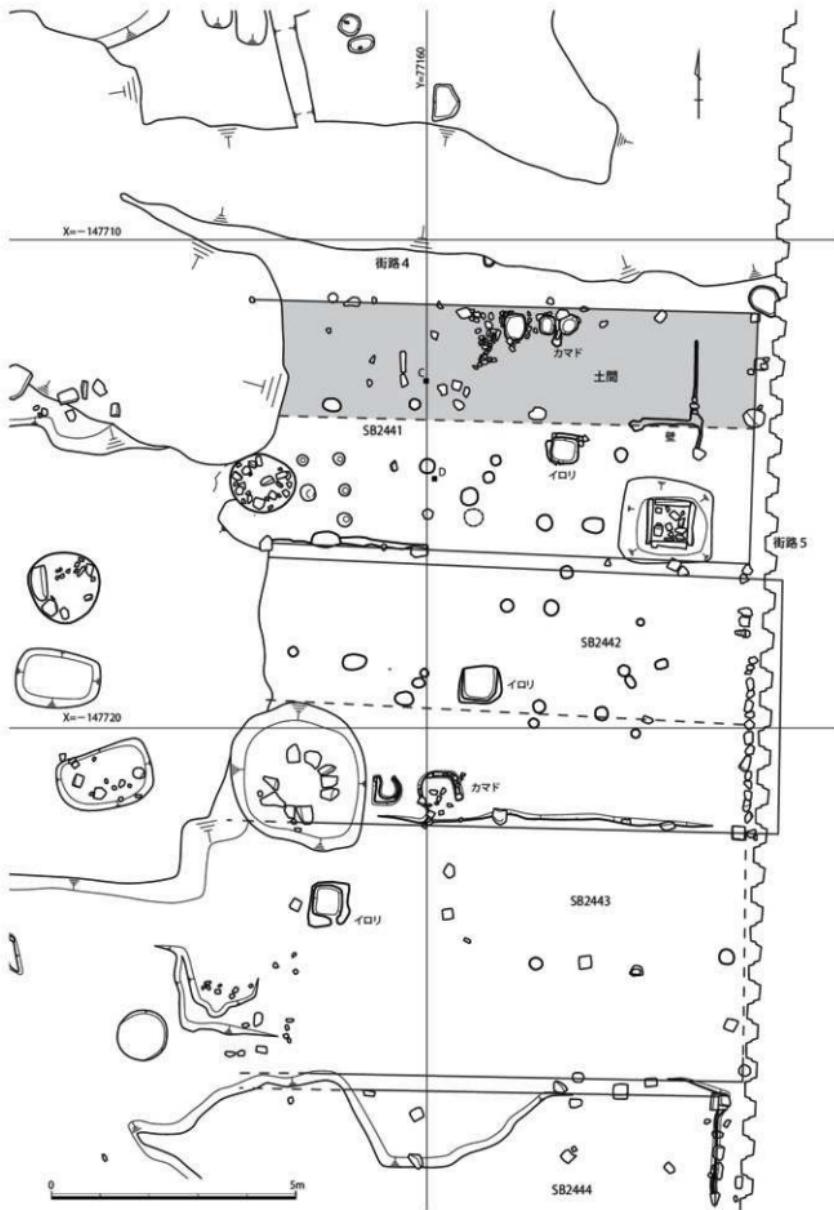


図51 第三期(古) 町屋群I(北部) 平面図

C : キャスボル位置 (SB2441土間)  
D : キャスボル位置 (SB2441床)

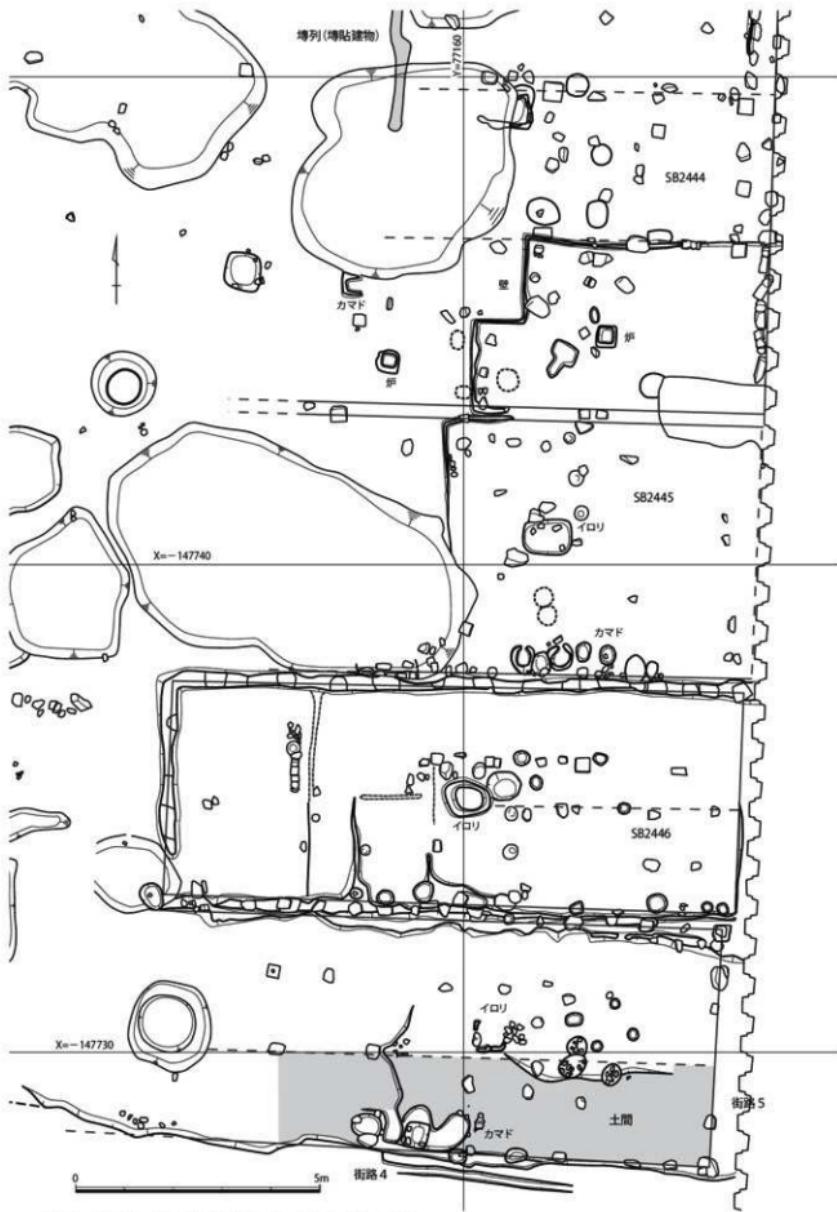


図52 第Ⅲ期 町屋群I(南部) 平面図 (SB2444~2447)

に内寸 $100 \times 70$ cmのイロリを設けている。

SB2446は、間口が4.8m、奥行11.8mで、北および西の粘土層を重ねた土台状の壁が顯著である。西壁から3mほどで南北方向の仕切りがみられる。また中央部に内寸 $60 \times 70$ cmのイロリを設けている。

SB2447は、間口が4.8m、奥行9.0m以上で南壁は街路4と接している。また北壁には、50～75cm間隔で礎石を配している。南側に幅1.6mの土間があり、北側に床貼りの部屋を配している。中央部の土間境に内寸60cmのイロリを設けている。

SB2451は、SB2444の裏にあたる西側に位置する建物である。建物の東面に1段の埠貼りが確認された。他の面については、断割りトレンチを設定したが確認されなかった。また礎石なども少なく建物の規模は、不明である。埠は $25.6 \times 20.4$ cmで埠列は建物の中ほどで凸型に折れることがら出入り口となる可能性がある。

SB2421は、街路5の西側に取り付く街路4に北壁を接する町屋建物である。間口4.7m、奥行7.5m以上で間口側に礎石の一部、北南壁側に壁材が認められる。

SB2422は、SB2421の南に隣接する間口4.5m、奥行9.0m以上の町屋建物である。南側に幅1.2mの土間が認められ、南壁に接してカマドの痕跡がみられる。

SB2423は、間口が4.8m、奥行8.5m以上の規模をもつ町屋建物である。南側に幅2.0mの土間があり、北側に床貼りの部屋を配している。やや後ろ寄りの土間境には、内寸 $55 \times 70$ cmのイロリを設けている。また南壁に接して2連以上の焚口を持つカマドの痕跡がみられる。南壁の遺存状況は良好でコマイなどが塗り込められた状況が観察できたため切取り保存を実施した。

SB2424は、間口が5.4m、奥行6.0m以上の規模をもつ町屋建物である。建物中央の前寄りの部分に内寸60cmのイロリがあるほか周辺にやや小型の炉状の施設をもつ。南壁に接して3連以上の焚口を持つカマドをもつ。

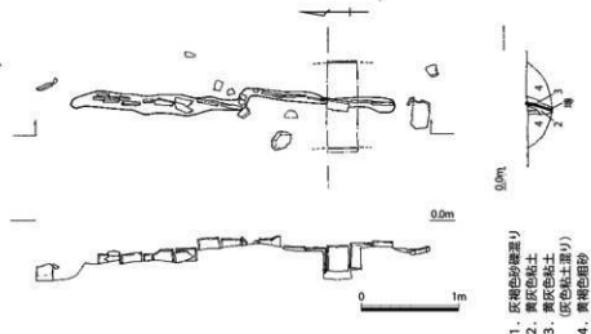


図53 SB2451埠貼建物 平・立面図

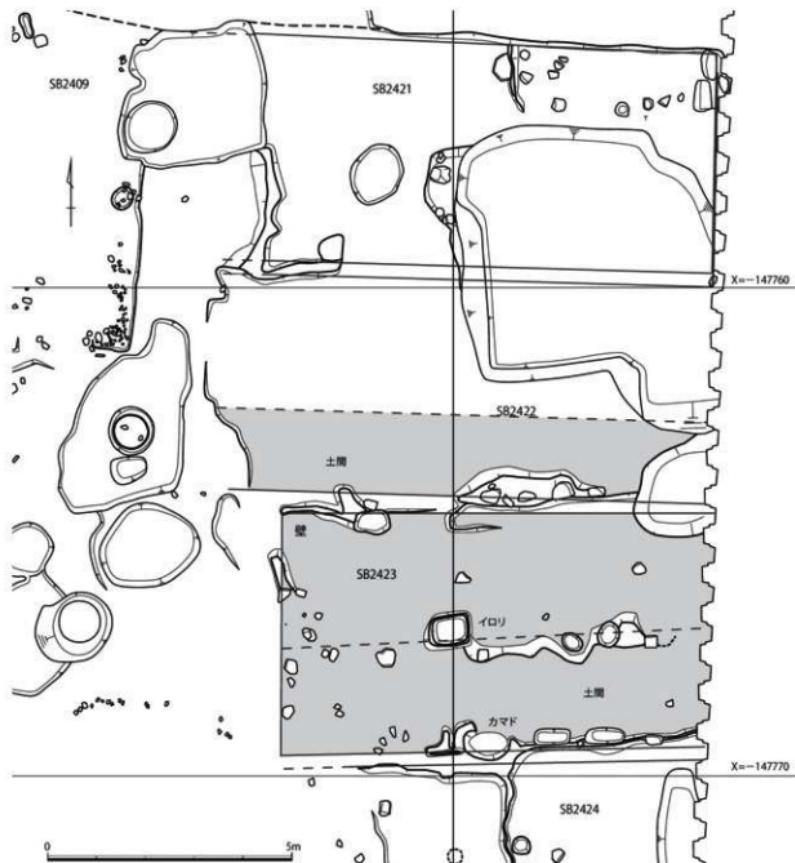


写真22 SB2423壁材

図54 第Ⅲ期 町屋群J(北部) 平面図 (SB2421~2425)

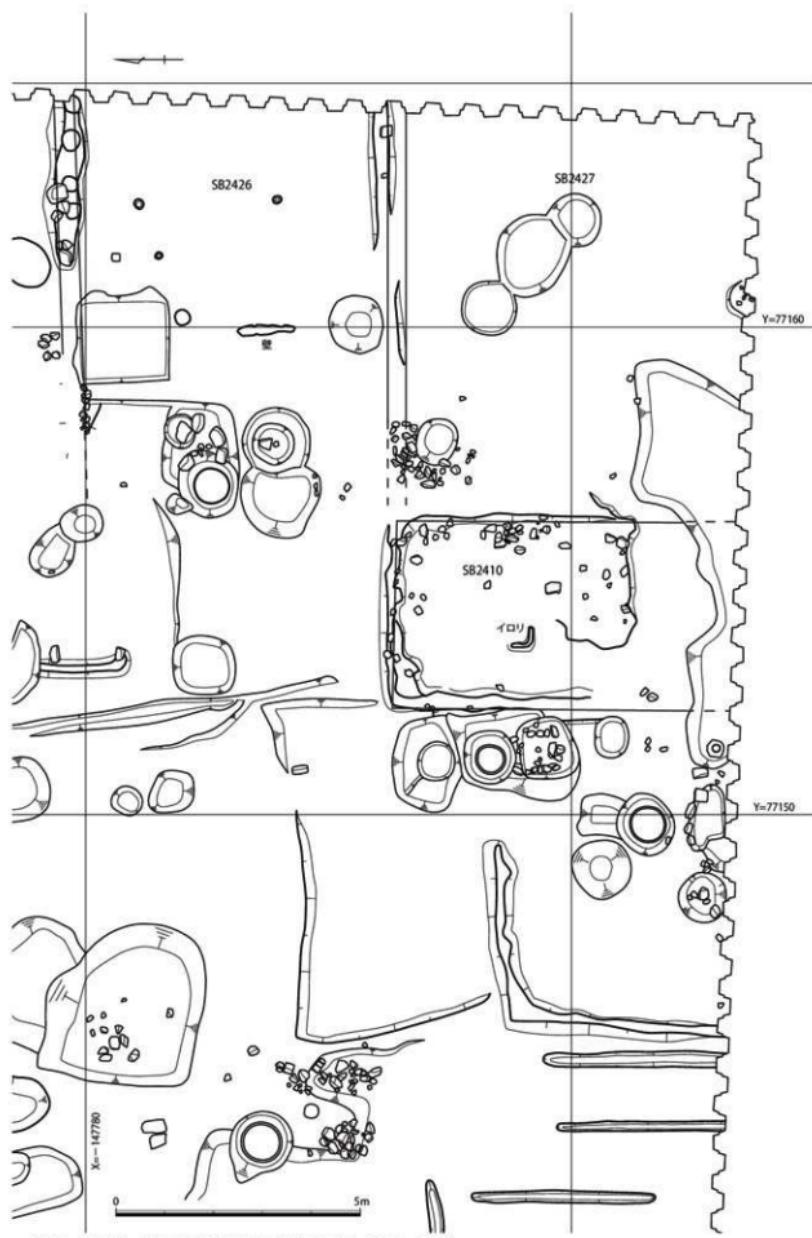


図55 第Ⅲ期 町屋群J(南部) 平面図 (SB2410・2426・2427)

建物の検出面が北東から南西にかけて傾斜して検出されたため地震の結果かと考えたが、鑑定の結果地震の痕跡ではないことが分かった。後世の掘削工事等の影響などの可能性がある。

SB2425は、間口が4.8m、奥行8.5m以上の規模をもつ町屋建物である。南壁の礎石を一部残す程度で細部は不明である。SB2424同様沈下がみられる。

SB2426は、間口が6.4m、奥行6.0m以上の規模をもつ町屋建物である。南北両壁の痕跡が認められた。内部には礎石や礎石の抜き取り穴がわずかに残す。SB2427は、SB2426の南壁に接してさらに南に砂層による整地が認められた。礎石等は無いものの町屋建物であったと考えられる。

SB2410は、SB2427の西側に位置する南北棟の町屋建物である。間口が4.0m、奥行が5.0m以上を測る。建物内部の中ほどにはイロリがあり、東側に東石と思われる礎石が集中する。さらに10cmほど下層で建替前の建物（床面）が確認された。

## 第6節 下層確認トレンチ

また調査区東部から中央部東半部ではⅢ期（古）の遺構面を検出した標高で工事の掘削範囲までの調査は完了したが、東端の南半部分の町屋群が比較的良好に残る部分（町屋群J）において、さらに下層に存在する築城期以前の遺構面の状況を確認するためにトレンチを設定して調査を実施した。この結果2時期の遺構面が確認された。

上層の遺構面では、第Ⅲ期（古）の町屋とはほぼ同じ規模・位置を踏襲する町屋建物が確認された。

**町屋建物** SB2521は、間口から西へ、3.6mと7.0m、9.5mで東西方向の壁によって区分されている。内部は礎石が1.0～2.0mの間隔で密に配されている。五輪塔の水輪を転用した礎石もみられる。

SB2522では、粘土状の土の壁が建物の周囲を開んでいる。また内部もほぼ中軸上をこの壁が区分している。南壁に接して3～4連の焚口をもつカマドが設けられている。

SB2523においても、粘土状の土の壁が建物の周囲を開んでいる。内部はL字状に区分され、さらに東西に細い壁によって区切られ南側にカマド、北側のやや広い空間に内寸45cmの小型のイロリが確認された。

SB2524・2425は、削平されていて、壁等も無くいくつか礎石がみられる程度である。SB2524の建物中央東寄りに内寸45cmの小型のイロリが残る。

B2526は、間口から西へ1.5mで南北方向の礎石列が認められた。礎石には、五輪塔や宝篋印塔の転用石が使用されている。

SB2527は、サブトレンチにおいて建物の間口付近を確認した。内部を区分する南北方向に2.0m以上のびる細い壁を検出した。

**下層の遺構面** さらに下層の面においては、削平によって遺構面の残存は良好ではなかったが、16世紀前半の遺物を含む土坑などの遺構と共に、16世紀後半のピットやカマドなど町屋建物SB2621～2623を確認した。さらに南に礎石等が散在するためもう1棟町屋建物が存在する可能性がある。建物の配置等は確認できなかったが築城期以前の町屋も存在するようである。

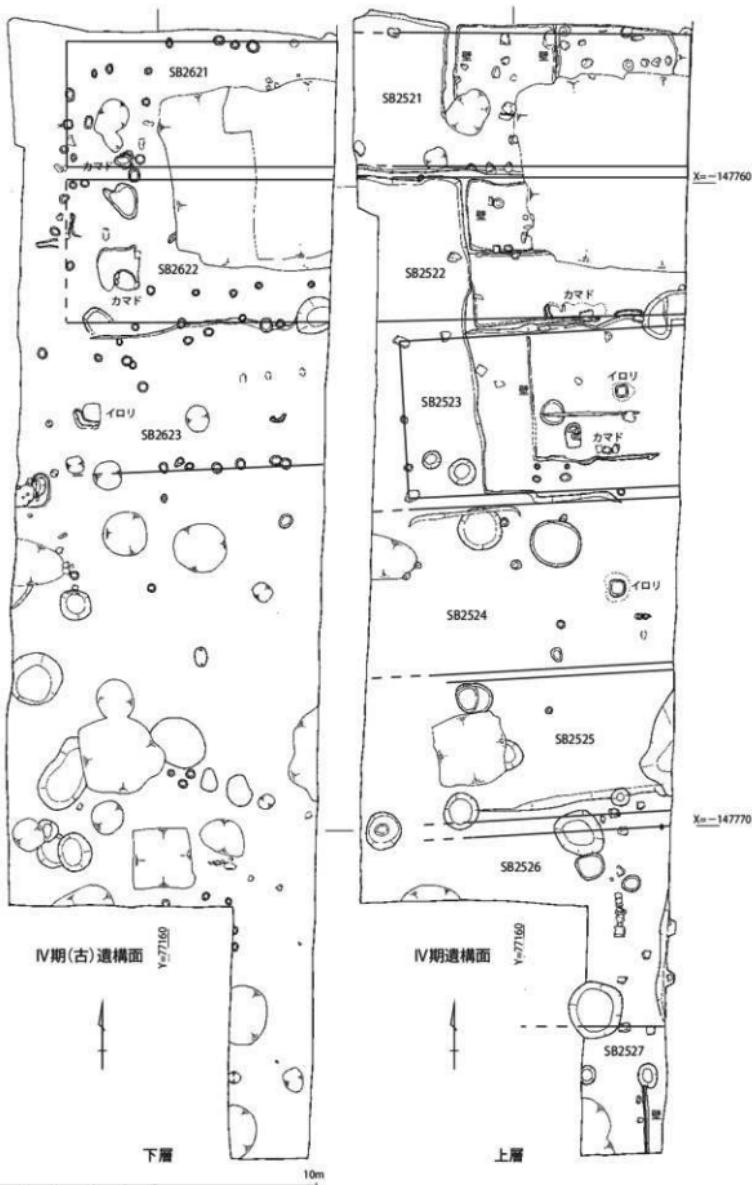


図56 町屋群J下層確認トレンチ 平面図

## 第7節 第Ⅳ期 検出遺構

調査区の中央部西半部では第Ⅲ期（古）の遺構面より下層の調査を実施し遺構面を確認した。建物、井戸、石組遺構をはじめ土坑やピットなどを多数検出した。

SB2461 また、調査区の中央部北端において小型の建物が確認された。SB2461は、東西3.4m、南北4.0m以上の規模を持つ。周間に幅20~45cm、10cm前後の溝を巡らしその外側に1.4~2.0mの間隔で礎石を配している。すぐ南側にも、削平を受けているがL字状の溝が残っていることから同様の建物が南北に並んで建っていたと考えられる。

井戸 井戸は削平されているため時期が特定しにくい。残存の良好であったものについていくつか紹介する。SE2401は、径2.0~2.4m、1.9m以上の掘形をもつ円形の石組井戸である。自然石をそのまで検出面より1.3m組んで下部に径70cmほどの木桶を転用した井戸枠をもつ。17世紀の第1四半世紀に収まる遺物が出土している。

SE2402は、径2.2m、深さ1.6mの掘形をもつ円形の石組井戸である。使用されている石は大型の自然石であるが井戸側にあたる部分を丸く加工している。検出面より70cmの深さで30cmほどに輪切りにされた木桶と70cmの木桶を逆さまに重ねて枠としている。17世紀中頃の遺物が出土している。

SE2406は、径3.0m、深さ2.0m以上の掘形をもつ石組井戸である。検出面から1.4mまで五輪塔の地輪および火輪の平面の四角く平な部分を利用して井戸枠としている。底部には木桶が据えられている。16世紀末~17世紀初めの遺物が出土している。



写真23 SK2401



写真24 SB2461



写真25 SK2402



写真26 SK2410

SE2407は、径3.5m、深さ2.2m以上の掘形をもつ円形の石組井戸である。SE2406同様石材として五輪塔の転用石を利用している。検出面より1.5mで木桶が据えられている。16世紀後半の遺物が出土している。

石組遺構 SK2401は、内法が南北0.8m、東西2.6m、深さ30cmの長方形の石組遺構である。東から1.0mで区切られている。16世紀末から17世紀初めの遺物が出土している。

瓦積遺構 SK2405・SK2411はそれぞれ0.6×0.9m、0.6×1.0mの長方形の掘形の土坑の周囲に瓦片を積む遺構である。SK2411で15世紀後半、SK2405で16世紀前半と思われる遺物が出土している。

土坑 SK2402は径1.0m、深さ70cmの土坑の周囲4に四角く礎石を配する遺構である。

SK2426は、2.2m×1.5m、深さ30cmの土坑で中央に17世紀初頭の備前焼の甕が据えられていた。

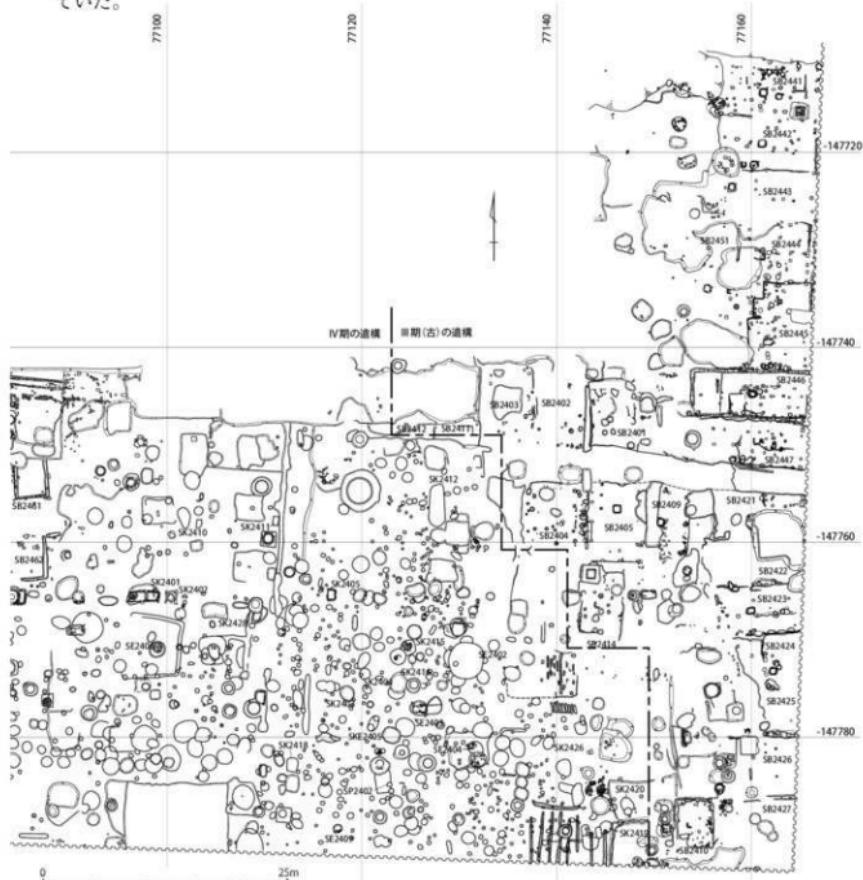


図57 間屋町地区 東部 第IV期 遺構平面図 (S=1:500)

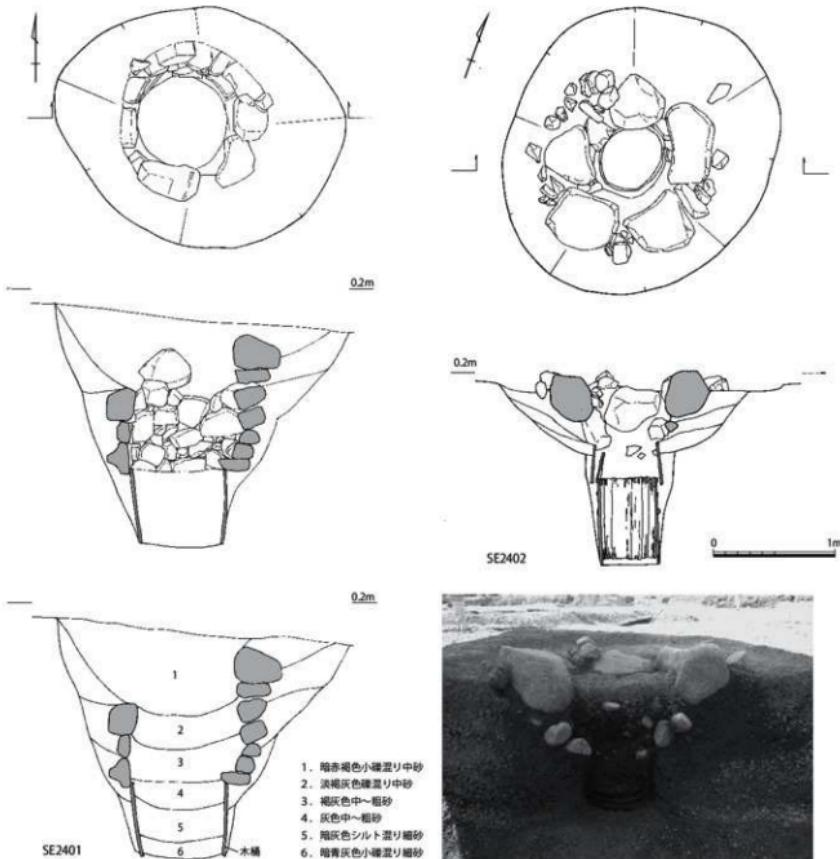


図58 SE2401・SE2402 平・立面図

写真28 SE2402断面



写真27 SE2401断面



写真29 SE2402桶出土状況

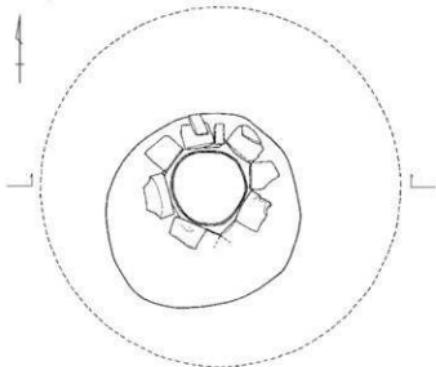


写真31 SE2506

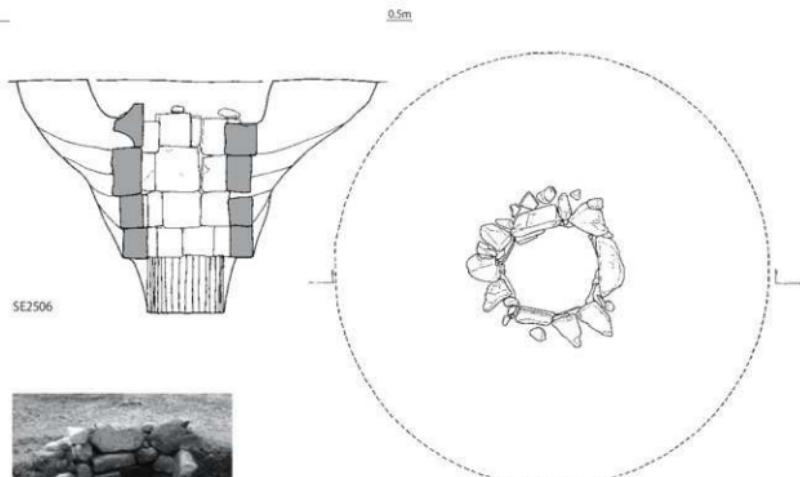


写真30 SE2507

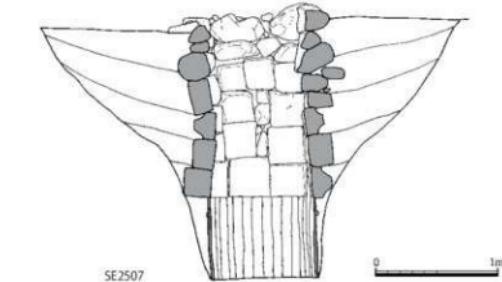


図59 SE2406・SE2407 平・立面図

SE2507

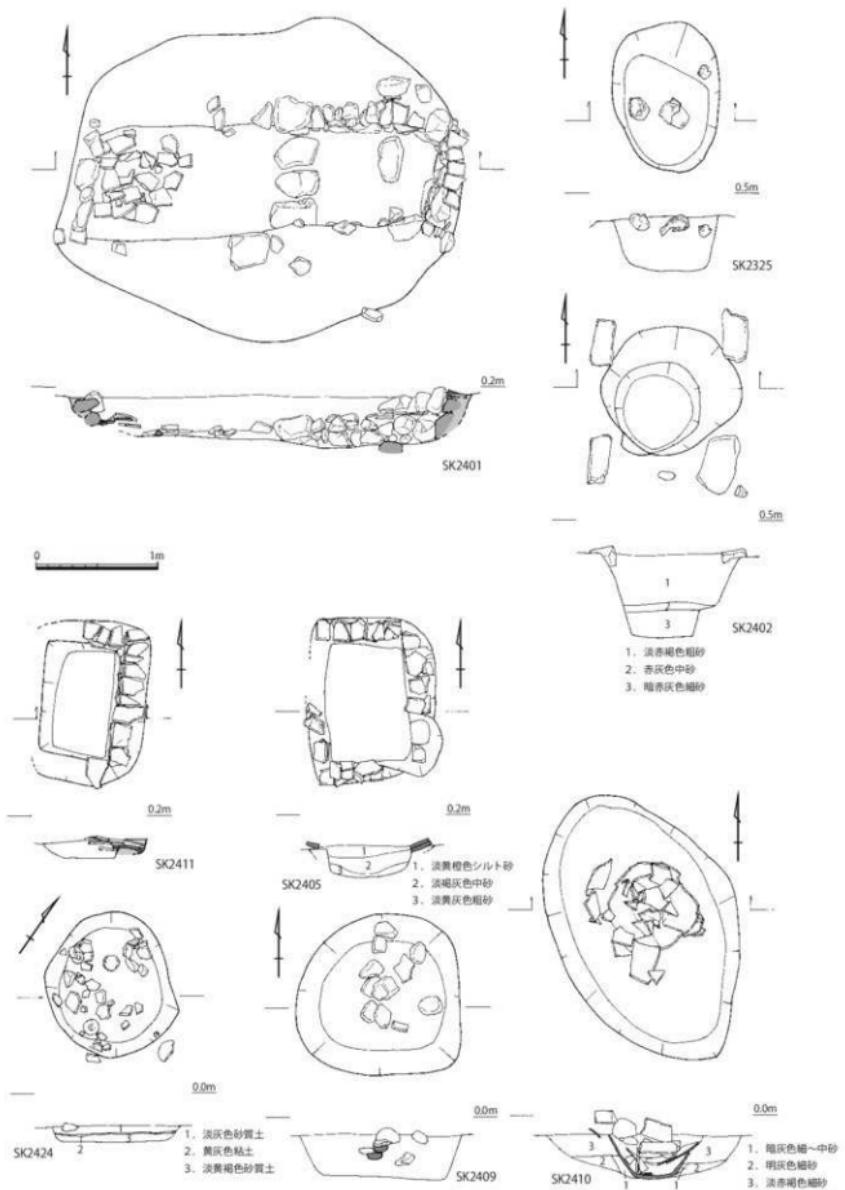


図60 関屋町地区 東部・中部 第IV期 造構平・断面図  
(SK2401・2402・2405・2409・2410・2411・2424)

## 第8節 西部 V期 検出遺構

閑屋町地区の西部で中世の遺構を確認した。柱穴、土坑、ピット、石積遺構の他、井戸、溝である。遺構の時期はV期の遺構面と捉え、15世紀～16世紀の遺構群であると考えられる。遺構面を形成している暗褐色系の砂質シルト層は、湿地状堆積物が土壤化したもので、浅く落ち込んだ地形を整地したのちに遺構が構築されているものと考えられる。V期として確認した遺構は、この整地土層上で確認したものと、整地土層を除去した後に確認されたものがあるが、遺構の時期差については峻別されてはいない。遺構面のレベルは東に行くに従い高くなり、淘汰の良い砂層に変化し、さらに閑屋町地区の中央辺りでは粒の揃った小疊層の堆積となる。

**柱穴列** 調査区の南端際で見つかった遺構で、柱穴が12基東西方向に並んで検出された。いずれも直径70cm～80cmで深さ30～40cmの規模である。この柱穴の内、8基には礎石が据えられていた。埋土は上層が黒褐色粗砂で中層以下は暗灰色砂質シルト層である。柱間は1.8mから2mである。柱穴列の並びは10cm程度一段構状に低くなる範囲で見つかっている。この落ちが南側に向けて大きく拡がっているのか、柱穴列の部分のみであるのかは不明である。柱穴からは須恵器捏ね鉢や土師器皿、瀬戸美濃窯の陶器皿片が出土している。概ね15世紀後半に属するものである。

東西方向の柱穴列の東端(SP2512)からすぐ東には、南北方向のピット列が29mに渡って検出された。直径40cm～80cm、深さ20cm～50cmの規模を有するものである。ピットはほぼ南北方向に並んでいるが、ピット間の間隔が一定的ではなく、不正形なものも存在することから、柱穴というものではなく、柵列のようなものではないかと考えられる。このピット列の位置は、まさに湿地整地土層と灰白色砂層との境に位置し、その設置については地形の変化を意識したものであろうと考えられる。

**石積遺構(SX2501)** 調査区の南西端部で見つかった「護岸遺構」であると考えられる。石列は南北方向からやや西に振れて見つかった。石積は西側に面を持って積まれている。石積の西側面からは、直径20cm程度の丸杭2本と1辺20cm程度の角杭1本が出土している。いずれも先端を尖らせ、1.6mの間隔で打ち込まれている。杭の間には板材が横方向に据えられ、土留板としての機能を果たしている。これらの主要杭のさらに周りには一回り小さい丸杭が数本打ち込まれている。1本のみだが出土した角杭は、面取りした材の使用や材の大きさから類推して、その上部に棧橋状の構造物の存在を想起させる。

積まれた石は30cm内外の円疊で、雑然と積むのではなく、列が通るように規則的に積んでいることがわかる。石列の北半部については、一部が若干崩落し石が落ち込んでいる様子がうかがえる。

護岸の造作については、東から西方向の緩やかな傾斜地を利用して、土留板で土砂の崩落を防ぎ、盛り土しながら石を積み上げたものと考えられる。裏込めの石材は多くなく、わずかな石材のみである。石積遺構に隣接して検出された土坑には円疊が詰まっているものがあり、護岸工事の際に集積した円疊の未使用分である可能性がある。

護岸の石積遺構の埋土は大きくは3層に分かれる。上層は灰褐色極細砂～粗砂、中層は暗灰褐色極細砂～極粗砂、下層は明灰色極細砂である。図65の土層断面図5～8層が石積遺構作時に杭を打ち込んだ基盤層であると考えられる。断割りトレーンチでの土層観察からは、下層で確認した土層断面図9層の植物遺体層が東側に向けて緩やかに高くなりなが

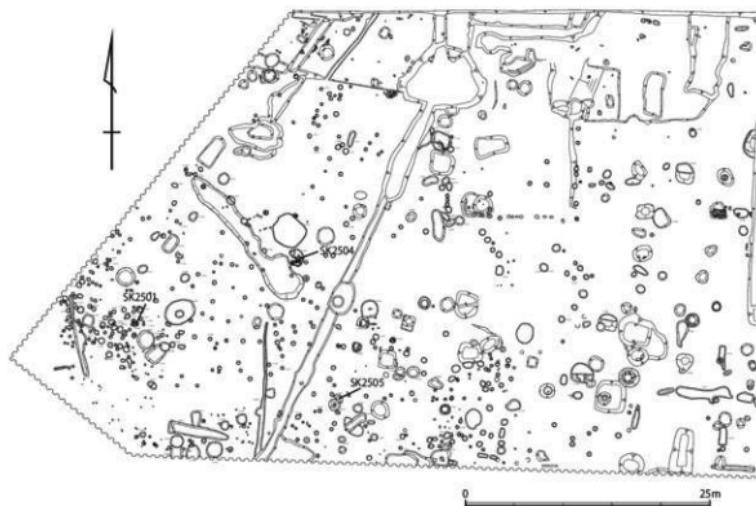


図61 V期の遺構平面図



図62 V期の遺構平面図（整地土除去後の遺構）

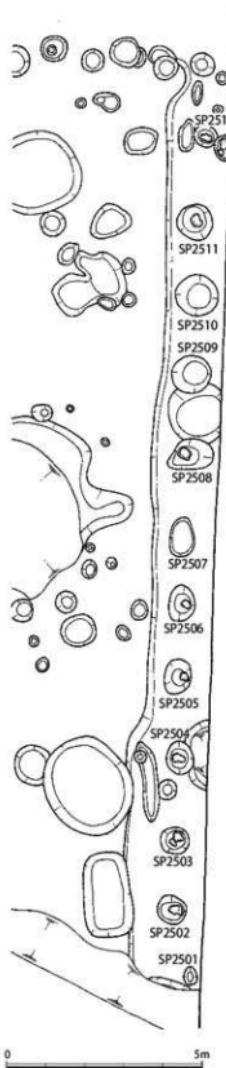


図63 柱列遺構平面図



図64 柱穴土層断面図

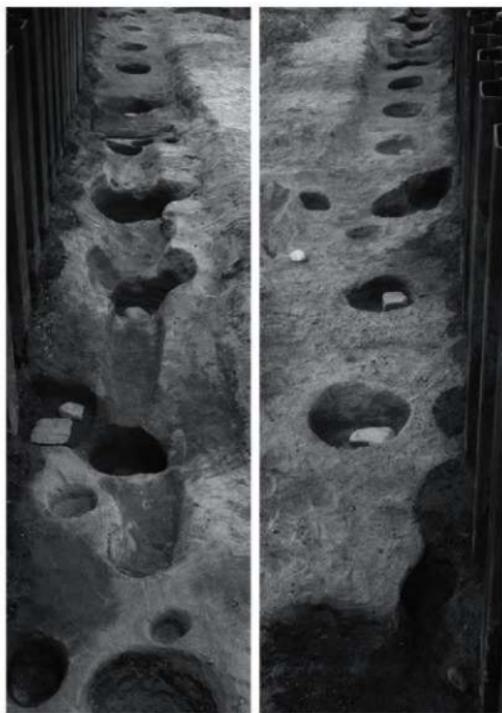


写真32 柱穴列(左)東から・(右)西から

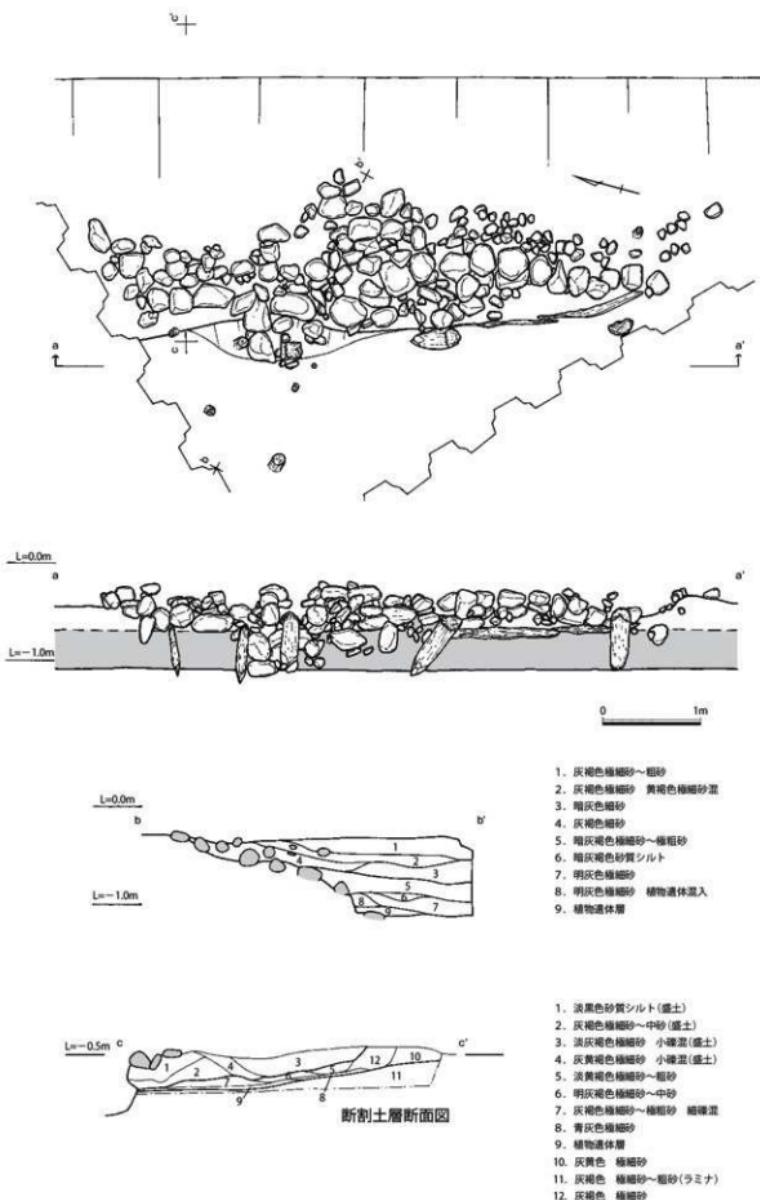


图65 SX2501 平面・立面图・土层断面图・断面土层断面图

ら括がりを見せる。石積の東側1m辺りから石積側に向けては護岸石積みの造作に関わる盛土層1~4層が存在し、護岸掘形と考えられる。

護岸石積の埋土からは、土師器や陶器とともに箸や漆椀などの木製品や刃物の削り痕跡が残る木屑が出土している。石積の最上面からは角塔婆釘貫(2150)や五輪塔が出土した。

土坑・井戸 検出された土坑の中には比較的多くの完形の土師器皿などの遺物を伴うものがあった。SK2514はⅢj区で検出した、直径約1.17m、深さ56cmの擂鉢状の土坑で、土坑底はほぼ水平である。土坑の上層から土師器の皿が1点。中層から土師器の皿4点に加え完形の鍋が1点出土している。

SE2503は西端部で検出した井戸で、掘形は直径約2mの円形である。下段には長さ約52cm、幅13cmの板材13枚と幅7cmの板材5枚からなる桶を据えている。桶の直径は約60cmで、掘形は桶が入る程度のものである。桶の半分程度は内側に崩れている。その上部には一回り大きな枠組を構築している。上部の枠組は幅34cm~36cm、厚み4cmの8枚の板材を八角形に据えている。井戸内からは土師器の皿が出土している。

SE2504は南端部で検出した井戸で長辺1.8m、短辺1.5mの方形の掘形を持つ井戸である。上部の板材を方形に組んだ井戸枠は大きく崩れているが、最下段の板組材は方形にしっかりと組まれた状態で検出された。枠組は東西約1.3m、南北約1.5mの方形である。その下部に直径約80cm、高さ50cmの曲げ物を据えている。井戸内からは須恵器捏ね鉢や甕、土師器皿、備前焼の壺などが出土している。

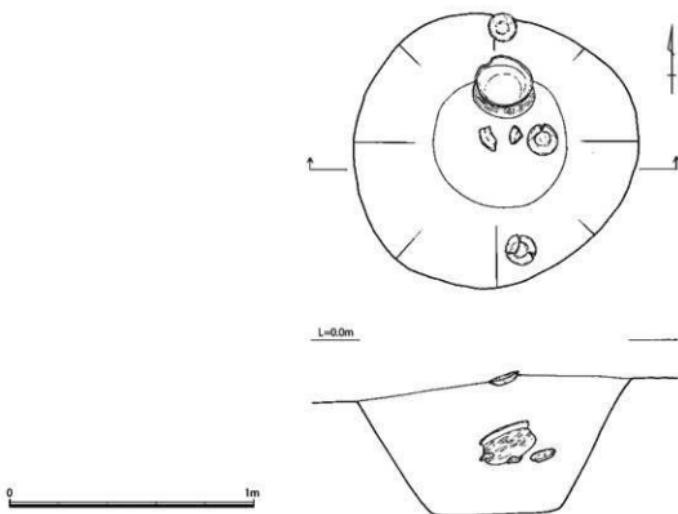


図66 SK2514 平・立面図

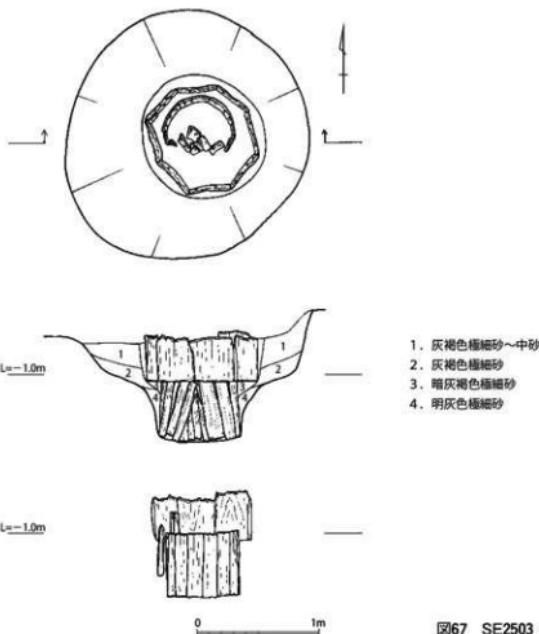


図67 SE2503 平・断・立面図

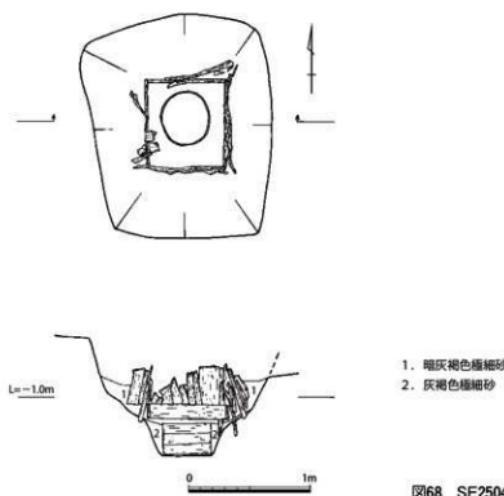


図68 SE2504 平・断・立面図

## 第5章 兵庫城地区の調査

### 第1節 概要

外堀と内堀の二重の堀とこれに区画された兵庫城の副郭および主郭と考えられる郭を確認した。これは、兵庫城を北東から南西に斜めに区切った南東1/2程度にあたる。

兵庫城部分については、幕末および明治以降の開発により著しい削平を受けており、主に主郭部分では盛土を除去したところで遺構を確認している。そのため、土坑や井戸などを検出しているが、その大半が江戸時代後期以降のものと考えられる。遺構検出面はおよそT.P.0.5m前後を測る。また、明和の上知以降に町人請地とされ、水帳絵図で町屋として描かれている部分では、町屋の区画等を認識できる遺構は確認されなかった。

### 第2節 第I期の遺構

SD3101 かつて兵庫城・兵庫陣屋を取り巻いていた外堀の一部を埋め立てて造られた溝で、天保9年の新町及び閑屋町の水帳絵図に「悪水抜溝」の名称で明記されている。今回の調査では東西約110m、南北約115mを検出している。ほぼ全域で改修の後がみられ、古いものから(旧)・(新1)・(新2)と呼称する。

SD3101(旧)は幅約4m、深さ1m程度で、護岸の方法は場所により異なる。主として石積か板材を杭で止める構造を探る。SD3101(新1)になると西側が埋め立てられ幅約2m、深さ約1mにやや規模が縮小される。護岸も石積みで統一され、石材もほとんどのところで切石が使用されている。そして(新2)ではさらに西側を埋め立て幅約40cm、深さ50cm程度と大幅に規模が縮小される。(新2)は護岸の石積の石材は小ぶりの石が使用されている。また、底面では瓦敷する部分やコンクリートで固められている部分も見受けられる。そのような状況から(新2)については明治以降の比較的新しい時期まで使用されていたものと考えられる。

なお、改修について東側は旧陣屋側を埋める形で順次行われるが、南側については、(新1)から(新2)に改修さ



写真33 SD3101東側(新1)



図69 新町地区水帳絵図(部分)(神戸市文書館蔵)  
(天保9年)



写真34 SD3101東側（新1）

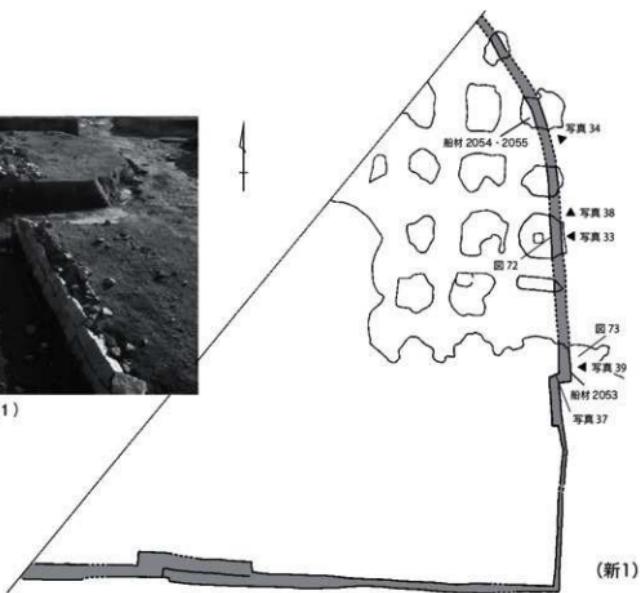


写真35 SD3101南側（旧）

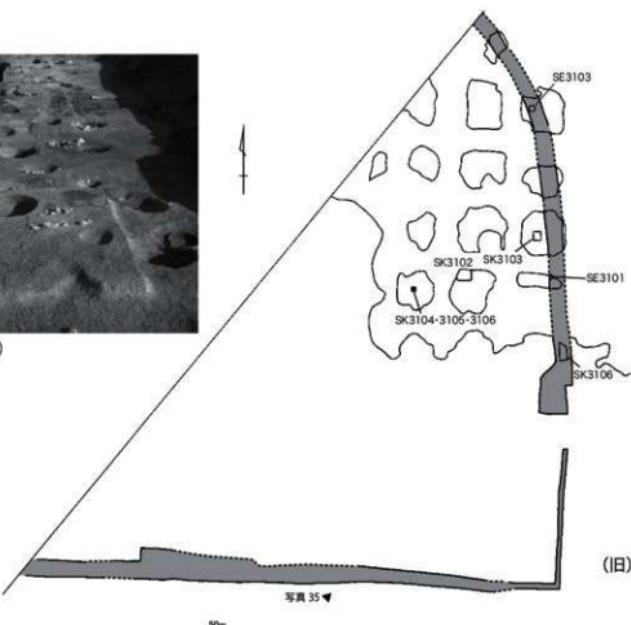


図70 SD3101（新1・旧）平面図

るときに町屋側を埋め立てを行っている。新町と関屋町では改修に相違があったことがわかる。以下では、主に江戸時代のものと考えられる(旧)段階と(新1)段階についてもう少し詳しく触れる。

(旧)段階は南側では、土橋1の南側は東から西へ幅が広くなり、約4.0mを測る。この段階での護岸(土留)は城内側は石積みではなく、ほとんどの場所で細長い横板を渡し大小の杭で留める工法を探っている。ただし、板が欠損し杭のみになっている所もある。横板には転用された船材が多く使用されており、全長4.0m前後、幅約30cmを測る。船材表面は劣化が激しいが、所々に船釘が刺さった状態が確認される。また、石積や土留め板などは見つかっていないが、溝内に並行する幾筋かの杭列がみられることから、これに前後して小規模な改修が何度も行われたと考えられる。

一方東側は北で幅4.0m弱(2間程度)を測るが、街路1との接続部南側では幅50~60cmを測り、南側で西に折れ曲がる。なおここでは対応する石積が確認されていないため、規模に変化はなかったと考えられる。護岸は厚み5.0cm以上の船材を土留板にしてそれを数本の杭で留めるような工法や、直径20cm以下の自然石材や一石五輪塔などの転用石材を用いる石積み工法などが採られている。南側でも小規模な改修がみられたが、東側でも肩崩れが生じやすかったようで、板や石積みが倒れ込んだため、板を使用した簡易的な土留めを行っている箇所がみられる。この時期は統一的な護岸工法は採られていない。また、以下のような遺構が溝内に検出されている。

**SE3101** SD3101東側で検出された井戸状の遺構である。上部は直径20cm程度の碟を円形に配し、下部には上に直径60cmと直径40cmの桶を上下に組合せて据え付けている。桶内の埋土と異なり、桶と桶の間には灰色粗砂が堆積している。桶がずれないよう埋め込ま

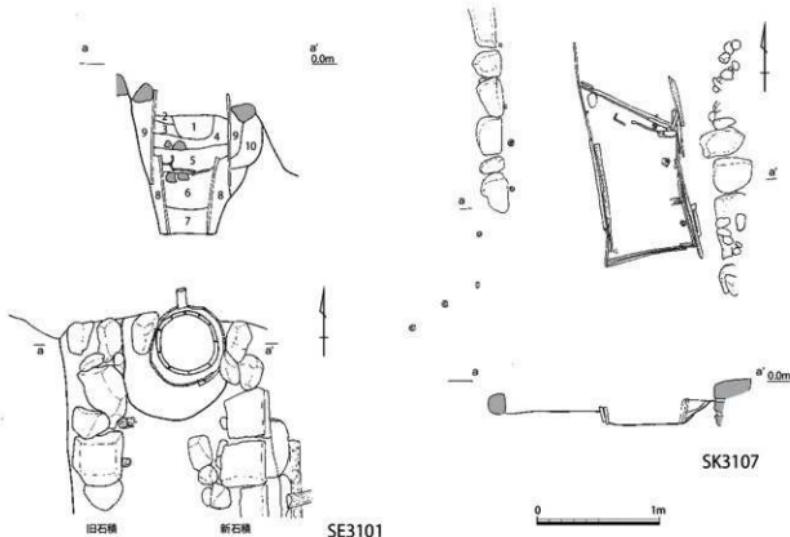


図71 SD3101東側(旧)内遺構平・断面図

れたものと考えられる。SD3101の(新1)と(旧)の間で検出されており、(新1)の石積裏込めの埋土が直上に堆積していたことから、少なくとも、(新1)段階以前に構築されたものと考えられる。検出状況や旧段階と同時期の遺物が出土していることから、溝内にあったと考えられ、何らかの貯蔵用の施設であった可能性もある。同様の遺構は、SD3101東側で1基検出されている。

**SK3107** SD3101東側で検出された板組の遺構である。長さ2.0～3.0m、幅1.4m、深さ30cmを測る。厚さ5cm程度の板材を二枚重ね長方形になるように設置している。ただし、南側の板は板組の中で斜めに設置している。そしてそれぞれの板材の内側に直径10cm程度の丸杭を打ち、板材を固定している。内部には棒状や板状の木片の他、木製品の部品もしくは未成品のようなものも入っていた。西側は、(新1)段階の石積が上に設置されており、構築時期は、(旧)段階と考えられる。これも、先述のSE3101と同様に溝の中に構築されていたもので、貯蔵用の施設であった可能性がある。同様の板組は、SD3101及び南外堀(新)の数か所で確認されている。

SD3101(新1)段階は一部では狭くなるところもあるが、先述の通りおよそ幅約2m、深さ約1mを測る。なお、石積みについては、南側は東端で幅1.5m、東端から48m西で幅約3.0mを測り、主郭側の石積がやや北側に振れるように構築されている。同じ場所で主郭側石積が、鍵の手状に曲がり北に2.0m程度広がる。その状態で西に23.0m延びる。またそこで、鍵の手状に南に折れ曲がり、再び幅3.0m程度の規模になる。北側の石積には長さ30cm前後の割石や自然石が使用されている。北側石積の根石の下には柱材等を転用した胴木組が2本並列して設置されていた。隣り合う胴木は組み合わせることなく、接するか少し間を空けて置かれていた。前列胴木の前面には所々に杭を打ち込み、胴木組を固定させていた。

東側は、土橋1より北側では元の兵庫城の堀の形状を踏襲し湾曲しているが、土橋3に近接した場所では鍵の手状に折れ曲がる部分がある。この形状については、「兵庫陣屋跡町割図」や新町地区の水帳絵図にも同様の形状が描かれている。石積みは南側と違いほとんどが切石の布積みで護岸されている。

石材は花崗岩で大きさ40×20cmのものが多い大きさに幅があり、目地が通らない箇所が多いこともあり、均整のとれた石積という印象を持たない。根石は自然石を利用しておらず、一部は以前の石垣の石材を利用したものと考えられる。また、石積みの隙間には漆喰を塗り込み、目地を詰めている。従前の建物基礎等により搅乱を受けており、石積は2～3段程度残存しているのみで、本来の高さは不明である。裏込に



写真36 SE3101



写真37 SD3101東側(新1)矢穴

は直径10cm程度の円礫が充填されていた。石材には矢穴が見られ、街路1接続部より北側では長辺3~4cm、深さ2cm程度、矢穴の間隔7~8cmを測り、南側では長辺6cm、深さ4cm程度を測るが、矢穴の間隔は不明である。切石の石積の後方には同程度の大きさの自然石や一石五輪塔などが銅石として並べ置かれていた。

一方で鍵の手状部分では、石積みの代わりに厚さ10cm程度の分厚い船材を直径10cm程度の太い杭で留める状況が確認された。船材には、船釘の痕跡や釘穴が明瞭に観察できる。石積の下には不等沈下を避けるために胴木組と呼ばれる長い柱状の木材を土台として設置されていた。胴木組は二列並べ置きその間に間詰めのための小蝶を入れ、前面には胴木を支えるように杭を打ち込んでいる。胴木組には様々な木材が使用されており、湾曲の強い丸太材や柱材をはじめ、ここでも船材が使用されている。また、溝内に大量の瓦片を底一面に敷き詰めたように放り込むところもあった。

SK3101 中央部で検出された長さ1.6m、幅70cm、深さ30cmを測る楕円形の土坑である。断面形は箱形を呈し、暗灰色系の砂質土が堆積している。上層から中層に表面に柿釉を施



図72 SD3101東側（新1）北部石積オルソ写真

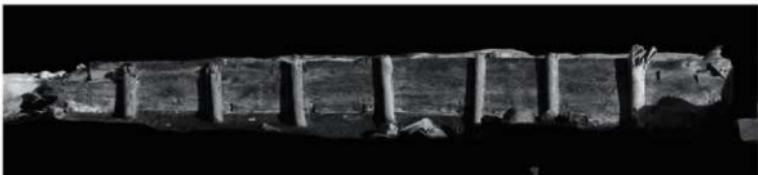


図73 SD3101東側（新1）中央部船材土留オルソ写真



写真38 SD3101東側（新1）北部裏込



写真39 SD3101東側（新1）中央部胴木組

した皿や小型壺などの多量の灯明具と産地不明の擂鉢や焼塩壺などが良好な状態で出土している。出土状況から一時期に廃棄されたものと考えられる。

**SK3102** 中央部で検出された検出長3.7m、深さ約1.4mを測る方形と考えられる土坑である。北側と西側の一部が後世に掘削により攪乱を受けている。南側は上層で幅約1.0m程度のテラス状を形成している。底部には壁に沿うように5~7cmの丸杭



写真40 SK3101遺物出土状況

及び角杭が北東・南東・南西の各隅にその間にランダムに打ち込まれている。わずかに南北隅で横板の残欠が確認されており、本来は横板を四方に渡し、杭で固定する木組みの土坑であったことが分かった。また、底面中央には1.4m程度の梢円形のへこみがあり、その中に直径45cmの曲物が据え付けられていた。その形状から水溜のようなものであったと考えられる。埋土は砂礫及び砂が主体で、底部付近では壁が崩れたような堆積がみられるが、大半が一度に埋まつたようである。

**SK3103** 中央部で検出された長辺1.7m、短辺1.6m、深さ約65cmを測る長方形の木枠組の土坑である。掘形は約1.8mの方形を呈する。上層では腐食のため検出されなかつたが、四辺に薄い横板をわたし、内面数か所を5cm程度の丸杭および角杭により留めている。灰色系のシルトが皿状に堆積しており、廃棄後徐々に埋まっていったようである。底部には、一石五輪塔や直径25cm程度の蹠が多くみられるが、土坑の掘形の外に延びていくものもありその大半は東外堀の埋戻しの際に同時に埋められたものと考えられる。その蹠を避けるように直径50cm程度の曲物が据えられている。また底部付近には大型の堺・明石産擂鉢と肥前窯染付鉢などが出土している。

**SK3104・3105** 中央部で検出された2連のカマド状遺構である。南北2.1m、東西1.2mの範囲に厚さ10cm程度の黄灰色粘土を貼付ける。その粘土貼の上面で検出されたSK3104は長さ70cm、幅25cmの長方形で、深さ20cmを測る。被熱のため赤褐色に変色していた。一方でSK3105は直径30cm前後の円形堀込が3か所検出された。いずれも深さ10cm前後で、底面や壁面は赤褐色に変色していた。先述の粘土を除去すると、直径15cm程度の円蹠と平瓦及び棟瓦片がそれぞれのカマドの縁を取り巻くように検出された。カマドの芯材として利用されたものと考えられる。被熱痕はなかった。芯材の瓦の前後関係から、北側のSK3105の方が南側のSK3104よりも後で構築されたことがわかる。

**SK3106** SK3104・3105の南側で検出された直径60cm程度、深さ25cmを測る円形の埋め桶である。掘形は直径1.0m程度である。埋土上層は炭を多く含む砂質土、下層は灰白色系の細砂および粗砂が堆積しており、瓦なども出土している。掘形の上にSK3104・3105の基盤層となる黄灰色粘土が堆積しているため、同時併存か古いものと考えられる。しかし位置関係や堆積状況の類似性から、北側のカマド状遺構と関連するものと考えられる。

その他の遺構 これらの遺構の他には、主に土坑・ピットなどが多数検出されている。

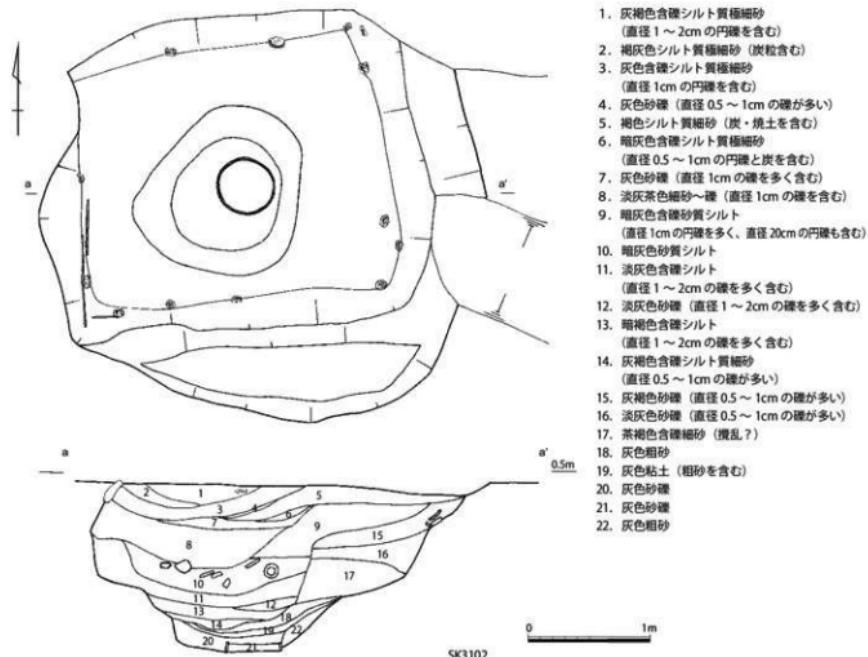
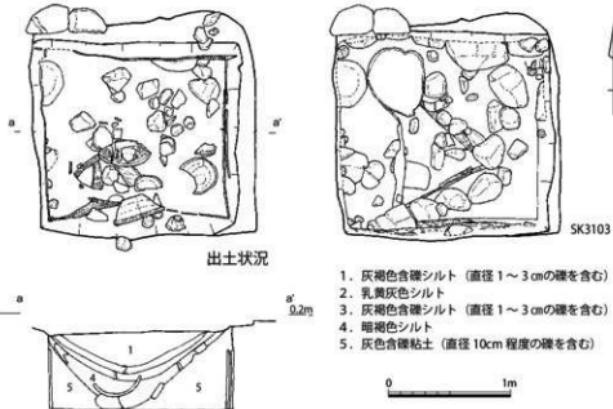


図74 第Ⅰ期造構平・断面図1

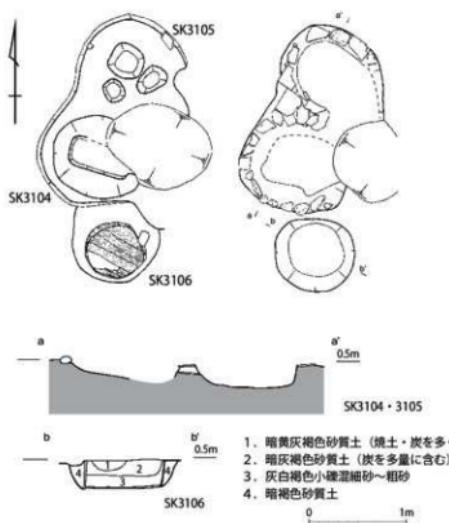
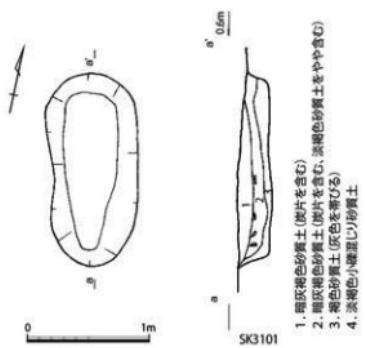


図75 第Ⅰ期遺構平・断面図2

土坑の多くは直径1m前後  
の円形で、深さ1m程度の  
もので、埋土からは数多く  
の陶磁器片・瓦片・木片な  
どが出土している。おそらく  
は明和の上知以降の出来  
た町屋に伴うごみ穴と考え  
られる。

また、建物に伴うと考え  
られるピットも数多く検出  
したが、建物配置を推定で  
きるものはなかった。

### 第3節 第II～IV期の遺構

当該時期は築城期から明和の上知以前の兵庫城及び兵庫陣屋を対象としている。外堀と内堀により区画された副郭と主郭の一部を検出している。築城当初の縄張は、平面的な形状は方形を基本として、北東隅を鈍角に折れ曲げるシノギ角をしている。内堀は主郭に沿って東面及び北面を巡り、外堀は副郭を隔てて北・東面に、南面は主に主郭に沿って巡らされている。その後も石垣の改修などにより変わったところもあるが、基本的な形状は江戸時代以降も踏襲されている。

また東外堀に土橋1が、内堀の南側に土橋2、北側に土橋3がそれぞれ検出されている。

検出した各堀については、いずれも前後関係があるため、それぞれに(新)・(旧)区別して報告する。また、堀以外の遺構については石組・井戸など特徴的な遺構の紹介に留めている。

なお、文書中の「シノギ角」・「出角」・「入角」については石垣の折れ曲がる部分を指しており、図面中にその位置を示した。また、算木積みとは出角部分を直方形の石の小面と大面を交互に組み合わせて積む方法をいう。

**内堀** 内堀は主郭の東側とシノギ角をへて北東側が検出された。底部は多少の凹凸はあるがほぼ平坦である。内堀では、当初検出した石垣の後方に埋没した石垣を検出しておらず、大きく2回の作り替えが行われているようである。ここでは便宜的に前方で検出された石垣で囲われた時期の堀を内堀(新)と後方で検出された石垣で囲われた時期の堀を内堀(旧)と呼称し、それぞれの石垣についてもそれに準じる。

**内堀(旧)** の長さはシノギ角より北西で4m、南で54mを測る。形状は、堀の中間地点で鍵の手状に主郭側に折れ曲がり、そこから北側は前後二列に石垣を構築し、北端で鈍角に120°西側に折れ曲がり、シノギ角を形成する。南側は先の鍵の手状の部分から南に約20.0m延び1か所出角を形成する。

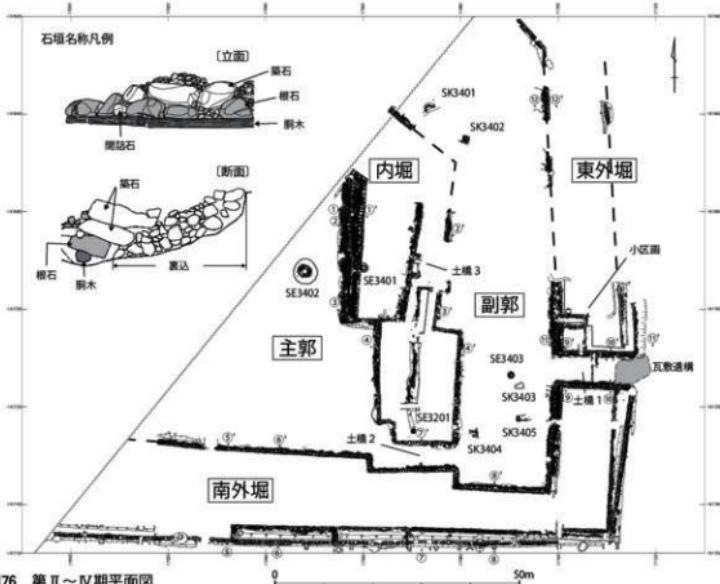


図76 第II～IV期平面図

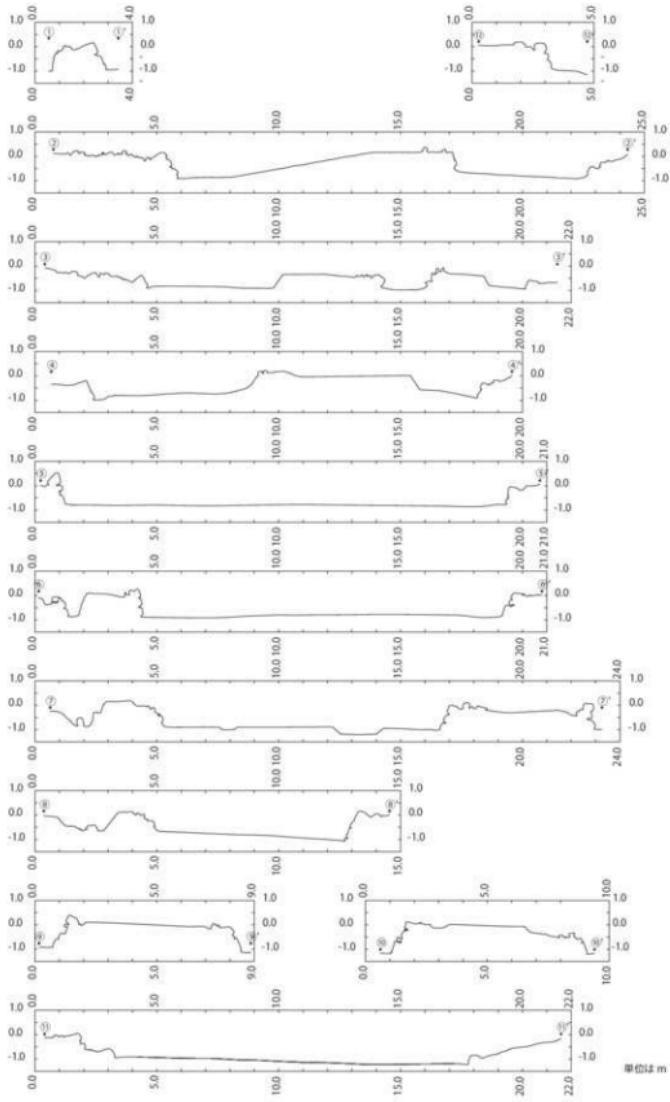


図77 兵庫城石垣断面図

0 10m

単位はm

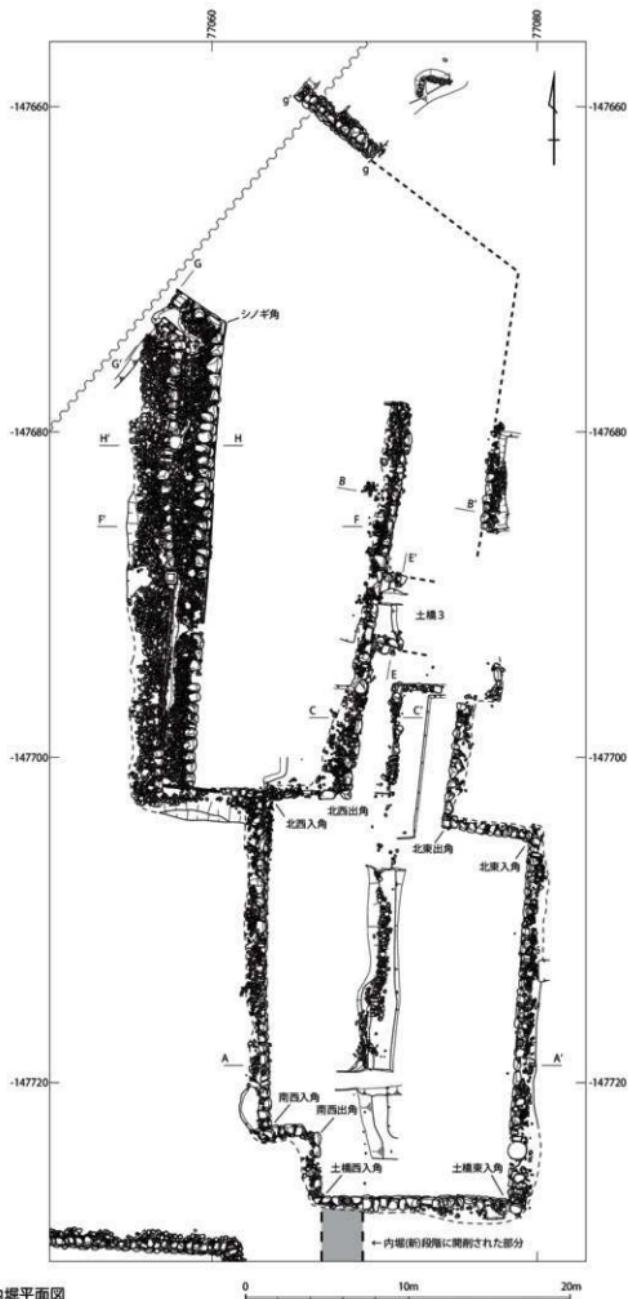


図78 内堀平面図

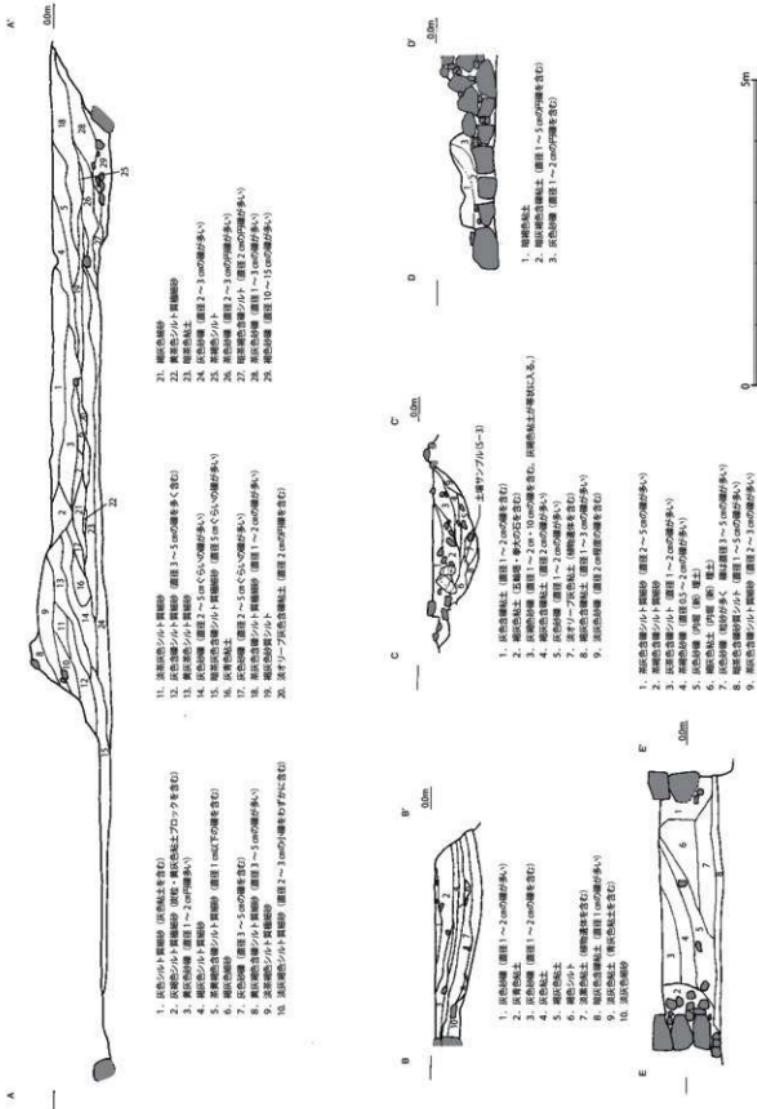


図79 内堀断面図1

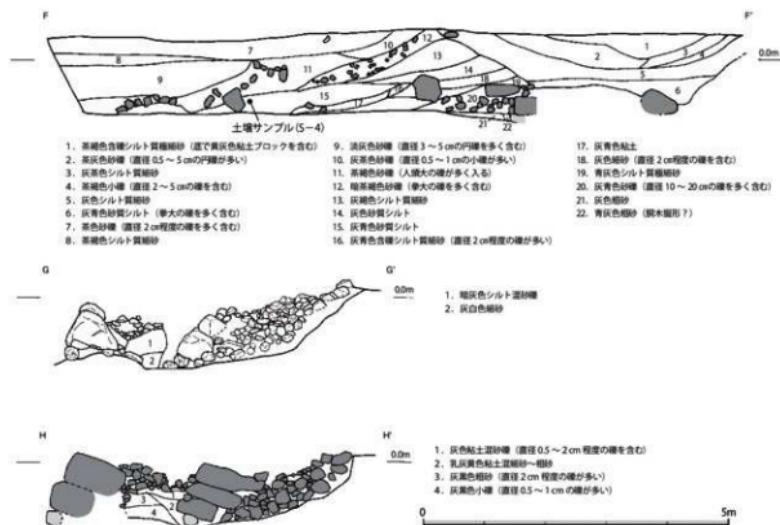


図80 内堀断面図2

南辺は東へ約12m直線的に延び、東面は北へ約22mやや東に反るように延びる。北端でまた西側に折れ、北側に延び縫の手状に折れて出角を形成する。幅はシノギ部分で13m、二列石垣部分では16m、南側では14~16m、土橋2付近ではさらに狭く12mを測る。

南外堀との間には土橋2が存在し、幅6.5m、長さ18mを測り、主郭側で二折する。土橋上面には建物などの構造物に伴う礎石や遺構は確認されなかった。

石垣は主郭側長さ約65m、高さ1.2m（石垣3段分）、副郭側で長さ約40m、高さ1.0m（3段分）を確認している。主郭側二列石垣の前面には、瓦片とともに石垣の石材と考えられる60~80cmの巨礫や栗石と考えられる拳大の礫が多量に認められた。築城後に主郭部分を拡張する際に、石垣を壊して、その石材ごと埋めたものと考えられる。一方南側では、最下層を除き礫混じりのシルト及び粘土堆積が主であり、北側の堆積と大きく異なる。土橋2石垣の付近では拳大の礫が底面に敷かれたように検出された。堀底はT.P.-1.0m前後を測り、内堀埋土の土壤分析の結果、淡水域で海水の流入は認められない。

なお、主郭側二列石垣については、後列石垣の築石の中に前列裏込めが入り込んでいたことや、後列に伴う堆積層がなく、前列石垣との間の地山と考えられる水平堆積の間層を掘り込んで胴木を設置していることから、築造当初から二列で構築された石垣であったと考えられる。

**石垣（旧）** 自然石と石造物の転用石を積んで、間詰め石を施した野面積みである。石垣は副郭側では主に根石を検出しているのみであるが、土橋2および主郭側は2~3段残存している。大半の石材は長さ70cm前後の自然石であるが、副郭側では五輪塔や層塔など石造物を転用している箇所が比較的多く見られる。南外堀と同様に出角に五輪塔の地輪を配するところもある。隅角や出角の残存状況が良好な箇所ではなく、根石のみが残存しているだけで、算木積みを行っていたかは不明である。主郭側北半分では、東外堀の土橋付近と同様に

石垣を二列並行して積み上げている。石垣は築石も控えを長くとり、掘形も広く裏込めの量も多い。裏込めには自然石のほかに五輪塔の空風輪などの転用石材も使用している。石垣の勾配は50~70°を測る。特に北側の二列石垣部分では50~60°と角度の緩いところが多い。

前列の石垣は直径20cm程度の丸太財や柱材を転用した胴木組を一列据え置き、その上に最大長60~80cm程度の自然石を最大3段積み上げている。胴木の前には杭などは打たれていなかった。胴木の間隔が広い部分があり、そこには拳大の礫を置き高さの調整を行っている。築石の後ろには飼石のような石材は確認されなかった。ただし、南側の一部では胴木組を使用せず、底面に地山面に直接根石を設置し石垣を築くところもある。

後列の石垣は前列より2~2.5m西側で、基底部には胴木組を配し、その上に3~4段築石を積み上げている。掘形には直径20cm程度で他の栗石よりも大きめの石が張り付くよう検出されている。シノギ角の部分は算木積みを意識したような石積みをしているが、未発達なものといえる。掘形には直径30~40cm程度の他の裏込めの栗石よりもやや大きい石材が地山面に沿って貼付けられるような状態で検出されている。甲府城などでみられる裏巻栗石のようなものと考えられる。二列石垣後列の石垣の一部は根石も無く、胴木組のみが検出されている。断面観察から後世に抜き取られたようである。二列石垣については特に大きな石材を使用しており、石垣の表面の対して明らかに控えを多くとって根石・築石を設置しており、強固な石垣を作る意識がみられる。南辺石垣の胴木組は二重石垣付近にのみ1本設置されているが、それ以外では確認されず地山面にそのまま根石を設置している。なお、南辺旧石垣主郭側石垣下で検出された胴木については、表皮も残る材もあり加工度は低い。胴木はいずれも水中での保存性の高いマツ属が選択されている。主郭側後列胴木組は推定で7本あり、胴木の大きさは、後列南側から長さ推定5.5m、幅20cm、長さ4.1m、幅25cm、長さ3.8m、幅20cm、あとは石垣の下になっており、詳細は不明である。また前列の胴木組は5本検出されており、南側から長さ3.9m、幅20cm、長さ4.0m、幅15cm、長



写真41 内堀(旧)二列石垣上層転石検出状況

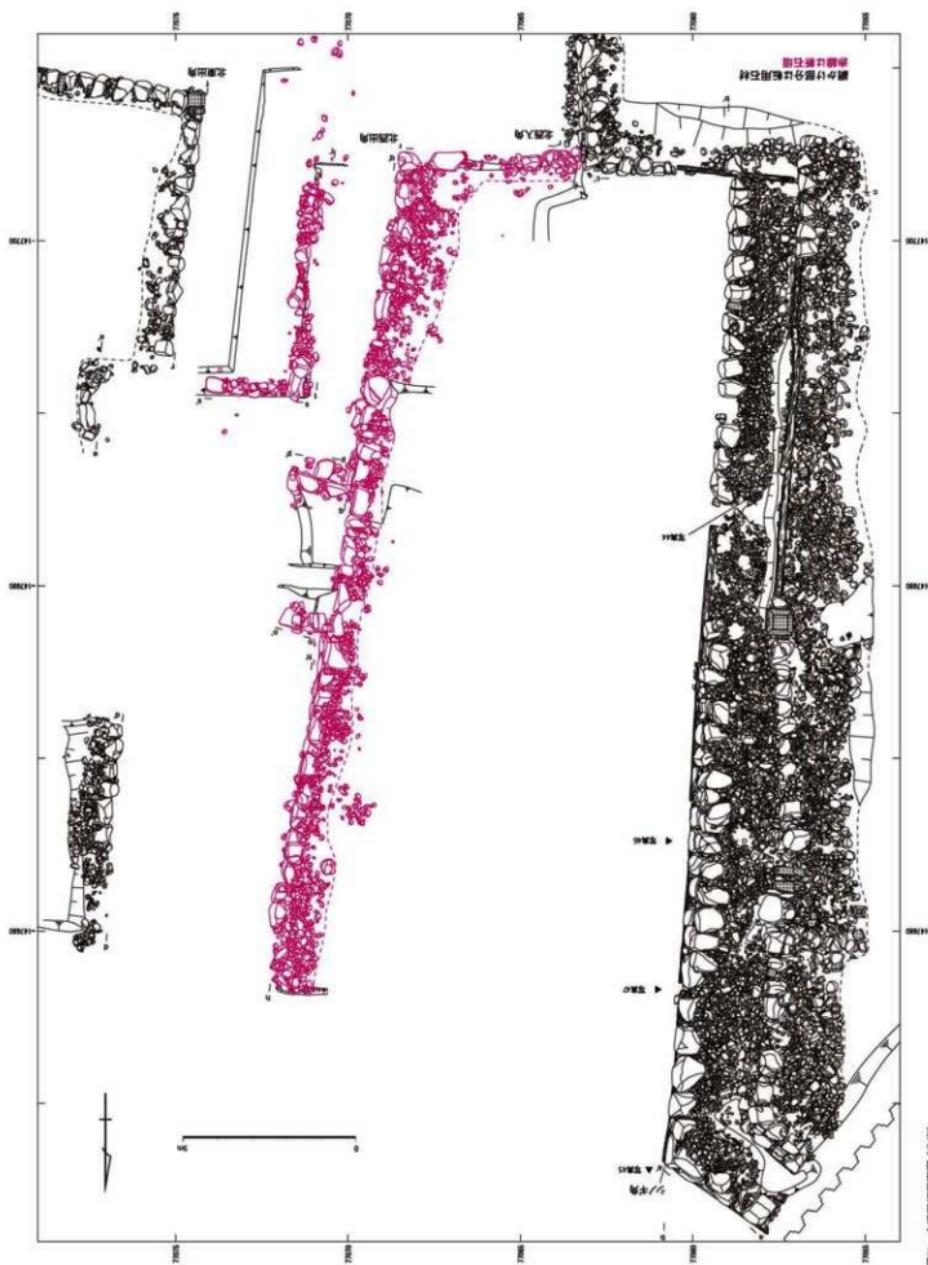
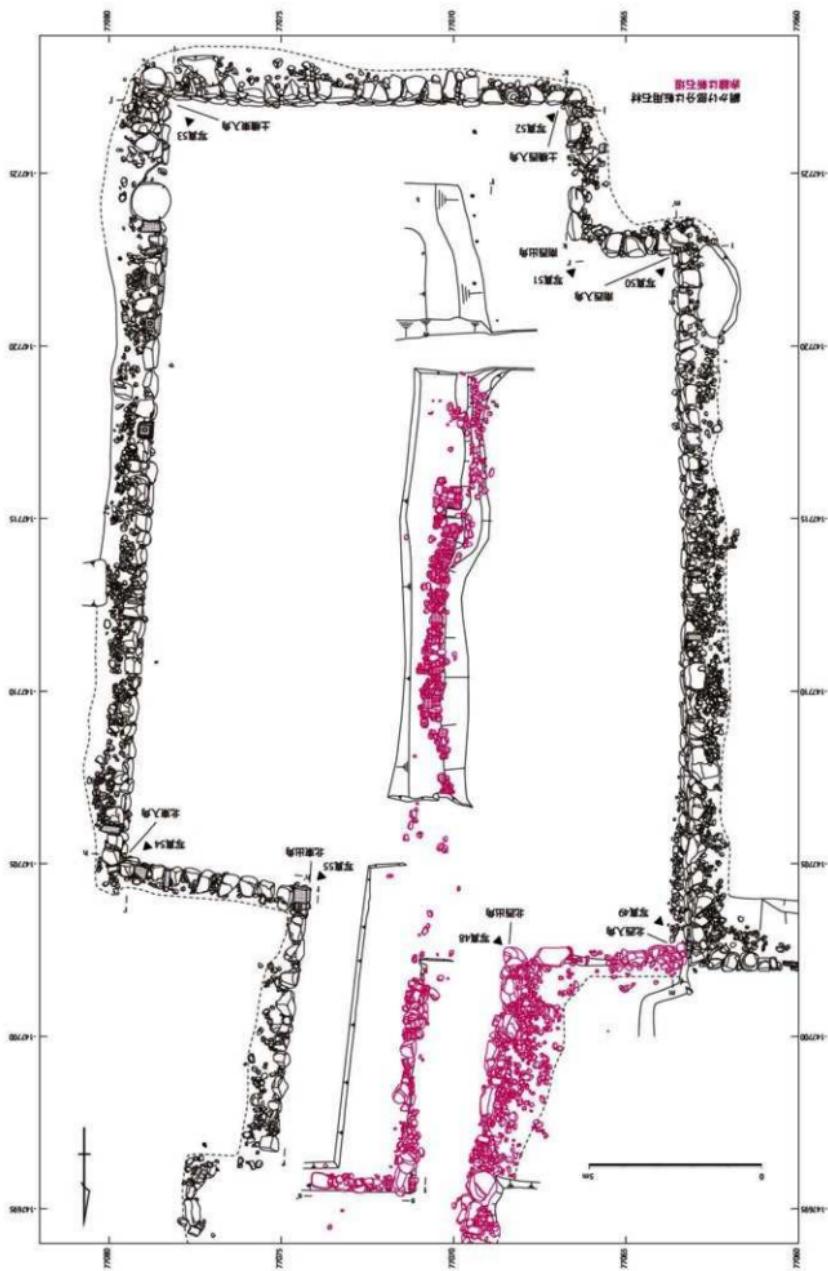


圖11 內廷平面圖(七半)

图2 内蒙古自治区



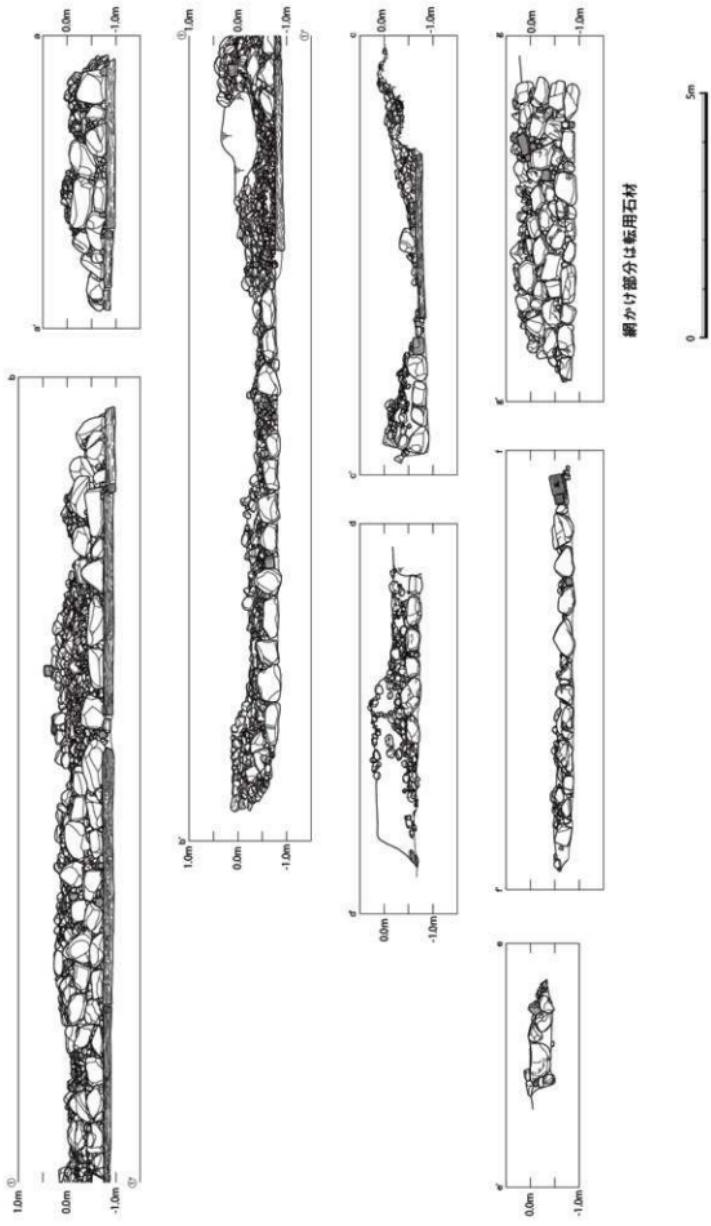


図83 内壁石垣立面図1

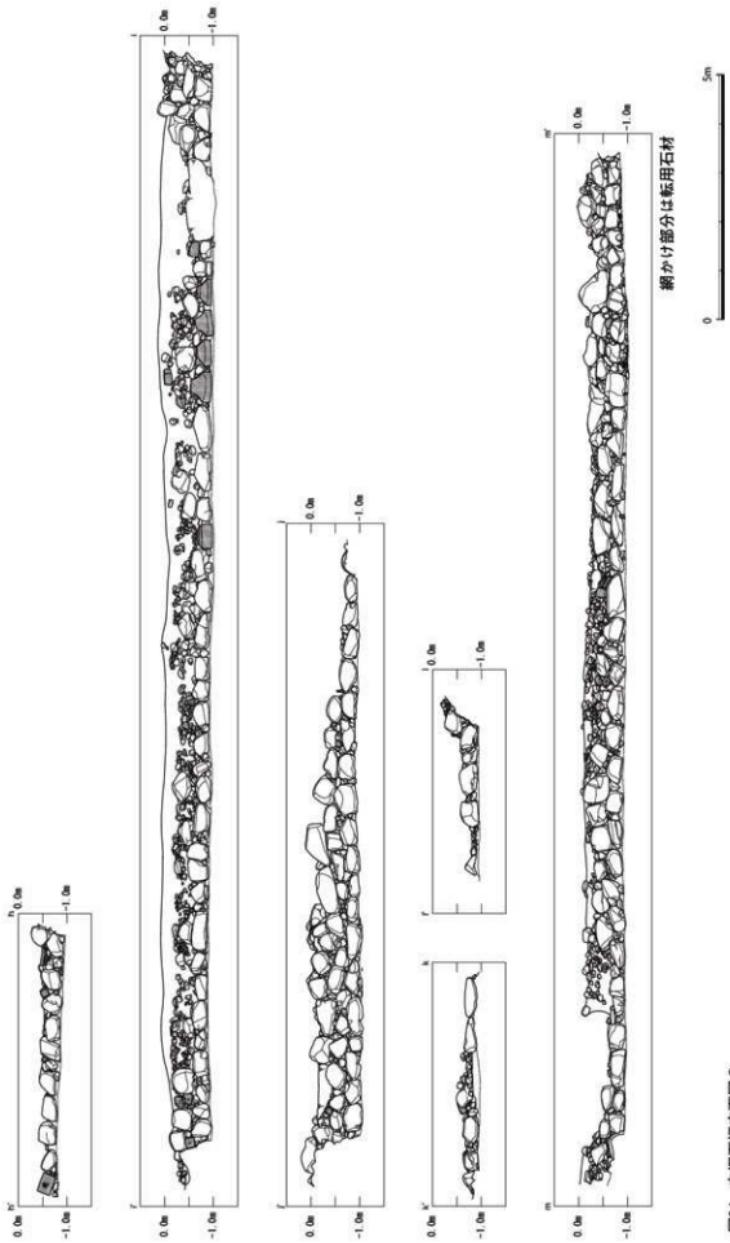


図84 内壁石垣立面図2

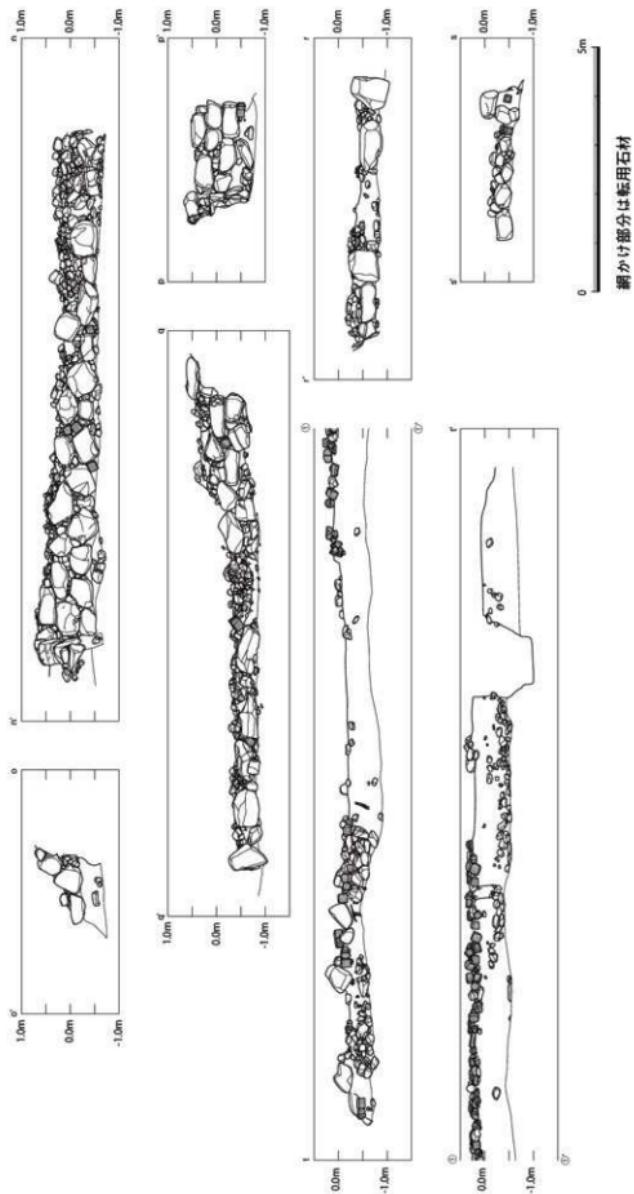


図85 内壁石垣立面図3

さ5.2m、幅20cm、長さ4.55m、幅20cm、長さ3.5m以上、幅20cmを測る。後列の胴木は小口がほぼ接している。小口がずれている箇所もあるが、おそらく横ずれを起こしたためと考えられる。胴木の前面には直径10cm程度の礫が入っており、胴木を固定するために設置したものと考えられる。しかし1ヶ所だけ70cmと間隔を広くとる場所がある。また北側の胴木南端に設置された根石については石の半分が胴木からはみ出している。そのため位置を保つために長さ30cm、高さ15cm程度の礫を据えている。根石の間も20cm程度の間隔が空いており、石垣普請の境目であったと考えられる。

一方、南辺の胴木組は長さ34m、幅15cmを測る丸太材が一本設置されているだけで、二列石垣の胴木組と比較すると貧弱といえる。南側石垣の胴木組の上に主郭側石垣前列の石垣が積み上げられているため、主郭側後列石垣と南辺石垣を構築したのちに、前列石垣を積み上げたと考えられる。



写真42 内堀(旧)主郭側二列石垣前列裏込



写真43 内堀(旧)副郭側南堆積状況



写真44 内堀(旧)主郭側二列石垣後列胴木



写真45 内堀(旧)主郭側二列石垣前列シノギ角



写真46 内堀(旧)主郭側二列石垣前列胴木



写真47 内堀(旧)主郭側二列石垣前列胴木



写真48 内堀（新）主郭側石垣北西出角



写真49 内堀（新）主郭側北西入角



写真50 内堀（旧）主郭側石垣南西入角



写真51 内堀（旧）主郭側石垣南西出角



写真52 内堀（旧）主郭側石垣土橋西入角



写真53 内堀（旧）副郭側石垣土橋東入角



写真54 内堀（旧）副郭側北東石垣入角



写真55 内堀（旧）副郭側北東出角

一方で土橋3より南側の石垣は北側と異なり直接地山面に根石を設置する。主郭側石垣は最高で3段分を検出しており、根石・築石には転用石材は使用せず、自然石のみを使用している。横目地が短く通るところもみられる。裏込や間詰石にはわずかながら一石五輪塔を使用している。石垣の角度は65°を測る。土橋2部分では最大で3段分を検出しており、底面に根石を横手方向に並べている箇所が多い。ここでも転用石材の使用はほとんど見られない。土橋の中央付近で弧状に横目地が通るところがあり、積み替えの可能性がある。石垣の角度は85°を測る。副郭側は土橋との接続部で3段を検出しているが、大半は1~2段を検出しているのみである。自然石を横手方向に並べている。南側の他の箇所と異なり転用石材の使用が目立つ。根石に五輪塔や層塔の笠部を並べて据える部分や、地輪を出角部分に据える部分がある。

**内堀（新）** 中央に土橋3を挟み、北側で幅5.0m、高さ1.2m（石垣3段分）を測る。南半は土橋から約15mまでは幅2.0m程度、高さ1.0m（最高で石垣2段分）を測るが、それより南では堀幅が広がり幅約6~7m、高さ0.4~1.1m（石垣1~3段分）を測る。底面の高さは、T.P.-0.5~0.6mを測る。北側では主郭側のみを造成し、南側は逆に副郭側を造成することによりそれぞれの敷地の拡張が図られている。内堀の下層堆積層の上に土橋3が構築されており、拡張直後には土橋3は存在しなかったと考えられる。

また、内堀に南接する土橋2では、石垣が南北に開削されたようで、土橋を横断するように暗灰色シルトが堆積し、石垣も一段分しか残っていない。元禄絵図に描かれている陣屋も同じような形状に描かれ、江戸時代中頃にはこのような形になったものと考えられる。ただし元禄絵図では、主郭に入る土橋より北側に副郭を横切る堀が描かれているが、今回の調査では確認されなかった。これまでの絵図の正確性から堀が存在しなかったとは考えにくく、おそらく從前建物の基礎により攪乱されたと考えられる。なお、土橋3北側の埋土には唐津焼などの17世紀初頭の遺物が出土せず、一方南側の埋土には初期伊万里・唐津焼の溝縁皿など17世紀前半の遺物が出土しているため、新段階は大きく2時期に分けられると考えられる。

**石垣（新）** 石垣列は自然石と石造物の転用石を積んで、隙間に間詰め石を施した野面積みである。新しい石垣は主に主郭側に残存しており、主に60~70cmの自然石を配し、その間に拳大ほどの自然石や一石五輪塔などの石造物で充填している。比較的大きな石材を使用しているが、控えは短く裏込めも少ない。土橋3よりも北側の主郭側の石垣では一部横目地が通っている所もあったが、野面積で築石間の隙間も大きく間詰石を多く入れてい



写真56 土橋3断面



写真57 土橋2上面内堀(新)埋土

る。割石もみられるが、花崗岩の自然面を生かした石垣となっている。石垣の角度は主郭側で70°、副郭側で67°を測る。一方、南側では主郭側石垣は大半は内堀（旧）の石垣をそのまま利用しているが、土橋3付近のみ、堀幅を狭くするように石垣を構築する。また、土橋3との接続部の南側主郭側石垣では、長辺10cm、深さ6cmを測る矢穴が残る石材も使用されている。石垣の勾配についても垂直に近い。副郭側は石垣がほとんど残存しておらず、わずかに裏込や杭列が確認されているのみである。ただし、肩部と考えられる場所では、長さ60cm程度の平石を内堀に沿わせるように配する部分があり、その下には多くの一石五輪塔が並べ置かれていた。大半の五輪塔は地輪底面を内堀側に向けて設置されていた。堀に沿って建てられた建物の基礎と考えられる。また、土橋3と並行して検出された副郭側石垣の一部は、北側に石垣面を向けているとえたが、他の石垣の石材として使用されている一石五輪塔がいずれも地輪底面を南側に向けて据えられているため、この石垣にも一石五輪塔が使われているおり、それも南側に地輪部を向けている。そのことから本来南側に向けた石垣の可能性があり、土橋の拡張石垣と考えられることもできる。

土橋3は、幅4.5m、高さは築石3段分で1.2m、長さは大半が攪乱されているが、副郭側まで繋がっていたとして6.0mとなる。石垣は、長さ70cm、幅30cm程度の花崗岩を横手に据え根石とし、その上にやや小さい石材を同じく横手方向に積む。根石部分は横目地が通るが、その上では目地が通らず、乱積み状になっている。石垣の設置にあたっては、城内側の石垣の前面に土橋の土盛りを行ってから、南北両端を掘り込み積み上げている。掘形も狭く、石垣の角度も急ではほぼ直角である。土橋の北側は根石の設置面が南側より高くT.P.-0.2mで、土橋の構築には南北で堀底に高低差があった可能性がある。



写真58 内堀(新)主郭側石垣(土橋3以北)



写真59 内堀(新)主郭側石垣土橋以南(狭小部)石垣



写真60 土橋3部分内堀(新)主郭側埋没石垣

**外堀** 城の南辺および東辺、さらに北東のシノギ角をへて北東辺の一部が確認された。主に閑屋町地区と接する南辺を南外堀、主に新町地区と接する東辺を東外堀とする。調査で確認された長さは計測可能部分で南外堀は115m、東外堀の土橋1より南側で30m、土橋1より北側で62m、(擾乱により損壊している場所も含む)である。なお、土橋1より北側の城外側を分、北東のシノギ角より北西部分については8m分を確認した。

**南外堀** 城内側の主郭と副郭を繋ぐ土橋2南側で2か所の隅角部を形成する。城内・城外ともに石垣が築かれている。城外側の石垣は西側の一部を除き、石垣が並行して前後に見つかっており、広範間にわたって石垣の造り替えが認められる。内堀と同様に前方で検出された石垣で囲われたものを南外堀(新)と後方で検出された石垣で囲われたものを南外堀(旧)と呼称し、それぞれの石垣についてもそれに準じる。

**南外堀(旧)** 長さ115mを測る。幅は城内側の石垣が2か所で鍵の手状に折れ曲がり隅角部を形成するため、西で18.5m、中央で14m、東で10mを測る。深さは残りの良い部分で1.2mである。底部は、ほぼ平坦であるが城内と城外の石垣の基底部に比高差がある場合は両側を繋ぐ緩い斜面となる。埋土は上層では疊混じりの砂質土が、下層では暗灰色シルトが堆積している。堀内の埋土の堆積状況から城内側の石垣は一度大きく崩されて土手(土塁)状に改変されたと考えられる。城内側石垣周辺では特に西側出角の付近で石垣と考えられる石材が多く検出されている。石垣改修時に崩されたまま埋めら

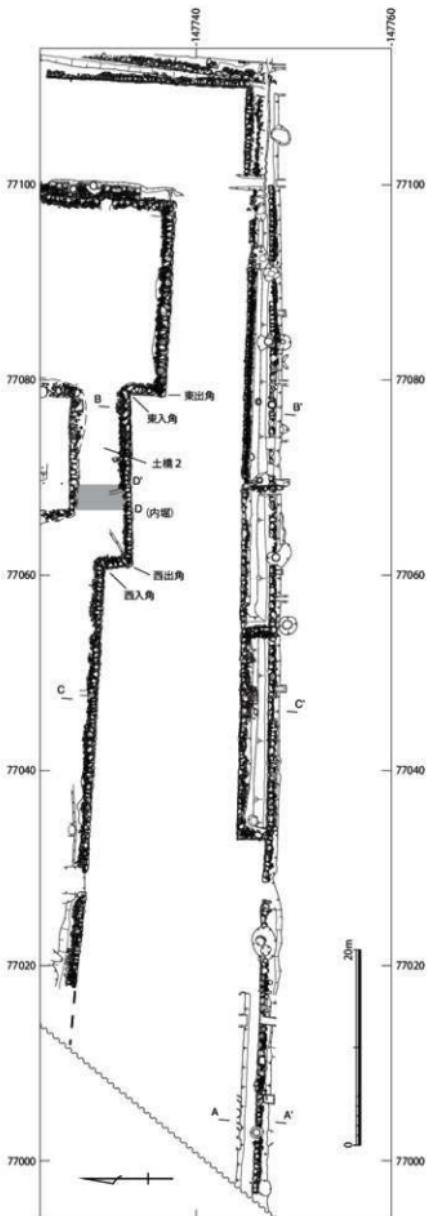


図86 南外堀平面図

れたものと考えられる。一方でそれ以東では石材の落ち込みが少ない。

石垣(旧) 城外側石垣は最高で築石4段分、残存高1.2mを測るが、大半は根石部分のみが残存しているだけである。石垣改修時に築石が抜き取られたものと考えられる。根石のみの場所も含め石垣の勾配は70~78°を測る。根石は長さ50~100cmを測る自然石を用い、地山面に直接据え置く。二段目に根石よりも大きな石材を積み上げている場所も見られる。横目目地は通っておらず、野面積みである。掘形は比較的狭い。城内側石垣は最高で築石3段分、残存高1.2mを測る。直接地山面に根石を据え付ける。転用石は大型のものが



写真61 南外堀(旧) 城外側石垣1



写真62 南外堀(旧) 城外側石垣2



写真63 南外堀(旧) 城外側石垣3



写真64 南外堀(旧) 城外側石垣4



写真65 南外堀城内側石垣西入角



写真66 南外堀城内側石垣東入角



写真67 南外堀城内側石垣西出角



写真68 南外堀城内側石垣東出角

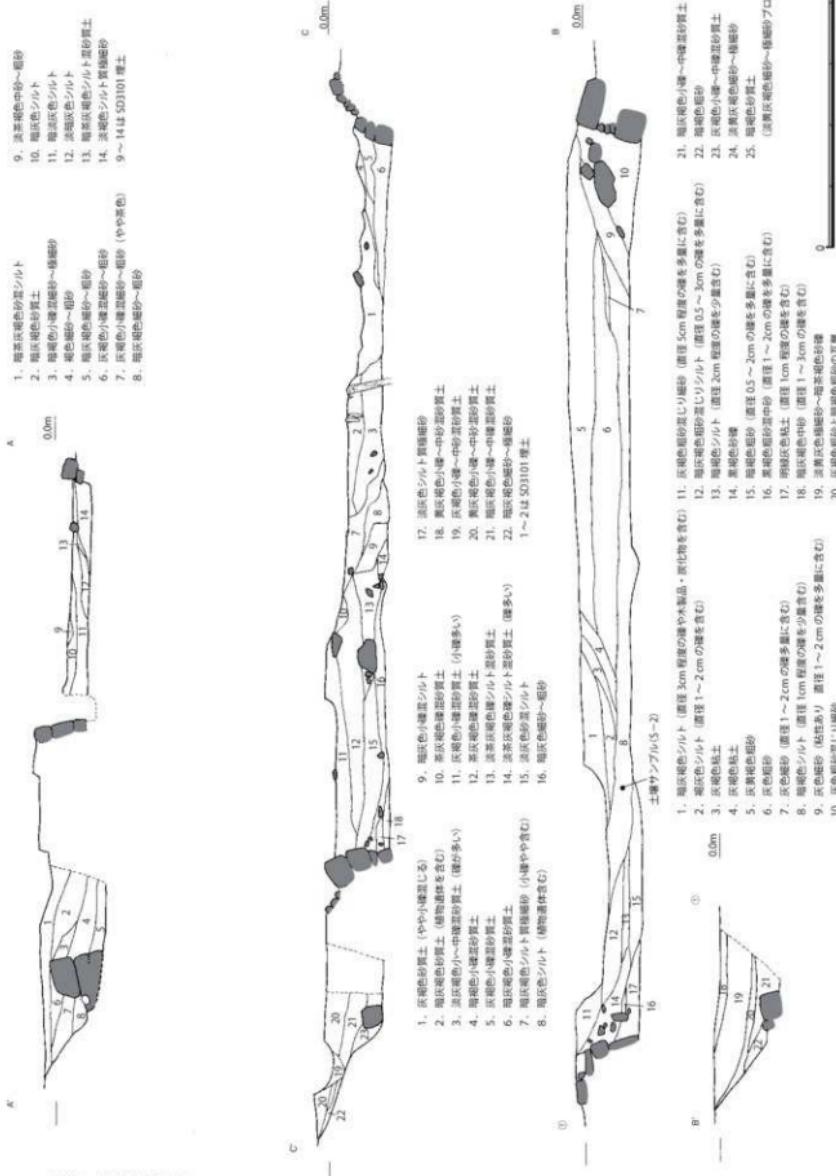


図87 南外堀断面図

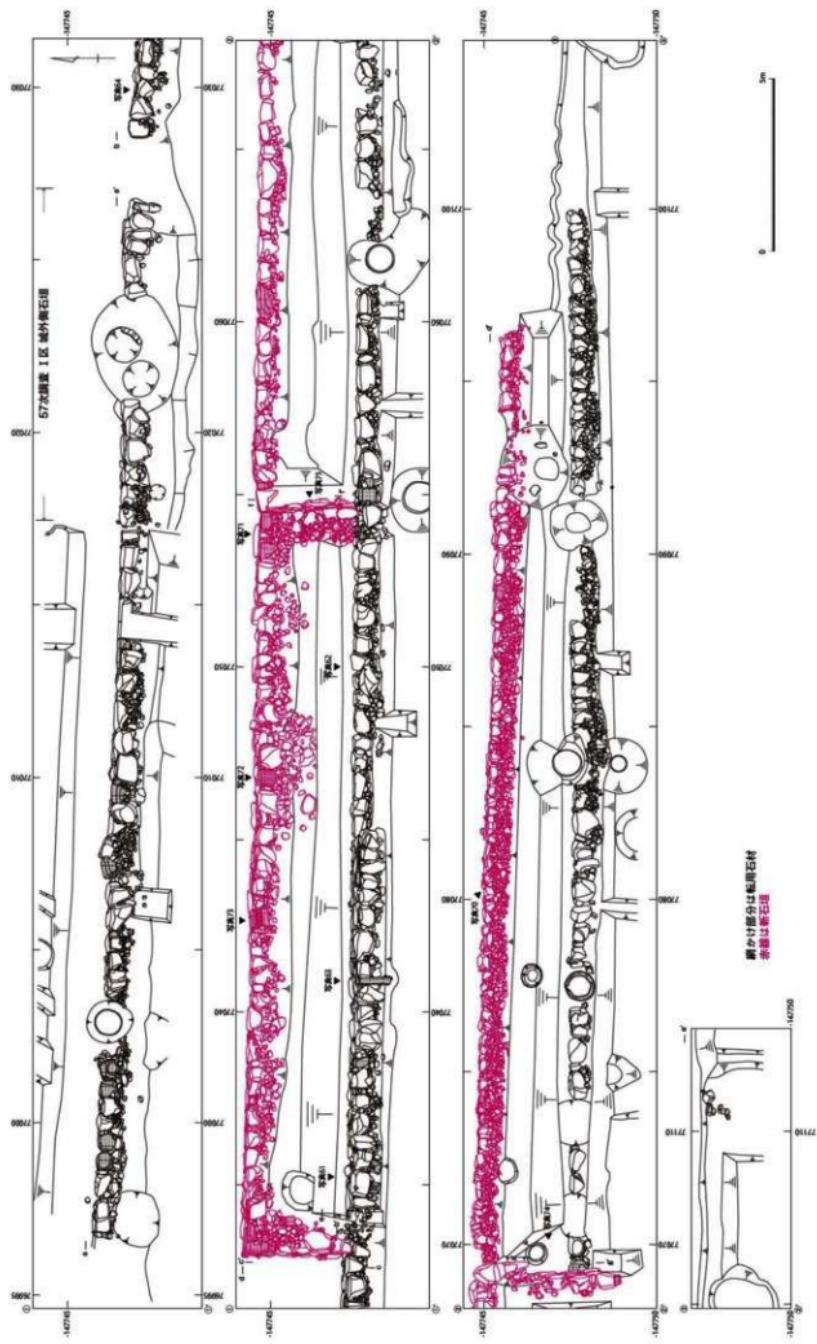
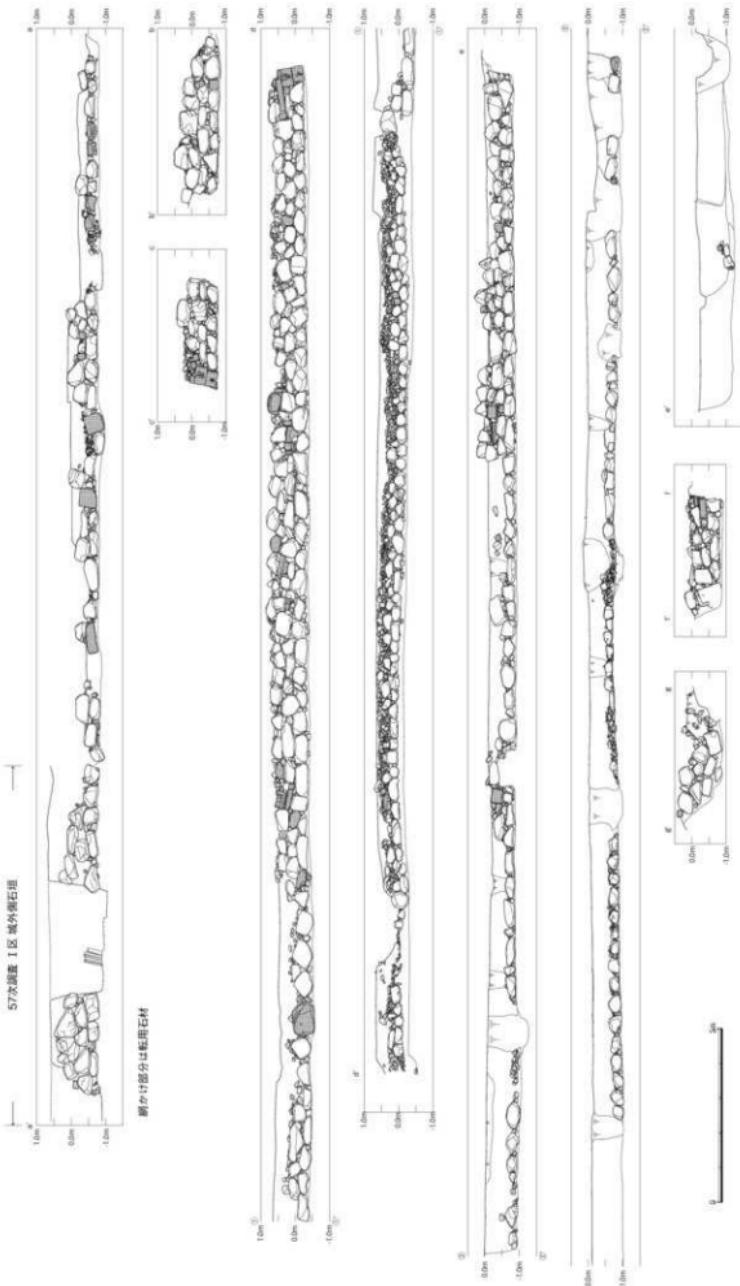


図86 南外壁石柱断面図

57次調査 I区 砂利層石堆



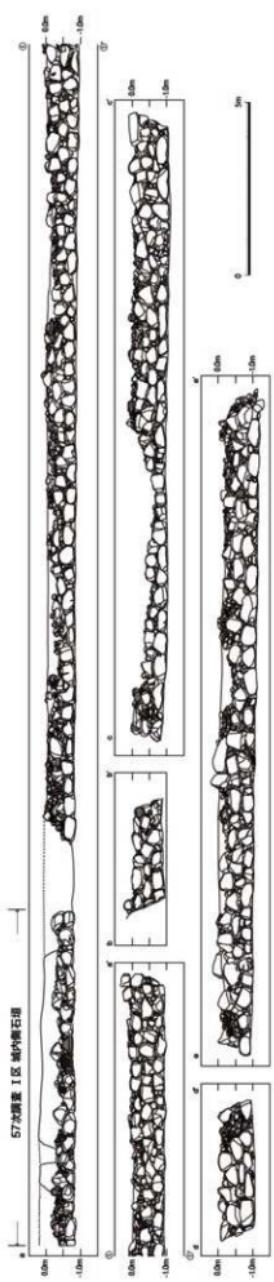
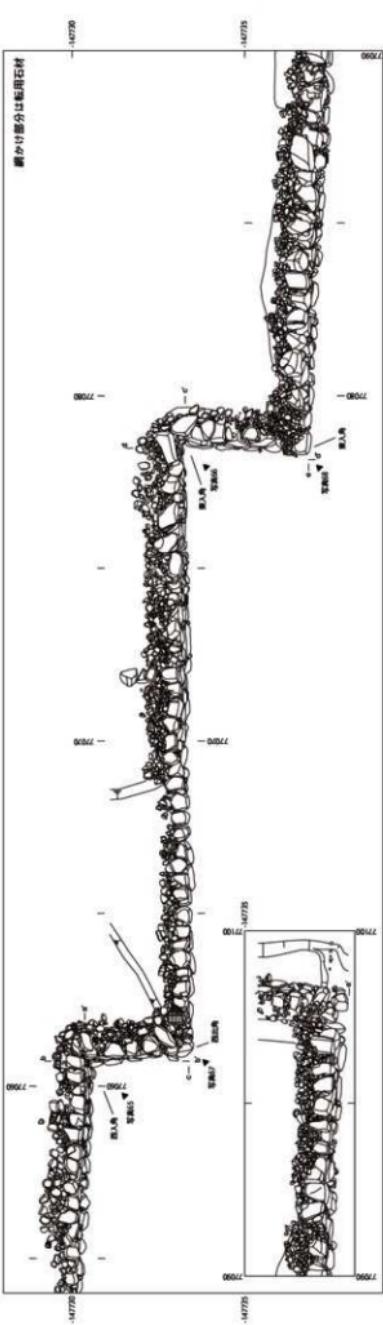
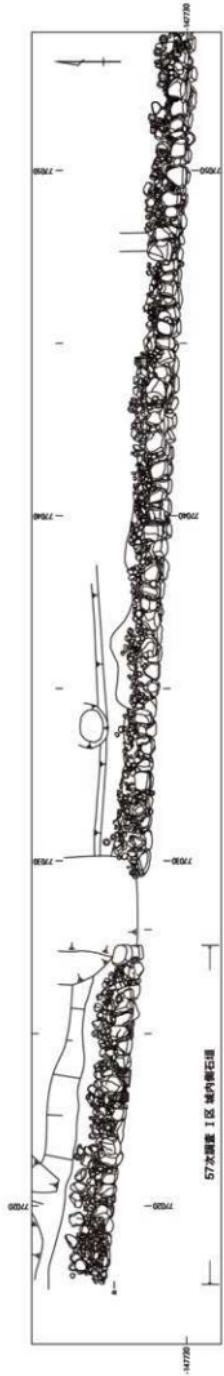


图90 南外牆內側石垣平、立面圖

若干みられるが、大半は一石五輪塔を小割にして裏込や間詰石に使用している。城内側には2か所の出角・入角があるが、いずれも出角部分が損壊している。そのため、算木積みが行われているかは不明である。西側の出角部を見ると、b-b'列の石垣は損壊が少なく、築石が算木状に積まれていたように見える。一方で東側の出角部は、根石を残し上部の築石が損壊しているおり、裏込の栗石が露出した状態になっている。ただ根石には角を意識した石材が選ばれているようである。また、土橋2では皿状に横目地が通る場所があり、いずれかの時期に改修を行ったものと考えられる。

南外堀（新） 幅は西で14m、中央で12m、東で8mを測る。城外側の石垣はいずれかの時期に3段階に旧石垣から北側に3m拡張したようである。1回目は長さ22m、2回目は1回目の東端に継ぎ足すようにして長さ37m、そして3回目に東外堀に真っ直ぐに接続させる。1及び2回目は張り出し状の形状で、

城内側石垣の隅角部と対応するように普請されている。1回目の拡張の形状からは橋梁の基部とも考えられるが、城内側に対応する張出し部もないため、その用途は不明である。さらに堀が埋まる前に城外側石垣を13mの幅で1石分北側に拡張する状況も確認されている。埋土下層には江戸時代後期頃の遺物を多量に含む粘土層が堆積しており、埋戻しまでに一定の期間あったと考えられる。また、築城時期に近い遺物が出土しない点は、57次調査でも検討したように頻繁に堀の埋土を浚えていた結果と考えられる。

石垣（新） 城外側のみで新段階の石垣を検出しておらず、長さ約64m、最高で築石4段分、高さ1.2mを測る。石材は自然石と石仏などの転用石材を使用している。野面積みであるが、東側の改修石垣については、ほぼ横目地が通る布積み状を呈している。（新）城外側石垣の出角には五輪塔の地輪を根石にして、その上にもう一回り大きい地輪を積み上げている。同様の工法は京都府福知山城などでも見られる。先述したように築石には転用石材が散見されるが、次章でも触れる大型の地蔵菩薩立像が分割され使用されていた。（写真71～73）

根石・築石とともに石垣面に対して控えは短く、石垣面に長手の面を使用している。石垣面は所々で築石が孕みも見られ、面は一定していない。また、東側の最終改修石垣は、それまでの石材と比べ一回り小さい30～50cmの石材を利用し、転用石材は少ない。石垣の隙間が狭く、間詰石も少ない。石垣の角度は城外側では70°～80°を測る。



写真69 南外堀城内側土橋2以西堆積状況



写真70 南外堀（新）城外側石垣断面

城内側はこの段階の石垣は見られないが、先述の通り西側の出角より西側に石垣の石材と考えられる石材が石垣の前に堆積している状況がみられる。兵庫陣屋絵図には、この部分は直線的に描かれている。このことから、ある時期に石垣の築石を壊して、a-a'列を埋め、西側の出角・入角を埋めて成形したものと考えられる。



写真71 南外堀（新）城外側石垣（転用石材）1

写真72 南外堀（新）城外側石垣（転用石材）2



写真74 南外堀城外側石垣g-g'列



写真73 南外堀（新）城外側石垣（転用石材）3

写真75 南外堀城外側石垣f-f'列

**東外堀** 南側は最大幅15.0mで、長さは約110mを測る。中央部では新町地区と閑屋町地区との間に街路3に接続する土橋1により分断されている。

埋土は、大きく上層と下層に分けられる。上層は最上層で黄灰色シルトが堆積する土間状の部分があるが、大半は茶色～灰色系シルトが堆積している。鉛滓、羽口などの鍛冶関連の遺物が多く出土した場所も見られる。下層は暗灰色粘土で多量の陶磁器類と瓦と木製品などが出土している。また、土橋1より南側の副郭側の石垣では直上に砂礫が堆積しており、人為的に石垣を覆い隠すように埋めたものと考えられる。

**東外堀（旧）** 土橋1北側で幅15.0m、南側で幅11～14mを測る。北側は約70m、南側は約30mで、東外堀の幅は土橋1より北側で14.5mを測る。ただし、北側の城外側石垣が從前建物の攪乱および石垣改修時の石材の抜き取りにより、損壊しているため、北側の堀幅はほとんど分らなかった。北端では内堀のシノギ角と対応するよう、鈍角に約140°西側に折れ曲がる。

**石垣** 石垣の高さは最高で築石2段分、約1mを測る。なお、57次調査で検出した城外側石垣は最高で築石5段分、1.5mを測る。土橋1付近では副郭側の石垣を内堀と同じように二列に仕上げる。地山面上に根石を据え置き石垣を積み上げる。また前列と後列の間には底面まで主に直径10cm前後の円縄が詰め込まれている。土橋1付近から南側の石垣については五輪塔など転用石の使用が比較的多い。中には礎石・石燈籠も使用されている。石垣は掘形を掘り積み上げられたと断面観察から判断される。根石は50～80cm程度の花崗岩を横手方向に地山面上に直接設置

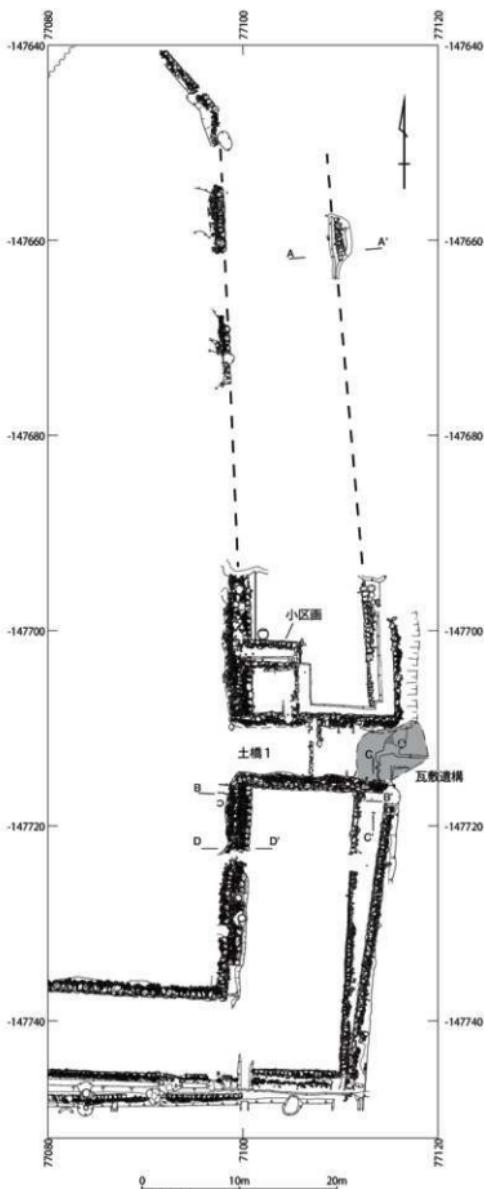


図91 東外堀平面図

する。築石は横目地が通らない部分が多く、築石の隙間も大きい。積み方は他の石垣と比べてやや雑な印象を受ける。副郭側二列石垣の前列では根石の間を10cm程度空け、直径10cm程度の間詰石を三段程度積み上げている。城外側の石垣については、土橋1北側では10m程度を検出したのみに留まる。北端で若干西側に湾曲したようであったが、石材が後世に抜き取られており、詳細は不明である。また、城外側石垣については、石造物の転用が多い。兵庫津遺跡第57次調査報告書に詳しい。

石垣の角度は、北側副郭側で73°、土橋北側副郭側で62°、同城外側で65°、土橋南側副郭側で後列63°、同前列50°、土橋1北側は70°前後、同南側は60°前後を測る。



写真76 東外堀(旧)城内側石垣シノギ角



写真77 東外堀(旧)城外側石垣土橋1入角



写真78 東外堀(旧)城内側石垣土橋1入角

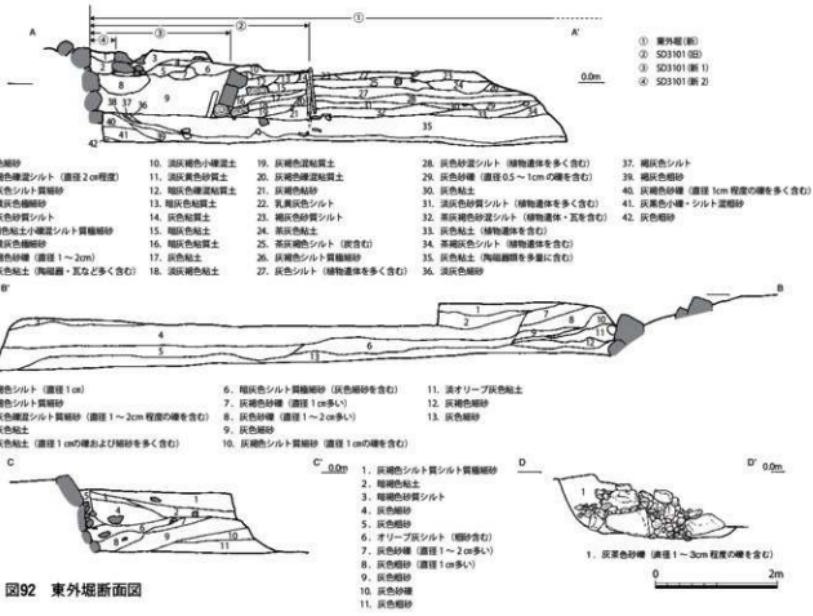
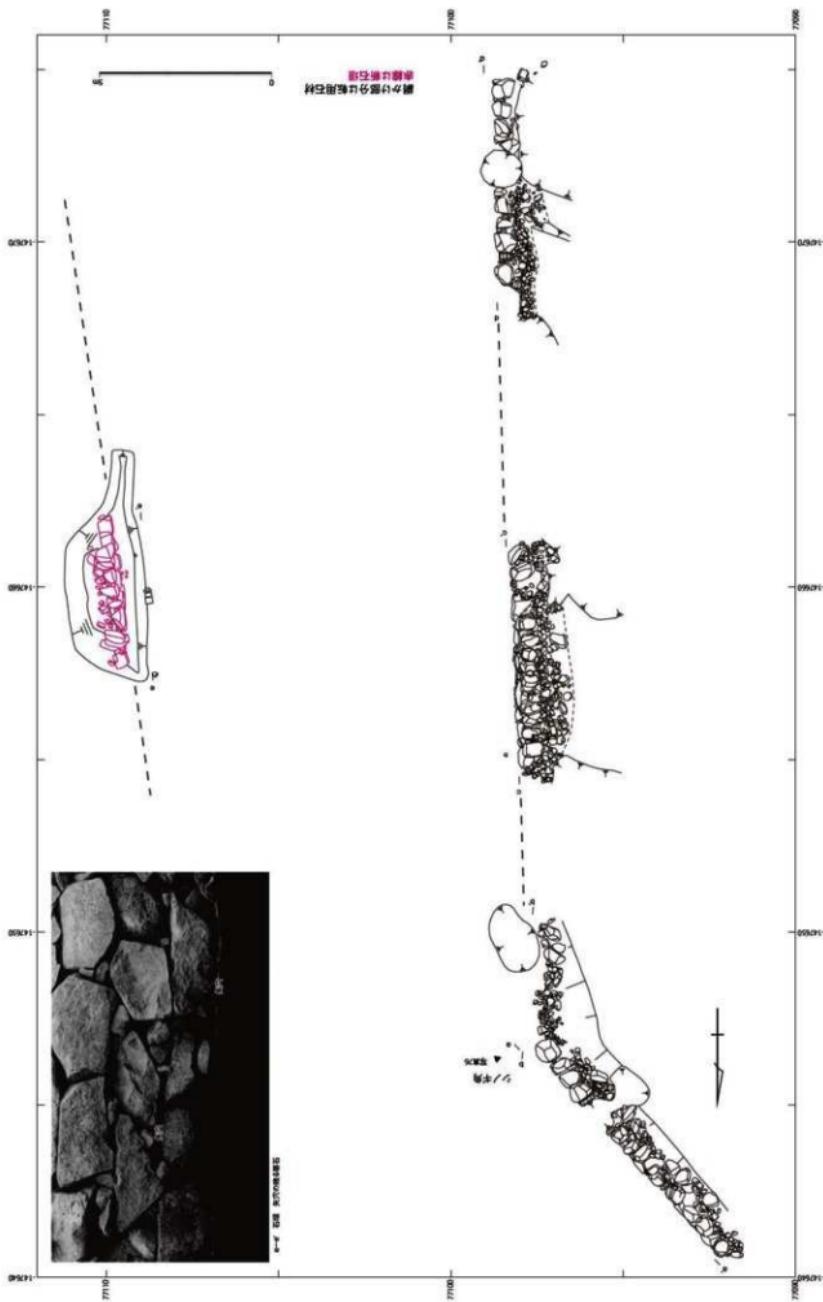


図92 東外堀断面図

图13 外壁平面图(北向)



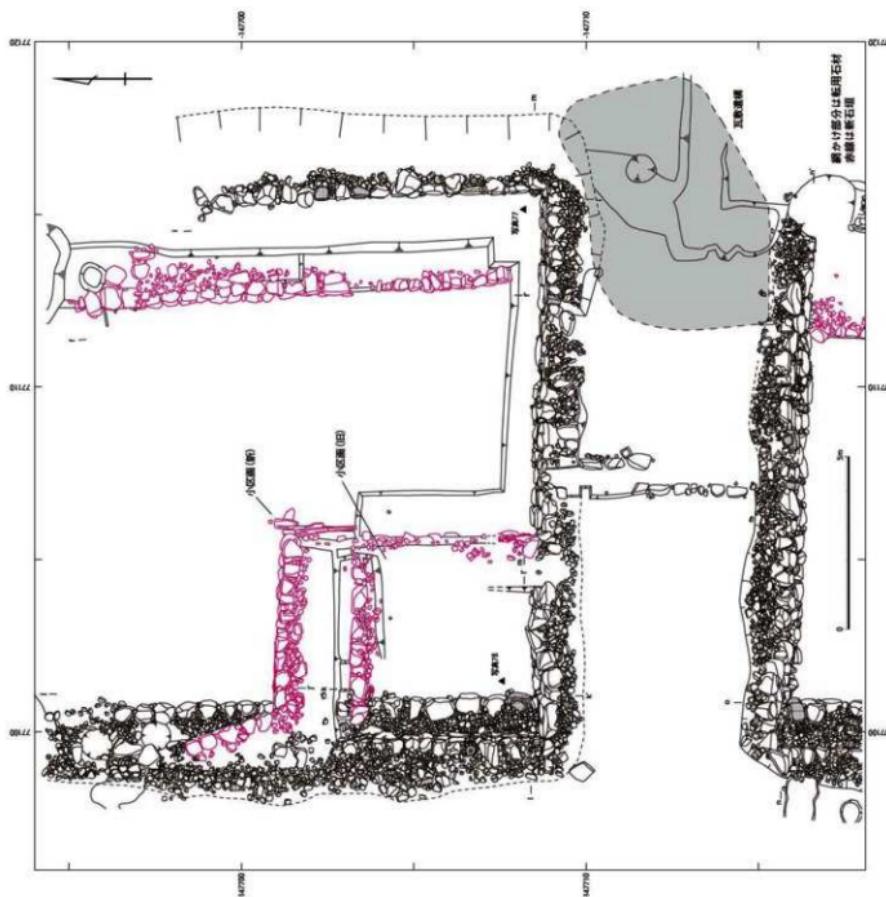


図34 東外壁平面図(中央部)

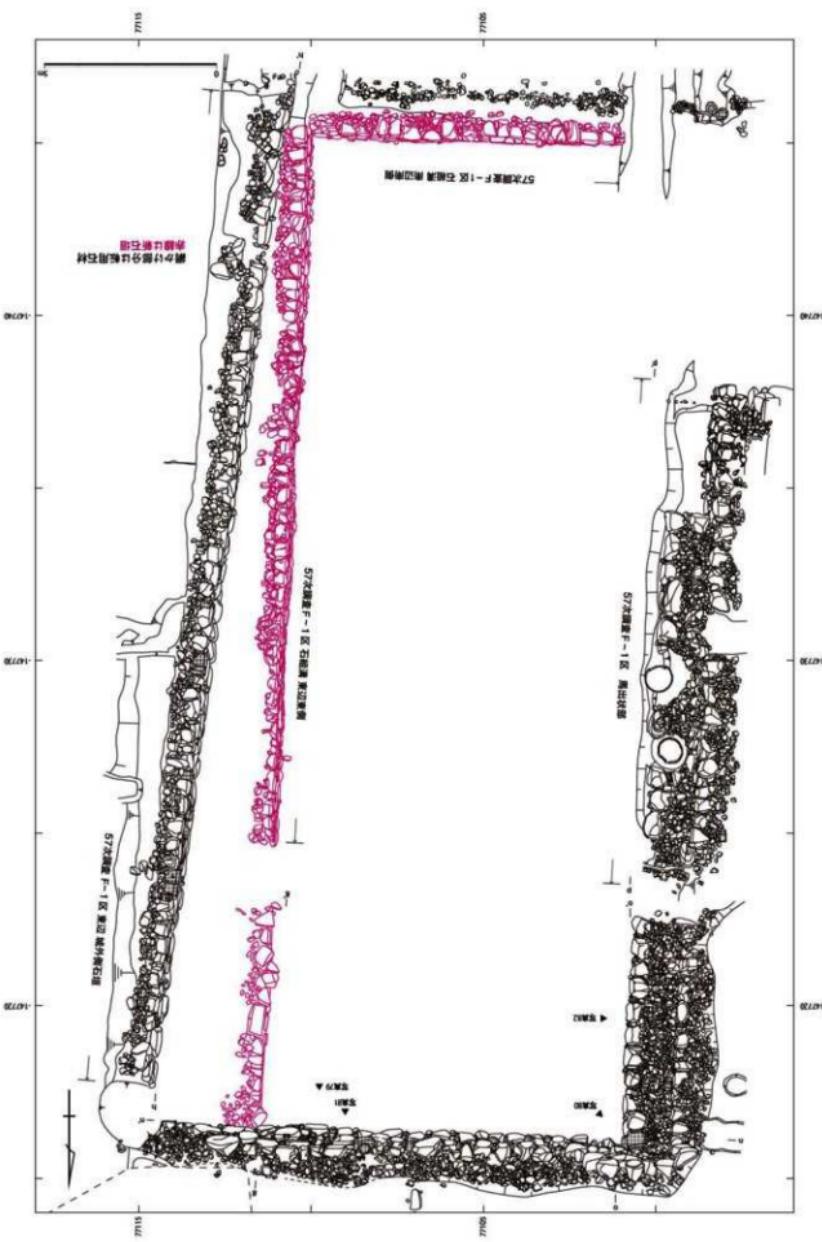


图265 南外延平面图(局部)

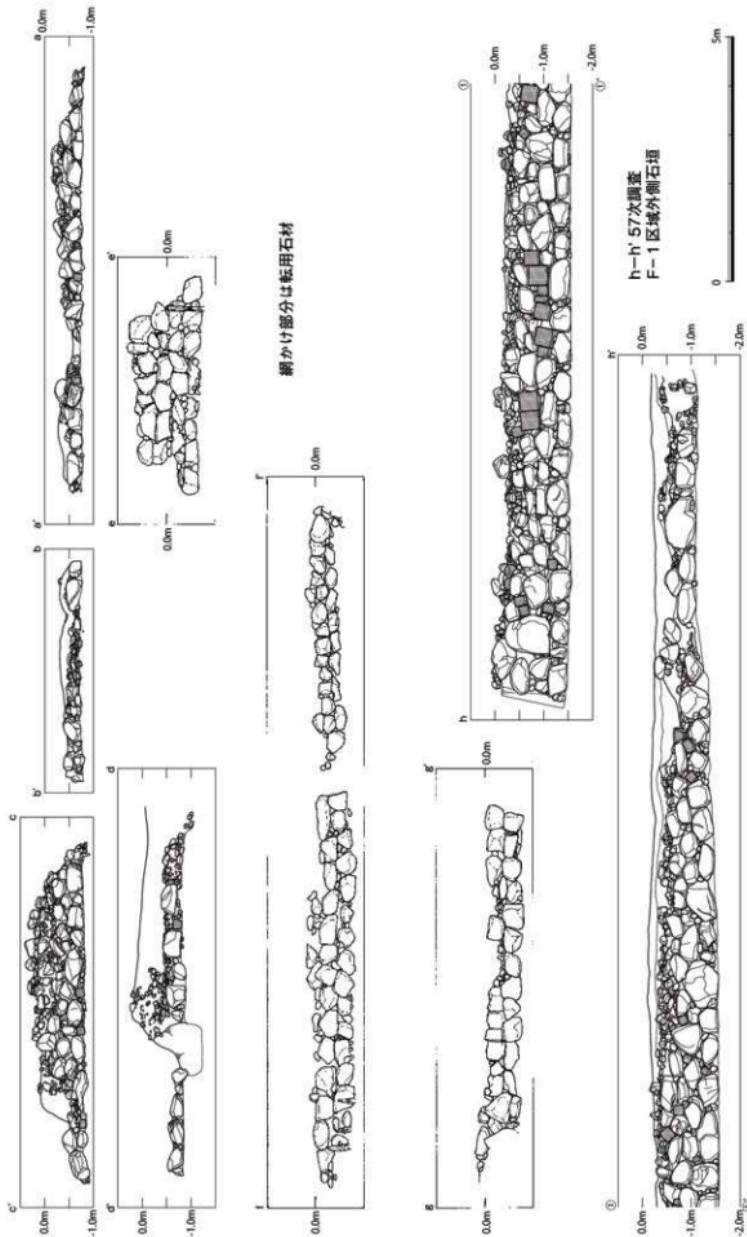


図96 東外堀石垣立面図 1

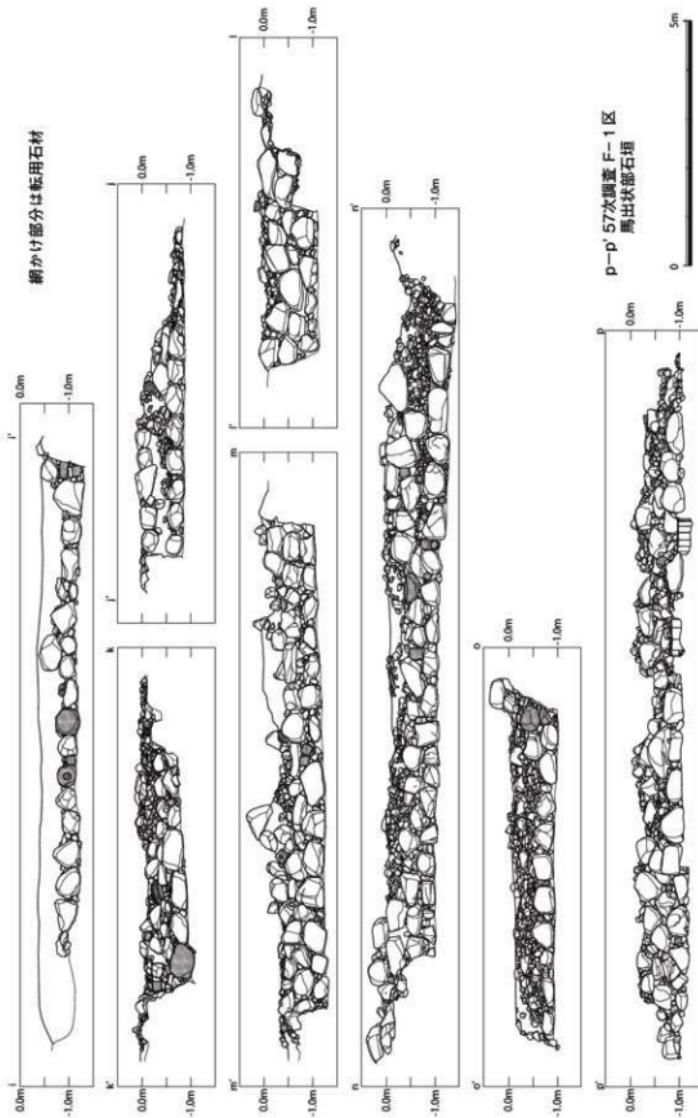


図97 東外堀石垣立面図2

**東外堀（新）** 幅は土橋1北側で、シノギ角部の近くで約11m、小区画北側の部分では幅13m、土橋1南側10m程度を測る。東外堀が一時的にシルト層で埋まった後に城外側石垣より3m西に石垣を構築している。堀の幅が尼崎藩兵庫陣屋図にも六間及び七間とあり、絵図との齟齬はない。

**石垣** 城外側のみに新段階の石垣を検出している。東外堀北の城外側石垣e-e'列には、長辺13



写真79 東外堀（新）城外側石垣

cm、深さ12cm、矢穴の間隔4cmの連続する矢穴を残す石材わずかではあるが使用されている。慶長～元和期ごろのものと考えられ、築城後の改修石垣と考えられる。割石の布積みで、石材の控えも短く裏込めの栗石も少ない。石垣の角度は直角に近い。また、中央から南側はほとんどの石材が40～50cmで大まかに大きさを揃え、切石もしくは面の整った石材で積み上げる。いずれの石垣も胴木組ではなく、直接地面から積み上げている。一方城内側石垣は、はじめに触れたように、砂礫により埋められ露出していないかったと考えられる。

**土橋1** 幅約8.0m、長さ18.0m、高さ1.2mを測る。築石は最高で4段分を検出している。土橋中央付近に直交する石列を検出している。上面が平坦なものが多く、構造物基礎もしくは石段・踏み石などであった可能性があり、土橋上面は削平が少なかったと考えられる。南面石垣n-n'列の東側中央付近で斜めに目地が入り石垣の積み方が粗くなる。改修に伴う積み替えと考えられる。また断割り調査により、土盛により土橋を成形後、石垣を構築したことが判明している。東外堀土橋1北側の石垣は土橋1の石垣を積み上げたのちに構築されている。

**小区画** 土橋1の北側に付属して小区画を検出した。元禄絵図に見られる「時ノカ子」に伴う区画と考えられる。検出状況から大きく二時期に分けられる。堀と同様に（旧）と（新）と呼称する。



写真80 土橋1南面石垣東入角



写真81 土橋1南面石垣東側



写真82 東外堀（旧）城内側石垣



写真83 土橋1中央石列

(古)段階での規模は一辺5.5mの正方形で、検出高は底面から約90cmを測る。北及び東面に石垣を設ける。石垣に使用されている石材の大きさは、80cm程度の自然石を使用している。東側では最高で3段分を検出しており、基底部には胴木見られない。また、北側では最高で2段分を検出しており、その下に直径20cm程度の丸太材を利用した胴木組が確認されている。断ち割り調査を行っていないため、胴木組の詳細は不明である。

一方(新)段階は、東西約6.0m、南北約7.5mの長方形で、検出高は底面から約1.1mを測る。石垣の石材の大きさは、約50cmと(古)段階よりもやや小ぶりである。東石垣は北側を古段階よりも50cm程度東側に拡張されているようであるが築石は見られない。北側に胴木組が残存しており、20cm程度の丸太材を直交に組み合わせる。それ以外は後世に撤去され底面に表皮が残るものである。またその西側にも一回り小ぶりの丸太材を検出しており、2本が並列に設置されたようである。北石垣では径50cmの丸太材を前列に、径30cmの丸太材を後列に据付、その前に胴木がずれないように直径15cm程度の杭を打ち込んでいた。いずれの石垣裏込にも10~15cm程度の円礫が充填されていた。(新)段階で使用されている胴木はマツ属である。



写真84 東外堀(新) 小区画(新) 東石垣胴木組



写真85 東外堀(新) 小区画(新) 北石垣胴木組

瓦敷遺構 土橋1の東側、東外堀城外側石垣と接続する部分で東西8.0m程度、南北約5.0mの範囲で検出された遺構である。一部はSD3101などで攪乱されている。土橋1の接続部ではT.P.0.0m前後で、東側になだらかに傾斜しており、T.P.-0.6m前後を測る。瓦敷の厚みは土橋1側では20cm、それより東側では30cm程度である。土橋1の南側石垣の裏込めよりも下層で検出されている。土橋1は改修の可能性があるため、当初の土橋築造時に整地のために敷かれた可能性がある。出土した丸瓦の凹面はコビキAで、縫い紐もしくは吊紐が明晰に残っている。軒瓦には花隈城跡から出土したものと同文のものが出土している。



写真86 土橋1 瓦敷遺構



写真87 土橋1 瓦敷遺構出土状況

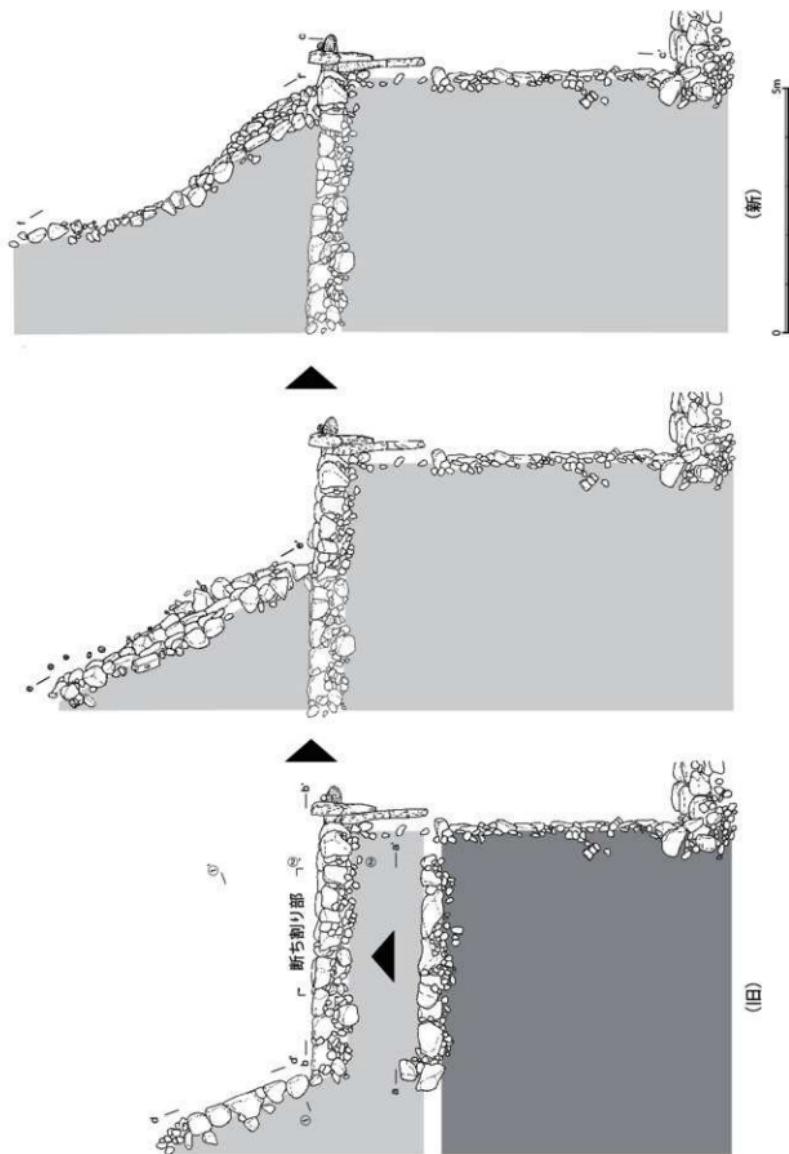
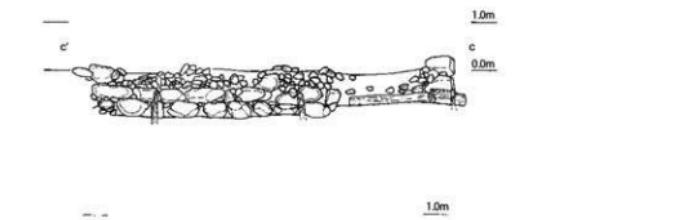
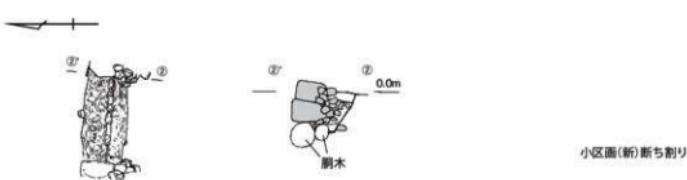


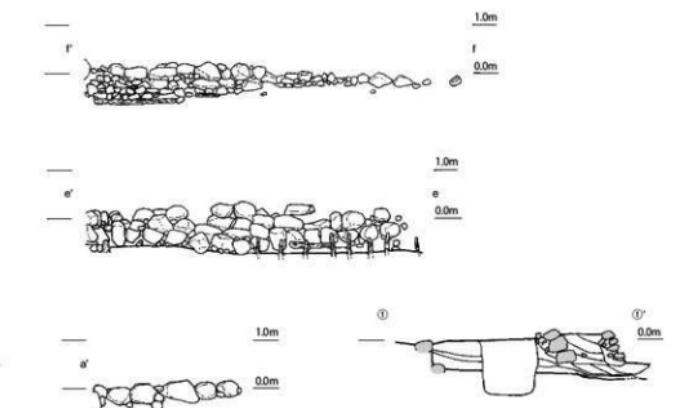
図98 東外堀(新) 小区画平面図



小区面(新)石垣立面



小区面(新)断ち割り



小区面付属石垣立面

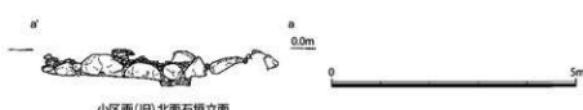


図99 東外堀(新) 小区面断面・立面図

## 主郭・副郭検出遺構

主郭については、削平によってほとんど遺構は確認されなかった。ただ、石組井戸については、最終の埋没時期は江戸時代後期であるものの、井戸枠に転用石材を使用し規模も他の井戸より大きいことから、築城期頃まで遡る可能性がある。主郭の東側と北側の外側に配される副郭は築城期で幅約20m、改修後で幅約30mを測る。

副郭の南側の部分に礎石列や井戸、カマドなどがみられる。北側には一部礎石かと考えられる石列があるが、時期については検討をする。それ以外に石組みや土坑を多く検出しているが、大半は江戸時代後半で明和上知以後の町屋段階の所産と考えられる。

SE3401 主郭部分北側で検出された円形の石組井戸である。掘形の大きさは長径2.1m、短径1.7m、石組内は直径70cm、検出面からの深さは約1.8mを測る。検出面下約1.0mまでは石組で、石材には、20cm程度の自然石のほかに五輪塔の地輪・火輪といった石造物が多量に使用されている。五輪塔は地輪の底面を井戸内部に向けるように組まれている。また、底部には1.0m以下は幅10cm程度の板材を組み合わせた桶を1段分据えている。なお、それ以下には曲物などは確認されなかった。旧内堀を埋め戻した段階の敷地に構築されている井戸であるため、江戸時代以降のもので、さらに石造物を使用することから、江戸時代でも前半のものと考えられる。

SE3402 主郭北側検出された円形の石組井戸である。掘形は直径3.0m前後で、石組内は直径1.0m、検出面からの深さ1.9mを測る。先述したSE3401と同様の構造を持つもので、1.5m下までは石組、以下は幅10cm程度の板材を組み合わせた桶を据えている。石組は裏込にこそ拳大の礎が使用されているが、ほとんどが一石五輪塔などの石造物で構築されており、井戸内面は地輪の底面を内面に向かって整然と組まれている。石造物は一石五輪塔の他、長足五輪塔、宝篋印塔返花座が使用されている。同様の井戸は、兵庫県三田市三田城跡にも残っている。井戸内にも一石五輪塔が崩落していることから、本来は検出面よりも高い位置にあったものと考えられる。石組付近までは五輪塔や人頭大の礎を含むような砂およびシルトが堆積しており、一度に埋め戻されたものと考えられる。埋土からは、肥前系染付二重網目文碗などが出土しているが、一方で16世紀代と考えられる瓦が多く出土しており、井戸の覆屋もしくは周間に古相の瓦を使用した建物があったと考えられる。比較的大きな構造の井戸であるが、尼崎藩兵庫陣屋図などにも記されていない。

SE3403 副郭南側で検出され直径1.2m、深さ1.2m以上を測る石組の井戸である。検出面から50cm下までは20~30cm程度の自然石と一石五輪塔など転用石材を使用して円形に3段積み上げている。一石五輪塔は、地輪の底面を井戸内面に向けておかれている。内径50cmを測る。それより下層については、直径60cm、深さ80cm以上の木製の桶を設置している。埋土内からは上部の石組と同程度の石が比較的多く出土しており、井戸を埋める際に上部の石積を破壊して埋めたものと考えられる。尼崎藩兵庫陣屋図(大判)に描かれているものと考えられる。

SE3201 副郭部分で内堀(新)以降に作



写真88 SE3201

られた石組井戸である。直径1.1m程度の円形を呈し、上層には直径10~30cm程度の円礫を2段ほど円形に積み、その中に直径40cm程度の桶を設置している。桶板の大きさ長さ40cm前後、幅10cm、厚さ2.0cmを測る。桶の底には特別な構造はなかった。北側には円礫の代わりに1辺10cm、長さ60cmの角材を置き、半裁五輪塔表面を下にして設置している。半裁五輪塔は、空輪と地輪部が欠損した状態で使用されていた。

**SK3402** 副郭北側で検出した方形石敷である。大きさは一辺約1.5mを測る。石材は20~40cm程度の自然石を上面が平になるように敷き詰め、その隙間に直径10cm程度の礫を充填している。石材の表面には火を受けたような形跡はなく、石の上には黄灰色細砂を突き固め、被覆している。何らかの構造物の基礎構造のようなものかと考えられる。

**SK3401** 副郭北側で検出した方形の石組遺構である。大きさは内法で南北1.0m以上、東西1.5m以上、深さ70cmの掘形は石積の法尻から50cm程度離れたところで検出している。石積は南北と東西でやや異なっている。南北石積では直径35cm程度の比較的丸い自然石を根石に使用しているが、東西石積では長さ30~40cm、幅7~15cm程度の細長い自然石をほぼ直角に積み上げてい る。東西石積については、最高で6段分を検出しており、横目地が通っている。南北方向の石積はほとんどが根石のみが残存するだけであったので、詳細な積み上げ状況は不明である。底面には石敷きなどは施されず地山のままであった。

**SK3403** 副郭南側で検出された不定形の浅い落ち込みである。大きさは長さ1.9m、幅0.75~1.2m、深さ約10cmを測る。底面からやや浮いた状態で、ほぼ完形の備前窯の擂鉢と德利が出土している。

**SK3404** 副郭南側で検出された石組遺構である。二重に石組みがされており、大きさは外側で、長さ1.6m、幅1.5m、内側で長さ1.1m以上、幅35cmを測る。石材には切石及び転用石が用いられている。切石の大きさは1辺が30cm程度のものが使用され、内側の石材は長さをそのままに幅が0.15mの細長い形状のものが使用されている。また外側には長さ1.55m、幅0.2mの長足五輪塔が使われている。内側の石組内には10cm以下の礫が床面に敷かれたよ うに検出され、その上層には炭化物を含む土壌が堆積している。検出状況から建物に付属する炉のようなものと考えられる。

**SK3405** 副郭南側で検出された石組遺構である。一辺50cm程度の板状の転用石により「コ」の字形に開い、それに取りつくように長さ2.0mの石列が検出された。石組内には埋没時に埋めたと考えられる五輪塔の水輪が1点出土している。



写真89 SK3405



写真90 SK3401

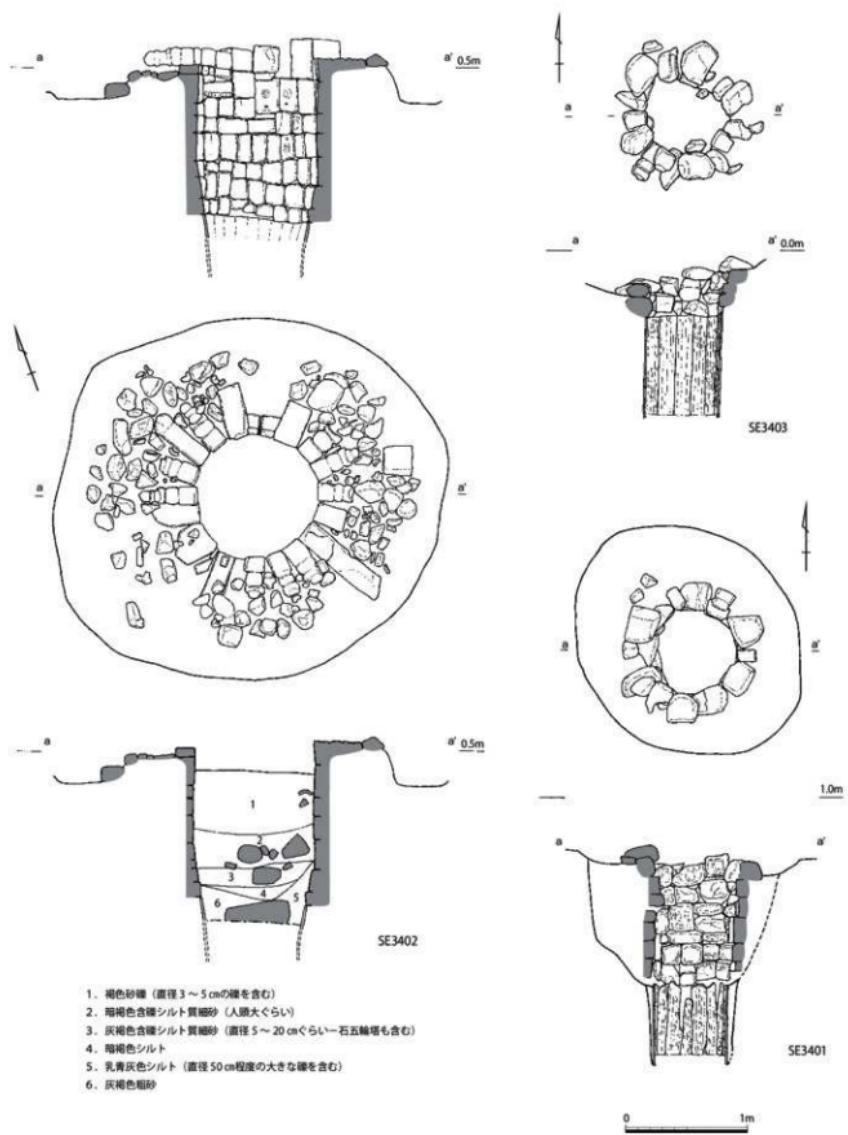


図100 城郭内造構平・断面図

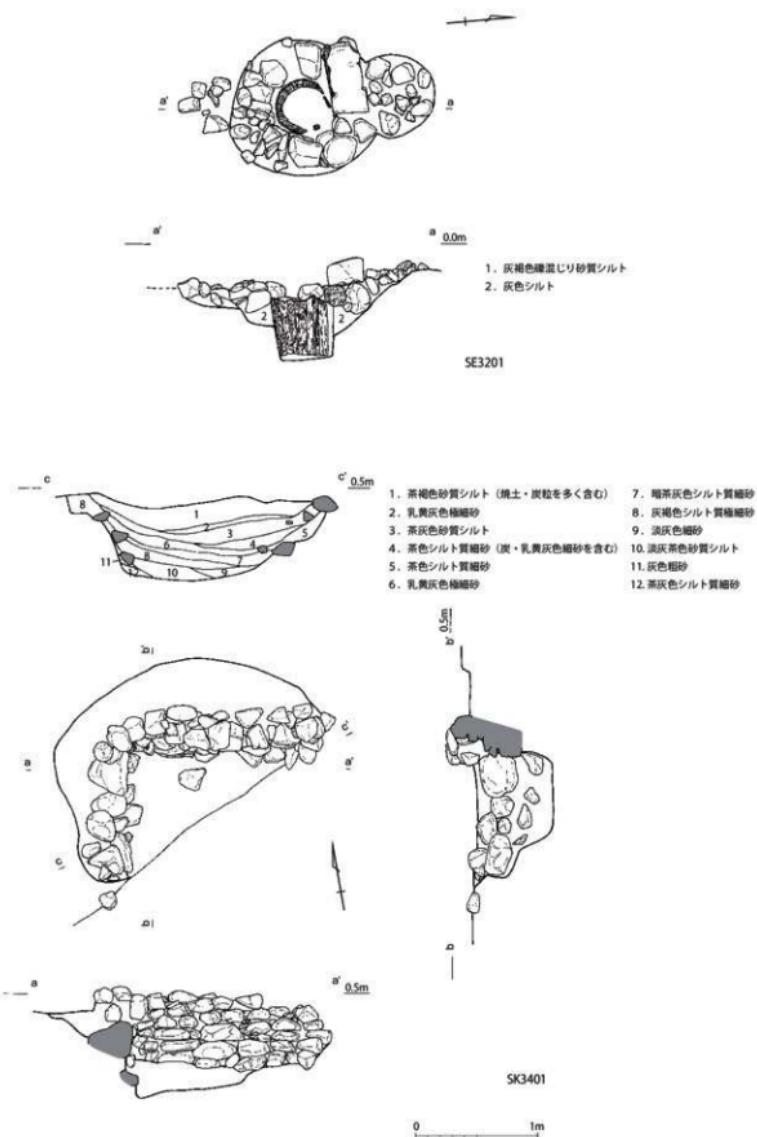


図101 城郭内構造平・断面図2

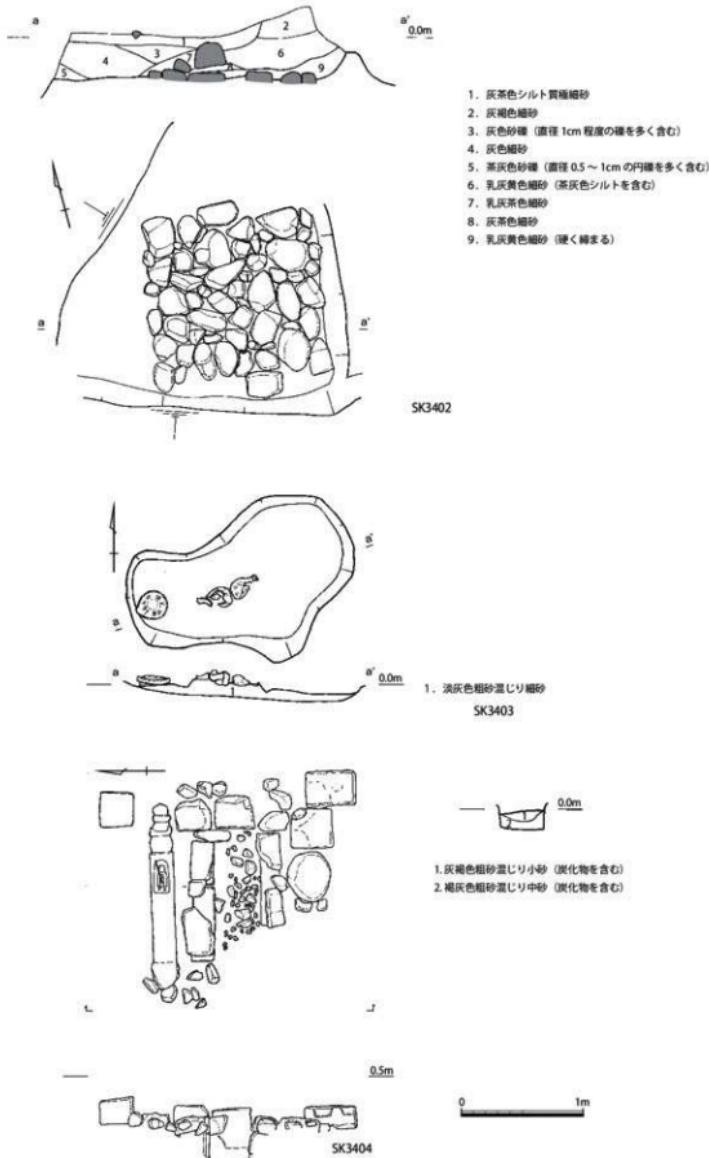


図102 城郭内造構平・断面図3

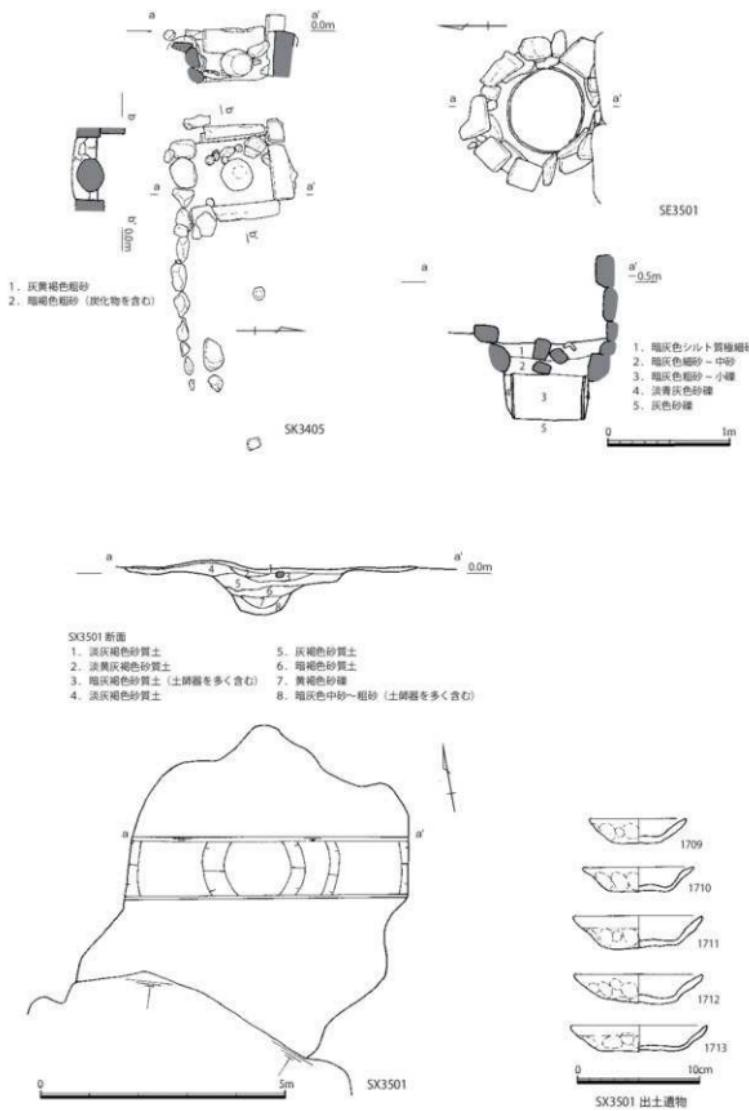


図103 兵庫城地区第IV～V期遺構平・断面図

## 第4節 兵庫城石垣等石材の材質

橋本清一（元 京都府立山城郷土資料館）

### 1. はじめに

兵庫津遺跡第62次調査により出土した15~17世紀頃の石積や兵庫城の石垣等の石材の材質を現地にて測定した結果を報告する。石材の採取地域を推定し、さらにそれらの石材の方向と傾きを測定して石積や石組みを考察する。

### 2. 測定調査位置（図104）

測定調査位置を図104に示す。測定調査遺構名と遺構の内容は次のとおりである。

石垣1：16世紀の兵庫城の石垣で、築城期と考えられる。2列に構築する重厚な造り。

石垣2：16世紀の兵庫城の石垣で、

築城期と考えられる。

石垣3：16世紀の兵庫城の石垣で、

築城期と考えられる。土橋

1の南側のコーナー部。2

列に構築されている石垣。

石垣4：16世紀の兵庫城の石垣で、

築城期と考えられる。

石垣5：17世紀に兵庫城の堀を一部

分埋めた時の石垣。

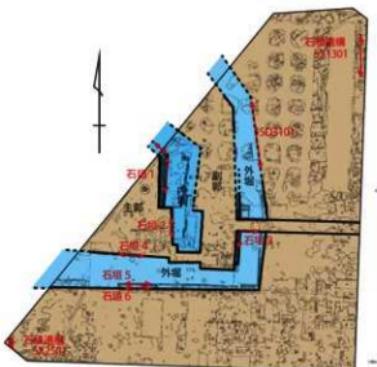


図104 石材調査位置図



写真91 石垣の石材  
(上) 布引花崗閃綠岩  
(下) 六甲花崗岩

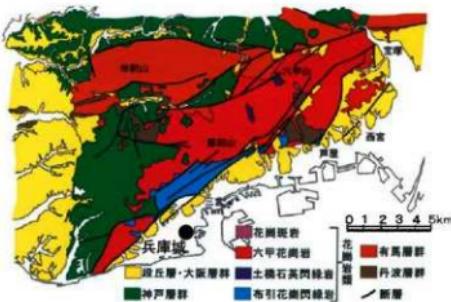


図105 兵庫城と六甲山地周辺の地質図  
兵庫県立人と自然の博物館「六甲」研究グループ編  
「自然環境ウォッチング「六甲山」」(神戸新聞総合出版  
センター発行, 2001) より引用、加筆

石垣6：16世紀の兵庫城の石垣で、築城期と考えられる。

石積遺構(SX2501)：15世紀頃の石積遺構

石積遺構(SX1301)：17世紀前半の石積の石列。

SD3101：18世紀に兵庫城の外堀を埋めて幅の狭くなった溝。

### 3. 石材の測定項目と方法

石垣等の石材について、次の項目を測定した。

測定項目：岩石名、大きさ、円磨度、風化度、備考(その他の特徴)。

大きさ(寸法)は、長径、中径、短径を折尺を使用して測定した。なお、石垣の石材の殆どは土中に埋もれて奥の形がわからないことが多いので、鉄製のピンボールを突き刺しながら感触によって形を決定して、大きさ(寸法)を求めた。

岩石名は、多量の石材を処理するため、肉眼観察を主として、ルーペによる観察は補助的に行った。なお、岩石の風化の激しいものは、転石等を利用して、風化による鉱物等の変化を観察し、参考にして岩石名を決定した。

円磨度は図106のKrumbein(1941)の段階図と照合して、石材のすべての面を平均して総合的に値を求める。0.1の殆どほとんど円磨されていないものから1.0の完全に円磨された球までの10段階に分類されている。

風化度は、表3の橋本(1980a・1993)による肉眼観察による風化度の区分を用いて、新鮮・弱風化・中風化・強風化の4段階で決定した。

### 4. 石材の測定結果と考察

石材の測定結果を表2~10に示す。

9か所のうち、石積遺構(SX1301)と悪水抜溝は紙数の制約上、省略する。

岩石名 測定調査位置の9か所からは、花崗閃緑岩、花崗岩、花崗岩質アブライト、ホルンフェルス、珪岩、チャート、砂岩、珪質頁岩~珪質粘板岩の8種類がみられる。

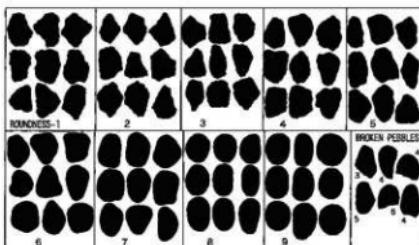


図106 石材の円磨度の段階図(KRUMBEIN, 1941)

表3 肉眼観察による岩石の風化度の区分(橋本, 1980a・1993)

風化度	特徴
新鮮	岩石の表面および内部がほとんど風化していないもの。ただし、表面が少し変色している程度のものは含める。顕微鏡による観察では、ある種の鉱物は風化している場合がある。
弱風化	岩石の表面や節理、層理面などの各種の面・線構造に沿って、厚さ数ミリ程度かそれ以上の風化層を生じているもの。ハンマーなどで割ると、岩石の中央部に近づくほど新鮮になっている。
中風化	岩石の風化が表面から中心にまで達しているが、ハンマーなどを使わないと割れないもの。
強風化	岩石の風化が表面から中心にまで達しており、その程度が激しいので、ナイフなどで容易に削れたり、手で握りつぶせるほどにやわらかくなっているもの。

花崗岩類は2種類みられ、花崗閃緑岩（写真91の上）は石英と斜長石が多く、カリ長石が少ないので大きな特徴であり、有色鉱物は角閃石が多く、他に黒雲母がみられる。花崗岩は（写真91の下）石英、カリ長石、斜長石がほぼ同程度の量比であり、有色鉱物は黒雲母が多く、角閃石が少ない。花崗岩質アブライトは、花崗岩類の割れ目に入ってきた脈岩である。ホルンフェルスは泥質起源のものが多く、珪岩はチャート起源であり、いずれも花崗岩のマグマによる熱変成岩である。チャート、砂岩、珪質頁岩～珪質粘板岩は丹波層群か相当層のものである。

兵庫城の石垣1、石垣2、石垣3、石垣5、石垣6では、花崗閃緑岩は87～38%と極めて多いが、花崗岩は15～2%と少ない他、ホルンフェルスは2～1%と極めて少ない。それに対して石垣4、石積遺構（SX2501）、石積遺構（SX1301）、SD3101では、花崗岩は83～48%と極めて多いが、花崗閃緑岩は38～9%と少ない他、ホルンフェルスは24～2%と少なく、チャート、珪岩、珪質頁岩、砂岩、花崗岩質アブライトは6～3%と極めて少ない。

花崗岩類は、六甲山地に広く分布し、そのうち、花崗閃緑岩は六甲山地の南西の南斜面に広く分布しており、布引花崗閃緑岩と呼ばれている。花崗岩は六甲山地全体に広く分布し、六甲花崗岩と呼ばれている。（図105 兵庫城と六甲山地周辺の地質図）

円磨度 測定調査位置9か所では、岩石種類ごとの円磨度にはあまり差がないようである。そのため、全岩石でみると、0.4～0.6の範囲内に集中して分布し、0.1～0.2は少なく、また、0.7～0.9も少ない。

六甲山地では、花崗岩類は深層風化によって、玉ねぎの皮状風化が広範囲に及んでおり、見かけ上、よく円磨が進んでいるように見えるが、詳しく観察すると、その表面の凹凸が激しい。それに対して、水中での円磨は表面が滑らかになっているので、どちらであるかが区別できる。

六甲山地で、風化が進んでない新鮮な岩石の分布する谷などでは、直交ないしは斜交する岩石の節理面により、直方体の各面の交わる角は鋭くとがった全く円磨されてないものから始まり、谷川を下るにしたがって円磨度が高く進んでいる。0.4～0.6程度のものは、六甲山地内の谷川と、山地から出た扇状地に見られる砾である。0.7～0.9程度のものは、この扇状地端から沖積平野と海岸付近に見られるものである。

風化度 測定調査位置9か所では、岩石ごとの風化度にはあまり差がない。ほとんどが肉眼的に風化が見られない「新鮮」であり、「弱風化」程度のものは少ないが稀である。

六甲山地の花崗岩類の分布する広範囲では、深層風化によって、風化が進み、手で簡単に握りつぶせるほどの砂のような「強風化」した状態がよく見られる。

石垣や石積に使用する石材として、真砂土化した「強風化」の砂状化したものや、「中風化」の石材は強度が極めて弱いために、現場で選別の時に採取されていない。結果として、「新鮮」な石材が優先的に現場で選ばれており、若干、強度が落ちる「弱風化」の石材が少ないか、稀な程度に採取されている。

## 5. 石垣、石積の石材の採取地域の推定

兵庫城の石垣、石積は六甲山地の堅固な岩盤からタガネ等の道具を使って切り離すように切り出された石材は見られない。

これらの石材のうち、布引花崗閃綠岩は、六甲山地の南西の南斜面に広く分布し、六甲花崗岩は、六甲山地に広く分布する。これらの花崗岩類は兵庫城の約3~4km北方の六甲山地から南流する比較的大きな谷川の中に堆積した巨礫の大部分と、その谷川の周囲の崖縦の巨礫の一部のもの他に、六甲山中の谷川から押し出すようにして堆積した扇状地堆積物中の巨礫を現地で選別して、大部分の石材が採取されたと考えられる。これらより、やや小さめの石材は扇状地端から沖積平野と海岸付近で、数量は少ないと考えられる。

その他の岩石名のものは、花崗岩類よりも数量は少なく、扇状地堆積物、沖積平野の堆積物、海岸付近の堆積物の礫を選別して採取したと考えられる。

これらの石材は、使用場所の用途や部位を考えて、大きさ(寸法)と風化度の「新鮮」なものは強度が極めて高いことなどを考えて採取したと考えられる。

花熊城の解体材料や、その他に考えられる転用石の使用については、よくわからない。

## 6. 石垣、石積の石材の方向と傾斜および石垣表面の傾斜角度

兵庫城の石垣、石積の石材の各個について、伸びの方向と傾斜角度を地質調査用のクリノコンパスを使って測定し、図上に記入した。なお、紙数の制約上省略し、それを模式的にA~Fに6分類し、どのタイプになるかについて述べる。(図107)

石垣1と石垣2はDタイプが70~67%、Cタイプが21~19%、Fタイプが10~9%、Aタイプが5%である。

石垣3、石垣4、石垣5、石垣6はDタイプが56~31%、Cタイプが47~23%、Fタイプが27~6%、BとAタイプは12~6%である。

石積造構(SX2501)、石積造構(SX1301)、SD3101はDタイプが59~29%、Cタイプが41~17%、Bタイプが21~3%、Aタイプが16~6%、Eタイプが12~1%、Fタイプが7~2%である。

このことから、Dタイプのように、長軸を石垣内部に入れるようにしたものが最も多く見られる。Cタイプが中軸を石垣内部に入れるようにしたものが、それに続いている。

石垣、石積の石材としては、A、B、E、Fタイプのものは、力学的には不安定なものはないが、石積造構(SX2501)、石積造構(SX1301)、SD3101では上記のようにかなり多く、石垣1~石垣6とは大きく異なっている。

石垣表面の傾斜角度は、よく残存している箇所で、クリノコンパスで測定した角度は次のとおりである。石垣1は72~53度、石垣3は61~55度、石垣4は65~63度、石垣5は83度、石垣6は71~70度と測定された。

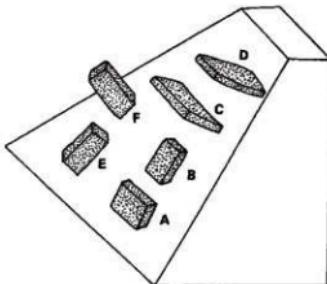


図107 石材の方向と傾きの模式図(橋本、1993)

表4 兵庫城石垣石材の測定値 石垣1(内堀城内側石垣)

No	岩石名	大きさ(cm)			円磨度	風化度	備考
		長径	中径	短径			
1	花崗閃緑岩	100	80	60	0.4	新鮮	
2	花崗閃緑岩	55?	35	25	0.3	新鮮	
3	花崗閃緑岩	70	40	30	0.5~0.6	弱風化	
4	花崗閃緑岩	75	40	40	0.5	新鮮	
5	花崗岩	115	50	40	0.4~0.5	新鮮	
6	花崗閃緑岩	80	40	25	0.4	新鮮	
7	花崗閃緑岩	100	40	40	0.4	新鮮	
8	花崗閃緑岩	60	40	25	0.5~0.6	新鮮	
9	花崗閃緑岩	45	40	25	0.5	弱風化	
10	花崗閃緑岩	90	65	50	0.5	新鮮	2~3cmのゼノリスあり
11	花崗閃緑岩	105	85	35	0.4~0.5	新鮮	3~13cmのゼノリスあり
12	花崗閃緑岩	100	75	35	0.6	新鮮	3~8cmのゼノリスあり
13	花崗閃緑岩	80	60	30	0.4	新鮮	
14	花崗閃緑岩	120	50	45	0.4	新鮮	
15	花崗岩	80	55	30	0.6	新鮮	
16	花崗岩	90	50	30	0.6	新鮮	
17	花崗閃緑岩	80	45	35	0.4~0.5	新鮮	
18	花崗閃緑岩	85	70	45	0.4	新鮮	1~5cmのゼノリスあり
19	花崗閃緑岩	65	40	30	0.4	新鮮	1~5cmのゼノリスあり
20	花崗閃緑岩	95	50	50	0.4~0.5	新鮮	
21	花崗閃緑岩	80?	55	40	0.5	新鮮	
22	花崗岩	85	55	35	0.4~0.5	弱風化	
23	花崗岩	80?	60	35	0.4~0.5	新鮮	
24	花崗閃緑岩	75	60	55	0.5	新鮮	3~10cmのゼノリスあり
25	花崗岩	75?	60	35	0.5	新鮮	
26	花崗岩	70	55	35	0.4	新鮮	
27	花崗岩	75?	60	25	0.5	新鮮	
28	花崗岩	90	65	35	0.5~0.6	新鮮	
29	花崗岩	65	55	35	0.5	新鮮	
30	花崗閃緑岩	60?	45	35	0.5	やや弱風化	
31	花崗岩	90	55	20	0.5~0.6	新鮮	
32	花崗閃緑岩	70	35	30	0.4~0.5	新鮮	1~3cmのゼノリスあり
33	花崗岩	65	40	30	0.5	新鮮	
34	花崗岩	60	45	35	0.4	新鮮	
35	花崗閃緑岩	65	55	45	0.4	新鮮	
36	花崗岩	75	40	35	0.4	新鮮	
37	花崗閃緑岩	80	45	35	0.4~0.5	新鮮	
38	花崗岩	60	40	35	0.4~0.5	新鮮	
39	花崗閃緑岩	40	30	20	0.5	新鮮	
40	花崗閃緑岩	30	20	15	0.3	新鮮	人為的割れ?
41	花崗岩	95	55	30	0.4	新鮮	
42	花崗閃緑岩	80	70	30	0.4~0.5	新鮮	
43	花崗岩	80?	55	35	0.4~0.5	やや弱風化	

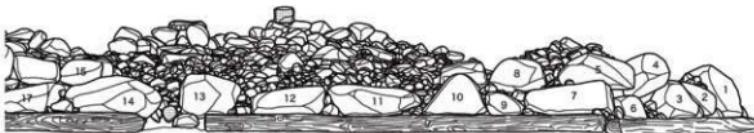


図108 石垣1(内堀城内側石垣)立面図(S=1/50)

表5 兵庫城石垣石材の測定値 石垣2(内堀城内側石垣)

No	岩石名	大きさ(cm)			円磨度	風化度	備考
		長径	中径	短径			
1	花崗岩	70	40	40	0.4	新鮮	20~30cmのゼノリスあり
2	花崗閃緑岩	55	30	30	0.5	新鮮	
3	花崗閃緑岩	65	35	20	0.4~0.5	新鮮	
4	花崗閃緑岩	35	25	20	0.4~0.5	弱風化	
5	花崗閃緑岩	50	40	35	0.5	新鮮	
6	花崗岩	45	40	40	0.4~0.5	新鮮	
7	花崗岩	15	10	10	0.4	新鮮	
8	花崗閃緑岩	60	50	45	0.5	新鮮	2~8cmのゼノリスあり
9	花崗閃緑岩	60	35	25	0.5~0.6	新鮮	
10	花崗閃緑岩	20	15	12	0.5~0.6	新鮮	
11	花崗岩	25	15	15	0.4	新鮮	
12	花崗岩	70	40	25	0.4	新鮮	細粒
13	花崗閃緑岩	60?	30	20	0.6	新鮮	
14	花崗岩	25	15	12	0.4~0.5	弱風化	
15	花崗閃緑岩	25	15	15	0.5~0.6	新鮮	
16	花崗閃緑岩	55	35	25	0.4	新鮮	
17	花崗閃緑岩	70	45	30	0.5	新鮮	
18	ホルンフェルス	25	20	13	0.5~0.6	弱風化	泥質
19	花崗岩	23	17	12	0.6	新鮮	
20	花崗岩	18	14	11	0.2	新鮮	細粒 人為的割れ
21	花崗閃緑岩	70	50	40	0.4	新鮮	
22	花崗閃緑岩	55	35?	30	0.6	新鮮	

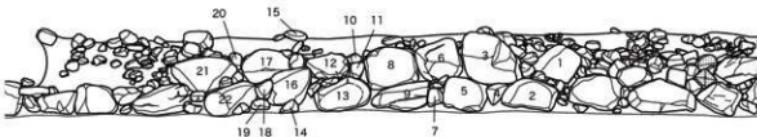


図109 石垣2(内堀城内側石垣)立面図(S=1/50)

表6 兵庫城石垣石材の測定値 石垣3(東外堀城内側石垣)

No	岩石名	大きさ(cm)			円磨度	風化度	備考
		長径	中径	短径			
1	花崗閃緑岩	50	45	40	0.5	新鮮	
2	花崗閃緑岩	45	25	15	0.4~0.5	新鮮	
3	花崗閃緑岩	70	40	35	0.5	新鮮	
4	花崗閃緑岩	70	55	30	0.4~0.5	新鮮	
5	花崗閃緑岩	50	40	30	0.6	新鮮	
6	花崗閃緑岩	60	45	45	0.6	新鮮	
7	花崗閃緑岩	40	30	25	0.5~0.6	新鮮	
8	花崗岩	25	20	10	0.5	新鮮	
9	花崗閃緑岩	35	30	10	0.1~0.2	新鮮	人為的割れあり
10	花崗岩	25?	15?	15	0.2	新鮮	
11	花崗閃緑岩	70	45	25	0.5	新鮮	
12	花崗閃緑岩	50?	35	30	0.5	新鮮	
13	花崗閃緑岩	55	50	40	0.5~0.6	新鮮	
14	花崗閃緑岩	70	45	35	0.5	新鮮	
15	花崗閃緑岩	60?	50	35	0.5	新鮮	
16	花崗閃緑岩	70	45	30	0.5	新鮮	1~5cmのゼノリスあり
17	花崗閃緑岩	70	50	45	0.5	新鮮	17cmのゼノリスあり
18	花崗閃緑岩	60	45	35	0.4~0.5	新鮮	
19	花崗閃緑岩	45	35	30	0.4~0.5	新鮮	
20	ホルンフェルス	25	15	12	0.4~0.5	弱風化	泥質

21	花崗閃緑岩	30	25	15	0.5~0.6	新鮮	
22	花崗岩	35	25	20	0.5~0.6	新鮮	
23	花崗岩	70	45	35	0.4~0.5	新鮮	
24	ホルンフェルス	60	35	30	0.4~0.5	新鮮	
25	花崗岩	35	20	10	0.6	新鮮	泥質
26	花崗閃緑岩	55	35	20	0.4~0.5	新鮮	

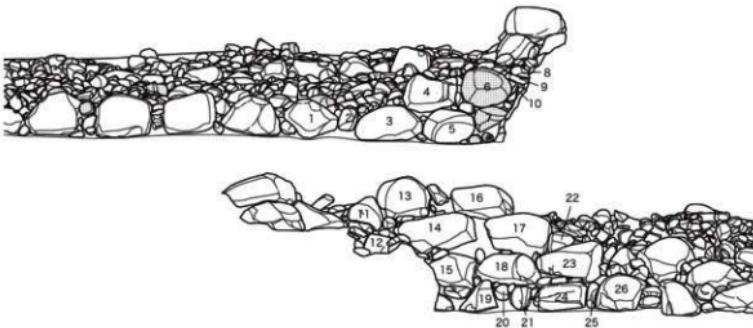


図110 石垣3（東外堀城内側）立面図 (S=1/50)

表7 兵庫城石垣石材の測定値 石垣4（南外堀城内側石垣）

No	岩石名	大きさ(cm)			円磨度	風化度	備考
		長径	中径	短径			
1	花崗岩	45?	38	30	0.6	新鮮	
2	花崗岩	70	50	20	0.5	新鮮	
3	花崗岩	40?	40	35	0.5	新鮮	
4	花崗岩	70	40	35	0.5	新鮮	
5	花崗岩	70	60	35	0.5	新鮮	
6	花崗閃緑岩	50	40	35	0.4~0.5	新鮮	
7	花崗閃緑岩	50	50	40	0.4~0.5	新鮮	
8	花崗閃緑岩	60	35	35	0.6	新鮮	
9	花崗岩	50	45	40	0.5	新鮮	
10	花崗閃緑岩	65	50	30	0.5	新鮮	
11	花崗岩	50	40	30	0.5	新鮮	
12	花崗岩	60	35	30	0.5	新鮮	
13	花崗閃緑岩	65	55	30	0.6	新鮮	
14	花崗閃緑岩	50	40	35	0.4~0.5	新鮮	
15	花崗岩	55	40	40	0.6	新鮮	
16	花崗岩	55	40	25	0.6	新鮮	



図111 石垣4（南外堀城内側）立面図 (S=1/50)

表8 兵庫城石垣石材の測定値 石垣5(南外堀新城外側石垣)

No	岩石名	大きさ(cm)			円磨度	風化度	備考
		長径	中径	短径			
1	花崗閃緑岩	70	50	35	0.4~0.5	新鮮	10cmのゼノリスあり
2	花崗閃緑岩	45?	40	20	0.1~0.2	新鮮	人為的割れあり
3	花崗閃緑岩	60	50	30	0.5	新鮮	2~15cmのゼノリスあり
4	花崗閃緑岩	55	45	30	0.4~0.5	新鮮	3cmのゼノリスあり
5	花崗閃緑岩	60	40	30	0.4	新鮮	8cmのゼノリスあり
6	花崗岩	55	35	30	0.4	新鮮	
7	花崗閃緑岩	55	35	35	0.4~0.5	新鮮	
8	花崗閃緑岩	55	35	35	0.4~0.5	新鮮	
9	花崗閃緑岩	60	50	25	0.4~0.5	新鮮	
10	花崗閃緑岩	55	35	35	0.5	新鮮	
11	ホルンフェルス	35	20	15	0.5~0.6	弱風化	砂質
12	花崗岩	60	50	30	0.5	新鮮	
13	花崗岩	55	40	25	0.4	新鮮	細粒
14	花崗岩	40	40	15	0.5	新鮮	人為的割れあり
15	花崗閃緑岩	70	45	35	0.4~0.5	新鮮	

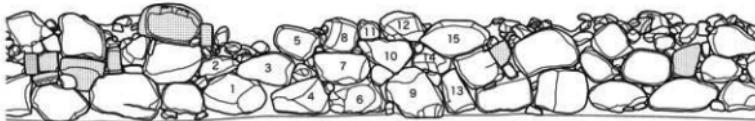


図112 石垣5(南外堀新城外側)立面図(S=1/50)

表9 兵庫城石垣石材の測定値 石垣6(南外堀旧城外側石垣)

No	岩石名	大きさ(cm)			円磨度	風化度	備考
		長径	中径	短径			
1	花崗閃緑岩	45	35	20	0.5	新鮮	
2	花崗閃緑岩	45	35	25	0.4~0.5	新鮮	
3	花崗閃緑岩	45	40	35	0.4~0.5	新鮮	
4	花崗閃緑岩	50	35	25	0.5	新鮮	
5	花崗閃緑岩	60	35	30	0.5	新鮮	2~8cmのゼノリスあり
6	花崗閃緑岩	75	35	30	0.4~0.5	新鮮	3~7cmのゼノリスあり
7	花崗閃緑岩	75	30	25	0.4	新鮮	2~3cmのゼノリスあり
8	花崗閃緑岩	60	35	30	0.4	新鮮	
9	花崗岩	100	50	45	0.4	新鮮	
10	花崗閃緑岩	45	30	20	0.5	新鮮	3~15cmのゼノリスあり
11	花崗閃緑岩	45	35	20	0.5	新鮮	
12	花崗閃緑岩	60	30	30	0.5	新鮮	
13	花崗閃緑岩	60	35	20	0.4	新鮮	
14	花崗岩	40	35	25	0.4~0.5	新鮮	
15	花崗閃緑岩	70	40	15	0.6	新鮮	



図113 石垣6(南外堀旧城外側)立面図(S=1/50)

表10 石積遺構(SX2501)の測定値

No	岩石名	大きさ(cm)			円周度	風化度	備考
		長径	中径	短径			
1	花崗岩	45	30	25	0.5	新鮮	
2	花崗閃緑岩	50	30	20	0.5~0.6	新鮮	
3	花崗岩	40	35	25	0.5	新鮮	
4	花崗岩	35	25	20	0.4~0.5	新鮮	
5	花崗岩	25	25	15	0.5~0.6	新鮮	
6	花崗閃緑岩	40	30	20	0.5~0.6	新鮮	
7	花崗岩	30	30	10	0.6	新鮮	細粒 脂状?
8	花崗閃緑岩	30	30	20	0.5	新鮮	
9	花崗閃緑岩	30	25	20	0.6	新鮮	
10	ホルンフェルス	40	25	10	0.6	弱風化	泥質
11	花崗岩	25	20	15	0.5?	新鮮	人為的割れ?
12	ホルンフェルス	25	20	12	0.7	新~弱風化	泥質
13	ホルンフェルス	20	20	20	0.6?	弱風化?	泥質 人為的割れ?
14	ホルンフェルス	25	20	15	0.7	新鮮	泥質
15	花崗岩	25	20	12	0.5?	新~弱風化	
16	花崗岩	25	20	10	0.6	新鮮	
17	ホルンフェルス	42	35	15	0.7	弱風化	泥質
18	花崗岩	35	25	20	0.5~0.6	新鮮	
19	花崗岩	30	25	15	0.5~0.6	新~弱風化	
20	花崗岩	40	35	20	0.5	新鮮	
21	花崗岩	40	25	20	0.5	新鮮	
22	花崗閃緑岩	35	30	15	0.5~0.6	新鮮	ゼノリス有り
23	ホルンフェルス	35	22	15	0.5	新鮮	泥質
24	花崗岩	40	20	20	0.5	新鮮	ゼノリス多い
25	花崗岩	35	22	16	0.4~0.5	新鮮	ゼノリス多い
26	花崗岩	25	22	22	0.5	新鮮	
27	ホルンフェルス	25	22	12	0.6~0.7	弱~中風化	泥質
28	ホルンフェルス	35	25	20	0.5~0.6	新鮮	泥質
29	花崗岩	30	25	20	0.5	新鮮	
30	花崗岩	25	20	15	0.5~0.6	新鮮	
31	花崗閃緑岩	30	20	20	0.5?	新鮮	人為的割れ
32	花崗岩	20	15	12	0.5	新~弱風化	
33	ホルンフェルス	20	20	8	0.5	弱風化	泥質
34	花崗岩	20	20	13	0.5~0.6	新~弱風化	
35	砂岩	20	18	10	0.8	弱風化	人為的割れ
36	花崗岩	25	15	10	(0.1~0.2)	新鮮	人為的割れ
37	花崗岩	15	12	10	(0.1~0.2)	新鮮	人為的割れ
38	花崗岩	25	25	15	(0.3~0.4)	—	人為的影響?
39	花崗岩	30	20	15	0.5	新鮮	
40	花崗岩	25	20	12	0.4~0.5	新~弱風化	
41	花崗岩	35	23	20	0.5	新鮮	
42	花崗閃緑岩	35	15	15	0.4	新鮮	
43	ホルンフェルス	40	25	15	0.5	新鮮	泥質
44	花崗岩	35	25	10	0.5~0.6	新~弱風化	
45	ホルンフェルス	25	22	15	0.6?	新鮮	泥質 人為的割れ
46	花崗岩	30	20	15	0.5	新鮮	
47	珪質頁岩	35	23	15	0.4~0.5	新~中風化	ホルンフェルス化?
48	ホルンフェルス	35	25	15	0.6	弱風化	泥質
49	花崗岩	30	30	15	0.5~0.6	新鮮	
50	花崗岩	20	15	10	0.6~0.7	新鮮	
51	チャート	15	12	10	0.6	新鮮	灰色 人為的割れ
52	砂岩	18	15	5	0.6~0.7	新~中風化	細粒
53	ホルンフェルス	15	7	6	(0.4)	新鮮	泥質 人為的割れ
54	花崗岩	25	20	20	0.5	新鮮	
55	花崗岩	35	25	15	0.4~0.5	新鮮	
56	珪岩	15	8	6	0.5	新鮮	漂白化
57	チャート	11	6	4	0.6~0.7	新鮮	白黒 表面漂白化
58	ホルンフェルス	22	15	10	0.5~0.6	新鮮	泥質
59	ホルンフェルス	15	10	8	0.5~0.6	新鮮	泥質

60	ホルンフェルス	12	10	6	0.4~0.5	新~弱風化	泥質
61	チャート	10	10	6	0.6~0.7	新鮮	赤白
62	珪岩	10	7	5	(0.1~0.2)	新鮮	赤 人為的割れ
63	珪質頁岩	11	9	5	(0.5)	新鮮	人為的割れ
64	珪岩	10	7	5	(0.1~0.2)	新鮮	人為的割れ
65	チャート	15	10	8	0.5	新鮮	黒灰
66	ホルンフェルス	15	15	8	0.7	新鮮	人為的割れ
67	花崗岩	16	16	10	(0.4~0.5)	新鮮	人為的割れ 石造品?
68	花崗岩	18	13	10	(0.4)	新鮮	人為的割れ 石造品?
69	珪岩	13	10	6	0.5	新鮮	
70	花崗岩	20	15	9	(0.4)	新鮮	人為的割れ
71	花崗閃綠岩	50	33	15	(0.6)	新鮮	人為的割れ

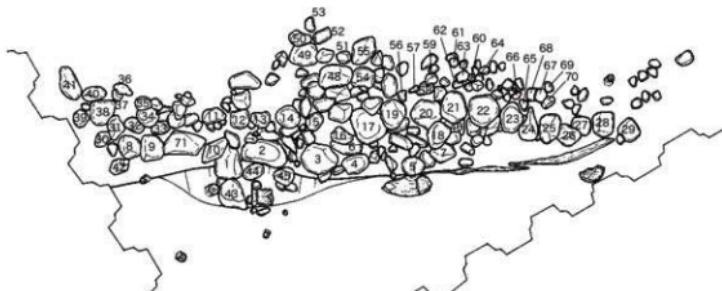


図114 石積造構 (SX2501) 平面図 (S=1/50)

### 〈参考文献〉

- 橋本清一 1980a 「今里車塚古墳の葺石の石材」『埋蔵文化財発掘調査既報』京都府教育委員会 76~85  
 橋本清一 1980b 「今里車塚古墳の葺石と乙訓地区の古墳の葺石」『埋蔵文化財発掘調査既報』京都府教育委員会 167~185, 255~261  
 橋本清一 1993 「古墳葺石の材質研究」『考古学と自然科学』第28号 日本国文化財科学会 25~44  
 Krumbein,W.C. 1941 Measurement and geological significance of shape and roundness of sedimentary particles, *Journal of Sedimentary Petrology*, Vol.11, No.2 64~72

## 第5節 築城以前の遺構

明確な兵庫城築城以前の遺構としては、南外堀（新）城外側の石垣下敷きになっていた井戸、内堀（旧）で発見された下層土留遺構、主郭南西部の土師器皿集積遺構（土器溜り）などがある。この時期は町屋地区も含め西側に遺構の分布が偏る。

**SE3501** 南外堀（新）東部の城外側石垣の根石下で石組の円形井戸が検出されている。石組内は90cm、検出面からの深さは70cmを測る。上部は自然石を積み、下部は桶を据えている。埋土は砂および砾で、埋土は砂および砾で、石垣構築際の際に一度に埋められたものと考えられる。埋土からは、龍泉窯青磁や備前焼などが出土しており、検出状態とも考えあわせて築城以前の遺構と考えられる。

**下層土留遺構** 南北方向に流れており調査区北部から中央部において確認された。西岸の護岸と思われる土留めの横板が施された杭列がみられるが対岸は不明である。57次調査でも同様の施設を検出しており、総延長で55mを測る。内堀城内側の北では石垣の前（堀底）で検出されるが、堀の方向より僅かに西に振れるため堀中央部付近で石垣列によって切られる。砂や砾が東側に向かって深さ1m以上堆積する。16世紀代とみられる遺物が僅かに出土した。

**SX3501** 南北6.7m、東西6.3m、深さ90cmを測る不整形な落ち込みである。トレンチによる確認調査であったため詳細は不明であるが、断面形状は外辺部で浅く、中央部で土坑状に深くなる。埋土からは土師皿が大量に出土している。土師皿は形状から数タイプに分けられるものと考えられる。同様の遺構は閑屋町地区の西端でも数か所確認されている。

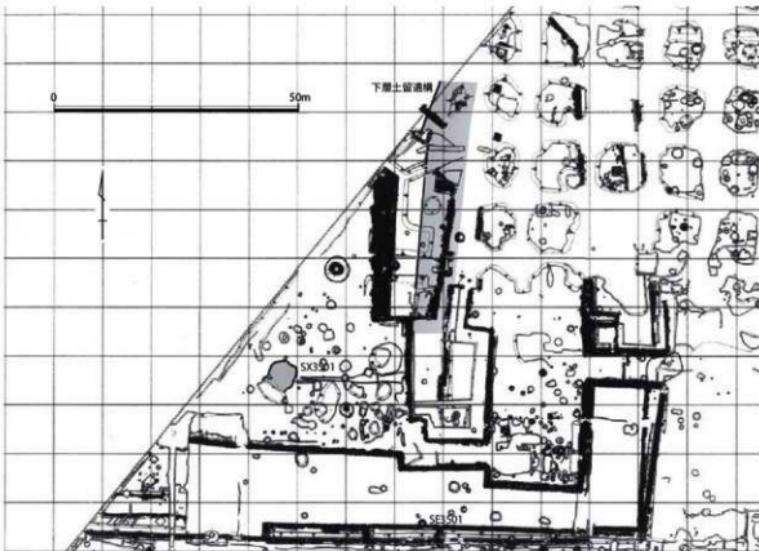
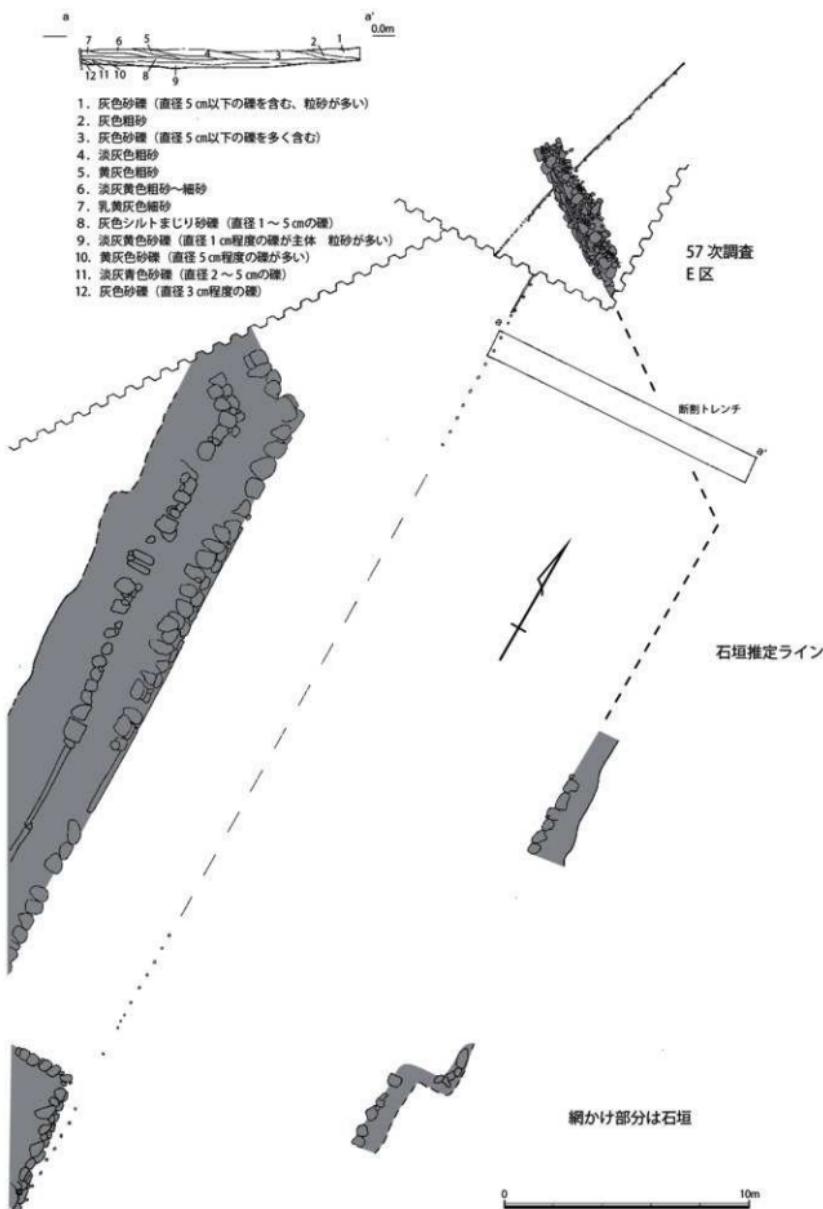


図115 築城前遺構配置図



## 第6章 出土遺物

### 第1節 土器・陶磁器・瓦

土器・陶磁器 今回の調査で出土した土器・陶磁器・瓦は28リットル入りコンテナで約2,000箱に及ぶ。膨大な量であったため、遺構に限定して整理を行った。図示したのは、主に町屋遺構と兵庫城の堀から出土したもの一部である。町屋域（新町・関屋町）・兵庫城各地区の様相を概観する。なお、陶磁器については森村健一氏の指導の下、年代を決定した。詳細は一覧表を確認されたい。

町屋域で第I期については、從前建物に伴う攪乱などで検出した遺構は少ない。

SK1117のように、肥前系染付碗（28・29）や肥前系染付筒形碗（39・32）が目立つ。中に瀬戸美濃窯製品（25）も見られる。皿も碗と同様に肥前系陶磁器が大半を占める。唐津窯・瀬戸美濃窯の大鉢も出土している。42は唐津窯茶入の蓋、732は唐津窯の象嵌袋状香炉で佐賀県金石原窯ノ辻窯跡出土例に類似する。

II期の遺物が出土する遺構は、I期よりも増加する。新町地区SB1201ほか北側の町屋遺構からは浅い器形の糸切底土師皿、唐津窯溝縁皿や初期伊万里染付が出土している。

SX1201からは、糸切底土師皿、唐津窯見込み蛇の目釉剥ぎ碗、波佐見窯染付のコンニヤク印判皿などが出土している。擂鉢は丹波窯製が多い。

SK1325からは、唐津窯の胎土目皿や絵唐津や同時期の碗が多い。掘形からは古相の波佐見窯青白磁碗が出土している。

SK1214からは、10~12の二次焼成の認められる呉器手の唐津窯碗が出土し、肥前窯染付も共伴している。

SX1307から底に「かわ□□/かわら□□/□□□□ [かわカ]/七」の墨書きをした土師皿が出土している。

III期に相当する遺物は町屋建物をはじめ土坑・石組・井戸などの遺構から多く出土している。なお、町屋遺構については、何層もの整地層により嵩上げし屋敷の改修を行っているが、各層から唐津窯製品が出土しており、明確な時期差はなかった。そのため、ここでは下層出土のものもIII期に含め、記述する。

岡屋町地区のSB2301付近で確認された焼土層からは、主に非ロクロ系土師皿、唐津窯碗・皿、瀬戸美濃窯天目碗・小杯・皿、備前窯香炉・茶入・徳利などの国産陶器と共に景德鎮窯碗・皿、朝鮮王朝陶器瓶、ベトナム産長胴壺などの輸入陶磁器も出土している。中には初期伊万里や波佐見窯荒磯文鉢や伊万里窯錦手皿など17世紀半ば以降の遺物も見られることから、焼土層に時期差があったことがわかる。

町屋遺構出土の遺物では、土師皿は主に内面一定方向ナデを施す非ロクロ系のものが多く、わずかに糸切底のものがある。炮烙は器高が高く体部外面に格子状や斜めのタタキを施し、外面には煤が付着している。土師質擂鉢は口縁部が拡張されない。岡山県二日市錢座跡出土のものと類似する瓦質内耳鍋（1044）がSB2321から出土している。

唐津窯製品は施釉陶器では主体を占める。碗は器高が比較的に低く、高台内が兜巾状を呈するものが多い。皿は大半が丸皿で、わずかに筒皿や絵唐津向付も出土している。胎土目・砂目が共伴している。SB2313からは茶入が1点出土している。

瀬戸美濃窯製品は、大窯期の最終段階から登窯期の製品が出土している。碗は天目が多



写真92 SX1307出土墨書き土器

く、小杯も出土しており、鉄漿水をいれる器に使用されていたものもある。皿は、丸皿・縁折皿・葵皿が出土している。黄瀬戸向付や志野の杯や菊皿なども出土している。また、織部製品も出土しており、総織部稜花皿が閑屋町地区から、青織部向付が新町地区から出土している。

楽系陶器はSB2304・2305で3点(852・851・864)が出土している。いずれも内外面の釉を掛け分けしている。

備前窯製品は擂鉢・徳利・種壺・茶入・香炉・掛花生などが出土している。

丹波窯製品は大半が擂鉢である。

中国陶磁器は主に景德鎮窯と漳州窯の青花・白磁が出土している。碗はSB2446出土の1004など俊頭心底のもの、皿は丸皿・端反皿・稜花皿・葵筋底皿がみられる。皿の見込みには蛟龍文を描くものが多い。924のような漳州窯青花盤も数点出土している。

朝鮮王朝陶磁器はSB2302出土の819の薺麦茶碗・SB2444出土の980やSB2324出土の浅い器形の白磁夏茶碗・SB2445出土の990の薺麦茶碗などがある。SP2401出土の1275は、球体状の器形で、2条の突帶をもつ陶質壺である。器壁の薄さなど朝鮮王朝船徳利に類似する。SP2402出土の1276は、瓦質の風炉である。

Ⅲ期は、唐津窯や瀬戸美濃窯の茶碗・向付・朝鮮王朝陶磁器・茶入や風炉など茶の湯に係る遺物が多く出土しており、同時期の大坂城跡・同城下町・堺環濠都市遺跡などの状況と類似している。また、新町地区の下層確認トレンチでも、唐津窯・瀬戸美濃窯・景德鎮窯・漳州窯など製品が出土しており、様相が変わらない。

Ⅲ・Ⅳ期以前の遺物は西部地区にはほぼ限定される。SK2504では多量の土師皿が出土しており、数タイプに分類が可能である。ユビオサエ痕跡を明瞭に残すものが多いが、精良な胎土で丁寧なヨコナデを施すものも少量出土している。井戸も多く検出されており、主に土師皿が出土している。SE2504からは、花びら型の土師質火鉢や東播系須恵器鉢や備前窯短頸壺も出土している。また、SX2501からは土師皿・土師質や瓦質の鍋・羽釜など煮炊具、瀬戸美濃窯・小瓶、備前窯擂鉢などの国産陶器類や、仿建窯天目碗・龍泉窯青磁碗など貿易陶磁器も見られる。掘形から備前窯擂鉢が出土している。

兵庫城地区のⅠ期の遺構では、SD3101で2度の改修があり出土遺物に相違が認められる。新段階では波佐見窯などの肥前系陶磁器の碗・皿が多量に出土している。小型の丸碗・筒型碗・広東碗のほかに端反碗や蛇の目凹型高台の皿も含まれる。また瀬戸窯陶磁器や萩焼ビラ掛け釉碗も認められ、焼継痕跡があるものも出土している。一方、旧段階では、肥前系陶磁器は丸碗・筒型碗・朝顔形碗が主体を占める。また、皿は見込みを蛇の目釉剥ぎするものが多く、瀬戸美濃窯は陶器に限られる。(写真図版106~108)

Ⅱ~Ⅳ期、内堀(旧)では、北半主郭側二列石垣部分の埋戻し土から備前窯擂鉢・壺・常滑窯大甕、龍泉窯青磁碗、景德鎮窯青花などが出土するが、唐津窯の製品は認められない。一方で、南側副郭側石垣の埋戻し土からは、初期伊万里染付碗・皿・盤、唐津窯碗などが出土している。内堀(新)は北半で在地系の土師質炮烙・柿釉皿とともに、肥前系染付碗皿、唐津窯青綠釉皿、瀬戸美濃窯水注が出土している。南側では肥前窯染付碗・皿が多量に出土し、筒型碗・朝顔形碗などがみられる。肥前窯と考えられる鷹型掛花生(1453)も出土している。また、京焼系の碗・皿、瀬戸美窯濃窯や丹波窯の徳利、堺産擂鉢も出土している。

南外堀（旧）の裏込めには主に備前窯や景德鎮窯など中国産の製品が、その被覆土からは唐津窯碗・皿、初期伊万里染付、瀬戸美濃窯菊皿、丹波窯擂鉢などが出土している。

南外堀（新）出土遺物の大半を占めるものは肥前窯製品で、染付丸碗・筒型碗・蓋付碗・丸皿・蛇の目凹形高台皿・鉢・油壺・仏飯具・御神酒徳利や、唐津窯の刷毛目文碗・鉢・徳利、京焼系筒型碗などが出土している。中には直径20cm程度の比較的大きい皿も出土している。染付以外にも青磁染付や赤絵の製品が見られる。瀬戸美濃窯製品も出土しており、掛け分け丸碗・鎧碗・端反皿・葵皿・火入れなどがある。染付の皿と同じような直径20cm程度の皿も出土している。

南外堀（新）からは瀬戸美濃窯火入れの底面に「□年/未三月廿九日/尾張/瀬戸村/邑や」のヘラ書きをしたものが出土している。京焼系の製品も見られ、その大半は丸碗やせんじである。大型品では丹波窯甕や壠・明石系擂鉢に混って二彩手や三島手の甕なども含まれる。

東外堀小区画旧段階の盛土からは17世紀後半の肥前系陶磁器が出土しており、一方で付属石垣新段階の盛土からは、18世紀前半から中頃の肥前系陶磁器が主に出土している。

副郭で検出されたSK3403～3405からは、内面一定方向ナデの非ロクロ系土師皿や、備前窯の徳利・擂鉢が出土しており、築城期の遺構である可能性が高い。

主郭内で検出されたSE3402は一石五輪塔で組まれた形態から築城期に構築されたものと考えられるが、直接それを示す遺物は出土していない。最終堆積層からは肥前窯染付網目文碗が出土している。

築城以前の遺物が出土している遺構では、SE3501から龍泉窯青磁碗・備前窯擂鉢・短頸壺、在地系土師質・瓦質土器が出土している。また主郭内で検出されたSX3501からは体部下半にユビオサエ痕を残す土師皿が多量に出土し、備前窯壺・甕・東播系須恵器こね鉢が共伴している。下層土留遺構から土師皿が数点出土している。

瓦 町屋と兵庫城から多くの瓦が出土している。桟瓦などの江戸時代の中期以降のものが多く、軒丸瓦は1731、桟瓦は1745を挙げている。しかし、今回の報告では兵庫城との関連を重視し、江戸時代前半以前と考えられる瓦を中心に報告する。

町屋域では軒丸瓦は巴文と文字文が出土している。巴文では1717のような外圈線と内圈線を有し、珠文を密に施すものや、1772のように小さい珠文を密に施し、外縁が1cmに満たない幅の古相の瓦も見られる。1719・1765・1766・1767・1768は同范と考えられる右巻き三巴文軒丸瓦である。巴頭部は内湾してC字状を呈し、形状は3つともわずかに異なる。尾部は長く圈線状を呈する。珠文は小さく、16個と推定される。うち1個の珠文に范傷がみられる。丸瓦部はコビキAである。同范と考えられる瓦は神戸市中央区の花隈城から出土しており、後述する軒平瓦との組み合わせるものと考えられる。また1729・1730のように右巻きの三巴文で尾部が長く圈線状を呈し、その上に小さい珠文を9個貼り付けるものも出土している。14次調査でも数点出土している。

文字文は4種類出土している。1714は梵字で中心に「<sup>フ</sup>」、その下に蓮華文を施す。1715・1716は「福」字文でいずれも字体が異なる。内圈線もあり、凹面はコビキAである。1716は内外の圈線を有し古相のものと考えられる。1761～1763は「久」の異体字と考えら



写真93 南外堀(新)出土火入

れる。コビキは不明であるが、内圈線があり、珠文も比較的小さいことから古相の瓦と考えられる。

軒平瓦は、唐草文と波状文が多い。関屋町地区からは1774～1776のように外郭線を有するものがみられる。また同じく外郭線を有する「宗」文字連珠文も見られる。1740・1793などの中心飾りが宝珠文の波状文軒平瓦と1734・1783などの中心飾りが四葉文の唐草文軒丸瓦は花隈城跡のものと同文もしくは同范と考えられる。1737・1738などは大阪城跡で類似したものが確認されている。1733・1787は伊丹市の有岡城跡と同文と考えられる。SB1408・1409からは1735のような小さな桐文を數か所配置する特異な軒平瓦が出土している。1744は滴水瓦で、瓦当面の文様は重線文で平瓦との接合角度は直角に近い。鳥取県鹿野城跡のものと類似する。また、1743は浮彫状の文様で、三田市三田城跡出土瓦と類似しており、退化した蓮華唐草文と考えられる。1797は平瓦で凸面に波状タタキを施す。丸瓦は長さ30cm、幅14cm程度でコビキAのもの、長さ25cm前後、幅12cm前後でコビキBのものが主に出土している。SB1408・1409からは後者の丸瓦が出土している。

鬼瓦は1757・1802のよう裏縁りがあり、裏面の断面形状が箱状のものと、1803のよう裏縁りがほとんどないものが出土している。眼の部分は、突出しているもの、穴が貫通しているものがある。1758は組み合わせ式の鰐瓦、1805は龍瓦である。

関屋町地区からは凸面に格子目タタキを施す古相の平瓦が数点出土している。1808は堺列建物に伴う堺で長さ25.6cm、幅20.4cm、厚さ2.0cmを測る。堺環濠都市遺跡から同様のものが出土している。

兵庫城地区では軒丸瓦は巴文と文字文が出土している。1809・1810は「福」字、1811・1812は「久」の異体字と考えられる。1813は「巨」字で内圈線があるが、外縁の幅が太く、他の文字瓦と比較して文様面が小さい。同様のものは兵庫津遺跡内で出土している。1821～1823は花隈城跡出土瓦と同范と考えられる。また、新段階の堀埋土からは1830のような薄手のものが出土している。

軒平瓦は、唐草文と波状文が多い。1833・1848などのように外郭線がある古相のものが見られる。町屋と同様に1839・1844など花隈城跡・有岡城跡と同文の瓦が出土している。中央飾りが脚付の宝珠文で反転する唐草文のものがある。大阪城跡で類似のものが出土している。また、1860は反転する連続半同心円文を施す。土橋1東側の瓦敷遺構から出土した丸瓦は長さ30cm前後、幅14cm前後でコビキAが多く、中には吊紐が残るものも見られる。

鬼瓦も新段階の堀埋土からは裏縁りがあり断面箱状を呈するものが、旧段階の堀埋土から板状のものが出土している。他にも旧段階の堀埋土からは隅丸瓦や隅軒平瓦、新段階の堀埋土からは、1868のような堀瓦出土している。また、内堀（旧）城内側二列石垣から「次戊辰年/加造立□」のヘラ書き丸瓦（1831）が出土している。凹面がコビキBでないことがら16C後半以前のもので、永祿11年（1568年）もしくは永正5年（1608年）と考えられる。

なお、他遺跡と同文と考えられる軒平瓦の出土数は、遺物一覧表の後に表で示した。

陶磁器については森村健一氏に現地・埋蔵文化財センターに何度も足をお運びいただき、ご指導を賜わりました。また瓦については黒田慶一氏にご教授いただきました。文末ではありますが、お二方に感謝の意を示します。



写真94  
内堀(旧)出土記年瓦

## 第2節 兵庫津と堺の陶磁器 一千利休と古田織部時代の茶の湯一

森 村 健 一 (上海師範大学特約研究員)

### 1.はじめに

兵庫津遺跡内に所在する兵庫城跡は、神戸市兵庫区南東海岸に面して立地している。

兵庫津は奈良時代の国際貿易港（外港）としての大輪田泊、日宋貿易、遣明船貿易の都市として発展してきた。天正8（1580）年池田恒興が築造した兵庫城は天正13（1585）年秀吉の直轄領となり、慶長1（1596）年慶長伏見大地震、慶長10（1605）年東南海大地震で被害を受けたと思われる。その後、元和3（1617）年徳川幕府の尼崎藩領・兵庫陣屋が設置された。家康の全国統一を誇示して作成された1605年『慶長十年摂津国絵図』（西宮市立郷土資料館蔵）には、兵庫津が記載されそこに数多くの街道が集中している。兵庫城は戦時の城郭都市、平時の商業都市の両面を持っており兵庫城は航海上の良い目標物でもあった。本稿では、兵庫津遺跡第62次調査（町屋）出土陶磁器の特長には茶の湯関係品が目立つ事、1580年から1615年までに兵庫津が火災を受けていることが陶磁器に付着した炭化物があることから証明出来る。特に、1580年から1615年までの千利休・秀吉と古田織部・家康の兵庫津と堺環濠都市遺跡（SKT）における茶の湯文化について比較検討を試みたい。この2つの遺跡からの出土した陶磁器が1585年から1615年までの年代であることは1585年秀吉により消失した根来寺跡出土陶磁器、堺環濠都市遺跡SKT19地点環濠SF01出土「天正13年（1585）銘木筒共伴一括品、1600年12月14日に沈没したフィリッピン「サンデエゴ号」引揚げ陶磁器、1613年西アフリカ・セントヘレナ島沖に沈没した「ピッテ・レウ号」引揚げ陶磁器を実見して確信出来る。また、1592年秀吉が長崎や堺海商に東南アジアへの朱印船貿易許可したことを記念して製作させた『河盛家世界地図屏風』には、1580年代後半から1615年まで兵庫津や堺環濠都市遺跡出土の漳州窯陶磁器が明の外港であった「漳州」から輸出したことが描かれていることからも否定出来ない。

### 2. 兵庫津遺跡第62次調査出土の茶の湯道具（出土例は文末に記す。）

#### （1）茶臼

町屋跡出土の和泉砂岩製茶臼（2088）は、生産地であった大阪府阪南市ミノバの石切り場である。和泉砂岩製茶臼は、堺商圏であったので堺環濠都市遺跡の15世紀第3四半期から大坂夏の陣火災面1615年まで多数出土する。

#### （2）茶の湯の茶碗

①朝鮮王朝陶磁茶碗の特長は、縦軸で外面を薄く仕上げる為の鉄カンナ痕がある。胎土には鉄分の黒色鉱物粒を含有し鬆が多く、虫食い、兜巾・縮縄高台、茶溜りの鏡がある。茶碗の色は、半透明釉を掛けているが胎土色が表出している。白磁の表面は胎土色が表出して、基本的には砂目である。蕎麦茶碗は4~5個の砂目痕が魚々屋（斗々屋）茶碗より大きく、その砂粒も大きく口縁部に丸味がある。魚々屋茶碗は、7~10個の砂目痕が蕎麦茶碗より小さく、その砂粒も細かく口縁部は直線的である。

②唐津窯魚々屋風茶碗は、形態を魚々屋茶碗に模倣しており、小さい胎土目が9ヶ所有する。唐津の土であるので、砂粒や鬆が多く熱伝導率が悪く茶碗には最適である。唐津茶碗の

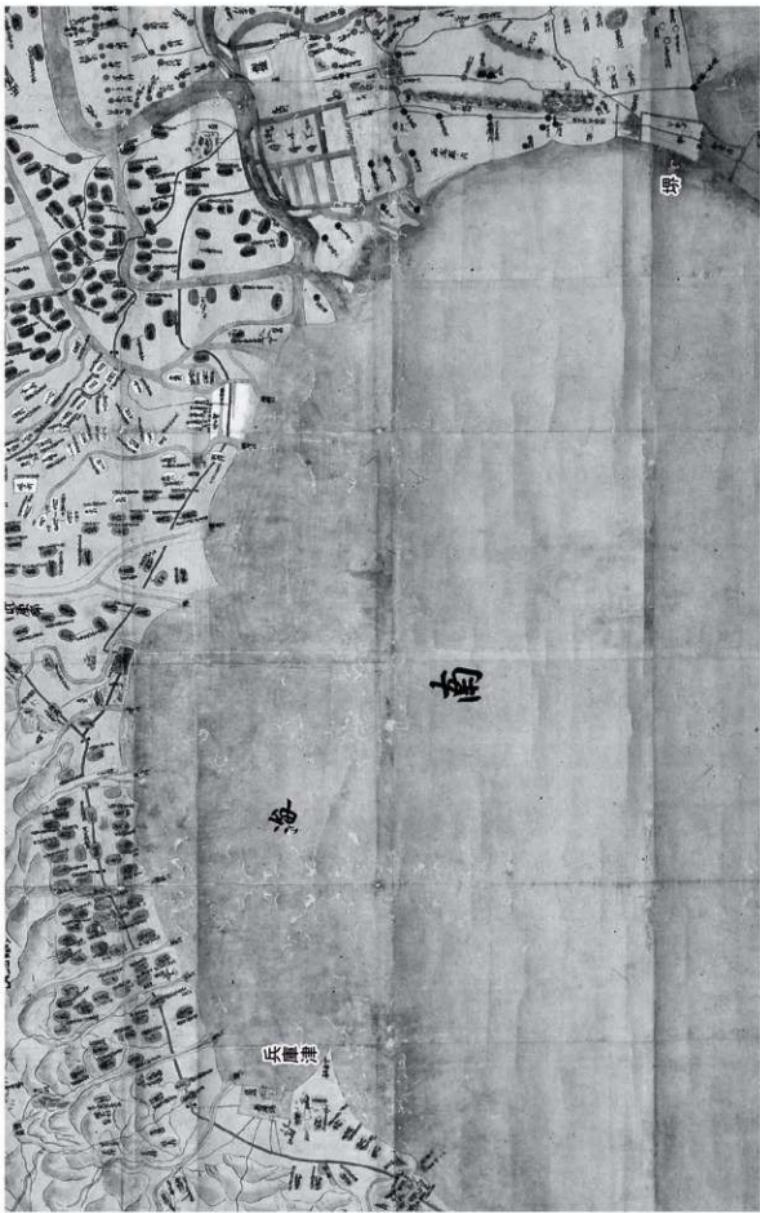


図117 「慶長十年標準國地図」(部分) 兵庫津・岸 西宮市立郷土資料館提供

特徴である三日月高台の無釉で、外面に鉄カンナ痕が見当たらない。(未掲載)

③黒楽茶碗は長次郎以降、現存する京都楽家が製作した黒楽茶碗ではなく、16世紀末葉から1615年までの遺跡からも少なからず出土する、在地の土を使用して京都楽家の黒楽茶碗を模倣した黒楽茶碗である。胎土は柔らかく粗い土師質で鬆が大きく多く入っており、持った感触は軽い、熱伝導率が悪いので茶碗に適する。黒釉には、光沢がない。

### (3) 花生

①備前掛花生は、茶室床間の柱に掛ける為に口縁部近くに一孔されている。

②ベトナム長胴壺切溜(きりだめ)花生は1592年頃製作の『河盛家世界地図屏風』によるベトナムから砂糖の容器とし輸入され、それを切溜花生に転用したのである。実見した生産窯は、ベトナム中部のミン・スエンフックチック窯である。これは、堺環濠都市遺跡の16世紀第4四半期から1615年大坂夏の陣火災面から50点以上出土している。

③切溜花生であるが全体に大きく歪み粘土紐痕がある生産窯不明の長胴壺は、堺環濠都市遺跡SKT772地点で1596年慶長伏見大地震面から1615年大坂夏の陣火災面の1間半四方の三階蔵茶室からも出土し、福建・広東窯四耳茶壺、備前茶壺・水指、信楽茶壺と共に伴している。このタイプの出土数は、第62次調査地点だけでも堺環濠都市遺跡より多い。

### (4) 茶入

備前茶入・唐津茶入蓋が出土している。陶磁器の茶入は濃茶用で、薄茶用は棗である。従って、棗が火災によって消失している状況は堺環濠都市遺跡と同じである。濃茶(御茶)と薄茶の作法は、「今井宗久茶湯書抜」「慶長8(1603)年2月29日 堀衆時書院にて振舞候て路次口より参候」条に見受けられる。

### (5) 葉子器

華南三彩盤は、2タイプの計4点出土している。1つは底部無釉で見込みに印花文がある。他のタイプは総釉で低い高台があり、口縁部にコイン文、見込みは藻・双魚文・双蝶文が線刻されている。前者のタイプはSKT3地点で出土し、後者のタイプはSKT787地点SS201三階蔵茶室から出土している。

### (6) 砥・硯箱・文机・疊

上記は、1600年代前半とする町屋の火災炭化面から出土し、書は茶の湯の一連の作法である。硯は、SKT3地点・SKT263地点書院SB01等で出土した。炭化した疊は堺環濠都市遺跡では町屋での出土例がなく、SKT47地点SB04三階蔵茶室でのみ出土していることから硯・硯箱・文机・疊が出土した町屋建物は、茶室と想定出来る。

### (7) 瓦質風炉

「今井宗久茶湯書抜」「慶長8(1603)年2月29日堀衆…」条にも「風炉」とある。同タイプは、16世紀第4四半期のSKT4地点(住吉・大鳥大社の宿院)SF01堀からも出土する。『山上宗二記』に見る「奈良風炉 天下一宗四郎」銘印刻がある瓦質風炉はSKT263地点書院SB03・三階蔵茶室、SKT874地点の1596年面~1615年面から出土している。

### (8) 会席料理器

①備前擂鉢は兵庫城築造期にあたる1580年初頭の遺構から斜目擂目擂鉢の初期タイプが出土した。このタイプの年代判定の根拠は、1582年廃絶の徳島県藍住町勝瑞城館跡、SKT19地点「天正13年(1585)」銘木筒共伴の擂鉢である。丹波擂鉢は、当地が生産窯に近いことから大坂城下町跡の1615年面と同じく備前擂鉢を凌駕する。堺環濠都市遺跡で

の備前描鉢の多さは、堺商圈を証明している。在地土師質皿等は、神仏共食用や塩等の調味料入れでもある。

#### ②唐津碗・皿

1615年まで胎土目の唐津碗・皿であるが、兵庫津では1615年以前に新技術の砂目痕を有する唐津製品が目立つ。さらに、堺や大坂出土の唐津碗・皿類とは、釉調や文様に差異があることから兵庫津の唐津商圈が存在したと考えられる。堺環濠都市遺跡では唯一、SKT112地点1615年面の砂目痕の唐津皿が知られる。

#### ③漳州窯青花盤・碗・皿

生産窯が確定するまでの呼称は、粗製青花・福建広東産青花・呉須手・呉須赤絵であった。福建省漳州市（旧漳州府）内の漳州窯は、1993年森村が生産窯であると確定した。その研究成果は、景德鎮窯→漳州窯→志野・織部へと誕生したことが判明した。2012年刊『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』SK602からは、土師質蓋付茶入・焼塩壺・唐津向付と共に漳州窯青花寿字文・宝尽文碗が出土している。漳州窯陶磁器は堺海商による豊臣商圏であるので、堺環濠都市遺跡の漳州窯陶磁器と同一である。

#### ④兵庫津の焼塩壺

堺焼塩壺は「堺鑑」では、天文年間に京都から堺の湊に来て生産を開始し、雜賀塩を堺で詰めて全国販売したとある。堺環濠都市遺跡では、16世紀第3四半期から出土している。

堺焼塩壺は赤褐色で、1600年～1615年の出土品は、砂粒が少なく硬質で縦に面取りしている。兵庫津の焼塩壺は、堺焼塩壺を模倣しているが海近くの土を使用している為に砂粒が多く、堺焼塩壺に比して赤味がなくやや軟質である。

### 3. 堀環濠都市遺跡の概要

堺環濠都市遺跡は、1615年大坂夏の陣大火後に家康が大改造・拡張した、南北約3km×東西約1kmの範囲である。南北朝動乱期の1350年前後に荒廃した京都に変わる都市として建設した国際貿易都市（外港）である。堺は、北が「堺の住吉大社」、東が「金岡神社」、南が「大鳥大社」、中央に「開口（あぐち）神社」、鬼門に「方達神社」の海神で護られている。

その歴史は、5世紀における百舌鳥倭五王寿陵群の陵園を繼承している。堺千家の政商・大茶人千利休は堺で茶の湯を大成したが、その基礎は、堺町人・堺衆・会合衆の茶人達である。ちなみに、利休堺屋敷は旧今井町、現在の宿院町西1丁の約50m四方（現「利晶の杜」付近）であると考古学的調査（SKT214地点）から推定出来る。

堺町人による茶の湯は、『山上宗二記』に「一期一会」の根本や「会席料理」の項目と共に記載され、堺衆による茶の湯は『今井宗久茶湯書抜』慶長8年条に見られる。家康が全国統一を誇示する為に描写させた1605年頃の描写年代である『堺住吉祭礼図屏風』には、草庵茶室や三階蔵茶室、表通りに面した路次の中潛りが2か所描写されている。堺で茶の湯文化を大成させた要因は、正五位下を下賜された武野紹鶴から千利休までの大茶人が全て堺の豪商・政商であったからである。そのことが、中国で明の皇帝朱元璋が禁止させた抹茶法の茶の湯文化が、日本のみで繼承された理由と考えられる。また、茶の湯で必要な茶釜は「堺鑑」によると天文8（1539）年西洋船に乗った中国明人が種子島に持ち込んだボルトガル鉄砲を堺鉄砲へと発展させ、その技術は茶釜（SKT39・72地点出土）・茶釜蓋（SKT47・705地点出土）・会席料理用鉄釜・鉄鍋（SKT57地点出土）生産に生かされた。

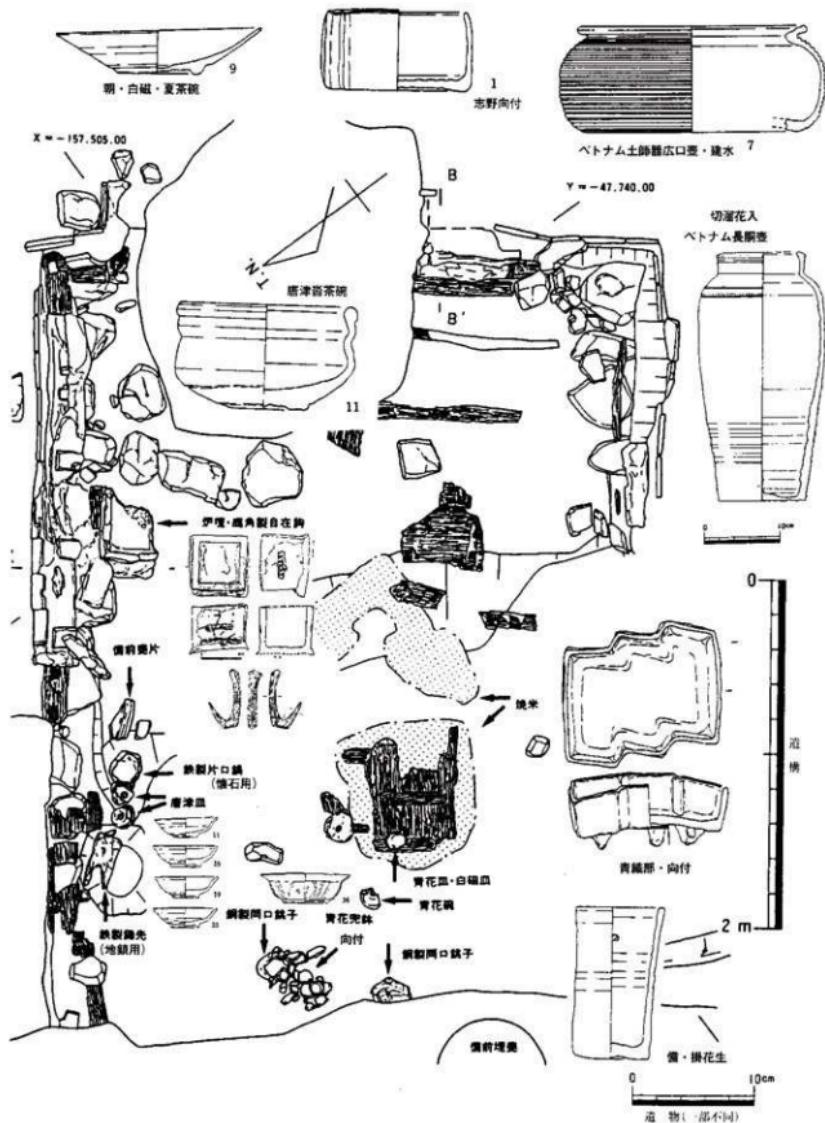


図118 塙環濠都市遺跡230地点 第2次生活面SB01 1596~1615年面 三階蔵茶室出土茶道具  
 (森村 2002 「15~17世紀における東南アジア陶磁器からみた陶磁の日本文化史」  
 国立歴史民俗博物館研究報告第94集 国立歴史民俗博物館)

堺の茶の湯で使用された茶は、1471年『大徳寺文書』「1299号」では、住吉大社まで堺領であった現大阪市内の刈田の茶園を、現堺市北区五箇荘の我孫子屋が所持した茶園からである。1469年遣明船堺初入港後、堺海商与中国茶文化の盛んな福建海商への変化は、日中貿易港の変更、中国陶磁器生産窯の変更によるもので龍泉窯青磁天目茶碗から福建省倣建窯天目茶碗へと変化した。文明16年(1484)の海会禪寺文書に見る堺は、「泉州佛國」と記載され、それと同じ文字が福建省晋江市南天禪寺の大石刻を2007年3月森村が発見した。堺と福建省との密接な関係は、両寺が臨济宗であるからである。さらに、堺市南区の上神谷(にわだに)では、千利休や古田織部時代からも茶を栽培していたと思われ、江戸時代には茶を宇治に運んでいたことが『小谷(こたに)家文書』に見られる。その茶を宇治から全国に運搬するにあたり堺の「左海茶船」を使用したことが、文献や住吉大社前の「左海茶船」大燈籠が証明している。家康世界になった1615年以降は、堺千家から京千家へ移行し、堺千家の茶の湯から茶道・書道・香道・華道へと分派した。しかし、堺千家の茶の湯を継承する1630年代製作の『小谷(こたに)家茶道画屏風』(『17世紀における茶文化の日中比較研究』2003年刊)は、中国明代の覆屋による製茶法と喫茶法を融合した六曲一双屏風である。

#### 4. 茶の湯道具出土の茶室遺構と堺の茶の湯に見る茶の湯の型式・道具

- (1) 茶の湯道具出土の茶室遺構：1596年慶長伏見大地震～1615年大坂夏の陣火災面  
①「草庵茶室」は、利休堺屋敷跡であるSKT214地点で草庵茶室と路次・池を発掘した。  
②「書院と三階蔵茶室」は、SKT39・263地点では書院と三階蔵茶室を隣接してセットで検出した。その様子は、『今井宗久茶湯書抜』「慶長8年」条で堺衆が書院で会席料理・本膳を振る舞わせてから路次口に出て茶室に向かった記述と合致する。  
③「三階蔵茶室」は、砂堆の基礎部分に埠列を立てた土壁の埠列建物、いわゆる、三階蔵の茶室である。堺環濠都市遺跡SKT47・787地点等では、店の奥に多く建築している。
- (2) 堀の茶の湯に見る茶の湯の型式・道具：1596年～1615年大坂夏の陣火災面  
①「近世茶の湯スタイルの確立」型式(森村案)は、会席料理・濃茶・薄茶・書・聞香・花生を茶会で行う茶の湯の作法を言う。それが、1615年までの堺千家の茶の湯である。利休と堺町人が確立した近世茶の湯スタイルとは、現代茶道に継承された盤の上に大振り茶碗を置く、「にじり口」(南宗禪寺のくぐり戸からヒント)から席入りする、「夏茶碗・冬茶碗」、「濃茶・薄茶」、「会席料理」「両口箸・利休箸」、「風炉・炉壇」「黒茶碗」の採用である。  
②「台子飾り」型式は、SKT6地点1615年大火面土壌からほぼ完形の和泉砂岩製茶臼(鉄芯軸入り)・美濃鉄軸杓立・備前種壺水指・唐津釉流し掛け徳利の出土例がある。

#### 5.まとめ

兵庫津は、1583年豊臣秀次の管轄地となり、千利休と古田織部時代における兵庫津と堺の茶の湯文化は極めて酷似している。両者は1585年豊臣秀吉の直轄地であったことが深く関係し、秀吉の茶頭は千利休であったことは周知の事実である。さらに、兵庫城築造期にあたる1580年初頭の備前斜目播磨目播鉢等の一括品出土は、考古学的検証と文献資料が合致したことを見付けておく。また、兵庫津遺跡第62次調査出土の茶の湯道具に見られた火災による炭化物は、1596年慶長伏見大地震・1605年東南海大地震の被災が考えられるが、兵

庫津と堺が秀吉の直轄領であったので、家康が豊臣政権を否定する為に1615年大坂夏の陣で堺を2万戸焼失させ、兵庫津も1615年に火災を受けたと推察出来る。兵庫津遺跡第62次調査出土の茶の湯道具類は、1580年代から1615年までの「国際貿易都市堺」「アジアの海都堺」「茶人の都堺」と同じ茶の湯文化を示している。それらの茶の湯道具類には、茶人の個性である一点主義や注文主義、自由主義の歪み茶碗を表出した「近世茶の湯スタイルの確立」(森村案)を意味する。信長までの茶の湯である天目台や天目茶碗を採用した禅院茶礼・献上茶から千利休は、大振り茶碗を直接、疊の上に置くという茶人と客との平等性を意識した町人・町衆による茶の湯文化を構築した。兵庫津は、城郭都市の機能よりも国際貿易都市堺への中核港湾都市であり、秀吉・豊臣政権の直轄地であったことが堺と同じ茶の湯文化を発展させたのである。今後、1581年イエズス会巡査師ヴァリニヤーノの『日本巡査記』では国家公認の間と認める兵庫津における、発掘調査・研究から発信される茶の湯文化研究に期待したい。

#### 《兵庫津の茶の湯道具出土例》（数字は出土遺物実測図番号）

- 「瀬州窯陶器」146 (SK1215：青花不死鳥文盤)・420 (SB1245：五彩魁字文鉢)・485 (SB1332カマド：青花不死鳥文盤)・564 (SK1327：青花盤)・924 (町屋群 i 燃土層：青花盤)  
「唐津窯」177 (SB1304焼土層：黄褐釉天目碗)・203 (SB1308：絵唐津青茶碗)・429 (SX1302街路3北側：薄茶釉天目碗)・881 (SB1341：緑釉抹茶茶碗)・990 (SB2445：朝鮮王朝淡黄釉蕎麦茶碗)・1188 (SB2413：白釉茶入)・1267 (SK2424：黒釉香茶碗)・1268 (SK2424：黒釉香茶碗)  
「備前窯」253 (SB1355焼土層：茶入)・347 (SB1318：茶入)・380 (SB1323：茶入)・579 (SK1307：茶入)・639 (SK1326：肩衝茶入)・648 (SK1321：掛花生)・774 (第Ⅱ～Ⅲ期町屋焼土層：聞香炉<sup>1</sup>)・775 (第Ⅱ～Ⅲ期町屋焼土層：肩衝茶入)・823 (SB1303焼土層：肩衝茶入)・828 (SB1403：茶入)・854 (SB1304：掛花生)・855 (SB1304：掛花生)・908 (SE2301：茶入蓋)・959 (SB2443：茶入)・1141 (SB2424下層：聞香炉<sup>1</sup>)・1198 (SB2314：耳付茶入)・1274 (SK2421：耳付茶入)  
「朝鮮王朝陶磁器」257 (SB1355内SK1336：船底利)・717 (下層確認トレンチ：白磁茶碗)・819 (SB1402：黒褐釉蕎麥茶碗)・1032 (SB2447：灰釉夏茶碗)・1078 (SB2422下層：灰釉夏茶碗)・1137 (SB2324下層：白磁夏茶碗)・1182 (SB2410焼土層：白磁夏茶碗)・1217 (SE2409掘形：灰釉抹茶茶碗)・1245 (SK2414：白磁夏茶碗)・1255 (SK2418：透明釉夏茶碗)・1563 (南外堀〔新〕埋土：白釉刷毛目抹茶茶碗)  
「瀬戸美濃窯」205 (SB1308：織部角向付)・224 (SB1408・1409：鉄釉天目碗)・1179 (SB2410：灰釉聞香炉)・1251 (SK2415：織部稜花皿〔瀬州窯青花皿模倣〕)・1253 (SK2416：織部鷺文稜花皿〔瀬州窯青花皿模倣〕)・1284 (中央部整地層：織部折線稜花皿〔瀬州窯青花皿模倣〕)  
「楽系茶碗」522 (SB1361イロリ：緑釉茶碗)・851 (SB1304：茶碗)・852 (SB1304：茶碗)・1644 (東外堀〔新〕埋土下層：緑釉茶碗)「ベトナム窯」591 (SE1302：長胴壺)・776 (第Ⅱ～Ⅲ期町屋焼土層：長胴壺)・1225 (SK2412：長胴壺)  
「茶の湯用在地瓦質風炉」1276 (SP2402)  
「倣建窯鐵釉天目碗」1286 (SK2509：高台内漆書「喜」字有り：15世紀後半)・1401 (西半部下層整地層：15世紀後半)



写真95 漳州窑青花不死鳥文盤（森村コレクション）



写真96 漳州窑青花芙蓉手不死鳥文盤（森村コレクション）

### 〈参考文献〉

- 森村健一 2002 「15~17世紀における東南アジア陶磁器からみた陶磁の日本文化史」  
『国立歴史民俗博物館研究報告第94集』 国立歴史民俗博物館
- 森村健一 2004 「埠出土ベトナム陶磁による近世茶の湯スタイルの確立 -16世紀末葉~1615年において-」  
『ベトナム・ホイアンの学術的研究 -ホイアン国際シンポジウムの記録-』  
昭和女子大学国際文化研究所紀要Vol.9 昭和女子大学国際文化研究所
- 森村健一 2006 「16世紀末葉から17世紀初頭の埠における煎茶の出現」『喜谷美宣先生古希記念論集』  
喜谷美宣先生古希記念論集刊行会
- 森村健一 2008 「利休の考古学 自由都市埠」『別冊太陽 千利休』 日本の心-155 平凡社
- 森村健一 2009 「漳州窑」『別冊太陽 中国やきもの入門』平凡社

### 第3節 金属製品

兵庫津遺跡の発掘調査では多種多量の金属製品が出土するが、今回の第62次調査においても数千点に及ぶ遺物が出土し、兵庫津の物質文化がいかに豊かなものであったかを知ることができる。本来であれば出土した全点について報告すべきであるが、本報告においてはその代表的器種および特筆すべき遺物についてのみ掲載する。

**工具 (1876~1882)** 1876は鉄製鋸で、今調査では1点のみ出土した片刃の鋸である。1878は鉄製の鉈である。刃渡り16.8cm、刃部厚8.9mmで、重量272.7gと重厚なものである。1879は鉄製鎌である。鎌は今回の調査では2点しか出土していない。刃部幅4.3cm、茎の先端は内向きに折り曲げられている。1880は完形の鉄製握り鉄である。全長10.7cm、刃部長4.3cmを測る。1881は鉄製金槌の頭部である。全長13.4cm、厚さ2.4cm、重量483.5gを測る。全体は角柱状を呈するが、片方の先端を平たく刃状に成形しており、石工道具に類似するものがある。1882は鉄製鎌である。身部の平面形は三角形を呈する。

**調理具 (1883・1884)** 1883は銅製鉗金である。両面共、目立てによって歯が付けられるが、片面が細かく、反対側が粗い。厚さ0.8mmの銅板を用いて作られている。1884は鉄製の鍋状品である。直径約13.5cmの器に断面三角形の把手が付き、容器下面に断面円形の脚が3本付く。また底中央には直径2.2cmのくぼみがあり、現状では穴が開いている。穴が本来のものか否か、くぼみの用途については不詳である。上記以外にも包丁などが出土している。

**結合具 (1885~1890)** 1885から1889は鉄釘で、船釘と考えられる。3種類に分けられ、頭部が大きく扁平に打ち延ばされる「通り釘」(1885)、身断面が長方形で、頭部が身幅と同じ「縫い釘」(1886~1888)、頭部が身幅と同じで比較的小型のものが多い「皆折釘」(1889)がある。「通り釘」は板の平面と側面の結合、「縫い釘」は側面同士の結合に用いられる。「皆折釘」は場所を問わず隨所に使用される。今回の調査では構造船の部材も出土しており、兵庫津遺跡の港湾的側面を反映した出土遺物である。1890は鎌であり、木材同士の結合に用いられる。

**調度部品 (1891~1901)** これらは室内調度に使用された部品または部材と考えられるもので、銅釘(1891~1892、1894~1897)や壱り止め(1898)、錠前(1900)等がある。また使用目的が特定しづらいが、丸棒状の何らかの軸(1893)や断面方形の棒を環状にし、一端を尖らせた部材(1901)等も出土している。

**秤量具 (1902~1909)** これらは秤量用具と考えられ、1902~1904は棹秤に秤量対象物を吊り下げるための鉤と考えられる。1905~1908は分銅で、1905は「参両」と印刻がある。重量110.9g(2.957両)を測る。1906は片面に刻印が2か所押され、中央に繋で刻印がされるが文字は不明である。18.5g(4.93匁)を測る。1907は8g(2.13匁)、1908は1.2g(3.2分)である。1909は棹秤用の鉤で、「天下一」の刻印が見える。28.9g(7.7匁)を測る。

**武器・武具 (1910~1925)** 兵庫津遺跡では刀装具などの武器類が豊富にみられることも特徴といえる。笄(1910)、小柄(1911~1914)、目貫(1917~1920)等「三所物」の存在が目立つ。1911は表面に十二支の各文字が象嵌されている。1915、1916は銅製の鏃で、直径が6cm前後を測る。その他刀装具として鏃(1921)や口金具(1922)、鉄砲玉(1924、1925)が出土している。また武具として甲小札(1923)が出土している。本小札で、威し立ての穴が2列6段以上開けられる。

**文房具 (1926~1928)** 文房具としては、矢立(1926、1927)、水滴(1928)が出土した。矢



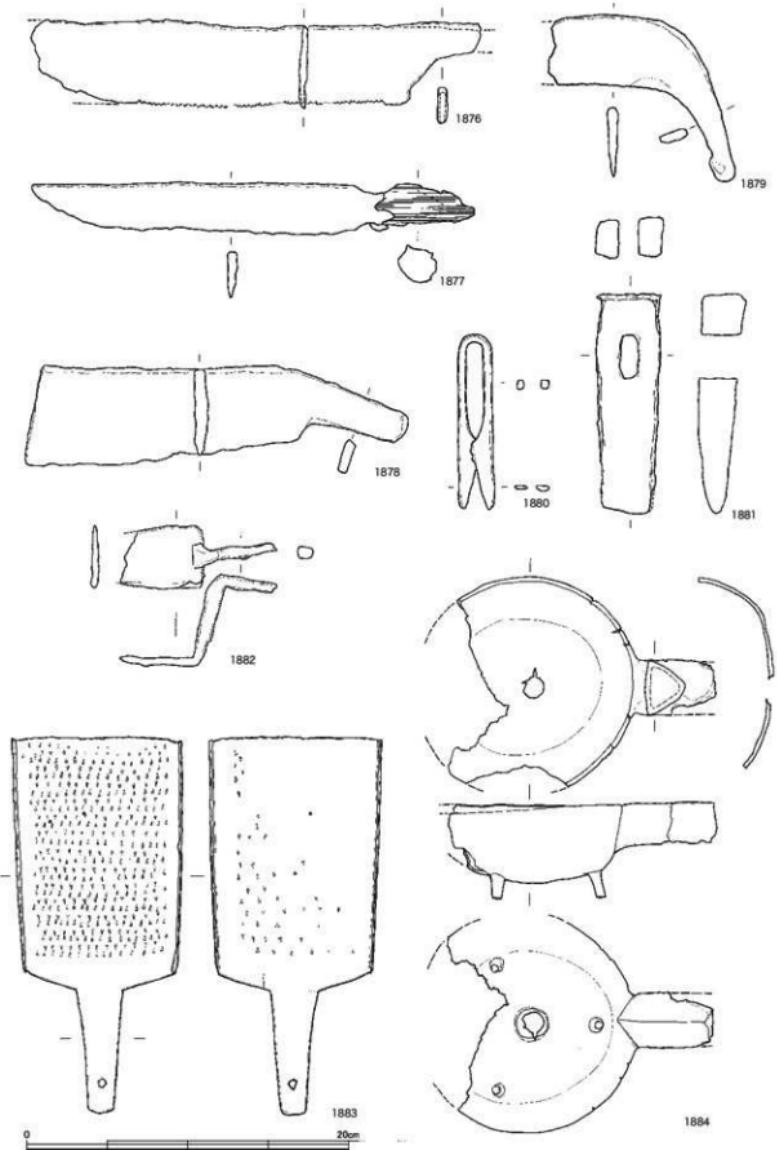


図119 金属製品(1)

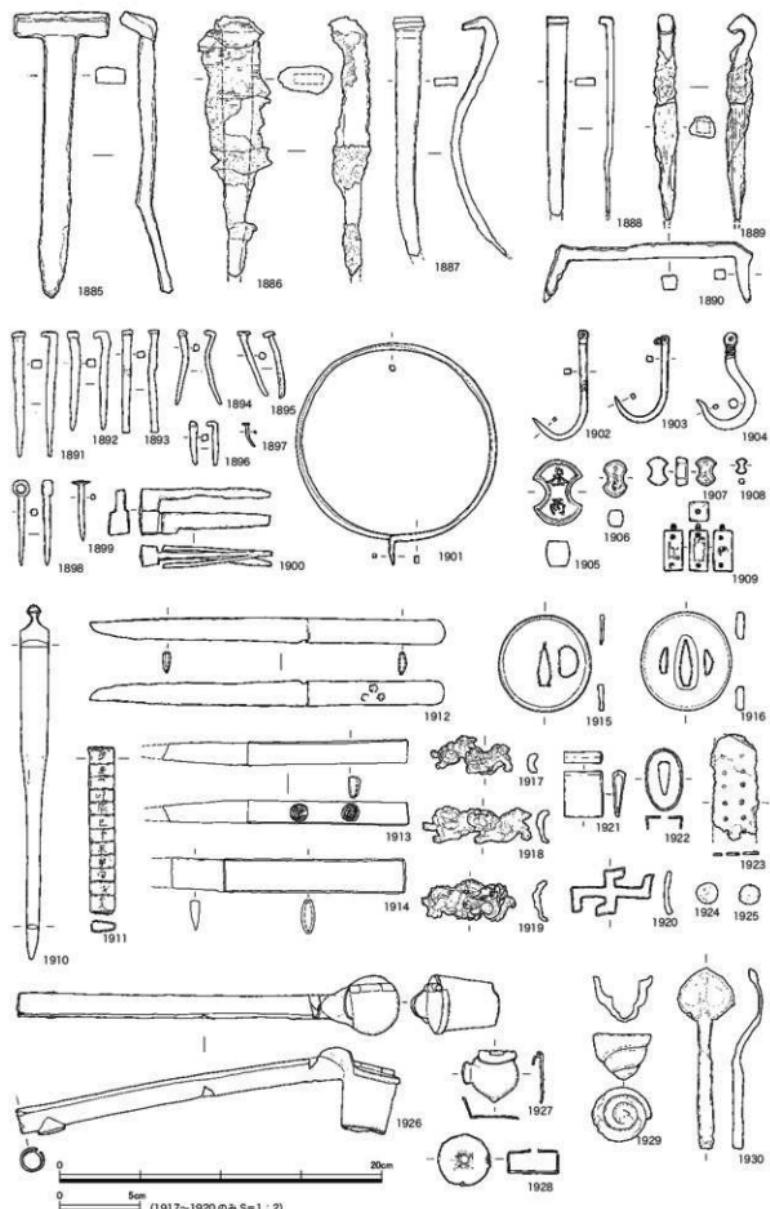


図120 金属製品(2)

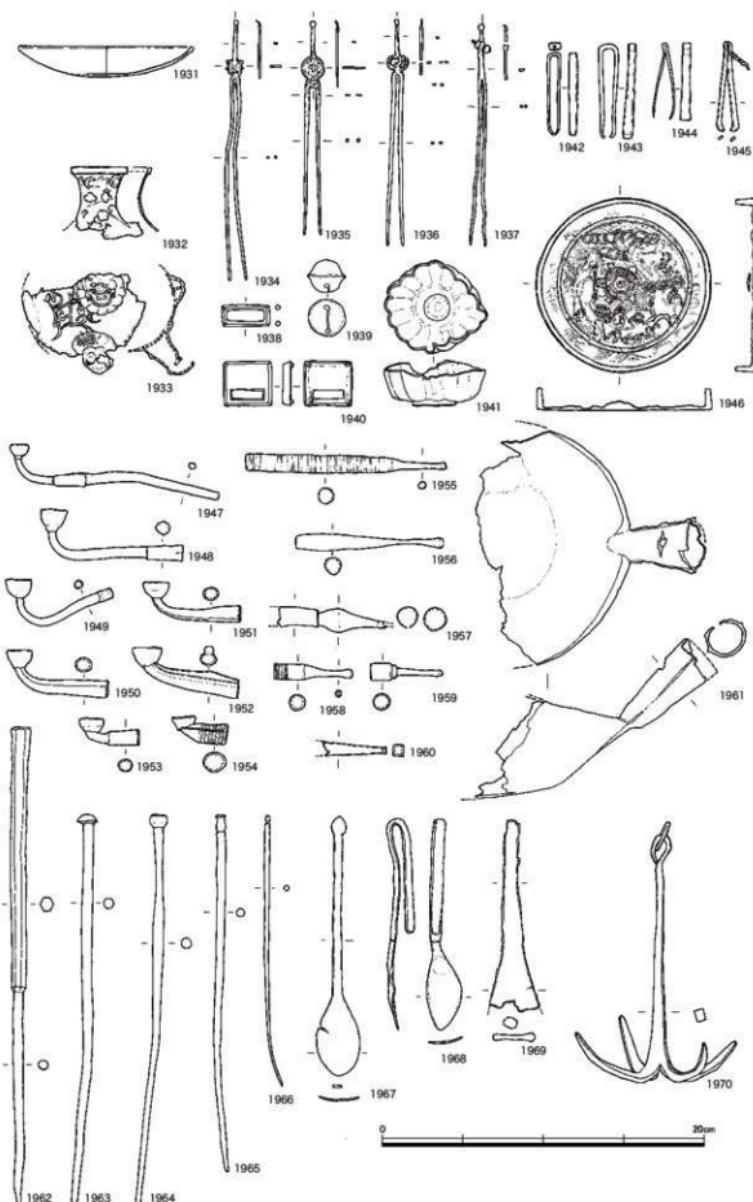


図121 金属製品(3)

錢貨 今回の調査では54種、およそ2100点の錢貨が出土した。内容は中国渡来銭と寛永通寶ではほぼ占められる。X・Y・Zの各調査区において遺構面ごとの錢種構成を計数し出現率を比較したところ、表2の様になった。渡来銭の出土率を見ると、X区においては第2面で84%であったものが第1面で53%と減少する。またY区では第3面で87%を占めていたものが第2面で47%に落ち込む。一方寛永通寶は、X区では第2面で古寛永銭(1626年～1668年)が出土し始め(第4・5面は混入の可能性が高い)、第1面で新寛永銭(1668年～)が逆転する。Y区では第3面でやや出土が増え始め、第2面で新寛永銭は28%と既に確固たる比率を占めるようになる。Z区はSD3101からの出土で占められるが、時期の捉え方が困難であったため、一括して計測した。これによると新寛永銭が最も多く(52%)、渡来銭(28%)、古寛永銭(13%)の順になった。これはX・Y区の結果より新相を表しているものと考えられる。

以上の結果、X区では第1面と第2面の間、Y区では第2面と第3面の間において画期が存在し、今回の調査におけるⅢ期からⅡ期への変遷として捉える事ができ、Z区のSD3101の錢種構成もより新しい様相を表すこともわかった。またⅡ期の中で新寛永銭を導入するという現象も数値として確認することができ、出土錢貨からも遺跡の時期変遷を追認することができた。

	第5面	第4面	第3面	第2面	第1面	SD3101
X区 寶生銭	82	94	94	84	53	23
X区 古寛永	5	3	3	10	19	24
X区 寶永銭	11	3	3	4	24	18
X区 銀鏡目銭	62	74	187	52	70	39
Y区 寶生銭	102	90	87	47	95	52
Y区 古寛永	0	0	0	0	21	21
Y区 寶永銭	0	1	5	28	36	25
Y区 銀鏡目銭	13	133	435	148	118	61
Z区 渡来銭						28
Z区 古寛永						13
Z区 寶永銭						57
Z区 銀鏡目銭						17

表12 錢貨出土率

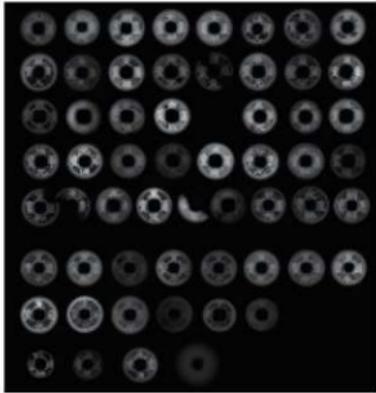


写真97 錢貨X線透過画像

番号	品種	場所	出土遺構	台所番号	番号	品種	場所	出土遺構	台所番号
番-1	唐人通寶	XII	第2面銀鏡目	X-325	番-21	唐人通寶	XII	第2面銀鏡目	X-325
番-2	元寛永	XII	SD3101銀鏡目	R-215	番-31	唐人通寶	XII	SD3101上層	R-1044-2
番-3	元寛永	XII	SD3101銀鏡目の中	R-225	番-42	元寛永	XII	内子高木櫻井塗装	R-130
番-4	太平通寶	XII	SD3101	R-140	番-54	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-130
番-5	太平通寶	XII	SD3101	R-214	番-55	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-130
番-6	太平通寶	XII	第3面銀目層	R-363	番-56	太平通寶	XII	SD3101床頭北17号	R-216-5
番-7	太平通寶	XII	第3面銀目層	R-471	番-57	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-130
番-8	太平通寶	XII	SD3101	R-779	番-58	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-130
番-9	太平通寶	XII	SD3101	R-1277-2	番-59	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-130
番-10	太平通寶	XII	SD3101	R-1277-3	番-60	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-130
番-11	太平通寶	XII	SD3101上層	R-1265-1	番-61	太平通寶	XII	SD3101上層銀鏡目	R-2880-11
番-12	太平通寶	XII	SD3101	R-1279-2	番-62	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-210-1
番-13	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1279-3	番-63	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-162
番-14	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1272-2	番-64	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-222-2
番-15	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1260-2	番-65	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-405
番-16	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1269-1	番-66	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-210-1
番-17	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-2152	番-67	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-141-1
番-18	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-2223	番-68	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-133-3
番-19	太平通寶	XII	SD3101	R-1493-2	番-69	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-471
番-20	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1493-3	番-70	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-119
番-21	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1493-4	番-71	太平通寶	XII	SD3101上層	R-214-2
番-22	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1493-5	番-72	太平通寶	XII	SD3101上層	R-188
番-23	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-2271	番-73	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-211
番-24	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1573	番-74	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-141-3
番-25	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1581	番-75	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-211
番-26	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1582	番-76	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-142
番-27	太平通寶	XII	SD3101	R-1495-1	番-77	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-136-6
番-28	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-1495-2	番-78	太平通寶	XII	内子高木櫻井塗装	R-142-2
番-29	太平通寶	XII	SD3101	R-2126	番-79	太平通寶	XII	SD3101-2023内子高木	R-276
番-30	太平通寶	XII	SD3101	R-391-5					

表13 錢貨一覽

#### 第4節 木製品

出土木製品の概要 今回の調査では、4925点の木製品が出土した。その殆どはSD3101と兵庫城の堀からの出土である。これは有機質の遺物にとって遺存性が高い環境にあったことと、その廃棄場所として都合がよかったということに起因するものと考えられる。

出土した木製品は、生活容器・食膳具・服飾具・工具など、用途に応じ14種類に分類し、さらに品目別では漆椀・箸・鏡箱・容器・刷毛・船材・从具など78種に及ぶさまざまな道具が確認され、兵庫津に暮らす人々の生活事情の一端を窺い知ることができた。なお、樹種については別項に記載のとおりである。

漆器・道具類 漆器では椀や蓋、盃などが出土している（1971～1994）。いずれもSD3101と堀からの出土である。椀の形態は腰丸椀、高台付け根辺りに棱のある一文字腰椀、平椀が存在する。漆塗膜は黒色漆で下地を行い、内面に赤色漆で上塗りを施すものや、内外面ともに赤色漆を施すものがある。加飾されたものには家紋や植物をかたどったものがある。1971の高台内側には輪違い紋の横に「本極カ」の文字が金色で記されている。1972の高台内側には「棚請合」の文字が記されている（神戸市立博物館 高久智広氏の御教示による）。1978には松葉、1982には花柄が研ぎ出しの技法により外面上に加飾されている。1995は折敷で黒色漆の下地に内面のみ赤色漆で仕上げている。側板の黒色漆は波状に塗布した痕跡が残る。1996は円形の板の周辺をわずかに高めた盆で、黒色漆の下地に上面のみ赤色漆を施している。

2002は用途不明の木製品で、柄の付いた舟状の道具と考えられる。方形の部分の四周には釘穴と板材が当たっていた痕跡が残る。2003は鉢であるが、台の頭部の短軸方向にわずかに窪んだ部分があることから、引き出しのついた箱の上に置いて使用される、輕節削り用の鉢ではないか。2006は一見すると塵取りのような形状をしている。方形の板の三方には側板が付き、一方のみ板材の端が面取りされて斜めに仕上げられている。2010は底以外が赤色漆が塗布された木製品で、頂部に穴が穿たれている。この穴に別の材を差し込んで使用される台座のようなものか。2017は判子である。印面には「小豆屋半兵衛」とある。小豆屋の屋号は兵庫津の水帳絵図にも存在する屋号で、出土位置と一致する。

2018・2019は傘の下轄幢である。漆塗りで仕上げられている。2020は位牌の脚部で、丁寧に造られている。2021～2024は和船のミニチュアであるが、一本造りの船体は精巧に作られ、中央部に穿たれた穴には帆柱が取り付くものであろう。2025は玩具の小太鼓で、皮の部分は無いが、留めていた鉄が残っている。2028は柄鏡箱を模したもので、飯事遊びの道具であろう。2033は横櫛で、黒色漆で仕上げ、桐紋の蒔絵で飾る。2034は赤色漆の表面に菊花と「桐」の文字が浮かぶ。

下駄 255点の出土資料のうち器種の判別できる資料は5種、236点ある（図122）。台の平面形は長方形（I）・小判形（II）・台頭が台尻に比べて幅広となる小判形（III）の3種類があり、前壺の位置は中央に穿孔されるのが基本である。以下、各下駄の特徴を観察する（表15）。

連歯下駄は、台と歯を一体成形するもので、全長18～24cmの下駄である。台の横断面は長方形を呈するのが基本であり、後壺の位置が後歯の前に穿孔するもの（a）と後に穿孔するもの（b）が認められる。

剃り下駄は、台裏を剃りぬいて歯を整形するもので、全長16cm以下の小型品と、全長20

～24cmの大型品がある。台の横断面は長方形を呈し、後壺の位置は後歯の前に穿孔されるのが基本である。また、台裏の台頭と台尻を抉るものと抉らないものがあり、出土した下駄は前者が多い。刎りぬき方は6種類ある。前壺側と後壺側の両方に円形状の抉りを3ヶ所に施し、その間を下駄の長軸に対して横方向に抉るもの(a)。前壺側のみに円形の抉りを3ヶ所に施し、前壺と後壺の間を下駄の長軸に対して横方向に抉るもの(b)。前壺を頂点として抉り方の平面形が山形になるもの(c)。前壺を頂点として抉り方の平面形が内湾する山形となるもの(d)。下駄の長軸に対して横方向の抉りのみを加えるもの(e)。前壺と後壺の間を梢円形に抉ったもので、いわゆる木履と呼ばれるもの(f)。なお、a類とb類の円形状の抉りは、円と円の間の角を整形して半円形に整えられているものも存在する。

陰卯下駄は、台に下駄歯を差し込むホゾ穴が台表まで貫通しないもので、全長20～24cmの下駄である。後壺の位置は、後歯の前に穿孔するものと後に穿孔するものが認められる。台の横断面は、逆山形と逆台形があり、逆台形の底辺は幅が広いものと狭いものがある。台裏の台頭には、前壺を穿孔するために抉りが施されており、台尻は厚みを減じた調整が施されている。台裏の中央には、円形、方形、菱形の抉りが加えられているもの(a)と抉りが加えられていないもの(b)がある。

露卯下駄は、台に下駄歯を差し込むホゾ穴が台表まで貫通するもので、全長16～24cmの下駄である。全長16～20cmの小型品が他の下駄に比べて多い。台の横断面は、逆台形が基本で、後壺の位置は、後歯の前に穿孔するものと後に穿孔するものがあるが後者は少ない。また、歯を差し込むホゾ穴が前壺・後壺ともに1点ずつ穿孔されているもの(a)と、複数穿孔されているもの(b)が認められる。

無歯下駄は、下駄歯の付かないもので、台頭が厚く、台尻が薄い作りの全長20～23cmの下駄である。

以上による観察の結果、連歯下駄を4種、刎り下駄を9種、陰卯下駄を5種、露卯下駄を5種に分類した(表14)。今回は無歯下駄を除く器種を検討する。

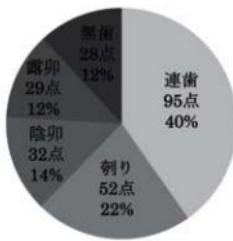


図122 下駄別の割合

連歯下駄	A式	B式	C式	D式					
台の平面形態	I	I	II	III					
後壺の位置	a	b	a	a					
刎り下駄	A式	B式	C式	D式	E式	F式	G式	H式	I式
台の平面形態	I	I	II	II	II	III	III	III	III
刎り方	c	d	a	e	f	a	b	d	e
陰卯下駄	A式	B式	C式	D式	E式				
台の平面形態	I	I	II	III	III				
刎りの有無	a	b	b	a	b				
露卯下駄	A式	B式	C式	D式	E式				
台の平面形態	I	I	II	II	III				
ホゾ穴の数	a	b	a	b	a				

表14 下駄の分類

連歯下駄(2035~2040)は、後壺の穿孔位置に違いがある。後歯の後に穿孔するb類は、中世から近代への移行期に増加することが指摘されており、鼻緒をすげる作業を簡易にするための工夫と言われている(本村2006)。出土した連歯下駄はb類がB式に限られていることと、a類とb類は併存関係にあるため、型式変化は見出しえにくい。

割り下駄(2041~2045)は、割り方の違いに型式の変化が見て取れる。いずれの割り方も前壺と後壺の穿孔を目的としているが、a類からb類への変化は、作業効率の簡素化によるものであり、そのb類から派生した割り方がc・d・f類にあたると考えられる。a・b類の割り方は、円形状の抉りを3つ隣接したものだが、その抉りによって生じた角を削って、半円状に整形したものが存在することから、型式的には、この半円状に整形したものが古く位置づけられる可能性がある。a類は、半円状に整形する作業工程を簡略化した結果生み出されたものであり、その後、前壺側の抉り方が山形などへ変化したと考えられる。e類は、鼻緒を釘で留める技術が導入されることによって生み出された抉り方で、a~d類などに後出する技術とみられる。

陰卯下駄(2047~2050)は、台裏の中央に施された抉りに着目した。a類は、円形・方形・菱形の抉りがあるので、現状では、これらに型式変化は認められない。円形や方形の抉りが簡素化して菱形の抉りとなる可能性も考えられるが、現状では資料数に恵まれない。ただし、抉り自体は、割り下駄のように重量を軽減する目的をもって施されたものではなく、生産地や職人の識別といった機能が付与されていたのではないかだろうか。

露卯下駄(2051・2052)は、後壺の位置が後歯の前に穿孔されるものと後ろに穿孔されるものの2種類がある。型式変化が認められるのは、下駄歯を挿入するホゾ穴の数にあり、基本的には、前壺側と後壺側に穿孔されるホゾ穴の数は対応関係にある。露卯下駄の多くはa類で、b類は、製作工程上a類よりもホゾ穴を多く穿孔する分、作業工程

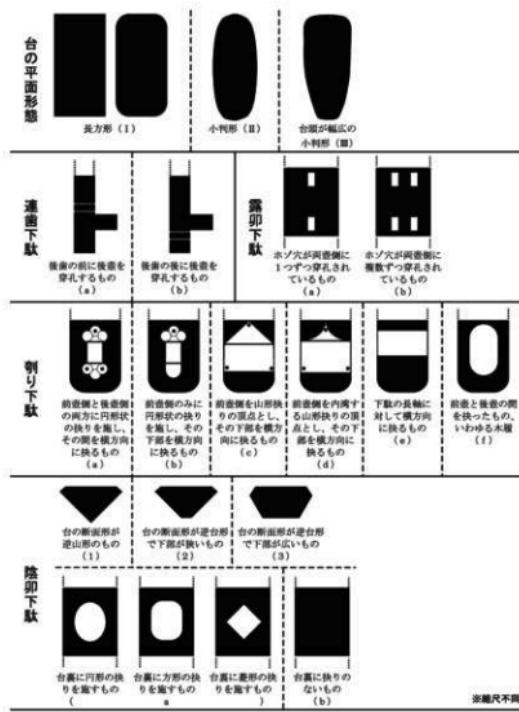


表15 各下駄の分類属性模式図

が増えることから、b類からa類へ型式学的変化があったと考えられる。

上記の検討結果から、各下駄で設定した型式とその出土遺構から編年を行う(表16)。連歯下駄は、A・B式が町屋遺構や元禄期の内堀、東外堀(新)小区画(旧)石垣埋土から出土しており、その出現段階からa・b類が併存していた。A式は、SD3101段階で

は使用されなくなり、

C・D式がA式に代わって主流を占めるようになる。連歯下駄の中で最も多く出土しているのはC式で、C・D式の出現によって台の平面形に変化が生じたものと考えられる。中世から近世への過渡期に台の平面形が小判形から長方形へシフトすると指摘(本村2006)されているが、出土した連歯下駄は、むしろⅡ・Ⅲ類が増加する傾向にある。

割り下駄は、a・b類が古い段階から認められ、使用期間も長期にわたる。ただし、H式とb類の手法によって割りぬかれているC式は資料数が少なく、現状では編年の位置づけを保留せざるを得ない。A・B式は東外堀・南外堀から、D・E・I式はSD3101から、F・G式は町屋や内堀、土橋周辺から出土しているため、先の検討結果とも符合する。

陰卯下駄は、台裏の中央に抉りのあるA・D式がSD3101から出土しており、抉りのないB・C・E式は東外堀・南外堀・SD3101から出土している。a類とb類には、型式変化を見出せないと言及したが、出土遺構の時期を踏まえると、b類からa類へ形式変化したことがうかがえる。

露卯下駄は、b類が東外堀と南外堀から出土しているが、その後に続かない。a類は、古い段階から使用され、その使用時期も長期にわたることから、型式的な検討結果とは異なる状況にあり、露卯下駄のⅢ類とb類は、外堀段階における一過的な下駄であった可能性が考えられる。

### 〈参考文献〉

- 齐藤 進 2000 「汐留遺跡Ⅱ(第4分冊)」 東京都埋蔵文化財センター  
 本村充保 2006 「遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域制の抽出に関する基礎的研究」「考古学論叢」第29冊 奈良県立橿原考古学研究所 1-95  
 本村充保・高橋 敦 2009 「遺跡出土下駄に関する製作技法および使用樹種に関する基礎的研究—西日本出土資料を中心として—」「考古学論叢」第32冊 奈良県立橿原考古学研究所 53-83

連歯下駄	内堀・町屋段階	外堀段階	SD3101(旧)段階	SD3101(新)以降
A式				
B式				
C式				
D式				

割り下駄	内堀・町屋段階	外堀段階	悪水抜溝古～旧段階	悪水抜溝新段階以降
A・B式				
D・E式				
F式				
G式				
I式				

露卯下駄	内堀・町屋段階	外堀段階	悪水抜溝古～旧段階	悪水抜溝新段階以降
A式				
B式				
C式				
D式				
E式				

表16 下駄の編年

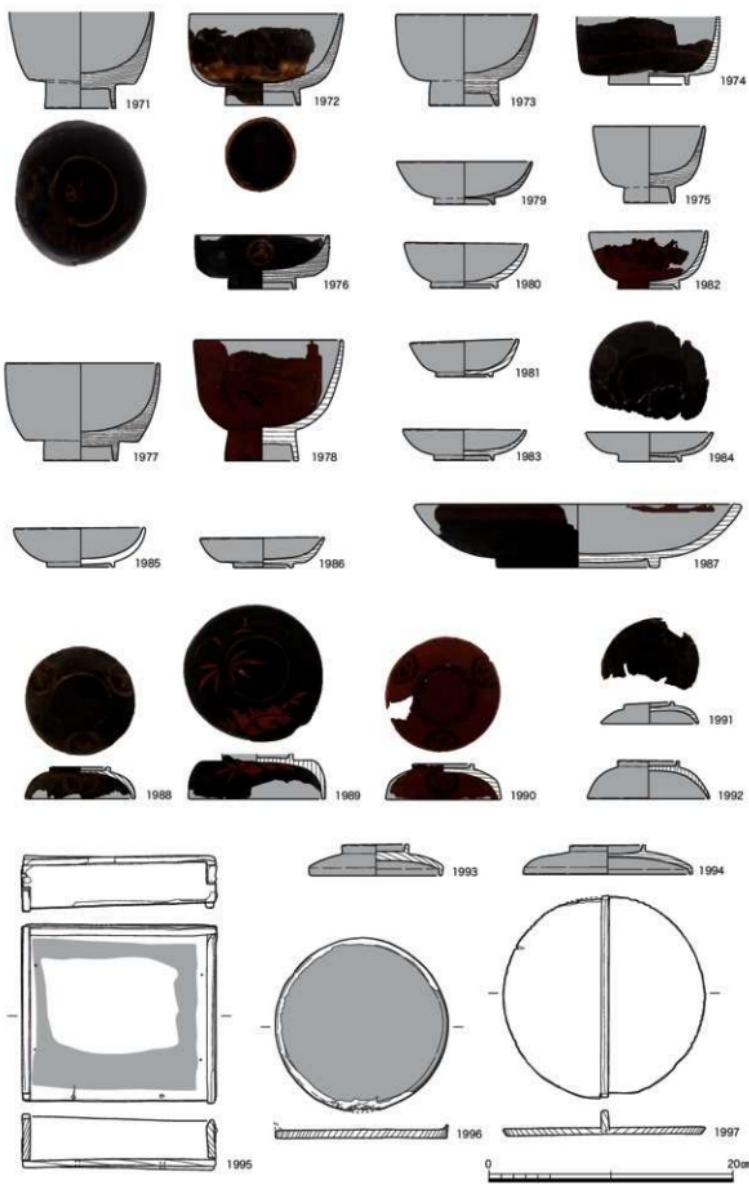


図123 木製品実測図(1) アミは漆

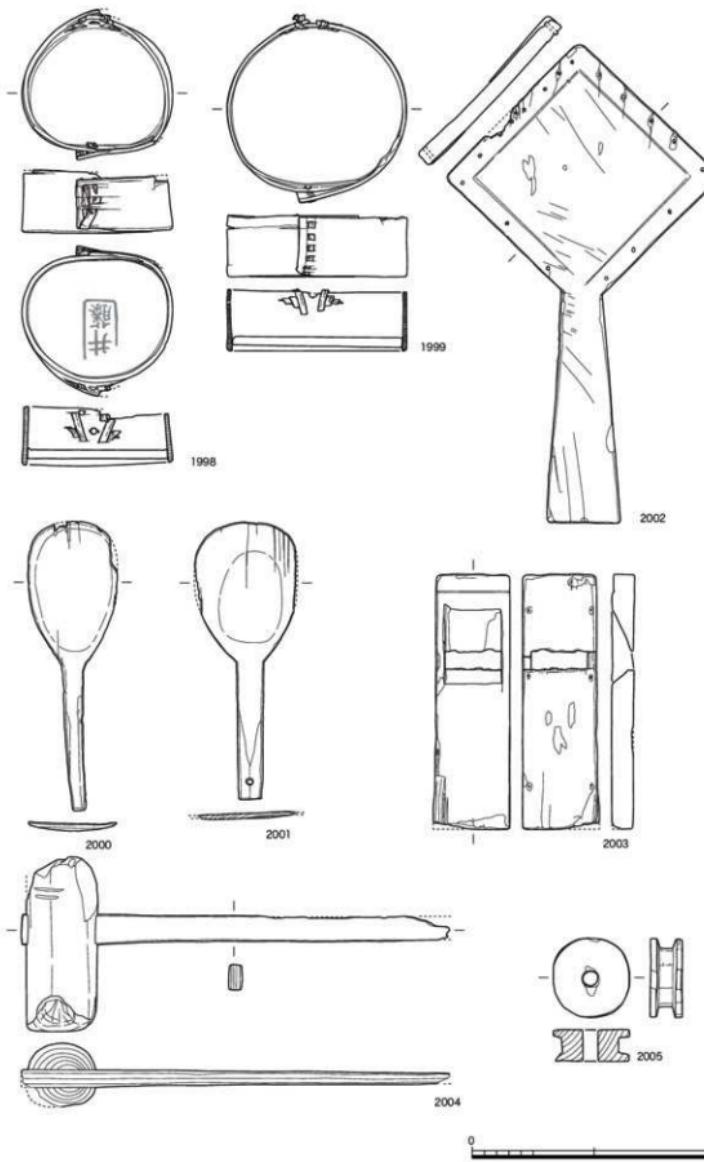


図124 木製品実測図(2)

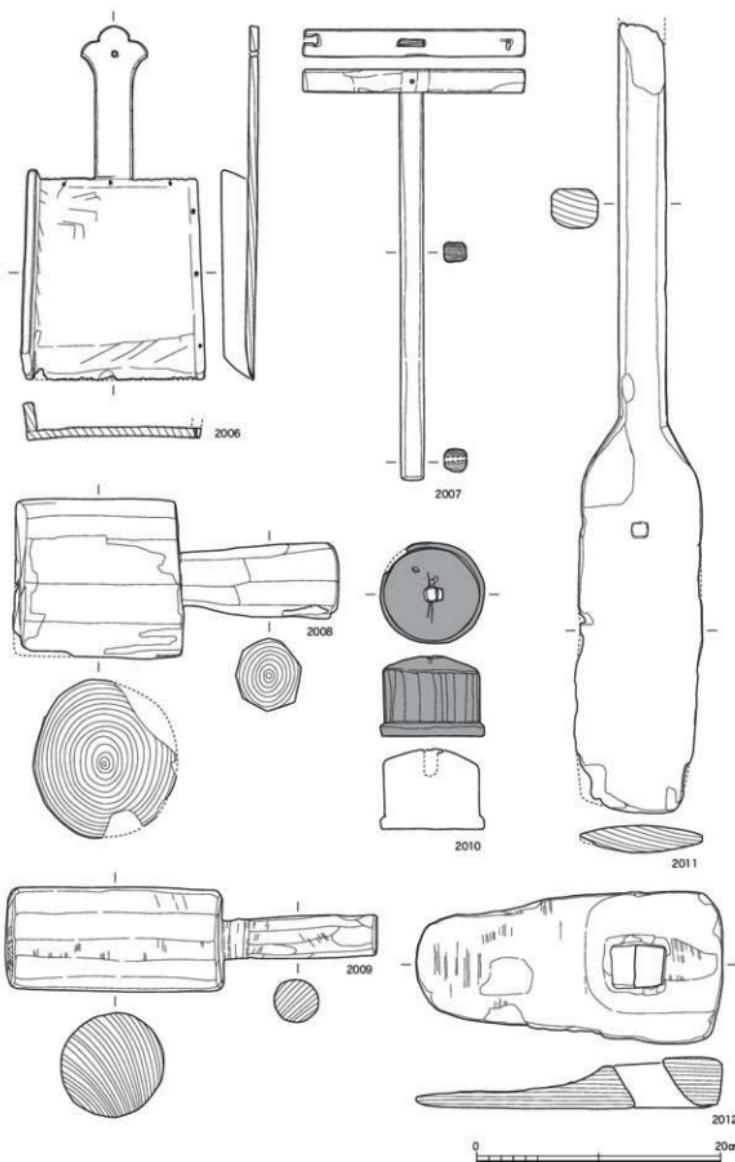


図125 木製品実測図(3) アミは漆

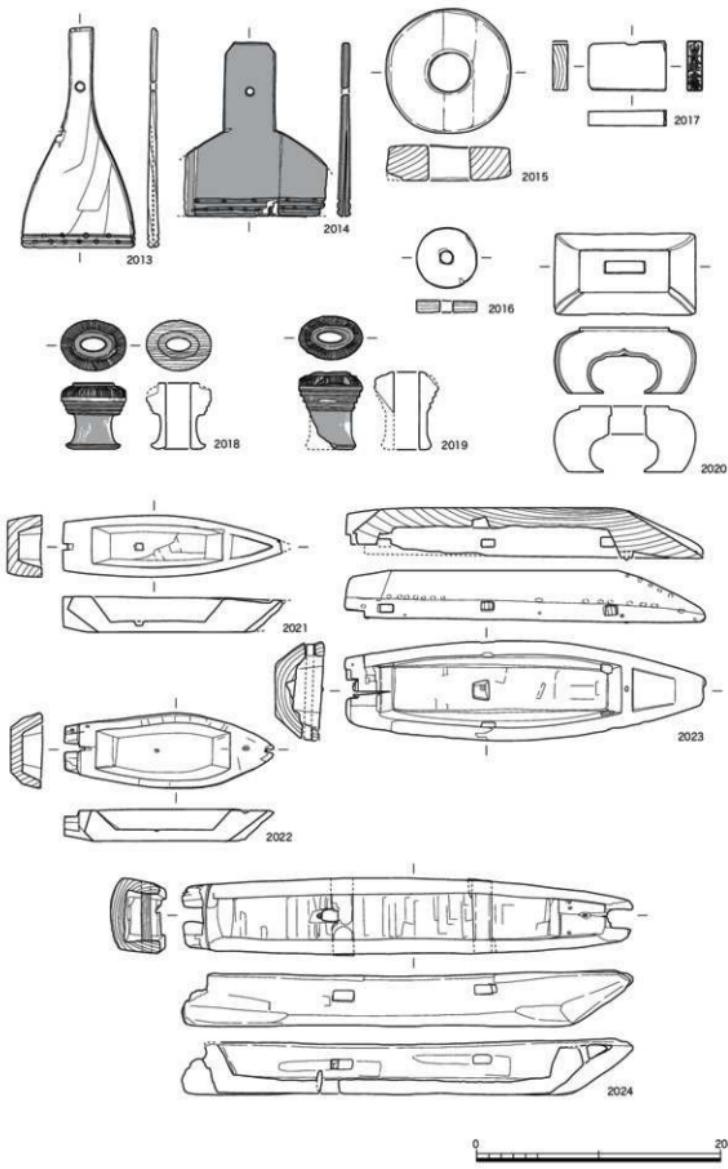


図126 木製品実測図(4) アミは漆

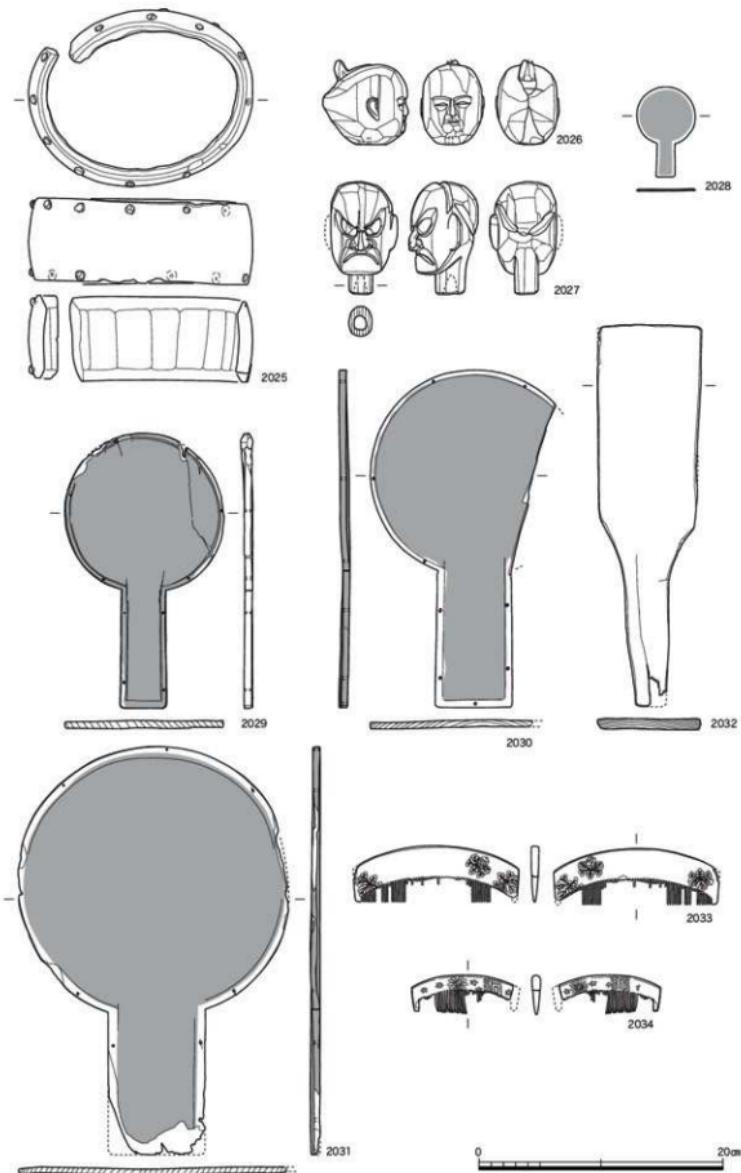


図127 木製品実測図(5) アミは漆

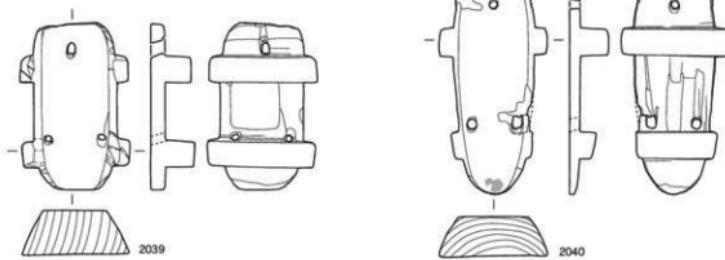
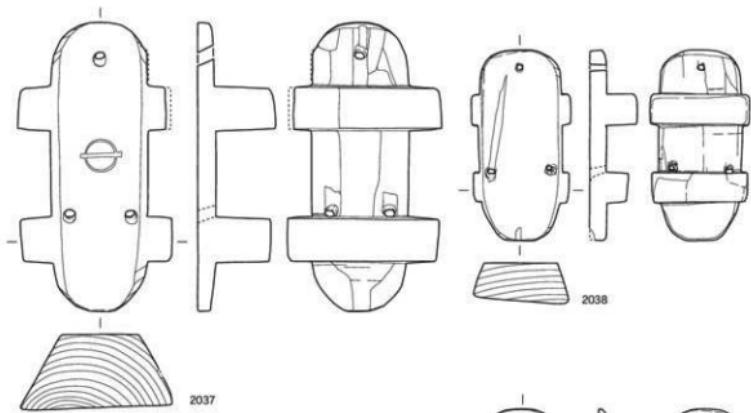
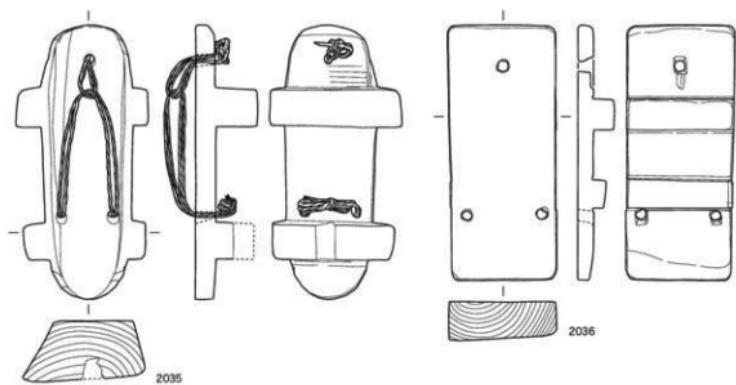


図128 木製品実測図(6)

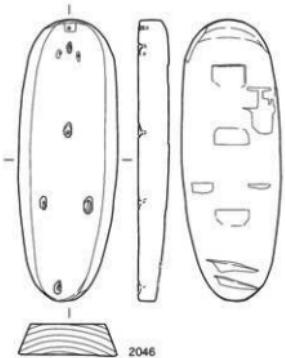
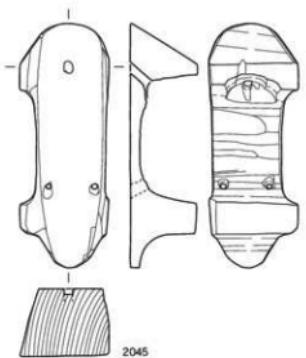
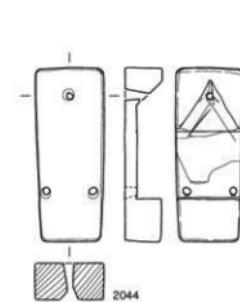
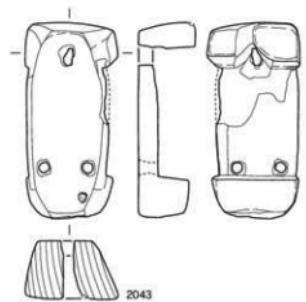
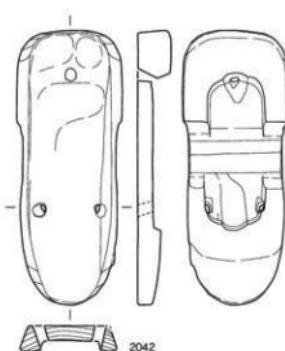
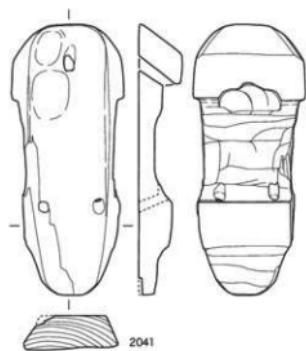
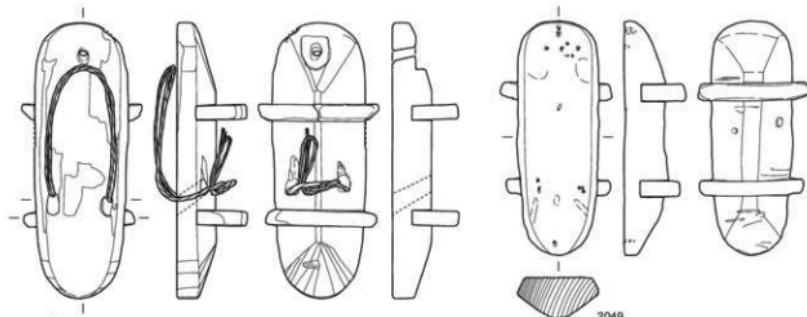


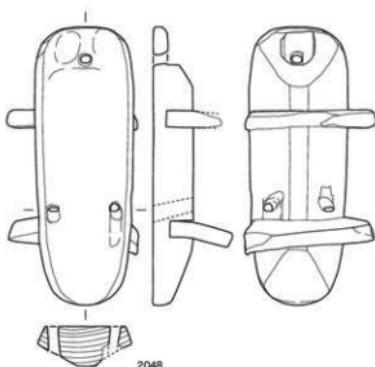
図129 木製品実測図 (7)



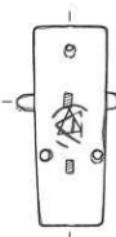
2049



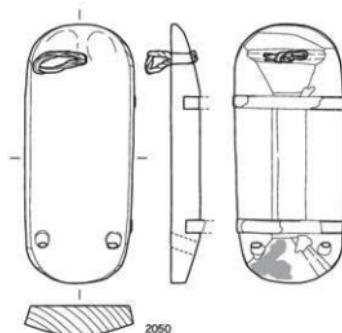
2047



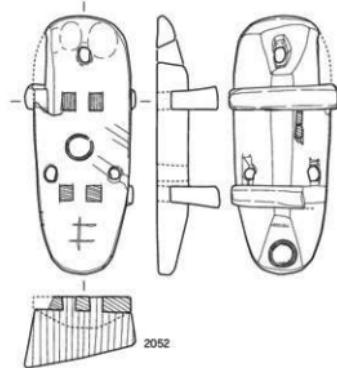
2048



2051



2050



2052



図130 木製品実測図(8)

**船材** 兵庫城の堀およびSD3101を築造する際、石垣の地業や溝側壁の土留めには大型の木材が使用されていた。これらは専用材だけでなく、建築部材や船舶の構造材が転用されていた。これらのうち船材の一部について、以下に報告する。

2053はニヨウマツの板材で、SD3101の土留板として使用されていた。残存長5.4m、厚さ13.6cm（4寸5分）を測る。幅は最も広い部分で70cmを測る。長側辺に打たれた釘は別材同士をはぎ合わせる縫い釘であり、上下辺どちらにも別の板を連結していたことが分かる。釘のピッチは約30cm（1尺）である。はぎ合わせには釘だけではなく、平鎚（ひらかすがい）も使用された痕跡が認められる。さらに図左端では材を斜めに切断しているが、端から20cm付近に別材の痕跡が認められる。材の幅は約20cmで、下図側から通り釘で固定されたようであり、上図が内側で下図が外側ということになる。この痕跡は船尾を閉塞した「戸立」のものと考えられる。よって、2053は構造船の左舷後部舷側板（棚板）であり、上下に別材がはぎ合わせられた3枚以上の内の1枚と考えられる。法量から船体規模は全長30mの千石船級と推測される。

2054はニヨウマツの板材で、SD3101の石垣地業（胴木組）に使用されていた。残存長3.6m、厚さ10.9cm（3寸6分）を測る。最大幅は41cmで、図左端に向けて幅を減じ、端を尖らせている。上図には通り釘の打痕が見られ、こちらが外側と考えられる。内側長側辺には別材をはぎ合わせた、ピッチが約30cm（1尺）おきの4本と、約55cm（1尺8寸）おきの3本の縫い釘が認められる。また平鎚も内外両面に併用されている。上図の上辺には約27cm（8寸9分）ピッチで通り釘が打ち込まれるため、他の板と接合された棚板の上端に当たるものであろう。

2055は長さ74cm、幅24.5cm（8寸1分）、最大厚13.6cm（4寸5分）のニヨウマツ製の板材で、SD3101（新1）の石垣地業に用いられていた。中央付近の長側辺沿いに方形の掘り込みがあり、その中心部に穴が穿たれる。また右図上端付近には直径5.5cm（1寸8分）、深さ2.4cmの円形の穴が穿たれている。これらは船を固定するための「船座」の特徴であり、複数の船を持つ和船に使用されたものと考えられる。ただし完形品ではなく、図下側が船外側で、端部のみ切り取られて転用されたのであろう。中央の方形の掘り込みには「船杭」または「船臍」と呼ばれる突起が付き、船本体に掘られた「入れ子」と連結する。また円形の穴には円筒形のダボが取り付けられ、船を使用しない際に落下防止に用いられたと考えられる。その他にも貫通孔や繰り込みがあるが、用途については今後の検討課題である。

2056はSD3101（旧）の土留めに用いられていたニヨウマツ製の板材で、残存長4.5m、幅36cm（約1尺2寸）、最大厚10.6cm（3寸5分）を測る。はぎ合わせの痕跡はないが、通り釘が約27cm（8寸9分）ピッチで打たれていることから、棚板などの下端と判別できる。よって上図が船内側ということになる。

2057はSK3108出土のスギ板である。残存長は約4.0m、幅23cm（7寸6分）、厚さ3.4cm（約1寸1分）を測る。図左上に別材が縫い釘によってはぎ合わせられる。釘のピッチは19～20cm（約6寸5分）である。下辺にははぎ合わせは認められない。小型船の棚板などに用いられたものと考えられる。

2058はSD3101の石垣地業の胴木に用いられた、残存長3.5m、1辺21～22cmを測るモミ製の角材である。一方の端から約80cmを厚み10cm程度に切り欠いており、端部には長方形の貫通孔が穿たれる。上図前面には3か所にダボ穴があけられている。中央の穴は長さ約5

cmの長方形で、両側2か所は長さ12~13cmと長く、しかも3段に開けられている。これらのダボ穴の上2段は開放しているが、最下段は埋め木で閉塞されている。また下面にも3段のダボ穴とはほぼ同じ位置にダボ穴が穿たれている。これらの特徴から本品は横方向の強度確保のための「船梁」と考えられる。切欠かれた80cmは船外に突出し、端部の貫通孔には艤装が取り付けられたのであろう。複数のダボ穴は主軸方向の構造材を固定したものと考えられる。

2059はSX1304北辺際から出土した。全長2.8m(9尺3寸4分)を測るアカガシ亜属製の角材で、図上端から約30cmは13.5cm(4寸5分)×11.9cm(3寸9分)の方形を呈するが、下

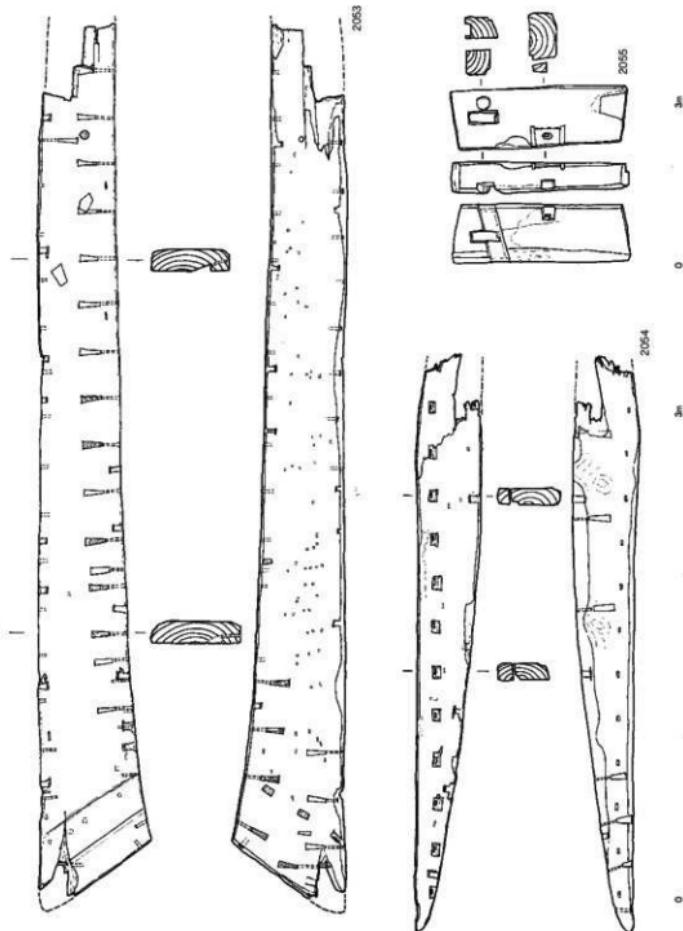


図131 船材(1)

端にかけて幅は228cm(約7寸5分)と増すが、厚みは徐々に減じ、下端では26cmとなる。形状から、未完成品ではあるが、小型の早船に装着された舵木の身木と考えられる。

上記以外にも船材と考えられる材が存在するため、今後さらに検討を進める必要がある。

なお、船材の調査に際しては、松木哲、金田隆、出口正登、出口晶子、松井哲洋、織野英司の諸氏より有益なご教示を得た。記して感謝申し上げます。

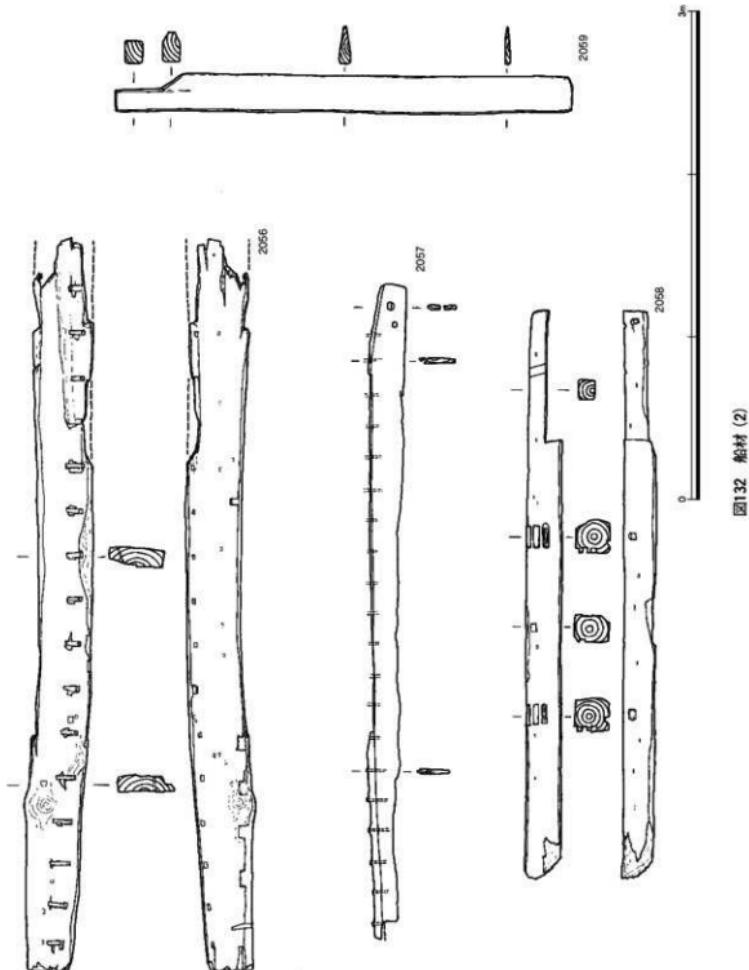


図132 船材(2)

**木簡** 兵庫城の堀埋土から見つかった墨書資料は2029・2060～2076で木簡15点、木箱1点、柄鏡箱2点で、いずれも18世紀末から19世紀頃のものである。2013・2077～2083は18世紀末から19世紀半ば頃までのSD3101(悪水抜溝)からの出土で、木簡5点と墨書木製品が3点である。2084は町屋群の19世紀の井戸から出土した木簡である。2085は15世紀末頃の土坑から出土した呪符木簡である。以下に出土墨書資料の积文を記す。

(2029)	「 」	[] []	225.5×130.5×7	061翻式
(2060)	「   」	[] [] [] [] 下 池 分 講	(71)×133×9	061翻式
(2061)	「」	[]	158×(74)×6	061翻式
(2062)	「」	[]	(51)×49×7	019翻式
(2063)	「」	[]	60×33×5	011翻式
(2064)	「    」	[] [] [] [] [] [] []	174×35×8	051翻式
(2065)	「  」	[] [] []	(182)×(52)×4	081翻式
(2066)	「 」	[] []	(64)×(27)×5	081翻式
(2067)	「 」	[] [] 石	(43)×(22)×3	081翻式
(2068)	「兵庫津 □□□ □□」	[] []	158×26×8	051翻式
(2069)	「兵庫津 □□□  □□」	[] []	149×31×6	051翻式
(2070)	「V  」	[] []	(105)×25×2	039翻式
(2071)	「V □□□  錦」	[] []	92×28×6	032翻式
(2072)	「」	[]	(90)×54×6	019翻式

(2073)	〔記号〕 「□ 源左衛門様」	277×43×8	011型式
(2074)	「脇浜屋 幸十郎」	175×86×9	011型式
(2075)	〔上口字〕 「□□□」	162×24×7	065型式
(2076)	〔兵庫津字〕 ・「○□□□□ □左右衛門」 〔手字〕 ・「○ 古□ □」	152×23×9	011型式
(2013)	〔焼印〕 ・「『京□』 廣口清」 ・「 □□清」	180.5×92.5×9	061型式
(2077)	・「(縦字)□□新□□□□」 〔参考〕 ・「□ □」	238×(63)×8	061型式
(2078)	・「□□ □」 (右側面) ・「△△□□□ □□△△□」 (表面) 〔谷字〕 ・「□□□ □□ □」 (左側面) ・「□□□□△ △□セス」 (裏面)	85×45×33	011型式
(2079-1)	・「□□」 ・「□□」	119×47×1.5	065型式
(2080)	〔縦字〕 ・「□木□石□ □□□田太郎兵衛□」 〔脚字〕 ・「□□□田源左衛門江 □□ □□□」	(157)×31×6	059型式
(2081)	・「○ 柳 幸」 ・「○ (縦)」	61×59×12	011型式
(2082)	□ □ 七百目□ 〔平字〕	111×(67)×5	065型式
(2083)	「(縦)□□取!□□□ □□」	径197×高さ80	061型式
(2084)	「田□〔米字〕」	(86)×(28)×2	081型式
(2085)	「咄天罡□□」	220×36×2	011型式

兵庫城堀埋土出土2029は柄鏡の箱の外板。二文字目は漢字の「口」(くち)またはカタカナの「ロ」の可能性もある。2060は上端および右辺削り、下端削り、左辺割れ。箱の側板にあたる。裏面にアタリがあるため、墨書面は外面である。2061も柄鏡の箱で、記号「△」が記される。2062は上端・右辺削り、下端切断、左辺は上部三分の一ほどのみ削りで以下は割れている。「会」の下半の「日」は一画多く「目」と書かれている。2063は小型の札か。2064は四周削り。表面二文字目は「六」または「八」か。裏面一文字目は「受」「亥」などの可能性がある。2065は、上端および右辺削り、下端折れ、左辺割れ。左右両辺に一つずつ穿孔が施される。2068は四周を削っている。文字はやや浮き上がり気味に残っている。2069は表面左行の一文字目は「扇」「麻」などの可能性もある。2070は上端および左右両辺削り、下端折れ。文字はやや浮き上がり気味に残る。2071は表面一文字目は「阿」または「河」、三文字目は「庄」か。2072は上端が鈍角の山形に整形される。文字ではなく記号の可能性も考えられる。2074は左辺に二つ、右辺に一つ、一行目の一文字目のすぐ左脇に三つ、計六つの穿孔が施される。2075は文字の上と下に一か所ずつ穿孔が施される。

SD3101出土の2013は刷毛。柄の部分に穿孔が施される。表面の焼印の三文字目は「府」または「荷」か。表面の「□〔古カ〕」とした文字は「左」の可能性もあるか。2077は杓文字に墨書がある。裏面の文字は表面とは別筆か、あるいは表面の「(絵カ)」と同類の可能性もあるか。2078は小型だが厚みのある板材の四面に墨書が施される。文字はいずれも仮名か。表面二行目の一文字目は「け」または「此」か。2079は2079-1と2079-2の二つのパートからなり、いずれも四周削り。2079-1の下端および2079-2の上端は半円形に加工される。2079-1が2079-2を包み込むように作られ、一つの製品をなすとみられるが、用途などは不明である。墨書は2079-1に施される。2080は上端および左右両辺削り、下端若干折れ。2081は何らかの札とみられるが、詳細は不明。2082は下端に突起があり何らかの木製品とみられるが、詳細不明。2083はほぼ完形の曲物側板に、木目方向に沿って文字や絵が記される。

2084は町屋の井戸から出土した木筒で、上端および左辺削り、下端折れ、右辺割れ。二文字目の現状での字形は「米」だが、下にわずかに残画らしきものがみえること、および一文字目の「田」と比べてやや小さめであることから、「数」など別字の一部とも考えられる。

2085は中世土坑から出土した呪符木筒である。

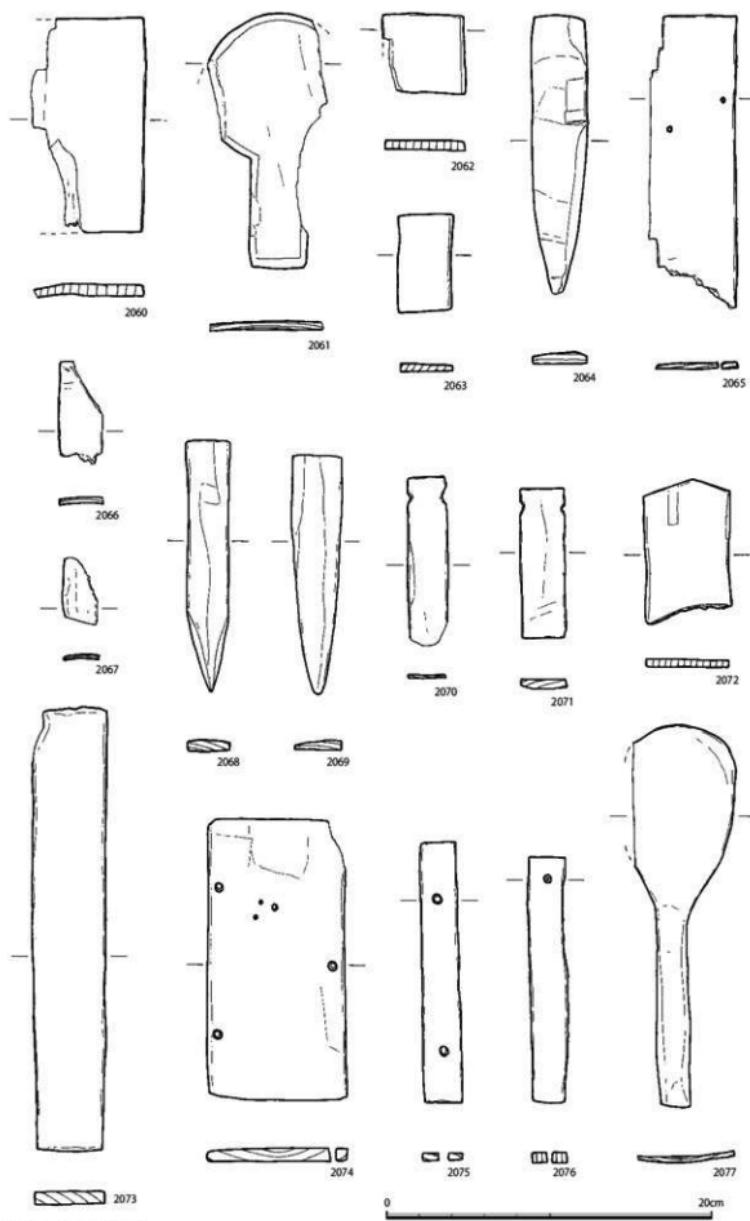


図133 出土木簡(1)

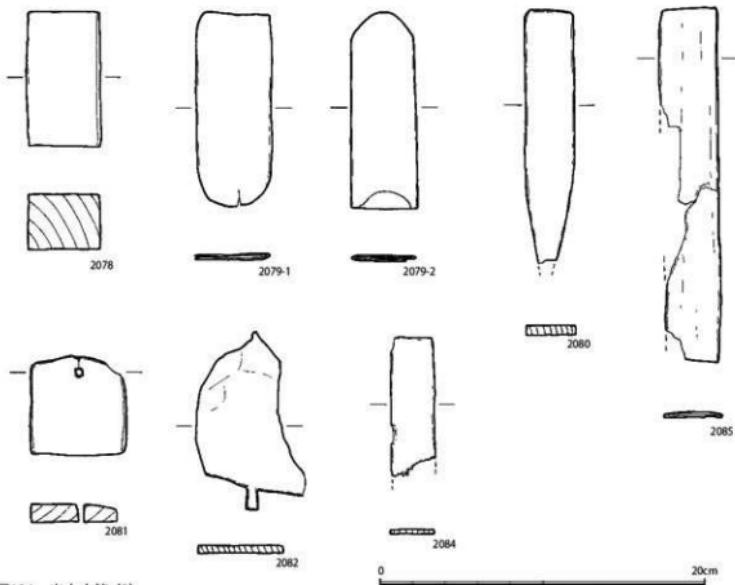


図134 出土木簡 (2)

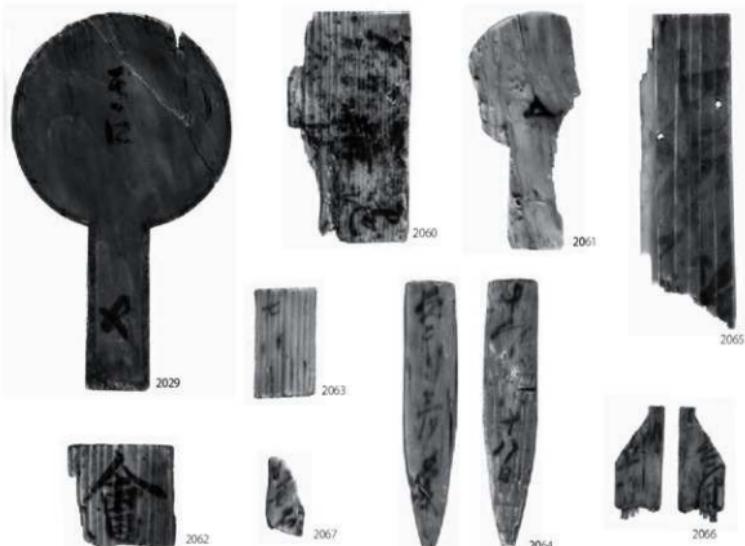


写真98 木簡赤外線写真 (1)



写真99 木簡赤外線写真 (2)



写真100 木簡赤外線写真(3)

## 第5節 土製品・石製品

土製品 土鍤・羽口・転用面子・有孔円盤・焼塩壺・土人形・ミニチュア・泥面子・泥面子型・芥子面・硯が出土している。

土鍤(写真図版118-2)は円柱状で小口の中心に穴を穿つもの、小判型で四つの穴を穿つものがある。中でも長さ4cm、直径1cm程度のものが多く、町屋の床面でまとめて出土している。

羽口(写真図版119)は町屋内の土坑や外堀(新)、悪水抜溝から出土している。さまざまな大きさのものが出土しており、中には先端部に「□/五□/□□/共/□(新)カ/・」の墨書きを施すものが出土している。比較的多量に出土しており、周辺に鍛冶関連の施設があったものと考えられる。

転用面子(写真図版118-1)は調査地の全域かつすべての遺構面から出土している。大きさは直径2~10cm程度で、特に直径5cm前後のものが多い。転用された素材も、国内産陶磁器の底部や体部の一部を打ち欠いて成形するものが多いが、朝鮮王朝陶磁器・景德鎮などの中国磁器も見られ、中には華南三彩を転用しているものもある。また、瓦や石鍋などもわずかながら出土している。

有孔円盤(写真図版118-1)は、土師器を転用しているものと、円盤型土製品がある。転用されているものは、体部を直径2cm程度に荒削し、その中央に5mm程度の孔を穿っている。主に町屋床面に一ヵ所にまとめて出土している。

焼塩壺(写真図版116-2)は主に江戸時代後半のものが多く、中には「泉湊伊織」銘を刻印するものもある。町屋地区では織豊期と考えられるもの2087も数点出土している。

土人形(写真図版117-1)は江戸時代後期以降のものが多く出土している。手づくね、型作り(中空・中実)のものがあり、型作りで中実のものが多い。種類は神仏像・人物・動物(鳥・犬・魚・亀・馬・牛)で、地蔵など神仏像が多い印象を受ける。また、彩色をしているものもわずかに見られる。織豊期の手づくねの犬型(2087)やつばつぱも出土している。

ミニチュア(写真図版117-2)は土人形と同様に江戸時代後期以降のものが多い。型押しで成形されるものが多く、磁器製のものも出土している。種類はカマド・土鍋・硯・鉢・燈籠・橋・城?・神輿・鳥居・船などがある。面打・芥子面・面摸(写真図版117-2)や操り人形の頭部も出土している。

石製品 石造物・硯・砥石・石臼・石鍋・土鍤などが出土している。硯(写真図版135-1)は主に江戸時代初頭と江戸時代後半の遺構から出土している。前者のものは魚などを陽刻する意匠を凝らしたものがみられ、後者のものは裏面に「本高島青石」などの線刻を施すものが多い。また「兵庫新町・・・」と住所を線刻したものもある。

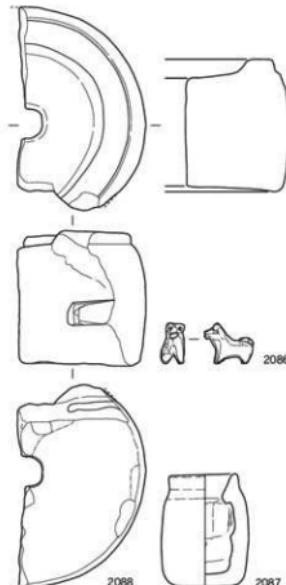


図135 出土土製品・石製品実測図

のも出土している。石臼は数点出土しており、2088は和泉砂岩製ものである。石鍋は閑屋町地区西端の16C以前の遺構から出土している。土錐（写真図版118-2）では水滴形が1点出土している。

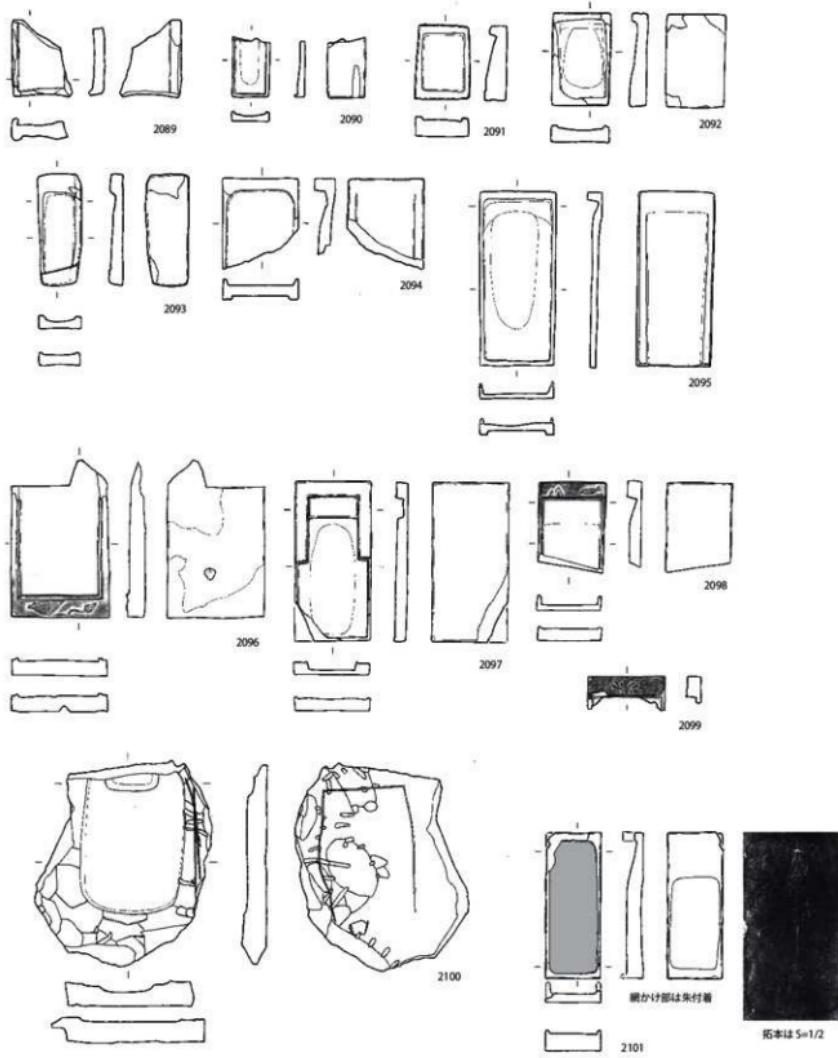


図136 出土現実測図

0 10cm

## 第6節 骨製品

今回の調査で出土した動物遺存体については次章第4節に詳しい。ここではその中でも骨及び貝製品の一部について挙げた。

サイコロ(2102)はSB1315から出土している。1辺9.6mmで1・4を赤で、2・5・6を黒で、3は中心のみ赤に彩色している。同様のものはSB2447からも出土している。

双六駒(2103～2105)は町屋遺構などから出土している。2103と2104は幅2cm、厚さ5mm程度の円盤状のもので表面に直径2mm程度の円形の模様を規則的に彫り込む。一方2105は復元直径2.3mmの筒状製品の中に直径1.2cmの円盤状のものを両面に差し込むものである。2104と同様の文様が施され、さらに文様線刻の中に赤色に塗装されている。なお、2103はSB1331、2104はSK1328、2105はSB2404から出土している。

ペイゴマ(2106)はSD3101南側(旧)埋土からバイ貝製のものが出土しており、上端が水平になるように仕上げられる。南外堀(新)の埋土上面の土坑からも出土している。

櫛(2107)はSD3101(新1)南側から三日月型の横櫛が出土している。SD3101(旧)からも歯部分の欠損したものが数点出土している。

櫛払(2108～2109)は形状の異なる2タイプ出土している。2109はSB1314から出土しており、形状は長方形を基調とし、上端部の両角を斜めに切り落とし、1本が長さ1.5cm、幅3mmの歯を作り出している。また上部には直径8mmの孔を開けている。表面には直径2mmの円形の凹みを幾何学的に入れ、その中を黒と赤で着色して仕上げている。2108はSB1308から出土しており、形状は長方形を基調とし上半分三ヵ所に直径5mm程度の孔を開け、中央部に抉りを入れている。1本が長さ7mm、幅3mmの歯を作り出している。表面の仕上げは2108と同様である。2110はSD3101東側(旧)から出土しており、形状は残存長14.3cm、幅1.6cm、厚さ4mmのやや反り返ったヘラ状を呈する。先端は尖らせ、基部にはブラシを取り付けるための直径3mm程度の孔を一定間隔に開ける。

簪(2111)は兵庫城地区の江戸時代後半以降の遺構面から出土している。

ヘラ状製品(2112～2115)は2112のような刃物形と2113・2114のように撥形が出土している。2115の端部には直径3mm程度の孔が穿たれている。2114は象牙製と考えられる。なお、2112はSD3101東側(新1)、2113はSB1424から、2114はSD3101東側(新1)からそれぞれ出土している。

竿秤(2116)は新町地区町屋建物の裏手と考えられる場所から出土している。長さ48.69mm、直径3.86mmを測る。3面に目盛が刻まれており、横に細く線を引きその上に目盛を刻む。十目盛の幅が、13.89mmと8.73mmのものがある。

貝杓子(2117)は閑屋町地区SB2447から出土している。長さ9.0cm、幅10.4cmのイタヤ貝の一部に持ち手を取り付ける直径3mm程度の孔を2ヶ所開けている。

簪(2118)は兵庫城地区の江戸時代後半以降の遺構面から出土しており、象牙製である。

不明板状製品(2120)は新町地区SB1309から出土しており、長さ4.4cm、幅1.3cm、厚さ2mmの半月状を呈する。大阪城城下町でも同様のものが出土している。

牙(2119)は猪の犬歯を半裁したもので、中央部にノコギリにより幅1cm間隔で切り込みを入れ、1ヶ所が切り取られたように凹んでいるため、製品の部材を作るための素材と考えられる。東外堀(新)下層埋土から出土している。

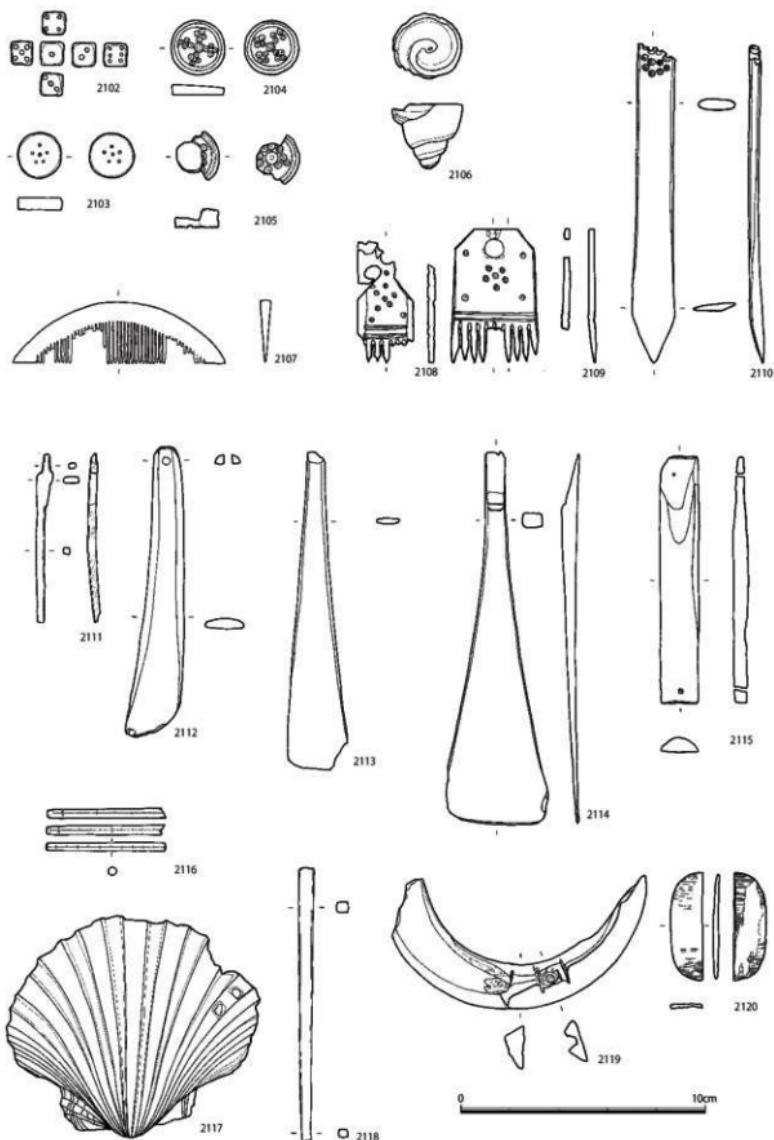


図137 出土骨・貝製品実測図

## 第7節 転用石造物

調査で検出した兵庫城石垣及び町屋などの遺構において、転用された石造物の悉皆調査を実施した。兵庫城の石垣築石や井戸、町屋の礎石など多岐にわたり転用されている。兵庫城の石垣など現地保存される遺構の転用石造物は、基本的には記録調査を実施して石垣内に留めた。

遺構別の転用石造物の数量は表18のとおりである。五輪塔の転用が殆どを占めている。これは、元々の全体量が多いことと、転用に際しての使い勝手の良さによるものであると考えられる。16世紀後半の石垣である内堀石垣（旧）では、一石五輪塔と組合式五輪塔の使用数が同率であるが、南外堀の（旧）と（新）、東外堀では一石五輪塔の使用率が3か所ともほぼ同じ割合で高まっている。さらに17世紀後半頃に修築された内堀石垣（新）では

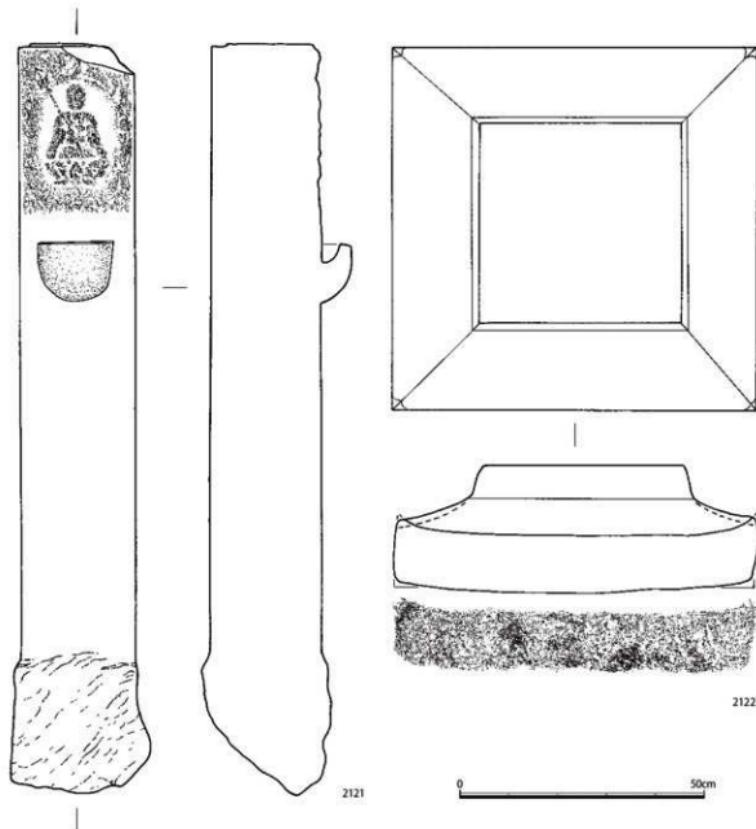


図138 出土石造物(1)

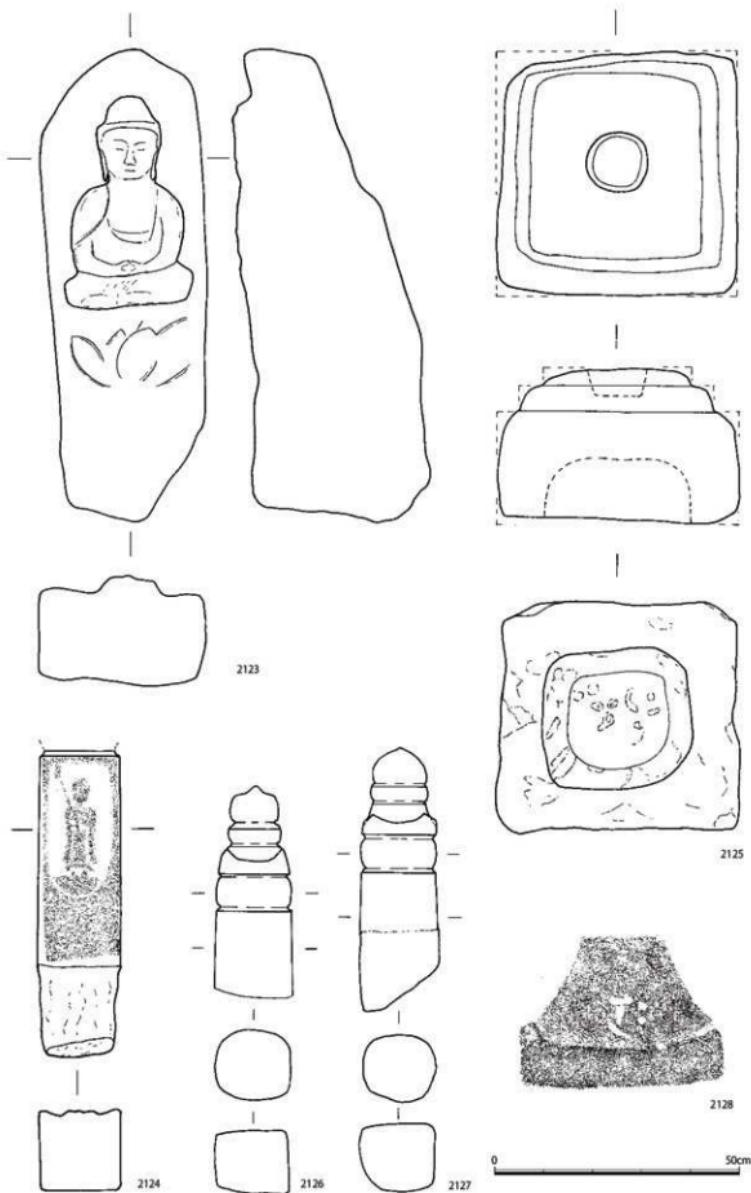


図139 出土石造物 (2)

一石五輪塔の使用率が一段と高まっている。町屋では石垣とは逆に、組合式五輪塔の転用が一石五輪塔を大幅に上回っているが、これは組合式五輪塔の水輪部を建物礎石に転用しているためである。

2121～2123は内堀（旧）城内側石垣の後列側の石垣として転用されていた。2121は地蔵仏の下部に鉢が造り付けられている珍しい石造物である。上部には五輪塔が付いていたものである。2122は層塔で、内堀（旧）城内側石垣の後列側の胴木組の直上に根石として据えられていた。13世紀後半頃の層塔の屋根である。2123は阿弥陀仏の定印座像である。表面が磨滅して表情などは不明瞭である。2125は宝篋印塔の基礎部で、表面の劣化が激し

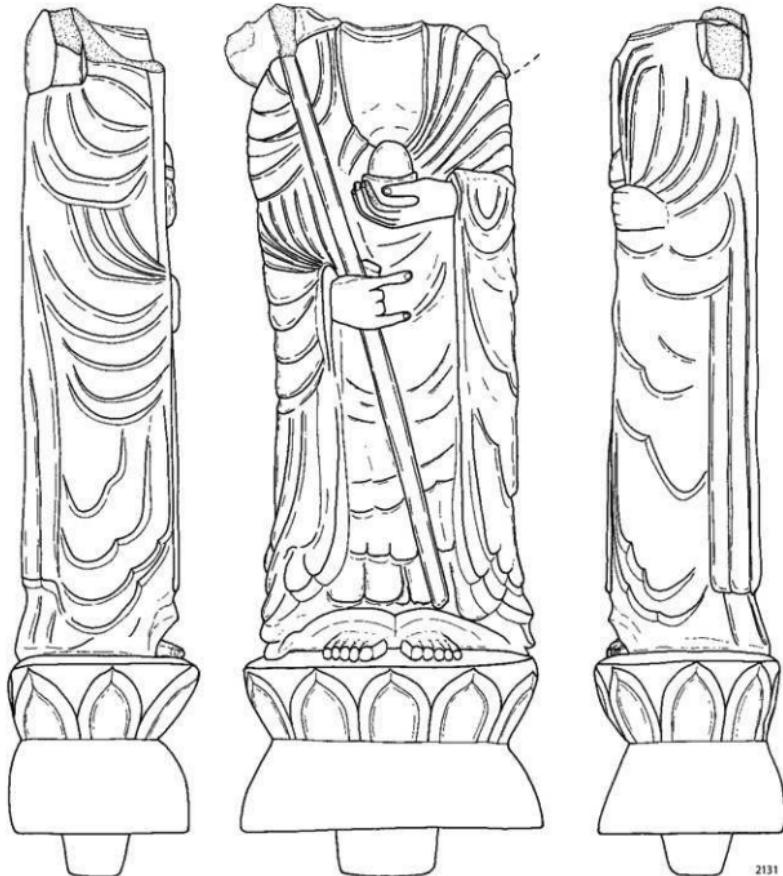


図140 出土石造物 (3)

0 50cm

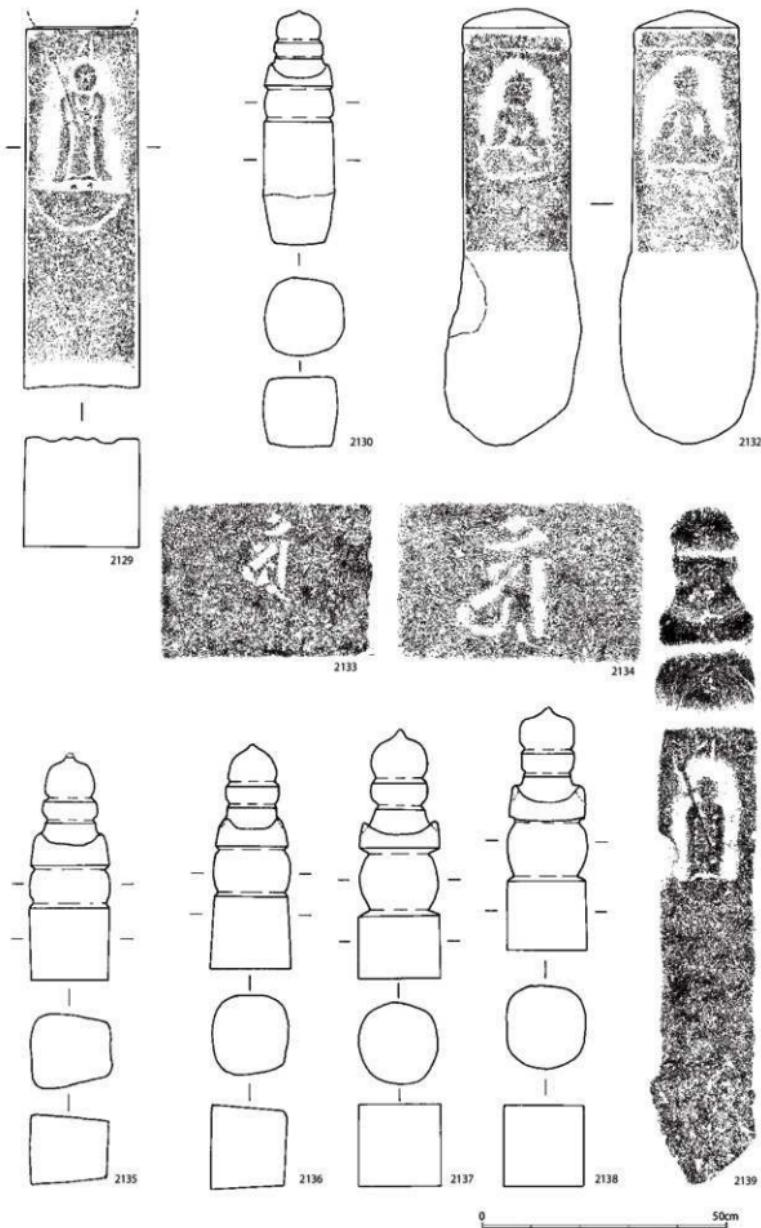


図141 出土石造物(4)

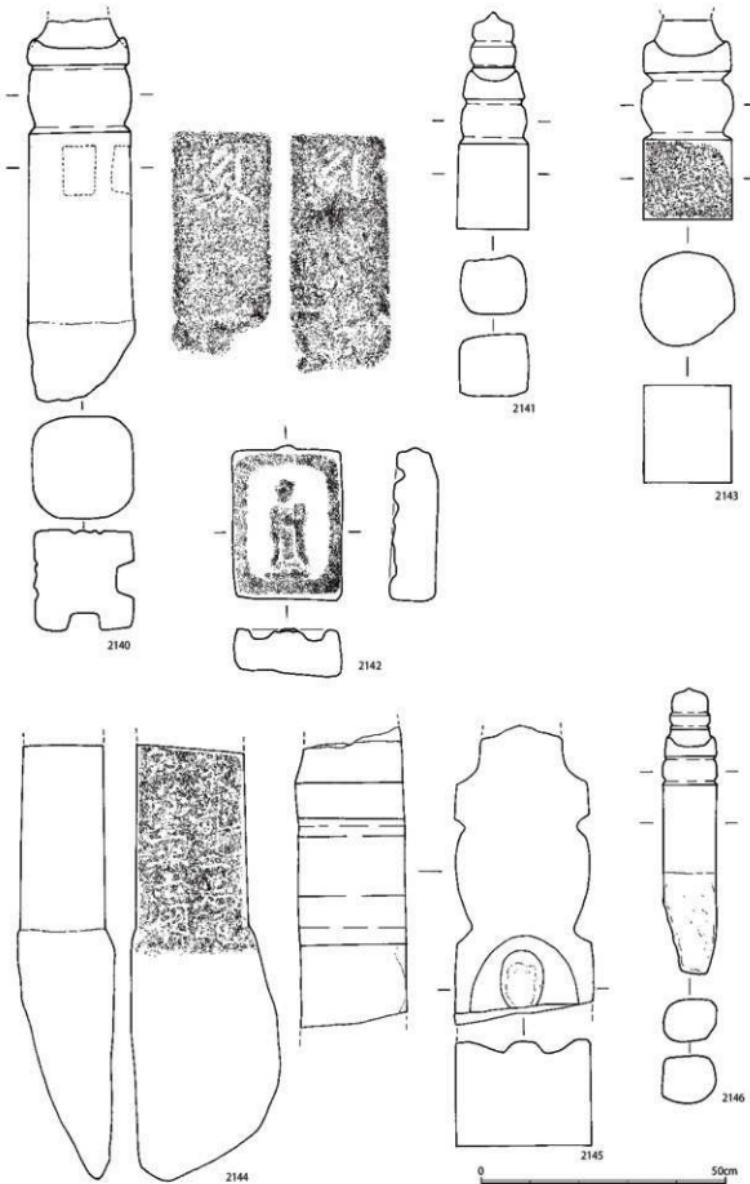


図142 出土石造物 (5)

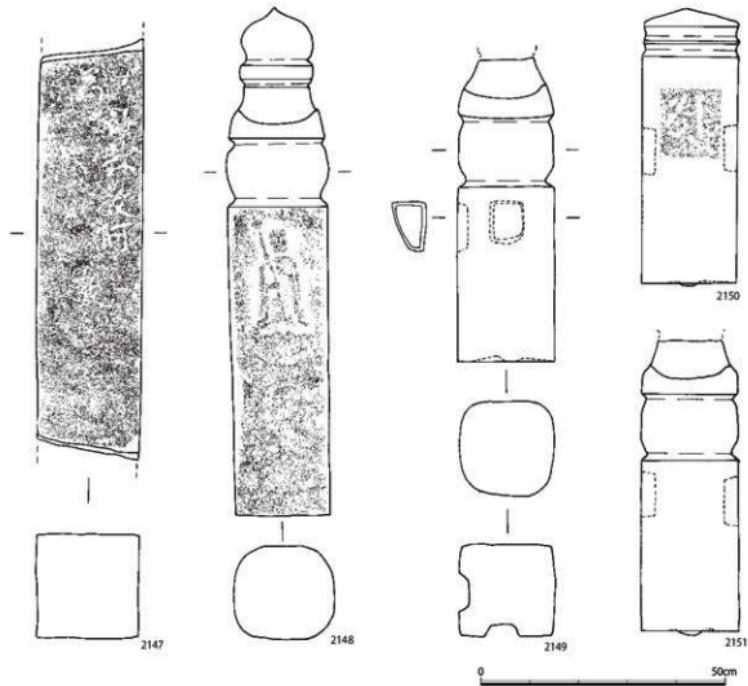


図143 出土石造物 (6)

	一石 五輪 塔	五輪 塔	長足 五輪 塔	板五 輪塔	釘貫 釘貫	一石 五輪塔 釘貫	釘貫	角塔 婆舍 貢	角塔 婆舍 貢	宝篋 印塔	反華 座	層塔	相輪	板碑	石仏	丸形 地藏	燈籠	鏡石	その他	計	
内掘 石垣(旧)	22	22	3	0	0	1	1	2	2	10	3	0	1	2	0	0	0	0	0	23	92
	24%	24%	3%				1%	1%	2%	2%	11%	3%		1%	2%						25%
内掘 石垣(新)	103	7	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	119
	87%	6%				0.8%			0.8%	0.8%	0.8%										4%
南外掘 石垣(旧)	90	27	2	0	0	2	0	3	8	0	0	0	0	0	0	0	0	5	23	160	
	56%	17%	1%				1%		2%		5%									3%	14%
南外掘 石垣(新)	26	9	1	1	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	1	0	0	13	54		
	48%	17%	2%	2%						4%	2%				2%					24%	
東外掘石垣	110	33	2	0	2	2	0	2	0	2	0	1	0	2	0	1	3	14	174		
	63%	19%	1%		1%	1%		1%		1%	0.5%		1%		0.5%	2%	8%				
本丸井戸	11	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	17	
	65%	18%	6%																	12%	
SD3101	30	3	0	0	1	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	9	47		
	64%	6%				2%			2%	2%	4%									19%	
町屋	8	17	0	0	1	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	5	35		
	23%	49%				3%				6%	6%									14%	
総 計	400	121	9	1	5	5	1	9	6	27	4	1	1	4	1	1	8	94	698		
	57%	17%	1%	0.1%	0.7%	0.7%	0.1%	1%	0.9%	4%	0.6%	0.1%	0.1%	0.6%	0.1%	0.1%	1%	13%			

表17 遺構別転用石造物数

い。殆どの転用石が花崗岩であるが、これは凝灰岩製である。内面が底から抉られ、中空である。2131は南側外堀石垣（新）の築石として1体の丸彫地蔵菩薩立像を分割して転用していたものである。頭部と円光背は所在不明である。細かく割られ裏込め石として転用されたのではないか。首から下部は、ほぼ均等に4つに分割され東西15mの範囲で、バラバラに石垣に積まれていた。破断面はピタリと合致した。左手に宝珠を持ち、右手で錫杖を握っている。錫杖を握る右手は人差し指と小指を立てている。残存している体躯の首から足までが131cmの花崗岩製の石仏で堂々たる佇えである。須磨区所在の神戸市指定文化財「有馬家墓所地蔵石仏」（14世紀末）に類似する。2133・2134は南側外堀石垣（新）の出角の角石として上下に積まれていた。組合式五輪塔の地輪部で4面ともに梵字が刻まれている。

2143は町屋から出土した一石五輪塔で地輪部の1面に銘文が刻まれている。右から「天文二年」「源堂衆カ」「十月八日」と3行ある。天文二年は1533年である。2144は町屋出土の角塔婆で上部が欠損している。表面には「永離三悪道」「者・必生安樂国」の文字が2行に刻まれる。卒塔婆に刻まれる常套句「一見卒塔婆 永離三悪道 何況造立者 必生安樂国」の一部と考えられる。2146は町屋の井戸の裏込めに転用された一石五輪塔で、下部に粗削りの部分を残している。16世紀末頃のものと考えられる。2147は町屋出土の角塔婆で、街路の縁石として据えられていた。上下の一部を欠損している。1面に文字が刻まれ、「□□敬阿」「為 敬白」とある。



写真101 有馬家墓所地蔵石仏

（神戸市教育委員会「平成10年度指定神戸市文化財調査報告書」2000年に所載）

遺物No	石 造 物 名	出 土 遺 構	石 材	備 考	石造物No
2121	長足五輪塔	内堀（旧）城内側後列石垣	花崗岩	仏の彫刻・鉢の削り出し・空風火水輪欠損	899
2122	層塔	内堀（旧）城内側後列石垣の楔石	花崗岩		915
2123	石仏	内堀（旧）城内側後列石垣	花崗岩	阿弥陀仏 定印座像	898
2124	長足五輪塔	内堀（旧）城外側石垣	花崗岩	地輪に地蔵・空風火水輪欠損	1086
2125	宝印塔基礎部	内堀（旧）城外側石垣	凝灰岩	表面の磨滅激しい	858
2126	一石五輪塔	内堀（新）城内側石垣	花崗岩	石垣間詰石・現地保存	933
2127	一石五輪塔	内堀（新）城内側石垣	花崗岩	石垣裏込石・現地保存	941
2128	五輪塔	南外堀城内側石垣	花崗岩	火輪部梵字あり・裏込石・現地保存	629
2129	長足五輪塔	南外堀城内側石垣	花崗岩	地輪に地蔵・空風火水輪欠損	169
2130	一石五輪塔	南外堀城内側石垣	花崗岩		238
2131	丸彫地蔵菩薩立像	南外堀（新）城外側石垣	花崗岩	四分割・頭部と円光部欠損	580他
2132	角塔婆	南外堀（新）城外側石垣	花崗岩	2面に仏	168
2133	一石五輪塔	南外堀（新）城外側石垣	花崗岩	火輪部梵字あり・角石として転用・現地保存	527
2134	一石五輪塔	南外堀（新）城外側石垣	花崗岩	火輪部梵字あり・角石として転用・現地保存	526
2135	一石五輪塔	東外堀城外側石垣	花崗岩	現地保存	829
2136	一石五輪塔	主郭 井戸 SE3402	花崗岩		327

表18 転用石造物観察表(1)

遺物No	石造物名	出土遺構	石材	備考	石造物No
2137	一石五輪塔	主郭 井戸 SE3402	花崗岩		1204
2138	一石五輪塔	主郭 井戸 SE3402	花崗岩		1205
2139	長足五輪塔	副郭 石組遺構 SK3404	花崗岩	現地保存	1095
2140	長足五輪釘貫	SD3101	花崗岩	2面に梵字・別の2面に鱗穴・空風輪欠損	177
2141	一石五輪塔	SD3101	花崗岩	現地保存	338
2142	石龕仏	町屋の井戸	花崗岩		211
2143	一石五輪塔	町屋	花崗岩	銘文あり	255
2144	角塔婆	町屋	花崗岩	銘文あり	166
2145	長足板五輪塔	井戸	花崗岩	空風輪欠損	164
2146	一石五輪塔	町屋の井戸の裏込石に転用	花崗岩	時期的に最も新しいタイプ	849
2147	角塔婆	町屋の縁石	花崗岩	銘文あり	165
2148	長足五輪塔	町屋	花崗岩	地輪に地蔵	170
2149	長足五輪釘貫	町屋	花崗岩	2面に鱗穴・空風輪欠損	178
2150	角塔婆釘貫	石積遺構 SX2501	花崗岩	対2面に鱗穴・1面に梵字	173
2151	長足五輪釘貫	町屋	花崗岩	対2面に鱗穴	174

表19 転用石造物観察表(2)

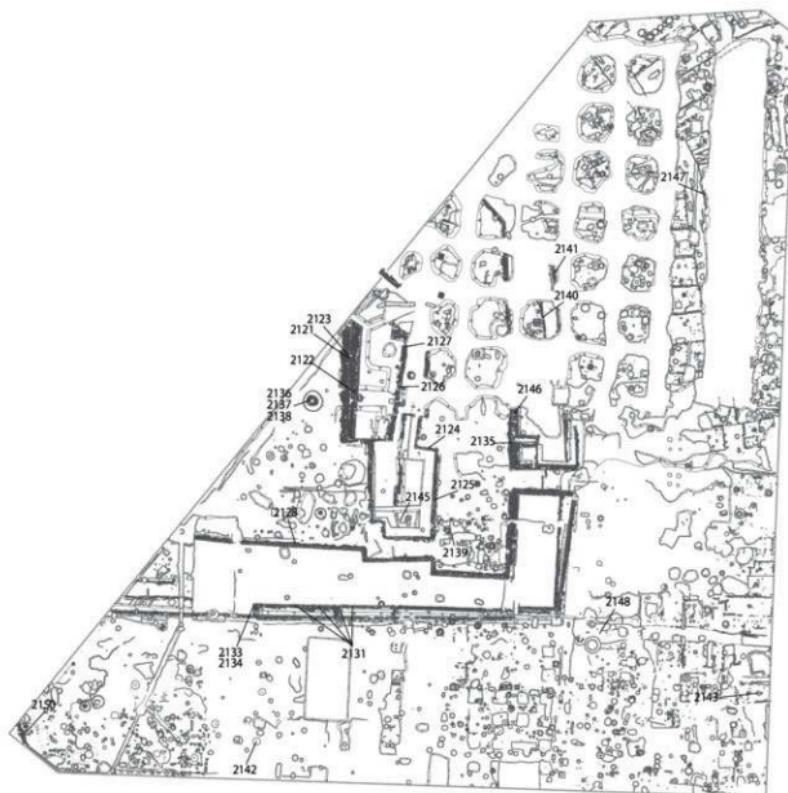


図144 転用石造物出土地点

## 第8節 兵庫城跡出土の転用石造物について

狭川真一（元興寺文化財研究所）

### 1.はじめに

以前、兵庫城跡（兵庫津遺跡第57次調査）の成果に表題のテーマで簡単にまとめる機会を得た（狭川2014）。その折の所見をまず整理しておく。

#### 転用石塔の種別と部位

圧倒的に多かったのは一石五輪塔で73.6%、組合式五輪塔の部材がこれに次いで19.6%である。つまり五輪塔が93%以上を占めることができる。五輪塔が主体を占めるという傾向は、畿内における石造物の造営傾向に一致するものである。

また、一石五輪塔の部位を観察すると、火輪と水輪を境にして分割し転用している事例が多く、空風輪を含む部材は裏込め石として利用される傾向がうかがえた。転用するにあたり、意識的に破壊をし、利用に供したことがわかる。

#### 転用箇所

基底部に大型の石塔部材を使う傾向が見て取れた。大型五輪塔の火輪や宝篋印塔・層塔の笠部分などである。宝篋印塔の笠では、隅飾りを意識的に破壊して使用したことも分かった。また、一部分ながら一石五輪塔の底部を見せるように積み上げた石垣もあり、そこには五輪塔の地輪も確認できた。

裏込め石の様相は前記したとおりである。これらの所見から、石塔の転用にあたっては現場（石垣構築場所近く）で調整してそのまま使用するという姿が浮かび上がるのであり、墓地などから集積された石造物は城の工事現場で分別され、破碎され、それぞれの適所へ配分されたとみられよう。

#### 転用の年代

石塔で年号の入るものは寛正二年（1461）と文亀四年（1504）で、いずれも一石五輪塔であった。ただ、この地域を含む近在の一石五輪塔の形態的な特徴と比較すると、16世紀後半の資料は含まれないと判断できることから、概ね広義の16世紀前半の資料までと推定した。兵庫城の建設は花熊城落城の天正八年（1580）とみられており、花熊城の石材をここに転用したとしてもその建設時期の永禄十一年（1568）もしくは天正二年（1574）である。石塔の石垣への転用時期は、最も古く見積もっても16世紀第三四半期頃ということになる。

この精度の資料ではありませんことは語れないが、中世墓の機能停止（一石五輪塔の最終段階）と転用時期の間には少しだけ時間差があると推測できた。このことが認められるなら、機能を停止した墓地の石材を転用したことになる。

### 2. 今次の調査所見

第57次調査と基本的には同じ傾向であるが、追加すべき特徴的な事項を若干提示しておきたい。

①隅部に使用される石材に五輪塔の地輪を意識的に選択し、積み上げた地点があった。南外堀（新）城外側石垣の北西コーナーで顕著な例（写真図版78-2）があり、2段に積み上

げられていた。上下とも天地逆置の状態で梵字まで同じ方位にしているが、これは偶然であろう。上位の地輪が大きく、西面、北面ともに上の石が南および東へ張り出し、間詰石の上に乗る恰好になっているが、隅の辺は揃えている。これは意識的なものであろう。算木積に通じるものであるが、算木積は文祿～慶長頃に完成期があるとされるうえに、本資料は転用石でもあり、完成前の過渡期的な事例と見ることもできよう。

なお、転用石によるこうした事例は、奈良県郡山城や京都府福知山城でも観察することができる。郡山城では羅城門の礎石とみられるものや、石工橘氏の銘がある宝篋印塔基礎が目立っている。福知山城では、各種の宝篋印塔の基礎を巧みに組み合わせて構築している（写真102）。隅部の強度維持のために、地輪のような直方体風の部材を好んで転用したことがわかる。

②等身大の地蔵菩薩立像が、無残にも四分割されて隨所に埋め込まれていた。石垣として見た場合、地蔵の破断面を表面に向けており、地蔵として彫刻した面は石垣内に埋め込まれて隙間からしか観察できない状況であった（写真図版78-3～5）。同様に他の石材でも破断面を表面に見せるものがあり、純粹な野面積とするならば破断面を見せる積み方は行わないと考えられるが、ここでは各所でこうした積み方が観察できた。これも過渡期の資料として捉えることができるであろうか。事例の検討が必要である。

③火輪の転用方法として、第57次を含めて石垣の基底部に底部（火輪軒裏面）を地面に密着させるように置き、その上に礎石を組み込んでいく姿が主体的に観察できたが、今次の南外堀（旧）城外側石垣などでは、平坦な火輪裏面（厳密にはホゾ穴がある）を表面に見せてはめ込んでおり、化粧の意識を示したものであろう。また、小型のものではそのままの形で裏込め石に利用されるものもあった。

④井戸への転用は、きわめて意識的な使い方をしていることがわかった。特に主郭井戸（SE3402）で顕著である（写真図版88-1）。その積み方は、一石五輪塔を特に破壊はせず、一様に地輪底部を井戸の内側に向けて整然と積み上げている。内面の景観はほぼ方形の石材を丁寧に積んだ姿となる。不足するところに他の部材を使っているが、それも同様に方形面を内側に向けている。壁面の化粧を意識したものであろうが、故意に破損していないものを利用しているようであり、石材調達後、目的的に破壊する手前で取捨選択される行為も存在したことを教えてくれる。

ただし、これに対して、ほとんど転用石のみられない井戸も検出されており、違いが顕著であったが、その差が時期差なのか、その他の要因があるのかは注意を要する事項であろう。

⑤町屋跡部分では水輪の転用が確認されたのも興味深いものであった。水輪は球体に近いため石垣には転用しにくく、前回の調査でも安定的な転用例はなかったが、今次の調査



写真102 福知山城の石垣

で、町屋の礎石として転用されているのが確認できた。このことでほぼ全部位を無駄なく利用していることが分かるとともに、部材の形状から適材適所を見つけながらの作業であることが理解できる。

### 3. 転用された石塔と転用されなかった石塔

両調査を通じて、転用されている石造物はその中心が仏塔である。仏塔、つまり五輪塔や一石五輪塔、宝篋印塔で、その莊嚴部材（反花座、基壇風の方柱状石材など）も含まれている。しかし、灯籠や礎石はごく微量しか確認できておらず、石橋や鳥居は皆無である。日常の生活に密着して使われているからであろう。この視点で兵庫城跡近在にある中世の石塔を確認すると、遺跡から目と鼻の先程度の距離に清盛塚と称する十三重石塔の存在と、真光寺に所在する一遍上人墓とされる五輪塔の存在が注意される。それらの概要を見ておこう。

清盛塚（写真103）は、神戸市兵庫区切戸町にあり、兵庫城跡のすぐ西側にある。当初の位置ではないが、近辺からの移転である。十一層目と相輪は後補とされるが、他は当初材と考えられ、相輪を除いた現在高は約8.5mで、基礎に「弘安九年（1286）」の銘がある（『日本石造物辞典』）。清盛との関係はさておき、何らかの供養塔として永くこの地に立っていたものであり、城構築の際も破壊されることなく、供養は今まで続いているのである。

一遍上人墓（写真104）は、神戸市兵庫区松原通にある真光寺境内の一角に現存する。上述の清盛塚十三重石塔とは道を挟んで対面する位置にある。墓本体は基壇上に乗る花崗岩製の五輪塔で、火輪の背が高く、水輪の最大径が塔の最大幅となる特徴がある。地輪は低く、安定した形状を呈しており、西大寺叡尊墓と比較して13世紀末頃の年代とする意見がある（山川2008）。空風輪の形状や火輪の高さは気になるところだが、火輪は兵庫県下によく見られる形状であり、13世紀末頃を上限として、14世紀中頃を下ることはないだろう。しかし、反花座は近世の所産であり、基壇や釘貫も後発的なものである。

一遍上人の墓は、「一遍聖絵」に登場することから早くから知られるものだが、その釘貫の隅柱の絵が描き直されているように見える。当初は四隅に五輪塔を頂部に彫刻した柱を立てていたようだが、のちに擬宝珠に描き換えられている（五味ほか2012）。いつ描き換えられたかは明確ではないが、同寺の無縁塚内および兵庫城跡出土品の中に五輪塔を彫出した釘貫の支柱とみられるものが確認されており（写真105）、注意を引くところである。想像は膨らむが、供養の本体である五輪塔が転用に供することはなかったが、反花座や釘貫など直接信仰に関係しない部分は持ち去られ



写真103 清盛塚十三重石塔



写真104 真光寺一遍上人墓五輪塔

た可能性がある。絵画の改訂時期とあわせて興味ある事項であるが、基本体の供養は現代まで続いているのであり、兵庫城へ運ばれることはなかったのである。

このように、石垣等に転用される石塔が近在から運ばれ、石材として破壊されてゆくすぐ横で、運び出しの対象とならなかつた石造物が、存在している事実は認識すべきだと思う。



写真105 頭部を五輪塔とした釘貫頭柱材の出土状況

#### 4. おわりに

雜駁ながら兵庫城跡に転用された石塔の分析を通じて、当時の石造物転用の背景を探ってみた。これを整理すると、利用が継続しているもの=信仰が続いている石塔は持ち去られていないという結論に達する。つまり石垣に転用するため、機能が停止し不要になった石塔を運んできたと考えることができる。前回にも指摘したが、最新の年代を示す一石五輪塔と、兵庫城前身城の花隈城構築の年代には若干のヒアタスがある。整理してみると他の城等の石垣の構築時期と石塔最新の年代には、やはり一定の差が認められるに至った（下高2016、狹川2016）。転用される石材の多くが墓地に所在することを思うと、信仰が続いている墓地を荒らして持ち運んだではなく、すでに機能を失っているものを中心に石材を奪い取っている可能性がうかがえる。しかも今次の調査では、等身大の地蔵のように個人の墓塔的な存在ではなく、何らかの供養の標識的、記念碑的なものまでが転用されていることは、この墓石が持ち出された場所では、個別の墓標が個々に機能を失っただけなく、墓地全体も機能が停止していたことを物語っているように思う。つまり、中世墓を営んでいた集団に何らかの要因で墓を管理、維持できない事情が発生したのである。多くの中世墓が機能を停止する=終焉を迎える時期が16世紀代にあること（狹川2011）とも重なり注目する必要がある。この事実から、石の転用要因として墓の機能停止は必要な条件だったと言えるが、墓の機能停止要因と新城構築つまり新勢力の侵入との関係は、わずかながらも年代差があるということを踏まえると、直接的な関係は薄いように思えた。

#### 《参考文献》

- 五味文彦ほか 2012 『一遍聖絵を歩く 中世の景観を読む』 高志書院  
下高大輔 2016 「城郭遺跡における石垣への石塔転用について」「石造物の転用と中世墓の終焉(2)」(第6回中世葬送墓制研究会資料) 中世葬送墓制研究会／詳細は口頭発表による。  
山川 均 2008 『中世石造物の研究—石工・民衆・聖—』 日本史史料研究会  
狹川真一 2011 『中世墓の考古学』 高志書院  
狹川真一 2014 「兵庫城跡の石垣に転用された石塔について」「兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書」 神戸市教育委員会  
狹川真一 2016 「転用石造物にみる宗教觀」「寺社と民衆」 第12輯 民衆宗教史研究会

#### 《追記》

本稿を草するにあたり、下高大輔氏（彦根市教育委員会）に多くのご教示を得た。記して感謝申し上げます。また本稿は、JSPS科研費26284126の成果の一部を含んでいます。

## 第7章 自然科学的調査

### 兵庫津遺跡第62次調査出土木製品の樹種同定

(株)パレオ・ラボ 黒沼保子

#### 1.はじめに

神戸市に所在する兵庫津遺跡において、兵庫城の堀や悪水抜溝、井戸などから出土した近世の木製品349点について樹種同定を行った。

#### 2. 試料と方法

試料は、漆器椀や下駄を中心に、工具や紡織具、日用品、土木材など木製品349点である。下駄や曲物など1試料で複数の部位を採取している試料もあり、同定点数の総計は385点となった。

木取りの確認後、これらの試料から、剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレバラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定、写真撮影を行った。

#### 3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はモミ属とマツ属複雑管束亜属、ツガ属、コウヤマキ、スギ、ヒノキ、アスナロの7分類群、広葉樹はハンノキ属ハンノキ亜属(以下、ハンノキ亜属)、クリ、ツブライジ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)、コナラ属コナラ節(以下、コナラ節)、ケヤキ、モクレン属、クスノキ、カツラ、ツバキ属、イスノキ、

表20 器種分類別の樹種同定結果

樹種/器種	農耕工具	土木工具	紡織具	運搬具	漁労具	服飾具	容器	調理加工工具	食事具	調度	祭祀具	遊戯具	文房具	日用品	不明木製品	土木施設材	建築材	その他	計
モミ属	1		1									1	2	1	2	4	1	7	
マツ属複雑管束亜属			5					2							1	26	4	1	6
ツガ属					4														1
コウヤマキ																			1
スギ																			1
ヒノキ	1	2	2																1
アスナロ	4	1																	1
ハンノキ属ハンノキ亜属								5	1										6
クリ								6	3										13
ツブライジ																			41
ブナ属										41									41
コナラ属アカガシ亜属											1								9
コナラ属コナラ節											1								1
ケヤキ											1								6
モクレン属											1								9
クスノキ											1								4
カツラ											1								7
ツバキ属											1								4
イスノキ											1								2
ウツギ属											1								1
サクラ属											2								4
キハダ											2								4
カエデ属											1								1
トチノキ											31								31
ツゲ																			1
ミヤキ											3								3
エゴノキ属											8								8
エゴノキ属シオジ節											2								2
樹皮												1							1
タケ亜科											2								2
計	12	1	6	8	1	124	115	10	7	2	2	20	17	5	43	12	385		

ウツギ属、サクラ属、キハダ、カエデ属、トチノキ、ツゲ、ミズキ、エゴノキ属、トネリコ属シオジ節（以下、シオジ節）の21分類群、その他に樹皮とタケ亜科があり、合計30分類群が確認された。器種分類別の樹種同定結果を表1、結果の一覧を付表に示す。器種分類は伊東・島地編（2012）を参照した。なお、同定根拠については紙幅の都合上、割愛する。

#### 4. 考察

器種別の樹種同定結果を表20～26に示す。

工具では、刷毛はヒノキ、鉗はモミ属とヒノキ、把はスギで、いずれも針葉樹が利用されていた。木理直通で加工しやすい針葉樹が選択されたと考えられる。一方、槌はアカガシ亜属とツバキ属、柵の柄はアカガシ亜属、木柵はツブラジイ、砧はアカガシ亜属、滑車はクスノキで、強度を要するこれらの器具には重硬な広葉樹が利用されていた。

農耕土木具では、鋤はアカガシ亜属であった。近世の農耕土木具の分析例は少ないが、古代の農耕土木具にはアカガシ亜属が多く利用されている。木材ノ工藝的利用（1912）によれば、近代でもアカガシ亜属の材は弾力をを利用して農具の柄に利用しているため、近世も同様の傾向であったと推測される。

紡織具では、紡錘車はアカガシ亜属、織機？はスギ、支木はヒノキであった。工具類と同様に、部位によって重硬な樹種と、加工容易な針葉樹を使い分けていると考えられる。

運搬具の船材では、角材はモミ属、板材はマツ属複維管束亜属とスギであった。針葉樹は加工性が良く、水湿にも強いため、船材として有用である（平井、1996）。なお、神戸市のハーバーランド遺跡では、江戸時代後半の船の部材にはツガ属とモミ属、マツ属複維管束亜属が確認されている（伊東・山田編、2012）。また、柵はアカガシ亜属であり、重硬な材が選択されたと考えられる。

服飾具のうち、下駄にはスギとヒノキを中心とした針葉樹が多用されていた。無歯下駄にはスギ、雪下駄にはヒノキ、削り下駄にはスギが多いがヒノキとクリもみられた。連歯下駄もスギを中心とした針葉樹が多いが、広葉樹のクリ、モクレン属、キハダも確認された。また、漆塗の連歯下駄1点はケヤキであった。差歛下駄のうち、陰卯下駄の台はスギが多く、その他にヒノキ、モクレン属、クスノキ、サクラ属、シオジ節がみられたが、歯ではクスノキとクリが使用されており、針葉樹はみられなかった。漆塗の陰卯下駄は、台はスギ、歯はマツ属複維管束亜属とハンノキ亜属であった。一方、差歛下駄の露卯下駄では、台はヒノキとアスナロ、歯もヒノキが多く、露卯下駄で多かったスギは確認されなかった。地域に限らず、露卯下駄は台と歯の両方にヒノキ科が多く利用される傾向があり（本村・高橋、2009）、今回の分析結果でも同様の傾向が確認された。

服飾具の櫛と蒔絵櫛は、どちらもイスノキであった。イスノキは非常に重硬な材で、櫛の素材としてよく利用される（伊東・山田編、2012）。また、傘の轆轤部分はすべてエゴノキ属で、柄はタケ亜科であった。兵庫津遺跡57次調査でも傘轆轤にはエゴノキ、櫛にはイスノキが利用されていた（吉川、2014）。エゴノキ属の材は重硬で緻密であり、和傘の轆轤部分には現代でもエゴノキが多く利用されている（平井、1996）。したがって、櫛と傘は一般的な木材利用傾向とも一致する。

容器や調理加工具、食事具では、板状に加工を行う曲物の側板と底板、釣瓶、盆、蓋、一本式円盤などにはスギとヒノキを中心とした針葉樹が利用されており、調理加工具の柄

杓や、食事具の折敷類も同様の傾向である。これは製材や加工の容易さから針葉樹が利用されていたと考えられる。一方、挽物である漆器類や盃などには広葉樹が利用されていた。漆器ではブナ属とトチノキの利用が特に多く、その他にはハンノキ亜属やクリ、コナラ節、ケヤキ、モクレン属、カツラ、サクラ属、カエデ属、キハダ、ミズキがみられた。兵庫津遺跡の第57次調査でも、漆器類にはトチノキとブナ属を多用し、曲物類はスギやヒノキなどの針葉樹が利用されており（吉川、2014）、今回の分析結果と類似した樹種構成になっている。なお、飲み口に利用されていたウツギ属は、幹が中空である性質がそのまま利用されていたと推測される。

その他の木製品のうち針葉樹の利用がみられたのは、灯明台のスギ、位牌の台のヒノキ、撞木のスギ、ミニチュア船のスギとヒノキ、ミニチュア柄鏡板のヒノキ、ミニチュア削り下駄のアスナロ、羽子板のアスナロ、人形のヒノキ、鍔のマツ属複維管東亜属、柄鏡箱のスギとヒノキ、木筒のスギを中心としてモミ属とコウヤマキ、ヒノキ、不明木製品類のモミ属とツガ属、スギ、ヒノキである。これらも軽量で加工性の良い針葉樹の材質を選択利用していたと考えられる。また、広葉樹が利用されていたのは、刀状木製品のモクレン属と、ツゲ、太鼓に利用されていたキハダである。太鼓は兵庫県の上脇遺跡Ⅱでマツ属複維管東亜属が1点分析されているのみであり、利用傾向はまだ明確ではない。木材ノ工藝的利用（1912）で太鼓の胴として記載のあった樹種は、アカマツ、スギ、ケヤキ、ハルニレである。また、判子に利用されていたツゲは非常に重硬で緻密な材であり、現代でも印材に使用されている（伊東ほか、2011）。

土木材や建築材では、マツ属複維管東亜属を中心とした針葉樹の利用が多く見られた。特に土留板や胴木など、地中で利用する製品にマツ属複維管東亜属が多い傾向があった。マツ属複維管東亜属はアカマツとクロマツがあり、水中において心材の保存性が高いため、土中の利用に優れている。

#### 引用文献

- 平井信二（1996）木の大百科。394p. 朝倉書店。  
 伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－。449p. 海青社。  
 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌。238p. 海青社。  
 本村充保・高橋 敦（2009）遺跡出土下駄に関する製作技法および使用樹種に関する基礎的研究－西日本出土資料を中心として－。考古学論考32: 53-85. 奈良県立橿原考古学研究所。  
 農商務省山林局編（1912）木材ノ工藝的利用。1308. 大日本山林会。  
 吉川純子（2014）兵庫津遺跡第57次調査で出土した木製品の樹種。神戸市教育委員会編「兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書」: 109-114. 神戸市教育委員会文化財課。

表21 器種別の樹種同定結果(1)

樹種/器種	工具						農耕 土木具		紡織具		運搬具・漁労具		計		
	刷毛	鉤	鍬	槌 (柄)	木桶	砧	耙	漕車	鍛錠 車	織機 ?	支木	船材	角材	板材	櫓
モミ属	1										1				2
マツ属複維管東亜属												5			5
スギ											2				5
ヒノキ	3	1									1				5
ツヅラトイ															1
コナラ属アカガシ亜属		1	1		1			1	1	3				1	1
クスノキ															1
ツバキ属	1														1
計	3	2	2	1	1	1	1	1	1	3	2	1	1	7	1
															28

表22 器種別の樹種同定結果(2)

樹種	園芸用									計	
	下鉢					上鉢					
	無菌 下鉢	雪下鉢	引り	連鉢	漆塗鉢	鉢下鉢	漆塗鉢 台	露堺下鉢 台	漆 台		
マツ属根管束系属				1			2			3	
ツガ属			4							4	
スギ	2	19	17		9	3				50	
ヒノキ		4	3		2					25	
アスマロ			1				8	7	1	4	
ハンノキ属ハンノキ亜属						5				5	
クリ			4		1					5	
ケヤキ		1		1			1		1	2	
モクレン属										2	
ラン科					5					6	
イスチキ										2	
サクラ属					1					2	
キハダ			2				1			2	
エゴノキ属										8	
トネリコ属シオジ節				1			1			2	
タケモ科										2	
計	2	1	24	33	1	15	6	3	7	124	

表23 器種別の樹種同定結果(3)

樹種	育苗									計	
	樹木			接器			容器				
	樹板	底板	蓋	皿	筒	容器	鉢	鉢皿口	盆		
スギ	1						1		1	5	
ヒノキ	3	1				1			3	9	
アスマロ									1	1	
ハンノキ属ハンノキ亜属			1	1	2					1	
クリ										3	
ブナ属		2		1	39					41	
コナラ属コナラ節					1					1	
ケヤキ		1			3		1			5	
モクレン属		2			4					6	
カツラ属		2			2					4	
カラマツ属								1		1	
サクラ属										2	
キハダ		2								1	
カエデ属										1	
トチギ属	4				1					31	
ミズキ					3					3	
計	4	1	14	1	82	1	1	1	1	115	

表24 器種別の樹種同定結果(4)

樹種	調理加工用									食事用具	
	杓子					鉢					
	樹板	底板	被ひ絆	柄	包丁柄	漆粉木	漆塗板	漆板	漆板		
マツ属根管束系属	1					1	1	1		2	
スギ									2	3	
ヒノキ	3	1	1			1		2	2	11	
崩皮				1						1	
計	3	2	1	1	1	1	1	2	2	17	

表25 器種別の樹種同定結果(5)

樹種	調度・祭祀具・楽器										文房具	不明大製品	
	調度					祭祀具			樂器			漆器不 明品	墨書き不 明品
	火明台	位牌	接木	太鼓	琵琶	羽子板	人形	鳥	刀状木	柄巻杓子	木勺	漆器不 明品	墨書き不 明品
モク属													3
マツ属根管束系属						1							1
ツガ属													1
コウヤマキ													1
スギ	2	1	1	4	1	1	1	1	3	12	1	1	2
ヒノキ					1	2							10
アスマロ													3
モクレン属								1					1
キハダ													1
フグ													1
計	2	1	1	1	5	1	1	2	1	1	16	1	46

表26 器種別の樹種同定結果(6)

樹種	土木・建築・施設材									その他の	
	鶴居			建材			柱材				
	角材	板材	角材	不明	角材	板材	井戸枠	廻木	杭		
モク属	1	2	1	1	1	1	20	4	4	2	
マツ属根管束系属										30	
ツガ属										1	
スギ							1	3	6	14	
ヒノキ							1			2	
クリ							4			4	
コナラ属アカシイ属					1					1	
コバナ属										1	
計	1	4	1	2	1	1	5	25	2	55	







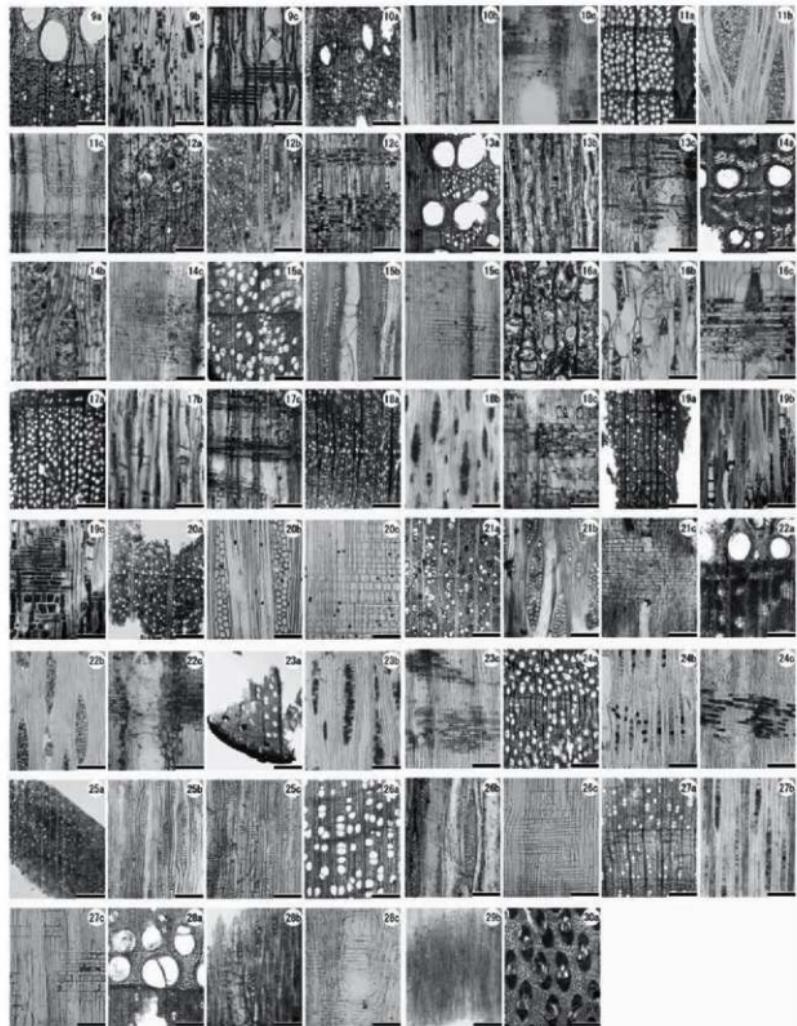


写真106 兵庫津遺跡第62次調査出土木製品の光学顕微鏡写真

9a-9c. クリ (No.170)、10a-10c. ツブライ (No.286)、ブナ属 (No.257)、12a-12c. コナラ属アカガシ亜属 (No.154)、13a-13c. コナラ属コナラ節 (No.143)、14a-14c. ケヤキ (No.252)、15a-15c. モクレン属 (No.198)、16a-16c. クスノキ (No.126-2)、17a-17c. カツラ (No.60)、18a-18c. ツバキ属 (No.3)、19a-19c. イスノキ (No.134)、20a-20c. ウツギ属 (No.22)、21a-21c. サクラ属 (No.150)、22a. キハダ (No.242) a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=100 μm) 22b-22c. キハダ (No.242)、23a-23c. カエデ属 (No.172)、24a-24c. トチノキ (No.119)、25a-25c. ツゲ (No.15)、26a-26c. ミズキ (No.263)、27a-27b. エゴノキ属 (No.265) a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=100 μm) 27c. エゴノキ属 (No.265)、28a-28c. トネリコ属シオジ節 (No.176-2)、29a. 樹皮 (No.26-3)、30a. タケ亜科 (No.74-2) a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=100 μm)

# 兵庫津遺跡第62次出土炭化材の樹種同定

(株)パレオ・ラボ 黒沼保子

## 1.はじめに

神戸市に所在する兵庫津遺跡の第62次調査において近世の町屋から出土した炭化材の樹種同定を行った。

## 2. 試料と方法

試料は、新町地区・関屋町地区で検出された江戸時代初頭の焼失家屋から出土した炭化材92点である。いずれも建築部材と推測されている。

炭化材の樹種同定は、試料を乾燥させた後、肉眼観察と実体顕微鏡観察で大まかな分類群に分けた。その後、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

## 3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はモミ属とマツ属複雑管束亞属、スギ、ヒノキの4分類群、広葉樹はクマシデ属イヌシデ節(以下、イヌシデ節)とクリ、スダジイ、コナラ属アカガシ亞属(以下、アカガシ亞属)、クワ属、シキミ、クスノキ科、ツバキ属、サカキ、サクラ属、キハダ、アワブキ属、モチノキ属、タイミンクチバナ、カキノキ属、エゴノキ属の16分類群、その他に単子葉類のタケモ科があり、計21分類群が確認された。結果の一覧を表27に示す。

表27 造構別の樹種同定結果

樹種/造構	SB132	SB2302	SB2304	SB1304	SB1306	SB1309	SB1310	SB1312	SB1317上	SB1317下	SB1318	SB1322	SB1331前側面	SB1331	SB1333	SB1335	計
モミ属	3	1								2							6
マツ属複雑管束亞属	3	2	6	2		2		6	1	3	1	1		1	1	5	34
スギ		1	1					2	1	2			1				8
ヒノキ		2	1	2									1	2			8
クマシデ属イヌシデ節		1						1									2
クリ		1															1
スダジイ						1				1	1		1				4
コナラ属アカガシ亞属		2						1		1			1				5
クワ属													1				1
シキミ									1	1							2
クスノキ科					1					1			1				3
ツバキ属			1			1											2
サカキ			1									1					2
サクラ属		3	2														5
キハダ				1					1								2
アワブキ属					1				1								1
モチノキ属							1										1
タイミンクチバナ				1													1
カキノキ属										1							1
エゴノキ属					1												1
タケモ科					1			1									2
計	3	13	17	4	1	7	2	10	4	9	3	3	6	2	3	5	92

#### 4. 考察

炭化材は焼失家屋に由来しており、建築部材と推測されている。全体では針葉樹の割合が多く、試料の約半数を占めていた。特にマツ属複維管束亞属が最も多く、炭化材92点中34点であった。マツ属複維管束亞属以外の樹種はすべて10点未満であった。また、各遺構の樹種構成には大きな違いがみられず、マツ属を中心とした針葉樹を主体とし、多様な広葉樹の利用が確認されるという構成である。

兵庫津遺跡の第53次調査では、今回と同様に近世の町屋から出土した建築部材と思われる炭化材15点について樹種同定が行われており、マツ属とスギが多く、その他にアカガシ亞属とサカキ、タケア科も確認されている（神戸市教育委員会、2012）。今回の分析結果と同様の木材利用傾向であり、兵庫津遺跡では建築部材にはマツ属を中心とした針葉樹が多用される傾向があると推測される。

針葉樹は全般に比較的軽軟で加工容易であるが、マツ属複維管束亞属のアカマツとクロマツは針葉樹の中では重硬な部類に属する。マツ属複維管束亞属は韌性があるため、現代でも建築構造材として多用されている（平井、1996）。そして今回確認された広葉樹はいずれも重硬な材であるため、堅硬もしくは強韧な材が選択された可能性がある。

また、今回確認された広葉樹は、温帯から暖帯に分布する常緑性の樹種が多かった。特にスダジイやアカガシ亞属、シキミ、ツバキ属、サカキ、モチノキ属、タイミンタチバナなどは常緑広葉樹林帶に生育する樹種で、兵庫津遺跡周辺に分布域を持つ。流通していた木材を使用していたとしても、比較的近郊で採取された木材が使用された可能性がある。

#### 引用文献

- 平井信二（1996）木の大百科、394p、朝倉書店。  
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－、449p、海青社。  
神戸市教育委員会（2012）兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書、81p、神戸市教育委員会文化財課。

付表1 兵庫津遺跡第62次出土炭化材の樹種同定結果一覧(1)

No.	サンプル番号	地区名	遺構名	サンプル名	形状	樹種
1	B-1	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-1	-	モミ属
2	B-2	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-2	-	モミ属
3	B-3	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-3	-	タケア科
4	B-4	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-4	-	モミ属
5	B-5	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-5	-	コナラ属アカガシ亞属
6	B-6	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-6	-	コナラ属アカガシ亞属
7	B-7	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-7	-	スギ
8	B-8	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-8	-	マツ属複維管束亞属
9	B-9	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-9	-	サクラ属
10	B-10	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-10	-	サクラ属
11	B-11	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-11	半削状	タイミンタチバナ
12	B-12	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-12	半削状	サクラ属
13	B-13	Ⅹi・Xi	SB2302	炭化物B-13	-	マツ属複維管束亞属
14	C-1	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-1(w)	-	ヒノキ
15	C-2	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-2(w)	-	エゴノキ属
16	C-3	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-3(w)	-	サカキ
17	C-4	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-4(w)	-	クリ
18	C-5	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-5(w)	-	モミ属
19	C-6	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-6(w)	-	マツ属複維管束亞属
20	C-7	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-7(w)	-	マツ属複維管束亞属
21	C-8	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-8(w)	-	マツ属複維管束亞属
22	C-9	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-9(w)	-	マツ属複維管束亞属
23	C-10	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-10(w)	-	スギ
24	C-11	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-11(w)	-	マツ属複維管束亞属
25	C-12	Ⅹi・Xi	SB2305	炭化物C-12(w)	-	マツ属複維管束亞属

付表2 兵庫津遺跡第62次出土炭化材の樹種同定結果一覧(2)

No.	サンプル番号	地区名	遺構名	サンプル名	形状	樹種
26	C-13	Ixi・Xi	SB2305	炭化物C-13(w)	-	ツバキ属
27	C-14	Ixi・Xi	SB2305	炭化物C-14(w)	-	ヒノキ
28	C-15	Ixi・Xi	SB2305	炭化物C-15(w)	-	サクラ属
29	C-16	Ixi・Xi	SB2305	炭化物C-16(w)	-	サクラ属
30	C-17	Ixi・Xi	SB2305	炭化物C-17(w)	-	クマシデ属イヌシデ節
31	D-1	Ixa	SB1304	炭化材サンプル①	角	キハダ
32	D-2	Ixa	SB1304	炭化材サンプル②	角	マツ属複雜管束亞屬
33	D-3	Ixa	SB1304	炭化材サンプル③	板	ヒノキ
34	D-4	Ixa	SB1304	炭化材サンプル④	角?	マツ属複雜管束亞屬
35	E-1	Ixb(ロ-1)	SB1309	炭化材サンプル①	角	スダジイ
36	E-2	Ixb(ロ-1)	SB1309	炭化材サンプル②	丸	ツバキ属
37	E-3	Ixb(ロ-1)	SB1308	炭化材サンプル③	丸	クスノキ科
38	E-4	Ixb(ロ-1)	SB1309	炭化材サンプル④	角	ヒノキ
39	E-5	Ixb(ロ-1)	SB1309	炭化材サンプル⑤	角	ヒノキ
40	E-6	Ixb(ロ-1)	SB1309	炭化材サンプル⑥	角?	マツ属複雜管束亞屬
41	E-7	Ixb(ロ-1)	SB1309	炭化材サンプル⑦	角	マツ属複雜管束亞屬
42	E-9	Ixb(ロ-1)	SB1309	SBX3009木舞サンプル	本舞	タケアリ科
43	F-1	Ixb(イ-1)	SB1310	炭化材サンプルNo1	丸?	モチノキ属
44	F-2	Ixb(イ-1)	SB1310	炭化材サンプルNo2	丸?	アワブキ属
45	F-3	Ixb(イ-1)	SB1352	炭化材サンプルNo3	-	マツ属複雜管束亞屬
46	F-4	Ixb(イ-1)	SB1352	炭化材サンプルNo4	-	マツ属複雜管束亞屬
47	F-5	Ixb(イ-1)	SB1352	炭化材サンプル⑨	-	マツ属複雜管束亞屬
48	G-1	Xd	SB1312	炭化材サンプル①	丸?	マツ属複雜管束亞屬
49	G-2	Xd	SB1312	炭化材サンプル②	-	スギ
50	G-3	Xd	SB1312	炭化材サンプル③	丸?	スギ
51	G-4	Xd	SB1312	炭化材サンプル④	-	クマシデ属イヌシデ節
52	G-5	Xd	SB1312	炭化材サンプル⑤	丸?	マツ属複雜管束亞屬
53	G-6	Xd	SB1312	炭化材サンプル⑥	丸	コナラ属アカガシ属
54	G-7	Xd	SB1312	炭化材サンプル⑦	丸	マツ属複雜管束亞屬
55	G-8	Xd	SB1312	炭化材サンプル⑧	丸?	マツ属複雜管束亞屬
56	G-9	Xd	SB1312	炭化材サンプル⑨	角	マツ属複雜管束亞屬
57	G-10	Xd	SB1312	炭化材サンプル⑩	角	マツ属複雜管束亞屬
58	H-1	Xf	SB1317上	炭化材サンプル①	角	マツ属複雜管束亞屬
59	H-2	Xf	SB1317上	炭化材サンプル②	-	キハダ
60	H-3	Xf	SB1317上	炭化材サンプル③	角	シキミ
61	H-4	Xf	SB1317上	炭化材サンプル④	板	スギ
62	I-1	Xf	SB1317F	炭化材サンプル①	丸	シキミ
63	I-2	Xf	SB1317F	炭化材サンプル②	丸	クスノキ科
64	I-3	Xf	SB1317F	炭化材サンプル③	丸	スギ
65	I-4	Xf	SB1317F	炭化材サンプル④	角?	スダジイ
66	I-5	Xf	SB1317F	炭化材サンプル⑤	丸	コナラ属アカガシ属
67	I-6	Xf	SB1317F	炭化材サンプル⑥	角	マツ属複雜管束亞屬
68	I-7	Xf	SB1317F	炭化材サンプル⑦	角	スギ
69	I-8	Xf	SB1317F	炭化材サンプル⑧	丸	マツ属複雜管束亞屬
70	I-9	Xf	SB1317F	炭化材サンプル⑨	板	マツ属複雜管束亞屬
71	J-1	Xf	SB1318	炭化材サンプル①	丸?	マツ属複雜管束亞屬
72	J-2	Xf	SB1318	炭化材サンプル②	角	カキノキ属
73	J-3	Xf	SB1318	炭化材サンプル③	丸	スダジイ
74	K-1	Xc	SB1322	サンプル①(炭化材)	丸	モミ属
75	K-2	Xc	SB1322	サンプル②(炭化材)	丸	モミ属
76	K-3	Xc	SB1322	サンプル③(炭化材)	丸	マツ属複雜管束亞屬
77	L-1	?f	SB1331	炭化材サンプル①	角	スダジイ
78	L-2	?f	SB1331	炭化材サンプル②	板	スギ
79	L-3	?f	SB1331	炭化材サンプル③	丸	クワ属
80	L-4	?f	SB1331	炭化材サンプル④	角	サカキ
81	L-5	?f	SB1331	炭化材サンプル⑤	丸	クスノキ科
82	L-6	?f	SB1331	炭化材サンプル⑥	角	コナラ属アカガシ属
83	L-7	Xf	SB1331前街路	炭化材サンプルNo1	丸?	ヒノキ
84	L-8	Xf	SB1331前街路	炭化材サンプルNo2	板?	マツ属複雜管束亞屬
85	M-1	Ixe	SB1353	サンプル①(炭化材)	-	マツ属複雜管束亞屬
86	M-2	Ixe	SB1353	サンプル②(炭化材)	-	ヒノキ
87	M-3	Ixe	SB1353	サンプル③(炭化材)	-	ヒノキ
88	N-1	Ixb(ロ-2)	SB1355	炭化材サンプル	-	マツ属複雜管束亞屬
89	N-2	Ixb(ロ-2)	SB1355	炭化材サンプル	-	マツ属複雜管束亞屬
90	N-3	Ixb(ロ-2)	SB1355	炭化材サンプル	-	マツ属複雜管束亞屬
91	N-4	Ixb(ロ-2)	SB1355	炭化材サンプル	-	マツ属複雜管束亞屬
92	N-5	Ixb(ロ-2)	SB1355	炭化材サンプル	-	マツ属複雜管束亞屬

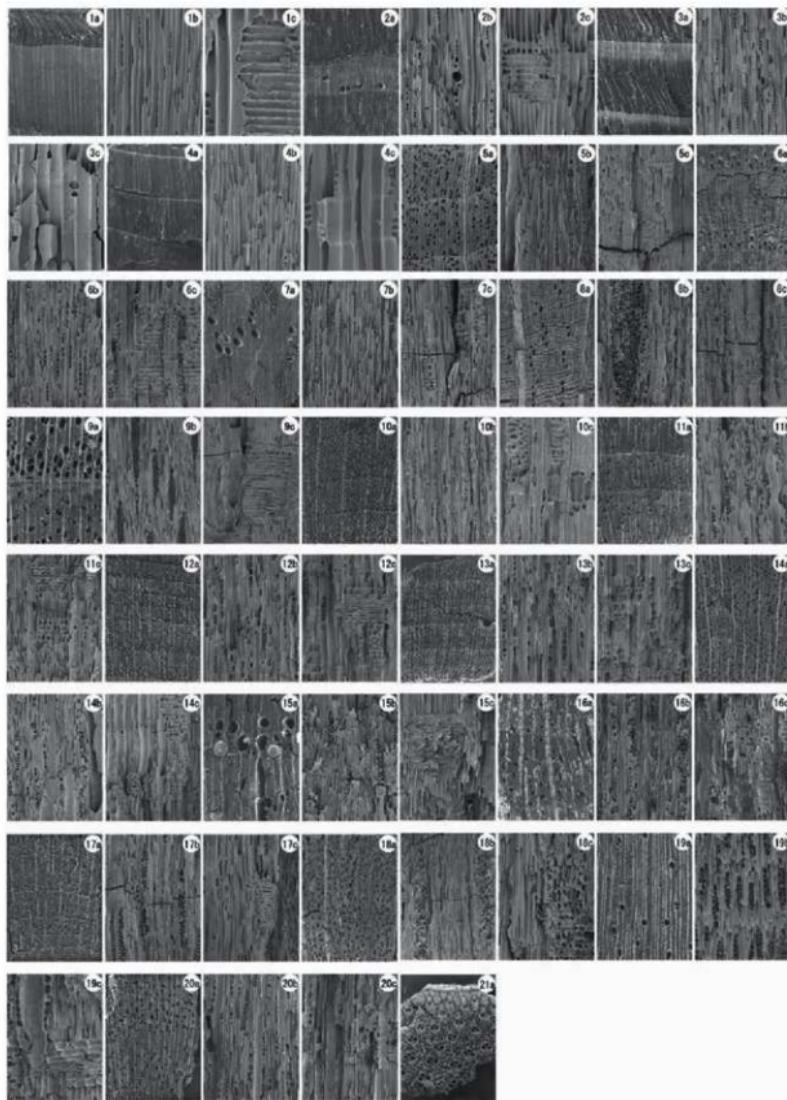


写真107 兵庫津遺跡第62次出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真  
 1a-1c. モミ属 (No.1)、2a-2c. マツ属複雜管束亞属 (No.8)、3a-3c. スギ (No.7)、4a-4c. ヒノキ (No.35)、5a-5c. クマシデ属イヌシデ節 (No.30)、6a-6c. クリ (No.17)、7a-7c. スダジイ (No.35)、8a-8c. コナラ属アカガシ属 (No.5)、9a-9c. クワ属 (No.79)、10a-10c. シキミ (No.62)、11a-11c. クスノキ科 (No.81)、12a-12c. ツバキ属 (No.36)、13a-13c. サカキ (No.16)、14a-14c. サクラ属 (No.28)、15a-15c. キハダ (No.31)、16a-16c. アワブキ属 (No.44)、17a-17c. モチノキ属 (No.43)、18a-18c. タイミンタチバナ (No.11)、19a-19c. カキノキ属 (No.72)、20a-20c. エゴノキ属 (No.15)、21a. タケ亜属 (No.3)  
 a : 横断面, b : 接線断面, c : 放射断面

# 兵庫津遺跡第62次調査の古環境と利用植物

古代の森研究会 吉川昌伸・吉川純子

## 1. はじめに

兵庫津遺跡はJR兵庫駅の東側に位置し、第62次調査では16世紀に造られた兵庫城の城下町の往路や町屋、池田恒興が築城した時期にさかのぼると考えられる外堀と内堀が見つかっている。ここでは外堀や内堀などの堆積環境と16世紀後葉および18世紀中～後葉の植生と生業を明らかにするために、珪藻化石、花粉化石、寄生虫卵分析を行った。また、植物利用を明らかにするために、17世紀前半の遺構から出土した種子を検討した。

## 2. 堆積物試料

試料は、S-1～S-5の堆積物と、選別された種子試料である。S-1は中世以前の石積遺構(SX2501)最下層、S-2は18世紀中～後葉の南外堀の下層、S-3は18世紀中～後葉の内堀(新)の下層、S-4は16世紀後葉の内堀(旧)の下層、S-5は17世紀前半の不明遺構の最下層であり、木製品が多数出土している。

分析試料の堆積物の特徴は、S-1は黒褐色細粒砂質シルトで木片や炭化材片を多く含む。S-2は黒褐色有機質極細粒砂質シルト、S-3はオリーブ黒色中～細粒砂質シルトからなり細礫と炭化材を混入、S-4は灰色砂礫、S-5はオリーブ黒色細粒砂質シルトである。

表28 第62次調査の分析試料の堆積物の特性(重量%)

No.	地区	遺構	層位	堆積物の特徴	砂	シルト	粘土	強熱減量 (有機物量)
S-1	X	SX2501	石積遺構最下層	黒褐色細粒砂質シルト、木材と炭化材片多く混入	-	-	-	27.0
S-2	Z	南外堀(新)	外堀下層	黒褐色有機質極細粒砂質シルト	16.5	64.0	19.5	
S-3	Z	内堀(新)	内堀埋土下層	オリーブ黒色中～細粒砂質シルト、細礫と炭化材混入	27.0	62.6	10.4	
S-4	Z	内堀(旧)	内堀埋土	灰色砂礫粗～極粗粒砂と細～中礫	81.0	17.2	1.8	
S-5	Y	SX1304	不明遺構最下層	オリーブ黒色細粒砂質シルト	5.0	84.2	10.8	

## 3. 珪藻分析

### (1) 分析方法

珪藻分析は、S-1～S-5の5試料で行った。珪藻化石の抽出は、試料約1gをトールビーカーにとり、35%過酸化水素水を加えて加熱し、有機物の分解と粒子の分散を行う。反応終了後に、沈底法により水洗を5～6回行った。次に分散した試料を適当な濃度に調整し、十分攪拌後マイクロビペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させた。スライドグラスにマウントメディア(封入剤)を適量のせ、これに先程のカバーガラスをかぶせ、加熱して封入剤の揮発成分を気化させて永久プレラートを作成した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用して、珪藻殻が1/2以上残存したものについて同定・計数を行った。珪藻の同定および各種の生態情報は、Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、Round et al. (1990)、渡辺 (2005)、小林ほか (2006) を参考にし、古環境の復元のための指標としては安藤 (1990) の環境指標種群や渡辺 (2005) の有機汚濁とpHなどを用いた。

### (2) 珪藻分析結果

出現した珪藻化石群のリストとその個数を表2に、主要珪藻分布図を図1に示す。出現率は珪藻殻数を基数として百分率で算出した。珪藻化石は、外堀下層S-2と内堀(新)下層S-3、不明遺構の最下層S-5では比較的多くの珪藻化石が検出したが、石積遺構最下層S-1と内堀(旧)下層S-4は少なかった。

表29 第62次調査内堀と外堀等の珪藻分析結果一覧表 (指標種群は杉本(1988)と安藤(1990)、有機汚濁とpHは渡辺(2005)に基づく)

	生態	指標種群	有機汚濁	pH	S-1	S-2	S-3	S-4	S-5
<i>Acmiocyclus normani</i> (Greg.) Hustedt	M	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Actinomycytus seminarius</i> (Ehrenberg) Ehrenberg	M	-	-	-	-	-	-	1	5
<i>Amphipora amphibia</i> (Ehrenberg) Kützing	M	-	-	-	-	-	-	-	5
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	M	C1	-	-	-	-	-	1	2
<i>Coscinodiscus astromorphus</i> Ehrenberg	M	A	-	-	-	-	-	2	6
<i>Coscinodiscus</i> spp.	M	-	-	-	1	-	-	2	1
<i>Cyclotella striata</i> (Kützing) Grunow / <i>C. stylifera</i> Brightwell	M-B	B	-	-	1	1	1	7	76
<i>Diploneis acuta</i> (Ehrenberg) Ehrenberg	M	-	-	-	-	1	-	4	1
<i>Diploneis strobli</i> (Hustedt)	M	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Grammatophora maxima</i> W. Smith	M	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula maculosa</i> Donkin	M	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Odonella australis</i> (Lengyel) Agardh	M	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Pleurosigma angulosum</i> (Dillwyn) Scherff	M	-	-	-	-	-	-	24	2
<i>Thalassiosira leptopus</i> (Grunow) Van der Heijst	M	A	-	-	1	-	-	-	2
<i>Thalassiosira</i> spp.	M	-	-	-	-	1	-	-	11
<i>Tryblionella granulata</i> (Grunow) D.G. Mann	M	E1	-	-	1	-	-	-	1
<i>Tryblionella granulata</i> (Grunow) Ehrenberg ex Cleve	M	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Chasmopedia polchella</i> (Ralfs ex Kützing) Williams et Round	B, M	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Diploneis smithii</i> (Birbuisson ex W. Smith) Cleve	B, M	E2	-	-	-	-	-	1	2
<i>Gyrusigma obscurum</i> (W. Smith) Griffith et Henfrey	B, M	-	-	-	-	2	9	-	-
<i>Navicula peregrina</i> (Ehrenberg) Kützing	B, M	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	B, M	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Tabularia cf. fasciculata</i> (Agardh) Williams et Round (=Synema)	B, M	C1	-	-	1	-	9	1	-
<i>Nitzschia coconiformis</i> Grunow	B	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Tryblionella apiculata</i> Gregory	B	-	-	-	1	-	3	-	-
<i>Tryblionella marginaria</i> (Grunow) D.G. Mann (=Nitzschia)	-	-	-	-	-	-	-	-	23
<i>Athyrium breviscapum</i> Agardh	B, F	W	ind	neut	-	3	-	-	-
<i>Epithemia aculeatum</i> (Ehrenberg) Kützing	B, F	W	saxe	alph	-	-	-	1	-
<i>Epithemia turgei</i> var. <i>grammica</i> (Ehrenberg) Bann	B, F	W	saxe	neut	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria construens</i> f. <i>subtilis</i> (Hustedt) Hustedt	B, F	W	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thalassiosira lacustris</i> (Grunow) Hustedt	B, F	W	imp	alph	1	-	-	-	-
<i>Typhlocypris longispina</i> (Ehrenberg) Hustedt	B, F	W	saph	neut	3	1	-	-	-
<i>Achaeocalyx hantzschii</i> (Grunow)	F	W	-	-	15	-	10	-	-
<i>Amphora ovalis</i> (Kützing) Schoeman et Archibald	F	W	ind	alph	-	-	1	-	-
<i>Amphora</i> sp.	F	W	-	-	1	-	-	1	-
<i>Anomoecetes sphinx</i> (Ehrenberg) Plitzer	F	W	-	albi	-	-	-	-	-
<i>Adonisacalis</i> (Hantzsch) Simensen	F	W	ind	neut	-	2	-	-	5
<i>Alatocella</i> sp.	F	W	ind	alph	5	-	-	-	-
<i>Caloneis silicea</i> (Ehrenberg) Cleve	F	W	-	albi	-	-	2	-	-
<i>Craticula cupiseta</i> (Kützing) D.G. Mann	F	W	ind	alph	5	13	-	-	-
<i>Coccocystis</i> sp.	F	W	-	-	3	-	-	-	-
<i>Cyclotella</i> sp.	F	L	saph	alph	-	93	1	-	2
<i>Cymbella aspera</i> (Ehrenberg) Peragallo	F	K	saxe	albi	-	-	-	-	-
<i>Cymbella turquida</i> Grunow	F	K	saxe	albi	2	-	-	-	-
<i>Cymbella turquida</i> (Birbuisson in Kützing) Grunow	F	Q	saxe	albi	-	2	-	-	1
<i>Diploneis elliptica</i> (Kützing) Cleve	F	W	saxe	neut	-	-	9	-	-
<i>Diploneis</i> sp.	F	W	saxe	alphi	-	-	1	-	-
<i>Encyonema miliaceum</i> (Chelmky) D.G. Mann	F	W	saxe	alphi	-	-	21	-	-
<i>Epithemia soror</i> Kützing	F	W	saxe	alphi	-	-	-	-	-
<i>Zannaria pectinata</i> (O.F.Müller) Rabenhorst	F	W	ind	alph	-	-	-	-	-
<i>Eunotamorus</i> (Kützing) Grunow	F	W	saxe	neut	-	-	-	-	-
<i>Eunotamorus</i> sp.	F	-	-	-	1	32	1	-	-
<i>Fragilaria</i> sp.	F	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	F	W	ind	alph	-	-	14	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	F	W	ind	alph	-	-	14	-	-
<i>Gomphonema gracie</i> Ehrenberg	F	W	ind	neut	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kützing) Kützing	F	W	ind	neut	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	F	W	saxe	alphi	4	30	3	9	-
<i>Gomphonema turris</i> Ehrenberg	F	W	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma acuminatum</i> (Kützing) Rabenhorst	B, F	W	-	-	-	-	-	12	3
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehrenberg) Grunow in Cleve & Grunow	B, F	Q	ind	neut	2	-	6	3	7
<i>Lacistema mucicula</i> (Kützing) D.G. Mann	F	Q	saph	alph	-	-	1	-	3
<i>Meliora variabilis</i> Agardh	F	K	ind	alph	2	-	-	27	-
<i>Naegleria divergens</i> (Kützing) Grunow	F	W	saxe	albi	-	-	5	-	-
<i>Navicula papula</i> Kützing	F	W	saph	neut	-	1	-	-	-
<i>Navicula elegans</i> W. Smith	F	W	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula</i> sp.	F	W	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidiodiscus</i> (Kützing) Grunow	F	W	-	alph	-	2	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	F	W	saph	alph	-	-	3	1	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	F	Q	ind	alph	1	-	-	1	3
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>parallelis</i> (Brun) Patrick	F	W	ind	alph	2	-	-	8	-
<i>Pinnularia</i> sp.	F	W	ind	alph	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia hemisphaerica</i> (Kützing) Rabenhorst	F	W	-	-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia interrupta</i> W. Smith	F	W	saph	alph	-	2	-	-	-
<i>Pinnularia macrocephala</i> (Ehrenberg) Ehrenberg	F	W	-	-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia rotundata</i> (Ehrenberg) Cleve	F	W	ind	neut	5	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> sp.	F	O	ind	neut	-	3	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Kützing) Ehrenberg	F	W	-	-	12	37	3	-	-
<i>Pinnularia</i> sp.	F	W	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehrenberg) O. Müller	F	W	ind	neut	5	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehrenberg) O. Müller	F	W	saph	alph	-	-	-	-	-
<i>Scaphostratus planus</i> (Nitzsch) Ehrenberg	F	W	ind	neut	-	-	-	-	-
<i>Staurosiscus pheocostensis</i> (Nitzsch) Ehrenberg	F	W	ind	neut	-	-	-	-	-
<i>Stephanodiscus cf. egyptiacus</i> Ehrenberg	F	O	ind	neut	3	4	1	-	-
<i>Stephanodiscus</i> sp.	F	W	-	-	-	-	-	-	16
<i>Surirella</i> sp.	F	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Syringodium</i> sp. (Nitzsch) Ehrenberg (=Ulmaria)	F	W	ind	alph	1	2	37	-	-
海藻類植物群 (総数)			0	0	0	0	0	8	
外洋浮游植物群 (A)			1	1	1	1	1	7	76
内湾沿岸植物群 (B) (35~20%)			0	1	0	9	1	2	
海水藻類指標種群 (C)			0	0	0	0	0	0	1
海水藻類非指標種群 (E1) (30~12%)			0	0	0	0	1	2	
内見況下水底指標種群 (E2) (12~2%)			0	0	0	0	0	1	
海水・汽水床 不定 不明			4	3	15	5	5	72	
中～下層性河川指標種群 (K)			2	0	27	0	0	0	
船下吸水河川指標種群 (L)			0	93	0	0	0	0	
湖沼性下水底指標種群 (M)			0	0	0	0	0	5	
沼泥湿地指標種群 (O)			12	5	47	0	0	0	
陸域指標種群 (Q)			3	9	4	8	19	16	
淡水水草型 (W)			35	81	92	1	1	1	
淡水水草型 不定			5	8	5	1	1	8	
海水水草型			0	0	0	0	0	0	
日本代表種群 (X)			63	202	209	24	210	-	
日本優占種群に基づく有機汚濁指数 (DAIps)			7.1	200.2	1765.3	16	302.5	-	
付着藻類生物量に基づく有機汚濁指数 (DAlws)			54.4	254	53.4	-	-	-	
生態 - M: 海水生種、B: 水汽生種、F: 淡水生種									
有機汚濁 - saxe: 好清水性種、saph: 好汚水性種、ind: 广適性種									
pH - achi: 真酸性種、acph: 好鹼性種、neut: 中性種、alph: 好アルカリ性種									

外堀下層S-2は、淡水生種を主とし海水から汽水生種は稀であった。群集の組成は、最下流性河川指標種群の*Cyclotella meneghiniana*が高率で出現し、淡水産公布種の*Pinnularia cf. major*、*Achnanthes hungarica*、*Craticula cuspidate*が比較的多く占め、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*が僅かに出現した。

内堀(新)下層S-3は淡水生種を主とし、海水から汽水生種は12.4%と少なかった。群集の組成は、優占を示す分類群は無く、中～下流性河川指標種群の*Melosira varians*と、淡水産公布種の*Synedra ulna*が比較的多く占め、沼沢湿地付着生種群の*Eunotia pectinalis*と*Gomphonema acuminatum*、淡水産公布種の*Achnanthes hungarica*と*Gomphonema turris*などが出現した。

不明遺構の最下層S-5は、海水から汽水生種を主とし、淡水生種は22.8%を占める。群集の組成は、内湾指標種群の*Cyclotella striata* / *C. stylorum*が高率で出現し、海水生種の*Pleurosigma elongatum*と汽水生種の*Tryblionella hungarica*が比較的多く占めた。淡水生種は、淡水産公布種の*Stephanodiscus cf. aegyptiacus*や陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*と*Luticola mutica*などが出現した。

珪藻化石の少ない石積遺構最下層S-1では、淡水生種が大半を占め、沼沢湿地付着生種群*Pinnularia viridis*や淡水産公布種の*Caloneis silicula*と*Cymbella tumida*、*Gomphonema trucatum*などであった。内堀(旧)下層S-4も出現した珪藻殻は少なく、内湾指標種群の*Cyclotella striata* / *Cyclotella stylorum*や海水藻場指標種群の*Cocconeis scutellum*などからなり、淡水生種は主に陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*が出現した。

なお、内湾指標種群は内湾水中を浮遊生活する種群、海水藻場指標種群は塩分濃度が12パーミル以上の水域の海藻や海草(アマモ)に付着生活する種群(小杉、1988)、中～下流性河川指標種群は中から下流部の扇状地や自然堤防、後背湿地にみられる種群、最下流性河川指標種群は最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群、沼沢湿地付着生種群は水深が1m内外で一面に植物が繁茂しているところ、および湿地で付着の状態で優勢な出現がみられる種群、淡水産公布種は淡水域のすべてに分布範囲が及ぶ種である(安藤、1990)。陸域指標種群は「コケ類を含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部など大気に接触した環境に生活する一群」(小杉、1986)で他の生育地には出現しないか出現しても主要でない(安藤、1990)。

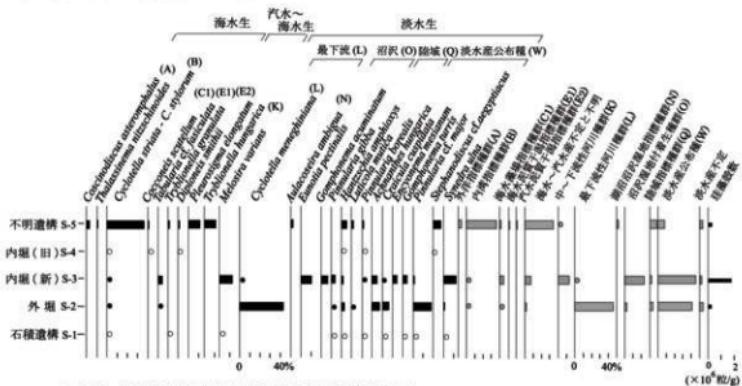


図145 第62次調査内堀と外堀等の主要珪藻分布図

### (3) 外堀と内堀ほかの堆積環境

外堀 (S-2) の珪藻化石群は、主に最下流性河川指標群と淡水産公布種より構成される。優占した最下流性河川指標群の *Cyclotella meneghiniana* は、淡水域から汽水域まで広く分布し多少汚濁された池沼にもよくみられ（小林ほか、2006）、有機汚濁に関しては好汚濁性種、pHに関しては好アルカリ性種で、本種が優占種となる水域は  $\beta$  中腐水性の止水域である（渡辺、2005）。また、付着珪藻群集に基づく有機汚濁指数 (DAIp) は 25 と  $\alpha$  中貧腐水性水域の階級にあり、外堀は汚れた淡水の止水域であった可能性が高い。

内堀 (S-3) の珪藻化石群は、淡水産公布種と沼沢湿地付着生種群、中～下流性河川種群からなり、海水藻場指標種群が少量含まれる。優占する分類群はなく中～下流性河川種群の *Melosira varians* と淡水産公布種の *Synedra ulna* が相対的に多い。*Melosira varians* は各地の河川や湖沼に良く出現し（小林ほか、2006）、pH は好アルカリ性種で有機汚濁は広適応性種であり、*Synedra ulna* も好アルカリ性種で有機汚濁は広適応性種である（渡辺、2005）。DAIp は 54 の  $\alpha$  貧腐水性水域であることや沼沢湿地付着生種群が比較的多いことから、水深の浅いきれいな淡水域であったと考えられる。一方、内堀 (IHS-4) では珪藻化石が少なく、淡水種は主に陸域指標種群の *Hantzchia amphioxys* と *Pinnularia borealis* からなるため、内堀 (旧) の下層はじめじめした環境にあった可能性が推測される。

17世紀前半の不明遺構 (S-5) は、内湾指標種群と海水～汽水産不定と不明種から構成される。内湾指標種群の *Cyclotella striata* は汽水性で内湾の河口域に多く出現することから（小林ほか、2006）、不明遺構の最下部層は内湾の河口域の様な海水から汽水性の環境にあったと推測される。

中世以前の石積遺構 SX2501 最下層 (S-1) から出現した珪藻殻は少ないものの、主に淡水生種からなる。堆積物は、木片や炭化材片を多く含む黒褐色細粒砂質シルトであることから、植物遺体が掃き溜め的に堆積したことにより珪藻殻が少ない可能性も想定され、浅い水域であった可能性が推定される。

## 4. 花粉分析と寄生虫卵分析

### (1) 分析方法

花粉分析は、S-2、S-3、S-4 の 3 試料である。花粉化石の抽出は、試料約 5 g を秤量し体積を測定後に 10% KOH（湯煎約 15 分）、傾斜法と篩（目の開き 0.25 mm）により粗い植物遺体と砂を取り除き、48% HF（約 15 分）、重液分離（比重 2.15 の臭化亜鉛）、アセトトリス処理（濃硫酸 1 : 無水酢酸 9 の混液で湯煎 5 分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しミキサーで十分攪拌後、マイクロビペットで取り重量を測定（感量 0.1 mg）しグリセリンで封入した。同定と計数はプレパラートの全面を行った。

細粒微粒炭量は、プレパラートの顕微鏡画像をデジタルカメラで取り込み、画像解析ソフトの ImageJ で  $75 \mu\text{m}^2$  より大きいサイズの細粒微粒炭の積算面積を計測した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、シルト以下の細粒成分、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により  $750^\circ\text{C}$  で 3 時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。

寄生虫卵は、S-2、S-4、S-5 の 3 試料で、2% KOH で分散し 48% HF で短時間処理した。また、花粉分析を行った S-2、S-3、S-4 試料について、花粉の同定、計数と平行して寄生虫卵についても観察した。

(2) 花粉分析と寄生虫卵分析結果

出現した分類群のリストとその個数を表3に、主要花粉分布図を図2に示す。出現率は、樹木花粉は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、バラ科、マメ科で樹木と草本の区別が出来ない分類群は草本花粉としてまとめた。なお、分析試料の堆積物の特徴は表145に前掲した。

花粉化石群の組成は、S-2ではマツ属複維管束亞属が高率で出現して、エノキ属-ムクノキ属、コナラ属、アカガシ属とスギなどが比較的多く出現した。他にクリ、サクラ属、ヒサカキ属、ツバキ属が僅かに出現し、草本ではガマ属やイネ科のイネ型と野生型、アブラナ科、アザレ科、ソバ属などが出現した。回虫と鞭虫の寄生虫卵が僅かに検出され、夥しい細粒微粒炭が含まれていた。

S-3は、マツ属複維管束亞属が高率で出現して、センダン属、エノキ属-ムクノキ属、アカガシ属が出現した。草本ではガマ属が比較的高率で出現し、水生植物の

表30 第62次調査内堀と外堀より出現した花粉化石の一覧表

分類群	学名	S-2	S-3	S-4
樹木				
モミ属	<i>Abies</i>	-	1	-
ツノクチ属	<i>Zelkova</i>	-	8	-
マツ属複維管束亞属	<i>Pinus subgen. Haplocladon</i>	1	-	-
マツ属複維管束亞属	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	129	201	65
マツ属不明	<i>Pinus (Unknown)</i>	-	-	3
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.f.) Don	8	-	2
イヌイチヒノキ科-イスガヤ科	<i>Pinaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae</i>	1	-	-
イヌイチヒノキ科	<i>Corylus</i>	-	-	1
ハシバミ属	<i>Betula</i>	-	1	1
カバノキ属	<i>Alnus</i>	1	2	1
ハンノキ属	<i>Fagus crenata</i> Blume	-	1	-
ブナ属	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	-	1	-
イヌブナ	<i>Quercus subgen. Lepidobalanis</i>	8	3	7
コナラ属コナラ属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	5	7	6
コナラ属アカガシ属	<i>Quercus crenata</i> Sieb. et Zucc.	-	-	-
クリワツキ属	<i>Castanea - Castanopsis</i>	-	-	2
ケヤキ属	<i>Zelkova type</i>	-	1	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis - Aponanthus</i>	16	12	6
サクラ属	<i>Prunus</i>	1	-	-
セイヨウミズク	<i>Millettia</i>	-	11	-
カニダツ属	<i>Acer</i>	-	1	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	1	-
ヒサカキ属	<i>Eurya</i>	1	1	-
ツバキ属	<i>Camellia</i>	1	-	-
アラビカガヤ科	<i>Araliaceae</i>	-	5	-
草本				
ガマ属	<i>Typha</i>	60	130	2
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	29	12	26
イネ科(イネ型)	<i>Gramineae (Oryza type)</i>	21	53	25
イネ科(野生型)	<i>Gramineae (Wild type)</i>	8	5	2
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	-	1	-
ミズアオイ属	<i>Monachoria</i>	-	-	-
ギンジロウオホノキ	<i>Romex</i>	1	1	-
イヌタマリ	<i>Polygonia</i>	-	3	-
イタドリ属	<i>Reynoutria</i>	-	1	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	1	2
アザレ科	<i>Chenopodiaceae</i>	7	12	34
アブラナ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceo-Amaranthaceae</i>	11	9	25
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	25	46	35
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	-	-	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	1	-	-
ソバ属	<i>Vicia</i>	1	-	-
他のシダ類	<i>other Leguminosae</i>	-	-	-
ツタ属	<i>Glycyrrhiza</i>	-	1	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	4	-	2
エキムグラク-アカネ属	<i>Gallium - Rubia</i>	-	1	-
ヘンリイチヅク属	<i>Pedicularis</i>	-	4	-
カラスミツリ属	<i>Trichomeles</i>	-	-	-
ゴキブリ属	<i>Actinostemma</i>	4	1	-
ベニバナ属	<i>Carthamus</i>	-	-	1
オナシモ属	<i>Xanthium</i>	-	-	1
ミツバ属	<i>Artemesia</i>	-	-	-
他のキク科	<i>other Tubuliflorae</i>	4	4	16
タンポポ属	<i>Liguliflorae</i>	-	-	11
シダ植物				
サンショウモウ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	-	1	2
アマモ属	<i>Azolla filiculoides Nakai</i>	-	1	-
他のシダ植物胞子	<i>other Pteridophyta</i>	1	-	4
他のパリ目モルフ				
寄生虫卵				
回虫	<i>Ascaris</i>	2	1	2
綫虫	<i>Trichuris</i>	3	3	13
非感染吸虫-卵蛭	<i>Diplostomum - Eurytrema</i>	-	-	-
糞便				
非感染吸虫-卵蛭	<i>Anelasma pollen</i>	178	248	106
草木花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	180	267	193
シダ植物胞子	<i>Fern spores</i>	1	2	6
花粉・胞子数	<i>Pollen and Spores</i>	359	517	305
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	13	12	7
樹木花粉量(%)		6000	8940	2320
草本花粉量(%)		5676	806	2900

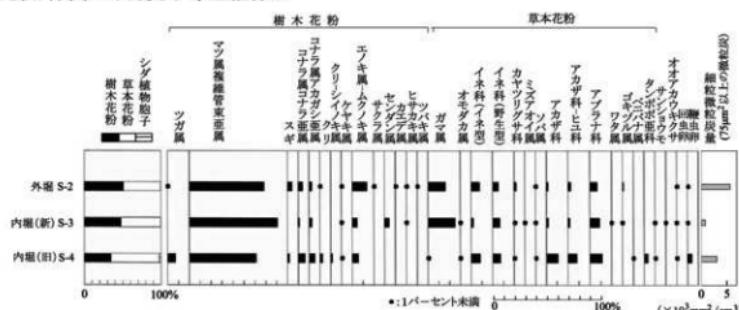


図146 第62次調査の内堀と外堀の主要花粉分布図  
(出現率は樹木の樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した)

オモダカ属やミズアオイ属、サンショウモ、オオアカウキクサを伴う。他にアブラナ科やイネ科、アブラナ科、アカザ科、ワタ属、ソバ属などが出現し、寄生虫卵が僅かに検出された。

S-4でもマツ属複維管束亜属が高率で出現し、エノキ属-ムクノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリと針葉樹のツガ属などからなる。草本ではイネ科、アカザ科、アブラナ科が比較的多く占め、ソバ属やベニバナ属などが検出された。鞭虫卵がいく分多く出現し、夥しい細粒微粒炭が含まれていた。

寄生虫卵は、S-2とS-4、S-5のいずれの試料でも少なかった(表31)。S-2では回虫が

146個/cm<sup>2</sup>、鞭虫と槍形吸虫-肺蛭が73個

/cm<sup>2</sup>であった。S-3では鞭虫が45/cm<sup>2</sup>、回

虫が13個/cm<sup>2</sup>、S-5は回虫が35個/cm<sup>2</sup>、鞭

虫と槍形吸虫-肺蛭が17個/cm<sup>2</sup>であった。

### (3) 本丸周辺の植生

花粉分析試料は、主郭南側の外堀と東側の内堀から採取された16世紀後半の堆積物で、各試料は約50mの範囲の近距離にある。16世紀後半および18世紀中～後葉の外堀や内堀の周辺には、マツ属複維管束亜属や落葉広葉樹のサクラ属、センダン属、カエデ属、常緑広葉樹のヒサカキ属、ツバキ属などが植栽され、エノキ属-ムクノキ属やコナラ亜属、アカガシ亜属、針葉樹のスギ、ツガなどは城の外側に分布していたと推測される。また、外堀には抽水植物のガマ属が生え、この水域は珪藻化石からは汚れた止水域と推定されている。内堀(新)でもガマ属や抽水植物のオモダカ属やミズアオイ属、浮葉植物のサンショウモやオオアカウキクサが生えていたと推定され、珪藻化石からはきれいな水域であったようである。内堀(旧)は、水生植物はオモダカ属とサンショウモが僅かに検出されたのみである。珪藻化石からじめじめした環境が推定されており、おそらく開水域を持たない湿地または湿った環境にあったと推定される。

一方で、栽培植物としては、イネ型やアカザ科、アブラナ科の他に、ソバ属、ワタ属、ベニバナ属が検出された。

寄生虫卵は、回虫と鞭虫と槍形吸虫-肺蛭が少量検出された。回虫と鞭虫は、ヒトが手指や野菜などに付着した幼虫包囊卵を経口摂取すると感染する。症状は、回虫は成虫が小腸内で静かに寄生している場合は時々起る腹痛や下痢などであるが虫体が迷入の際には重症になり、鞭虫は少数寄生の場合はほとんど無症状であるが多数寄生すると異食症、腹痛、下痢などをきたす(吉田、1996)。槍形吸虫は、シカやイノシシなどの多くの草食動物に寄生し、虫卵が人の糞便内に見いだされた例が多いものの、そのほとんどはヒトがシカなどの肝臓を食べた後、その中の虫卵が一過性に糞便内に現れたとされ、ヒトに感染した場合は、胆石様の激しい症状を発する場合が多い(吉田、1996)。肺蛭の虫卵は槍形吸虫と酷似し、ヒトから成虫を見出した例は少ない。

## 5. 大型植物化石

### (1) 試料と分析方法

第62次調査では兵庫城の堀、街路や町屋群、井戸、溝などが確認され、多量の大型植物遺体(種実)が出土した。特に1769年の上地令により兵庫城の堀が埋め戻され悪水抜溝(SD3101)とされた時期を中心に廃棄残渣とみられる種実が多く出土している。そこで出土した大型植物遺体(種実)を同定することにより当時の食生活の復原を試みる。遺構から採取した堆積物は担当者により水洗され種実等が選別された試料を同定に供した。処理

表31 第62次調査内堀と外堀等より出現した寄生虫卵(個数/cm<sup>2</sup>)

寄生虫卵		S-2	S-4	S-5
回虫	<i>Ascaris</i>	146	13	35
鞭虫	<i>Trichuris</i>	73	45	17
槍形吸虫-肺蛭	<i>Dicrocoelium - Eurytrema</i>	73	-	17

量については不明である。観察は肉眼および実体顕微鏡で行い、1試料に付き100粒以下については分類群毎出土部位別に同定・計数した。

## (2) 大型植物化石の同定結果

本遺跡より出土した時期毎の分類群別集計を表32-33にまとめた。1試料100粒以上の試料と細粒の破片試料は分類群が同じであることを確認し「多」と表示した。出土分類群は、針葉樹はカヤ、クロマツ、マツ属複雑管束亜属、広葉樹はオニグルミ、ヤマモモ、コナラ、コナラ属、ムクノキ、モモ、ウメ、アンズ、スモモ、サクラ属、マツブサ、サンショウ、ナツメ、センダン、ナンキンハゼ、ブドウ、ノブドウ、ワタで木本は20分類群、草本単子葉類はイネ、オオムギの2分類群、草本双子葉類は、ヤエムグラ属、アズキ、アブラナ属、カボチャ、ヒヨウタン、キュウリ属、メロン仲間の6分類群が同定された。また、不明の木本の芽が確認された。

## (3) 大型植物化石の出土傾向からみた利用植物

全期を通して食用・利用植物及び庭園などに植栽される種類が多く出土し、食料残渣の廃棄物や周囲の植栽植物からこれらの果実や種子が供給され堆積したと考えられる。時期別出土種実をみると、18世紀中頃には食料残渣と考えられるウメ、カボチャ、メロン仲間と植栽と見られるマツ属複雑管束亜属、ムクノキが少量出土している。18世紀後半はカボチャがきわめて多く、メロン仲間、モモ、ウメ、センダン、ヤマモモなどを多く出土しており、センダンを除き食料残渣と考えられる。19世紀においてもカボチャ、モモ、ウメ

表32 時期別大型植物化石出土状況

時期	分類群	出土部位	出土部数	分類群	個数
17世紀初頭か	モモ	炭化種子	多	モモ	多
17世紀前半	ワタ	炭化種子	多	ヤマモモ	多
18世紀中頃	マツ属複雑管束亜属	種子	1	オニグルミ	1
	ムクノキ	内果皮	3	コナラ属	1
	ウメ	核完形風化	1	モモ	1
	カボチャ	種子欠け	1	核完形	3
	メロン仲間	種子	3	核半分風化	1
18世紀後半	クロマツ	種子	1	核半分風化	2
		球果破片	1	核破片	4
		種子	1	核化種子	1
	マツ属複雑管束亜属	種子	2	核化種子	1
	ヤマモモ	球果	10	核化種子	15
	ムクノキ	内果皮	4	核化種子欠け	3
	モモ	核完形	8	核化種子半分	1
		核化種子	1	核化種子	多
		核半分	11	核化仁	1
		核半分風化	3	ウメ	核完形
		核破片	2		核半分欠け
		球果	1		核半分
	ウメ	炭化核完形	1		核破片
		核完形	7		核化核完形
		核半分欠け	1		核化核半分
		核半分	2		核化核半分
		核破片	11		核化核破片
		核半分	2		核化仁
	アンズ	核	1		核化核完形
	サクラ属	種子	2		核化核半分
	マツブサ	種子	2		核化核半分
	センダン	核	17		核化核半分
	ノブドウ	種子	1		核化核半分
	ワタ	炭化種子	1		核化核半分
	木本	炭化球果	1		核化核半分
	オオムギ	炭化種子	1		核化核半分
		球果破片	1		核化核半分
	カボチャ	種子	97		核化核半分
		核化種子	145		核化核半分
		核半分	1		核化核半分
		核半分風化	46		核化核半分
		核破片	1		核化核半分
		球果	1		核化核半分
	ヒヨウタン	未熟種子	1		核化核半分
	メロン仲間	種子	6		核化核半分
		核完形	6		核化核半分
		種子	18		核化核半分
		種子欠け	1		核化核半分
		種子	11		核化核半分
19世紀	カヤ	種子	2		核化核半分
	クロマツ	球果	3		核化核半分
	ヤマモモ	核	6		核化核半分
	オニグルミ	内果皮半分	1		核化核半分
	コナラ	球果完形	1		核化核半分
	コナラ属	球果破片	1		核化核半分
	モモ	核完形	19		核化核半分
		核完形風化	3		核化核半分
		核半分	1		核化核半分
		核半分欠け	1		核化核半分
		核半分風化	1		核化核半分
		核破片	1		核化核半分
	ウメ	核完形	2		核化核半分
		核完形欠け	1		核化核半分
		核完形食痕	1		核化核半分
		核破片	8		核化核半分
	アンズ	核完形	1		核化核半分
	スモモ	核完形	1		核化核半分
	ナツメ	核	1		核化核半分
	ブドウ	種子	4		核化核半分
	イネ	球果破片	1		核化核半分
	カボチャ	種子	37		核化核半分
		種子欠け	5		核化核半分
		種子	5		核化核半分
	メロン仲間	種子	1		核化核半分
		球果	1		核化核半分
		種子	3		核化核半分
		種子	1		核化核半分
		種子	1		核化核半分

表33 時期別大型植物化石出土状況

分類群	出土部位	個数
カヤ	種皮破片	2
モモ	種皮	9
ヤマモモ	内果皮半分	1
オニグルミ	内果皮	1
コナラ属	種皮破片	1
モモ	核完形	3
	核完形食痕	1
	核半分	2
	核破片	5
ウメ	核完形	8
	核半分欠け	2
	核半分	3
	核化核完形	1
	核化核半分	1
	核化核半分	1
アンズ	核化核完形	1
サクラ属	核化核半分	1
マツブサ	核化核半分	1
センダン	核化核半分	1
ノブドウ	核化核半分	1
ワタ	核化核半分	21
木本	核化核半分	2
オオムギ	核化核半分	1
カボチャ	核化核半分	12
イネ	核化核半分	多
	球果	多
	球果	205
オオムギ	球果	多
アズキ	球果	多
アブラナ属	球果	多
ヤエムグラ属	球果	2
カボチャ	球果	12
ヒヨウタン	球果	13

が多く、ヤマモモ、メロン仲間を出土している。これらの18世紀後半から19世紀の種実はほぼ堀を埋めたSD3101から出土している。近世のゴミ穴は、難波宮（旧大阪市中央体育館敷地内）の江戸時代後半武家屋敷において6土坑の分析例があり、屋敷内のゴミ穴でもっとも多く出土したのはカボチャ種子であった。また食用のメロン仲間、イネ、サンショウなどはわずかに出土している（古代の森研究会、2000）。カボチャは調理前に種をあらかじめ取り除くがメロン仲間は種子ごと食用とすることがあると言う点で廃棄残渣の処理行程が異なる。すなわち本遺跡で多く出土するモモ、ウメ、カボチャなどの種実は口に入る前に廃棄されることから、これらの堆積物は食用として加工時に不要となったごみを廃棄した場所と考えられる。

17世紀前半とみられるSK1306や詳細な帰属時期は不明であるが焼失町屋とされるSB1312、SB1317、SB1333、SB1355からはイネ、オオムギ、ワタ、アブラナ属の炭化種実を大変多く出土した。これらには塊状となった炭化種実や板状の炭化材が付着している状況が見られることから、保管してあった場所が焼失、あるいは櫃などの容器ごと焼かれたと考えられる。イネは穎が残った状態が多く、茎葉の破片が含まれている試料もあり精米しないで保管していた様である。オオムギは通常食用として利用されるとは考えられておらず、飲料のためあるいは馬の飼い葉ではないかと思われる。ワタは種子の毛を纖維として用いるほか油脂として利用し、絞りかすも飼料として利用する。ワタやアブラナ属など油脂を含む種子は燃焼した場合残りにくいが、連続した低酸素状態では比較的低温でも炭化物が生成される。出土した種子は潰れていないため絞る前の保管状態であったが容器に入っていたかあるいは大量保管など低酸素におかれた状態で加熱されたと考えられる。

表34 時期別種実サイズ

	18世紀後半	高さ mm	幅 mm		19世紀	高さ mm	幅 mm
モモ (n=12)				モモ (n=20)			
最大値	305	225		最大値	335	245	
最小値	216	150		最小値	245	170	
平均値	275	192		平均値	291	197	
ウメ (n=7)				カボチャ (n=24)			
最大値	210	138		最大値	165	93	
最小値	153	110		最小値	100	6.5	
平均値	173	124		平均値	135	7.7	
カボチャ (n=81)							
最大値	178	115					
最小値	90	52					
平均値	161	76					
ヒヨウタン (n=6)							
最大値	126						
最小値	105						
平均値	112						
メロン仲間 (n=18)							
最大値	98						
最小値	50						
平均値	81						

## 引用文献

- 安藤一男. 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理. 42, 73-88.
- Hendey,N.I. 1964. An introductory account of the smaller algae of British coastal water. (Fishery Investigations Ser. IV), 317p.
- 堀田満 編. 1989. 世界有用植物事典. 平凡社. 1499pp.
- 古代の森研究会. 2000. 第4節 前期難波宮水利施設に係わる古環境分析. 難波宮址の研究 第十一. 財團法人大阪市文化財協会. 217-224.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田敬五. 2006. 小林弘珪藻図鑑. 531p. 内田老舗圖. 東京.
- 小杉正人. 1988. 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究. 27, 1-20.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot. 1986, 1988, 1991a. 1991b. Bacillariophyceae. I. Teil. 2.Teil. 3.Teil. 4.Teil. 876p., 539p., 576p., 437p. In Ettl, H. Gerloff, J. Heyning, J. Mollenhauer. D.Süsswasserflora von Mitteleuropa. 2 (1), 2 (2), 2 (3), 2 (4). Gustav Fischer. Jena.
- Round,F.E., Crawford,R.M. & Mann,D.G. 1990. The Diatom. Biology and morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press. Cambridge.
- 渡辺仁治. 2005. 淡水珪藻生態図鑑. 666p. 内田老舗圖. 東京.
- 米倉浩司・梶田忠. 2003. 「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList) <http://ylist.info> (2016年3月18日).
- 吉田幸雄. 1996. 図説人体会寄生虫学. 293p. 南山堂.

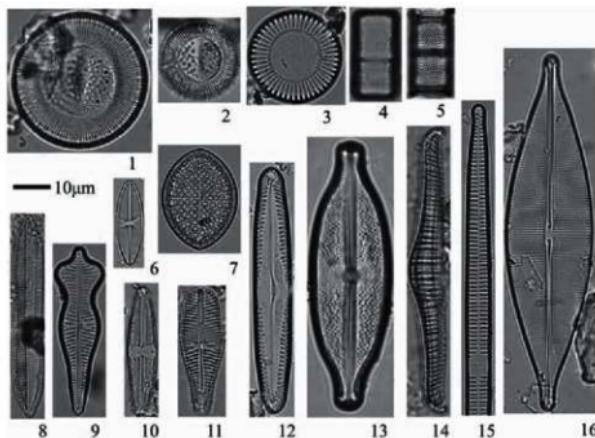


写真108 兵庫津道路第62次調査区より産出した珪藻化石

- 1-2. *Cyclotella striata* - *C. stylorum* (S-5)
3. *Cyclotella meneghiniana* (S-3)
4. *Melosira varians* (S-3)
5. *Aulacoseira ambigua* (S-5)
6. *Achnanthes hungarica* (S-3)
7. *Cocconeis scutellum* (S-4)
8. *Tryblionella apiculata* (S-3)
9. *Gomphonema acuminatum* (S-3)
10. *Luticola mutica* (S-3)
11. *Gomphonema truncatum* (S-3)
12. *Pinnularia gibba* (S-3)
13. *Anomooneis sphaerophora* (S-3) 14. *Rhopalodia gibba* (S-3) 15. *Synedra ulna* (S-3)
16. *Craticula cuspidata* (S-3)

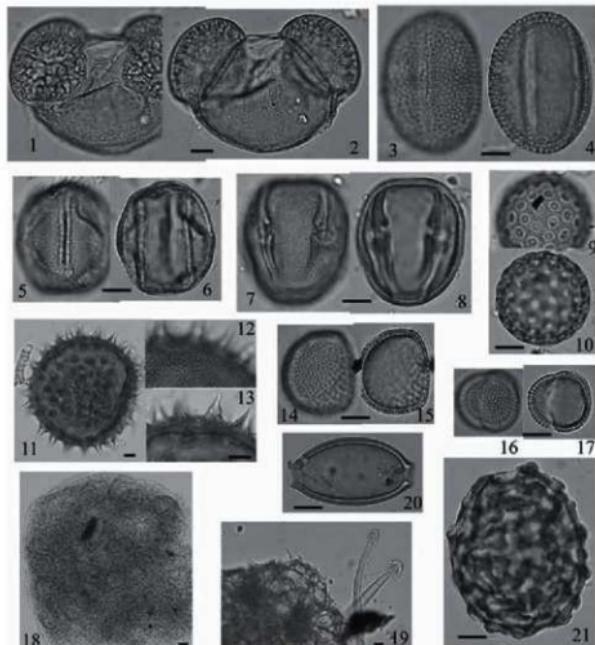


写真109 兵庫津道路第62次調査区より産出した花粉化石と寄生虫卵

- 1-2. マツ属種管束菌属 (S-3)
  - 3-4. ソバ属 (S-2)
  - 5-6. コナフ属 (S-3)
  - 7-8. センダク属 (S-3)
  - 9-10. アカザ科 (S-3)
  - 11-13. ワタ属 (S-3)
  - 14-15. ガマ属 (S-3)
  - 16-17. アブラナ科 (S-3)
  18. サンショウモ (S-3)
  19. オオアカウキクサ (S-3)
  20. 腹虫卵 (S-4)
  21. 回虫卵 (S-2)
- スケール= 10 μm

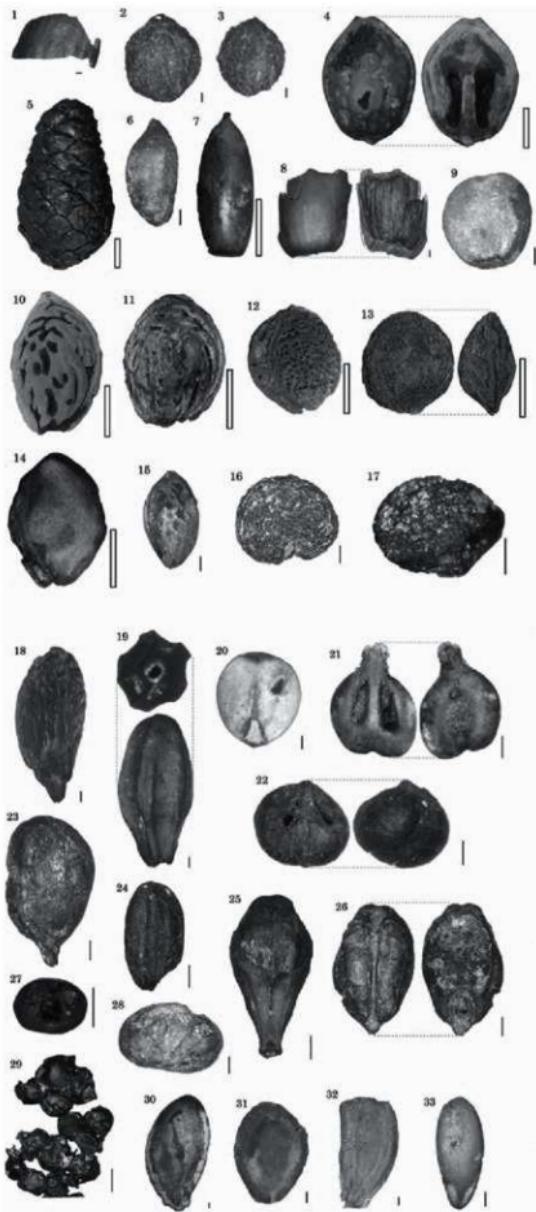


写真110 兵庫津遺跡第62次出土大型植物化石

1. カヤ、種皮破片(Z区-24)
  2. ヤマモモ、核(Z区-46)
  3. ヤマモモ、核(Z区-15)
  4. オニグルミ、内果皮半分(Z区-18)
  5. クロマツ、球果(Z区-32)
  6. マツ属複維管束胚属、種子(Z区-98)
  7. コナラ、果実(Z区-32)
  8. コナラ属、果皮破片(Z区-19)
  9. ムクノキ、内果皮(Z区-93)
  10. モモ、核(Z区-32)
  11. モモ、風化核(Z区-9)
  12. ウメ、核(Z区-32)
  13. アンズ、核(Z区-9)
  14. スモモ、核(Z区-32)
  15. サクラ属、種子(Z区-32)
  16. マツザサ、種子(Z区-96)
  17. サンショウ、内果皮(Y区-27)
  18. ナツメ、核(Z区-25)
  19. センダン、核(Z区-46)
  20. ナンキンハゼ、種子(X区-12)
  21. ブドウ、種子(Z区-15)
  22. ノブドウ、種子(Z区-65)
  23. ワタ、種子(Z区-111)
  24. イネ、炭化胚乳(Y区-42)
  25. オオムギ、炭化穀果(Y区-33)
  26. オオムギ、炭化種子(Z区-106)
  27. ヤエムグラ属、炭化種子(Y区-33)
  28. アズキ、炭化種子(Y区-18)
  29. アブラナ属、炭化種子(Y区-33)
  30. カボチャ、種子(Z区-15)
  31. カボチャ、種子(Z区-22)
  32. ヒヨウタン、種子(Z区-95)
  33. メロン仲間、種子(Z区-46)
- スケールは実線が1mm、白抜き太線が10mm

# 兵庫津遺跡（第62次調査）出土鍛冶関連遺物の分析調査

日鉄住金テクノロジー(株)

大澤正己・鈴木瑞穂

## 1. 調査に至る経過

兵庫津遺跡は神戸市兵庫区に所在する。第62次調査地区からは江戸期の町屋と街路跡が確認されている。町屋内には鍛冶炉跡が検出された建物があり、周辺構造からも鉄滓・羽口などの鍛冶関連遺物が多数出土する。このため、当地域での鉄器生産の実態を検討する目的から調査を行う運びとなった。

## 2. 調査方法

### 2-1. 供試材

Table1に示す。鍛冶関連遺物計20点の調査を行った。

Table1 供試材の履歴と調査項目

符 号	出土遺構	遺物名	年 代	計測値		メタル 度	調査項目						鍛造割合(%)	
				大きさ(mm)	重量 (g)		マクロ 組織	副組織 組織	ビンカー 試験面	X線 回折	EPMA	化学 分析	耐火度	
1	SK1206	純形鍛治治		195.2 × 161.3 × 81.0	2115.0	なし	○	○			○		14-1	75 × 4.2 × 0.25
2		純形鍛治治		167.4 × 148.5 × 104.0	1588.0	なし	○	○			○		14-2	55 × 3.7 × 0.25
3		純形鍛治治		176.5 × 155.0 × 90.0	1669.0	なし	○	○		○	○		14-3	40 × 3.4 × 0.25
4		純形鍛治治		136.7 × 112.0 × 75.7	659.0	なし	○	○			○		14-4	38 × 3.3 × 0.20
5		純形鍛治治		138.7 × 121.3 × 65.0	664.0	なし	○	○			○		14-5	32 × 3.1 × 0.15
6		純形鍛治治		868.5 × 61.8 × 38.2	142.2	なし	○	○			○		14-6	18 × 1.4 × 0.15
7	SE1202	純形治		76.8 × 50.3 × 51.7	153.8	なし	○				○	○	16-1	91 × 3.8 × 0.20
8	SK1206	純形治		76.8 × 50.3 × 51.7	153.8	なし	○				○	○	16-2	42 × 2.9 × 0.20
8-2		純形治		90.1 × 64.5 × 47.8	167.3	なし	○				○	○	16-3	45 × 2.8 × 0.25
9	SB1204	鉄片		114.0 × 75.2 × 51.6	270.9	なし	○			○	○	○	16-4	36 × 2.8 × 0.20
10	SK1205	鉄片		127.1 × 77.4 × 56.3	212.8	なし	○				○	○	16-5	33 × 2.8 × 0.20
11	SK1322	再結合治		90.9 × 72.7 × 39.5	152.1	なし	○	○			○	○	16-6	20 × 2.7 × 0.15
12		純形鍛治治		67.5 × 41.7 × 31.6	78.6	なし	○	○			○	○	17-1	30
13	SK1206	純形治		43.0 × 40.2 × 37.5	65.0	なし	○	○			○	○	17-2	26
14	SK1322	鍛造片		-	-	なし	○	○			○	○	17-3	23
15		純形治		-	-	なし	○	○			○	○	17-4	15
16	SK1213	鍛造片		-	-	なし	○	○			○	○	17-5	12
17		純形治		-	-	なし	○	○			○	○	17-6	09
18	SK1211	鉄鉗		102.2 × 32.2 × 22.3	49.0	M(O)	○	○	○		○		17-7	25
19	SD1011	鉄鉗		119.0 × 52.7 × 26.6	130.3	L(●)	○	○	○		○		17-8	22
													17-9	14
													17-10	12
													17-11	10
													17-12	12

### 2-2. 調査項目

#### (1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を記載した。

#### (2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全像を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は、広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

#### (3) 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μmと1 μmで順を追って研磨している。なお、3%ナイトル(硝

酸アルコール液)を腐食(Etching)に用いた。

(4) ピッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物と、金属鉄の組織同定を目的として、ピッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50~200gfで測定した。

(5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素(SiO<sub>2</sub>)、酸化アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K<sub>2</sub>O)、酸化ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)、酸化クロム(Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、五酸化燐(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO<sub>2</sub>)：ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(7) 耐火度

主に炉材の性状調査を目的とする。耐火度は、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示される。胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当たり10°Cの速度で温度1000°Cまで上昇させ、以降は4°Cに昇温速度を落し、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示している。

### 3. 調査結果とまとめ

兵庫津遺跡から出土した江戸期の町屋跡に関連する鍛冶関連遺物の調査結果から、次の点が明らかとなった。

(1) 今回分析調査を実施した鉄滓(No1~6, 12, 13)は、いずれも製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源のチタン(TiO<sub>2</sub>)の影響がほとんどなく、鍛鍊鍛冶滓に分類される。さらに鍛造剥片(No14, 16)、粒状滓(No15, 17)といった、熱間での鍛打作業に伴う微細な鍛冶関連遺物も多数確認された。製鍊工程で生じる不純物を含まない鉄素材、または廃鉄器などを鍛冶原料として、熱間で鍛造鉄器が製作されていたと推定される。

また滓中には微細な金属鉄やその錆化物が含まれるものがある。後述する船釘(No18, 19)と共に通する軟鉄もみられる(No2)が、比較的炭素含有率の高い銅(No3, 5)も確認された。これらの特徴から遺跡周辺では、船釘のような軟鉄材を鍛打成形するのみの量産型の製品のみでなく、焼き入れ硬さ等が要求される利器の製作も行われたと推測される。

(2) 船釘(No18, 19)はとともに、折り返し鍛鍊が施された軟鉄材を、熱間で鍛打成形した鍛造製品であった。鉄中の非金属介在物は鍛鍊鍛冶滓と同様の組成で、熱間での鍛冶加工

に伴う鉄素材の酸化や折返し鍛錬時の鍛接剤（粘土汁・蒸灰など）によるものと判断される。ただし船釘（No19）中の非金属介在物では、微量チタン（ $TiO_2$ ）が検出された。製鉄原料（砂鉄）の影響を若干残している可能性も考えられる。

(3) 羽口（No7、8、8-2）は、表面のガラス質滓中に微細な金属鉄粒、または鉄素材の酸化に伴い生じたと推定される鉄酸化物の結晶が確認された。この特徴から、いずれも鍛造鉄器製作に用いられた鍛冶羽口と推定される。耐火度は1290～1330°Cであった。近世の鍛冶羽口としては一般的な性状といえる。

一方、炉材2点のうち1点（No9）の表層ガラス質滓中には、非常に微細な金属銅が複数溶着している。銅細工など非鉄金属製品も製作されていた可能性を考えられる。残る1点（No10）は溶着金属や付着滓等が確認されず、用途の推定は困難な状態であった。ただし両者は胎土部分の化学組成や、耐火度が1120°C未満で羽口もより耐火性が低いことなど、材質的には共通性が高い。類似した用途の炉材の一部であった可能性は考えられる。

#### （注）

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

(2) 粒状滓は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である

(3) 鍛造洞片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。

鍛造洞片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite:  $Fe_2O_3$ ）、中間層マグнетイト（Magnetite:  $Fe_3O_4$ ）、大部分は内層ウスタイト（Wustite:  $FeO$ ）の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450°Cを越えると存在しなく、ウスタイト相は570°C以上で生成されるのはFe-O系平衡状態図から説明される。<sup>(注5)①</sup>

(4) 特殊金属探知機の詳細な仕様は、以下の文献に記載されている。またTable1のメタル度とは、金属関係の遺物内部の金属残存状態を非破壊で推定するために調整された、特殊金属探知機を使用した判定法のことである。感度は三段階[H: high (○)、M: middle (◎)、L: low (●)]に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。

穴澤義功「鉄生産遺跡調査の現状と課題－鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について－」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』(社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム 鉄関連遺物分析評価研究グループ 2005

(5) 森岡進ら「鉄鋼腐食科学」「鉄鋼工学講座」11 朝倉書店 1975

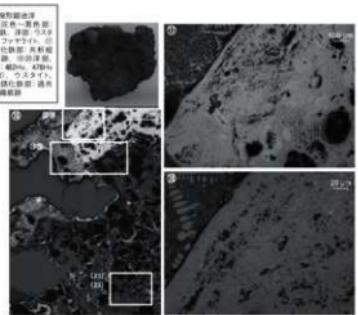
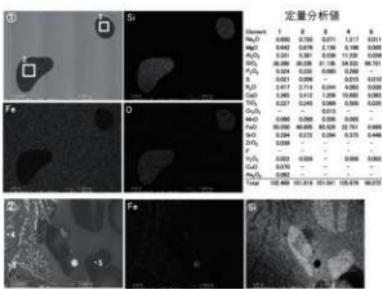
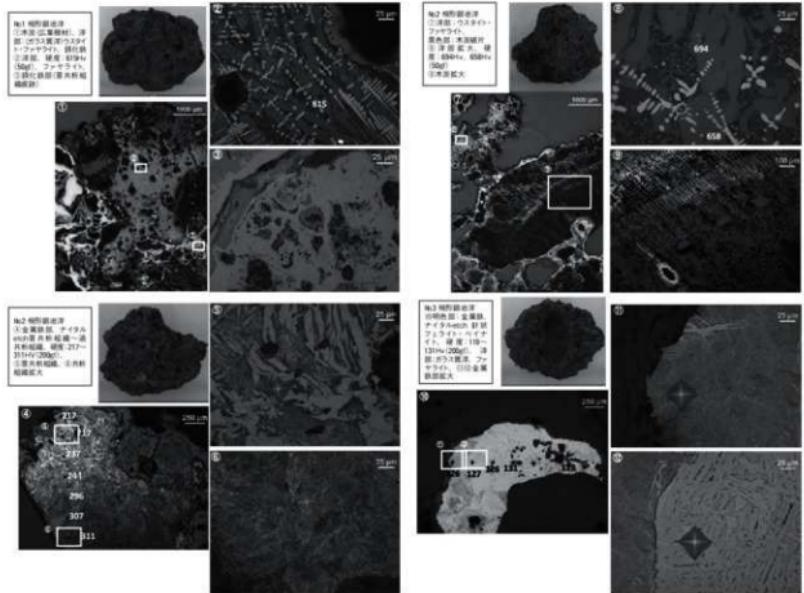
Table2 供試材の化学組成

番号	出土遺物	遺物名	年代	化学組成(%)												$\Sigma$										
				Fe	Mn	Al	Si	Ca	Mg	Na	K	Cr	Co	Ni	C	Ti	Others	Total	Fe							
1	塙田遺跡			34.7	0.13	24.0	23.0	30.0	5.18	2.80	0.92	2.25	1.11	0.29	0.12	-0.01	0.02	1.69	62.1	0.01	-0.01	-0.01	-	0.27	1.26	0.00
2	塙田遺跡			40.3	0.11	9.7	50.0	14.0	2.5	0.69	0.18	0.74	0.36	0.08	0.06	-0.01	0.07	0.40	1.94	0.01	0.01	-0.01	-	19.30	0.01	0.00
3	SK2306	塙田遺跡		41.18	0.23	27.5	20.0	25.2	2.81	2.28	0.62	1.89	0.61	0.14	0.11	-0.01	0.05	0.84	1.06	0.01	-0.01	-0.01	-	31.73	0.77	0.03
4	塙田遺跡			31.11	0.24	20.0	23.0	21.0	5.06	3.00	1.60	3.26	0.73	0.27	0.29	-0.01	0.09	1.68	0.25	0.01	0.01	0.01	-	48.02	1.54	0.09
5	塙田遺跡		江	46.05	0.17	29.17	36.25	19.71	3.10	2.24	0.36	1.56	0.45	0.22	0.12	-0.01	0.04	0.64	0.64	0.01	-0.01	-0.01	-	27.82	0.56	0.03
6	塙田遺跡			47.07	0.13	40.50	22.0	25.54	4.28	1.95	0.54	2.91	0.30	0.12	0.18	-0.01	0.02	0.45	0.22	0.01	-0.01	-0.01	-	36.01	0.74	0.04
7	SK2302	塙田1	J	2.03	0.10	0.51	2.50	7.00	13.15	1.13	0.42	2.42	1.12	0.05	0.03	-0.05	0.09	0.18	2.00	0.02	-0.01	-	-	129.0	92.92	38.20
8	塙田1			1.71	0.09	0.78	1.45	7.00	14.33	0.73	0.20	2.31	1.17	0.02	0.04	-0.02	0.05	0.11	2.00	0.01	-0.01	-	-	130.0	91.78	33.67
8-2	SK2306	塙田1	新	2.71	0.08	0.70	2.00	7.45	13.67	1.01	0.35	2.32	1.01	0.05	0.02	-0.03	0.05	0.12	2.00	0.01	-0.01	-	-	129.0	92.62	34.17
9	SK2304	塙田1		2.30	0.09	0.92	2.14	70.32	14.47	0.97	0.80	3.75	2.55	0.10	0.31	-0.03	0.00	0.28	2.00	0.01	-0.01	-	-	112.0	92.66	40.87
10	SK2305	塙田1		2.96	0.07	0.68	2.04	69.39	14.00	0.68	1.18	3.84	2.37	0.15	0.47	-0.09	0.01	0.20	2.00	0.01	-0.01	-	-	112.0	92.43	40.17

Table3 出土遺物の調査結果のまとめ

番号	出土遺物	遺物名	年代	化学組成(%)												所見	
				Total	Fe	FeO <sub>n</sub>	磁性鐵	Ti	V	Mn	磷	氯	Cu				
1	塙田遺跡			ガラス質	漂浮	W + F	本赤片(玄武岩質)	34.57	21.30	3.78	0.13	0.01	0.24	43.17	0.01	鏡鍊鐵治作	
2	塙田遺跡			硝化銅	漂浮	無	無	48.03	58.18	0.86	0.09	0.01	0.08	19.39	0.01	鏡鍊鐵治作(全銅鉄 C : 0.4~1.0%の質)	
3	SK2306	塙田遺跡		ガラス質	漂浮	W + F	本赤片(玄武岩質)	41.18	29.28	2.90	0.11	0.01	0.14	31.73	-0.01	鏡鍊鐵治作(全銅鉄 C : 0.25%前後の質)	
4	塙田遺跡			漂浮	W + F	硝化銅	無	31.11	21.28	6.60	0.29	0.01	0.27	46.62	-0.01	鏡鍊鐵治作	
5	塙田遺跡			漂浮	W + F	硝化銅	無	46.65	34.32	2.80	0.13	0.01	0.12	27.82	0.01	鏡鍊鐵治作	
6	塙田遺跡			漂浮	W + F	無	無	47.07	12.01	2.49	0.18	0.01	0.12	35.01	-0.01	鏡鍊鐵治作	
7	SK2302	塙田1		内面表層	ガラス質	漂浮	無	2.43	2.76	1.55	0.65	0.02	0.05	92.92	-0.01	鏡鍊鐵治作(鏡鍊鐵治作用に用いられた鋳物 大きさ : 250)	
8	塙田1			外表面	ガラス質	漂浮	(Mn + Fe)	1.71	1.45	0.93	0.56	0.01	0.02	91.78	-0.01	鏡鍊鐵治作(鏡鍊鐵治作用に用いられた鋳物 大きさ : 230)	
8-2	SK2306	塙田1	江	外表面	ガラス質	漂浮	(Mn + Fe)	2.71	2.98	1.30	0.62	0.01	0.05	92.62	-0.01	鏡鍊鐵治作(鏡鍊鐵治作用に用いられた鋳物 大きさ : 120)	
9	SK2304	塙田1	J	内面表層	基盤部	ガラス質	漂浮	2.30	2.14	1.77	0.31	0.01	0.10	92.66	-0.01	鏡鍊鐵治作(手工作はみられないが、材質的には手作 用である可能性がある)	
10	SK2305	塙田1	新	内面表層	基盤部	ガラス質	漂浮	2.98	3.06	2.06	0.47	0.01	0.15	92.43	-0.01	鏡鍊鐵治作(手作はみられない、鏡大きさ : 120℃)	
11	SK2322	再結合		鏡的凹凸	W + 鉄酸物	鏡鍊鐵部分		-	-	-	-	-	-	-	-	鏡鍊鐵治作遺物を多数含む再結合	
12	塙田遺跡			鏡的凹凸	漂浮	無		-	-	-	-	-	-	-	-	鏡鍊鐵治作	
13	SK2306	鏡的凹凸		鏡的凹凸	漂浮	無		-	-	-	-	-	-	-	-	鏡鍊鐵治作	
14	鏡的凹凸			鏡的凹凸	漂浮	無		-	-	-	-	-	-	-	-	鏡鍊鐵治作	
15	SK2322	再結合		1~6	3~6	3~6		-	-	-	-	-	-	-	-	無鉄の鏡打加工に伴う鏡面遺物	
16	鏡的凹凸			1~6	3~6	3~6		-	-	-	-	-	-	-	-	無鉄の鏡打加工に伴う鏡面遺物	
17	SK2313	状状物		1~4	1~5	2~2	鏡的凹凸 + F + 3~6	-	-	-	-	-	-	-	-	無鉄の鏡打加工に伴う鏡面遺物	
18	SK2311	藝術		4~6	3~6	3~6	鏡的凹凸 + 付着物	-	-	-	-	-	-	-	-	無鉄の鏡打加工に伴う鏡面遺物	
19	SK2310藝術	藝術		全金属部	フロット	單孔	合在物	W + F	-	-	-	-	-	-	-	無鉄の鏡打加工に伴う鏡面遺物	
20	SK2311藝術	藝術		全金属部	フロット	單孔	合在物	無	-	-	-	-	-	-	-	無鉄の鏡打加工に伴う鏡面遺物	

W : Wustite(FeO), He : Hematite(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>), M : Magnetite(Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>), F : Fayalite(2FeO·SiO<sub>2</sub>)



板形鋼溶接部（No.3）鉄中非金属介在物・浮遊の反射電子像（COMP）および特性X線像

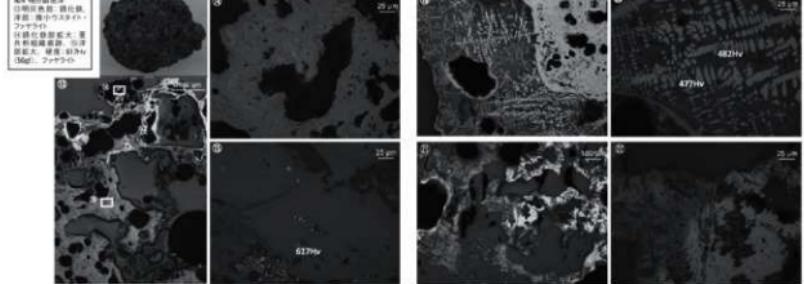


写真111 鉄製品製作関連遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果（1）

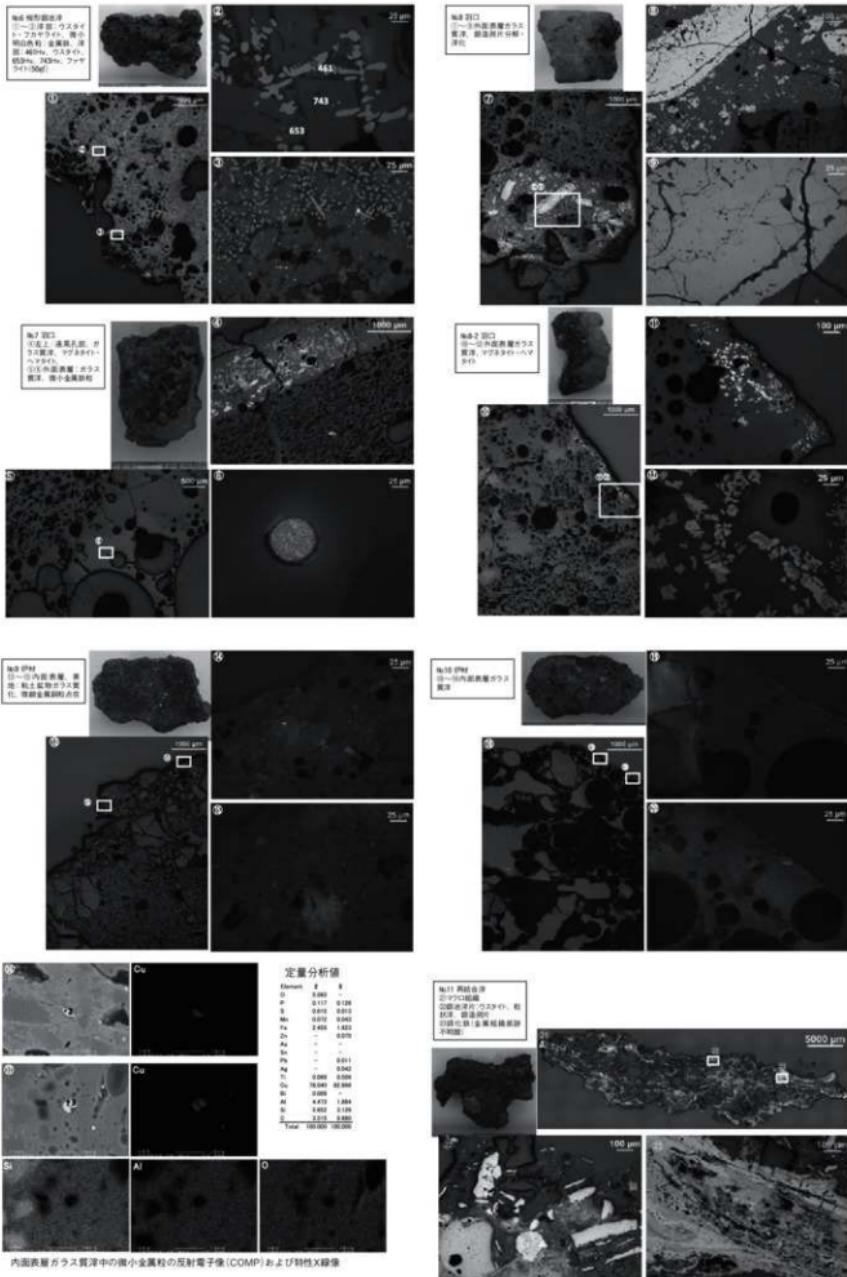


写真112 鉄製品製作関連遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果 (2)

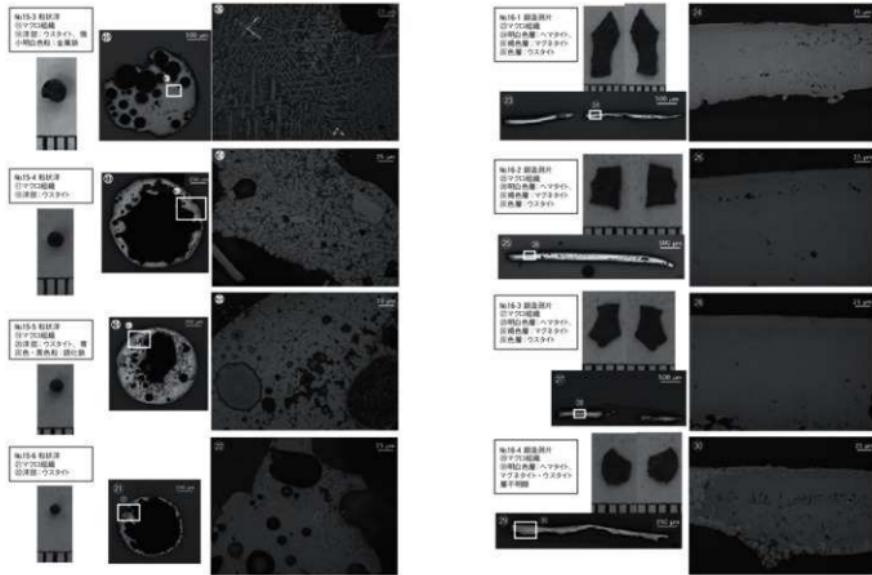
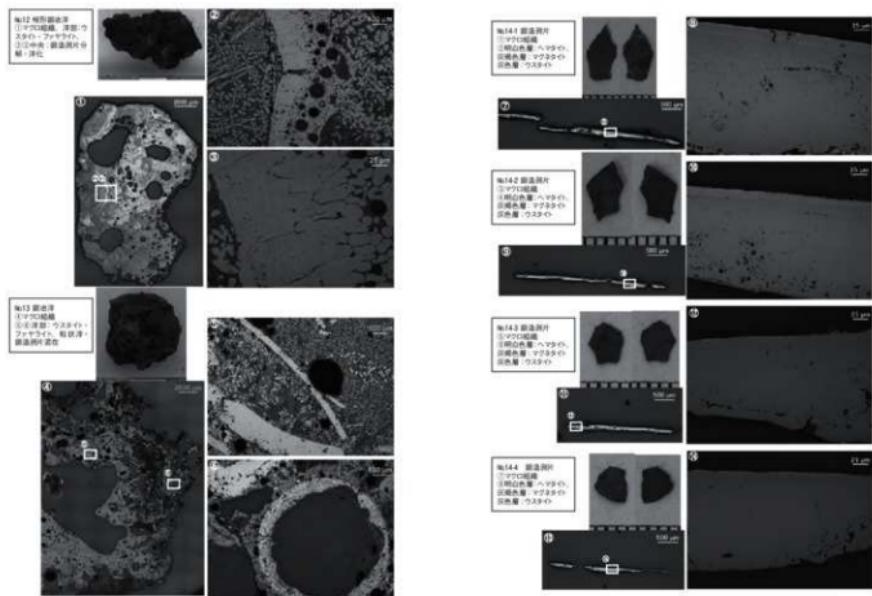


写真113 鉄製品製作関連遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果（3）

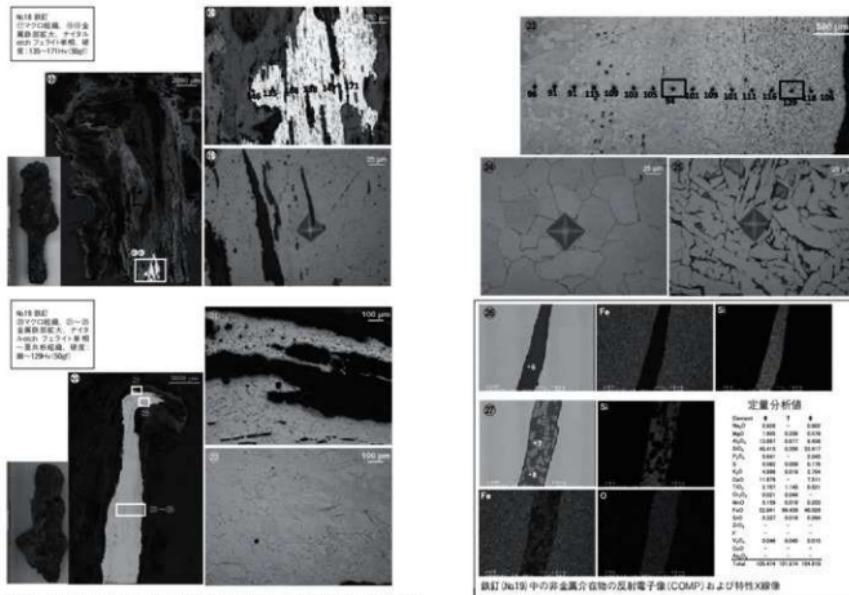
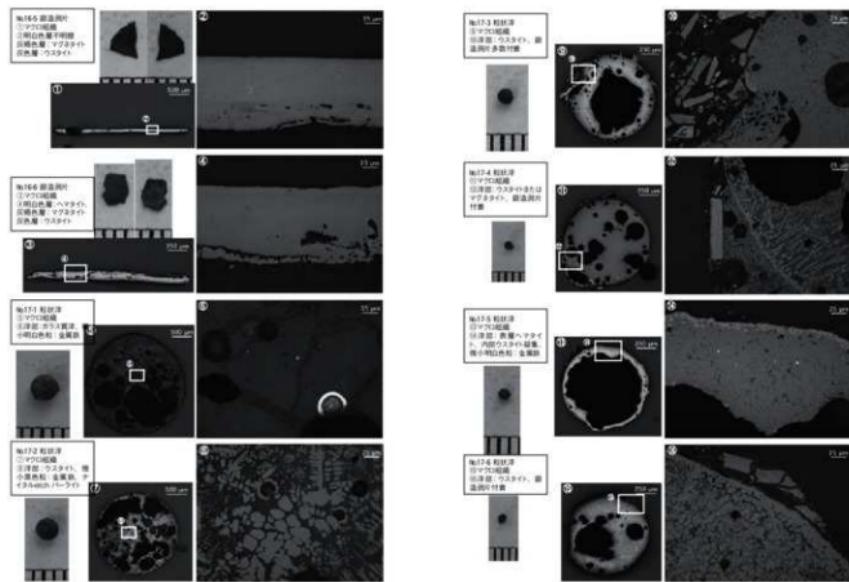


写真114 鉄製品製作関連遺物の顕微鏡組織・EPMA調査結果(4)

## (5) 兵庫津遺跡第62次調査出土の動物遺存体

丸山 真史（東海大学海洋学部）

### 1. 動物遺存体の概要

当調査では、X区・Y区・Z区の3つの調査区が設定され、近世にはX区が閑屋町、Y区が新町、Z区が兵庫城の城郭部分に相当する。動物遺存体は各調査区の遺構、遺物包含層から出土しており、サンゴやウニの仲間、貝類、脊椎動物が出土している。表1には当調査で出土した動物遺存体の種名を掲げる。

兵庫津遺跡は古代から近世の複合遺跡であるが、当調査区で動物遺存体が出土した遺構では中世・近世・近代の遺物を伴うものであり、古代はない。X区では15~16世紀の貝類が少量、17世紀前半の貝類と魚類が中心である。Y区では17世紀代が中心であり、貝類、魚類が最も多い。また、18世紀初頭前後と推定される規模の異なる複数の貝溜まりが検出された。Z区では18世紀後半から19世紀が中心であり、他の調査区に比べて爬虫類や哺乳類が多く出土している。

表35 動物遺存体の種名表

刺胞動物門 Cnidaria	
花虫綱 Anthozoa	
花虫綱の一種 Anthozoa ord., fam., gen. et sp. indet.	
イシサンゴ目 Scleractinia	
キクメノシア目 Favidae	
棘皮動物門 Echinodermata	
ウニ綱 Echinoidea	
ウニ綱の一種 Echinoidea fam., gen. et sp. indet.	
軟体動物門 Mollusca	
腹足綱 Gastropoda	
カサガイ目 Patellogastropoda	
カサガイ目の一種 Patellogastropoda fam., gen. et sp. indet.	
古腹足目 Vetigastropoda	
ミニガイ科 Hiliotidae	
クロアワビ Notohalotis discus	
アワビ属の一種 Halotis sp.	
ニシキウツガイ科 Trochidae	
キサゴ Umbonium costatum	
サザエ科 Turbinidae	
サザエ Turbo cornutus	
スガイ Lunella coronata	
登足目 Discopoda	
カワリナ科 Pleuroceridae	
カワリナ Semisulcospira bensonii	
タニシ科 Viviparidae	
マルタニシ Cipangopaludina chinensis	
タニシ科の一種 Viviparidae gen. et sp. indet.	
ウミコナ科 Batillariidae	
ウミコナ科の一種 Batillariidae gen. et sp. indet.	
タマガイ科 Naticidae	
ツメタマガイ Glossularia diadema	
ゾデボラ科 Strombidae	
シドロボラ Stombus japonicus	
オキナ科 Bursidae	
ミヤコボラ Bursidorsa rana	
フジツガイ科 Ranellidae	
ボウショウボウラ Charonia lampas	
新腹足目 Neogastropoda	
アッキガイ科 Muricidae	
アッキニシ Rapania venosa	
エゾバキ科 Buccinidae	
バイ Babylon japonica	
テングニシ科 Melongenidae	
テングニシ Hemifusus tuba	
ナガニシ Fusinus perplexus	
斧足綱 Bivalvia	
フネガイ目 Arcoida	
フネガイ科 Arcidae	
アカガイ Scapharaca broughtonii	
ハイガイ Tegillarca granosa	
フネガイ科の一種 Arcidae gen. et sp. indet.	
脊椎動物門 Vertebrata	
軟骨魚綱 Chondrichthyes	
板鰓亜綱の一種	
Elasmobranchii order, fam., gen. et sp. indet.	
エイ目 Rajiformes	
トリエイ科 Myliobatidae	
トビエイ科の一種 Myliobatidae gen. et sp. indet.	
硬骨魚綱 Osteichthyes	
ウナギ目 Anguilliformes	
アナゴ科 Congridae	
アナゴ科の一種 Congridae gen. et sp. indet.	
ハモ科 Muraenesocidae	
ハモ属の一種 Muraenesos sp.	
ニシン目 Clupeiformes	
ニシン科 Clupeidae	
マイワシ Sardinops melanostictus	
ニシン科の一種 Clupeidae gen. et sp. indet.	
カタクチイワシ科 Engraulidae	
カタクチイワシ Engraulis japonicus	
ヒソ目 Aulopiformes	
エソ科 Synodontidae	
エソ科の一種 Synodontidae gen. et sp. indet.	
カラハ目 Gadiformes	
カラハ科 Gadidae	
カラハ科の一種 Gadidae gen. et sp. indet.	
ボラ目 Mugiliformes	
ボラ科 Mugilidae	
ボラ科の一種 Mugilidae gen. et sp. indet.	
カサゴ目 Scorpaeniformes	

フサカサゴ科	Scorpaenidae	フサカサゴ科の一種	Tetraodontiformes
フサカサゴ科の一種	Synanceiidae	オニコロゼ属	Monacanthidae
オニコロゼ属	Inimicus sp.	ウマズラハギ	Thamnaconus modestus
ホウボウ科	Triglidae	カワハギ科の一種	Monacanthidae, gen. et sp. indet.
ホウボウ科の一種	Triglidae gen. et sp. indet.	フグ科	Tetraodontidae
コチ科	Platycephalidae	フグ科の一種	Tetraodontidae, gen. et sp. indet.
コチ科の一種	Platycephalidae gen. et sp. indet.	両生綱	Amphibia
アイナメ科	Hexagrammidae	無尾目	Anura
アイナメ科の一種	Hexagrammidae gen. et sp. indet.	無尾目の一種	Anura fam. gen. et sp. indet.
スズキ目	Percidae	鳥綱	Aves
スズキ科	Percichthyidae	アビ目	Gaviiformes
スズキ属	Lateolabrax sp.	アビ科	Gaviidae
ハタ科	Serranidae	アビ科の一種	Gaviidae, gen. et sp. indet.
ハタ科の一種	Serranidae gen. et sp. indet.	ミズナギドリ目	Procellariiformes
アジ科	Carangidae	ミズナギドリ科	Procellariidae
ブリ属の一種	Seriola sp.	ミズナギドリ科の一種	Procellariidae gen. et sp. indet.
アジ科の一種	Carangidae gen. et sp. indet.	カモ目	Anseriformes
イサキ科	Haemulidae	カモ科	Anatidae
イサキ科の一種	Haemulidae	カモ科の一種	Anatidae gen. et sp. indet.
コショウダイ属の一種	Plectrohinchus sp.	タカ目	Accipitriformes
タイ科	Sparidae	タカ科	Accipitridae
ヘダイ	Habdosargus sarba	キジ目	Galliformes
クロダイ属の一種	Acanthopagrus sp.	キジ科	Phasianidae
マダイ	Pagrus major	ニワトリ	Gallus domesticus
キダイ	Dentex tunifrons	キジ科の一種	Phasianidae gen. et sp. indet.
タイ科の一種	Sparidae, gen. et sp. indet.	哺乳綱	Mammalia
エフスマダイ科	Lethrinidae	霧長目	Primates
エフスマダイ科の一種	Lethrinidae gen. et sp. indet.	ヒト科	Hominidae
ニベ科	Scaenidae	ヒト	Homo sapiense
ニベ科の一種	Scaenidae gen. et sp. indet.	食肉目	Carnivora
ミシマココゼ科	Uranoscopidae	イス科	Canidae
ミシマココゼ科の一種	Uranoscopidae gen. et sp. indet.	イス	Canis familiaris
ハゼ科	Gobiidae	ネコ科	Felidae
ハゼ科の一種	Gobiidae gen. et sp. indet.	ネコ	Felis catus
カマス科	Sphyrinaeidae	偶蹄目	Artiodactyla
カマス科の一種	Sphyrinaeidae gen. et sp. indet.	ウシ科	Bovidae
タチウオ科	Trichiuridae	ウシ	Bos Taurus
タチウオ科の一種	Trichiuridae gen. et sp. indet.	イノシシ・ブタ科	Suidae
サバ科	Scombridae	シカ科	Cervidae
サバ属の一種	Scomber sp.	ニホンジカ	Cervus nippon
カツオ	Katsuwonus pelamis	ウサギ目	Ramomorpha
マグロ属の一種	Thunnus sp.	ウサギ科	Leporidae
カレイ目	Pleuronectiformes	ノウサギ	Lepus brachyurus
ヒラメ科	Bothidae	齧歯目	Rodentia
ヒラメ	Paralichthys olivaceus	ネズミ科	Muridae
カレイ科	Pleuronectidae	ネズミ科の一種	Muridae gen. et sp. indet.
カレイ科の一種	Pleuronectidae gen. et sp. Indet.	クジラ目	Cetacea
ウシノシタ科	Cynoglossidae	イルカ科	Delphinidae
ウシノシタ科の一種	Cynoglossidae. gen. et sp. indet.	イルカ科の一種	Delphinidae gen. et spindet.

## 2. 脊椎動物遺存体

脊椎動物遺存体は大量に出土しており、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類を同定した。しかし、一遺構からの出土量が少量が留まるものが多く、以下では遺構の年代が明確であり、一定の出土量がある動物遺存体について遺構別に記載する。

### 17世紀初頭

Y区で検出したSB1317では、魚類85点、哺乳類5点、計90点の種類や部位が同定できた(表36)。

魚類はエイ・サメ類が最も多く椎骨が19点出土しており、椎体横径10mm前後が2点、それ以外は10mm以下の小型個体であり、うち4点は被熱して黒色を呈する。カレイ科は9点出土しており、体長20cm以下と推定されるものが6点、それ以外は20~30cmと推定される。主上顎骨は被熱して黒色を呈する。スズキ属は8点出土しており、体長30~40cmと推定されるもの2点、その他は体長20cmに満たない小型個体である。ニシン科は7点出土しており、いずれも体長20cm以下のイワシ類であり、椎骨3点は被熱して白色を呈する。マダイは7点出土しており、体長30~40cmが大部分を占めるが、その他2点は体長20cmに満たない小型個体である。フグ科は6点出土しており、体長20~30cmの個体が2点、それ

他は20cm以下である。タチウオ科は5点出土しており、椎骨のうち2点は被熱して白色を呈する。ボラ科とタイ科が4点ずつ出土しており、ボラ科は椎骨1点が体軸に対して斜方向に切断され、タイ科は2点が体長30~40cmであり、他の2点は20cm以下の小型個体である。コチ科とウシノシタ科が3点ずつ出

土しており、コチ科は前上顎骨と歯骨が被熱して白色を呈する。ウシノシタ科は体長20~30cmである。ハモ属、ミシマオコゼ科、サバ属が2点ずつ出土している。ハモ属は全長50cm以下の小型個体であり、1点は被熱して白色を呈する。ミシマオコゼ科は体長20cm以下であり、1点は被熱して白色を呈する。サバ属は体長20cm以下の小型個体である。カタクチイワシ科、エソ科、ホウボウ科、ヘダイ、1点ずつ出土している。カタクチイワシ科は、体長20cm以下であり、被熱して白色を呈する。エソ科は体長20~30cm、ホウボウ科は体長20~30cm、ヘダイは体長30~40cmである。

哺乳類は、すべてネズミ科であり、5点が出土している。大型のクマネズミ属と思われるものが含まれ、1点は被熱して白色を呈する。

表36 17世紀初頭(Y区SB1317)

位置	大分類	小分類	部位	左	右	-	計	位置	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
-	軟骨魚綱	エイ・サメ類	椎骨	2	2		2	下	硬骨魚綱	マダイ	方骨	1			2
		ミシマオコゼ科	角骨	1	1					角骨	1				
		ウシノシタ科	椎骨	1	1					擬頸骨	1				
	硬骨魚綱	主上顎骨	1							椎骨	1				
		主鰓蓋骨	1				3			ミシマオコゼ科	前鰓蓋骨	1	1		
		フグ科	前上顎骨	1						タチウオ科	椎骨	5	5		
	合計						7			サバ属	角舌骨	1	1	2	
										カレイ科	主上顎骨	1			
										サバ属	椎骨	6	8		
焼土	軟骨魚綱	エイ・サメ類	椎骨	1	1					ウシノシタ科	歯骨	1	1		
		ホウボウ科	眼窩骨	1	1					フグ科	前鰓蓋骨	1			
		硬骨魚綱	タイ科	椎骨	2	2				サバ属	方骨	1			
	合計	カレイ科	椎骨	1	1					サバ属	椎骨	1			
							5			哺乳綱	方骨	1			
										ネズミ科	歯骨	1	1		
	合計									合計				64	
下	軟骨魚綱	エイ・サメ類	椎骨	16	16			硬骨魚綱	コチ科	椎骨	1	1			
		ハモ属	椎骨	2	2				スズキ属	擬頸骨	1	1			
			後側頭骨	1	5				マダイ	椎骨	5	5			
	ニシン科	ニシン科	椎骨	1					ヘダイ	歯骨	1	1			
		舌頭骨	1				ウシノシタ科	神経頭蓋	1	1					
		カタクチイワシ科	椎骨	1	1			哺乳綱	下頸骨	1					
	硬骨魚綱	エソ科	椎骨	1	1			スズキ属	大鰓骨	1	1				
		ボラ科	椎骨	4	4			ネズミ科	歯骨	1					
		コチ科	前上顎骨	1	2			合計					4		
	スズキ属	舌頭骨	1												13
		前鰓蓋骨	1												
		方骨	1	1											
		椎骨	1	1			7								
		歯骨	1												

## 17世紀前半

Y区で検出したSB2341イロリでは、魚類61点、鳥類2点、哺乳類23点、計86点の種類や部位が同定できた(表37)。

魚類はマダイが最も多く8点が出土しており、いずれも体長30cm以上である。ハモ属とタイ科が6点ずつ出土している。ハモ属は全長50cm以下の小型個体が1点であり、その他は80cm以上と推定される。タイ科は体長20~30cm、40~50cmが半数ずつある。カマス科が5点出土しており、体長20~30cmである。ニシン科が4点出土しており、体長20cm以下である。エイ・サメ類、コチ科、ハゼ科、ウシノシタ科、フグ科が3点ずつ出土している。エイ・サメ類のうち、1点はトビエイ科の歯板である。コチ科はそれぞれ体長20~30cm、30~40cm、40~50cmである。ハゼ科は体長20cm以下である。ウシノシタ科は椎骨1点が被熱

して黒色を呈する。フグ科は体長20cmに満たない小型個体である。アナゴ科、ボラ科、コショウダイ属、フサカサゴ科が2点ずつ出土している。アナゴ科は全長30cm以下、コショウダイ属は体長20~30cmである。ボラ科は体長20~30cmであり、椎骨1点は被熱して白色を呈する。フサカサゴ科は、それぞれ体長20~30、30~40cmであり、主上顎骨は体軸に斜方向に切断されている。マイワシ、タラ科、オニオコゼ属、アイナメ科、ハタ科、ニベ科、サバ属、ヒラメ、ミシマオコゼ科が1点ずつ出土している。マイワシは体長20cm以下、タラ科は60cm前後、オニオコゼ属は20~30cm、アイナメ科は20~30cmと推定される。ハタ科、ニベ科は被熱して白色を呈する。サバ属とヒラメは体長20cmに満たない小型個体であり、ミシマオコゼ科は体長20~30cmである。

鳥類は、キジ科とカモ科が1点ずつ出土しており、カモ科はカルガモに相当する大きさである。哺乳類はネズミ科が23点出土しており、大部分は大型のクマネズミ属と考えられる。

表37 17世紀前半の動物遺存体(Y区SB2341イロリ)

位置	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
軟骨魚綱	エイ・サメ類	椎骨		2	2		
	トビエイ科	歯板		1	1		
	ハモ属	主上顎骨		1			
	アナゴ科	前上顎骨	1		1		
	マイワシ	舌顎骨	1		1		
	ニシン科	椎骨		4	4		
	ボラ科	椎骨		2	2		
	フサカサゴ科	方骨	1		1		
	オニオコゼ属	前上顎骨	1	1			
	コチ科	椎骨		1	1		
硬骨魚綱	アイナメ科	主上顎骨	1		1		
	ハタ科	主上顎骨	1		1		
	コショウダイ属	歯骨	1	1	2		
	ニベ科	主上顎骨	1		1		
	カマス科	前上顎骨	1	1			
	サバ属	吻合		1	1		
	ヒラメ	角骨	1		1		
	ウシノシタ科	椎骨		3	3		
	フグ科	前歯蓋骨		1			
	カモ科	椎骨		1	1		
哺乳綱	ハモ属	上顎骨	1				
	マダイ	椎骨		1			
	タケ科	椎骨		1			
	マダイ	口蓋骨		1			
	ミシマオコゼ科	頭顎骨		1			
	ハゼ科	主上顎骨		1			
	ハゼ科	前上顎骨		1			
	ハゼ科	歯骨		1			
	ネズミ科	下顎骨		1			
	ネズミ科	大顎骨		1	3		
鳥綱	カモ科	対眼骨		1			
	カモ科	椎骨		1	1		
	カモ科	上顎骨	1				
	カモ科	尺骨	1	1			
	カモ科	椎骨		2			9
	カモ科	肩甲骨	1				
	カモ科	肩甲骨	1	1			
	カモ科	脛骨	1				
	カモ科	脛骨		1			
	カモ科	脛骨		1			
哺乳綱	合計			40			
	炉	硬骨魚綱	口蓋骨	1			
	炉	カマス科	椎骨		1		4
	炉	カマス科	肩甲骨	1			
	炉	カマス科	舌顎骨	1			
	合計			4			
周辺第三面 検出中	ハモ属	前頭骨					
	ハモ属	サバ属	主上顎骨	1	1		
	マダイ	角骨		1			
	タケ科	椎骨		4	4		
	鳥綱	キジ科	手根中手骨	1			
	鳥綱	ネズミ科	大顎骨	1			
	鳥綱	ネズミ科	脛骨	1			
	合計			9			

### 17世紀中葉～後半

Y区で検出したSX1301では魚類75点、両生類7点、鳥類4点、哺乳類11点、計98点の種類や部位が同定できた(表38)。

魚類は、コチ科が最も多く11点が出土しており、いずれも体長30cm以上である。フグ科が10点出土しており、体長30cm以上である。ハモ属が6点出土しており、全長50cm前後が3点、その他はそれより小型である。マダイが9点出土しており、いずれも体長30cm以上、40~50cmのものが多い。第1腹椎は体軸とは垂直方向に切断されている。エイ・サメ類が7点出土している。それらのうち1点はサメ類の歯であり、メジロザメ科に似る。コショウ

ウダイ属が5点出土しており、1点のみ体長20~30cm、その他は体長40cm前後である。ニシン科、サバ属、ウシノシタ科が3点ずつ出土している。ニシン科はイワシ類であり、体長20cm以下で、1点はマイワシに似る。サバ属は体長20cm前後、ウシノシタ科は体長20~30cmである。ボラ科、ハタ科、クロダイ属、ヒラメが2点ずつ出土している。ボラ科は体長30~40cm、50~60cm、ハタ科は30cm前後、クロダイ属は20~30cm、ヒラメは体長20cm以下の小型個体である。エソ科、アイナメ科、ブリ属、ヘダイ、タイ科、ニベ科、カマス科、ハゼ科、ミシマオコゼ科、カレイ科が1点ずつ出土している。ブリ属は体長80cm以上の大個体であり、体軸と垂直方向に切断されている。タイ科は体長50~60cm、ヘダイは40~50cm、エソ科、ニベ科、カマス科、カレイ科は20~30cm、アイナメ科、ミシマオコゼ科は20cm以下、ハゼ科は10~20cmである。

両生類は無尾目が7点出土しており、いずれもカエル類である。鳥類はニワトリが2点、カモ科が2点出土している。カモ科は1点がマガモ、もう1点はコガモに相当する大きさである。哺乳類は、ネズミ科が11点出土しており、大型のクマネズミ属が含まれる。

なお、脊椎動物ではないが、ウニ類のタコノマクラ目が1点出土している。

表38 17世紀中葉～後半 (Y区SX1301)

造構	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
ウニ綱	タコノマクラ目	殻体		1	1		
		主鰓蓋骨	1				
ハモ属	稚骨			1	3		
	歯骨	1					
ボラ科	稚骨			1			
	舌頭骨	1					
コチ科	前鰓蓋骨	1					
	副鰓蓋骨	1					
	稚骨			3	8		
	歯骨	1					
ハタ科	前鰓蓋骨	1					
ブリ属	前鰓蓋骨	1		1			
コショウダイ属	前鰓蓋骨	1					
	角骨	1					
マダイ	前上顎骨	1					
	口蓋骨	1					
	基後頭骨	1					
硬骨魚綱	方骨	1		8			
	稚骨	2					
	肩甲骨	1					
	角骨	1					
クロダイ属	方骨	1	1	2			
タイ科	稚骨				1		
ニベ科	方骨				1		
ミシマオコゼ科	前鰓蓋骨	1		1			
サバ属	主上顎骨	1					
	歯骨	1		3			
カレイ科	主上顎骨	1		1			
	主鰓蓋骨	1					
	前上顎骨	1					
フグ科	前上顎骨	1					
	前上顎骨／歯骨	1					
	尾骨	1					
	歯頭状骨	1	1	9			
	歯骨	1					
	舌頭骨	1					
両生綱	カエル類	上腕骨	1		1		
哺乳綱	クマネズミ属	下顎骨	1		2		
合計		脛骨	1		2		
西側下部	硬骨魚綱	コチ科	歯骨	1	1		
	鳥綱	ニワトリ	上腕骨	1			
合計		鳥綱	焼骨	1			
合計							4
西側トレンチ	軟骨魚綱	エイ・サメ類	椎骨				
	硬骨魚綱	ヘダイ	歯骨	1			
	鳥綱	カモ科	胸骨				
	哺乳綱	ネズミ科	上腕骨	1			
合計		鳥綱	椎骨				
下	硬骨魚綱	コショウダイ属	基蝶骨	1			
		舌頭骨	1		3		
		角骨	1				
	コチ科	稚骨					
	ハタ科	舌頭骨	1		1		
	フグ科	稚骨			1		
	両生綱	カエル類	上腕骨	1			
	鳥綱	カモ科	脛骨	1			
合計		鳥綱	脛足根骨	1			
下側	軟骨魚綱	エイ・サメ類	椎骨		2		
	硬骨魚綱	ハモ属	稚骨		2		
	哺乳綱	ネズミ科	造離角		2		
		助骨			1		
		哺乳綱	上腕骨	1			
合計							8

## 18世紀後半

Z区で検出した兵庫城の堀では、魚類6点、両生類1点、爬虫類23点、鳥類4点、哺乳類5点、計39点の種類や部位が同定できた(表39)。

魚類は、マグロ属が2点出土しており、体長100cm以上の大型個体である。椎骨1点には切傷がみられる。ボラ科、コチ科、コショウダイ属、イ属、タイ科が1点ずつ出土しており、コショウダイ属、コチ科、ボラ科は体長30~40cm、タイ科は40~50cmと推定される。

両生類はカエル類が1点出土しており、ウサガエルの大さに相当する大型個体である。爬虫類はイシガメ/クサガメ15点、スッポン8点が出土地してい。鳥類はアビ科、コウノトリ科、タカ科、キジ科が1点ずつ出土しており、キジ科はキジのメスに相当する大きさである。哺乳類はシカが4点、ネコとウシが1点ずつ出土している。

表39 18世紀後半の動物遺存体(Z区)

遺構	位置	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
兵庫城堀	下層粘土	両生類	カエル類	尺骨・桡骨	1			1
	下層粘土	鳥類	コウノトリ科	足根中足骨	1			1
	下層?(陣屋跡?)	硬骨魚類	コショウダイ属	主鰓蓋骨		1		1
	最下層(元禄期)	哺乳類	ネコ	上腕骨	1			1
堀	埋土(1面)	鳥類	キジ科	脛足根骨	1			1
	中層	哺乳類	シカ	大顎骨	1			2
	下層粘土	爬虫類	スッポン	腹甲骨板	1			1
		鳥類	アビ科	上腕骨	1			1
		哺乳類	シカ	指骨		1		1
	下層粘土層(新外堀)	爬虫類	イシガメ/クサガメ	腹甲板	1			1
	セクション	爬虫類	スッポン	寛骨	1			1
	下層粘土	硬骨魚類	コチ科	基節骨	1			1
			タイ科	椎骨		1		1
	内堀	南邊石垣前面底躍内	爬虫類	イシガメ/クサガメ	腹甲板		1	1
外堀	下層	爬虫類		上腕骨	1			
				寛骨	1			
				背甲板		3		8
				腹甲板	1	2		
	下層粘土	硬骨魚類		椎骨		1		1
				腹甲板	1			1
				腹甲骨板	1			1
				寛骨	1			1
	下層粘土セクションより北側	爬虫類		大顎骨	1			1
				背甲骨板	1			1
				背甲板	1	2		4
				腹甲板	1			1
外堀?	土橋付近粘土たまり砂層上面	爬虫類	イシガメ/クサガメ	背甲板	1			1
				腹甲板	1			1
				烏口骨	1			1
				腹甲骨板	1			2
	下層砂層 土橋北側	爬虫類	スッポン	前頭骨		1		1
				腹甲骨板	1			1
				背甲骨板	1			1
				下顎骨	1			1
	東石垣北端検出中	硬骨魚類	マグロ属	椎骨		1		1
				腹甲骨板	1			1
				背甲骨板	1			1
				椎骨		1		1
土橋南側堀	上~中層	爬虫類	スッポン	腹甲骨板	1			1
	下層粘土	硬骨魚類	ボラ科	椎骨		1		1
合計								

表40 18世紀末~19世紀前半の動物遺存体(Z区)

遺構	位置	大分類	小分類	部位	左	右	-	計
SD3101南側(II)	-	哺乳類	イノシシ/ブタ	肩甲骨	1			1
	下	爬虫類	イシガメ/クサガメ	腹甲骨	1			1
			スッポン	烏口骨	1			1
				腹甲骨板	1			2
	底部	硬骨魚類	マダイ	前頭骨		1		1
			イシガメ/クサガメ	背甲骨	1			1
			スッポン	腹甲骨板	1			1
			イヌ	下顎骨	1			1
	底面	哺乳類	イヌシシ/ブタ	上腕骨	1			1
				大顎骨	1			2
				前上頸骨	1			1
				前頭骨		1		1
SD3101(III)	底面	爬虫類	イシガメ/クサガメ	背甲板	1			1
			スッポン	腹甲骨板	1			1
			イヌ	下顎骨	1			1
			イノシシ/ブタ	大顎骨	1			2
	底面	硬骨魚類	マダイ	前上頸骨	1			1
			マダイ	前頭骨		1		1
			イシガメ/クサガメ	背甲板	1			1
			スッポン	腹甲骨板	1			1
	西側	哺乳類	ネコ	大顎骨	1			1
			マダイ	衡骨	1			1
			ネコ	掩蓋骨	1			3
				下顎骨	1			1
SD3101東側(新I)	西側掘査および(II)埋土	爬虫類	イシガメ/クサガメ	背甲板	1			1
			スッポン	腹甲骨板		1		1
			ネコ	經骨	1			1
			スッポン	下腹骨板	1	1	2	
SD3101南側(II)	西側	哺乳類	イヌ	脛骨	1			1
			ネコ	大顎骨	1			1
合計								

## 18世紀末～19世紀前半

Z区で検出した悪水抜溝では、魚類4点、爬虫類10点、哺乳類12点、計26点の種類や部位が同定できた（表40）。

魚類はマダイが3点、フグ科が1点出土している。マダイの前頭骨は正中方向に2分割されている。フグ科は体長50～60cmの大型個体である。爬虫類はスッポンが6点、イシガメ/クサガメが4点出土している。スッポンは背甲が20～30cmの大型個体と推定される。哺乳類はネコ6点、イノシシ/ブタが3点、イヌ2点、イヌ科1点が出土している。ネコの大腿骨、イノシシ/ブタの上腕骨、大腿骨は両骨端が癒合しておらず、イヌの下顎骨は第3後臼歯が萌出していない幼獣である。イヌ科の脛骨は遠位端最大幅（Bd）が32.63mmを測り、縄文や弥生時代のイヌよりも大きく、ニホンオオカミの可能性もある。

なお、19世紀中頃と推定されるSD3101（新1）下層出土のイシガメ/クサガメの背甲骨板、腹甲骨板に解体痕が認められ、食用として利用されたと考えられる。

## 3. 貝類

貝類もまた大量に出土しているが、時期が明確な遺構から一定量が出土しているものは、貝溜まりを除いて極めて少ないため、各調査区における時期別の出土量を記載する。また、貝溜まりがいくつか検出されており、ほぼ1種の貝が集中的に投棄された状況がうかがえる。トリガイが最も多く、ヤマトシジミ、キサゴ、ウミニナ科がある。

### X区（表41）

15世紀から19世紀までの遺構から出土しており、15世紀から16世紀までは出土量が少なく、17世紀初頭から前半に多くなり、それ以降は少ない。17世紀初頭から前半はアワビ類、サザエ、マガキ、ハマグリなど

表41 X区出土貝類遺存体

XIX	15～16	16後～17初	17初	17前	17	17後～18	18前	19前	19
アワビ類			1	1					
サザエ			2(1)	4(3)					
ウミニナ科			1	1					
ツメタガイ		1	2	4					
バイ			1	1					
アカニシ	3		9	2	1		1		
シドロガイ			1						
マガキ			R3	R4U1				R1	
イタボガキ科			R2U1			L2R8	U1		
トリガイ					LIR1				
ハマグリ		LIR1	R3	L3				U1	
アサリ					U1				
ヤマトシジミ			L33R35U1	LIR2					

が出土している。小規模な貝溜まりがあり、ヤマトシジミのみで最小個体数35個体を数える。また、第2遺構面で明確な掘形を検出していないが、ヤマトシジミの集積（左54右67不明1）が出土しており、17世紀初頭と推定される。また、キサゴ1種が集積するSK2212があり、1254点を数える。時期を特定できる遺物が出土していないが、検出面および周辺の遺構の年代から江戸時代中期（18世紀初頭前後？）と推定される。

### Y区（表42）

17世紀初頭から18世紀まで出土量が多く、19世紀は極めて少ない。17世紀初頭から前半はクロアワビを含むアワビ類、サザエ、ウミニナ科、ツメタガイ、アカニシ、マガキなどを含むイタボガキ科、ハマグリ、ヤマトシジミなどが出土しており、貝種は多様である。17世紀初頭には、SB1324でウミニナ科が115点と集中的に出土し、17世紀中葉にはトリガイが出土はじめると他の二枚貝は減少する。

また、トリガイ 1種が集積する貝溜まりが複数形成されており、最大規模の貝殻集積遺構は、時期を特定できる遺物が出土していないが、検出面および周辺の遺構の年代から江戸時代中期（18世紀初頭前後？）と推定される。貝溜まりdからトリガイ左殻409点、右殻429点、破片総重量12,236.5gを測る。

### Z区（表43）

17世紀は出土量が極めて少なく、18世紀後半から19世紀前半にかけて多くなり、それ以降は少ない。18世紀後半から19世紀前半では、クロアワビを含むアワビ類、サザエ、アカニシ、マガキなどを含むイタヤガイ科、ハマグリなどが出土している。

表42 Y区出土貝類遺存体

Y区	17初	17前	17中～後	17後～18前	17後～18	18後～19
クロアワビ	4	1	1		1	
アワビ類	2	2	1	1		
サザエ	4	8	3	1		1
スガイ		(1)				
イボンシ			1			
ムシロガイ		1				
カサガイ目	1					
マルニシ			1			
ウミニナ科	152	9	1			
キサゴ	1	3	1			
ツメタガイ	4	11	5	7	1	
バイ	2	1	1			
アカニシ	12	1	1	8		
テングニシ	3			2		
ナガニシ				6	1	
ボウシニウボラ	1					
ミヤコボラ					3	
シドロガイ						
ホクロガイ?		L1				
アカガイ	U1					
ハイガイ	L1					
マガキ	L3R9	L1R1	R3U1		R1	
イタボガキ	L2					
イタボガキ科	L2					
イタヤガイ	R1		L1R2	L1		
イタヤガイ科		L2				
トリガイ			L14R18	L13R19U1	L13R140	
ハマグリ	L5R8U1	L4R3U1	L1R1			
アサリ	L3R3	L1				
ヤマトシジミ	L1R3U1	L2	L19R10			

表43 Z区出土貝類遺存体

Z区	17前	18後	18後～19前	19	19後以降
クロアワビ			1		1
アワビ類		1	2	2	
サザエ	3	1			
カワニナ科	1				
タニシ科	1				
ツメタガイ			1		
バイ			1		3
アカニシ	2	20	11	5	
テングニシ		1	1(1)	1	
ミヤコボラ				1	
アカガイ	L1		R1	L1	
ネネガキ科	U1				
イガイ			L1R1U1	?U3	
マガキ	L4R4U4	L3			
イタボガキ科	L2R3	L1U3		R1	
イタヤガイ	L1R1			L1	
イタヤガイ科	L1				
タマカギ科				R1	
トリガイ			R3		
ウチラサキ			L1		
ハマグリ	L5R2U1	R2		L1	
マシジミ?	L1			L1	
ヤマトシジミ	L1				

4. 兵庫津遺跡におけるトリガイの大量廃棄の意義  
当調査Y区において、トリガイが大量に出土した。トリガイ 1種の貝殻集積遺構が複数形成されており、最小個体数にして991個体を数え、殻頂が破損した破片を含めた総重量約36kgを量る（表42）。年代を示す遺物が出土していない貝溜まりもあるが、おおよそ17世紀中頃から18世紀前半までの所産と推定される。貝殻集積遺構にはトリガイを主体とするもの以外に、ウミニナ科、キサゴ、ヤマトシジミの各種が見られる。トリガイ以外はいずれも小型の貝種である

り、1個体あたりの肉量が少ないため、出汁をとるため、あるいは塩ゆで、佃煮のような調理法によって、一度にまとまった量を使用することは現代でも珍しくない。トリガイは足の部分が可食部となるが、自家消費として一度に大量に利用することはない。

兵庫津遺跡第2次、第14次、第57次調査でもトリガイが出土しており、京都や大坂などの近世都市に一般的な消費地（屋敷地）とは性格が異なる廃棄物が含まれていることや、トリガイの剥き身製造により生じた廃棄物であることを指摘している（注、丸山2012・2014、丸山・岡田2011、丸山・松井2010）。当調査で検出したトリガイの貝溜まりdは、第2次、第14次調査をはるかに凌ぐ出土量であることからも、町屋における一般的な食料残滓とは考えにくい。京都、大坂、江戸などの近世の屋敷地のゴミ穴から出土する食料残滓は、アワビ類、サザエ、アカニシ、アカガイ、カキ類、ハマグリ、シジミ類などの貝種が混在して出土する傾向がある。日常的な食事や宴会において1種類の貝を大量に消費することは考えにくく、その1種類を利用することに目的があったと考えるのが自然であり、従来から指摘するようにトリガイの剥き身製造の残滓と考えられる。文献では、17世紀中頃から18世紀前半における当地の所有者は明らかではないが、水産業に関連した町屋が営まれたことが想定される。

当調査では17世紀中頃から18世紀前半頃にトリガイが投棄されたと考えられ、その前後の時期には全く認められない。第14次・第57次調査では17世紀後半から18世紀に、それぞれでトリガイが集中的に投棄されている。一方、第2次調査は、兵庫津の町場が拡大して形成された西出町にあたり、18世紀後半～19世紀前半の造成土にトリガイが大量に含まれていた。トリガイは、アサリやハマグリなどに比べて、やや深いところに生息しており、漁獲には網籠などが使用される。「日本山海名産図会」には、江戸時代の尼崎におけるトリガイ漁の風景として、帆を張った小舟が網籠を引く様子が描かれる（藤1979）。そのほかにも『和漢三才図会』など18世紀代の文献には、尼崎がトリガイの産地であると記される（和漢三才圖會刊行委員会1970）。尼崎では平安時代中期の金楽寺貝塚、同後期から鎌倉時代の大物遺跡でアカガイやヤマトシジミなど大量の貝類が出土しているが、トリガイはみられない（尼崎市教育委員会社会教育課編1982、尼崎市教育委員会編2005）。阪神間でトリガイが出土するのは中世からあり、西宮神社社頭遺跡の出土例が古いが（丸山2011）、出土量はそれほど多くない。阪神間において特に尼崎でトリガイが多産することが18世紀に文字として記録されたが、実際には兵庫津でもトリガイを盛んに利用していたことが当調査において明らかになったと言える。

## 5.まとめ

本調査では、15世紀から19世紀の遺構、遺物包含層から大量の動物遺存体が出土した。貝類と魚類が中心であり、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類が含まれており、主要な資料について記載を行った。特に注目されるのは、Y区において貝殻集積遺構が検出され、なかでもトリガイ1種による大規模な集積は、当遺跡の既存の調査においても指摘されるトリガイの剥き身製造として注目される。文字資料として残されなかった兵庫津におけるトリガイの盛んな利用を物語る貴重な資料である。

## 注

大阪市堂島藏屋敷跡DJ08-2次調査では100個体以上のトリガイが出土しており、水揚げ地において剥き身が製造された、あるいは自家消費されたと考えられている（池田2010）。

## 参考文献

- 尼崎市教育委員会社会教育課編1982『尼崎市金楽寺貝塚Ⅱ』尼崎市教育委員会社会教育課  
尼崎市教育委員会編2005「大物遺跡出土の人骨および動物遺存体について」「尼崎市埋蔵文化財調査年報平成7年度(6)」尼崎市教育委員会  
池田研2010「堂島藏屋敷跡B地点(DJ08-2次) 調査出土の貝類について」「堂島藏屋敷跡Ⅲ」(財)大阪市文化財協会pp. 78-86  
竹内若校訂1943「毛吹草」新村出校閲 岩波書店  
丸山真史2011「西宮神社社頭遺跡から出土した動物遺存体」「西宮神社社頭遺跡」兵庫県教育委員会pp. 49-54  
丸山真史2012「近世の兵庫津における水産物利用」「ビオストーリー」vol.17生き物文化誌学会pp. 86-99  
丸山真史2014「兵庫津遺跡第57次調査出土の動物遺存体」「兵庫津遺跡第57次調査報告書」神戸市教育委員会pp. 97-108  
丸山真史・松井章2010「兵庫津遺跡第14次調査出土の動物遺存体」「兵庫津遺跡発掘調査報告書第14・20・21次調査」第1分冊 神戸市教育委員会pp. 353-386  
丸山真史・岡田章一2011「兵庫津遺跡西出地区の動物遺存体」「研究紀要」第4号、兵庫県立考古博物館pp. 35-46  
藤間月1979「日本山海名産図会」名著刊行会  
和漢三才圖會刊行委員会1970「和漢三才圖會」上 東京美術



写真115 トリガイ



写真116 カメ腹甲傷

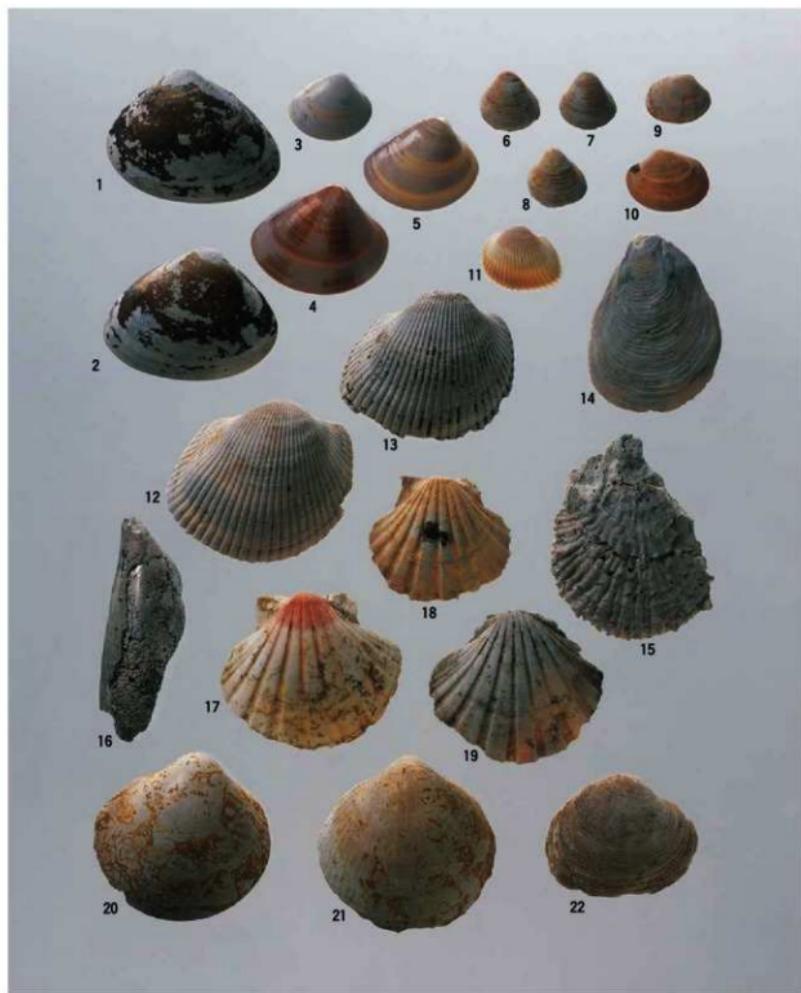


写真117 二枚貝

1~5 ハマグリ 6~8 ヤマトシジミ 9,10 アサリ 11 ハイガイ 12,13 アカガイ 14,15 マガキ 16 イガイ 17~19 イタヤガイ 20,21 トリガイ 22 ウチムラサキ



写真118 卷貝(大型)

1~3 サザエ 4,5 クロアワビ 6~8 アカニシ 9 ボウシュウボラ



写真119 卷貝（小型～中型）・爬虫類

1,2 ツメタガイ 3,4 ウミニナ科 5,6 キサゴ 7,8 バイ 9 テングニシ 10 ナガニシ 11～14 スッポン（11内腹骨板 12剣腹骨板 13下腹骨板 14鳥口骨） 15～18 イシガメ／クサガメ（15中腹骨板 16下腹骨板 17剣腹骨板）



写真120 魚類

1 トビエイ科 2,3 エイ・サメ類(椎骨) 4,5 ボラ科(4主鰓蓋骨 5椎骨) 6,7 カツオ(6椎骨 7歯骨) 8,9 タチウオ科(椎骨) 10,11 ウシノシタ科(椎骨) 12,13 アナゴ科(12歯骨 13舌頭骨) 14 カワハギ科(棘) 15 ニベ科(歯骨) 16,17 サバ属(16主上顎骨 17歯骨) 18,19 カマス科(舌頭骨 19口蓋骨) 20,21 ハタ科(20前上顎骨 21主鰓蓋骨) 22 カレイ科(主上顎骨) 23,24 スズキ属(角骨) 25 オニオコゼ科(前上顎骨) 26 コショウダイ属(角骨) 27 コロダイ属(前上顎骨) 28,29 ミシマオコゼ科(28角骨 29前鰓蓋骨) 30 ホウボウ科(歯骨) 31~33 ハモ属(31前上顎骨・鰓骨・鰓骨板 32主上顎骨 33舌頭骨 34椎骨) 35~37 コチ科(35方骨 36角骨 37前鰓蓋骨) 38,39 フサカサゴ科(38角骨 39歯骨) 40 キダイ(歯骨) 41,42 クロダイ属(41前鰓蓋骨 42歯骨) 43~46 マダイ(43前頭骨 44主上顎骨 45,46前上顎骨) 47,48 ヘダイ(47前上顎骨 48歯骨) 49 マグロ属(椎骨) 50 ヒラメ(方骨) 51 ブリ属(前鰓蓋骨) 52 タラ科(椎骨) 53~55 フグ科(53主上顎骨 54尾骨 55前上顎骨)



写真121 鳥類・小型哺乳類

1 コウノトリ科(足根中足骨) 2 ミズナギドリ科(手根中手骨) 3 キジ科(手根中手骨) 4,5 カモ科(手根中手骨) 6 ニワトリ(足根中足骨) 7 タカ科(尺骨) アビ科(上腕骨) 9,10 イヌ(9下頸骨 10脛骨) 11~13 ネコ(11下頸骨 12,13上腕骨) 14,15 ノウサギ(上腕骨)



写真122 中型・大型哺乳類

1,2 ウシ (1角突起 2寛骨) 3~5 シカ (3橈骨 4中手骨 5脛骨) 6 イノシシ/ブタ (大腿骨)

## 兵庫津遺跡第62次調査に伴う土壤分析業務

応用地質株式会社

### 1 調査の目的

本業務は、兵庫津遺跡第62次調査に伴い、原位置試験および試料採取、土質試験を行い、個々の調査結果を整理するとともに、今後の土壤分析計画に必要な基礎資料を得ることを目的とした。

### 2 調査対象

兵庫津遺跡第62次調査において出土した近世町屋および街路の造成土。(調査各項目に詳細を記載)

### 3 調査方法

#### 3. 1 簡易支持力測定(キャスボル)

『キャスボル』は国土交通省近畿地方整備局近畿技術事務所と株式会社浅沼組と株式会社マルイの共同開発したものである。簡易支持力測定器(キャスボル)は、地盤の支持力を即座にしかも簡単に測定できるので、施工の効率化と省力化を図ることが可能である。

#### 3. 2 室内土質試験

室内土質試験は、地盤材料の物理特性を把握し、将来的に実施する土壤分析のための基礎資料を得ることを目的として実施した。

試験内容は日本工業規格(JIS)に基づき、現地より採取した試料を用いて実施した。土質材料は、土粒子・水・空気の三相から成り、それぞれが構成する比率の程度や土粒子の物理的性質によって土材料の圧縮性や強度特性が大きく異なる。土粒子は、その大きさによって礫、砂、シルト、粘土に分けられている。粒度は、土粒子径の分布状態を全質量に対する百分率で表したものであり、礫・砂分(粗粒分)については網ふるいを用いて行い、シルト・粘土分(細粒分)については比重浮ひょうを用いた沈降法による。試験方法は、JIS A 1204に準じる。

#### 3. 3 三軸透水試験(変水位法)

道路盤と考えられる地盤の透水係数を測定し、透水性に対する特徴の比較を行った。透水試験は、通常JIS A 1218に示されているような金属円筒に試料をおさめ、試料内を浸透する水量と時間ならびに動水勾配の関係から透水係数を決定する。しかし当該地の試料は固結度も低く、礫の混入も多いことから、三軸透水試験によって原位置に近い応力状態を再現し、より正確な透水性の把握を行った。

#### 3. 4 三軸圧縮試験(CD条件)

道路盤と考えられる地盤の圧縮強度を測定し、力学的性質の比較を行った。三軸圧縮試験は、一定の等方応力を作用させ、これに加えて長軸方向に圧縮応力を作用させ破壊させる試験である。等方応力段階を圧密過程、圧縮応力を作用させる段階を軸圧縮過程と呼び、これらが排水状態で行われるかどうかによって三つに分類されるが、今回は圧密排水試験(CD試験)を実施した。本試験は主に砂質土を対象とした試験であり、地盤が圧密され強度増加した後に、地盤内に過剰間隙水圧が生じない条件でせん断される場合の圧縮強さを

求めるために行う。試験はJGS T 524に準じて行った。

### 3.5 土層の顕微鏡観察

道路盤の一部より一定量のサンプリングを行い、薄片プレパラートを作製し、顕微鏡下で土層構造および鉱物組成を分析した。試料の構成物質の種類や組織を検討するために、薄片（大型薄片）を作成し、これを用いて岩石鑑定を行った。

## 4. 調査結果

### 4.1 簡易支持力測定（キャスボル）

#### (1) 測定位置

簡易支持力測定（キャスボル）は、表44に示す地点で実施した（図37・52参照）。

#### (2) 測定結果

簡易支持力測定（キャスボル）の結果は、表45に示すとおりである。

#### (3) 考察

簡易支持力測定試験（キャスボル）から得られるインパクト値（Ia）を用いて 各種の地盤の強度特性値を算出し、その結果について考察する。なお、各強度特性値との関係式は表46に示すとおりである。

表46に示す関係式より算出した各地点の強度特性を表47に示す。

後述する室内土質試験結果より、対象土は主として砂質土であることから、ここでは、各種地盤強度のうち、一般に砂質土の土木工学的な指標となる「せん断抵抗角（ $\phi$ ）」に着目して考察を行った。

せん断抵抗角  $\phi$  は、町屋部が最も低く、大手道街路が最も高い値を示した。特に街路1ではNo.6地点を除くと、 $\phi = 32 \sim 42$  (°) の範囲にあり、これは土としては「中位～非常に密な」に区分される。

また、図44に示すように、各街路を対象として、深度No.を縦軸に、せん断抵抗角を横軸に整理したグラフをみると、上位のユニットほど値が大きくなる傾向

表44 簡易支持力測定位置一覧表

地点名	ユニット数	備考
街路1	7箇所	
SB2441町屋	2箇所	床部、土間部
Y区ロ-1街路2	4箇所	
合計	13箇所	

表45 簡易支持力測定結果一覧表

地点名	Ia：インパクト値	備考
街路1 №1	27.5	
街路1 №2	25.6	
街路1 №3	27	
街路1 №4	23.3	
街路1 №5	22.5	
街路1 №6	12.9	測定時に地盤が破壊
街路1 №7	17	
SB2441 床	7.3	
SB2441 土間	9.3	
Y区ロ-1街路2 №1	20.7	
Y区ロ-1街路2 №2	20.1	
Y区ロ-1街路2 №3	24.3	
Y区ロ-1街路2 №4	15.8	

表46 強度特性値の関係式一覧

強度特性値	記号	単位	関係式
粘着力	C	kN/mf	$C=0.785+7.073^{\circ}\text{fa}$
せん断抵抗角	$\phi$	°	$\phi=15.8+0.974^{\circ}\text{la}$
CBR	-	%	$\text{CBR}=-4.945+1.615^{\circ}\text{la}$
地盤反力係数	$K_a$	MN/mf	$K30=-37.58+8.554^{\circ}\text{la}$
コーン指數	qc	kN/mf	$q_c=-354.1+124.3^{\circ}\text{la}$

表47 各地点の強度特性値一覧

地点名	No.	Ia	C(kN/mf)	$\phi$ (度)	CBR (%)	$K_a$ (MN/mf)	qc (kN/mf)
街路1	№1	27.5	195.29	41.97	39.47	197.66	3064.15
	№2	25.6	181.85	40.11	36.40	181.40	2827.98
	№3	27.0	191.76	41.48	38.66	193.38	3002.00
	№4	23.3	165.59	37.87	32.68	161.73	2542.09
	№5	22.5	159.93	37.10	31.39	154.89	2442.65
	№6	12.9	92.03	27.74	15.89	72.77	1249.37
	№7	17.0	121.03	31.74	22.51	107.84	1759.00
SB2441町屋	床	7.3	52.42	22.29	6.84	24.86	553.29
	土間	9.3	66.56	24.24	10.07	41.97	801.89
Y区ロ-1街路2	№1	20.7	147.20	35.34	28.49	139.49	2218.91
	№2	20.1	142.95	34.76	27.52	134.36	2144.33
	№3	24.3	172.66	38.85	34.30	170.28	2666.39
	№4	15.8	112.54	30.57	20.57	97.57	1609.84

が認められる。なお、前述したように地盤材料の特性には大きな差が認められない（いずれも似たような粒度特性を持つ砂・砂質土から構成される）。

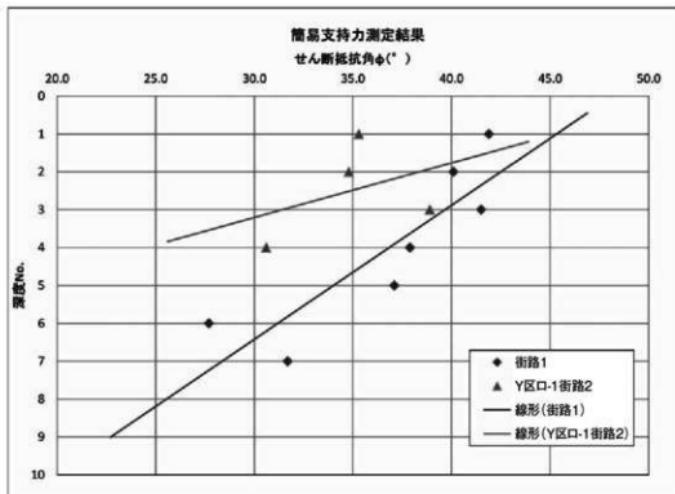


図147 各街路におけるせん断抵抗角の分布範囲

#### 4. 2 室内土質試験

##### (1) 試験位置

室内土質試験は、表48に示す地点（図37・52参照）で採取した、乱した試料を用いて実施した。

##### (2) 試験結果

表49に室内土質試験結果一覧表を示す。

##### ①土粒子の密度 ( $\rho_s$ )

各地点の土粒子の密度の範囲は以下のとおりであり、特に地点により差異などは認められず、概ね  $\rho_s \approx 2.6g/cm^3$  を示していることから、一般的な値と言える。

・街路1の土粒子の密度は、概ね  $\rho_s \approx 2.60g/cm^3$  の範囲

・Y区口-1街路2の  $\square$  、概ね  $\rho_s \approx 2.59 \sim 2.60g/cm^3$  の範囲

・SB2441町屋の  $\square$  、概ね  $\rho_s \approx 2.60g/cm^3$  の範囲

##### ②自然含水比 (wn)

自然含水比 (wn) は、一般には細粒分 (シルト分 + 粘土分) の含有率が多いほど、高い値を示す。

各地点の自然含水比の範囲は以下のとおりであり、特に地点により差異などは認められず、概ね  $wn \approx 5 \sim 10\%$  を示しており、一般の砂・砂質土と比較しても、かなり低い値を示している。

表48 室内土質試験実施位置一覧表

地點名	ユニット数	試料数	備考
街路1	7箇所	17試料	
SB2441町屋	2箇所	2試料	床部、土間部
Y区口-1街路2	4箇所	9試料	
合計	13箇所	28試料	

表49 室内土質試験結果一覧表

地点名	試料名	土粒子の密度 $\rho_s$ (g/cm <sup>3</sup> )	自然含水比 $w_n$ (%)	粒度組成							
				礫分 (%)	砂分 (%)	シルト分 (%)	粘土分 (%)	細粒分 含有率 FC(%)	D50	D20	D10
街路1 No1	No1-1	2.602	6.0	22.6	67.7	8.2	15	9.7	0.914	0.333	0.0835
	No1-2	-	6.9	21.4	69.6	9.0		9.0	0.940	0.344	0.1030
	No1-3	-	8.1	16.1	73.6	10.3		10.3	0.764	0.277	-
街路1 No2	No2-1	-	10.5	17.1	73.9	9.0		9.0	0.712	0.330	0.1060
	No2-2	-	6.8	18.8	80.0	1.2		1.2	1.110	0.675	0.5340
街路1 No3	No3-1	-	10.7	12.3	76.8	10.9		10.9	0.632	0.265	-
	No3-2	-	6.0	28.8	67.9	3.3		3.3	1.270	0.661	0.4450
街路1 No4	No4-1	2.604	10.5	7.1	79.4	10.4	3.1	13.5	0.543	0.198	0.0441
	No4-2	-	8.4	18.5	73.1	8.4		8.4	0.885	0.413	0.1300
街路1 No5	No5-1	-	8.4	5.4	85.3	9.3		9.3	0.790	0.403	0.1110
	No5-2	-	6.3	27.3	69.3	3.4		3.4	1.220	0.600	0.4050
街路1 No6	No6-1	-	12.0	10.0	80.1	9.9		9.9	0.677	0.299	0.0775
	No6-2	-	7.0	28.6	69.2	2.2		2.2	1.270	0.656	0.4510
	No6-3	-	12.8	10.5	79.8	9.7		9.7	0.622	0.269	0.0825
	No6-4	-	6.2	31.5	67.3	1.2		1.2	1.430	0.832	0.6390
街路1 No7	No7-1	2.602	11.9	10.7	80.8	5.6	2.9	8.5	0.697	0.317	0.1230
	No7-2	-	5.5	37.6	61.1	1.3		1.3	1.550	0.719	0.5450
Y区ロ-1街路2 No1	No1-1	2.606	8.5	3.3	83.2	11.1	2.4	13.5	0.494	0.177	0.0478
	No1-2	-	5.7	11.0	81.5	7.5		7.5	0.812	0.389	0.1470
Y区ロ-1街路2 No2	No2-1	-	8.8	9.4	79.2	11.4		11.4	0.599	0.237	-
	No2-2	-	8.6	7.6	82.5	9.9		9.9	0.650	0.301	0.0777
Y区ロ-1街路2 No3	No3-1	2.59	10.2	14.7	72.1	9.5	3.7	13.2	0.756	0.267	0.0441
	No3-2	-	5.9	23.4	75.2	1.4		1.4	1.060	0.591	0.4360
Y区ロ-1街路2 No4	No4-1	-	7.3	67.1	28.6	4.3		4.3	11.300	0.696	0.3280
	No4-2	-	9.1	47.0	46.0	7.0		7.0	1.790	0.542	0.2080
	No4-3	-	2.7	98.4	1.3	0.3		0.3	10.200	5.010	3.6100
SB2441土間	土間-1	2.596	10.4	8.7	77.1	11.1	3.1	14.2	0.680	0.219	0.0460
	土間-2	-	4.3	47.5	51.3	1.2		1.2	1.880	0.780	0.5500

・街路1の自然含水比は、概ね  $w_n \approx 5\sim 10\%$  の範囲

・Y区ロ-1街路2の  $\square$  、概ね  $w_n \approx 5\sim 10\%$  の範囲

・SB2441町屋の  $\square$  、概ね  $w_n \approx 5\sim 10\%$  の範囲

### ③粒度特性

粒度試験結果より、粒径加積曲線を地点別にまとめ図148に示した。

各試料の地盤材料は、Y区ロ-1街路2のNo4-1~4-3を除き、試料の粒度組成に大きな差異は認められず、概ね細粒分混じり疊質砂に分類される材料が多い。

また、各ユニットでみると、一部を除き、ユニット上端で細粒分の含有が多く、ユニット下端に疊の混入が多い傾向が認められる。

### (3) 考察

調査箇所のうち、街路1とY区口-1街路2については、その名のとおり街路、つまり道路に利用されていたことから、現代においても道路の求められる機能（交通量に応じた強度特性や排水性）を有していたと考えられる。

ここでは、室内土質試験のうち粒度試験から得られる20%粒径(D20)を用いて地盤材料の透水係数(k)を算出し、その結果について考察する。なお、透水係数の算出にあたっては、Creagerによる20%粒径と透水係数の関係から、次の近似式を求めた。

$$k = 0.34 \times (D20)^{2.3}$$

ここに、k：透水係数(cm/sec)

D20：20%粒径(mm)

近似式より算出した各試料の透水係数を表50に示す。

各試料の透水係数kは、一部を除いて概ね  $k = 10^{-2} \sim 10^{-1}$  (cm/sec) の範囲にあり、「透水性は中位～高い」と判断される。また、表4.7に示すように試料の採取位置との関係をみると、ほとんどの地点で、表層に近いほど透水係数が小さくなる傾向が認められ、表層部とその直下にある層の透水係数を比較すると、概ね1オーダーの差異が認められる。一方で、試料の採取位置との関係をみると、ほとんどの地点で、表層に近いほど透水係数が小さくなる傾向が認められ、表層部とその直下にある層の透水係数を比較すると、概ね1オーダーの差異が認められる。

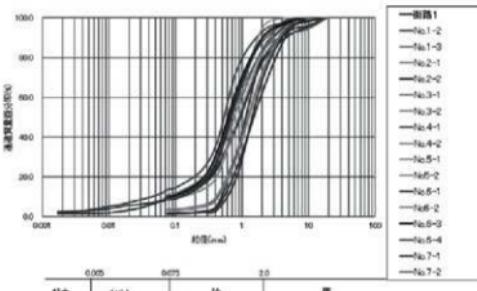


図148 粒径加積曲線グラフ(街路1)

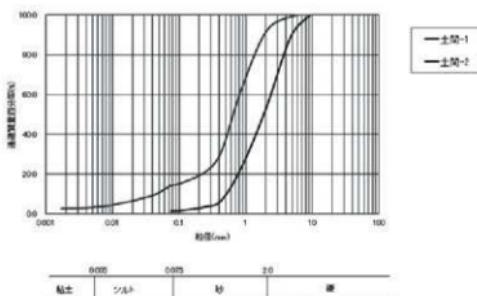


図149 粒径加積曲線グラフ(SB2441町屋)

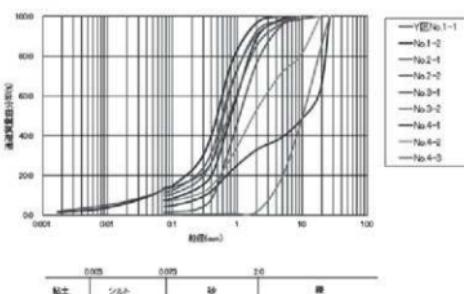


図150 粒径加積曲線グラフ(Y区口-1街路2)

表50 各試料の透水係数一覧

地点名	試料名	粒度組成				透水係数 $k$ (cm/sec)	
		礫分 (%)	砂分 (%)	シルト分 (%)	粘土分 (%)		
街路1 No1	No1-1	22.6	67.7	8.2	1.5	0.333	2.7E-02
	No1-2	21.4	69.6	9.0		0.344	2.9E-02
	No1-3	16.1	73.6	10.3		0.277	1.8E-02
街路1 No2	No2-1	17.1	73.9	9.0		0.330	2.7E-02
	No2-2	18.8	80.0	1.2		0.675	1.4E-01
街路1 No3	No3-1	12.3	76.8	10.9		0.265	1.6E-02
	No3-2	28.8	67.9	3.3		0.661	1.3E-01
街路1 No4	No4-1	7.1	79.4	10.4	3.1	0.198	8.2E-03
	No4-2	18.5	73.1	8.4		0.413	4.5E-02
街路1 No5	No5-1	5.4	85.3	9.3		0.403	4.2E-02
	No5-2	27.3	69.3	3.4		0.600	1.1E-01
街路1 No6	No6-1	10.0	80.1	9.9		0.299	2.1E-02
	No6-2	28.6	69.2	2.2		0.656	1.3E-01
	No6-3	10.5	79.8	9.7		0.269	1.7E-02
	No6-4	31.5	67.3	1.2		0.832	2.2E-01
街路1 No7	No7-1	10.7	80.8	5.6	2.9	0.317	2.4E-02
	No7-2	37.6	61.1	1.3		0.719	1.6E-01
Y区口-1街路2 No1	No1-1	33	83.2	11.1	2.4	0.177	6.3E-03
	No1-2	11.0	81.5	7.5		0.389	3.9E-02
Y区口-1街路2 No2	No2-1	9.4	79.2	11.4		0.237	1.2E-02
	No2-2	7.6	82.5	9.9		0.301	2.1E-02
Y区口-1街路2 No3	No3-1	14.7	72.1	9.5	3.7	0.267	1.6E-02
	No3-2	23.4	75.2	1.4		0.591	1.0E-01
Y区口-1街路2 No4	No4-1	67.1	28.6	4.3		0.696	1.5E-01
	No4-2	47.0	46.0	7.0		0.542	8.3E-02
	No4-3	98.4	1.3	0.3		5.010	1.4E+01
SB244L土間	土間-1	8.7	77.1	11.1	3.1	0.219	1.0E-02
	土間-2	47.5	51.3	1.2		0.780	1.9E-01

表層は下位層よりも  
1オーダー程度  
透水性が低い

同上

#### 4. 3 三軸透水試験結果(変水位法)

試験試料は、下記について実施した(図37・52参照)。結果は表51に示すとおりである。

各試料の透水係数は、No.5を除く試料では、 $k = 10^{-4}$  (cm/sec) を示しており、「透水性は低い」と判断される。また、No.5試料では、概ね  $k = 10^{-3}$  (cm/sec) を示しており、「透水性は中位」と判断される。

表51 三軸透水試験結果

地点名	浸潤密度 $\rho_t$ (g/cm <sup>3</sup> )	透水係数 $k$ (cm/sec)	施工時期
街路1 No1	1.979	1.82×10 <sup>-4</sup>	新しい
街路1 No3	1.756	1.19×10 <sup>-4</sup>	↑
街路1 No5	1.626	9.56×10 <sup>-3</sup>	↓
街路1 No7	1.838	1.03×10 <sup>-4</sup>	古い

#### 4. 4 三軸試験結果 (CD条件)

##### (1) 試験結果

三軸試験の結果は表52に示すとおりである。

土のせん断強さを表す指標のうち、粘着力cは値も小さく、大きな差異は認められないものの、せん断抵抗角 $\phi$ については $\phi \approx 40\text{--}48$

(°)とかなり大きな値を示している。せん断強さの一般的な工学的指標では、せん断抵抗角は相対密度で「密な～非常に密な」に区分される。

##### (2) 考察

各街路の力学特性については、街路の建設時期と見比べた場合、新しいほどせん断強さが大きくなる傾向にあることが認められた。また、湿潤密度と比例関係が認められ、湿潤密度が大きい（つまりよく締まっている）と力学特性も高くなる傾向にあるようである。

#### 4. 5 土層の顕微鏡観察結果

##### (1) 観察状況の総括

試料（採取位置は図37・52参照）は、凍結乾燥後、樹脂固化し、薄片プレバラートを作製し、鏡下での観察を行った。その結果、層状の堆積構造をほとんど示さない、未固結の砂層を呈している。

試料を構成する鉱物片、岩片はその多くが花崗岩由来と考えられる。鉱物は円磨度が全体として低く、川砂よりはマサに近い状況である。粒径の淘汰は悪く、細粒粒子は鉱物片や岩片の周囲を基質状に取り巻く様に分布している。

肉眼で黒色に見える層状部分では、鉱物片や岩片の周囲に黒色の鉱物が付着するほか、鉱物片、岩片の間を充填する基質が褐色に着色している傾向が認められた。この部分では、基質の抜けがやや多く、空隙率がやや高くなっているように思われる。

なお、黒色物の由来としては、不透明鉱物である鉄の酸化物や、炭化物などが考えられるが、特に植物の組織痕が認められないことから、前者である可能性が高いと考えられる。

また、褐色に

見える層状部分では、基質に褐色の着色が認められた。なお、肉眼で黄色に見える層状部分は、鏡下では特段の特徴が認められなかった。

表52 三軸試験結果

地点名	湿潤密度 $\rho_t$ (g/cm <sup>3</sup> )	土のせん断強さ(全応力)		施工時期
		粘着力c (kN/m)	せん断抵抗角 $\phi$ (°)	
街路1 №1	1.979	5.3	48.01	新しい
街路1 №3	1.756	3.4	44.23	↑
街路1 №5	1.626	0.0	44.38	↓
街路1 №7	1.838	5.8	40.75	古い

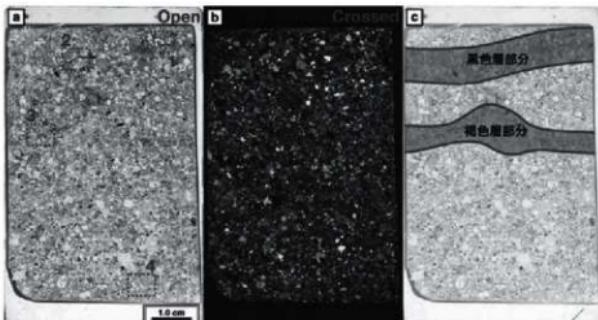


図151 偏光顕微鏡による観察状況

③偏光顕微鏡による観察(写真122)

a:薄片を通常光でスキャンした画像。

偏光顕微鏡における開放ニコル(open nicol)とほぼ同等の状態である。赤色破線で示した長方形の領域は、顕微鏡写真を撮影した箇所を示し、数字は各顕微鏡写真的番号と対応している。

b:薄片を二枚の偏光板(偏光方向が互いに直交する様に配置)で挟んでスキャンした画像。

偏光顕微鏡における直交ニコル(crossednicol)とほぼ同等の状態である。

c:通常光でスキャンした画像上に、肉眼で見える層を示した図。

肉眼で黒色層、褐色層に対応する部分につき、鏡下観察結果を以下に述べる。

肉眼で黒色層が認められる付近(No.1・写真123)では、比較的粗粒な鉱物片、岩片は他の部分と同様であるが、鉱物の周間に黒色の鉱物が付着するほか、鉱物片、岩片の間を充填する基質が褐色に着色している傾向が認められる。

肉眼で黒色層、褐色層が認められる付近(No.2、3・写真124・125)では、比較的粗粒な鉱物片、岩片は他の部分と同様であるが、鉱物片、岩片の間を充填する基質が褐色に着色している傾向が認められる。

肉眼で黄色層が認められる付近(No.4・写真126)では、特に着色が認められない部分と同様の見かけを呈し、黄色の原因となる鉱物、着色、組織は認められない。

なお、現段階では、現地の土壤(町屋および街路)の定量的な特徴を把握した訳ではないため、上記分析方法は、様々な観点での定量化を目指し、提案するものである。

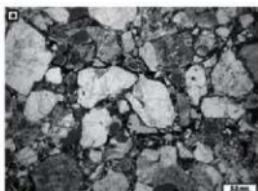


写真123 顕微鏡写真(No.1)

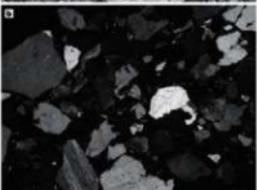


写真124 顕微鏡写真(No.2)

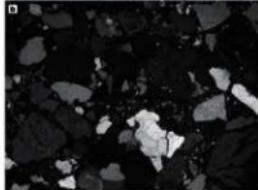
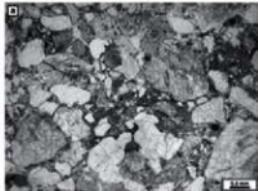


写真125 顕微鏡写真(No.3)

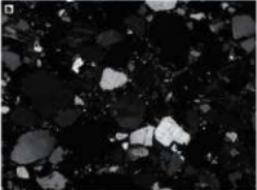
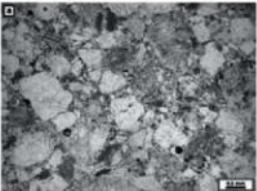


写真126 顕微鏡写真(No.4)

## 第8章　まとめ

### 第1節　はじめに

今回の調査は、兵庫津遺跡の中心ともいえる兵庫城とその周辺の町屋域にあたる部分を広範囲に発掘した。このため非常に数多くの成果を得ることができた。検討すべき課題点は、多々あると考えるが、最後に今回の調査における成果のうち、特筆すべき遺構である町屋域と城郭について概観し、検討して本書のまとめとしたい。

### 第2節　町屋域の検討

#### 1. 町屋域における街路と屋地割り

町屋域は、町を区画する街路とその間に密集して建てられた町屋建物およびそれに付随する井戸やゴミ穴、貯蔵施設などの生活関連遺構群（以下、町屋群）によって構成される。今回の調査成果について、列挙し周辺のこれまでの調査成果と比較検討しておきたい。

まず、調査でみつかった築城期（16世紀後半）以降の町屋建物群や主要な街路などは、その後の何回にもわたる建替えや造成によって江戸時代後期までの間に1m以上も地表面が嵩上げされているにもかかわらず、ほとんど同じ位置に同じ規模で繰り返し造り替えがなされていることである。

また確認された町屋や街路は、これまで兵庫津を研究する上で基礎資料となっている江戸時代後期に作成された各町の水帳絵図（天保9【1838】年作成、以降加筆）や江戸時代中期の『浜州八部郡福原庄兵庫津絵図』（元禄9【1696】年）（以下、「元禄絵図」）とよく合致していて、絵図に描かれた町並みが兵庫城築城の頃まで遡ることが確実となった。

このような街路および屋地割りの踏襲は兵庫津遺跡内の他の調査区においても確認されている現象で、北浜に属する第14次調査地<sup>(1)</sup>では、織豊後期と考えられる第4遺構面で屋地割りの単位がほぼ確定され、以降はこの区画を基に細分や集合がおこなわれた。

また岡方に含まれる第54次調査地<sup>(2)</sup>においても17世紀代の第3遺構面から確実に屋地割りの踏襲が確認されている。

今回の調査によって検出された「道路」遺構については、「街路」の名称を用いた。町屋群によって構成される街区を画するために計画的・人工的に造られた道路遺構と考えられるためである。街路は都市遺跡特有の遺構であるといえよう。

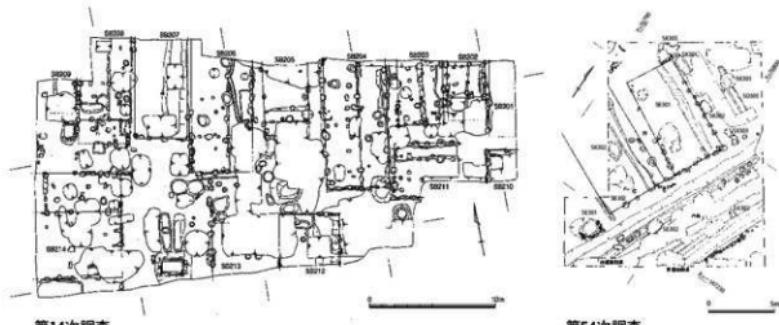


図152　兵庫津遺跡内で確認された町屋遺構

今回の調査においては、築城期の兵庫城の出入り口が想定される部分へと繋がるいわゆる「大手筋（道）」にあたる街路（街路1）や、元禄絵図にみられる堀に沿って取り付けられ兵庫津の城内で唯一カーブを描く街路（街路2）が広範囲にわたって確認され、その構造などについても土木工学的な分析も含め資料を得ることができた。

また、調査では街路に取り付く町屋の間口部分が多く調査されたが、全体に道路面より土間面が低くなるようである。街路には側溝などの排水施設が無いため雨水の流入にどのように対応していたのか今後検討をする。

屋地割りについては、新町地区と閑屋町地区を比べた場合、新町地区が町屋建物の奥に理桶や土坑が存在する空間を持つのに対して、閑屋町地区では、町屋建物がかなり密集して建てられているようである。このことは、江戸時代後期の水帳絵図においてもみられる傾向で、水帳絵図の区分は土地の所有者を示すもので、建物の配置や形状と一致しないというもの、ある程度屋地内の土地利用の違いが表れているといえよう。

## 2. 町屋と町屋群

兵庫津遺跡にみられる町屋建物は敷地幅いっぱいに建てられており、隣家と壁を接するように密集している。街路などによって区画された一連の町屋建物（町屋群）は、方向性、規格性、屋地の地盤などを共有すると考えられる。隣接する建物どうしは、独立した家屋であるにもかかわらず、礎石が噛み合うなど一度建て上げられると、単独での建て替えなどは困難である。さらに、造成地業は、街路に取り付く兼ね合いもあり、おそらく町屋群内の建物すべてが足並みを揃えることが前提であると考えられる。

基本的に中世以降の都市においては、都市特有の災害等による残材の堆積から標高が高まっていく傾向があるとされている<sup>(3)</sup>。それ以上に整地のたびに砂を運搬し嵩上げを繰り返すのは、海岸部における特徴としてあげられるかもしれない。

今回の調査地だけでなく兵庫津遺跡内においては、整地層の構造材として、多用されている砂であるが、調査時に観察される砂層には、町屋内の床貼り部分に敷き込まれた砂と敷地の嵩上げの際に使用された砂があるように考えられる。礎石が残存している場合や焼土面がある場合は明確に区別できるが、これが無い場合判別は困難であるが今後より注意深く調査していく必要があると考える。

## 3. 町屋の構造と特徴

今回の調査において検出された町屋建物は、新町・閑屋町地区を合せて50ヶ所以上となり、そのほとんどが複数の時期に建て替えられ存在したもので、のべ棟数は優に100棟を超える。

構造は、礎石建物で土壁の痕跡が認められる。礎石には、自然石のほか五輪塔・宝鏡印塔・石臼などの転用がみられる。ほとんどの建物は、間口が狭く奥行が長い細長いもので、平面配置は基本的に片側に土間があり、もう一方に床貼りの部屋を配する。建築史的には「片土間形式」、「京マチヤ」と呼ばれる型をとる。

良好な状態で検出された土間では、幅0.6~2.5mほどで粘土や砂を薄く敲き締めて造られ、通常は、間口に設けられた出入り口より建物の裏まで貫通している。

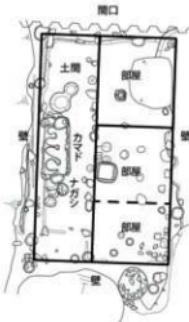


図153 町屋建物の平面配置  
(SB2341)

土間部分にカマドや流しなどが設けられる。カマドはⅠ期（江戸時代後期以降）で確認されたもの以外は、複数の焚口をもち、燃焼部を軽く掘り込んだ馬蹄形の型をとることが一般的で、壁や部屋部分との境に接して造られる。流しは砾、砂利を敷いた洗い場のような施設で、石の敷かれない円形の抜き取り穴が存在することから、貯水用の堀などが据えられていたと考えられる。なお、掘り込み式のカマドは第14次調査においては、「宝永の大火」（1708年）の焼土面では確認されておらず。1時期遡る第3遺構面においてはほとんどの町屋建物の土間にいて普遍的に見つかっていて、その時期は17世紀後半と考えられる。今回の調査においては、概ね同時期の第Ⅱ期とした遺構面で検出された町屋においてカマドを有しており、遺跡内に共通してみられる現象かもしれない。

一方、部屋の部分は、砂による整地がなされて束石やその抜き痕がみられ、床敷き部分にイロリを設ける。イロリは、50~80cmほどの正方形で、地面を掘り込んで周囲を粘土で囲って造られている。芯に瓦や石を塗り込めた粘土で仕切るものもある。イロリの出現も前述のカマドとはほぼ同時期である。また、イロリとは別に一辺が30cmほどの小型の炉をもつものがみられる。掘り炬燵などとして使用されたものかと思われる。

カマドやイロリは頻繁に造り替えられるようで、切り合って造られたり、薄い整地層を挟んで位置をずらして造られたりしている。

イロリは粘土や漆喰で縁を回す程度のものからSB2341で検出されたイロリのように底部を瓦で囲む丁寧な造りのものまである。

今回の調査では、この「片土間形式」以外に中央に土間が通り両側に部屋をもつ「中土間形式」の町屋が新町地区で数棟確認された。居住者や業種に関連したものなのか今後の課題といえる。

また、特異な構造の建物としてSB2451にみられる埠貼建物がある。時期は17世紀初頭と比較的新しい時期に属する埠貼建物と考えられる。兵庫津遺跡内では、第44次・第53次調査で同様の構造が存在する。

#### 4. 町屋域の成立時期

今回検出できたもっとも古い町屋群は、関屋町地区の下層確認トレンチにおいて確認された町屋群で、出土遺物は、織豊前期（16世紀最後の四半世紀）に遡るもののが含まれる。

一方新町地区においては、中央部に設定した下層確認トレンチにおいて検出された町屋（SB1481~1485）は17世紀初頭、さらに各所で杭部分のグリット調査で無遺物層まで掘削したにもかかわらず、16世紀末~17世紀初頭を遡り得ることはなかった。

「関屋町」は、15世紀の「兵庫北関入船納帳」<sup>(4)</sup>に記載のある古い町である。元禄絵図などから須佐の入江と考えられる入り江の背後に位置し、これに対し「新町」は、その名の示すように兵庫城の築城に伴って新しくつくられた町とも考えられる。慶長7（1602）年の地子帳<sup>(5)</sup>に記載がみられるものの町名からも新しく開発された町屋域の可能性がある。

新町地区の主要な町屋群は街路2の両側に取り付いている。街路2が存在しはじめて成り立つ町屋群ともいえる。今回、調査で検出した街路2は元禄絵図に描かれており、当時の兵庫奉行が居住し政府ともなった奉行所（「御屋敷」）の堀に沿うように緩く弧を描くように通されている。しかし今回検出された築城当初の城郭の形状は、シノギ角などを組み合わせた直線的なもので築城当初から計画された街路とするには疑問が残る。築城後ある時期に城郭が元禄絵図にみられるような形状に改変されこれに基づいて引かれた街路とともに成立した町屋域と考えられる。

### 第3節 兵庫城の構造と変遷

#### 1. はじめに

今回の調査により、元禄絵図などいくつかの絵図でしかその痕跡を確認できなかった兵庫城の姿が明らかになった。以下に調査で明らかになった城の構造と、縄張りの変遷を明記することとする。兵庫城の縄張りの変化も他の城郭と同じように藩主の交代などを契機に行われた可能性があるため、兵庫城の画期として考えられる歴史的事象を挙げると、天正8年（1580年）兵庫城の築城、天正11年（1583年）豊臣秀次入城、天正13年（1585年）太閤蔵入地に編入、文禄5年（1596年）に慶長伏見地震発生、元和元年（1615年）豊臣氏滅亡、一時幕府領に編入、元和3年（1617年）に尼崎藩領に編入、寛永12年（1635年）青山氏入封、宝永8年（1711年）に松平氏入封、明和6年（1769年）の明和の上知による幕府領への再編入がある。

#### 2. 兵庫城の構造

今回の調査では内堀が存在することが初めて確認された。元禄絵図などで描かれる兵庫陣屋の形状と異なり、外堀の内側にもう一重の堀が巡らされていた。さらに内堀（旧）主郭側石垣は東外堀（旧）城内側石垣と同様に二列石垣であり、さらに根石の下に胴木組を据え置く構造であることがわかった。胴木は森田氏の胴木組分類のIA類に当る<sup>(6)</sup>。胴木は柱状の木材を1列並べおいて、留杭を打たず、胴木小口も継手など施さない。また根石は胴木組により角度を調整している。IAと分類されている旧二条城の例では胴木は埋め込まれており、今回のものと構造が異なるようである。

二列石垣については第5章で明記したように当初からの形状と考えているが、築石がわずかに残存するのみであり、詳細な構造については今後の検討としたい。ただ、胴木の使用や二列石垣といった重厚な構造であることから、この石垣の上部には、隅櫓のような建物が存在した可能性がある。なお、東外堀も城内側を二列石垣で仕上げているが、内堀と工法が異なる。内堀主郭側は前列と後列の間にわずかに地山を挟み構築されているが、東外堀城内側は後列石垣の前に前列の石垣を構築し、栗石を後列石垣に直接覆い被せ、あたかも付け足して石垣を構築したように見える。時代差や工人差など今後の検討が必要である。

内堀が確認されたことにより、築造当初の縄張りが明らかになった。今回の発掘調査開始時までは、元禄絵図で描かれたように築城当初から方形プランで、その一部を溝により区画し、馬出状の郭を作り出している形状とみられていた。しかし今回の調査では、少なくとも主郭部分の東と北を取り囲む郭（副郭）があり、主郭と副郭からなる梯郭式の城郭であったことが判明した。また、形状は方形ではなく、北東角をシノギ角にしており、また、築造当初は副郭の存在から東の土橋1もしくは北側に虎口を構えた可能性があるが、尼崎藩兵庫陣屋図や『岡方文書』にも閔屋町・新在家町側を表門、切戸町側を裏門とする記述<sup>(7)</sup>から、現在のところ土橋1側を虎口と考えている。しかし、今後の発掘調査の進展や他の城郭および城下町との比較や西国街道との関連性など様々な観点からの検討による再考が必要と考えられる。

内堀・外堀ともに数度の改修があったことも分かった。内堀は北半分が先に南半部が後に大規模造成を伴う改修があった。また南外堀城外石垣も前後に石垣が検出され、2ヶ所で石垣面に縦目地が入る箇所があり、それぞれに南北方向の石垣が築かれ城外側石垣の一部を突出させるような形状を作り出していた。当初の石垣を埋めた造成土からは、17世紀後

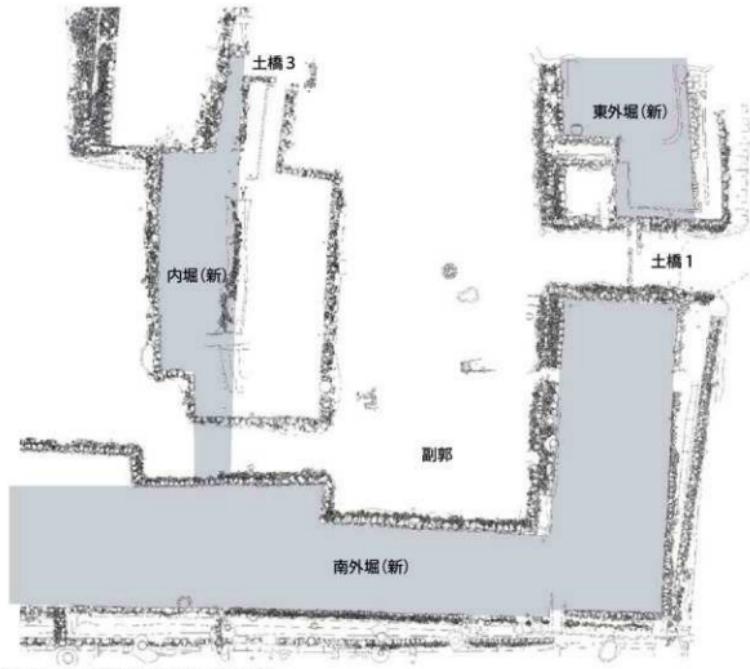


図154 兵庫城副郭南側平面図（新段階）

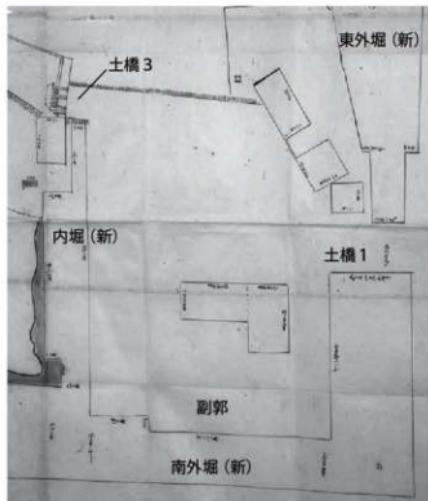


写真127 尼崎藩兵庫陣屋図（中判）副郭南側  
(個人蔵・神戸市立博物館寄託)



写真128 尼崎藩兵庫陣屋図（大判）副郭南側  
(個人蔵・神戸市立博物館寄託)

半から18世紀前半の遺物が出土しており、この期間に段階的に改修が行われたようである。

一方、南外堀城内側石垣には前後関係の石垣は検出されていない。そのため明らかな石垣の改修はないようである。ただし、城内側石垣の西側出角部以西については、石垣の築石が崩され石垣の前面に落ち込んでいる様子が確認された。また同様に57次調査I区域内側石垣でも同様の状況が確認されている。尼崎藩兵庫陣屋図では主郭南側は直線的に描かれており、築石を崩し、それを埋め込むことにより同様の形状を作り出したと考えられる。石垣石材を含む崩落土の中からは時期の判別のできるような遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

第5章で示した通り東外堀で検出された小区画が元禄絵図に描かれている「時ノカ子」の敷地と考えられる。当初の東外堀城外側を一部埋めて成形されており、盛土からは17世紀後半から18世紀前半の遺物が出土している。尼崎藩主が青山氏であった時に構築されたものと考えられる。拡張された小区画部分には17世紀後半から18世紀前半の遺物が出土しており、松平氏段階に改修が行われたものと考えられる。

出土した瓦には花隈城跡から出土した軒瓦と同範・同文ものがある<sup>(8)</sup>。ただし、兵庫城地区に限ったことではなく、兵庫津遺跡内で散見される。近年では明石市船上城跡からの出土も報告されている<sup>(9)</sup>。町屋も含め調査地全体から多く出土している。また、五輪塔など石造物も狭川氏の指摘のように、町屋地区では五輪塔水輪・一石五輪塔が礎石や井戸に使用され、一方で兵庫城地区では主に石垣の築石に五輪塔の火輪・地輪、裏込に五輪塔お

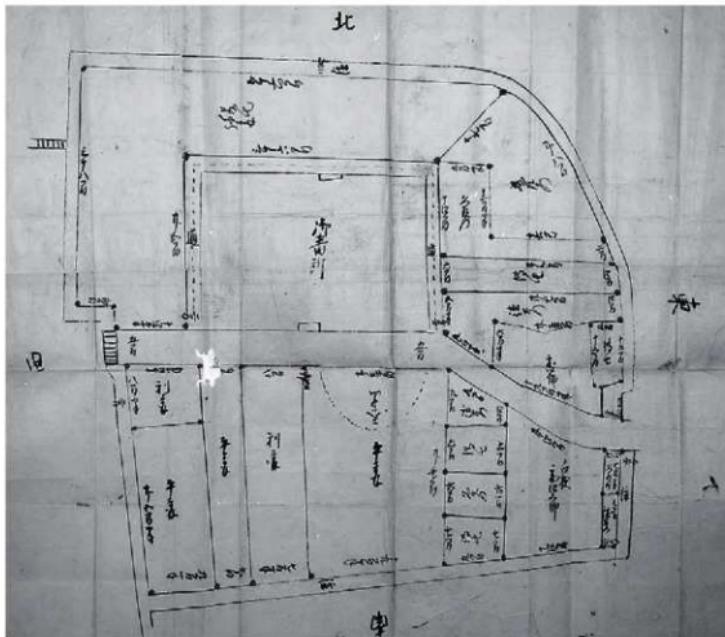


写真129 兵庫陣屋跡町割図（神戸市立博物館蔵）

より一石五輪塔の空風輪が多く使用されている。瓦や石造物が城郭地区に限定して利用されるのではなく、城郭で利用されなかった部材は町屋地区で使用されているようである。そのことから兵庫城築城とあわせて新町・閑屋町の街並みが形成されていったことが裏付けられた。ただし、新町については前節で示したように付属する街路の形状などから街並みの完成は江戸時代に入ってからと考えている。

明和の上知前に描かれたといわれている尼崎藩兵庫陣屋図（以下、「陣屋絵図」）（中判）は発掘調査で判明した新段階の内堀南側や副郭南側の形状が表現されている。さらに「陣屋図」（大判）では陣屋建物と南外堀が画面に水平に描かれているのに対し、同（中判）の斜めに振れるように描かれる。それは実際に南外堀城内側石垣が東から西に向けて北側に振れていることに起因するものと考えられる。これらのことから「陣屋図」（中判）の方が同（大判）よりも正確に描かれていることが分かった。中判は陣屋をある程度正確に描こうとしたことに対し、大判は中判をもとにし配置の正確さよりも色彩を用い絵画的に仕上げたものと考えられる。

また、上知に伴い陣屋跡に勤番所が設置された後についても兵庫陣屋跡町割図や水帳絵図に示された悪水抜溝（SD3101）の変遷が確認された。板留や石積など様々な工法により護岸されていたことや、新1段階の石積に、船材や建築用材を転用した胴木組を使用する工法が用いられていたことが明らかになった。江戸時代後半から幕末の土留め工法を知る上で貴重な資料が得られた。

### 3. 兵庫城の変遷

最後に調査成果から考えられる兵庫城平面形の変遷を時代ごとに概観する。（図155・156）

兵庫城築城以前は、1のように主郭部分に15世紀代の土師器集積遺構、また閑屋町地区西端でも同時期の井戸・土坑などが検出されている。そのことから、調査地の西側に微高地が形成され、そこに集落域が広がっていたと考えられる。内堀（旧）石垣の直下で検出された下層土留遺構は、微高地の落ち際の護岸のために構築されたものと考えられる。

その後、1580年以後に兵庫城は築城される。形状は2に示したとおりである。北東隅をシノギ角にした主郭・副郭で構成された梯郭式の縄張りをもつ城郭である。主郭・副郭とともに東面を二列石垣に積み上げた状態を当該時期とした。また副郭から主郭への連絡は内堀に橋台や柱跡などが検出されていないため、現在検出した範囲では土橋2のみと考える。土橋2の主郭側の石垣は隅角部を形成し二折れを作り出している。副郭についても区画に伴う遺構など確認されなかつたが、土橋1との関係からここでも折れを伴う通路があったと考えられ、同時期の城郭と類似した構造であったと考えられる<sup>(10)</sup>。

築城後比較的早い段階で内堀の北側が埋められ、主郭の敷地拡張が図られる。造成土からは唐津焼など17世紀前半の遺物が出土していないことから、16世紀内で実施されたものと考えられる。ただし、拡張当初土橋3は構築されず、しばらくしてから作り足された。南外堀（新）の裏込めから出土した遺物は、17世紀後半から18世紀前半頃のもので、少なくとも元禄絵図が描かれる前には南外堀の改修が行われたものと考えられる。段階的に改修しているが、それぞれの詳細な時期が不明であり、必ずしも内堀の変化と同期しているとは言えない。

次に元禄絵図が描かれた段階は5の状態と考えられる。内堀の形状が大きく変わる。南半分も半分程度の幅に狭められ、副郭の拡張が図られている。また、南側は土橋2の一部

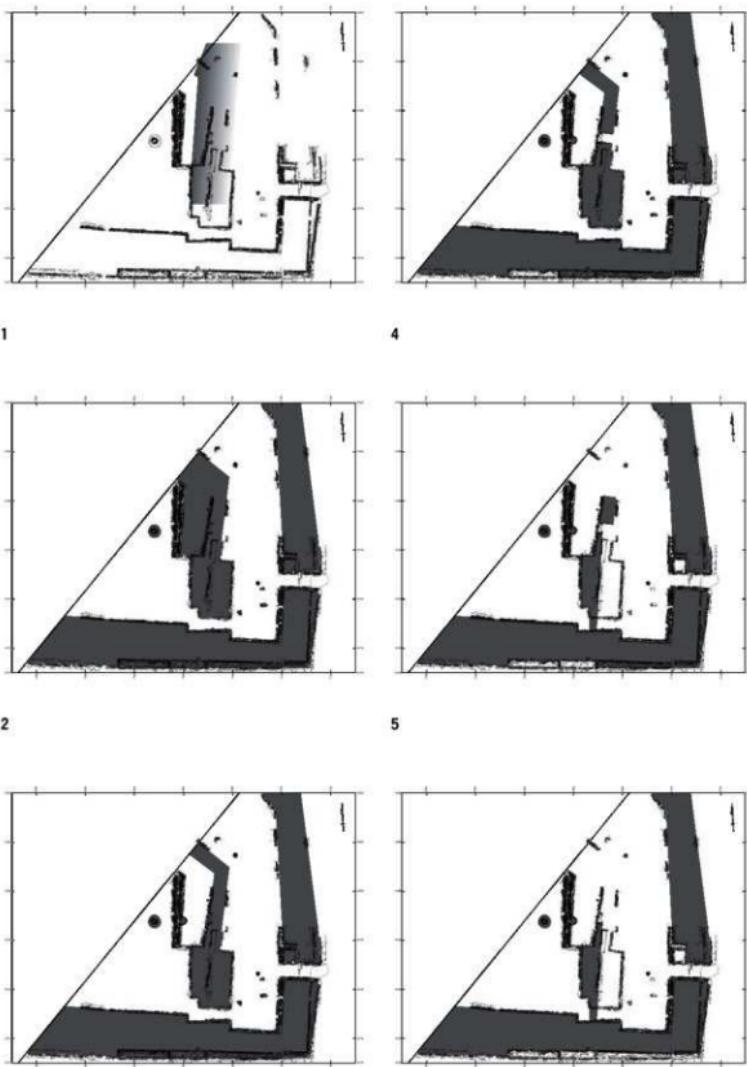


図155 兵庫城変遷図 1

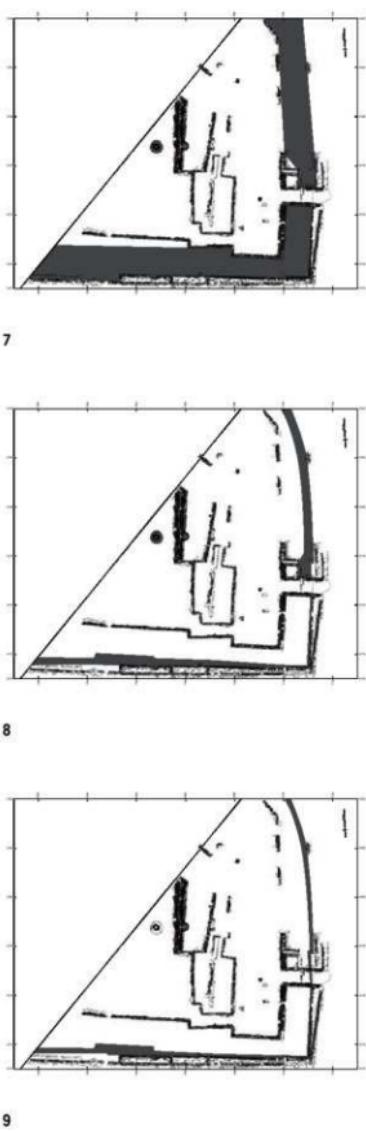


図156 兵庫城変遷図2

を開削し、南外堀と繋げている。また南外堀城内側石垣は、これに前後する時期に西側の出角が破壊され、「陣屋絵図」のような形に改修されたと考えられる。一方で北側は、絵図では逆L字形に折れ曲がる形状であるが、調査では攪乱のため、それに相当する堀の痕跡は確認されなかった。また、東外堀の土橋1付近には「時ノカ子」が設置された小区画が作られる。

次に「陣屋図」が描かれた頃には、6のように内堀の北側は埋められ、小区画はその後北に拡張され、斜め方向の石列及び石垣が作られる。「陣屋図」の外堀土橋付近の斜め方向の建物に伴うものと考えられる。

その後、東外堀は城外側石垣を改修され幅が狭くなり、内堀も埋められる状態があったと考えられる。

明和6年の上知に伴い兵庫陣屋が縮小され勤番所となった時期に対応するのは8に示した。この段階では、幅六間から九間あった外堀が一間もしくは二間に狭められ、悪水抜溝と記される水路になる。実際に板留や石積により改修を行った様子が確認された。

元の南外堀部分の改修はかなり複雑であったようで、形状がわからなくなるほどの多量の杭が打ち込まれている。また、元の東外堀の部分については土橋1北側で鍵の手状に形状を変え、その形を継承し以後も小規模な改修が行われたようである。

兵庫城は以上のような変遷をたどると考えられるが先述したように、さまざまなもの検討課題があると思われる。今後も引き続き、同時期の城郭・城下町との比較検討や、それぞれの構造等でも十分に再検討・検証を行っていきたい。

#### 第4節 結びにかえて

今回の13ヶ月におよぶ62次調査は、兵庫津遺跡内においては前例のない大規模な調査となつた。出土した多量の遺物や膨大な調査記録については、今後さらに検討・考察を加えていくべきものと考える。とりあえず一次的な調査結果を公表することを目標として現時点での成果を報告させていただいた。

調査では、中世後期から近世にかけての遺物・遺構を確認したが、やはり特筆すべきは兵庫城の城郭の変遷と周辺の町屋の構成について、具体的な姿を明らかにすることことができたことだと考える。

検出された築城期の城郭の構造（縄張り）については、今までの文献資料などからは、窺うことのできなかつたもので、織豊期の城郭研究史においても貴重な資料となるものといえるだろう。合わせて織豊期・江戸期の石垣についても同様のことが言える。

調査地周辺の立地については、城郭の選地においても重要な要素と考えられるが、遺跡の基盤を構成する砂嘴堆積層の形成過程について今回、増田・廣木の両氏により詳しく述べをしていただくことができた。

また個々の町屋建物についても、火災で焼け落ちた状態のまま良好に残されているものが多く、当時の建物の構造を知る上で貴重な資料を得ることができた。

今後、建築家などの分野からの検討なども得て、より精緻な町屋の姿を示せばと考える。

町屋などの遺構内から出土する遺物からは、茶道具や中国製の磁器なども多く出土しており、当時の町屋で暮らす人々の生活の質の高さが伺える。この豊富な貿易陶磁を中心とした遺物については、森村氏により同時期に国際港湾都市として競を争った堺との比較からもより鮮明にできたと考える。

町屋建物以外の遺構においても本遺跡の特色を現すと思われる遺構が検出されている。

新町地区で検出された貝殻の集積遺構については、当時地域の特産品であったトリ貝であったことが丸山氏によって示されている。この他にも出土した動物遺存体の分析をとおして遺跡での生業や動物利用の実態、兵庫津に暮らした人々の食生活の一端を覗うことができた。鍛冶炉の検出なども生業を示す成果として興味深い。

また、江戸時代後期の水路の護岸に転用された船材や、出土した18世紀後半から19世紀にあたる大量の陶磁器や木製品などからは、当該時期の生活を復元する上で貴重な資料を得ることができた。

さらに城郭や町屋の諸施設において使用された石材などについては、橋本氏によって产地や使用傾向について検討をお願いした。また各所で確認された転用石造物については、狹川氏に考察をお願いしそれぞれに興味深い結果が出されている。いずれも今回の調査での貴重な成果であるといえる。

また今回、発掘調査中および調査終了後の整理作業中に、多くの専門家の方々からご指導、ご助言をいただきました。すべてを報告に生かすことができたとはいいがたいものの、より広い知見から調査成果について検討することができた。

最後に文末ではありますが、本調査および報告書の刊行に至るまでの業務に携わった関係者、および御協力をいただいた方々、諸機関に心からの感謝とお礼を述べ本書の結びにかえたいと思います。

## 註

- (1) 神戸市教育委員会「兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査」2010
- (2) 神戸市教育委員会「14.兵庫津遺跡 第54次調査」『平成23年度 神戸市埋蔵文化財年報』2014
- (3) 古泉 弘『江戸の穴』1990  
東 洋一「茶室と平安京—平安京埋没についての建築学的考察」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集 1993
- (4) 林屋辰三郎編『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版 1981
- (5) 「慶長七年揖州矢田部郡兵庫屋地子帳」「岡方文書」第1輯第1巻 1979
- (6) 森田克行「近世をきりひらいた土木技術」「江戸開府と土木技術」吉川弘文館 2014
- (7) 「官要録 享保五年」「岡方文書」第6輯第1巻 1990
- (8) 神戸市教育委員会「花隈城跡」「平成18年度神戸市埋蔵文化財年報」2009
- (9) 発掘された明石の歴史展実行委員会「明石の中世II—戦国時代の城館」2016
- (10) 千田嘉博『織豊系城郭の成立』東京大学出版会 2000

## 参考文献

### 町屋に関するもの

- 野口 徹『中世京都の町家』東京大学出版会 1988
- 都市史研究会編『年報 都市史研究』2 山川出版社 1998
- 小泉和子 玉井哲雄 黒田日出男 編『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会 1996
- 高橋康夫『京町家・千年のあゆみ』学芸出版社 2001
- 大場 修『近世近代町家建築史論』中央公論美術出版, 2004
- 高久智広 池田 肇 田井玲子 小野田一幸『特別展 よみがえる兵庫津—港湾都市の命脈をたどる—』神戸市立博物館 2004
- 土本俊和, 坂牛 卓, 早見洋平 他「京マチヤの原形・変容・伝播に関する研究—建物先行型論と棟持柱組形論にもとづく建築コラージュ形態史論」「住宅総合研究財團研究論文集」34 住宅総合研究財團 2007
- 大手前史学研究所『兵庫津の総合的研究—兵庫津研究の最新成果—』 2008

### 城郭に関するもの

- 加藤理文『織豊権力と城郭—瓦と石垣の考古学』高志書院 2012
- 北垣聰一郎『石垣普請』ものと人間の文化史58 法政大学出版局 1987
- 田淵実夫『石垣』ものと人間の文化史15 法政大学出版局 1975
- 中谷保二『花熊城落城記』1952
- 三田市生涯学習課市史編さん担当編『三田市史 第8巻 考古編』2010
- 芦屋市教育委員会『徳川大坂城東六甲採石場IV 岩ヶ平石切丁場跡』2005
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報III』1981
- 神戸市教育委員会『兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書』2014
- 文化庁文化財部記念物課『石垣整備のてびき』同成社 2015
- 大坂歴史学会『特集・歴史のなかの兵庫津と兵庫城』『ヒストリア』240 2013

### 陶磁器・瓦等に関するもの

- 上田秀夫「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類」「関西近世考古学研究」I 関西近世考古学研究会 1991
- 岡田章一・長谷川真「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」「兵庫県埋蔵文化財研究紀要」第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003
- 鶴柄俊夫・森毅「豊臣期大坂城跡における三の丸築造以前の基準資料」「大阪市文化財協会研究紀要」第2号 大阪市文化財協会 1999
- 森毅「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に」「ヒストリア」149 大阪歴史学

会 1995

- 森村健一「福建省漳州窯から美濃・志野の成立過程へ」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号 大阪市文化財協会 1999
- 岡山市教育委員会『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』2002
- 神戸市教育委員会『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』2010
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『神戸市兵庫区 兵庫津遺跡Ⅱ』 兵庫県文化財調査報告第270冊 2004
- 大阪歴史博物館・大阪文化財研究所編『大阪 豊臣と徳川の時代－近世都市の考古学』高志書院 2015
- 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000
- 佐賀県立九州陶磁文化館『土の美 古唐津－肥前陶器のすべて－』2008
- 佐賀県立九州陶磁文化館『特別企画展 日本磁器の源流』2017
- 波佐見市教育委員会『くらわんか藤田コレクション－寄贈記念図録－』2013
- (財)瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター『江戸時代のやきもの－生産と流通－』2006
- 黒田慶一「豊臣氏大坂城の瓦について」『織豊城郭』－創刊号－ 織豊系城郭研究会 1994
- 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所 2000
- 山崎信二『近世瓦の研究』奈良国立文化財研究所 2008
- 木戸雅寿「城郭における「瓶瓦」の成立と展開」『季刊考古学』第103号 雄山閣 2008
- 木村友紀『浜津出土の中世瓦編年』『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第13号 帝塚山大学大学院人文科学研究科 2011
- 『織豊期城郭の瓦』織豊系城郭研究会 1994
- 堺市教育委員会『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－市之町東4丁 SKT212地点』『堺市文化財調査概要報告』第4冊 1990
- 平井和「徳川氏大阪城期における土製玩具の三様相」『大阪市文化財協会研究紀要』第4号 大阪市文化財協会 2001
- 川村紀子「江戸時代大阪におけるミニチュア土製品の一考察」『大阪歴史博物館研究紀要』第8号 大阪歴史博物館 2010
- 久保和士『動物と人間の考古学』真陽社 1999

土器・陶磁器一覧表

※時期は世紀を略してCとし、時期の明確なものは1世紀内を4分割し表示している

新町地区

地番 番号	出土遺物名	器種等	備考	時期
1 SEI102	吉津清絹織物	高部木切	17C1/4	
2 SEI102	甚徳織吉花なごみ文織	高台内マッキンゼ瓶	18C末~17C1/4	
3 SEI102	丹波黒乳織錦	雅山日本	17C後半	
4 SEI104	直在足原作行文文織		17C後半	
5 SEI104	直在足原作青織織	見込船の日輪調	18C	
6 SEI104	肥前空絹織御持酒匙		18C	
7 SKI110	肥前・京地赤乳船足織		18C	
8 SKI110	吉津清灰織織	見込に砂目H23.1.	17C2/4	
9 SKI110	相撲沙万束付手織	舟形に砂付着	17C2/4	
10 SK214	吉津空絹織	舟形に砂付着	17C後半	
11 SK214	吉津空絹織	舟形に砂付着	17C後半	
12 SK214	吉津空絹織	舟形に砂付着	17C後半	
13 SK214	吉津空絹織	舟形に砂付着	17C後半	
14 SK214	直在足原作行文文織	見込船の日輪調で佐助通有 直在足原作行文文織裏織	17C後半	
15 SK214	相撲沙万里草模	高台内に砂付着	17C2/4	
16 SK214	相撲沙万里草模		16C	
17 SK103	直在足原作二重綱文織		18C中	
18 SK104	肥前京地系織	鬼板	18C	
19 SK104	直在足原作一重綱文織	舟形に砂付着	17C2/4	
20 SK104	吉津空絹織	吉津清灰織	18C	
21 SK104	吉津空絹織	吉津清灰織	18C	
22 SK104	吉津空絹織	見込船の日輪調 見込みに砂目H23.1.	18C前	
23 SK104	直在足原作行文文織		18C	
24 SK104	吉津空三重草模		17C後半	
25 SK1117	細戸美濃空絹織		17C後半	
26 SK1117	吉津空絹毛鳥奈織	見込にトシキ?瓶	17C後半	
27 SK1117	直在足原作一重綱文織		17C後半	
28 SK1117	直在足原作行文文織		18C	
29 SK1117	直在足原作行文文織		18C	
30 SK1117	直在足原作行文文織	見込コンニャク印青五重花 高台内油瓶、舟形砂付着	17C後半	
31 SK1117	直在足原作行文文系織	見込コンニャク印青五重花 舟形に砂付着	18C	
32 SK1117	肥前空染作行文足袋系織	見込コンニャク印青五重花 舟形に砂付着	18C	
33 SK1117	直在足原作行文文織		18C	
34 SK1117	直在足原作行文文織	吉津部に打ち欠きあり	18C	
35 SK1117	直在足原作行足袋	吉津部に打ち欠きあり	17C後半	
36 SK1117	吉津空絹行絹織	見込船の日輪調	18C前半	
37 SK1117	吉津空絹反織	見込に砂目3. 戻船に砂付着	17C2/4	
38 SK1117	直在見原作行丸織	見込丸の日輪調ガ・コンニャ ク印青五重花、舟付砂付着	18C	
39 SK1117	直在見原草花文丸織	見込コンニャク印青五重花 吉津行水新瓶ノ瓶	18C	
40 SK1117	直在足原作行緞花織	内面花美作織	18C	
41 SK1117	細戸美濃空絹織(テンパン)縫		18C	
42 SK1117	吉津空絹織小紋		18C	
43 SK1117	相撲掛織	口縁外側開序、堤木?	16C	
44 SK1117	肥前空絹行絹織	縫口9本 細戸清津姫	17C後半	
45 SK1117	相石掛織	見込丸鉢脚 縫口10本 佐高(?)中尾ノ御井	18C	
46 SK1118	吉津空絹(祇野宮)行絹織丸織	見込船の日輪調	18C前半	
47 SK1118	肥前京地系丸織		18C前半	
48 SK1118	直在見白附耳	貴人多い、舟付に砂付着	17C後半	
49 SK1118	吉津空絹織	見込船の日輪調	18C	
50 SK1118	直在見原作行絹織青花 足袋生	舟付に砂付着 舟形に砂付着	18C	
51 SK1119	吉津空絹丸織		17C後半	
52 SK1119	肥前京地系丸織		17C後半?	
53 SK1119	肥前京地系丸織	見込にハリ支机跡4	18C前半	
54 SK1119	直在見原作行梅花文織	見込船の日輪調 舟付に砂付着	17C後半	
55 SK1119	吉津空絹織	見込船の日輪調 見込に砂目?	17C後半	
56 SK1119	直在青絹織丸織	見込船の日輪調ガ・砂目	18C後半	
57 SK1116	細戸美濃空絹織丸織	見込船の日輪調	17C2/4	
58 SK1116	吉津空絹行絹織	舟付に目跡?	17C前半	
59 SK1116	井澤空火入れ	口縁部打ち欠き多い	18C	
60 SK1116	相掛織	縫口1本	18C	
61 SK1116	相掛織	縫口1本	18C	
62 SK1115	吉津空絹皮底小坪	高台内兜巾机	18C	
63 SK1115	直在見青絹織	舟付に目跡あり	17C2/4	
64 SK1115	肥前京地系行絹草花文織	見込に葉用青葉 高台内人形半額ノ幕しか	18C	
65 SK1115	直在見青絹織	舟付に砂付着	18C	
66 SK1115	直在見原作行足袋丸織	内面に目跡?あり	18C	
67 SK1115	直在見原作行草花文丸織	吉津部打ち欠きあり	18C	
68 SK1115	相撲沙万里草模	見込船の日輪調 見込に壇底缺	17C2/4	
69 SK1115	直在見原作行丸織	見込コンニャク印青五重花 吉津行水新瓶ノ瓶	18C	
70 SK1115	直在見青絹行絹織	舟付に目跡あり	17C後半	

地圖 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時期
5	71 SKI115	轟口美濃造銅け分け灰陶		見込・轟口?	1KC後半?
	72 SKI115	吉津堂三島手取付大鉢		見込・轟口砂目	1KC
	73 SKI115	轟鉢	轟口日本 口縁端部に窓跡あり		1KC
7	74 SB1201	土師質皿			
	75 SB1201	土師質皿	吉津堂にスス付着 口縁端部に打ち欠きあり		
	76 SB1201	轟鉢	轟口万里堀付鉢	1TC2/4	
	77 SB1201	轟鉢万里堀付鉢	見込・轟口	1TC2/4	
	78 SB1201	吉津堂灰陶漢鏡	見込・轟口に砂目各3 骨付に赤斑あり	1TC1/4?	
	79 SB1201	轟鉢万里堀付瓦瓶	轟口に砂付有	1TC2/4	
	80 SB1201	轟鉢土瓶質小瓶	内底底部外縁にせわりあり 赤斑		
	81 SB1201	轟鉢土瓶質小瓶	轟鉢が既に剥がれている 赤斑		
	82 SB1201	轟鉢土瓶質小瓶	轟鉢から		
	83 SB1201	轟鉢打土瓶質小瓶	轟鉢から		
	84 SB1201	吉津堂墨渦掛軸	吉津堂打ち欠き多数(キセラ無 に鉢)	1KC	
	85 SB1201	吉津堂墨渦掛軸付丸瓶	見込コニヤキ印判五瓣 吉津堂打ち欠きあり	1KC後半	
6	86 SB1201	轟鉢直付要宝珠支足各柄			
	87 SB1201	轟鉢直付要宝珠支足各柄	轟口四形窓台	1KC後半	
	88 SB1201	土師質皿	内面と外縁も尾分的にスス付着		
	89 SB1201	土師質皿	赤斑		
	90 SB1201	土師質皿	赤斑		
	91 SB1201	土師質皿			
	92 SB1201	瓦質火鉢	陶火鉢 外面に草彎文 口縁端部側付有		
	93 SB1201	吉津堂灰陶漢鏡	吉津堂に側付有	1TC2/4	
	94 SB1201	吉津堂灰陶盤	見込に轟口	1TC1/4	
	95 SB1201	吉津堂灰陶盤	見込に轟口直付上	1TC1/4	
	96 SB1201	吉津堂灰陶盤	見込に轟口	1TC2/4	
	97 SB1201	轟鉢万里堀付筒身各柄		1TC2/4	
	98 SB1201	丹波高麗花蟹		1TC1/4	
9	99 SB1201	吉津堂灰陶盤	見込・轟口に砂目各3	1TC2/4	
	100 SB1201	吉津堂灰陶盤	見込・轟口に砂目各3 口縁端部に打ち欠きあり	1TC2/4	
	101 SB1201	轟口造室灰陶筒身各柄	見込に内底脚跡 轟口にトタン底脚	1TC1/4	
	102 SB1201	吉津堂灰陶盤	轟口に赤斑有	1TC2/4	
	103 SB1201	轟鉢万里堀付舟文瓶	轟口に砂付有	1TC2/4	
	104 SB1201	吉津堂墨渦掛軸	轟口内に人形明望, 路	1KC後半	
	105 SB1201	轟鉢万里堀付鉢	轟口に砂付有	1TC2/4	
	106 SB1201	吉津堂灰陶丸瓶	見込の轟口	1KC後半	
	107 SB1201	吉津堂灰陶大鉢	見込に轟口直付上	1TC1/4	
10	108 SB1206	吉津堂灰陶盤			1TC後半
	109 SP1201	志野真白釉帶蓋瓶	見込・高台に目録3	1TC1/4	
	110 SP1202	土細質長颈甕	赤切底 器壁がやや膨らむ		
7	111 SP1203	土細質長颈甕	赤切底		
	112 SP1204	土細質長颈甕	赤切底 暫前調査が多い		
	113 SP1205	土細質長颈甕	赤切底 瓶底に凸部分があり		
	114 SP1206	土細質長颈甕	赤切底 瓶底に赤色斑点有り		
	115 SE1201	轟口土瓶質皿	赤切底 キエリあり		
	116 SE1201	轟口土瓶質皿	赤切底 口縁部にスス付着		
	117 SE1201	轟口白粘土瓶		1KC後半?	
	118 SE1201	轟口青塗付小皿		1KC	
	119 SE1201	轟口青塗付灰陶瓶	轟口高台内側脚跡有り	1KC後半	
	120 SE1201	轟口青塗付丸瓶	轟口内側脚跡高台 高台内側脚跡, 頭	1KC後半	
	121 SE1201	吉津堂青塗付皿	見込の目録調査	1KC後半	
	122 SE1201	吉津堂青塗付丸瓶	見込コニヤキ印判五瓣 高台面丸瓶底	1KC後半	
8	123 SK1201	吉津堂青塗付丸瓶	内型化し	1KC	
	124 SK1201	吉津堂青塗付瓶		1TC後半	
	125 SK1201	轟鉢万里堀付鉢		1TC2/4	
	126 SK1201	轟鉢万里堀付鉢	三次焼成? 砂付に砂付有	1TC2/4	
	127 SK1201	吉津堂三島手取瓶	三次焼成?	1TC中	
	128 SK1201	轟鉢青塗付青瓷碗	高台内人形明望, 路	1KC中~後	
	129 SK1201	丹波高麗	善会圓通、善圓として使用か	1TC1/4	
	130 SK1201	丹波高麗		1TC代	
13	131 SK1203	丹波高麗	轟口日本	1KC	
	132 SK1208	伊万里墨塗付高麗	高台内青版, 頭 高台内にハリ支え板	1KC後半	
	133 SK1217	土細質皿	内底底部にスス付着の痕跡あり		
	134 SK1217	吉津堂灰陶盤	轟口に砂付有	1KC後半	
	135 SK1217	轟口京燒系灰陶盤	底面に山桜文, 頭	1KC	
	136 SK1219	伊万里墨塗付高麗	高台内に頭 高台内ハリ支え板	1KC	
	137 SK1207	吉津堂灰陶瓶	見込に瓶底	1TC1/4	
	138 SK1207	吉津堂灰陶瓶		1TC1/4	
	139 SK1207	吉津堂灰陶瓶		1TC1/4	
	140 SK1207	轟口青漆利	肩部に窓 内面二次焼成により磁斑多い	1TC	
	141 SK1207	轟口青漆利		1TC	
	142 SK1207	轟鉢	轟口日本	1TC1/4	
14	143 SK1215	轟鉢青塗付丸瓶	高台内及び見込に瓶上溝	1KC後半	
	144 SK1215	豆焼系乳頭大瓶	高台内に山桜文, 路	1KC後半	

記録番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	記録番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
10	165	SK12B5	彦佐瓦原束手梅花文鏡	高台内に角振、鏡高台内ハリ支板	16C	12	182	SB1204・1205地土層	巻頭大鶴利	16C後	
	166	SK12B5	彦佐瓦原花不寫文鏡	背付に跡多量に付着	17C1/4		183	SB1304地土層	巻頭雲鶴利	内外面二次焼成により斑剥多い	16C後半
	167	SK12B8	折脚伊万里垂枝花卉文鏡	高台内に付着物有	17C2/4		184	SB1204・1205地土層	甘能鍋彦花枝萬文环	内外面少しだけが多い	17C1/4
	168	SK12B5	彦津彦白釉丸瓶	貢入多い	17C後半?		185	SB1204・1205地土層	甘能鍋彦花枝萬文环	二次焼成	16C後半
	169	SK12B5	彦津彦黑釉瓶		17C後半		186	SB1308	上脚質面	内面一定方向ナメ	二次焼成?
	170	SK12B5	彦津彦三島李大株	背付に跡目2以上	17C中		187	SB1308	彦津彦黑釉丸瓶	貢入少し	17C1/4
	181	SX12B1	指輪耳器基盤	壓押し型			188	蘇口美濃窯汎輪小天日鏡	内面に露窓(點打) 異様器皿を内側に含む	17C1/4	
	182	SX12B1	彦佐瓦原束手草花文鏡	背付に跡付着	17C後半		189	SB1308	彦佐瓦原花束	見出窓(窓)の輪調方	17C1/4
	183	SX12B1	肥前窯束手小瓶	高台内に天明年製、跋	16C		190	SB1308	甘能鍋彦白釉萬文環	ジンマー付多い	17C1/4
	184	SX12B1	彦佐瓦原束手草花文鏡	高台内に○印・背付、跋	16C後半		191	SB1308	彦津彦青釉瓶	内外面に点々タキ	17C1/4
11	185	SX12B1	彦津彦青綠釉瓶	見込み付の目脚網状	17C後半	13	192	SB1306	彦津彦淡黄釉萬文鏡	見出窓(窓)に露窓	17C1/4
	186	SX12B1	蘇口美濃窯白・茶脚網状分大入		16C		193	SB1306	彦津彦淡黄釉萬文鏡	見出窓(窓)に露窓	17C1/4
	187	SK1206	上脚質面	跡止付切削			194	SB1305	彦津彦淡黄釉瓶	見出・露窓(窓)・高台内肥厚	17C1/4
	188	SK1206	上脚質面	口縁部部にスグリ×所付着			195	SB1305	彦津彦淡黄釉反覆	見込・露窓(窓)付跡各2	17C2/4
	189	SK1206	彦津彦淡黄釉瓶	見・高台付口縁網状・足底に跡目2以上・背付に跡目3以上	17C後半~18C		196	SB1305	蘇口美濃窯汎輪網紋鏡	見出窓(窓)の輪調方 高台付トランボあり	17C1/4
	190	SK1206下層	彦佐瓦原束手草花文鏡	高台内・天明年製、跋 背付に跡付着	17C後半		197	SB1305	御影工研淡黄釉萬文鏡	口縁部に重ね焼き痕 上脚に露窓?	17C1/4
	191	SK1206下層	肥前窯束手火照文鏡	二次焼成?	17C後半		198	SB1306・1309	上脚質面	内面一定方向ナメ	
	192	SK1206下層	折脚伊万里垂枝草花文鏡		17C2/4		199	SB1306・1309	上脚質面	内面一定方向ナメ	
	193	SK1206下層	折脚伊万里垂枝瓶	背付に跡付着	17C2/4		200	SB1306・1309	上脚質面	内面一定方向ナメ	
	194	SK1206下層	折脚伊万里垂枝口字文鏡	背付に跡付着	17C2/4		201	SB1306・1309地土層	彦津彦淡黄釉向付	見込・露窓(窓)	17C1/4
12	195	SK1206	彦佐瓦原束手草花文鏡		16C	13	202	SB1308b	彦津彦瓶	見込に點打II 二次焼成?	17C1/4
	196	SK1206	丹波焼小壼		17C		203	SB1308	彦津彦青釉瓶	孫蕃蒔繪?	17C1/4
	197	SK1206	福室立・東京深褐釉串		17C1/4		204	SB1308	蘇口美濃窯汎輪網羅	見出・露窓(窓)・高台内トランボ	17C1/4
	198	SK1206下層	肥前窯束手鉢				205	SB1308	鐵部付鉢	内面に舟目 二次焼成	17C1/4
	199	SK1206	丹波焼				206	SB1308	甘能鍋彦白釉萬文環	ジンマー付多い	17C1/4
	200	SB1304地土層	上脚質面	内面一定方向ナメ			207	SB1308	上脚質面	内面一定方向ナメ	
	201	SB1304・1305地土層	彦津彦淡黄釉萬文鏡		17C1/4		208	SB1308	上脚質面	内面一定方向ナメ	
	202	SB1304・1305地土層	彦津彦淡黄釉萬文鏡	二次焼成	17C1/4		209	SB1308	上脚質面	内面一定方向ナメ	
	203	SB1304地土層	彦津彦淡黄釉萬文鏡	見品に點打II 二次焼成	17C1/4		210	SB1309±マド	上脚質面	内面一定方向ナメ	
	204	SB1304・1305地土層	志野良鉢	見品に目脚	17C1/4		211	SB1309±マド	上脚質面	内面一定方向ナメ	
13	205	SB1304・1305地土層	志野良鉢		17C1/4	13	212	SB1309	彦津彦淡黄釉萬文鏡	△次焼成	17C1/4
	206	SB1305地土層	彦津彦内付付	背付に點打II 二次焼成	17C1/4		213	SB1309	彦津彦淡黄釉萬文鏡	見込に點打II 二次焼成	17C1/4
	207	SB1304地土層	彦津彦淡黄釉天日鏡	△次焼成	17C1/4		214	SB1309±マド	彦津彦淡黄釉萬文鏡	見込・露窓(窓)	17C1/4
	208	SB1304地土層	彦津彦淡黄釉萬文鏡	△次焼成	17C1/4		215	SB1309地土層	彦津彦淡黄釉萬文鏡	見出・露窓(窓)・高台付トランボ	16C後半
	209	SB1308	上脚質面	内面一定方向ナメ			216	SB1309	蘇口美濃窯汎輪網羅	見品・凹形輪調方 二次焼成?	17C1/4
	210	SB1309±マド	上脚質面	内面一定方向ナメ			217	SB1309	志野良石瓶丸向		17C和
	211	SB1309±マド	上脚質面	内面一定方向ナメ			218	SB1309	董州青花束手文接花瓶	高台内・露窓(窓)	15C後半
	212	SB1309	彦津彦淡黄釉萬文鏡								
	213	SB1309	彦津彦淡黄釉萬文鏡								
	214	SB1309±マド	彦津彦淡黄釉萬文鏡								

北朝印 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	北朝印 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	
	219	SB1309	碧玻璃青花花鳥文瓶		17C1/4		256	SK1335(SB1355/9)	高円美濃青花梅瓶			17C2/4
	220	SB1309	片流直火入	口縁部に刻文書	17C		257	SK1335(SB1355/0)	御厨工刷毛筆利	内面印文又タリケ 碧玻璃の如薄い		17C1/4
	221	SB1309	上脚鉢		17C		258	SK1335(SB1355/1)	碧玻璃青花の花文瓶	二次焼成		17C1/4
	222	SB1309-9マツ	碧玻璃鉢	墨印本 二次焼成	17C1/4		259	SK1335(SB1355/2)	碧玻璃青花付舟	二次焼成		17C1/4
13	223	SB1308-1309上層	絵唐津灰釉付舟		17C1/4		260	SB1411	上脚質皿	口縁部に2+所スカリ		
	224	SB1408-1409	高円美濃青花花鳥文瓶		17C1/4		261	SB1411	碧玻璃青花丸皿			17C1/4
	225	SB1408-1409	御厨工刷毛筆利	見込に墨印本	17C1/4		262	SB1411	碧玻璃青花灰釉	高台内ノッキング有 舟付灰砂付舟		17C1/4
	226	SB1408-1409	瓦質火鉢	墨印			263	SB1413	碧津青花灰釉			17C1/4
	227	SB1408-1409	碧玻璃鉢	墨印本	17C1/4		264	SB1312	上脚質皿	内面一定方向ナメ		
	228	SB1310	上脚質皿	内面一定方向ナメ 内面にスカリ多個付舟			265	SB1312	上脚質皿	内面一定方向ナメ 口縁部にコ+所スカリ		
	229	SB1310	高円美濃青花灰釉	内面内ノッキング有 高台内トントン瓶	17C1/4		266	SB1312	上脚質皿	内面一定方向ナメ 内面・口にスカリ		
	230	SB1310	高円美濃青花灰釉	高台内トントン瓶	17C1/4		267	SB1312上層	上脚質皿	赤切底		
	231	SB1310	志野黄白釉茶碗	高台内 足部に小さな切妻	17C1/4		268	SB1312	碧津灰灰釉	二次焼成、内面に紅か?		17C1/4
	232	SB1310	唐津小懶利	瓶部にロココ口飾	17C1/4		269	SB1312	碧津青花灰丸皿	見込に墨上目 二次焼成		17C1/4
	233	SB1310	碧玻璃利	内面内ノッキング有 瓶部にコマホ、底部に雲雷文	17C1/4		270	SB1312地・上層	碧津青花方圓入付	二次焼成		17C1/4
	234	SB1310	碧玻璃大利	瓶部に墨印本	17C1/4		271	SB1312地・上層	碧前質皿			17C1/4
	235	SB1332	上脚質皿	内面一定方向ナメ 口縁部にスカリ付舟			272	SB1312地・上層	上脚質皿	外面に墨付舟	16C後半	
	236	SB1332	上脚質環	赤切底、内面にや二枚共スカリ しき状の付舟着あり			273	SB1312地・上層	津州白磁粗足盤	二次焼成、青釉貼付舟		17C1/4
	237	SB1332	唐津空透灰灰丸皿	高台内央付 二次焼成	17C1/4		274	SB1312地・上層	碧徳鐵青花紋波文瓶	高台内ノッキング有 渾沌心		17C1/4
	238	SB1332	高円美濃青花灰釉		17C1/4		275	SB1312地・上層	御厨工刷毛筆利	見込に墨印本以上		17C1/4
	239	SB1332	高円美濃青花灰丸皿		17C1/4		276	SB1414	上脚質皿	内面一定方向ナメ		
	240	SB1332	碧玻璃青花灰波文瓶	高台内 内面に角舟付	17C1/4		277	SB1414	上脚質皿	内面一定方向ナメ 口縁部にスカリ		
	241	SB1333	上脚質皿		17C1/4		278	SB1414	上脚質皿	内面一定方向ナメ		
14	242	SB1333地・上層	唐津空透灰瓶	見込に墨印本223.3.	17C1/4		279	SB1414P	上脚質皿			
	243	SB1333地・上層	高円美濃青花灰瓶	尾高・高台内に墨書有	17C2/4		280	SB1414P	碧津空透瓶	見込に墨11日 口縁部に打ち欠きあり		17C1/4
	244	SB1333地・上層	碧玻璃小懶利	瓶内に岸 係部に穴の修復痕跡あり	17C1/4		281	SB1414P	碧津空透瓶	見込に墨11日上		17C1/4
	245	SB1335	上脚質皿	内面一定方向ナメ 口縁部の一部にスカリ付舟			282	SB1414	碧津空透瓶			17C1/4
	246	SB1335地・上層	碧津空透瓶	内面二 次焼成	17C1/4		283	SB1414P	志野質皿	見込・舟付に日跡有		17C1/4
	247	SB1335	志野黄白釉茶碗	瓶部に日跡3	17C1/4		284	SB1314	碧津瓶			17C1/4
	248	SB1335	碧津空透瓶	高台内央付	17C1/4		285	SB1414P	碧津空透瓶	赤切底 口縁部に行打ち欠きあり		17C1/4
	249	SB1335地・上層	碧津空透瓶	舟付に墨品墨有	17C1/4		286	SB1414P	上脚質皿	外面二次焼成により酒甕多い		17C1/4
	250	SB1335地・上層	津州青花文字文瓶		17C1/4		287	SB1414P	碧徳鐵青花梅瓶		16C	
	251	SB1335地・上層	碧葉青花瓶	内面青花 高台内瓶の日輪酒芳 二次焼成	15C後半		288	SB1314	碧前質皿	外画重ね焼き有 外画にヘア記号? あり		17C1/4
	252	SB1335地・上層	絵唐津片口瓶		二次焼成		289	SB1414	碧前質皿	墨印本 墨分付有		17C1/4
	253	SB1335地・上層	碧前質舟入	瓶部にコマホ	17C1/4		290	SB1415	舟前質鉢	墨印本後手	16C後半	
	254	SK1335 [SB1335/4]	上脚質皿	内面一定方向ナメ 内面に舟にスカリ付舟			291	SB1415	上脚質皿	口縁部内面に5+所スカリ		
	255	SK1335 [SB1335/5]	高円美濃青花灰瓶	見込に丁字瓶	17C1/4		292	SB1315墨付	上脚質皿	内面一定方向ナメ		

地圖 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	地圖 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
293	SBH415	土師質鏡	内面一定方向ナガ			300	SBH317	志野黄石軸桿	赤灰陶 体部外側に目撃有 内面に鉛跡？		17C1~4
294	SBH415	土師質鏡	脚立式鏡面(口縁部にスス付)有			301	SBH317	轟江美濃窯灰陶花文鏡	内面に文 未著色		17C1~4
295	SBH415M	土師質鏡	内面一定方向ナガ			302	SBH317	津州吉原花折花文鏡			17C1~4
296	SBH415B	土師質鏡	脚立式鏡面(口縁部にスス付)有 備考:赤陶鏡 長底に他、或は備考:内面に黒点状の凹凸が多。(SUS付)の記述			303	SBH317	瀬州吉原白磁器反覆	見立船の日輪模写		17C1~4
297	SBH415	吉津宮御鏡丸鏡	見込に點々目付?	17C1~4		304	SBH317	備前吉野利	高台内に黒印(?)有		17C2~4
298	SBH415	吉津宮御鏡丸鏡	見込に點々目付3	17C1~4		305	SBH317	備前吉野利	二次焼成		16C後半
299	SBH415	吉津宮御鏡丸鏡		17C1~4		306	SBH317	備前吉野利	肩部にゴマ斑、身付		16C後半
300	SBH415カツド	吉津宮御鏡丸鏡		17C1~4		307	SBH318	土師質鏡	内面一定方向ナガ		
301	SBH415カツド	備前吉野利	底部外側に貫通しない孔在	17C1~4		308	SBH318	土師質鏡	内面一定方向ナガ 全体にスス付有する		
302	SBH315櫻村	備前吉野口跡	注口部・外側に茎ねじき板、ハーフ取扱り	17C1~4		309	SBH318地上層	土師質鏡	赤切版		
303	SBH415	備前吉野縪	外側に茎ねじき板	16C4~4		310	SBH318地上層	土師質鏡	赤切版 内外側の一層にスス付有する		
304	SBH415M	備前吉野縪	内面衝し焼風	17C1~4		311	SBH318	吉津宮御鏡丸鏡	見込に點々目付4	17C1~4	
305	SBH315・1316埋	丹波宮御鏡	羅日本一本抜	16C後半		312	SBH318	吉津宮御鏡丸鏡		16C末~17C1~4	
306	SBH316	土師質鏡	赤切版 内面にスス付有する			313	SBH318カツド	吉津宮御鏡丸鏡	7寸程度 見込に點々目付3	17C1~4	
307	SBH316	土師質鏡	内面一定方向ナガ 内外側に黑色点状の有彩色			314	SBH318地上層	吉津宮御鏡丸鏡	見込に点々目付3上 脊部黒斑、身付赤斑	17C2~4	
308	SBH316	吉津宮御鏡丸鏡	花幅?	17C1~4		315	SBH318	轟江美濃窯灰陶花文鏡	見立船の日輪模写 高台内にナラン板	17C1~4	
309	SBH316	吉津宮御鏡	二次焼成	17C1~4		316	SBH318地上層	吉津宮御鏡	身付に點々目	17C1~4	
310	SBH316	轟江美濃窯灰陶丸鏡	見込に形輪調刮見込・高台内ともトラン板	17C1~4		317	SBH318	備前吉野入		16C末~17C1~4	
311	SBH316	轟江美濃窯灰陶折縫菊模	見込に形輪調刮見込・高台内トラン板	17C1~4?		318	SBH318	備前吉野縪	羅日本1本 外側に茎ねじき板	16C後半	
312	SBH316	轟江美濃窯灰陶質鏡	見込に形輪調刮見込・高台内ともトラン板	17C1~4		319	SBH318地上層	並頭吉野白縪	見立船の日輪模写	17C1~4	
313	SBH316	轟江美濃窯灰陶瓦鏡		17C1~4		320	SBH318	土師質鏡	内面一定方向ナガ		
314	SBH316	備前吉野縪	羅日本1本 内面ゴマ斑 外側に茎ねじき板	17C1~4		321	SBH322	土師質鏡	内面一定方向ナガ 外側にスス付有する		
315	SBH316	津州吉原花文鏡	見込に点々目付	17C1~4		322	SBH322	土師質鏡	内面一定方向ナガ		
316	SBH316	其他備前吉原	高台内ノックイン板	16C後半		323	SBH322	津州吉原花文鏡	赤切版		
317	SBH316	備前吉野粗面	高台内松の日輪模写	17C1~4		324	SBH322	津州吉原花文鏡	赤切版		
318	SBH316	朝鮮王朝製鏡	内面同心丸文タテキ 瓢箪形高台 手練り込み	17C1~4		325	SBH322	津州吉原花文鏡	内面一定方向ナガ		
319	SBH316	柏原伊万里白磁打文鏡	二次焼成、身付に身付有	17C2~4		326	SBH322・1323同敷地	並頭吉野青花鳥文鏡	高台内ノックイン板	17C1~4	
320	SBH316	柏原伊万里白磁打文鏡	身付身付有	17C2~4		327	SBH322・1323同敷地	並頭吉野青花鳥文鏡	高台内に赤色器皿、高台内ノックイン板	17C1~4	
321	SBH417	土師質鏡	内面一定方向ナガ 口縁部にスス付有する			328	SBH322・1323同敷地	並頭吉野青花鳥文鏡	口縁部に身付有	17C1~4	
322	SBH317	土師質鏡	内面一定方向ナガ 内面にスス付有する			329	SBH322・1323同敷地	吉津宮御鏡	口縁部に身付有	17C1~4	
323	SBH317・1318埋	土師質鏡	ロクロ底形?			330	SBH423	土師質鏡	内面一定方向ナガ 内面にスス付有する		
324	SBH417	吉津宮御鏡		17C後半		331	SBH423	土師質鏡	内面一定方向ナガ 全体にスス付有する		
325	SBH417	吉津宮御鏡丸鏡		17C後半		332	SBH423	土師質鏡	内面一定方向ナガ 全体にスス付有する		
326	SBH316・1317埋	吉津宮御鏡丸鏡	見込に點々目付以上 身付に身付	17C1~4		333	SBH423	土師質鏡	内面一定方向ナガ 全体にスス付有する		
327	SBH317・1318埋	吉津宮御鏡丸鏡	見込に点々目付上、身付に身付	17C1~4		334	SBH423B	土師質鏡	内面一定方向ナガ		
328	SBH317	吉津宮御鏡	見込に点々目付上、見込に点々目付	17C1~4		335	SBH423	土師質鏡	内面一定方向ナガ		
329	SBH317	吉津宮御鏡丸鏡	見込に点々目付 上見込に点々目付	17C1~4		336	SBH423	土師質鏡	藤本切丸		

出土地番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時期	出土地番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時期
307	SB1423	土師質板	一定方向ナガ 口縁部に火打孔、内面に火打孔付			404	SB1324・1325埋	伊勢國須佐花人物支柱	舟形瓦に砂付各 1箇面	17C1-4	
308	SB1423	吉津宮焼触瓶	骨付に胎生目跡?		17C1-4	405	SB1428	伊勢國須佐花文瓶	高台内ノッキング板	17C1-4	
309	SB1323	吉津宮焼触瓶			17C1-4	406	SB1428	關江流域窯白磁瓶		15C後半	
310	SB1423	關江美濃燒天目瓶			17C1-4	407	SB1428	銀解工焼触瓶裏蓋		17C1-4	
311	SB1423	吉津宮焼触瓶丸瓶	口縁部に打ち欠きあり		17C1-4	408	SB1325	土師質板	内面一定方向ナガ		
312	SB1323	吉津宮焼触瓶丸瓶	西面に唇物多い 口縁部に打ち欠きあり		17C1-4	409	SB1325	土師質板	赤切版		
313	SB1323	吉津宮焼触瓶丸瓶	見込み胎生目付?		17C1-4	410	SB1325	吉津宮焼触瓶丸瓶	見込み胎生目付上、二次焼成 口縁部に打ち欠きあり	17C1-4	
314	SB1423	吉津宮焼触瓶			17C1-4	411	SB1425	吉津宮焼触瓶丸瓶(墨者)	高台内に墨者「井」	17C1-4	
315	SB1323	關江美濃燒灰釉瓶	見込み円形輪脚窓 瓶底にトタン板		17C1-4	412	SB1425	吉津宮焼触瓶丸瓶	見込み胎生目付上	17C1-4	
18	316	SB1323	關江美濃燒灰釉觸瓶	見込み円形輪脚窓 瓶底にトタン板	17C1-4	413	SB1325ビット	吉津宮燒触瓶		17C1-4	
	317	SB1323	伊勢國須佐花瓶灰釉		16C後半	414	SB1425	關江美濃燒灰釉觸瓶	見込み円形輪脚窓 高台内トタン板	17C1-4	
	318	SB1423	津州望古磁花瓶	見込み胎生目付	17C1-4	415	SB1325	吉津宮燒灰釉瓶	見込み胎生目付	17C1-4	
	319	SB1323	伊勢國須佐花瓶灰釉		16C後半	416	SB1325ビット	吉津宮燒瓶	見込み胎生目付上吉田杏13.1. 二次焼成	17C1-4	
	320	SB1323	關前宮灰釉	内面に乳筋付(乳管)	17C1-4	417	SB1425	伊勢國須佐花瓶灰釉		17C1-4	
	321	SB1423	土師質脚付瓶	三脚 内面側多量に付着		418	SB1425	伊勢國須佐花瓶	瓶の日輪窓	1620年代	
	322	SB1323	土師質胎	外面に瓶身有	17C	419	SB1425	伊勢國須佐花不死鳥文瓶	内面にシカモア多い 高台内ノッキング板	17C1-4	
	323	SB1423	土師質胎	瓶底二段底?	16C後半	420	SB1425	吉州窑青白釉點字支撑	見込み赤地「龍」 骨付付脚付	17C1-4	
	324	SB1323	土師質胎	内面瓶付着	16C後半	421	SB1425	銀解工焼触瓶裏蓋	口縁部に日輪? あり	17C1-4	
	325	SB1423	關前宮灰瓶	瓶口9本	17C1-4	422	SB1425	土師質長颈瓶	赤足底		
	326	SB1324ビット	土師質板	内面一定方向ナガ 口縁部に火打孔付		423	SK1302(街路3北側)	土師瓶	内面一定方向ナガ 口縁部に 火打孔付と火打孔付		
	327	SB1324・1325埋	土師質板	内面一定方向ナガ 口縁部に打ち欠きの可逆性あり		424	SK1302(街路3北側)	土師瓶	内面一定方向ナガ 口縁部の 火打孔付と火打孔付		
	328	SB1324	土師質板	内面一定方向ナガ		425	SK1302(街路3北側)	土師瓶	赤切版 瓶底付付の内面側と もにニギ リス付付		
	329	SB1324ビット	土師質板	内面一定方向ナガ 口縁部に火打孔付		426	SK1302(街路3北側)	土師瓶	赤足底		
	330	SB1324	土師質板	内面一定方向ナガ 内面スカリ付に付着		427	SK1302(街路3北側)	土師瓶	静止状況		
	321	SB1324	土師質板	内面一定方向ナガ		428	SK1302(街路3北側)	土師瓶	赤切版		
	332	SB1424B	土師質板	内面一定方向ナガ		429	SK1302(街路3北側)	吉津宮燒灰釉天目瓶	二次焼成	17C1-4	
	333	SB1424B	土師質板	内面一定方向ナガ		430	SK1302(街路3北側)	關江美濃燒灰釉天目瓶	見込み胎生灰釉 口縁部に打ち欠きあり	17C1-4	
19	334	SB1324・1325埋	土師質板	赤切版、ロクロ左回転か?		431	SK1302(街路3北側)	吉津宮燒茶葉瓶	胎土と砂目の使用? 骨付付赤足	17C1-4	
	335	SB1424	土師質中瓶			432	SK1302(街路3北側)	片渕灰火入		17C前	
	336	SB1424	吉津宮焼触瓶灰瓶	見込み胎生目付	17C2-4	433	SK1302(街路3北側)	吉州青花布字文瓶		17C1-4	
	337	SB1324・1325埋	吉津宮焼触瓶灰瓶	見込み胎生目付 口縁部に打ち欠きあり	17C2-4	434	SK1302(街路3北側)	伊勢國須佐玉和瓢文瓶	高台内に付基盤 二次焼成	16C後半	
	338	SB1424	吉津宮焼触瓶灰瓶		17C1-4	435	SK1302(街路3北側)	伊勢國須佐花布字文瓶	高台内に付基盤	17C1-4	
	339	SB1424	吉津宮焼触瓶灰瓶		17C1-4	436	SK1302(街路3北側)	伊勢國須佐花布字文瓶	高台内にノッキング板 骨付付に付着	17C1-4	
	340	SB1424	志野黄釉瓶	二次焼成?	17C1-4	437	SK1302(街路3北側)	伊勢國須佐花折口瓶		17C1-4	
	341	SB1424	關江美濃燒灰天目瓶	内面に胎生付(乳管)	16C中	438	SB1331	土師質板	口縁部にスヌ付着 中央に凹状付		
	342	SB1424	關前宮灰瓶	見込み胎生付	17C1-4	439	SB1331	土師質板	口縁部に付基盤 スヌ付着		
	343	SB1324・1325埋	土師質板?	内面側多量に付着 つまみあり	17C	440	SB1331小灰瓶	内面一定方向ナガ			

地點 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	地點 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
	401	SB1331小汎画	上絵質刷	内面一定方向ナメ			478	SB1332	漆前背景紙	羅目9本 内面襯付書	17C1-8
	402	SB1331小汎画	上絵質刷	内面一定方向ナメの抜ナギ酒し			479	SB1332カマド	漆前背景紙	羅目・底革に墨印 内面に鉛 目・無脱・鉛板・銅板入り	17C1-8
	403	SB1331小汎画	漆津波灰刷織	二次焼成・外面に堆付巻	17C1-4		480	SB1332	漆前墨水屋敷	二次焼成?	16C後?
	404	SB1331小汎画	漆津波灰刷織		17C1-4		481	SB1332地・上刷	漆州唐花折枝文瓶	ビンホーラ季?	17C1-4
	405	SB1331小汎画	漆津波灰刷丸頭	見込・底部に勅土日3	17C1-4		482	SB1332	漆州唐花		17C1-8
	406	SB1331小汎画	漆津波灰刷丸頭	見込に勅土日3	17C1-4		483	SB1332カマド	漆州唐花扇形		17C1-8
	407	SB1331小汎画	唐津波灰刷丸頭	見込に勅土日3	17C1-4		484	SB1332	漆州唐白扇形反織	見込部の日輪調テ ノッキング板	17C1-4
	408	SB1331	唐津波灰刷丸頭	見込に跡口3・葉ねき板あり 側幅・側底部	17C1-4		485	SB1332カマド	漆州唐花不死鳥文彫	骨付に近似に砂多量に付着	17C1-4
	409	SB1331	漆川美濃波灰刷織絞	見込に形彌縫等 高台内トキン板	17C1-4		486	SB1332カマド	漆前三脚盤	船橋・上手	16C4-8
20	410	SB1331小汎画	柳井美濃波灰刷織	見込に形彌縫等 高台内トキン板	17C1-4		487	SB1333	上絵質刷	内面一定方向ナメ 内面ニヨリ秋スヌが付着	
	411	SB1331小汎画	起正肝瓦石軸刷	見込に日脚2・高台内に日脚1	17C1-4		488	SB1333	上絵質刷	内面一定方向ナメ 外表面部に内面にスヌ付着	
	420	SB1331	漆前墨水滴	底に青色 布入に使用か?	17C1-4		489	SB1333	漆津波灰刷織		17C1-8
	433	SB1331小汎画	丹波芦片口垂	漆刷	17C1-4		490	SB1333	漆津波灰刷織	見込に跡口	17C1-8
	434	SB1331小汎画	唐津波灰刷丸頭	二次焼成・輪郭表面部分多い	17C1-4		491	SB1333	漆津波灰刷織	見込に跡口2以上	17C1-4
	435	SB1331小汎画	漆前墨絞	内面黒刷により見掛け	16C後半		492	SB1333	漆津波灰刷絞	二次焼成・向付?	17C1-4
	436	SB1331地・上刷	漆津波灰刷花折枝文瓶	二次焼成	17C1-4		493	SB1333	直地・上刷質・三脚盤	内面二次焼成・底部赤鉄	17C代
	437	SB1331小汎画	漆州唐花折枝文瓶	骨付に跡口3	17C1-4		494	SB1333	漆前質刷	底部に墨印	17C1-4
	438	SB1331 10 リ	漆津波灰刷花瓶	高台内ノッキング前板 骨付に跡口3	17C1-4		495	SB1333	漆津波里奈付枝子花瓶		17C2-4
	439	SB1331内・上刷	丹波芦片	内面柄上筋板あり	17C後半		496	SB1333	漆削伊万里奈付文瓶	外表面付多い	17C2-4
	460	SB1332カマド	上絵質刷				497	SB1333	上絵質刷	口縁部に1~2枚スヌが付着する	
	461	SB1332	上絵質刷	内面一定方向ナメ 口縁部に1~2枚スヌ付着			498	SB1333	漆津波灰刷	赤切版	17C1-4
	462	SB1332地・上刷	上絵質刷	内面一定方向ナメ 口縁部に2~3枚スヌ付着			499	SB1333	漆津波刷	見込に勅土日2以上	17C1-4
	463	SB1332地・上刷	上絵質刷	内面一定方向ナメ 底部に地刷後弦孔が1~2個あり			500	SB1333	漆津波灰刷織反織	見込に勅土日	17C1-4
	464	SB1332	上絵質刷	内面一定方向ナメ 植シニ 伏のスヌ内縁部に付着			501	SB1333	漆津波灰刷丸頭(墨印)	見込に勅土日・高台内に墨印	17C1-4
	465	SB1332カマド	上絵質刷	静止式切版 安価スヌ量多く付着			502	SB1333	柳井美濃波灰刷丸脚	口縁部に打ち欠きあり	17C1-4
	466	SB1332	上絵質刷	漆刷			503	SB1333	漆津波灰刷丸頭		17C1-4
	467	SB1332	上絵質刷	漆刷			504	SB1333	漆解王柄白扇形	見込・骨付に跡口3以上	17C1-4
	468	SB1332	上絵質刷	漆刷			505	SB1333	丹波芦片脚	羅目1本残り	16C後半
	469	SB1332	唐津波灰刷丸頭		17C1-4?		506	SB1333	漆津波灰刷花?		17C1-4
	470	SB1332	唐津波灰刷丸頭		17C1-4		507	SB1334内・上刷	上絵質刷	内面一定方向ナメ	
	471	SB1332カマド	唐津波灰刷丸頭	見込に勅土日3 二次焼成	17C1-4		508	SB1334内・上刷	上絵質刷	内面一定方向ナメ 内面底部に2~3枚スヌが付着	
	472	SB1332	唐津波灰刷丸頭	見込に勅土日2以上 二次焼成	17C1-4		509	SB1334内・上刷	上絵質刷	静止式切版 内面内縁部に2~3枚スヌ付着	
	473	SB1332カマド	唐津波灰刷織		17C1-4		510	SB1334内・上刷	上絵質刷	漆刷	
	474	SB1332地・上刷	静津波灰刷織		17C1-4		511	SB1334内・上刷	藍染津波灰刷丸頭	口縁部に打ち欠きあり	17C1-4
	475	SB1332	上絵質刷	静津波灰刷織	見込に日脚3以上 高台内に墨印	17C1-4	512	SB1334内・上刷	漆津波灰刷丸頭	見込に勅土日3 二次焼成?	17C1-4
	476	SB1332	上絵質刷	内面に重ね書き有り	17C1-4		513	SB1334	漆津波墨	見込に勅土日2以上 口縁部に打ち欠きあり	17C1-4
	477	SB1332	漆前質	内面に重ね書き有り	17C1-4		514	SB1334	漆津波内	見込津波内	17C1-4

北朝	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	北朝	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
22	505	SB1334	吉津京灰釉刷毛口支条柄		17C1/4	502	SK1327	上脚質瓶	内面一定方向ナガ 口縁部にスヌ多様に付着		
	506	SB1334	吉津京青花花文瓶	瓶子軸周	17C1/4	503	SK1327	上脚質瓶	内面一定方向ナガ 全体にスヌ付着		
	507	SB1361	上脚質瓶	内面一定方向ナガ 口縁部スヌ多様に付着		504	SK1327	吉津京灰釉瓶	見込み付着に多い		17C1/4
	508	SB1361イヨリ	上脚質瓶			505	SK1327	吉津京灰釉丸瓶	見込み軸上目33上、底盤?		17C1/4
	509	SB1361イヨリ	上脚質瓶	静止系留瓶		506	SK1327	絵吉津瓶	見込み軸上目4		17C1/4
	510	SB1361	上脚質瓶	静止系留瓶		507	SK1327	吉津京灰釉瓶	見込み静止系留者		17C1/4
	501	SB1361イヨリ	上脚質瓶			508	SK1327	絵吉津瓶			17C1/4
	502	SB1361イヨリ	裏系留瓶系瓶	内面黒墨 灰釉一滴落とす	17C1/4	509	SK1327	絵吉津灰瓶	見込み軸上目23上、 二次底?		17C1/4
	503	SB1361	吉津京灰釉小瓶	見込み軸上目	17C1/4	510	SK1327	吉津京灰瓶			17C1/4
23	504	SB1361イヨリ	静止系留瓶丸瓶	高台内にトランボ	17C1/4	511	SK1327	絵吉津瓶			17C1/4
	505	SB1361	豊後京灰花牡丹草文壺	花文	18C	512	SK1327	吉津京灰瓶			17C1/4
	506	SB1361	上脚質抱持	内面黒い	18C後半	513	SK1327	吉津京灰瓶			17C1/4
	507	北朝昌子下肩持地瓶	上脚質瓶	内面の口縁部にスヌ開き付		514	SK1327	吉津京灰瓶	見込み静止系留者		17C1/4
	508	北朝昌子下肩持地瓶	吉津京灰釉持地瓶	見込み静止系留者付着に静	17C2/4	515	SK1327	瓦質火鉢	外側上部なへや書き		17C
	509	北朝昌子下肩持地瓶	丹波黒提鉢	墨書き一本書き 内面底ね書きの底盤凹痕	18C後半	516	SK1327	上脚質抱持	外側に運付着		17C前半
	510	北朝昌子下肩持地瓶	丹波黒提鉢	すり目5.6、口縁部内側に墨印 レーリー一次底成?	17C1/4	517	SK1327	吉津京灰釉持地瓶	見付に静止系留者 見込み付着物有(沙且?)		17C1/4
	511	北朝昌子下肩持地瓶	新嘉小袖形	体表に唐打(?)	17C1/4	518	SK1327	上脚質瓶	内面一定方向ナガ		
	512	SK1325	上脚質瓶	内面一定方向ナガ 口縁部に3ヶ所打ち欠き		519	SK1325	吉津京灰釉瓶	二次底?		17C1/4
	513	SK1325	上脚質瓶	内面一定方向ナガ		520	SK1325	相模伊万里条付瓶	静付に静付着		17C2/4
	514	SK1325	上脚質瓶	口縁部に3ヶ所打ち欠き付 墨書き付(ロクロ不燃成?)		521	SK1325	肥前京灰付瓶			17C前半
	515	SK1325	吉津京灰瓶			522	SK1313	升液灰火入			17C前半
	516	SK1325	吉津京灰瓶			523	SK1313	升液灰鑑			17C後半
	522	SK1325	吉津京灰瓶	口縁部に打ち欠きあり	17C1/4	524	SK1307	上脚質瓶	希切版		
	518	SK1325	吉津京灰瓶	二次底成? 表面継割	17C1/4	525	SK1307	上脚質瓶	希切版		
	519	SK1325	吉津京灰瓶			526	SK1307	上脚質瓶	希切版		
	540	SK1325	静止京灰瓶	17C2/4		527	SK1307	上脚質瓶	静良な底土		
	541	SK1325	相模伊万里条付花鳥文瓶	17C2/4		528	SK1307	吉津京灰瓶			17C2/4
24	542	SK1325	吉津京灰瓶	見込み軸上目4	17C1/4	529	SK1307	御奈常大入			17C1/4
	543	SK1325	吉津京灰瓶	見込み軸上目23上	17C1/4	530	SK1307	相模伊万里条付瓶	静付に静付着		17C2/4
	544	SK1325	絵吉津瓶	見込み軸上目4	17C1/4	531	SK1307	相模伊万里条付花鳥文	静付に静付着 貫入り		17C2/4
	545	SK1325	吉津京灰瓶	見込み軸上目8	17C1/4	532	SK1305	上脚質瓶	内面一定方向ナガ		
	546	SK1325	吉津京灰瓶	見込み軸上目4	17C1/4	533	SK1305	吉津京白瓶	見込み軸上目4		17C2/4
	547	SK1325	豊後京灰花王取瓶	18C前		534	SK1305	吉津京花瓶			17C1/4
	548	SK1325	御奈常	17C1/4		535	SK1316	絵吉津瓶	見込み軸上目2以上		17C1/4
	549	SK1325	上脚質瓶	内面一定方向ナガ 二次底成?		536	SE1302	上脚質瓶	希切版 口縁部にスヌ付着		
	550	SK1325	吉津京灰瓶	静止京灰白瓶	17C2/4	537	SE1302	肥前常朱付瓶	静付に静付着		18C
	551	SK1327	上脚質瓶	内面一定方向ナガ 二次底成?		538	SE1302	肥前常朱付瓶	高台内に貫あり		18C

出土地番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	出土地番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
25	589	SEI302	直角足筒形小鉢	見込みにコニヤク洋芋	17C後半	27	620	SK1314	直徳納部青花文彫瓦瓶	高台内ノッキング瓶 瓶の内で焼けて無駄品発着か?	17C1-4
	590	SEI302	直角足筒形小鉢		17C後半		627	SK1314	直徳納部青花文彫瓦瓶	高台内ノッキング瓶 瓶の内で焼けて無駄品発着か?	17C1-4
	591	SEI302	ハトム世販陶器	輪上白土彫り込み 内面彫か い段あり	17C1-4		628	SK1314	直徳納部青花文彫瓦瓶	高台内ノッキング瓶 瓶の内で焼けて無駄品発着か?	17C1-4
	592	SEI302瓶形	丹波空器	口縁彫刻に重ね焼き痕?	17C後半		629	SK1314	直徳納部青花文彫瓦瓶	高台内ノッキング瓶 瓶の内で焼けて無駄品発着か?	17C1-4
	593	SEI302	上絵賀陶器		17C後半-18C?		630	SK1314	直徳伊万里焼付灰		17C2-4
	594	SEI302	丹波空器		18C		631	SK1318	直徳伊万里焼付青花瓶		17C2-4
26	595	SEI302	上絵賀陶器	赤切灰		28	632	SK1318	直徳美濃窯青釉彫瓦瓶	見込みに赤切灰	17C後半
	596	SEI302	上絵賀陶器	赤切灰			633	SK1318	直徳美濃窯青釉彫瓦瓶		17C後半
	597	SEI302	瓦灯	縁部左 二次焼成			634	SK1318	上絵賀陶器	全体外側に焼付青 内側に付着物あり	17C後半
	598	SEI308瓶形	上絵賀青花文彫	馬頭彫り 表面に津波痕あり	18C		635	SK1319	直徳美濃窯青釉彫瓦瓶	赤切灰 オリヅルのみ既物	17C9-10後半
	599	SEI303	直徳伊万里焼付灰		17C2-4		636	SK1326	直徳美濃窯青釉彫瓦瓶		17C1-4
	600	SEI303	丹波空器	羅目7本 細め細目有	17C後半		637	SK1326	直徳美濃窯青釉彫瓦瓶	見込みに駒上目4	17C1-4
	601	SEI305	直徳美濃窯青釉彫瓦瓶	直徳伊万里焼付 瓶底にはかとり焼?	17C1-4		638	SK1326	直徳伊万里焼付灰		17C2-4
	602	SEI305	直徳美濃窯青釉彫瓦瓶		17C1-4		639	SK1326	直徳美濃窯青釉	火拂	17C1-4
	603	SEI307	直角足筒形白土彫瓦瓶		17C後半		640	SK1329	直徳美濃窯青釉		17C1-4
	604	SEI307	直角足筒形青花文彫		17C後半		641	SK1329	直徳美濃窯青釉	見込みに駒上目4	17C1-4
27	605	SEI307	直徳美濃窯	口縁部のみ既物 羅目14本	17C前半		642	SK1329	直徳美濃窯青釉	星足柄の火拂灰 も焼付	17C1-4
	606	SEI306	上絵賀陶器	赤切灰 オリヅル間にスリ付着	18C代		643	SK1329	直徳美濃窯青釉	赤切灰 裏泥内側には焼け跡の 18縁部に付着	17C1-4
	607	SEI306	上絵賀陶器	赤切灰	18C代		644	SK1329	上絵賀陶器	内面一定方向ナメ 内面にスリ付着	17C1-4
	608	SEI306	直角足筒形青花文彫	直徳伊万里焼付青花 口縁部に打ち焼きあり	18C前		645	SK1329	上絵賀陶器	赤切灰 18縁部一面にスリ付着	17C1-4
	609	SEI306	直角足筒形青花文彫	高台内 大明万字款、澁 18縁部に打ち焼きあり	18C前半		646	SK1329	直徳美濃窯青釉	見込み・焼付に駒上目4	17C1-4
	610	SEI306	直角足筒形青花文彫	高台内 大明万字款、澁 高台内 駒上目4	18C前半		647	SK1329	直徳美濃窯青釉(紅拂)		18C
	611	SEI306	直角足筒形青花文彫	高台内 大明万字款、澁	18C前半		648	SK1329	直徳美濃窯青釉	成都市に贈付?	17C後半
	612	SEI306	直角足筒形青花文彫	口縁部に打ち焼きあり	18C前半		649	SK1329	直徳美濃窯青釉	内面に轟雲(雲雷?)	17C1-4
	613	SEI306	直徳美濃窯青花文彫	羅目にトランシット	18C後半		650	SK1329	直徳美濃窯青釉(小)	羅目ごとごの開脚広い 火拂	17C後半
	614	SEI306	直徳美濃窯青花文彫	見込みの口縁剥落	18C		651	SK1329	直徳美濃窯青釉	羅目6本 羅目ごとの開脚広い	17C後半
28	653	SK1301	直徳美濃窯	見込み	17C1-4		652	SK1329	直徳美濃窯青釉(小)	羅目6本 羅目ごとの開脚広い	17C後半
	656	SK1301	直徳伊万里焼付灰	見込みに付着	17C2-4		653	SK1329	直徳美濃窯青釉(小)	羅日本手 羅目ごとの開脚広い 火拂	17C後半
	657	SK1301	直徳伊万里焼付灰		17C2-4		654	SK1329	直徳美濃窯青釉(小)	羅目6本 火拂	17C後半
	658	SK1302	直角足筒形青花文彫		17C2-4		655	SK1329瓶形	直徳納部青花	高台内ノッキング瓶 發着に赤付	17C1-4
	659	SK1328	直徳美濃窯青釉	二次焼成	17C1-4		656	SK1329	直徳美濃窯青釉	全体に乳白色の物が少かる	17C1-4
	660	SK1328	直徳美濃窯	見込み	17C2-4		657	SK1329	直徳美濃窯青釉	赤切灰	17C1-4
	661	SK1309	丹波空器口付	内面に鉛附着(鉛張)	17C後半		658	SK1329	直徳伊万里焼付青花文 柄	發着に付着	17C2-4
	662	SK1317	直徳美濃窯(同付)	見込みに駒上目4 赤め剥れ有	17C1-4		659	SK1329	直徳美濃窯青釉	見込み・駒付に移各3目上	17C2-4
	663	SK1319	直徳美濃窯青釉	見込みに赤付青花文彫 18縁部に打ち焼きあり	17C後半		660	SK1329	直徳伊万里焼付灰	二次焼成?	17C2-4
	664	SK1320	直徳伊万里焼付内面	内面剥離	17C2-4		661	SK1329	丹波空器	1.5程度	17C1-4
29	665	SK1324	直徳美濃窯青釉	直徳伊万里焼付	17C後半		662	SK1329	直徳美濃窯青釉	内面一定方向ナメ 口縁部スリ付着	

地點	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	地點	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	
29	663	SX30H灰層	吉津堂清缺物類	骨付に砂目	17C2/4	30	680	SX304下層	吉津堂清缺物類	見ぬ・骨付に砂目各4	17C2/4	
	664	SX30H灰層	吉津堂白釉瓶	二次焼成?	17C2/4		684	SX304下層	吉津堂白釉瓶	見ぬ・骨付に砂目4	17C後半	
	665	SX30H灰層	吉津堂灰釉陶片	見ぬ・骨付に砂目各4	17C2/4		685	SX304下層	吉津堂白釉瓶	高台内にトナン板	17C前半	
	666	SX30H灰層	吉津堂灰釉陶片	見ぬ・骨付に砂目4上	17C2/4		686	SX304下層	吉津堂清缺物類	見ぬ	17C1/4	
	667	SX30H灰層	吉津堂灰釉瓶	見ぬ・骨付に砂目3上	17C2/4		687	SX304下層	吉津堂清缺物類	見ぬ	17C1/4	
	668	SX30H	吉津堂灰釉燒罐	見ぬ・骨付に砂目各2上	17C2/4		688	SX304下層	上層骨付器	外面復付有? 黒い	17C前半	
	669	SX30H	吉津堂清黃釉燒罐	見ぬ・骨付3 側面外面に砂目2上	17C2/4		689	SE310/SB14G3内井戸	吉津堂白釉瓶	見ぬ・骨付の日輪調ぎ 見ぬ・砂目	17C後半~18C前	
	670	SX30H灰層	吉津堂白釉花瓶	船の日輪調ぎ(天賀元年?)	1620年代		700	SE310/SB14G3内井戸	吉津堂白釉瓶	見ぬ・船の日輪調ぎ 見ぬ・砂目?	17C後半~18C前	
	671	SX30H灰層	吉津堂黑釉瓶	見ぬ・骨付3上 側面2+内 側面1+瓶 骨付に砂目無	17C2/4		701	SE310/SB14G3内井戸	吉津堂灰釉瓶口跡	片口縁付け茎足組	18C前半	
	672	SX30H灰層	吉津堂灰釉瓶	見ぬ・骨付3上 側面1+内 側面1+瓶 骨付に砂目無	17C2/4		702	SE310/SB14G3内井戸	吉津堂燒罐	瓶底に墨豎の落款「和」	18C中	
	673	SX30H	丹波燒	見ぬ・大口・垂ね焼き 瓶底に墨印	17C1/4		703	SE310/SB14G3内井戸	丹波燒罐	見ぬ	17C2/4	
	674	SX30H灰層	丹波燒火盆	17C後半			704	下層確認トレンチ	上層質層	内面一定方向ナガ?		
	675	SX30H灰層	丹波燒罐	罐口6本 底部に墨印?	17C1/4		705	下層確認トレンチ	上層質層	内面一定方向ナガ		
	676	SX30H灰層	上層質層	内面に墨印有 内面に凹い深い窓形多點	17C1/4		706	下層確認トレンチ	上層質層	内面一定方向ナガ		
31	677	SX304上層	上層質層	赤堀窯 内面全体にヤニ脱ス有		31	707	下層確認トレンチ	上層質層	静承未認		
	678	SX304上層	吉津堂灰釉瓶	二次焼成?	17C2/4		708	下層確認トレンチ	吉津堂青釉物丸瓶		17C1/4	
	679	SX304上層	吉津堂白釉大瓶		17C2/4		709	下層確認トレンチ	吉津堂白釉丸瓶	二次焼成?	17C1/4	
	680	SX304上層	吉津堂灰釉瓶	見ぬ・骨付に砂目各4 瓶底	17C2/4		710	下層確認トレンチ	静川美濃窯白釉質層	見ぬ・円形輪調ぎ 高台内にトナン板	17C1/4	
	681	SX304上層	吉津堂灰釉瓶	見ぬ・骨付3上 骨付付有(日輪?)	17C2/4		711	下層確認トレンチ	静川美濃窯白釉質層	罐口5本 内面焼成 外面に垂ね焼き有	16C末~17C1/4	
	682	SX304上層	吉津堂清燒罐	見ぬ・骨付3上 側面高台有 瓶底有	17C2/4		712	下層確認トレンチ	静川美濃窯白釉質層	罐口5本 垂ね焼き有	16C末	
	683	SX304上層	静川美濃窯白釉燒花瓶	見ぬの日輪調ぎ	17C2/4		713	下層確認トレンチ	吉津堂白釉花瓶	高台内にマッキンゲ瓶	17C1/4	
	684	SX304上層	吉津堂灰釉瓶	見ぬ・骨付3上(少不整)	17C2/4		714	下層確認トレンチ	吉津堂白釉花瓶		17C1/4	
	685	SX304下層	上層質層	内面一定方向ナガ 口縁部に 内面に墨印	17C2/4		715	下層確認トレンチ	吉津堂青花瓶(大)	見ぬ・骨付の日輪調ぎ ビンホルトあり	17C1/4	
	686	SX304下層	上層質層	内面一定方向ナガ 内面に薄くステグ有	17C2/4		716	下層確認トレンチ	吉津堂青花瓶	見ぬ・骨付の日輪調ぎ	17C1/4	
	687	SX304下層	上層質層	赤堀窯			717	下層確認トレンチ	静川上朝白釉茶碗	骨付・見ぬ・砂目各4	17C1/4	
	688	SX304下層	吉津堂白釉瓶	見ぬ・砂目?	17C1/4		718	下層確認トレンチ	静川上朝白釉茶碗	見ぬ・骨付に砂目4	17C1/4	
	689	SX304下層	吉津堂清黃釉瓶		17C2/4		719	下層確認トレンチ	静川上朝白釉茶碗	見入多い	17C1/4	
	690	SX304下層	吉津堂燒罐	見ぬ・骨付に砂目各3	17C1/4		720	下層確認トレンチ	静川上朝白釉茶碗	骨付・見ぬ・砂目2上	17C1/4	
	691	SX304下層	吉津堂青釉瓶	見ぬ・骨付に砂目各3	17C1/4		721	下層確認トレンチ	静川上朝白釉茶碗	見ぬ・砂目2上	17C1/4	
	692	SX304下層	吉津堂灰釉瓶	見ぬ・砂目4	17C1/4							

## 関屋町地区

発掘番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時期	発掘番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時期	
	722	SK2208	肥前青磁丸瓶	器物に串付着 花口コニャク印押五瓣花	18C後		758	第2-1-昔町町居地土解	上脚質鏡	内面一定方向ナガ 底部外縁にスス付着		
	723	SK2208	肥前青磁付皿	口縁粗目皿	18C		759	第2-1-昔町町居地土解	上脚質鏡	内面の半分以上にスス付着		
	724	SK2208	肥前青磁付茎文瓶		18C後		760	第2-1-昔町町居地土解	唐津清透磁釉杯		17C1-4	
	725	SK2208	肥前青磁付二重弦子文瓶		18C?		761	第2-1-昔町町居地土解	唐津青磁褐色小瓶	二次焼成?	17C1-4	
	726	SE2203	有地系上部花葉文瓶	つまみ付近に字孔2ヶ所あり			762	第2-1-昔町町居地土解	唐津青磁褐丸瓶		17C1-4	
	727	SK2206	肥前青磁付草花文瓶	コニャク印押 器物に串付着	18C前?		763	第2-1-昔町町居地土解	唐津青磁褐丸瓶	二次焼成	17C1-4	
	728	SK2206	肥前青磁付小坪	器物に串付着	18C		764	第2-1-昔町町居地土解	唐津清透磁釉瓶		17C1-4	
	729	SK2206	直底青磁付油瓶		18C2-4		765	第2-1-昔町町居地土解	唐津清透磁釉灰瓶	見込みに鉢土目	17C1-4	
32	730	SK2207	唐津青磁触頭瓶	見当部の口縁剥落	17C後手		766	第2-1-昔町町居地土解	唐津青磁触頭丸瓶	見込みに鉢土目2	17C1-4	
	731	SK2207	直底青磁付草花文瓶	高台向左大明字盤、底 器物に串付着	18C2-4		767	第2-1-昔町町居地土解	唐津青磁褐丸瓶	見込み手目4	17C2-4	
	732	SK2207	象嵌文花瓶	器物上部横に刻み手目2、香 炉	18-19C		768	第2-1-昔町町居地土解	唐津青磁多頭焰火口瓶	見込みに鉢土目3 二次焼成	17C1-4	
	733	SK2207	直底青磁束口花文瓶		18C後手		769	第2-1-昔町町居地土解	直江津造透頭焰火口瓶	見込みに茎部彫有	16C4-4	
	734	SK2201	唐津青磁触頭瓶	見込みに串付3以上、器物にも	17C前		770	第2-1-昔町町居地土解	直江津青磁触頭触頭瓶	二次焼成	17C1-4	
	735	SK2201	肥前青磁付一重胴口文瓶		18C後		771	第2-1-昔町町居地土解	日德款青花花口瓶	萬國志	16C4-4	
	736	SK2202	唐津清透瓶	見込みに串付4以上、器物にもあり	17C中?		772	第2-1-昔町町居地土解	日德款青花花文瓶		16C末-17C1-4	
	737	SK2202	肥前青磁付茎文瓶		18C末		773	第2-1-昔町町居地土解	日德款青花花口瓶		17C1-4	
	738	SK2204	相附万里巻草花文瓶	器物に串付着	17C2-4		774	第2-1-昔町町居地土解	唐津青磁觸頭番手		16C末-17C1-4	
	739	SK2204	肥前青磁付直筒口文瓶	器物に串付着	17C3-4		775	第2-1-昔町町居地土解	唐津青磁觸頭番手(小たつき)茶入	通系用	16C4-4	
	740	SK2204	二割透津		17C後?		776	第2-1-昔町町居地土解	ペトマム底足銅鋲	二次焼成?	17C1-4	
	741	SK2211	肥前青磁小瓶		18C		777	第2-1-昔町町居地土解	哥窑-瓶身に割印		17C後手	
	742	SK2204	丹波燒透瓶		17C2-4		778	第2-1-昔町町居地土解	上脚質鏡	内面一定方向ナガ 内側の多くに軽くスス付着		
	743	SD2201	唐津青磁触頭瓶		17C後		779	第2-1-昔町町居地土解	上脚質鏡	内面一定方向ナガ 大部分にスス付着		
	744	SD2201	唐津青磁触頭反瓶	見込みの口縁剥落 器物に串付着	17C2-4		780	第2-1-昔町町居地土解	志野右利石脚小柄		17C1-4	
	745	SD2201	唐津青磁触頭瓶	見込みに串付4以上、 器物に串付着	17C後手		781	第2-1-昔町町居地土解	唐津青磁触頭反瓶		17C1-4	
	746	SD2201	肥前青磁付茎文瓶	器物に串付着	18C前		782	第2-1-昔町町居地土解	直江津造透頭灰釉瓶	見込み剥落剥落 高台内側有	17C1-4	
	747	SD2201	直底青磁束口花文瓶	器物に串付着 売入多い	17C後手		783	第2-1-昔町町居地土解	直江津青瓶	見込みに鉢土目以上	17C1-4	
33	748	SD2201	直底青磁束口瓶	見込みの口縁剥落 器物に串付着	17C後手		784	第2-1-昔町町居地土解	直江津青花束口瓶	二次焼成	17C後手	
	749	SD2201	相附万里巻草付瓶		17C2-4		785	第2-1-昔町町居地土解	伊万里青花手彌助瓶		17C2-4	
	750	SK2202	肥前青磁集口瓶				786	第2-1-昔町町居地土解	伊万里青磁付輪花瓶	口紅あり	17C2-4	
	751	SK2202	直底青磁束口花文瓶	見込みの口縁剥落 器物に串付着	18C2-4		787	第2-1-昔町町居地土解	伊万里青花手彌助瓶	二次焼成、日德款模様	18C	
	752	SK2203	刺突口白磁觸頭反瓶				788	第2-1-昔町町居地土解	日德款青花花口瓶	萬國心 萩台内蔵あり	16C後手	
	753	SK2203	肥前青磁付草花文瓶		17C後		789	第2-1-昔町町居地土解	日德款青花花文瓶	香洗瓶	16C後手	
	754	SK2203	肥前青磁付花文瓶	見込みにコンニャク印押五瓣花 高台内側有	18C?		790	第2-1-昔町町居地土解	日德款青花花口瓶		16C前	
	755	第2-1-昔町町居地土解	上脚質鏡	内面一定方向ナガ 大部分にスス付着			791	第2-1-昔町町居地土解	日德款白石脚反瓶	ビンホー多い	17C1-4	
	756	第2-1-昔町町居地土解	上脚質鏡	内面一定方向ナガ 口縁剥落(一)オクス付着			792	第2-1-昔町町居地土解	朝鮮工脚青磁触頭瓶		17C1-4	
34	757	第2-1-昔町町居地土解	上脚質鏡	内面一定方向ナガ 全体にスス付着			36	793	SD2201底上解	直江津造透頭灰 高台内側有	見込み剥落剥落 高台内側有	17C1-4

地圖 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
	794	SR2001地土層	織田美濃空灰陶瓦	足立山門形軸調瓦 高台内トナン板	17C2/4
	795	SR2001地土層	吉州青花丸瓶		17C1/4
	796	SR2001地土層	甚徳鐵青花文丸瓶	高台内ノッキング瓶	17C1/4
	797	SR2001地土層	織田青釉棒		16C後半
	798	SR2001	吉津空窓灰陶瓶		17C1/4
	799	SR2002	上細質瓶	西面一定方向ナガ 口縁部にスス付着	
	800	SR2002	上細質瓶	西面一定方向ナガ	
	801	SR2002	上細質瓶	西面一定方向ナガ	
	802	SR2002カマド	上細質瓶	西面一定方向ナガ スス付着	
	803	SR2002カマド	上細質瓶	西面一定方向ナガ	
	804	SR2002カマド	上細質瓶	西面一定方向ナガ 外縁部にスス付着	
	805	SR2002	有施系上細質青白磁	西面布目瓶 スス付着	17C1/4
	806	SR2002カマド	吉津空窓灰丸瓶		17C1/4
36	807	SR2002地土層	吉津青瓶	足立に點土口以上	17C1/4
	808	SR2002地土層	織田美濃空灰陶瓦	西面充実 口縁部打ち欠きあり	16C4/4
	809	SR2003	志野黄白釉向付		17C1/4
	810	SR2002カマド	吉津空窓青白磁		17C1/4
	811	SR2002地土層	吉津空窓灰陶瓦付	西面内心タタキ瓶	17C1/4?
	812	SR2002	吉津空窓灰丸瓶	西面に付着物有	17C1/4
	813	SR2002	吉津空窓灰瓶	足立に跡印	17C1/4
	814	SR2002	吉津青瓶		17C1/4
	815	SR2002	織田美濃空灰陶瓶	足込・高台内にトナン板	17C1/4
	816	SR2002	吉津空窓灰瓶	足込・骨付に移付	17C1/4
	817	SR2002	織田青瓶	高台に窓印「」	16C
	818	SR2002-ビット	吉津空窓灰瓶		17C1/4
	819	SR2003	銀鏡(朝里鉢)青白磁	足込・骨付に移付 高台内突起 足込・先端斜少?	17C1/4
	820	SR2003	甚徳鐵青花		16C後半
	821	SR2003	上細質瓶	西面一定方向ナガ 外縁部にスス付着	
	822	SR2003	志野黄白釉瓶		17C1/4
	823	SR2003地土層	吉津空窓灰瓶	西面内底裏付 底裏に窓印「」	16C4/4
	824	SR2003	吉津空窓灰瓶	銀鏡(朝里鉢)銀鏡	17C2/4
	825	SR2003	上細質瓶	西面一定方向ナガ	
	826	SR2003	吉津空窓灰丸瓶		17C1/4
	827	SR2003	織田美濃空灰陶瓦	足立美濃空灰陶瓦 口縁部打ち欠きあり	17C1/4
	828	SR2003	織田青瓶	高部へラ原	16C
	829	SR2003	甚徳鐵青花文丸瓶	骨付に移付 高台内裏あり	17C1/4
	830	SR2003	甚徳鐵青花文丸瓶	骨付に移付 高台内裏あり	16C後半
	831	SR2003	甚徳鐵青花文丸瓶		17C1/4
	832	SR2003	吉津空窓灰丸瓶	足込の日輪調瓦	17C1/4
	833	SR2003地土層	上細質瓶	内面一定方向ナガ 内面にスス付着	
	834	SR2003地土層	吉津空窓灰瓶	吉津空窓灰瓶	16C4/4?
	835	SR2003地土層	甚徳鐵青花瓶	支被押し	17C1/4
	836	SR2003地土層	吉津青瓶口帶	外面に窓印? (ハタ款)	16C4/4
	837	SR2003	織田美濃空灰陶瓦	鬼板	17C1/4
	838	SR2003	織田美濃空灰陶丸瓶	足込・高台内トナン板	17C1/4
	839	SR2003	甚徳鐵青花文瓶		16C後半
	840	SR2003	甚徳鐵青花文瓶	春瓶底	17C1/4
	841	SR2004	上細質瓶	内面一定方向ナガ 内面にスス付着	
	842	SR2004	上細質瓶	内面一定方向ナガ 口縁部にスス付着	
	843	SR2004地土層	織田美濃空灰陶小瓶		17C1/4
	844	SR2004地土層	織田美濃空灰陶小瓶		17C1/4
	845	SR2004	織田美濃空灰陶折縁瓶		17C1/4
	846	SR2004地土層	吉津空窓灰丸瓶	二次焼成	17C1/4
	847	SR2004	吉津空窓灰瓶		17C1/4
	848	SR2004地土層	吉津空窓灰丸瓶	足込に點土口以上 二次焼成	17C1/4
	849	SR2004	吉津空窓明鏡	口縁部打ち欠きあり 足込みに焼却痕	17C1/4
	850	SR2004地土層	吉津青瓶手丸瓶	足込に跡印以上	17C1/4
	851	SR2004	豪系茶碗		17C1/4
	852	SR2004	豪系茶碗	二次焼成	17C1/4
	853	SR2004	豪系茶碗	底部削正承認	17C1/4
	854	SR2004	吉津青瓶花入	銅錫加工 底部削正孔1ヶ所	17C1/4
	855	SR2004	吉津青瓶花入	底部削正孔1ヶ所	17C1/4
	856	SR2005地土層	甚徳鐵青花玲草文付		17C1/4
	857	SR2005地土層	吉津空窓黃釉瓶		17C1/4
	858	SR2005地土層	吉津空窓黃釉瓶		17C1/4
	859	SR2005	上細質瓶	内面一定方向ナガ	
	860	SR2005	吉津空窓黃釉瓶		17C1/4
	861	SR2005	吉津空窓灰陶丸瓶		17C1/4
	862	SR2005	吉津空窓灰陶折縁瓶	高台内トナン板?	17C1/4
	863	SR2005	吉津空窓灰陶折縁瓶	足込・高台内トナン板 シボ口縁部打ち欠きあり	17C1/4
	864	SR2005	豪系白釉貼付け茶碗		17C1/4
	865	SR2005カマド	吉津青瓶白釉貼付	高台内に窓印	17C1/4
	866	SR2005	甚徳鐵青花捲腹山水文場		16C後半
	867	SR2005	甚徳鐵青花紋腹文場	ビンホールあり 高台内移付	17C1/4

出土地番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
38	SB205	津州青花瓶			17C1/4
	SB205カマド	鍋島玉朝白磁直筒瓶	足込・骨付に砂目 磁胎		17C1/4
	SB261	伊能謹吉在同直文瓶			16C前半
40	SB2541	上細質皿	内面一定方向ナガ		
	SB2541	上細質皿	内面一定方向ナガ 内縁部に火炎紋有		
	SB2541	上細質皿	内面一定方向ナガ 内縁部に火炎紋有		
	SB2541	上細質皿	内面一定方向ナガ 内縁部に火炎紋有		
	SB2541	上細質皿	内面一定方向ナガ 内縁部に火炎紋有		
	SB2541イヨリ	上細質皿	内面一定方向ナガ		
	SB2541カマド	上細質皿	内面一定方向ナガ 内縁部に火炎紋有		
	SB2541カマド	上細質皿	内面一定方向ナガ 内縁部に火炎紋有		
	SB2541内土瓶	上細質皿	中腹 内面一定方向ナガ 内縁部に火炎紋有		
	SB2541	香津彦謹製直条各瓶	外面の脚は二重かけか? 見込 に系帯? 席拂付(茶条付)		17C1/4
42	SB2541	香津彦謹製丸瓶			17C1/4
	SB2541	美濃津彦謹製丸瓶			17C1/4
	SB2541	御戸美濃彦直筒大口瓶			17C1/4
	SB2541	御戸美濃彦直筒大口瓶	高台前面に施釉?		17C1/4
	SB2541	御戸美濃彦直筒大口瓶	口縁部打ち欠きあり		17C1/4
	SB2541内土瓶	御戸美濃彦直筒丸瓶			17C2/4
	SB2541	御戸美濃彦直筒丸瓶	高台内にナラン板 口縁部に火炎紋有		17C1/4
	SB2541	御戸美濃彦直筒丸瓶	足込にナラン板		17C1/4
	SB2541内土瓶	美濃津彦直筒丸瓶	高台内にナラン板 口縁部に火炎紋有		17C1/4
	SB2541	御戸美濃彦直筒丸瓶	足込にナラン板		17C1/4
44	SB2541イヨリ瓶	丹波青盤	錐口直筒 器底面等周縁に削痕有		17C1/4
	SB2541	備前青磁	錐口直筒		17C1/4
	SB2541	備前堂大徳利	泰字 内面にゴマ灰 絞泥付?		17C1/4
	SB2541	在地: 上細質鋼切	輪底 器底分厚い		
	SB2541内土瓶	伊能謹吉青花直文瓶	高台内に脚? あり		17C1/4
	SB2541内土瓶	津州青花瓶	足込 見付有		17C1/4
	SB2541イヨリ	津州青花瓶			17C1/4
	SB2541	伊能謹吉白磁直筒瓶			17C1/4
	SB2541	津州青花瓶			17C1/4
	SB2541	津州青花瓶			17C1/4

北朝の 年号	造物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	北朝の 年号	造物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	
992	SB2442	銀鍍金唐草花瓶			17C1/4	979	SB2444舟手	津州唐草花瓶反覆			17C1/4	
993	SB2442	銀鍍金唐草花瓶	高台内に蓋?		17C1/4	980	SB2444舟手	銀鍍金唐白磁瓶		見込・盤付に蓋付 外縁成形に銀シラ板あり	17C1/4	
994	SB2442	銀鍍金唐草花瓶反覆	ビンホールなし		17C1/4	981	SB2445ヨリリ	上細質瓶	口縁部にスス付着			
995	SB2442	津州唐草花瓶			17C1/4	982	SB2445ヨリマド?	上細質瓶	内面にスス付着			
996	SB2442	銀鍍金唐白磁瓶	船体		17C1/4	983	SB2445ヨリマド?	銀鍍金唐草花瓶反覆	高台内にトシナ鉢脚		17C1/4	
997	SB2442	銀鍍金唐白磁瓶	西面内心内文タキ 外側に 七工鉢底?		17C1/4	984	SB2445	銀鍍金唐草花瓶反覆	見込・高台内にトシナ鉢脚		17C1/4	
998	SB2442	上細質瓶	口縁部周囲付着 内面齊滅 盤日本		17C	985	SB2445	上細質船身			16C後半	
999	SB2443	上細質瓶	内面一定方向ナザ 一次燒成?		17C	986	SB2445ヨリマド?	上細質瓶	盤日本 外面に重ね焼き跡		16C末	
1000	SB2443	上細質瓶	内面一定方向ナザ 一次燒成?		17C	987	SB2445	銀鍍金唐草花瓶文庫	高台内に蓋		17C1/4	
1001	SB2443	上細質瓶	西面一定方向ナザ 13面焼成にスス付着		17C	988	SB2445ヨリリ	津州唐草花瓶	見込内の口縁部 裏面に重ね焼き跡		17C1/4	
1002	SB2443	上細質瓶	内面一定方向ナザ		17C	989	SB2445ヨリリ	銀鍍金唐草花瓶	高台内にノックング瓶		17C1/4	
1003	SB2443	廻印美濃窑灰釉丸瓶	見込内形輪郭 高台内にトシナ板		17C1/4	990	SB2445	銀鍍金唐白磁瓶文庫	見込・盤付に砂目各 能動		17C1/4	
1004	SB2443イロリ	廻印美濃窑灰釉丸瓶	高台内にトシナ板 口縁部に打ち欠きあり		17C1/4	991	SB2446	上細質瓶	内面一定方向ナザ			
1005	SB2443	廻印美濃窑灰釉丸瓶	口縁部に打ち欠きあり		17C1/4	992	SB2446	上細質瓶				
1006	SB2443	廻印美濃窑灰釉丸瓶			17C1/4	993	SB2446	上細質瓶	内面一定方向ナザ			
1007	SB2443	津州唐草花瓶	見込み輪郭 S		17C1/4	994	SB2446	上細質瓶	内面一定方向ナザ 内面に落くスス付着?			
1008	SB2443	銀鍍金小舟			17C1/4	995	SB2446	上細質瓶	静主赤切底			
1009	SB2443	銀鍍金舟入	船底にゴマ底		17C1/4	996	SB2446	廻印美濃窑灰釉丸瓶			17C1/4	
1010	SB2443	銀鍍金舟入	内面衝しき的底 二次燒成		16C末-17C1/4	997	SB2446	廻印美濃窑灰釉丸瓶	内面に使用船跡?		17C1/4	
1011	SB2444花手	上細質瓶				998	SB2446	廻印美濃窑灰釉丸瓶	高台内にトシナ板		17C1/4	
1012	SB2451	上細質瓶	内面一定方向ナザ 内面にスス付着			999	SB2446	廻印美濃窑灰釉輪郭 見込・高台内にトシナ板	見込内形輪郭 見込・高台内にトシナ板		17C1/4	
1013	SB2451	上細質瓶	内面一定方向ナザ 内面スス多量に付着			1000	SB2446	廻印美濃窑灰釉輪郭 見込・高台内にトシナ板	見込内形輪郭 見込・高台内にトシナ板		17C1/4	
1014	SB2444北手	上細質瓶	茶葉地 口縁部にスス付着			1001	SB2446	廻印美濃窑灰釉輪郭 見込内形輪郭 高台内にトシナ板	見込内形輪郭 見込・高台内にトシナ板		17C1/4	
1015	SB2451	廻印美濃窑灰釉小舟			17C1/4	1002	SB2446	廻印美濃窑灰釉輪郭 見込内形輪郭 見込・高台内にトシナ板	見込内形輪郭 見込・高台内にトシナ板		17C1/4	
1016	SB2451	廻印美濃窑灰釉輪郭 見込内形輪郭 高台内にトシナ板			1003	SB2446	廻印美濃窑灰釉小舟 見込内形輪郭 見込・高台内にトシナ板	見込内形輪郭 見込・高台内にトシナ板		17C1/4		
1017	SB2451	廻印美濃窑灰釉輪郭 見込内形輪郭 高台内にトシナ板			1004	SB2446	銀鍍金唐草花瓶	高台内に蓋 圓底心		17C1/4		
1018	SB2444北手	銀鍍金唐白磁瓶	見込・盤付に砂目		17C1/4	1005	SB2446	銀鍍金唐草花瓶文庫	高台内に蓋		17C1/4	
1019	SB2444北手	銀鍍金唐白磁瓶	高台内にノックング瓶		1006	SB2446	銀鍍金唐草花瓶	ビンホールなし		17C1/4		
1020	SB2444北手	銀鍍金唐白磁瓶	高台内にノックング瓶		1007	SB2446	銀鍍金唐草花瓶	高台内にノックング瓶 盤付に砂目付着		17C1/4		
1021	SB2451	津州唐草花瓶	見込内形輪郭 裏面燒成		1008	SB2446	津州唐白磁瓶			17C1/4		
1022	SB2444北手	津州唐草花瓶	見込内形輪郭 裏面燒成		1009	SB2446	銀鍍金唐白磁瓶			17C1/4		
1023	SB2444北手	津州唐草花瓶	見込内形輪郭 裏面燒成		1010	SB2446	銀鍍金唐白磁瓶	蓋付に砂目多數? 能動		17C1/4		
1024	SB2444北手	上細質瓶			1011	SB2446	上細質船身			16C後半		
1025	SB2444北手	上細質瓶	静主赤切底		1012	SB2446	上細質瓶	津日本?		16C末		
1026	SB2444舟手	廻印美濃窑灰釉			1013	SB2446ヨリリ	上細質瓶	内面一定方向ナザ				
1027	SB2444舟手	廻印美濃窑灰釉小舟	内面装钉付着(鉢底)		1014	SB2446ヨリリ	上細質瓶	内面一定方向ナザ 口縁部にスス付着				
1028	SB2444舟手	津州唐草花瓶反覆			1015	SB2446ヨリリ	上細質瓶	静主赤切底				

遺物 番号	出土墓 番号	出土墓 標名	器種	備考	時期	発掘 場所 番号	出土墓 番号	出土墓 標名	器種	備考	時期
1016	SB2446イヨリ	貝地銀座白毫文鏡	高台内ノックング鏡	背付にスヌ付着	17C1/4	44	1053	SB2621	土彌鏡	内面一定方向ナメ	口縁端部にスヌ付着
	SB2446イヨリ	津州空き鉢花瓶			17C1/4		1054	SB2621	土彌鏡	内面一定方向ナメ	内面中央と外縁端部にスヌ付着
	SB2446イヨリ	貝地銀座白毫文鏡	見込み柄の日輪鏡		17C1/4		1055	SB2621カマド	津川美濃奈銀座丸鏡		17C1/4
	SB2446イヨリ	津州空き鉢花瓶			17C1/4		1056	SB2621カマド	貝地銀座白毫文鏡	未焼成もしくは二次焼成	17C1/4
	SB2447イヨリ	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	底部内面にスヌ付着			1057	SB2322	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	内外面にスヌ付着
	SB2447	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	口縁端部内面にスヌ付着			1058	SB2322	津州空き鉢丸鏡		17C1/4
1022	SB2447	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	口縁端部内面にスヌ付着		45	1059	SB2322	津川美濃奈片口鏡	ぐりぐり文	17C1/4
	SB2447	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1060	SB2322	網野玉鏡白毫各種	網野 見古・背付にスヌ付着	17C1/4
	SB2447	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1061	SB2422カマド	土彌貫鏡		17C1/4
	SB2447	土彌貫鏡	網野玉	全体にスヌ付着			1062	SB2422カマド	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	スヌ付着
	SB2447イヨリ	網野玉銀座天目鏡	「鳳凰」		17C1/4		1063	SB2422カマド	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	スヌ付着
	SB2447	網野玉銀座天目鏡	見込み基面鏡	背付に日輪	17C1/4		1064	SB2422	網野玉銀座丸鏡	見込み形輪刻ぎ 高台内にトナン鏡	17C1/4
1027	SB2447	網野玉透底丸鏡	見込み形輪刻ぎ	高台内にトナン鏡	17C1/4	46	1065	SB2422カマド	網野玉白毫組		17C1/4
	SB2447	網野玉透底丸鏡	口縁端部に打ち欠きあり		17C1/4		1066	SB2422カマド	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	スヌ付着
	SB2447	網野玉透底丸鏡	見込み形輪刻ぎ	高台内にトナン鏡	17C1/4		1067	SB2522	津川美濃奈丸鏡		17C1/4
	SB2447	網野玉透底丸鏡	口縁端部に打ち欠きあり		17C1/4		1068	SB2522	津川美濃奈花鉢	内面一定方向ナメ	スヌ付着
	SB2447	網野玉透底丸鏡	見込み形輪刻ぎ	高台内にトナン鏡	17C1/4		1069	SB2522	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	スヌ付着
	SB2447	網野玉透底丸鏡	口縁端部に打ち欠きあり		17C1/4		1070	SB2522	貝地銀座白毫丸鏡		17C1/4
1030	SB2447	津州空き花瓶	口縁端部に打ち欠きあり		17C1/4	47	1071	SB2522	貝地銀座白毫花鉢		17C1/4
	SB2447	津州空き花瓶					1072	SB2522カマド	貝地銀座白毫丸鏡	高台内ノックング鏡	17C1/4
	SB2447	津州空き花瓶					1073	SB2522	網野玉朝日輪刻鏡	内面同心円文 外面文字状輪刻	16C
	SB2447	網野玉朝日輪刻鏡	見込み形輪刻ぎ	高台内トナン鏡	17C1/4		1074	SB2622	網野玉透底丸鏡	見込み形輪刻ぎ 高台内トナン鏡	17C1/4
	SB2447	網野玉透底丸鏡	見込み形輪刻ぎ	高台内トナン鏡	17C1/4		1075	SB2622	貝地銀座白毫花鉢		16C前
	SB2447	網野玉透底丸鏡	見込み形輪刻ぎ	高台内トナン鏡	17C1/4		1076	SB2622	津州空き花瓶	内面ビンホール	17C1/4
1032	SB2447	網野玉朝日輪刻鏡	電鬼・足込に茶葉・鑄		16C中	48	1077	SB2622	貝地銀座白毫丸鏡	背付に雁形	17C1/4
	SB2447	貝地銀座白毫文鏡	荒巻底		17C1/4		1078	SB2622	網野玉朝日輪刻鏡	見込み・背付に茶葉・鑄	17C1/4
	SB2447	貝地銀座白毫文鏡	見込みの日輪鏡	高台内無鏡	17C1/4		1079	SB2622	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	スヌ・内面にスヌ付着
	SB2447	貝地銀座白毫文鏡	見込み	高台内ノックング鏡	17C1/4		1080	SB2622	津川美濃奈丸鏡	見込み形輪刻ぎ 口縁端部に打ち欠きあり	17C1/4
	SB2447	貝地銀座白毫文鏡	高台内ノックング鏡		17C1/4		1081	SB2622	貝地銀座白毫文丸鏡	高台内鏡・背付に仲村君	17C1/4
	SB2447	貝地銀座白毫文鏡	高台内ノックング鏡		17C1/4		1082	SB2722地土解	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	スヌ付着
44	1045	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ		49	1083	SB2722地土解	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	スヌ付着
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1084	SB2722地土解	津川美濃奈輪刻鏡	内面タキシ断面磨	17C1/4
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1085	SB2722地土解	貝地銀座白毫丸鏡	見込み形輪刻ぎ 高台内トナン鏡	17C1/4
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1086	SB2722地土解	津州空き花瓶		17C1/4
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1087	SB2722地土解	津州空き花瓶		17C1/4
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1088	SB2722地土解	津州空き花瓶		17C1/4
45	1047	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ		50	1089	SB2722	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1090	SB2722	津州空き花瓶		
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1091	SB2722	津州空き花瓶		
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1092	SB2722地土解	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1093	SB2722地土解	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1094	SB2722地土解	津川美濃奈輪刻鏡	内面タキシ断面磨	17C1/4
46	1048	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ		51	1095	SB2722地土解	貝地銀座白毫丸鏡	見込み形輪刻ぎ 高台内トナン鏡	17C1/4
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1096	SB2722地土解	津州空き花瓶		
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1097	SB2722地土解	津州空き花瓶		
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1098	SB2722地土解	津州空き花瓶		
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1099	SB2722	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ	
	SB2521	土彌貫鏡	内面一定方向ナメ				1100	SB2722	津州空き花瓶		

地圖 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	地圖 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
46	1090	SR2223イヨリ	上締貫環	内面一定方向ナゲ 全体にスス付着		48	1127	SB2234	織田美濃宮川輪丸瓶	見込み形跡調査 二次焼成	17C1-8
	1091	SR2223	上締貫環	内面一定方向ナゲ 2.0mm±1.8mm付着			1128	SB2234カマド	織田美濃宮川輪丸瓶	口縁に打ち欠きあり 口縁部に墨付着	17C1-8
	1092	SR2223	上締貫環	内面一定方向ナゲ 口縁部にスス付着			1129	SB2234カマド	織田美濃宮川輪丸瓶	見込み形跡調査	17C1-8
	1093	SR2223	織田美濃宮川輪丸瓶	内面に鉄筋付着	17C1-4		1130	SB2234カマド	織田美濃宮川輪丸瓶	見込み形跡調査 口縁部打ち欠きあり	16CA-4
	1094	SR2223	織田美濃宮川輪丸瓶		16C後半		1131	SB2234カマド	志野貝石締貫環	見込み日付2か所	17C1-8
	1095	SR2223	前縫縫合		17C1-8		1132	SB2234カマド	直縫口縫	見込み・既述に日付2以上 墨付か?	17C1-8
	1096	SR2223	銀板工朝白磁	鉢形 備付印32以上	17C1-4		1133	SB2234カマド	黒釉継合白輪瓦瓶	高台内ノッキング痕跡	17C1-4
	1097	SR2223	銀板工朝白磁	見込み・備付印32以上	17C1-4		1134	SB2234	黒釉継合青花牡丹草花織 瓦瓶		16CB
	1098	SR2223	織田美濃宮川輪丸瓶	高台内トナン瓶	17C1-4		1135	SB2234ビット	高台青花丸瓶		17C1-4
	1099	SR2423	織田美濃宮川輪丸瓶		17C1-4		1136	SB2234ビット	織田美濃宮川輪丸瓶	瓶子利用?	17C1-4
47	1100	SR2423	織田美濃宮川輪丸瓶	高台内トナン瓶	17C1-4		1137	SB2242	銀板工朝白磁夏葉柄	見込み日付3以上	17C1-8
	1101	SR2423	織田美濃宮川輪丸瓶		17C1-4		1138	SB2242部分	絹津大瓶	黒色釉彩豊多い	17C1-8
	1102	SR2423	銀板銀唐花折口唇口支垂		16C後半		1139	SB2242部分	黒銀唐花花邊瓦小瓶		17C1-8
	1103	SR2423カマド	津州青花花瓶	蓋表面、足辺内鉄筋付着	17C1-4		1140	SB2242部分	織田美濃宮川輪丸瓶	見込み形跡調査 高台内トナン瓶	17C1-4
	1104	SR2523	黒銀唐花青花丸瓶	見込み・土目仕上2以上, 口縁部に打ち欠きあり	17C1-4		1141	SB2242部分	黒銀唐花青花丸瓶	黒銀唐花 錆斑あり	17C1-4
	1105	SR2523	織田美濃宮川輪丸瓶	口縁部に打ち欠きあり	17C1-4		1142	SB2242部分	黒前縫跡	標目4本 片口部のみコマツ	16C後
	1106	SR2523	織田美濃宮川輪丸瓶	見込み形跡調査 口縁部にトナン瓶	17C1-4		1143	SB2242部分	銀板工朝白磁	見込み・春日山、春日井・御日 銀板工朝白磁	17C1-8
	1107	SR2523	前縫貫白合意利	瓶内印押	17C1-4		1144	SB2242部分	黒銀唐花白輪瓦瓶	高台内ノッキング痕	17C1-4
	1108	SR2523	銀板銀唐花青花	高台内に墨?	17C1-4		1145	SB2242底部	上締貫環	内面一定方向ナゲ	17C1-4
	1109	SR2623	織田美濃宮川輪丸瓶	見込み形跡調査 高台内トナン瓶	17C1-4		1146	SB2242底部	片口部青花		17C後半
49	1110	SR2623	織田美濃宮川輪丸瓶	口縁部打ち欠きあり 二次焼成	17C1-4		1147	SB2242底部	津州青花丸瓶	口縁部打ち欠きあり	17C1-4
	1111	SR2623	織田美濃宮川輪丸瓶		16C後		1148	SB2242底部	織田美濃宮川輪丸瓶	見込み形跡調査 口縁部打ち欠きあり	17C1-4
	1112	SR2623	銀板銀唐花緋縞花葉	備付印	17C1-4		1149	SB2242底部	二ツ名袋詰		17C1-4
	1113	SR2623	銀板銀唐花白輪瓦瓶		17C1-4		1150	SB2242底部	黒銀唐花青花丸瓶	高台内ノッキング痕	17C1-4
	1114	SR2623	黒銀唐花青花枝葉文瓶	高台内ノッキング痕 内面一次焼成?	17C1-4		1151	SB2242底部	津州青花丸瓶	見込みの形跡調査	17C1-4
	1115	SR2623	銀板工朝白磁	見込み・備付印3以上	17C1-4		1152	SB2243	津州青花青花丸瓶	口縁部打ち欠きあり	17C1-4
	1116	SR2623	織田美濃宮川輪丸瓶		17C1-4		1153	SB2243	津州青花丸瓶	口縁部に若干銀斑付着	17C1-4
	1117	SR2623	織田美濃宮川輪丸瓶	口縁部打ち欠きあり 高台内トナン瓶	17C1-4		1154	SB2243	津州青花丸瓶		17C1-4
	1118	SR2623	織田美濃宮川輪丸瓶	見込み形跡調査 高台内トナン瓶	17C1-4		1155	SB2243	津州青花銀板銀		17C1-4
	1119	SR2623イヨリ	銀前縫水注	内面直付有り・輪神?	17C1-4		1156	SB2243	前縫跡	底面に墨書? 蜡木?	17C1-4
50	1120	SR2324カマド	上締貫環	内面一定方向ナゲ 口縁部にスス付着			1157	SB2246	黒銀唐花青花丸瓶	高台内ノッキング痕	16C後半
	1121	SR2324カマド	上締貫環	内面一定方向ナゲ			1158	SB2246部分	上締貫環	銀土赤斑	
	1122	SR2324	上締貫環	内面一定方向ナゲ 全体にスス付着			1159	SB2246部分	黒前縫跡		16CB
	1123	SR2324カマド	上締貫環	赤斑、内部に黒子・茶化物			1160	SB2246部分	津州青花丸瓶	見込みに貼土3	17C1-4
	1124	SR2324カマド	上締貫環	赤斑			1161	SB2246部分	黒銀唐花青花枝葉文瓶	高台内に残あり	17C1-4
	1125	SR2324	赤津黑白輪环	口縁部に打ち欠き	17C1-4		1162	SB2246部分	津州青花花瓶	備付印に津付番	17C1-4
	1126	SR2324	黒前縫銀		16CA-4		1163	SB2246部分	津州青花黄白輪	口縁部打ち欠き	17C1-4

出土地番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	出土地番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
50	1064	SR0206部分	漆戸美濃宝鏡物鏡	漆戸鏡 見込みに日輪、高台内トオン柄	17C1/4	52	1201	SK2302	新羅伊万里象牙彌字文瓶		17C2/4
	1065	SR0206部分	漆戸宝鏡花瓶		17C1/4		1202	SK2302	丹波焼火入		17C1/4
	1066	SR2327	上絞質	内面一定方向ナガ			1203	SE2401	新羅望螺紋	内面全体にゴマ目 摺目10本	16C後
	1067	SR2327	唐津窯透明白瓶		17C1/4		1204	SE2401	景德鎮青花花口瓶	高台内側斜材有	17C1/4
	1068	SR2327	唐津窯綠釉罐	見込みに點土230上	17C1/4		1205	SE2401	福建弘治窯灰陶壺	内面鉢物	16C
	1069	SR2327.1.丸	唐津窯灰釉丸瓶	見込みに點土14	17C1/4		1206	SE2401	唐津窯清条脚罐	見込みに砂目? 砂目	17C1/4
	1070	SR2327	津州窑白磁瓶	見込み丸の目録渺茫 瓶底に「澤山」	17C1/4		1207	SE2401	唐津窯青条脚罐	見込み230上	17C2/4
	1071	SR2327	上絞質	内面一定方向ナガ 全周にスス付有			1208	SE2401	唐津窯灰瓶	見込み・普付に砂目4 二次燒成	17C2/4
	1072	SR2327	上絞質	内面一定方向ナガ 口縁部にスス付有			1209	SE2401	新羅望螺	津州窯から移築	17C1/4
	1073	SR2427	唐津窯透明白瓶		17C1/4		1210	SE2401	景德鎮青花瓶	高台内に「ロッキング瓶」	17C1/4
53	1074	SR2427	唐津窯青釉茶托	見込み丸の点録渺茫 口縁部に「火」	17C1/4	53	1211	SE2401	新羅王朝白磁罐反面	見込み・普付に砂目? 鉢脚	17C1/4
	1075	SR2427	唐津窯灰釉茶托	見込みに點土230上	17C1/4		1212	SE2401	新羅伊万里茎付罐反面	見込みの目録渺茫で砂目 普付に砂目有	17C2/4
	1076	SR2427	廬戸美濃宝鏡物鏡系罐	見込み	17C1/4		1213	SE2401	唐津窯清黄釉丸小瓶		17C1/4
	1077	SR2327部分	上絞質	口縁部にスス付有			1214	SE2401	唐津窯白釉瓶		17C後半
	1078	SR2410	上絞質	内面一定方向ナガ 外表面にスス付有			1215	SE2401	唐津窯者聯繩利	下部に鉢脚?	17C後半
	1079	SR2410	廬戸美濃宝鏡物鏡		16C後半		1216	SE2401	景德鎮青花花鳥文瓶	巻足瓶	16C後半
	1080	SR2410地土屋	唐津窯透明白瓶	二次燒成	17C1/4		1217	SE2401	新羅王朝陶灰釉茶托系瓶	見込み・普付に砂目230上 鉢脚 面に斜材	17C1/4
	1081	SR2410	唐津窯灰釉大瓶	見込み・點土233上 高台内旋身	17C1/4		1218	SK2204	唐津窯灰瓶	見込みに點土	17C1/4
	1082	SR2410地土屋	新羅王朝白磁足柄	見込み・普付に砂目? 鉢脚	17C1/4		1219	SK2204	唐津窯清白瓶	見込みに砂目230上 普付・鉢脚	17C1/4
	1083	SR2410	毛邊津窯青白反面	見込みに點土233上 普付・口縁部	17C1/4		1220	SK2204	上絞質	内面裏部にスス付有	
54	1084	SR2410地土屋	粗面苦蘗枕	肩部にゴマ目	16C	54	1221	SK2301	景德鎮青花片口支瓶		16C後
	1085	SR2213	廬戸美濃宝鏡物鏡		17C2/4		1222	SK2301	唐津窯青花大支瓶	普付に砂目? 細筋・二次燒成	17C1/4
	1086	SR2213	唐津窯透明白瓶	見込みに點土11	16C末~17C1/4		1223	SK2301	景德鎮青花牡丹草文瓶	捲心手 洋台内側あり	16C後半
	1087	SR2213	唐津窯灰釉	見込みに點土	17C1/4		1224	SK2304	景德鎮青花花口瓶	高台内に「ロッキング瓶」	17C1/4
	1088	SR2213	唐津窯白物添入	參照前二 次燒成?	17C1/4		1225	SK2412	トトロ木葉瓶	植上繩り込み	17C1/4
	1089	SR2314	上絞質	内面一定方向ナガ			1226	SK2309	景德鎮黑白刷毛瓶	巻足瓶	17C1/4
	1090	SR2314	上絞質	内面一定方向ナガ			1227	SK2309	新羅青瓶	雅目日本	16C後
	1091	SR2314	粗面	内面一定方向ナガ			1228	SK2313	上絞質	内面一定方向ナガ 外表面部にヤマスス付有	
	1092	SR2314	唐津窯灰釉大瓶		17C1/4		1229	SK2413	唐津窯白磁罐	見込み刷毛?	16C後
	1093	SR2314	唐津窯透明白瓶	見込みに使用板	17C1/4		1230	SK2413	新羅青素入?		16C後
55	1094	SR2314	唐津窯灰釉	見込みに點土233上	17C1/4	55	1231	SK2413	毛邊津窯和輪脚反面	見込み・普付に點土3	17C1/4
	1095	SR2314	唐津窯灰釉	見込み230上	17C1/4		1232	SK2413	唐津窯透明白瓶	内面全体に毫筆像か?	17C1/4
	1096	SR2314	新羅王朝白磁	鉢脚 見込みに砂目330上	17C1/4		1233	SK2413	廬戸美濃宝鏡天目瓶	内面使用板あり。見込み毫筆 で毫筆か?	17C1/4
	1097	SR2314	景德鎮青白磁花瓶	見込み點土233上 口縁部に「火」、肩部ゴマ目	16C4/4		1234	SK2414	唐津窯透明白瓶		17C1/4
	1098	SR2314	粗面青白付添入	肩部に窓附?、肩部ゴマ目	17C1/4		1235	SK2414	唐津窯青白瓶	植上330上	17C1/4
	1099	SR2314	粗面青白付	肩部・鉢脚に粗面 二次燒成	17C1/4		1236	SK2414	唐津窯透明白瓶	普付に砂目? 3	17C1/4
	1100	SR2314	粗面青白付	粗面・鉢脚に粗面 二次燒成	17C1/4		1237	SK2414	新羅青白瓶?		17C1/4
	1101	SR2305	廬戸美濃宝鏡青白瓶	内面布目板あり	16C						

出土地番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	出土地番号	遺物番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
1228	SK2014	豪口美濃型灰陶瓶	見込み形物調査(探査者)	高台内に日耕	17C1/4	1275	SP2401	銀釦工瓶茎灰陶壺	底部に船止印 成都黒河器系板めて薄い	底部に船止印 成都黒河器系板めて薄い	17C1/4
1229	SK2014	志野黄石軸端瓦瓶	見込み灰陶器で「志」	高台内に日耕	17C1/4	1276	SP2402	在地瓦質灰陶	系の基壇	16C末~17C1/4	
1230	SK2014	豪御堂甕	内面ガラス張り	16C後		1277	西半壁壇施用	上細質陶	口縁部面にスス付着		
1231	SK2014	豪御堂小鉢利	亂に焼洋	17C1/4		1278	西半壁壇施用	上細質陶			
1232	SK2014	豪御堂大鉢利		16C後		1279	西半壁壇施用	上細質陶			
1233	SK2014	上細質陶器	底部外面鈍目子タケ	16C後		1280	西半壁壇施用	豪御堂空背瓶端反張			16C末~17C1/4
55	1234	豪御堂空背瓶端反張		17C1/4		1281	西半壁壇施用	豪御堂空背花瓶	舟付カンナ切 外面に舟付着	舟付カンナ切 外面に舟付着	16C末~17C1/4
	1235	SK2014	銀釦工瓶白釉裏青緑	見込み 貨付に舟印 純粋	17C1/4	1282	西半壁壇施用	豪州空背瓶端反張	舟入多い		17C1/4
	1236	SK2017	豪州空背瓶端反張	豪州円形輪削ぎ 豪州内トゲ ン式 口縁部打ち欠き	17C1/4	1283	西半壁壇施用	豪州空背花舟文丸頭	善哉面に「こげ」		16C末~17C1/4
	1237	SK2017	豪御堂銀装輪削	高台内ノックシング瓶	17C1/4	1284	中央壁壇施用	豪御部折接輪花瓶	見込・舟付に各2以上の中耕 舟形部を斜め	舟付・舟付に各2以上の中耕 舟形部を斜め	17C1/4
	1238	SK2017	津州空背花瓶		17C1/4	1285	SK2508	上細質陶	菊輪色はスズ付着によるものか		
	1239	SK2029	豪御堂空背花舟支承	高台内「大明永昌」	17C1/4	1286	SK2509	豪御堂銀装純天目瓶	高台内に唐文「舟」	15C代	
	1250	SK2015	津津堂銀装瓶		17C1/4	1287	周辺町西側遺構	豪州流域空背瓶端反張	見込みに舟付文	15C後半	
	1251	SK2015	粗底部輪削	見込みに日耕 高台内トゲン瓶 津津堂銀装瓶	17C2/4	1288	SK2512	上細質陶	全体にスス付着		
	1252	SK2016	津津堂灰輪削銀装		17C2/4	1289	SK2512	上細質陶	口縁部のナギは回転ナギ		
	1253	SK2016	粗底部雲文輪削花瓶	見込み・舟付に日耕 津津堂銀装瓶	17C2/4	1290	SK2512	上細質陶	外面部下にスス付着	16C前	
	1254	SK2018	粗底万力穿孔輪削花瓶	高台内深いハラケアリ	17C2/4	1291	SK2512	豪州空背輪削花瓶	底部に落落・津舟「牛?」	15C後	
	1255	SK2018	銀釦工瓶透明輪削尾茶碗	見込みに舟印? 舟付に妙見山印	17C1/4	1292	SK2504	上細質陶			
56	1256	SK2019	津州空背花舟丸頭		17C1/4	1293	SK2504	上細質陶	外面部に少暈の点状スヌが舟付 口縁部中央付		
	1257	SK2019	津州空背花舟文瓶	舟台内「舟舟舟置」 舟内に船形	17C1/4	1294	SK2504	上細質陶	内外面部に点状のスヌが舟付着 ~舟付		
	1258	SK2019	豪御堂空背花舟文瓶	高台内ノックシング瓶	17C1/4	1295	SK2504	上細質陶	~舟付		
	1259	SK2019	豪御堂空背灰陶瓶		17C1/4	1296	SK2504	上細質陶	内面部にスス付着 ハソ面		
	1260	SK2019	豪御堂空背花舟石文瓶	高台内鉢あり 舟付に舟付着	17C1/4	1297	SK2504	上細質陶	内外面部に点状のスヌが多く舟着		
	1261	SK2022	豪御堂空背花舟文瓶	舟付に舟	17C1/4	1298	SK2504	上細質陶			
	1262	SK2022	豪御堂空背灰陶瓶	高台内「瓶」 舟付に舟付着	17C1/4	1299	SK2504	上細質陶	内外面部に点状のスヌが付着		
	1263	SK2022	津州空背瓶端反張	見込み円形輪削	17C1/4	1300	SK2504	上細質陶			
	1264	SK2022	津州空背花瓶	画面軸用?	17C1/4	1301	SK2504	上細質陶	内外面部に点状のスヌが付着		
	1265	SK2024	津津堂銀装瓶丸頭	見込みに船止印23上 1304年に打ち欠きあり	17C1/4	1302	SK2504	上細質陶			
	1266	SK2024	津津堂銀装瓶丸頭	見込み・船止印23上 1304年に打ち欠きあり	17C1/4	1303	SK2504	上細質陶			
	1267	SK2024	津津堂灰輪削銀装	画面型?	17C1/4	1304	SK2504	上細質陶	内面部に点状のスヌが付着 ~舟付		
	1268	SK2024	津津堂里輪削系瓶	画面型?	17C1/4	1305	SK2504	上細質陶	~舟付		
	1269	SK2024	志野黄石軸端瓦瓶	高台内に日耕	17C1/4	1306	SK2504	上細質陶	内面部に点状のスヌ少し付着 スヌ状痕跡が多くあり		
57	1270	SK2024	觸口美濃型灰輪削銀装	見込み難辨	17C1/4	1307	SK2504	上細質陶			
	1271	SK2024	豪御堂空背花舟丸頭		17C1/4	1308	SK2504	上細質陶	内外面部に無小孔痕跡が多くあり		
	1272	SK2024	津州空背花舟利	舟付に舟付着	17C1/4	1309	SK2504	上細質陶			
	1273	SK2024	津州空背銀装花瓶	見込みの口輪削	17C1/4	1310	SK2504	上細質陶	内面部に点状のスヌ少し付着		
	1274	SK2024	豪御堂舟付系		16C IR	1311	SK2504	上細質陶			

出土地	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間	出土地	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
58	SK2504	上縁貫頭		外周に点状のスヌが付着		59	SE2505	上縁貫頭		既成が激しいため、詳細は不明	
	SK2504	上縁貫頭					SX2501	上縁貫頭			
	SK2504	上縁貫頭					SX2501	上縁貫頭			
	SK2504	上縁貫頭		内外側に黒点あり 口縁外反			SX2501	上縁貫頭			
	SK2504	上縁貫頭					SX2501	上縁貫頭			
	SK2505	上縁貫頭		点状のスヌが内外面に付着 口縁外反			SX2501	上縁貫頭			
	SK2505	上縁貫頭		口縁端部に幾枚スヌが付着			SX2501	上縁貫頭			
1327	SK2505	上縁貫頭		内外側の一部にスヌが付着		1328	SX2505	上縁貫頭		～そ面	
1328	SK2505	上縁貫頭		口縁端部に幾枚スヌが付着		1329	SX2505	上縁貫頭		～そ面	
1329	SK2505	上縁貫頭		内外側の一部にスヌが付着		1330	SX2505	上縁貫頭		～そ面	
1330	SK2505	上縁貫頭		口縁端ナゼニ二三回転で作る		1331	SX2505	上縁貫頭		～そ面	
1331	SK2505	上縁貫頭		内側に少し黒点あり		1332	SX2505	上縁貫頭		～そ面	
1332	SK2505	上縁貫頭		スヌが内外面に付着付着		1333	SX2505	上縁貫頭		～そ面	
1333	SK2505	上縁貫頭		内側に黒点あり 口縁端やや外反する		1334	SX2505	上縁貫頭		～そ面	
1334	SK2507	上縁貫頭		スヌ付着なし 口縁やや外反		1335	SX2507	上縁貫頭		～そ面	
1335	SK2507	上縁貫頭		スヌ付着なし		1336	SX2507	上縁貫頭		～そ面	
1336	SK2507	上縁貫頭		内面すこし黒色化		1337	SX2507	上縁貫頭		～そ面	
1337	SK2507	上縁貫頭				1338	SX2507	上縁貫頭		～そ面	
1338	SK2507	上縁貫頭		既成部に板凸に当たる痕跡 内側に点状のスヌ付着		1339	SX2507	上縁貫頭		～そ面	
1339	SE2503	上縁貫頭		内側にはヨコナガマで仕上げる		1340	SE2503	上縁貫頭		～そ面	
1340	SE2503	上縁貫頭		内側にはヨコナガマで仕上げる		1341	SE2503	上縁貫頭		～そ面	
1341	SE2503	上縁貫頭		口縁端部にやや黒色化的の痕跡 あり 黒点が盛り		1342	SE2503	上縁貫頭		～そ面	
1342	SE2503	上縁貫頭		口縁端部の内外面にやや黒色化的の痕跡 があり 黑点が盛り		1343	SE2503	上縁貫頭		～そ面	
1343	SE2503	上縁貫頭				1344	SE2503	上縁貫頭		～そ面	
1344	SE2503	上縁貫頭				1345	SE2505	上縁貫頭		～そ面	
1345	SE2505	上縁貫頭		表面へ延びて口縁に付着する		1346	SE2505	上縁貫頭		～そ面	
1346	SE2505	上縁貫頭		表面へ延びて口縁に付着する		1347	SE2505	上縁貫頭		～そ面	
1347	SE2505	上縁貫頭		口縁端部にスヌ付着あり 口縁やや外反する		1348	SE2505	上縁貫頭		～そ面	
1348	SE2505	上縁貫頭		内側一部に黒点あり 口縁端部はナゼニ回転で仕上げる		1349	SE2505	上縁貫頭		既成が激しいため、詳細は不明	
60	SX2501	上縁貫頭				1350	SX2501	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1351	SX2501	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1352	SX2501	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1353	SX2501	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1354	SX2501	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1355	SX2501	上縁貫頭		～そ面	
	SX2501	上縁貫頭				1356	SX2501	上縁貫頭		～そ面	
61	SX2501	上縁貫頭				1357	SX2501	上縁貫頭		～そ面	
	SX2501	上縁貫頭				1358	SX2501	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1359	SX2501	上縁貫頭		横口夷道里灰陶瓶	
	SX2501	上縁貫頭				1360	SX2501	上縁貫頭		横口夷道里灰口瓶	1SC後
	SX2501	上縁貫頭				1361	SX2501	上縁貫頭		直口夷道里印花灰陶瓶	1SC後
	SX2501	上縁貫頭				1362	SX2501	上縁貫頭		直口夷道里印花灰陶瓶	1SC後
	SX2501	上縁貫頭				1363	SX2501	上縁貫頭		直口夷道里印花灰陶瓶	1SC後
62	SX2501	上縁貫頭				1364	SX2501	上縁貫頭		直口夷道里印花灰陶瓶	1SC
	SX2501	上縁貫頭				1365	SX2501	上縁貫頭		直口夷道里印花灰陶瓶	1AC
	SX2501	上縁貫頭				1366	SX2501	上縁貫頭		直口夷道里印花灰陶瓶	15世紀中頃？
	SX2501	上縁貫頭				1367	SX2501	上縁貫頭		直口夷道里印花灰陶瓶	
	SX2501	上縁貫頭				1368	SX2501	上縁貫頭		直口夷道里印花灰陶瓶	
	SX2501	上縁貫頭				1369	SX2501	直口夷道里印花灰陶瓶		燒成不良	
	SX2501	上縁貫頭				1370	SX2501	直口夷道里印花灰陶瓶		直口夷道里印花灰陶瓶 色となる	
63	SX2501	上縁貫頭				1371	SX2501	直口夷道里印花灰陶瓶		燒成不良	
	SX2501	上縁貫頭				1372	SX2501	直口夷道里印花灰陶瓶		燒成不良	
	SX2501	上縁貫頭				1373	西平底下解脫地盤	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1374	西平底下解脫地盤	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1375	西平底下解脫地盤	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1376	西平底下解脫地盤	上縁貫頭		口縁端部に一矢所スヌ付着	
	SX2501	上縁貫頭				1377	西平底下解脫地盤	上縁貫頭			
64	SX2501	上縁貫頭				1378	西平底下解脫地盤	上縁貫頭			
	SX2501	上縁貫頭				1379	西平底下解脫地盤	上縁貫頭		外面上にカスク、内側に付着	
	SX2501	上縁貫頭				1380	西平底下解脫地盤	上縁貫頭		口縁内面がやや黒色化 スヌ？	
	SX2501	上縁貫頭				1381	西平底下解脫地盤	上縁貫頭		～そ面	
	SX2501	上縁貫頭				1382	西平底下解脫地盤	上縁貫頭		～そ面	
	SX2501	上縁貫頭				1383	西平底下解脫地盤	上縁貫頭		～そ面	
	SX2501	上縁貫頭				1384	西平底下解脫地盤	上縁貫頭		～そ面	
65	SX2501	上縁貫頭				1385	西平底下解脫地盤	上縁貫頭		～そ面	
	SX2501	上縁貫頭									

出土地名 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
61	西平部下層壁地層	上縁貫頭		
	1387 西平部下層壁地層	上縁貫頭	1386同タグ一回転で仕上げる タイプ	
	1388 西平部下層壁地層	上縁貫頭	口縁高さコナジー回転で仕 上げるタイプ 口縁にスヌ付着	
	1389 西平部下層壁地層	上縁貫頭		
	1390 西平部下層壁地層	上縁貫頭		
	1391 西平部下層壁地層	有地系上縁貫頭	外縁にスヌ付着	
	1392 西平部下層壁地層	有地系瓦質扣頭		
	1393 西平部下層壁地層	環状貫頭	ロクロ右回転を確認	

出土地名 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
61	1394 西平部下層壁地層	環状貫頭	重ね焼き痕跡	
	1395 西平部下層壁地層	前前貫頭	環口7本	14C?
	1396 西平部下層壁地層	新江美濃空灰釉小瓶		15C後半
	1397 西平部下層壁地層	瀬戸美濃空灰釉回転	希望前 瓦面間に日掛?	15C後半
	1398 西平部下層壁地層	瀬戸青釉磁輪花瓶		15C後半
	1399 西平部下層壁地層	瀬戸青青磁反魚文鉢	見込み高利の瓦魚文	15C後半
	1400 西平部下層壁地層	瀬戸青青磁印花文鉢		15C後半
	1401 西平部下層壁地層	瀬戸青磁瓶天目瓶		15C後半

## 兵庫県地区

発掘年 番号	出土遺物名	器種等	備考	時期	発掘年 番号	出土遺物名	器種等	備考	時期
102 内蔵(前)北平部埋土 上脚質瓦		～そ形		BC	1438 内蔵(後)北平部埋土 上脚質瓦		内外面削り		BC後半
103 内蔵(前)足平部埋土 脊面質錐		直轍が付くもの		BC	1439 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦片付瓦				BC
104 内蔵(前)足平部埋土 脊面質錐			BC前～中		1440 内蔵(前)中央小部埋土 亞紀系瓦				BC中頃
105 内蔵(前)足平部工芸陶 前面石頭敷込	前面質錐	徑口5本	BC前半		1441 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦				BC前半?
106 内蔵(前)足平部埋土 脊面質錐			BC前～中		1442 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見凸部の目脚調子		BC中頃?
107 内蔵(前)足平部工芸陶 前面石頭敷込	前面質瓦				1443 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見凸部の目脚調子		BC後半
108 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦					1444 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見凸部の目脚調子		BC後半
109 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏			BC		1445 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦				BC中～後半
110 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏					1446 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		外画面に施品付		BC中～後半
111 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏柄			BC後半		1447 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦付背引文瓦				BC中～後半
112 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏柄瓦	高台内腔の目脚調子		BC後半		1448 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦				BC
113 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏柄瓦	高台内腔の目脚調子		BC後半		1449 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見凸部の目脚調子		BC後半?
114 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏柄瓦付文瓦	二次焼成?		BC		1450 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦付背引文瓦				BC後半?
115 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏柄			BC後半		1451 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦				BC後半?
116 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏柄瓦	高台内腔の目脚調子		BC後半		1452 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦		外画面に施品付		BC後半?
117 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏柄瓦	高台内腔の目脚調子		BC後半		1453 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦				BC
118 内蔵(前)足平部埋土 青磁手裏柄			BC後半?		1454 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦				BC後半～中頃
119 内蔵(前)足平部埋土 拍頭伊万里柴付碗	高台内腔のみ縁付付	付唇	BC2/4		1455 内蔵(前)中央小部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見沾にハリ支え		BC前～中頃
120 内蔵(前)足平部埋土 拍頭伊万里柴付碗			BC2/4		1456 内蔵(前)中央小部埋土 亞紀系瓦				BC中頃以降
121 内蔵(前)足平部埋土 拍頭伊万里柴付碗			BC2/4		1457 内蔵(前)足平部埋土 江口壁付背引文瓦		コニシヤク印押		BC前半～中頃
122 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付碗			BC後半?		1458 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦				BC中頃
123 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付碗	唇付に縁付		BC後半		1459 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		コニシヤク印押		BC中頃
124 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付碗			BC2/4		1460 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		高台内腔に「大明年製」款		BC中～後半
125 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付碗			BC2/4?		1461 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		高台内腔に「大明年製」款		BC中頃
126 内蔵(前)足平部埋土 拍頭伊万里柴付碗	高台内腔に縁付		BC2/4		1462 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦				BC後半?
127 内蔵(前)足平部埋土 拍頭伊万里柴付碗	唇付に縁付		BC2/4		1463 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見沾に手捺き五瓣花		BC後半
128 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付碗	高台内腔付小面		BC?		1464 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦				BC後半
129 内蔵(前)足平部埋土 拍頭伊万里柴付碗	唇付に縁付		BC2/4		1465 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦				BC後半
130 内蔵(前)足平部埋土 拍頭伊万里柴付碗	唇付に縁付		BC2/4		1466 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦				BC後半
131 内蔵(前)足平部埋土 上脚質瓦	口縁部に縁付唇	内脚筋付、赤鉄紅	BC		1467 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見沾コニシヤク印押五瓣花		BC中～後半
132 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付碗	見沾の口縁部調子	唇付に縁付	BC後半～IBC 前半		1468 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見沾に茎ねじり模様あり		BC後半
133 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付碗	見沾の口縁部調子	唇付に縁付	BC後半		1469 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見沾の目脚調子		BC中頃?
134 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦	高台内腔に「大明年製」款		BC前半		1470 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦		見沾の目脚調子		BC後半?
135 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦	コニシヤク印押		BC前半		1471 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見沾コニシヤク印押五瓣花		BC中頃?
136 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付碗	見沾の口縁部調子	高台内腔付小面	BC後半～ BC前半		1472 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		見沾コニシヤク印押五瓣花		BC後半
137 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付碗		見沾コニシヤク印押五瓣花	高台内腔に「大明年製」款	BC後半	1473 内蔵(前)足平部埋土 脊面質瓦付背引文瓦		内脚押し成形		BC後半

地図 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時期	地図 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時期
64	1074	内装(漆)高半部埋土	漆戸内漆喰灰物體利	体部上半に朱漆蒔絵で「小」字 高台に日輪あり	BC後半?	66	1511	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付鉢	見込北壁コニャック印加五花	BC前半
	1075	内装(漆)高半部埋土	丹波窯? 錫利	高台に日輪「赤」字	BC後半?		1512	外外縁(漆)土上層	肥前吉原漆油付蓋	見込北壁コニャック印加五花 つまみ内に角張り	BC前半~中
	1076	内装(漆)高半部埋土	翠留詠	翠日日本	BC		1513	外外縁(漆)土上層	肥前吉原漆油付蓋	見込北壁コニャック印加五花	BC前半~中
	1077	内装(漆)高半部埋土	翠鏡系墨注	酒注 翠拂成形	BC		1514	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付鉢	見込北壁コニャック印加五花	BC後半
65	1078	南外縁(田)城外側石垣 瓦	上脚貫頭	5.4程度 口縁端面とがり。器壁厚5~	BC末?	67	1515	外外縁(漆)土上層	津津彦曾絆物頭	見込北壁コニャック印加五花	BC後半
	1079	南外縁(田)城外側石垣 瓦	戸内美濃空款物天目瓶 瓶	高台内に日輪有	BC前半		1516	外外縁(漆)土上層	津津彦曾瓶底	見込北壁コニャック印加五花	BC後半
	1080	南外縁(田)城外側石垣 瓦	肥前吉原	体部上半に窓岸あり	BC前半		1517	外外縁(漆)土上層	戸内美濃空瓶底	見込北壁コニャック印加五花	BC
	1081	南外縁(田)城外側石垣 瓦	上脚貫頭	器壁厚	BC		1518	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付青井文鏡	高台内に「人明半蟹」流	BC後半
	1082	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留系墨天置置林	口幅小片	BC前半		1519	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付絆	見込北壁コニャック印加五花	BC中頃
	1083	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留詠	翠日日本 手口日ごとの初期は広い	BC中頃		1520	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付二重斜物文鏡	見込北壁コニャック印加五花	BC中頃
	1084	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留吉原鉢	高台内にノックシング直路	BC4~4		1521	外外縁(漆)土上層	戸内美濃空灰輪大鏡	高台内に日輪有 見込みに抜抜5cm程度の日輪	BC後半
	1085	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留吉原青菊垂花文鏡	高台内にノックシング直路	BC中頃		1522	外外縁(漆)土上層	戸内美濃空直輪火丸	見込北壁コニャック印加五花	BC後半
	1086	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留吉原青菊垂花佐味文鏡	高台内にノックシング直路	BC後半		1523	外外縁(漆)土上層	肥前吉原番付?	船の日輪高台	BC
	1087	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留吉原青菊垂花佐味	翠留吉原青菊垂花佐味文鏡	BC1~4		1524	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付舟形子文鏡	見込北壁コニャック印加五花	BC中~後半
66	1088	南外縁(田)城外側石垣 瓦	上脚貫頭	高台内にノックシング直路	BC1~4	68	1525	外外縁(漆)土上層	明石鉢	翠日日本	BC
	1089	南外縁(田)城外側石垣 瓦	津津彦曾灰輪直輪	見込北壁コニャック印加五花	BC後半		1526	外外縁(漆)土上層	高坂廣業三耳壺	口縁部脚付?	BC後半~ 1521~4
	1090	南外縁(田)城外側石垣 瓦	津津彦曾黃輪	当器手	BC後半~ BC前半		1527	外外縁(漆)土上層	津津彦曾物手鏡	把手部分	BC後半
	1091	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留吉原石	高台内に「清水」鏡	BC後半~ BC前半		1528	外外縁(漆)土上層	津津彦曾直輪	外縁に縫かい貫入	BC後半~ BC前半
	1092	南外縁(田)城外側石垣 瓦	折腹沙里足付付耳	BC2~4	1529	外外縁(漆)土上層	戸内美濃空款物天目瓶	BC後半			
	1093	南外縁(田)城外側石垣 瓦	津津彦曾絆物頭	見込北壁コニャック印加五花	BC後半~	1530	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付文鏡	見込北壁コニャック印加五花	BC後半~ BC前半	
	1094	南外縁(田)城外側石垣 瓦	戸内美濃空灰輪直輪	BC	1531	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付舟形子文鏡	見込コニャック印加五花 高台内に「清水」鏡	BC後半		
	1095	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留吉原直輪	BC後半~ BC前半	1532	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付蓋	津鏡	BC中頃		
	1096	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留吉原直輪	翠日日本	1533	外外縁(漆)土上層	戸内美濃空? 琉球花鏡	BC代			
	1097	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留吉原直輪	翠留吉原直輪	BC中頃	1534	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付扇形文鏡	見込北壁吉原台 高台内に「清水」鏡	BC後半	
67	1098	南外縁(田)城外側石垣 瓦	翠留吉原青花牡丹草文鏡	BC1~4	69	1535	外外縁(漆)土上層	津津彦曾漆油付舟形文鏡	船の日輪吉原台 高台内に	BC後半	
	1099	南外縁(漆)土上層	上脚貫頭	高台内に「赤」文御籠書き	BC後半以降	1536	外外縁(漆)土上層	津津彦曾吉原漆油付舟形文鏡	高台内に○○○型鏡	BC後半	
	1100	南外縁(漆)土上層	津津彦曾直輪小鏡	BC	1537	外外縁(漆)土上層	戸内美濃空跋輪火丸	高台内に「...」年 本丸月丸 足利義政村 島らうき	BC中頃		
	1101	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付文杯	BC	1538	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付油壺	BC			
	1102	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付碗	高台内に「清水」鏡	BC前半	1539	外外縁(漆)土上層	新納伊万里集付舟形	BC2~4		
	1103	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付文花	BC前半	1540	外外縁(漆)土上層	津津彦曾詠	翠日日本	BC中		
	1104	南外縁(漆)土上層	肥前吉原付文鏡	高台内に「赤」文御籠書き	BC後半以降	1541	外外縁(漆)土上層	戸内美濃空灰輪大鏡	船の内面に冠形手鏡	BC後半	
	1105	南外縁(漆)土上層	肥前吉原直輪小鏡	BC	1542	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付?	BC後半~BC			
	1106	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付文杯	BC	1543	外外縁(漆)土上層	戸内美濃空黄輪反鏡	把手部分	BC代		
	1107	外外縁(漆)土上層	肥前吉原直輪	高台内に「清水」鏡	BC後半	1544	外外縁(漆)土上層	戸内美濃空漆	内面に萬葉	BC	
68	1108	南外縁(漆)土上層	翠留吉原青花牡丹草文鏡	BC1~4	69	1545	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡(紅)	高台内に日輪?	BC末?	
	1109	南外縁(漆)土上層	肥前吉原青花文鏡	BC中頃		1546	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	BC		
	1110	南外縁(漆)土上層	肥前吉原青花文鏡	BC後半		1547	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内		
	1111	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	BC							
	1112	南外縁(漆)土上層	翠留吉原青花文鏡	見込北壁「日輪蒔」コシニヤ ク印加五花	BC前半						
	1113	南外縁(漆)土上層	肥前吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」コシニヤ ク印加五花	BC中頃以降						
	1114	南外縁(漆)土上層	肥前吉原青花文鏡	見込北壁「日輪蒔」コシニヤ ク印加五花	BC後半						
	1115	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」コシニヤ ク印加五花	BC後半						
	1116	南外縁(漆)土上層	翠留吉原青花文鏡	見込北壁「日輪蒔」コシニヤ ク印加五花	BC後半						
	1117	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」コシニヤ ク印加五花	BC後半						
69	1118	南外縁(漆)土上層	翠留吉原青花文鏡	BC中頃	70	1548	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	
	1119	南外縁(漆)土上層	翠留吉原青花文鏡	BC後半		1549	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	
	1120	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」	BC後半	1550	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	
	1121	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」	BC後半	1551	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	
	1122	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」	BC後半	1552	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	
	1123	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」	BC後半	1553	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	
	1124	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」	BC後半	1554	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	
	1125	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」	BC後半	1555	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	
	1126	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」	BC後半	1556	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	
	1127	南外縁(漆)土上層	翠留吉原直輪	見込北壁「日輪蒔」	BC後半	1557	外外縁(漆)土上層	肥前吉原付白磁鏡	高台内	BC	

地點 番号	遺物 番号	出土標名	器種等	備考	時間	地點 番号	遺物 番号	出土標名	器種等	備考	時間
1548	南外縁(新)上層下層	鹿前坐束付陶文鏡	見込部の日輪調査	18C前半		1595	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	上脚貫耳			
1549	南外縁(新)土層下層	鹿前坐束付陶文鏡	コニニガタ印判	18C前半		1596	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	正規系鏡			18C中頃
1550	南外縁(新)土層下層	鹿前坐束付陶文鏡	見込部多々五花 高台内に「内側版」表	17C後半~ 18C前半		1597	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	新江戸造空灰輪瓶			18C
1551	南外縁(新)土層下層	鹿前坐束付陶文鏡	見込部多々五花 つまみ内に「角瓶」表	18C前半		1598	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	鹿前坐束付陶文鏡			18C後半
1552	南外縁(新)土層下層	鹿前坐束付陶文鏡	見込部多々五花	18C		1599	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	鹿前坐束付草花文鏡	高台内に「大明牟製」表		18C後半
1553	南外縁(新)土層下層	吉津彦鏡	鏡日本本 裏面鉢形	17C後半		1600	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	鹿前坐束付二重輪日輪			18C前半
1554	南外縁(新)城外側石垣 裏品	上脚貫耳	6.8程度 内面一定方向ナサ	17C後半		1601	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	鹿前坐束付鏡	見込部の日輪調査	17C後半~ 18C前半	
1555	南外縁(新)埋土	鹿前坐丸瓶	見込にハリ支付	18C中頃		1602	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	鹿前坐束付花文鏡			18C後半
1556	南外縁(新)埋土	鹿前坐束付陶文鏡	内面鏡面有	18C前半		1603	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	鹿前坐束付文文鏡	高台内に「角瓶」表		18C後半
1557	南外縁(新)埋土	鹿前坐束付五花文鏡	コニニガタ印判	18C前半		1604	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	鹿前坐束付白瓶口			18C
1558	南外縁(新)埋土	新潟万里焼付	17C2/4			1605	東外縁(新)小区画分層 石古2回目土上	鹿前坐束付曲曲			18C
1559	南外縁(新)埋土	吉津彦	見込部多々五花	17C2/4		1606	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	上脚貫耳	赤切丸		17C後半
1560	南外縁(新)埋土	吉津彦万里白瓶	骨付に跡有	17C2/4		1607	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	鹿前坐束付系鏡	高台内に「清木」表		18C前半
1561	南外縁(新)埋土	吉津彦	見込部多々五花	17C後半~ 18C前半		1608	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	鹿前坐束付文文鏡			18C後半
1562	南外縁(新)埋土	吉津彦	見込部多々五花	18C		1609	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	鹿前坐束付草花文鏡	高台内に「大明牟製」表		18C後半
1563	南外縁(新)埋土	吉津彦	鏡日本本 裏面鉢形	17C後半		1610	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	鹿前坐束付二重輪日輪			18C前半
1564	南外縁(新)城外側石垣 裏品	上脚貫耳	6.8程度	17C後半?		1611	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	鹿前坐束付	見込部の日輪調査		18C後半?
1565	東外縁(田)域内側石垣 埋土	吉津彦銀錆鏡		17C1/4		1612	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	鹿前坐束付	見込部の日輪調査	17C後半~ 18C前半	
1566	東外縁(田)域内側石垣 埋土	鹿前坐束付丸瓶	見込部多々五花	17C後半		1603	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	吉津彦青磁瓶	見占部の日輪調査	17C後半~ 18C前半	
1567	東外縁(田)域内側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦空庭陶菊瓶	内型押し	17C後半	1604	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	鹿前坐束付	鏡日本本 内面鏡面有		17C後半
1568	東外縁(田)域内側石垣 埋土	鹿前坐束付	吉津彦万里白瓶付	17C2/4		1605	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	吉津彦	吉津彦空庭陶菊瓶		18C前半
1569	東外縁(田)域内側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦万里白瓶付	17C2/4		1606	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	吉津彦	吉津彦空庭瓶		18C前半
1570	東外縁(田)域内側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦	17C1/4		1607	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	吉津彦	吉津彦空庭瓶		18C前半
1571	東外縁(田)域内側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦从施丸瓶	17C2/4		1608	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	吉津彦	吉津彦空庭付文文鏡		18C前半?
1572	東外縁(田)域内側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦从施瓶	17C2/4		1609	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	吉津彦	吉津彦空庭付	見込部の日輪調査	17C前半~ 18C前半
1573	東外縁(田)域内側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦	17C2/4		1610	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	吉津彦	吉津彦空庭瓶	見込部の日輪調査	17C前半~ 18C前半
1574	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦空庭瓶	見込部多々五花	17C2/4	1611	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	吉津彦	吉津彦空庭付	見占部の日輪調査 内面に「手すり」文有	17C後半~ 18C前半
1575	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦空庭瓶	17C1/4		1612	東外縁(新)小区画分層 石古3回目土上	吉津彦	吉津彦空庭灰輪瓶	内型押し、見占部に日輪3	17C後半
1576	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦	17C2/4		1613	東外縁(新)埋土上層	吉津彦空庭灰輪小杯			18C
1577	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦万里白瓶付	見込・骨付に跡有	17C2/4		1614	東外縁(新)埋土上層	吉津彦	吉津彦空庭灰輪		18C中後
1578	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦万里白瓶付	吉津彦万里白瓶	17C2/4		1615	東外縁(新)埋土上層	吉津彦	吉津彦空庭付	見占部に跡有付。高台内に難 妻で…?	18C後半
1579	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦空庭白瓶	17C1/4		1616	東外縁(新)埋土上層	吉津彦	吉津彦		18C中
1580	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦空庭白瓶	17C1/4		72	1617	東外縁(新)埋土上層	鹿前坐束付丸瓶	コニニガタ浮置	18C中?
1581	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦空庭灰輪	17C1/4		1618	東外縁(新)埋土上層	鹿前坐束付草花文鏡	高台内に「大明牟製」表	18C中?	
1582	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦空庭口跡	17C前半?		1619	東外縁(新)埋土上層	鹿前坐束付	吉津彦空庭付銀瓶		18C後半
1583	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦空庭	17C前半?		1620	東外縁(新)埋土上層	鹿前坐束付丸瓶	見占半程き五花	18C後半	
1584	東外縁(田)域外側石垣 埋土	吉津彦	吉津彦空庭	17C前半?		1621	東外縁(新)埋土上層	鹿前坐束付	吉津彦空庭白瓶	吉津彦空庭付	18C後半

北朝代 年号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
72	1622	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付花文筒瓦	見凸手模き瓦花	1KC後半
	1623	東外縫(新)地上上層	肥前堂西軒小瓶		1KC
	1624	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付唐突口		1KC
	1625	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付瓦	見凸松の日輪調瓦・コシニカ ク印御五瓣花	1KC中?
	1626	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付唐突蓋		1KC中以前
	1627	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付筒	高台内に「萬葉」題	1KC
	1628	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付唐突文瓶	高台内に「萬葉」題	1KC
	1629	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付唐突蓋	高台内に「萬葉」題	1KC後半
	1630	東外縫(新)地上上層	柳葉鉢	羅日本	1KC
	1631	東外縫(新)地上上層	丹波燒		1KC
73	1632	東外縫(新)地上中層	西津吉黃釉瓶	見凸松の日輪調瓦	1KC
	1633	東外縫(新)地上中層	肥戸美濃燒束口丸瓶		1KC後半
	1634	東外縫(新)地上中層	肥戸系器瓶		1KC中
	1635	東外縫(新)地上中層	肥前堂東付唐突各瓶	見凸松手模き瓦花 身外側に他製品有	1KC後半
	1636	東外縫(新)地上中層	肥前堂東付丸文瓶	見凸松ニヨウキ印御五瓣花	1KC
	1637	東外縫(新)地上中層	肥前堂東付筒	高台内に「角瓶」題	1KC
	1638	東外縫(新)地上中層	西津吉窯毛口片口瓶	見凸松の日輪調瓦	1KC
	1639	東外縫(新)地上中層	丹波燒		1KC
	1640	東外縫(新)地上中層	肥戸美濃燒		1KC
	1641	東外縫(新)地上中層	肥前堂東付筒消音瓶		1KC
74	1642	東外縫(新)地上中層	西津吉窯毛口瓶	高台に仰付有	1KC
	1643	東外縫(新)地上中層	丹波燒		1KC
	1644	東外縫(新)地上上層	豪宗茶碗		1KC
	1645	東外縫(新)地上上層	肥戸系器削瓶	見凸松ハリ丸文3	1KC中
	1646	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付二重綱口文瓶		1KC
	1647	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付花文瓶	高台内に「大明平盤」題	1KC
	1648	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付筒	見凸松手模き瓦花 身内に「角瓶」題	1KC
	1649	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付筒	見凸松の日輪調瓦 大明タイ	1KC後半
	1650	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付筒	見凸松ニヨウキ印御五瓣花 高台内に「大明平盤」題	1KC
	1651	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付筒		1KC
75	1652	東外縫(新)地上上層	肥戸美濃燒火入		1KC
	1653	東外縫(新)地上上層	丹波燒火入		1KC
	1654	東外縫(新)地上上層	肥前堂白磁碗具		1KC
	1655	東外縫(新)地上上層	柳葉鉢	羅日本	1KC
	1656	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付漆器		1KC
	1657	東外縫(新)地上上層	丹波燒片口壺		1KC
	1658	東外縫(新)地上上層	肥戸小頭毛口壺	丹波?	1KC
	1659	東外縫(新)地上上層	丹波燒		1KC
	1660	東外縫(新)地上上層	肥前堂東付瓶		1KC
	1661	東外縫(新)地上上層	肥前堂明治瓶		1KC
76	1662	東外縫(新)地上上層下附	王綿質瓶	赤堀灰	
	1663	東外縫(新)地上上層下附	肥戸系瓦瓶	俗村に尋ね?ミタシバン	1KC中
	1664	東外縫(新)地上上層下附	肥前堂東付青輪草文瓶	高台内に既	1KC
	1665	東外縫(新)地上上層下附	肥前堂東付丸文瓶	高台内に「萬葉」題	1KC
	1666	東外縫(新)地上上層下附	肥前堂東付瓶	見凸松の日輪調瓦	1KC
	1667	東外縫(新)地上上層下附	圓井美濃燒灰釉瓶	見凸松の日輪調瓦	1KC
	1668	東外縫(新)地上上層下附	肥前堂東付竹羽文瓶	見凸松の日輪調瓦	1KC
	1669	東外縫(新)地上上層下附	肥前堂東付灰羽文瓶	高台内既	1KC
	1670	東外縫(新)地上上層下附	赤津第二款手拂		1KC
	1671	東外縫(新)地上上層下附	肥前堂東付筒		1KC
77	1672	東外縫(新)地上上層下附	肥前堂東付灰呂		1KC
	1673	東外縫(新)地上上層下附	肥前堂東付花瓶	高部に日輪5	1KC
	1674	東外縫(新)地上上層下附	王綿質瓶		1KC
	1675	東外縫(新)地上上層下附	丹波燒		1KC
	1676	SE2301	王綿質瓶	赤堀灰	
	1677	SE2301	王綿質瓶	内面わずかに冠日残	
	1678	SE2301	王綿質瓶	通假黑	
	1679	SE2301	瓦質灰		
	1680	SE2301	肥前堂水屋裏		1KC
	1681	SE2301	肥前堂接瓶		1KC?
78	1682	SE2301	肥前堂青瓶	羅手刷用	1KC後半
	1683	SE2301	肥前堂青瓶	羅手刷用	1KC後半
	1684	SE3401	肥前堂青灰粘葉瓶	内面に細かい傷多い	1KC末~1KC
	1685	SE3402	肥前堂東付二重綱口文瓶		1KC後半
	1686	SE3402	柳葉質瓶		1KC後半
	1687	SE3403	肥前堂青白石川中	滑川度青花瓶	1KC1/4
	1688	SE3403	肥前堂東付草花文瓶	高台内既あり	1KC前半~中
	1689	SE3403	肥前堂青白付蓋瓶		1KC前半~中
	1690	SE3403	肥前堂東付大體利		1KC後半
	1691	SE3403	柳葉質瓶	羅日本~外側に重ね焼き板	1KC後半
79	1692	SK3401	王綿質		1KC1/4
	1693	SK3401	肥前堂青白瓶瓦		1KC1/4
	1694	SK3401	肥前堂青白瓶		1KC1/4
	1695	SK3401	柳葉質瓶		1KC

出土地 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
77	1696	SK3405	上縁貫眼		
	1697	SK3405	上縁貫眼		
	1698	SK3405	上縁貫眼		
	1699	SK3405	上縁貫眼		
	1700	SK3405	上縁貫眼		
	1701	SK3405	上縁貫眼	内面一定方向ナラ	
	1702	SK3405	上縁貫眼	内面一定方向ナラ	
	1703	SK3405	側面空水星裏		16C末
	1704	SK3405	後縁空背丸面		16C末?
出土地 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	時間
77	1705	SK3403	上縁貫眼		
	1706	SK3403	側面空水星裏	縦114本	16C末
	1707	SK3403	側面空水星裏		16C末
	1708	SK3403	側面空水星裏	肩部・既底に空洞「中」	16C末
P114 B105	1709	SK3508	上縁貫眼		
	1710	SK3508	上縁貫眼		
	1711	SK3508	上縁貫眼		
	1712	SK3508	上縁貫眼		
	1713	SK3508	上縁貫眼		

瓦一覧表

新町地区

地番 番号	出土遺物名	器種等	備考
1714	下層確認トレンチ	雙字文軒丸瓦	「フ」(ア) 文字の下に蓮華文
1715	SB1315・1316B	「福」文軒丸瓦	コピキA 内側縫あり
1716	SB1322	「福」文軒丸瓦	内側縫あり 二次焼成
78	1717	SB1308イロン	三巴文軒丸瓦 内外縫 莲文小字 丸瓦に刻み
1718	SB1404	三巴文軒丸瓦	丸瓦にカタメ 内側縫あり
1719	下層確認トレンチ 建物部分	三巴文軒丸瓦	両方もともセキメなし コピキA 瓦縫
1720	SB1331	三巴文軒丸瓦	丸瓦にカタメあり 内側縫あり
1721	SB1413	三巴文軒丸瓦	コピキB
1722	SB1408・1409	三巴文軒丸瓦	コピキA
1723	SB1309	三巴文軒丸瓦	丸瓦にカタメ コピキB 鉢穴
1724	SB1465	三巴文軒丸瓦	丸瓦にカタメ
1725	SB1309	三巴文軒丸瓦	コピキB
79	1726	SK1326	三巴文軒丸瓦 巴文小さく、断面形三角形
1727	SK1326	三巴文軒丸瓦	丸瓦にカタメ
1728	SK1321	三巴文軒丸瓦	丸瓦にカタメ 巴文略凹
1729	SB1408・1409	三巴文軒丸瓦	丸瓦にカタメ
1730	SB1408・1409	三巴文軒丸瓦	コピキB 丸瓦にカタメ
1731	SK1321	三巴文軒丸瓦	コピキB 莲孔2
1732	SB1422	唐草文軒平瓦	
1733	SB1331	唐草文軒平瓦	右側城出土瓦と同文
80	1734	下層確認トレンチ	唐草文軒平瓦 調査付
1735	SB1409	唐文軒平瓦	証化した小さな鉢文
1736	SB1409	唐文軒平瓦	調査付
1737	SB1409	唐草文軒平瓦	調査付(中心空洞で腹に斜割)

地番 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考
1738	SB1408・1409	唐草文軒平瓦		
1739	SB1409	唐草文軒平瓦	調査付	
1740	SB1306	唐状文軒平瓦	左側城出土瓦と同文 作焼け?	
80	1741	SK1316	唐状文軒平瓦	右側城出土瓦と同文 調査付
1742	SB1315・E136	唐状文軒平瓦	右側城出土瓦と同文	
1743	SK1309	唐草唐草文軒平瓦	浮雕 三筋底に横筋 調査付	
1744	SK1333	圓水瓦	瓦当面の駆け出度直角に違い	
1745	SK1321	軒瓦	軒孔有	
1746	SK1336	唐草文軒平瓦		
81	1747	SK1336	軒平瓦	板型文?
1748	SK1336	軒平瓦	新形文	
1749	SK1336	丸瓦	コピキB 二次焼成	
1750	SB1409	丸瓦	コピキB 一二次焼成	
1751	SE1308	丸瓦	コピキB	
1752	SB1415イロン	丸瓦	コピキA 二次焼成 内面ケズリ明瞭	
80	1753	SE1304	半瓦	コピキB
1754	SK1306	半瓦	小口にスタンプ文	
1755	SE1306	軒板瓦	コピキA	
1756	SB1356	電瓦	左半分 内側有目	
1757	SB1335内上瓦 (SK1325)	電瓦	裏へこむ 縫部の立ち上がり明瞭	
83	1758	SB1409	電瓦	右耳・日部分 U字形状シテ模様
1759	SB1408	電瓦		
1760	SB1318	電板(打凸小屋)	裏面に成形略の穴有	

関屋町地区

地番 番号	出土遺物名	器種等	備考
1761	SE2008	文字文軒丸瓦	丸瓦面にカタメ「久」?字?
1762	西平底上解壁地層	文字文軒丸瓦	「久」字?
1763	SB1241	文字文軒丸瓦	「久」字?
84	1764	SK2406	三巴文軒丸瓦 丸瓦面にカタメ
1765	SK2407	三巴文軒丸瓦	左側城出土瓦と同文
1766	西平底上解壁地層	三巴文軒丸瓦	左側城出土瓦と同文
1767	SK2428	三巴文軒丸瓦	右側城出土瓦と同文 コピキA
1768	SB2251	三巴文軒丸瓦	右側城出土瓦と同文 丸瓦にカタメ

地番 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考
84	1769	SB1323	三巴文軒丸瓦	
1770	SK2261	三巴文軒丸瓦		
1771	町屋群G辯證書照合上 M	三巴文軒丸瓦	丸瓦・軒面にカタメ	
1772	西平底上解壁地層	三巴文軒丸瓦	西面有目	
1773	SK2414	三巴文軒丸瓦		
85	1774	SK2542	唐草文軒平瓦	右側面あり 調査付
1775	SK2429	唐草文軒平瓦	右側面あり 調査付	
1776	SK2429	唐草文軒平瓦	右側面あり	

発掘 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	発掘 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考
85	1777	町原磨G18道志系灰陶土瓦	須恵文灰平瓦	中心に「京」文字 外周縁あり 西面布目	86	1793	SK2431	須恵文灰平瓦	花譜城出土瓦と同文
	1778	SK2426	須恵文灰平瓦	鏡貼付		1794	SK2432	須恵文灰平瓦	花譜城出土瓦と同文
	1779	SK2424	須恵文灰平瓦	二次焼成		1795	SK2433	須恵文灰平瓦	花譜城出土瓦と同文
	1780	SK2421カマド	須恵文灰平瓦	二次焼成		1796	SK2434	須恵文灰平瓦	花譜城出土瓦と同文
	1781	SK2423	須恵文灰平瓦			1797	SK2441	平瓦	凸面に須恵タキ
	1782	SK2401	須恵文灰平瓦	鏡貼付		1798	SK252	瓦瓦	ヨコヒア <span style="font-size: small;">凸面横目</span> 二次焼成
	1783	第3-1首府町屋燒土解	須恵文灰平瓦	鏡貼付		1799	SE2401	瓦瓦	ヨコヒア
	1784	SK2201	須恵文灰平瓦	西面布目		1800	SB2426	瓦瓦	左目部分 鏡貼部分貫通
	1785	SK2203	須恵文灰平瓦			1801	SK2434	瓦瓦	右目部分 鏡貼突出 砂錆ミシング状
	1786	SK2441	須恵文灰平瓦			1802	SK2442	瓦瓦	一筋 黒門丸
	1787	SK2441	須恵文灰平瓦	有開底出土瓦と同文		1803	SE2209	瓦瓦	宝満はスタンプ状、裏面に張り込みなく、板状
	1788	SK2441イリワ	軒平瓦	模様?		1804	SP2403	瓦瓦	下側曲と腰部分
86	1790	SE2204	須恵文灰平瓦	外周縁あり		1805	SK2414	瓦瓦	幕・白口部分
	1790	SK2204部分	須恵文灰平瓦	外周縁あり		1806	西平屋上解壁地盤	平瓦	西面に熱子目タキ
	1791	SK2203	須恵文灰平瓦	外周縁あり		1807	西平屋上解壁地盤	平瓦	西面熱子目タキ <span style="font-size: small;">凸面熱子目タキ</span>
	1792	SK2203カマド	須恵文灰平瓦			1808	SB2453	磚	

## 兵庫城地区

発掘 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	発掘 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考
90	1800	瓦敷道傍	「京」字文灰丸瓦	内面縁あり	92	1827	内側(田)走半部埋土上	三巴文灰丸瓦	丸瓦筋カキメ
	1801	SE2402	「京」字文灰丸瓦	内面縁あり		1828	瓦敷道傍	三巴文灰丸瓦	西面傳羅経形
	1801	内側(田)走半部埋土上	文字文灰丸瓦	内面縁あり 丸瓦端に深いカキメ「九」か?		1829	瓦敷道傍	三巴文灰丸瓦	内面縁あり 丸瓦にカキメ
	1802	内側(田)城外側石垣 上	文字文灰丸瓦	内面縁あり「久」字?		1830	内側(京)中央狭小部分 上	三巴文灰丸瓦	ヨコヒア且日部埋タキ・刻花あり
	1803	内側(京)城外側石垣 上	「京」字文灰丸瓦	内面縁あり		1831	内側(京)走半部埋土 石垣埋土上	丸瓦	西面有目 古面に巻刷字等「...」 <span style="font-size: small;">+改変 季...」</span> 「...」 <span style="font-size: small;">+改変 季...」</span>
	1804	瓦敷道傍	三巴文灰丸瓦	内面縁あり		1832	内側(京)走半部埋土 石垣埋土上	磚瓦	縦邊に平行のカキメ ヨコヒア?
	1805	瓦敷道傍	三巴文灰丸瓦	内面縁あり 底文少々。		1833	瓦敷道傍	須恵文灰平瓦	外周縁
	1806	内側(京)走半部埋土上	三巴文灰丸瓦	内面縁あり 内面布目		1834	南外側(京)腰込	須恵文灰平瓦	内面縁あり 鏡貼付 外縁部表面に布目痕
	1817	瓦敷道傍	三巴文灰丸瓦	内面縁あり		1835	南外側(京)城外側石垣 上	須恵文灰平瓦	鏡貼付
	1818	内側(京)走半部埋土上	三巴文灰丸瓦	内面縁あり 丸瓦端にカキメ		1836	内側(京)走半部埋土上	須恵文灰平瓦	
91	1819	瓦敷道傍	三巴文灰丸瓦	内面縁あり		1837	瓦敷道傍	須恵文灰平瓦	鏡貼付
	1820	瓦敷道傍	三巴文灰丸瓦	内面縁あり		1838	瓦敷道傍	須恵文灰平瓦	
	1821	内側(京)走半部埋土上	三巴文灰丸瓦	花譜城出土瓦と同文?		1839	瓦敷道傍	須恵文灰平瓦	鏡縫あり
	1822	東外側(京)城外側石垣 上	三巴文灰丸瓦	花譜城出土瓦と同文?		1840	瓦敷道傍	須恵文灰平瓦	
	1823	瓦敷道傍	三巴文灰丸瓦	花譜城出土瓦と同文?		1841	内側(京)走半部埋土上	須恵文灰平瓦	
	1824	南外側(京)埋土	三巴文灰丸瓦	丸瓦筋にカキメ		1842	内側(京)走半部埋土上	須恵文灰平瓦	上面市面剥残る
	1825	瓦敷道傍	三巴文灰丸瓦	内面縁あり 丸瓦に泡み		1843	内側(京)走半部埋土上	須恵文灰平瓦	花譜城出土瓦と同文
	1826	内側(京)走半部埋土 石垣埋土上	三巴文灰丸瓦	内面縁あり 丸瓦端にカキメ		1844	瓦敷道傍	須恵文灰平瓦	花譜城出土瓦と同文

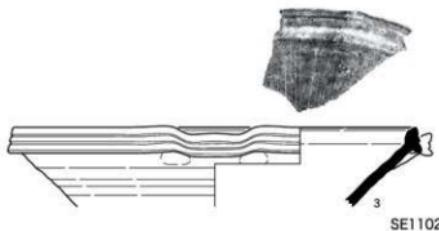
文部省 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考	文部省 番号	遺物 番号	出土遺物名	器種等	備考
93	1845	瓦張造模	唐草文軒平瓦	調點付 中心飾は脚付宝珠文	95	1861	SE3402	丸瓦	ヨビキA 凹面有目 植栽用瓦
	1846	内側(田)北半部土器頭 右端埋土	唐草文軒平瓦	調點付 中心飾は脚付宝珠文		1862	瓦張造模	丸瓦	ヨビキA
	1847	外側(田)右端土	唐草文軒平瓦	調點付 中心飾は脚付宝珠文		1863	内側(田)北半部埋土	丸瓦	ヨビキA 有目 O型のタテキ痕跡あり
94	1848	内側(田)北半部埋土	波状文軒平瓦	外周縁あり	96	1864	瓦張造模	丸瓦	ヨビキA 尾錐(ループ)
	1849	瓦張造模	波状文軒平瓦	外周縁あり		1865	内側(田)南半部埋土	丸瓦	ヨビキA 布目 尾錐(ループしない)
	1850	内側(田)中央後小部埋 土	波状文軒平瓦	外周縁あり 四周有目		1866	内側(田)南半部埋土	丸瓦	ヨビキA 尾錐 O形のタテキ痕跡あり
	1851	内側(田)埋土	波状文軒平瓦	西面有目		1867	SE3402	丸瓦	ヨビキA 尾錐(上でループする)
	1852	内側(田)南半部埋土	波状文軒平瓦		97	1868	内側(高)南半部埋土	板瓦	
	1853	内側(田)南半部埋土	波状文軒平瓦	瓦謫城出土瓦と同文 破片あり		1869	内側(高)南半部断形	平瓦	凸面に格子目タテキ
	1854	内側(田)南半部埋土	波状文軒平瓦	瓦謫城出土瓦と同文		1870	内側(田)北半部埋土	平瓦	凸面に格子目タテキ
	1855	外外側(高)埋土	波状文軒平瓦	瓦謫城出土瓦と同文		1871	内側(田)北半部土器頭 右端埋土	平瓦	凸面に格子目タテキ
	1856	外外側(高)埋土	波状文軒平瓦	瓦謫城出土瓦と同文		1872	内側(田)北半部埋土	板瓦	
	1857	瓦張造模	波状文軒平瓦	瓦謫城出土瓦と同文		1873	内側(田)南半部埋土	板瓦	表面少ない
	1858	内側(高)北半部断形	波状文軒平瓦	瓦謼城出土瓦と同文 破片あり		1874	内側(田)北半部埋土	板瓦	
	1859	瓦張造模	波状文軒平瓦	瓦謼城出土瓦と同文 瓦瓦		1875	内側(高)北半部埋土	板瓦	左下部分 黒錆り比較的浅い
	1860	内側(田)城外側右端 埋土	唐草文軒平瓦	窮屈繩目唐草平瓦に類似					

軒平瓦文様別集計表

軒平瓦文様	遺物番号(例)	開発町	新町	町屋合計	内軒	外軒	土焼瓦数	城合計	合計
波状+宝珠(瓦謼城同文)	1857	21	11	32	6	4	6	16	48
唐草+中心四葉花(瓦謼城同文)	1839	2	2	4		1	1	2	6
二重唐草+中心三葉(有圓城同文)	1844	1	1	2	1		5	6	8
桐葉+宝珠(大阪城下町同文)	1737	1	13	14				0	14
唐草+宝珠(大阪城跡同文)	1738		7	7				0	7
唐草+足付宝珠(大阪城跡同文)	1846		1	1	1	1	1	3	4
半同心円(聚葉第同文)	1860			0		1		1	1
その他		48	74	122	14	3	10	27	149
合計			73	109	182	22	10	23	55
									237

## 遺物実測図

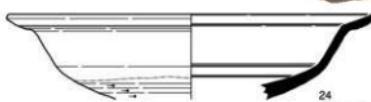




SK1120



SK1214



0 20cm

図1 新町地区出土遺物実測図1



図2 新町地区出土遺物実測図2

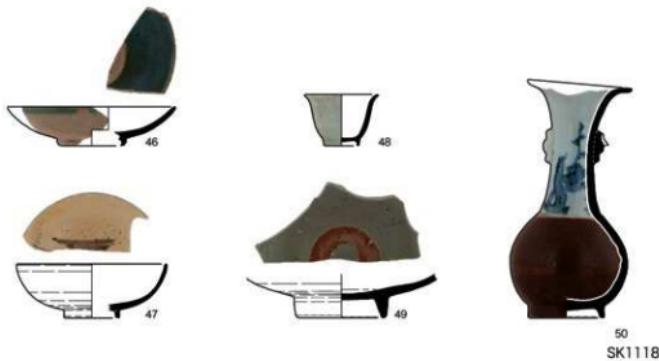
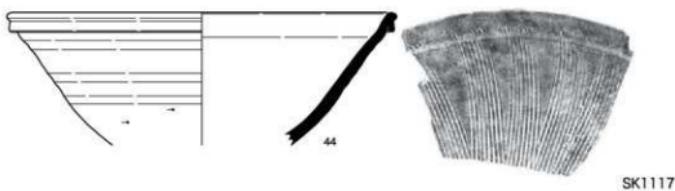
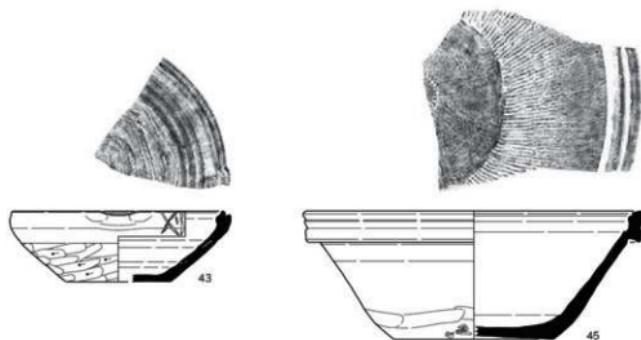
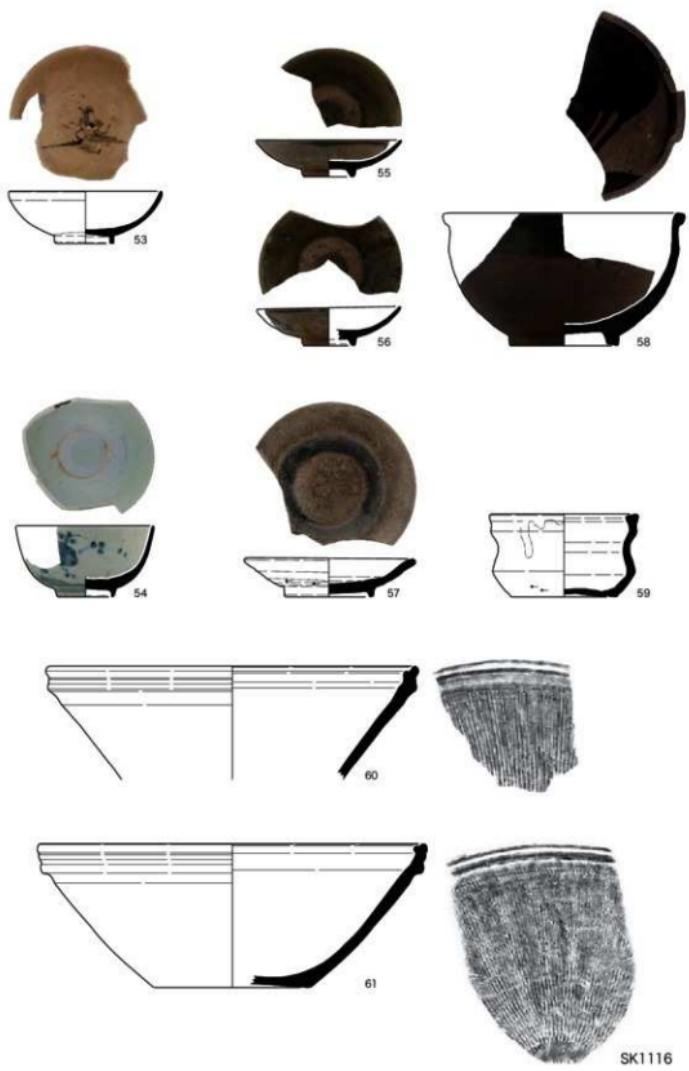


図3 新町地区出土遺物実測図3



0 20cm

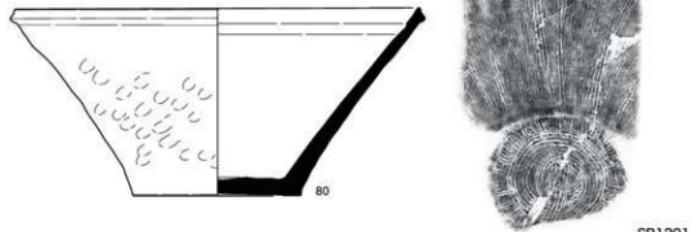
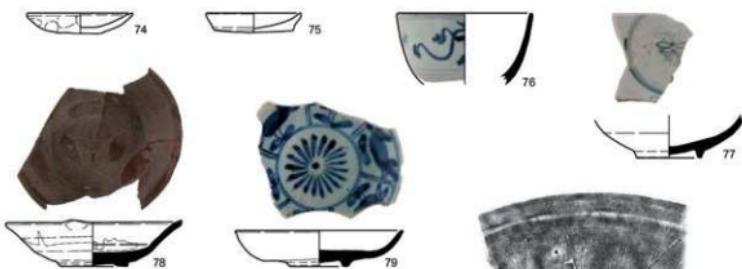
図4 新町地区出土遺物実測図4



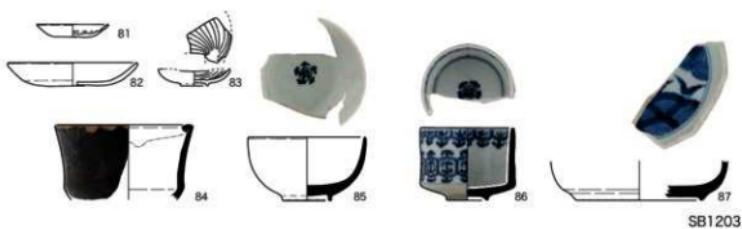
SK1115



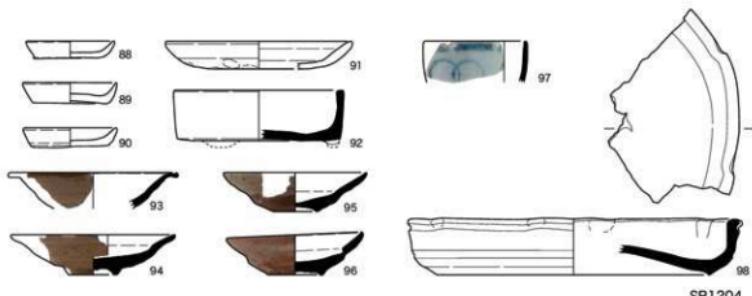
図5 新町地区出土遺物実測図5



SB1201



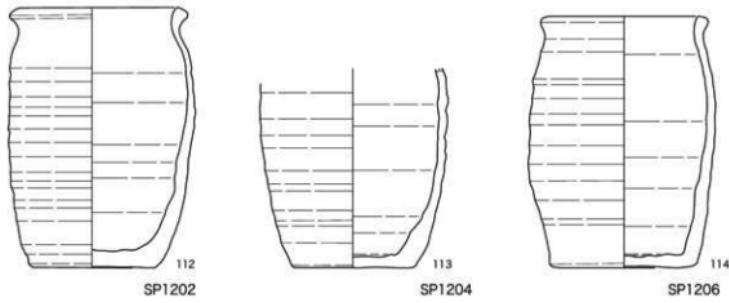
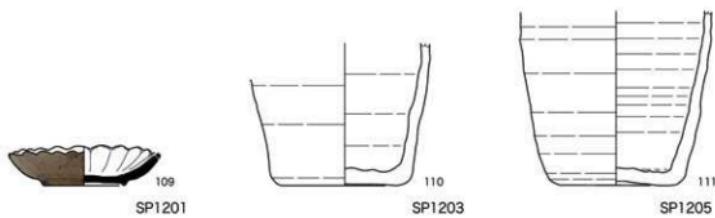
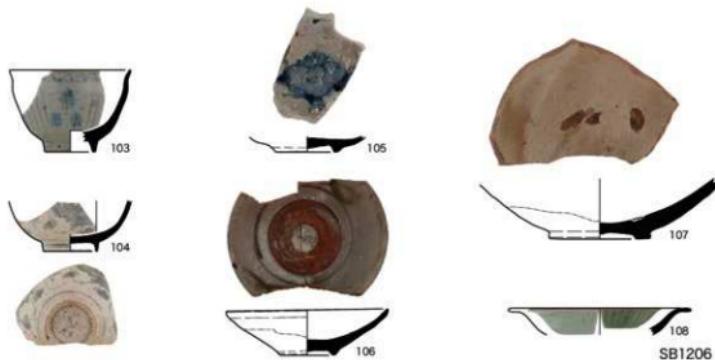
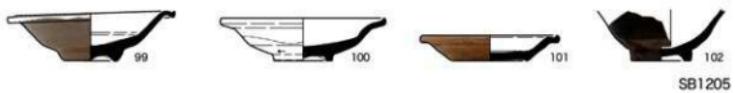
SB1203



SB1204

0 20cm

図6 新町地区出土遺物実測図6

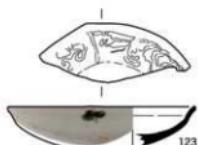
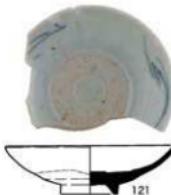


0 20m

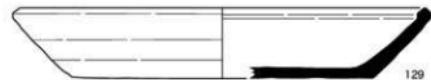
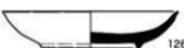
図7 新町地区出土遺物実測図7



120



124



129

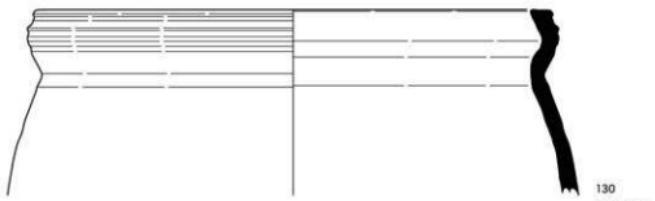
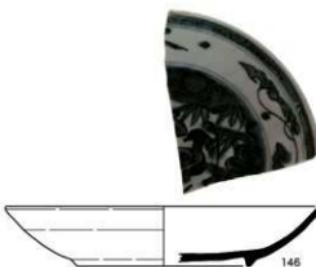
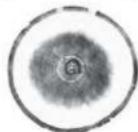
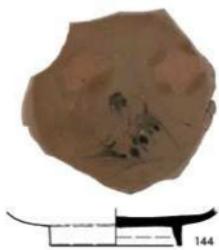


図8 新町地区出土遺物実測図8



図9 新町地区出土遺物実測図9

0 20cm



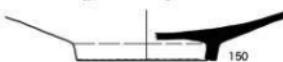
SK1215



147  
SK1218



149



SK1205



图10 新街地区出土遗物实测图10



SX1201



SK1206

図11 新町地区出土遺物実測図11



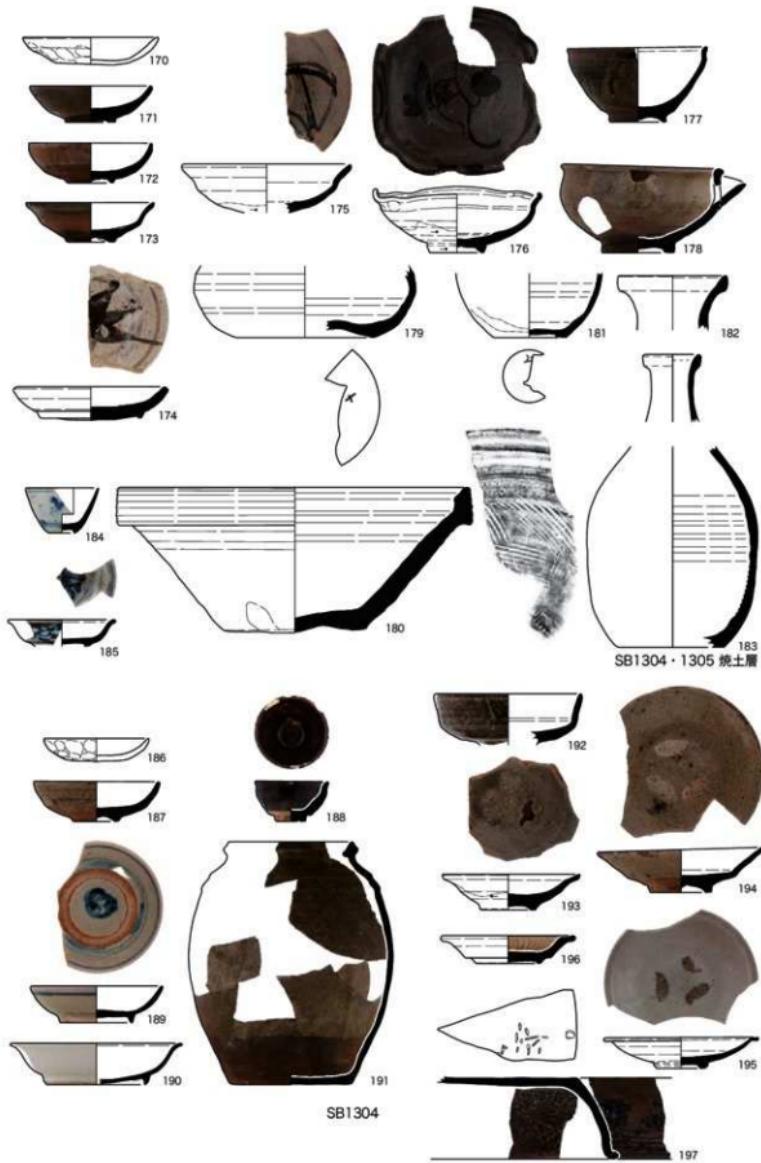
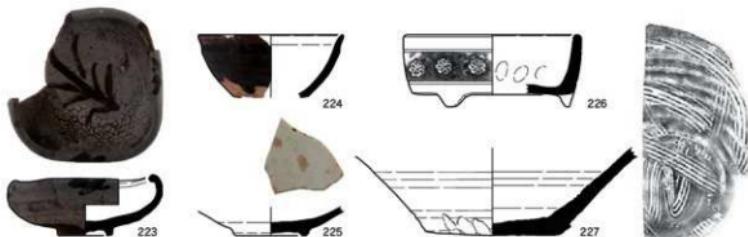
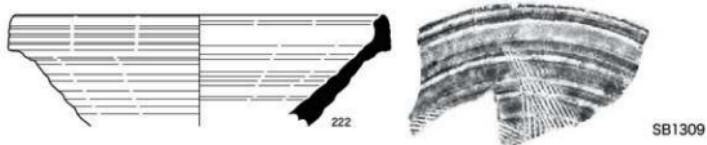
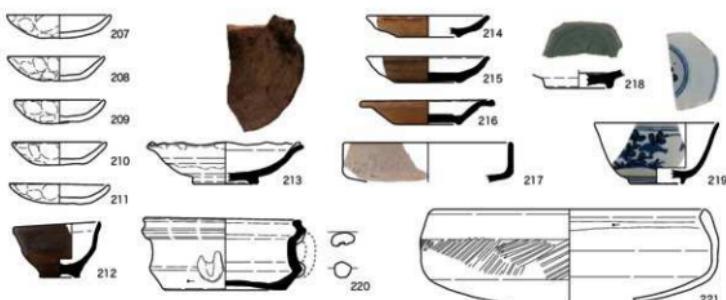


図12 新町地区出土遺物実測図12



0 20cm

図13 新町地区出土遺物実測図13

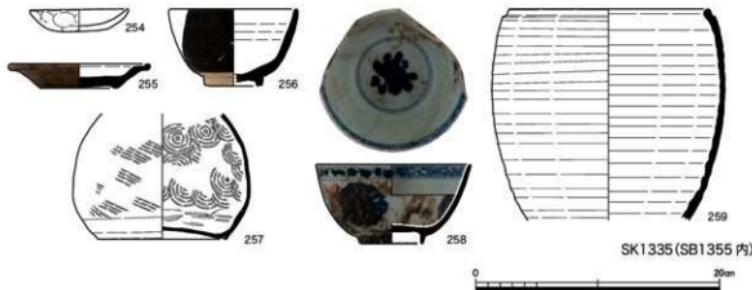
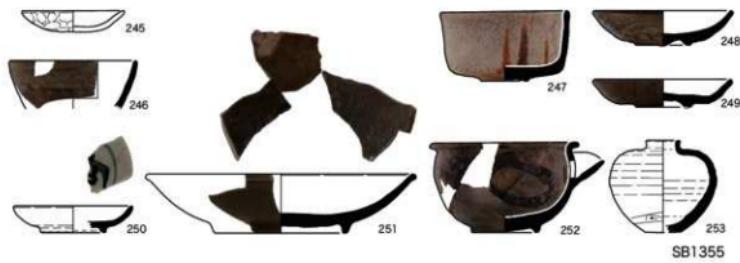
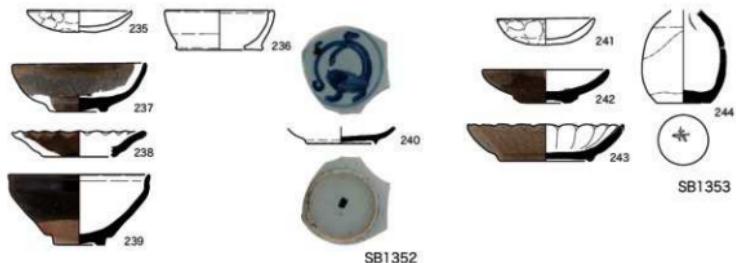
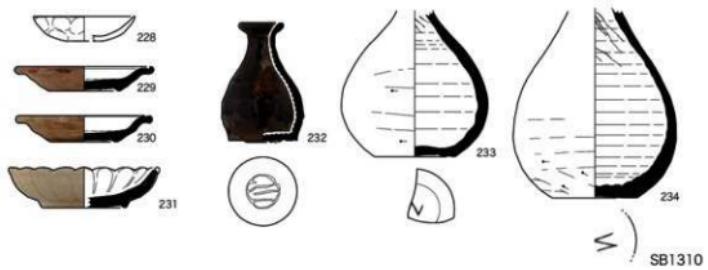
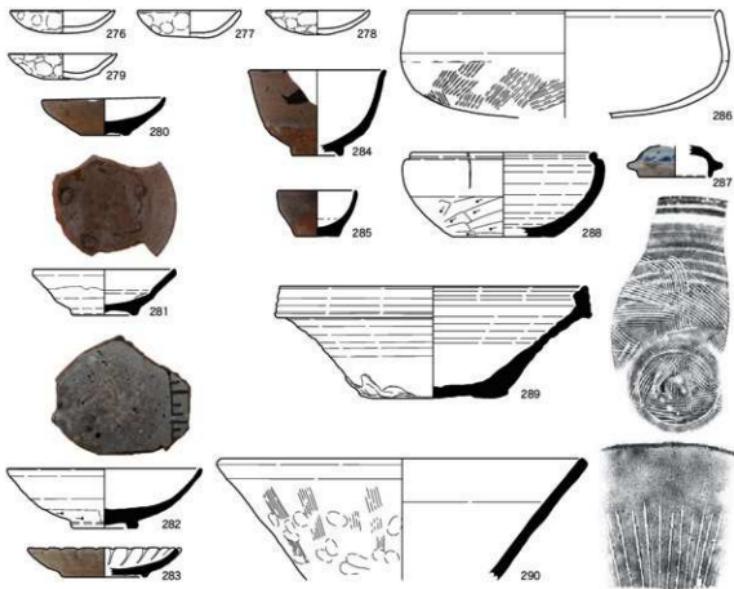
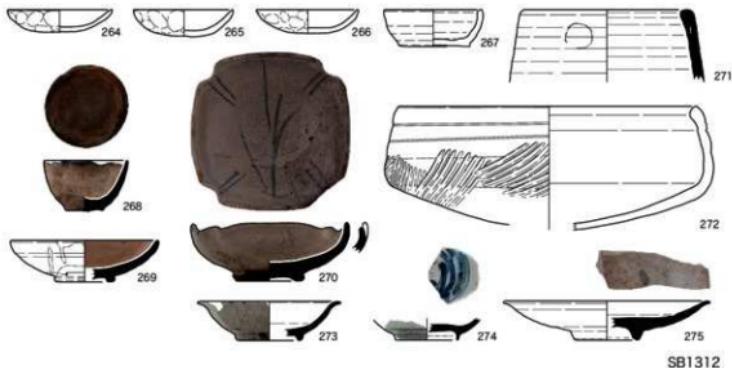


図14 新町地区出土遺物実測図14

0 20m



0 20cm

図15 新町地区出土遺物実測図15

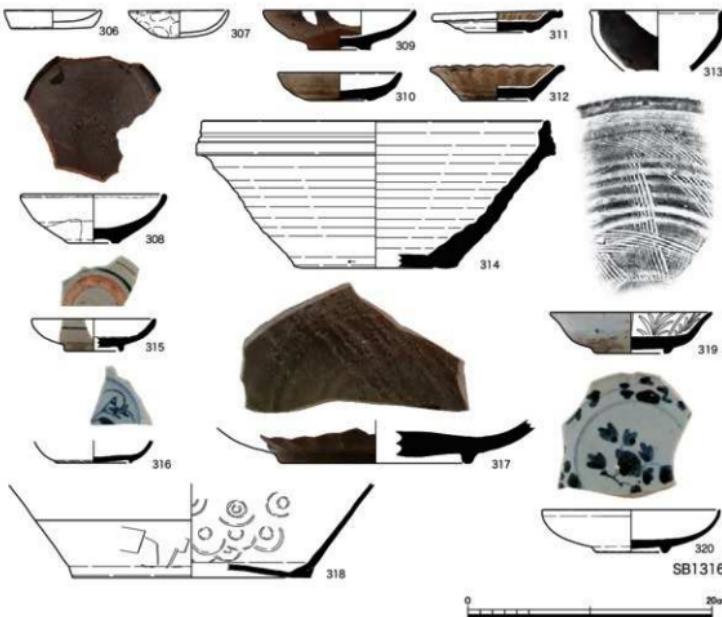
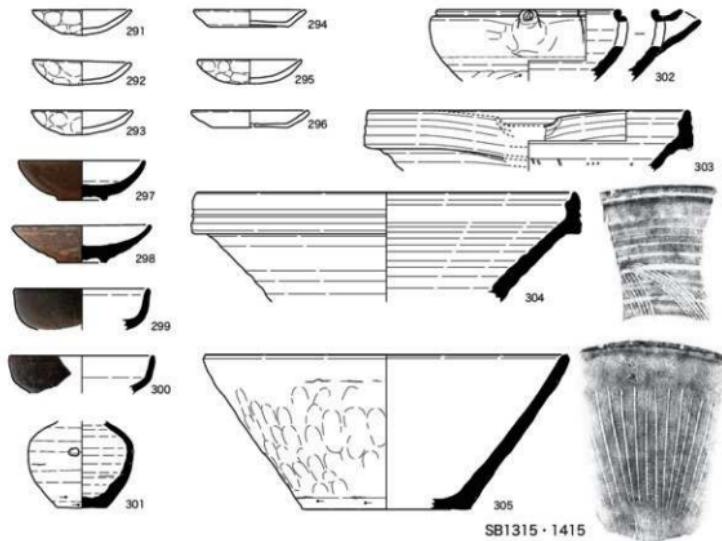
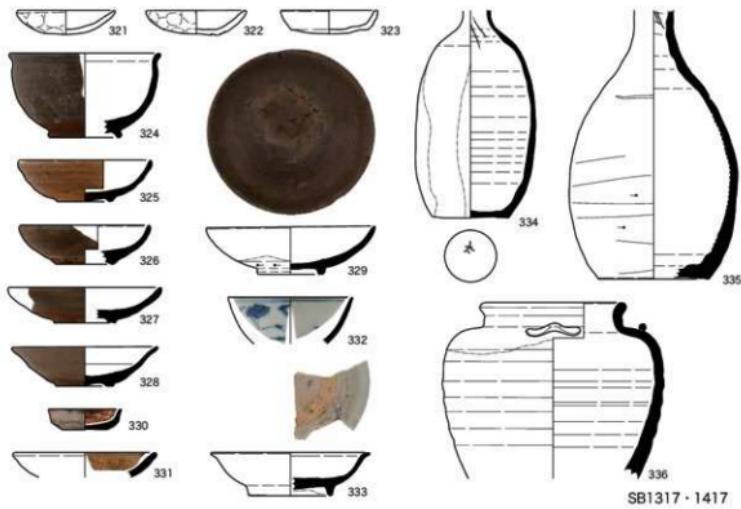
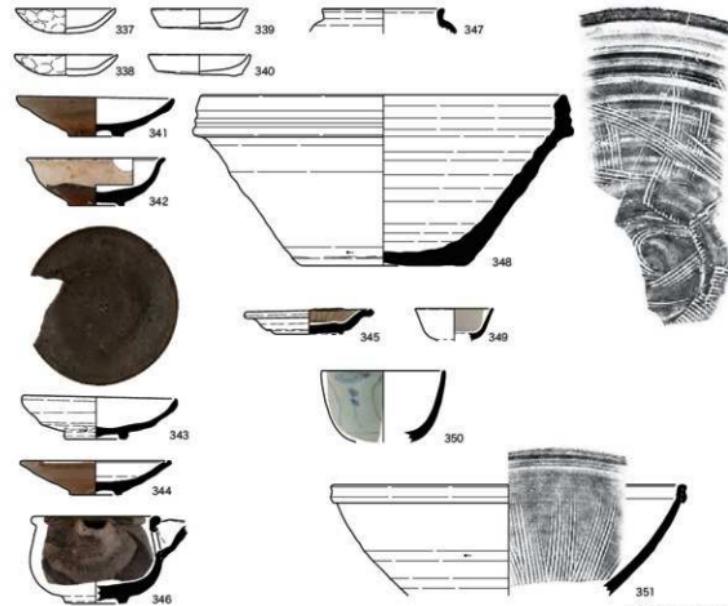


図16 新町地区出土遺物実測図16

0 20cm



SB1317・1417



SB1318・1418

0 20cm

図17 新町地区出土遺物実測図17



図18 新町地区出土遺物実測図18

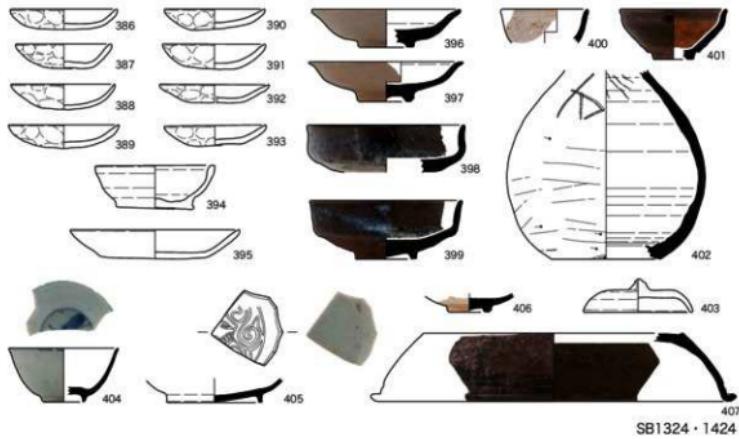


図19 新町地区出土遺物実測図19



図20 新町地区出土遺物実測図20

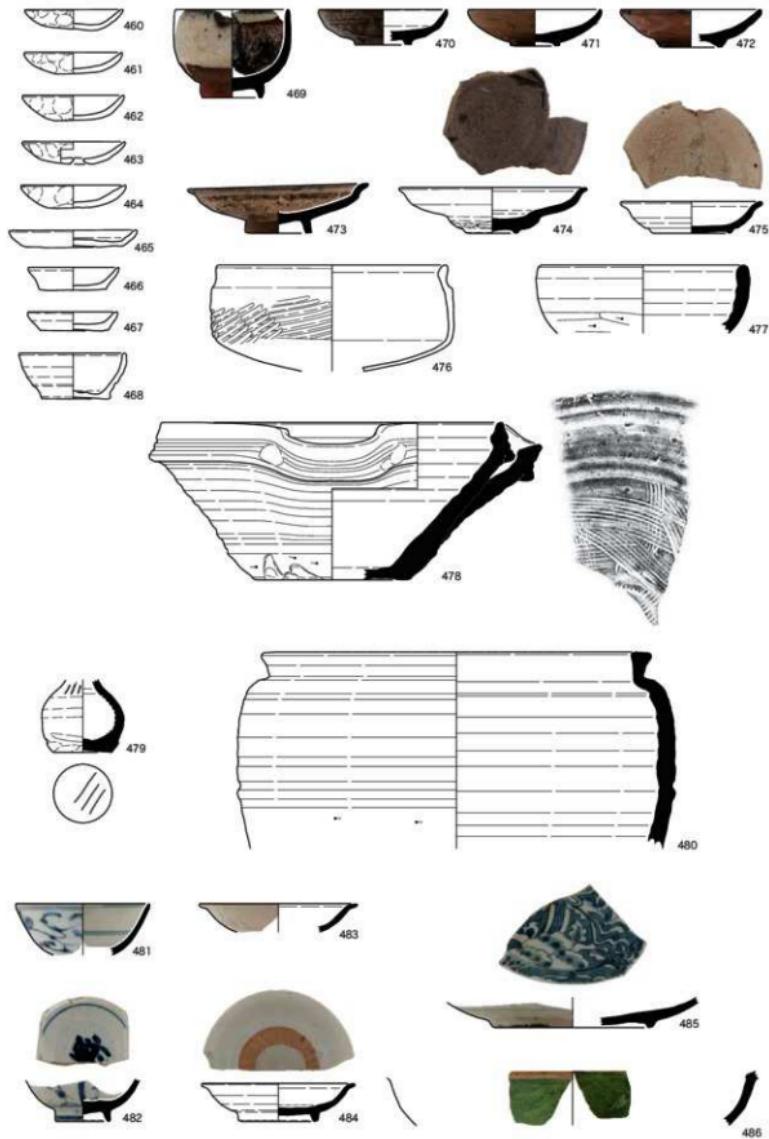


図21 新町地区出土遺物実測図21

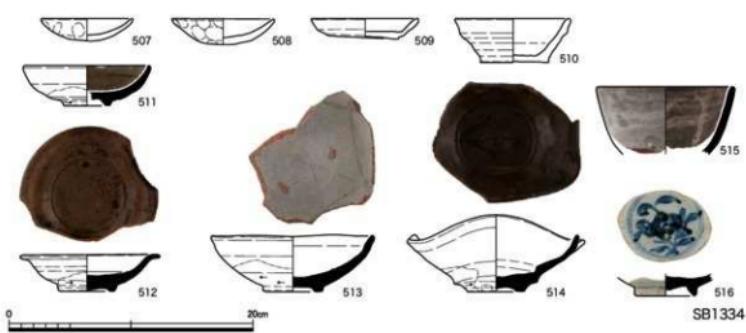
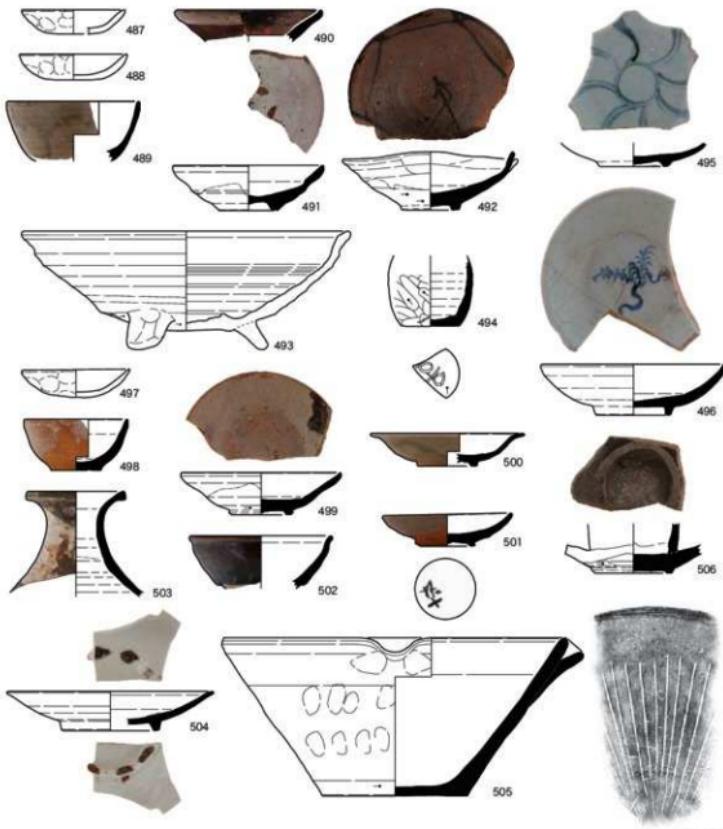
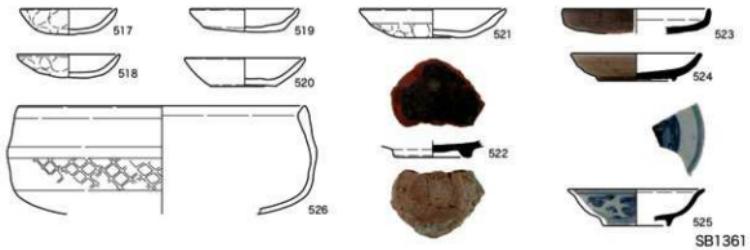


図22 新町地区出土遺物実測図22



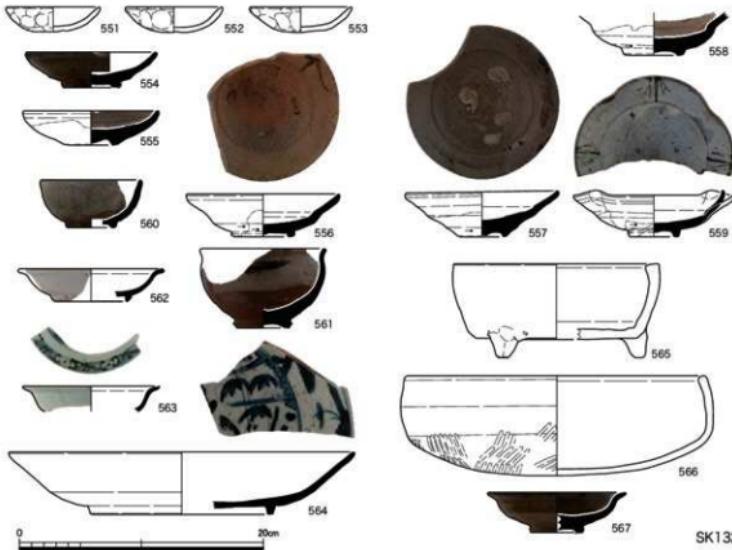
北端Ⅲ期整地層



図23 新町地区出土遺物実測図23



SK1325



SK1327

図24 新町地区出土遺物実測図24

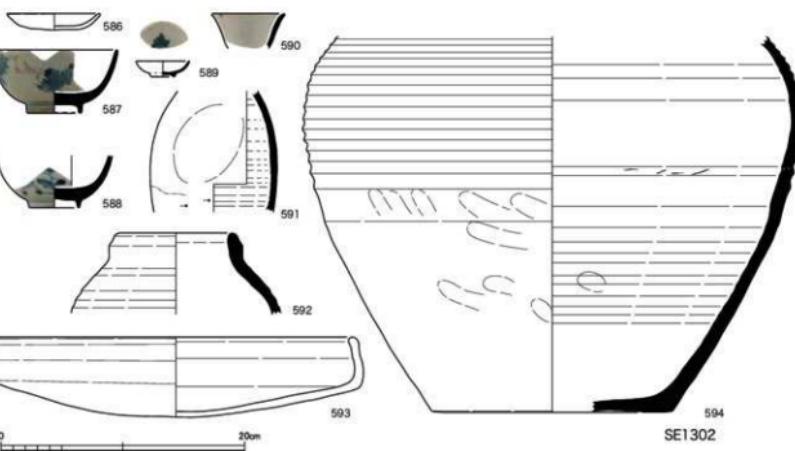
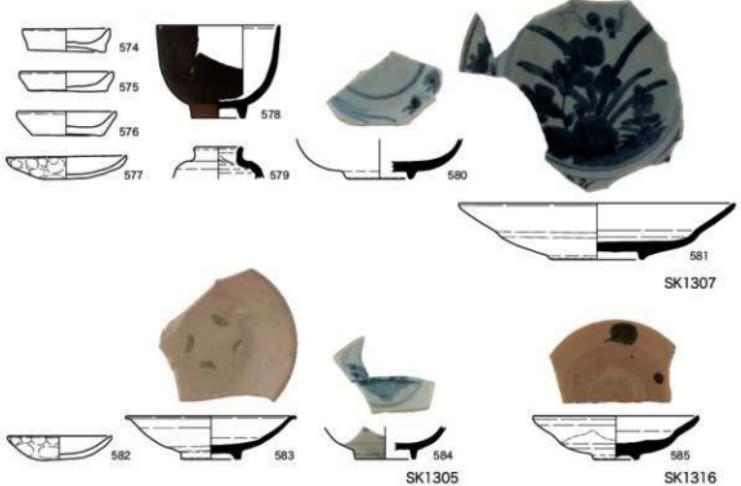
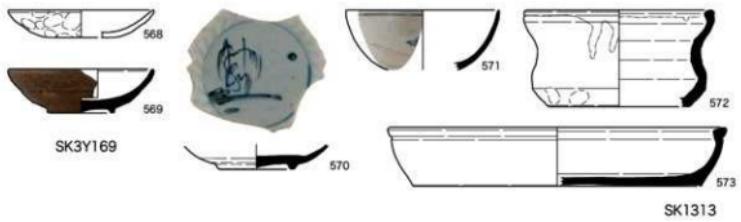


図25 新町地区出土遺物実測図25

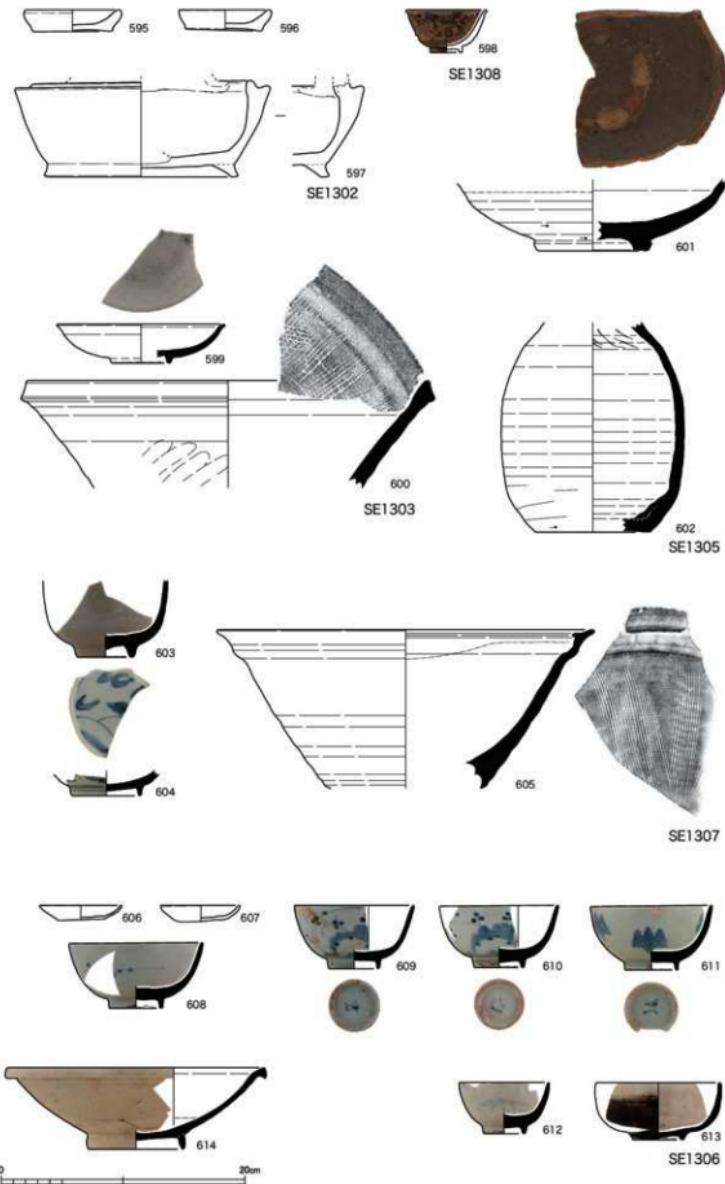


図26 新町地区出土遺物実測図26



図27 新町地区出土遺物実測図27

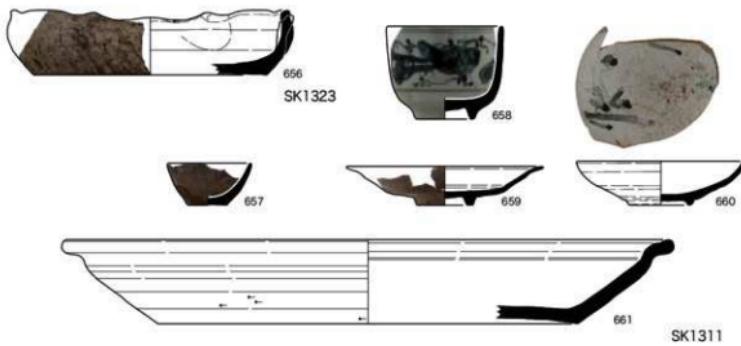
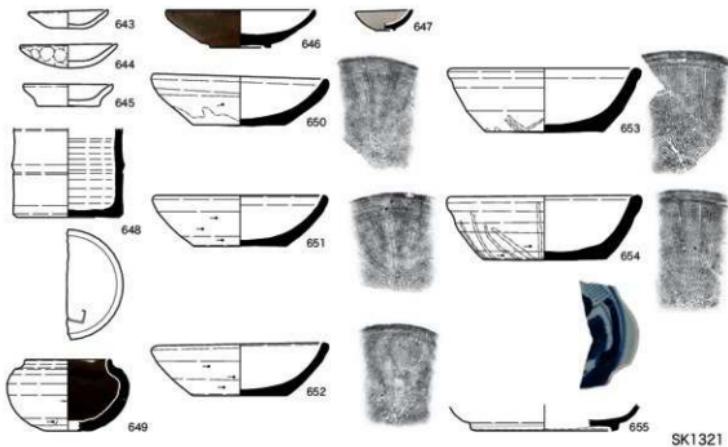
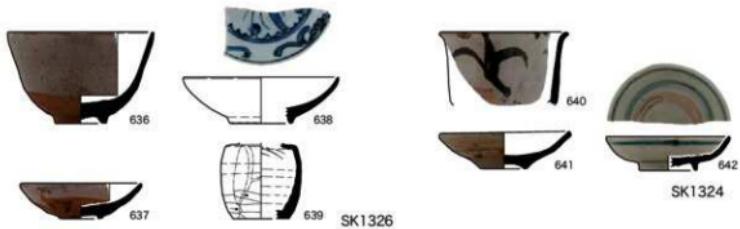
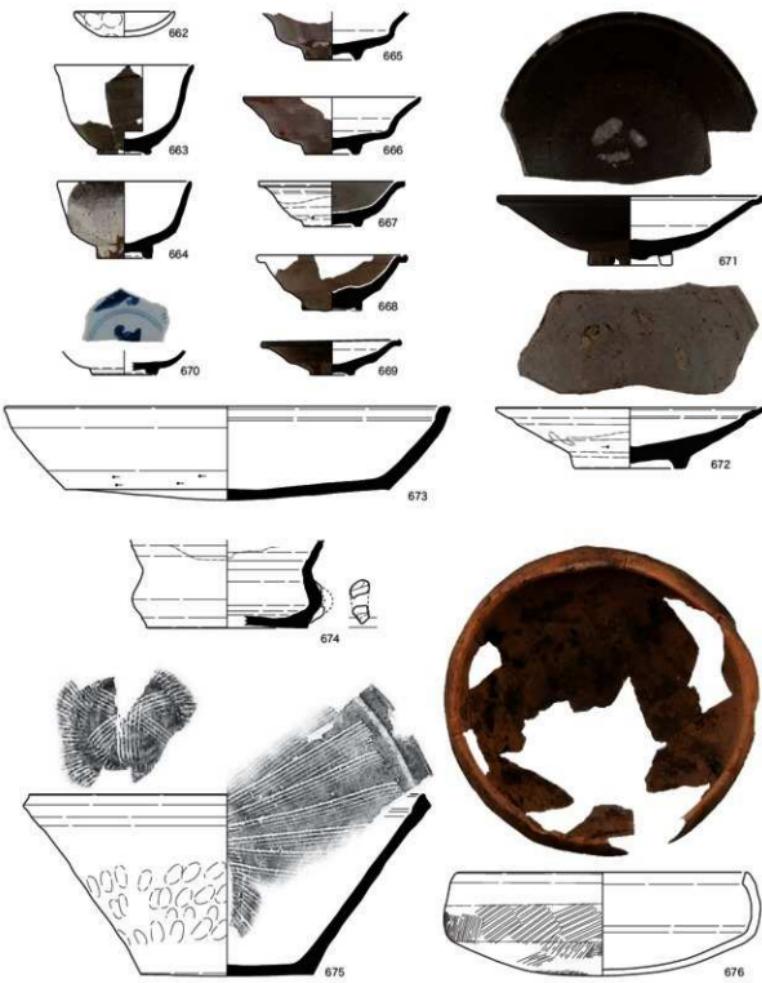
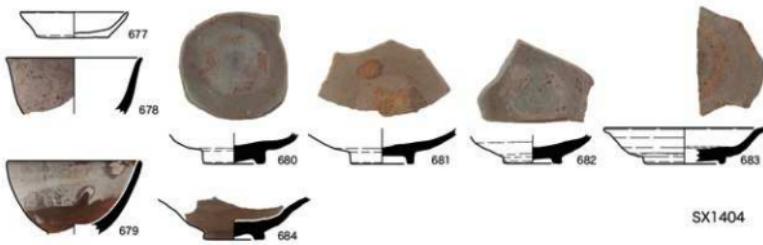


図28 新町地区出土遺物実測図28

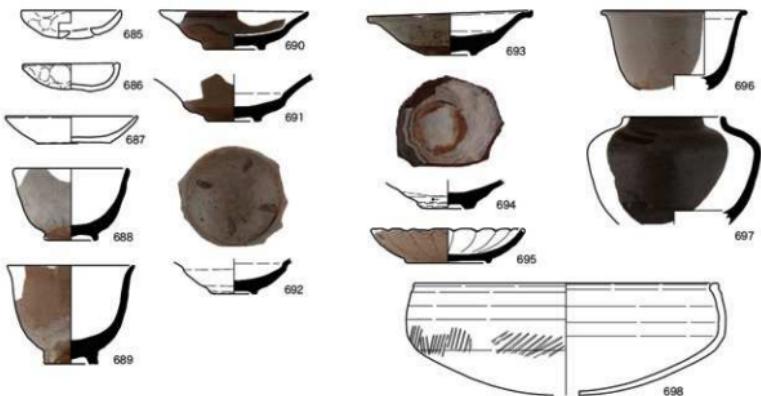


0 20cm

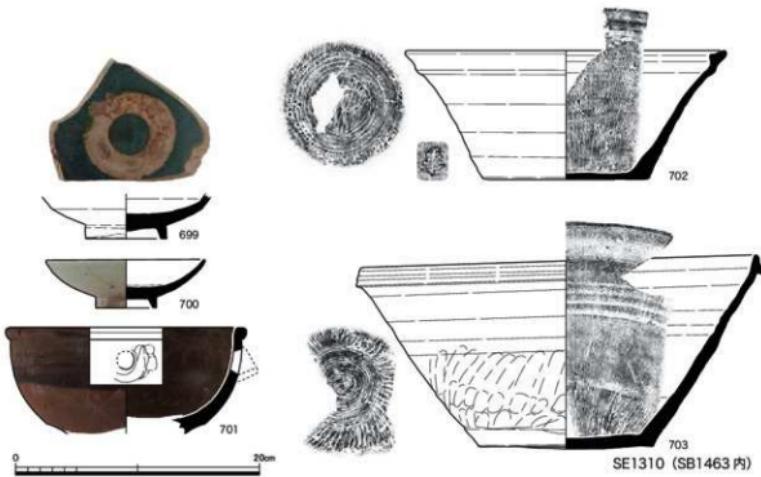
図29 新町地区出土遺物実測図29



SX1404

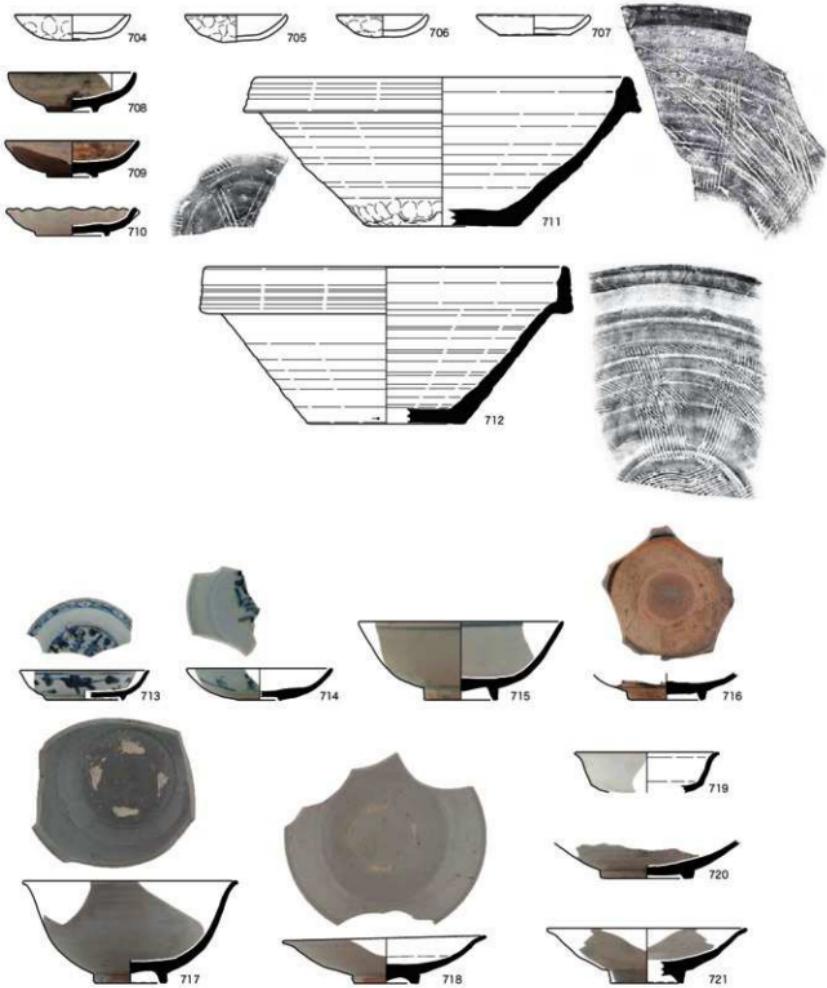


SX1304



SE1310 (SB1463内)

図30 新町地区出土遺物実測図30



下層確認トレンチ

図31 新町地区出土遺物実測図31

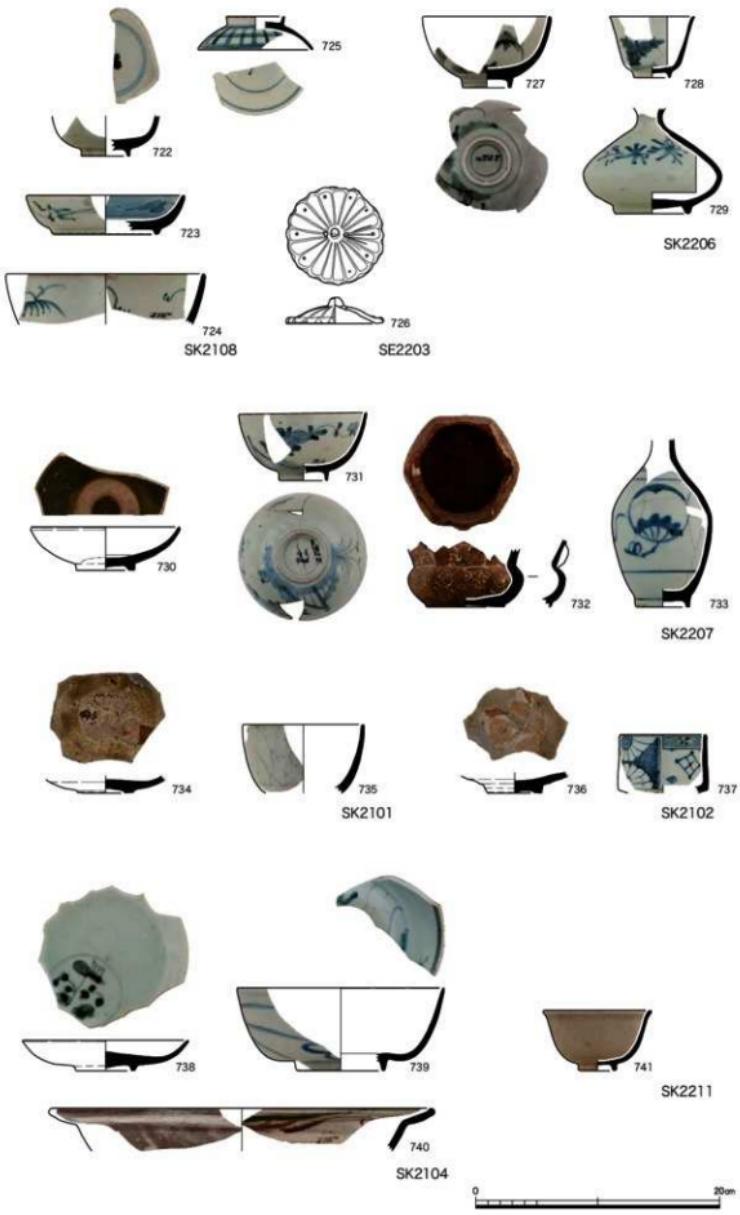


図32 関屋町地区出土遺物実測図1



図33 関屋町地区出土遺物実測図2



0 20cm

図34 関屋町地区出土遺物実測図3



图35 関屋町地区出土遺物実測図4

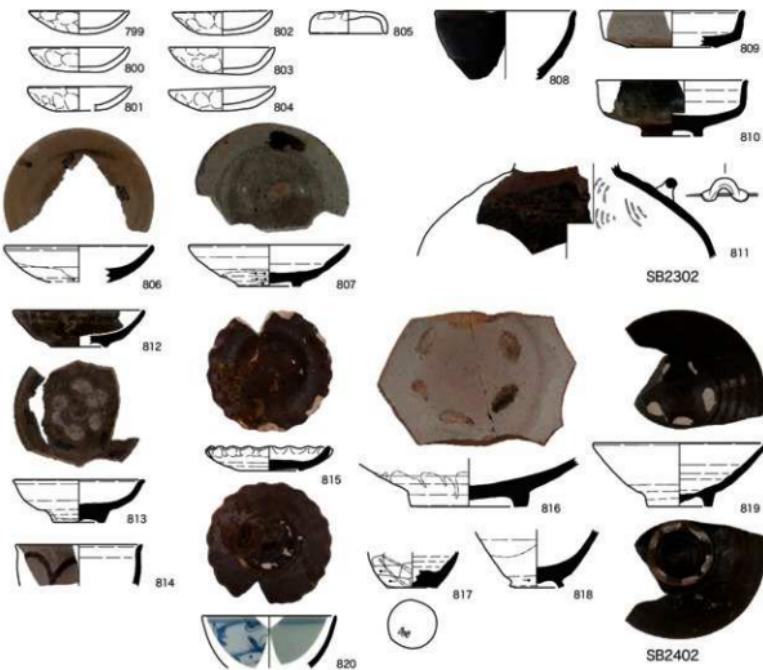
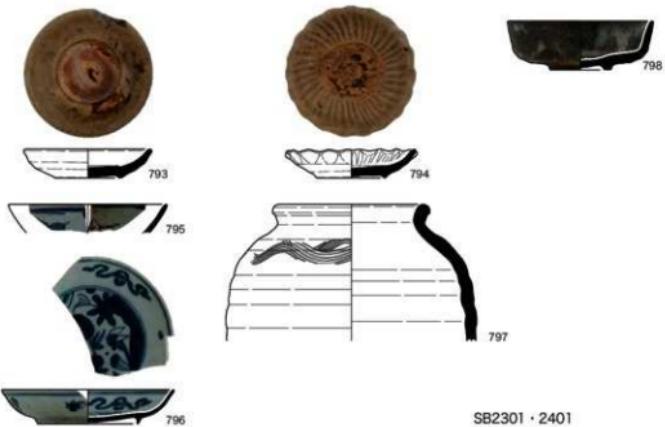
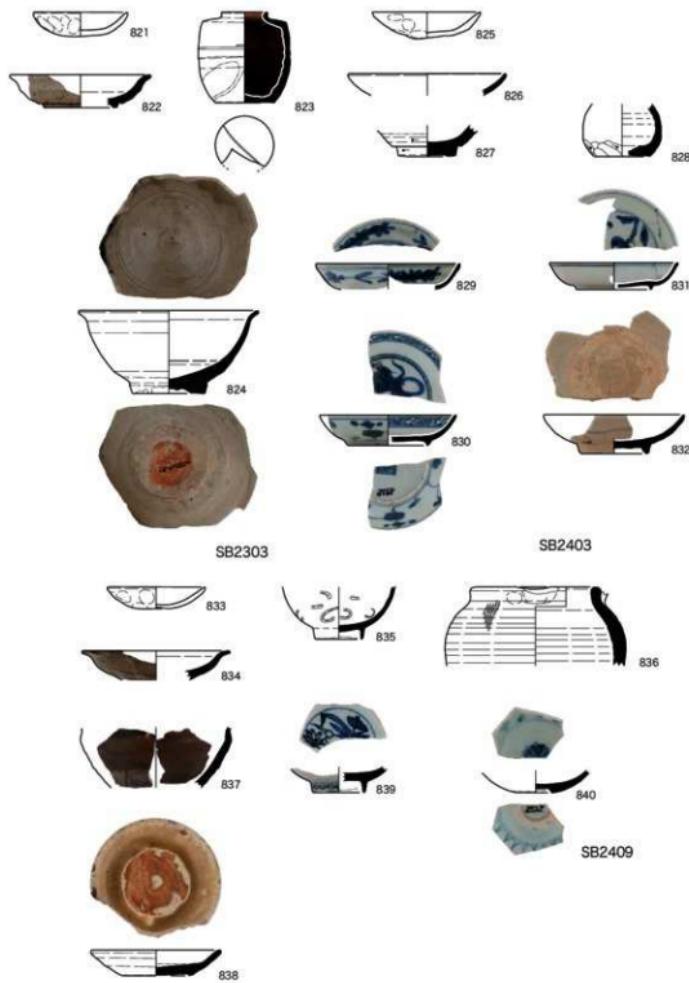


図36 関屋町地区出土遺物実測図5

0 20cm



0 20cm

図37 関屋町地区出土遺物実測図6

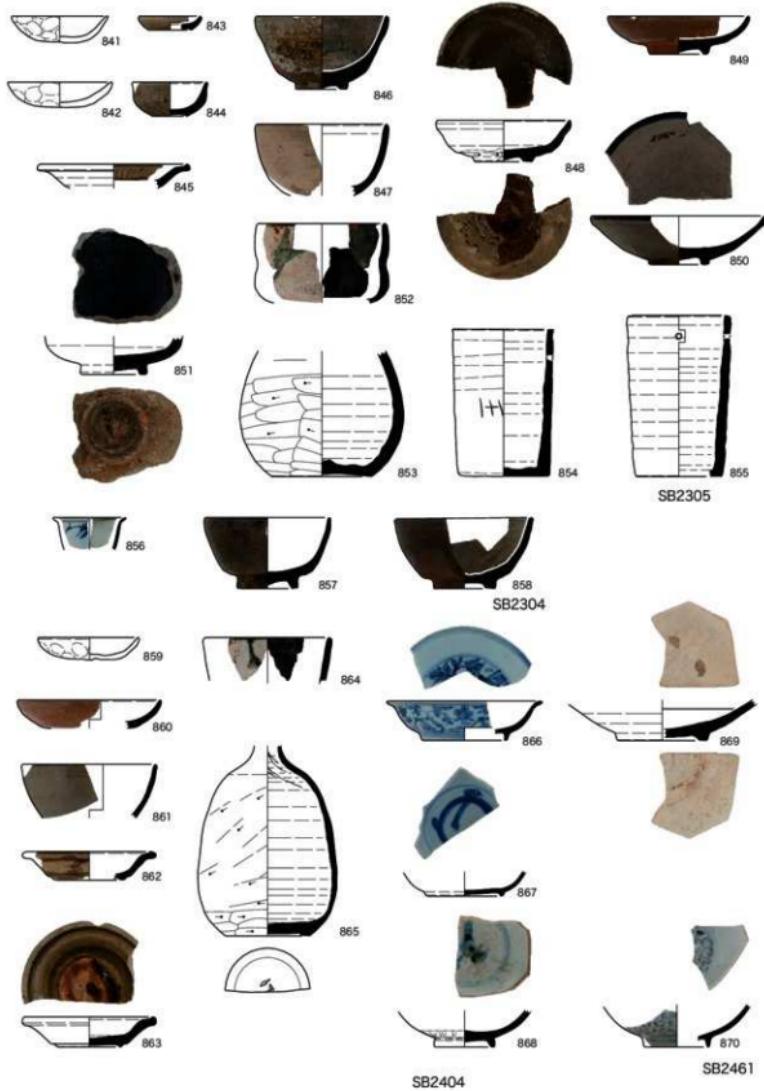


図38 関屋町地区出土遺物実測図7

0 20m



SB2341



図39 関屋町地区出土遺物実測図8

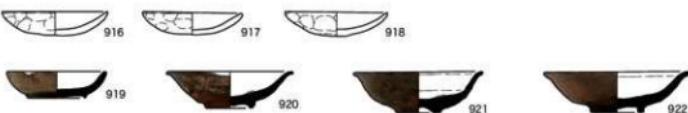
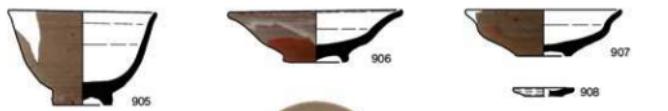
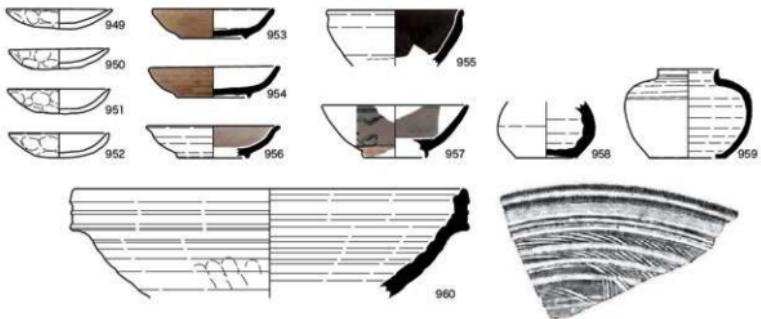
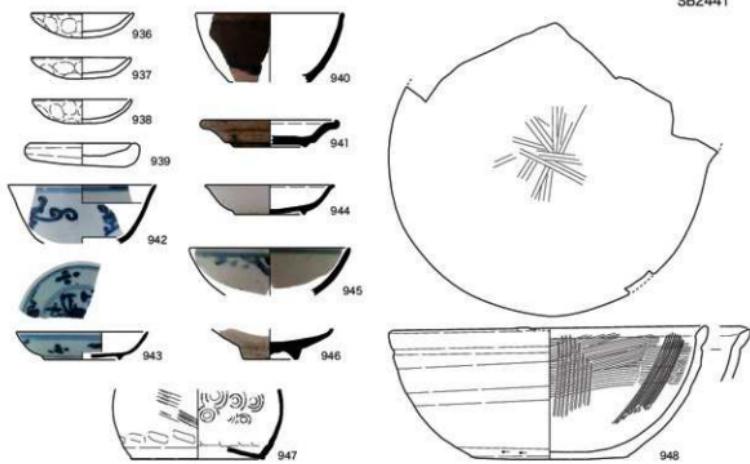
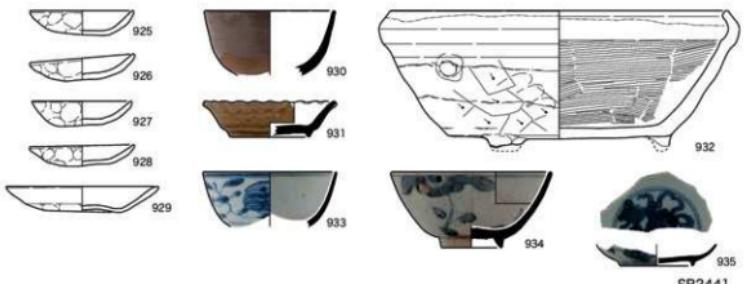


図40 関屋町地区出土遺物実測図9



0 20cm

図41 関屋町地区出土遺物実測図10

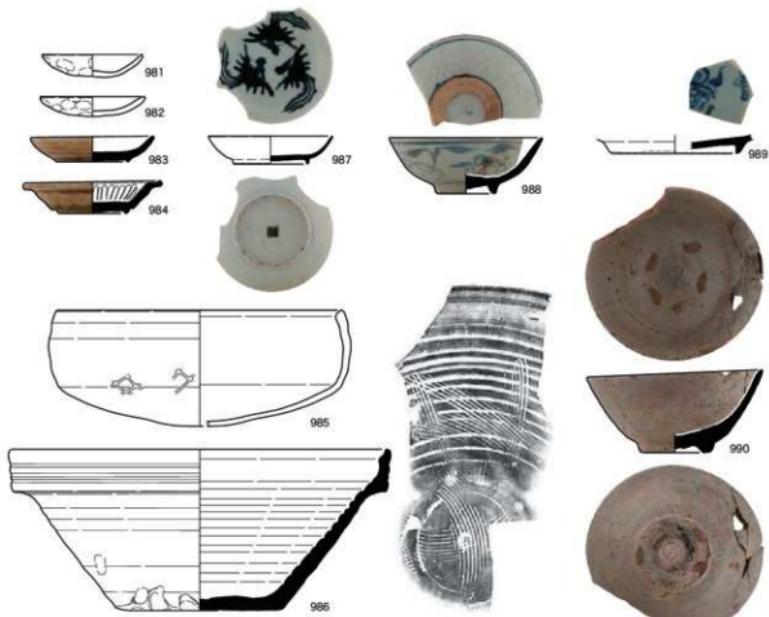
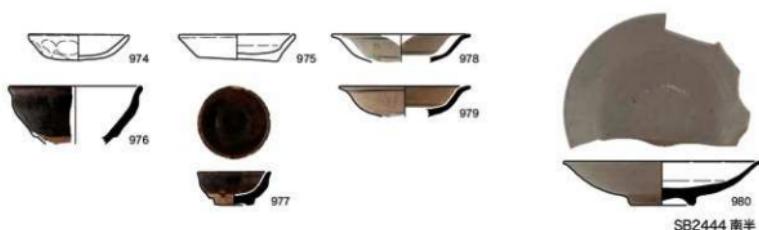


図42 間屋町地区出土遺物実測図11



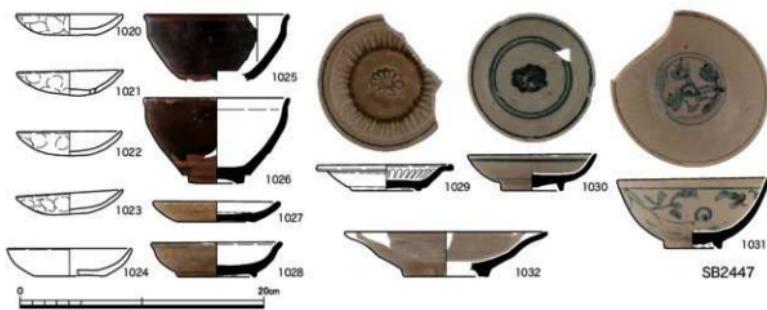
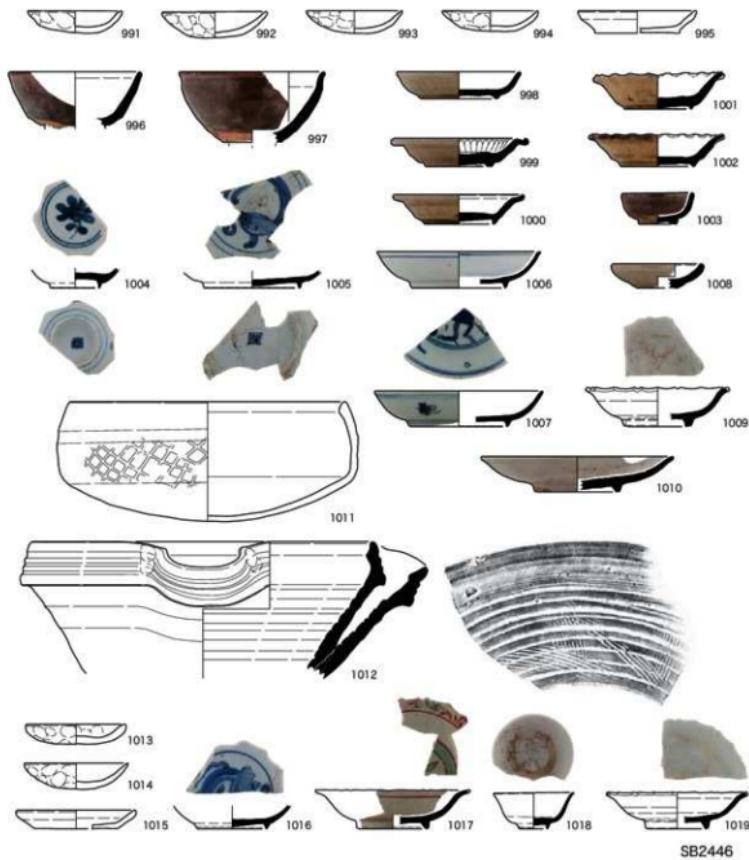


図43 間屋町地区出土遺物実測図12

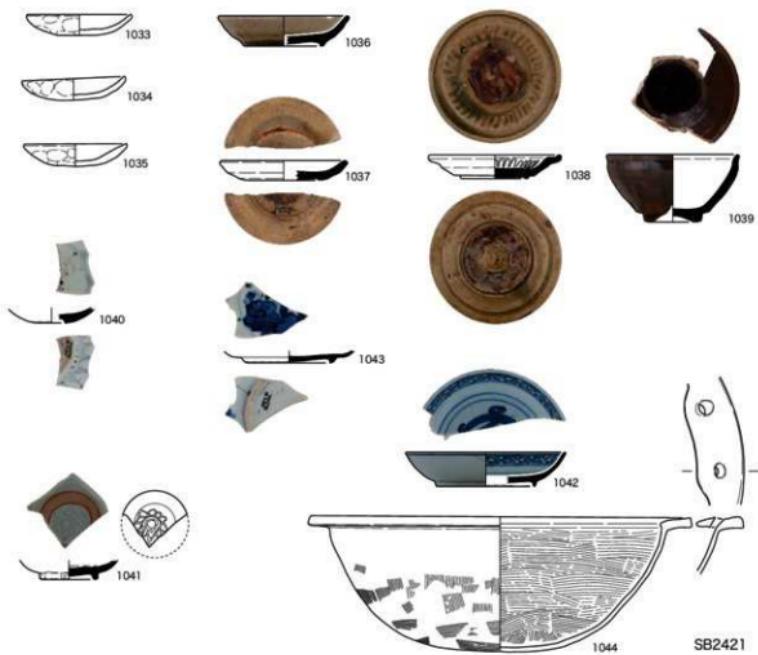


図44 関屋町地区出土遺物実測図13

0 20cm

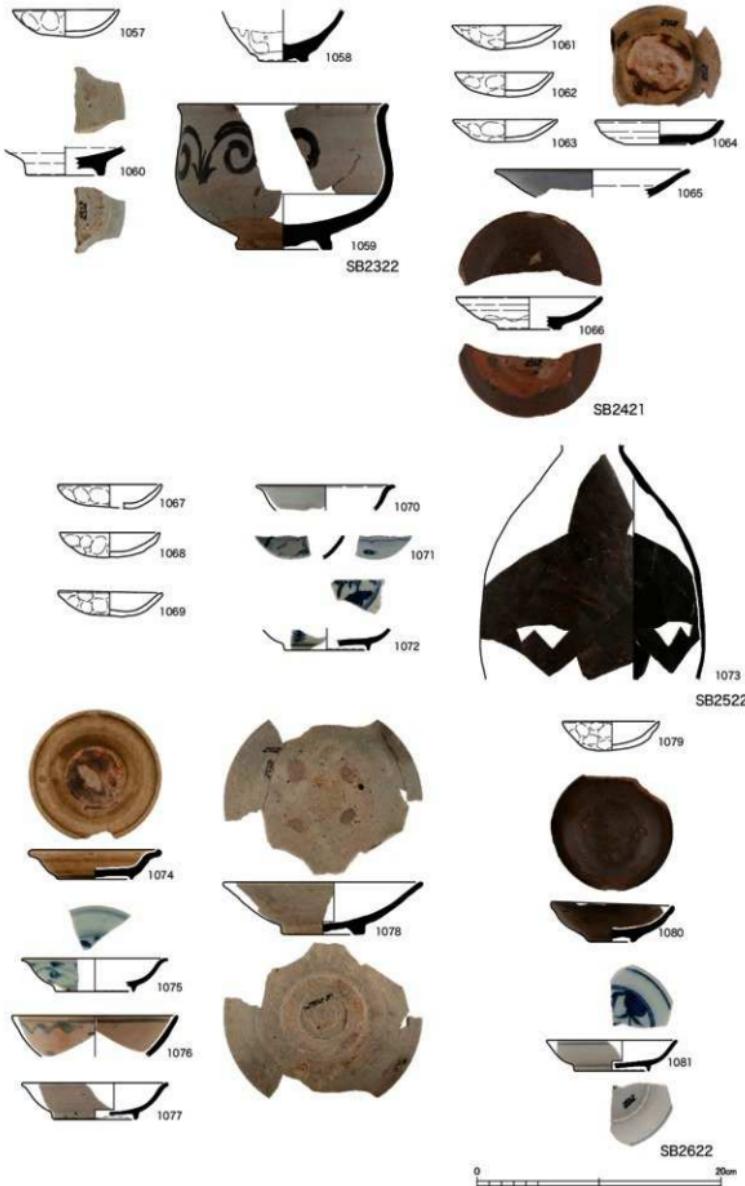


図45 関屋町地区出土遺物実測図14

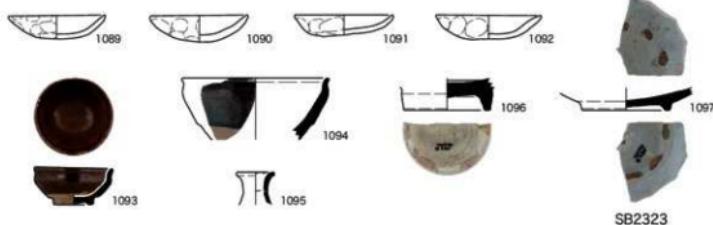
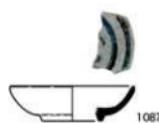
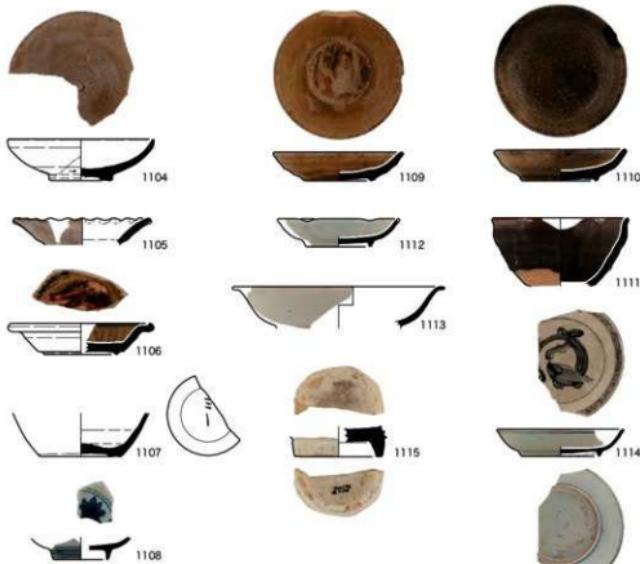


図46 関屋町地区出土遺物実測図15



0 20cm

図47 関屋町地区出土遺物実測図16

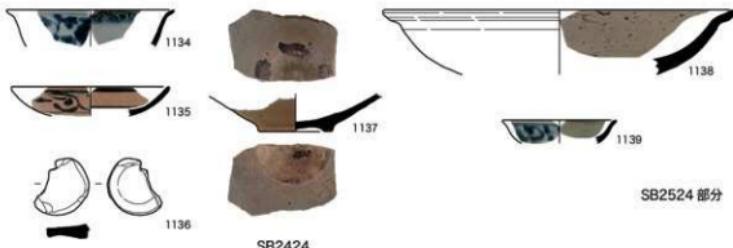
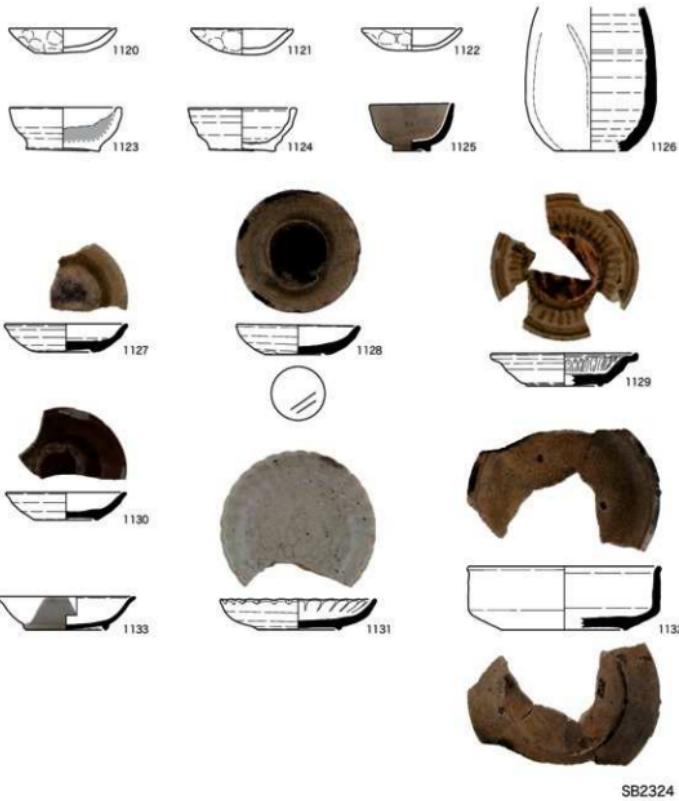


図48 関屋町地区出土遺物実測図17

0 20cm

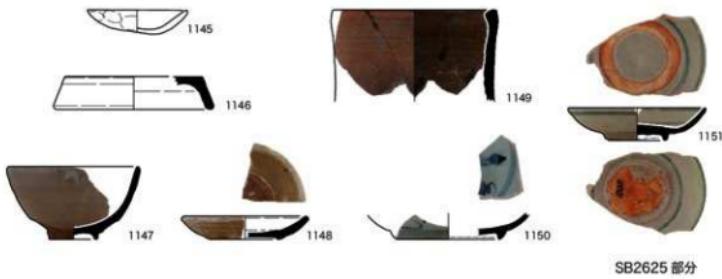
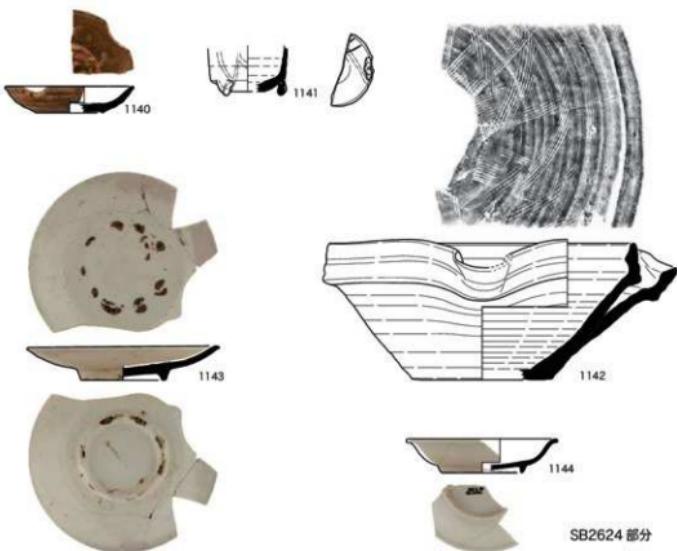
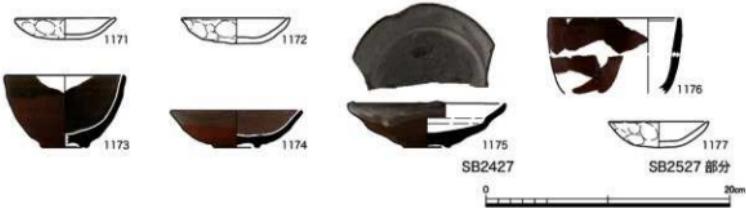
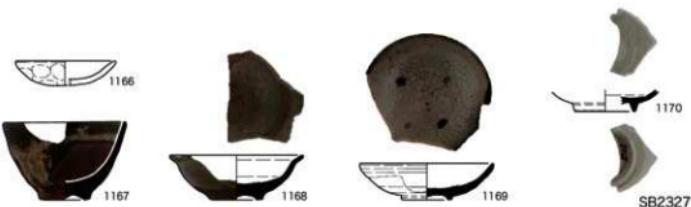
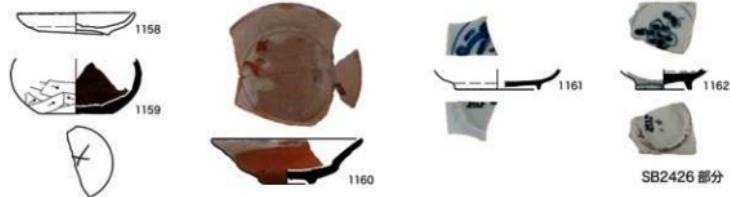
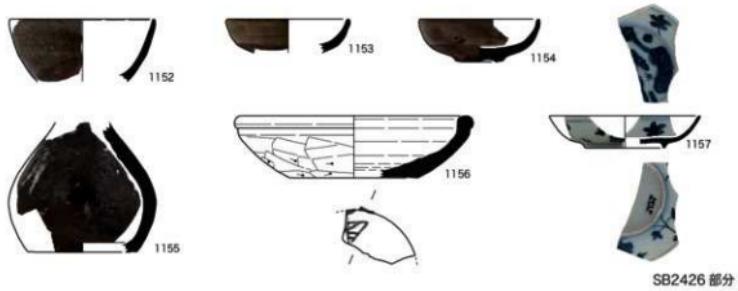


図49 関屋町地区出土遺物実測図18



0 20cm

図50 関屋町地区出土遺物実測図19

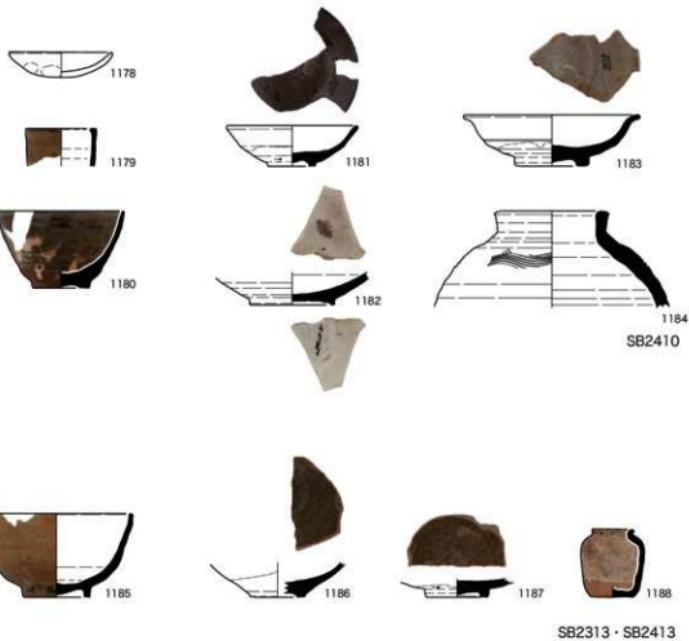


図51 関屋町地区出土遺物実測図20

0 20km

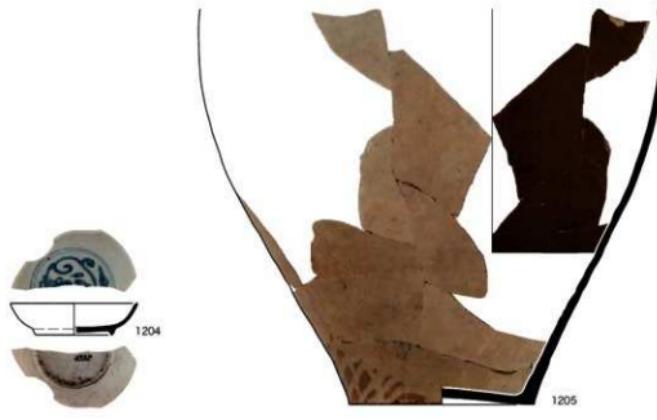
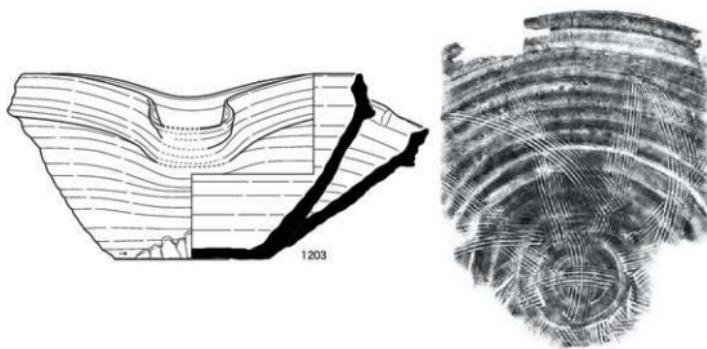
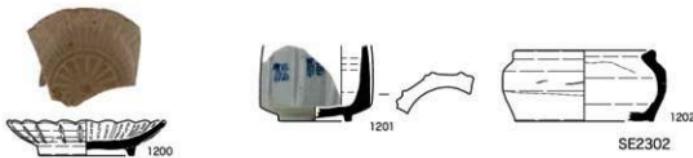


図52 関屋町地区出土遺物実測図21

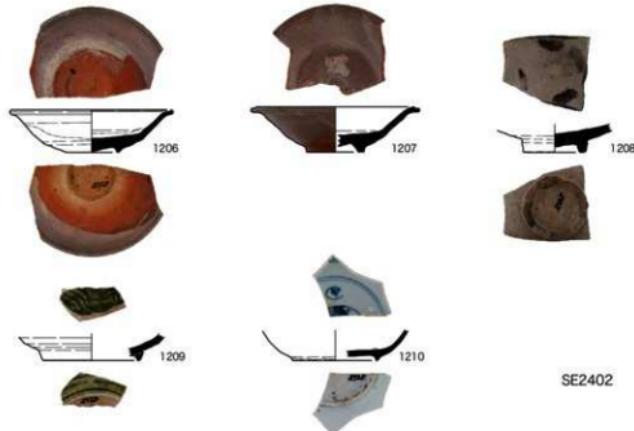


図53 関屋町地区出土遺物実測図22

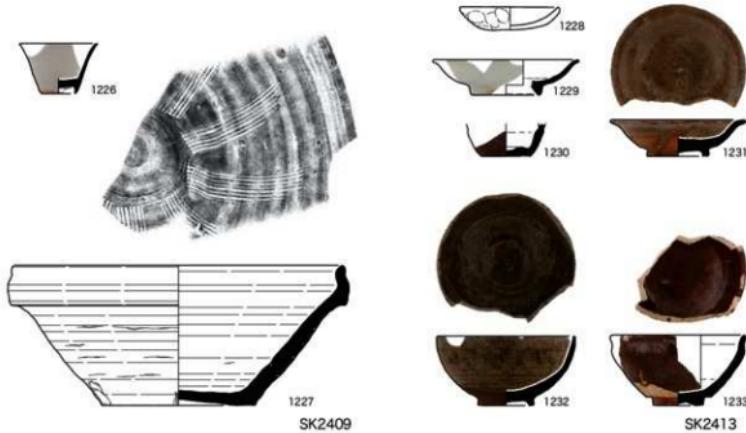
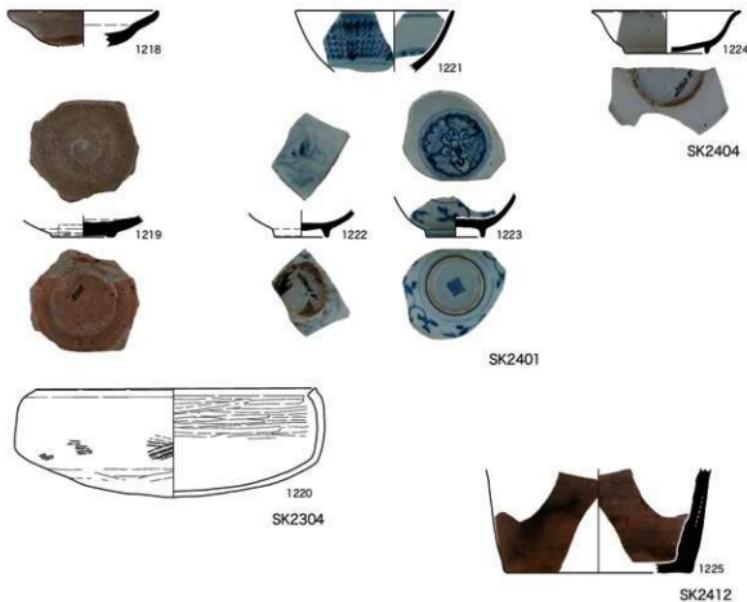


図54 関屋町地区出土遺物実測図23

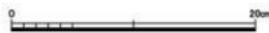
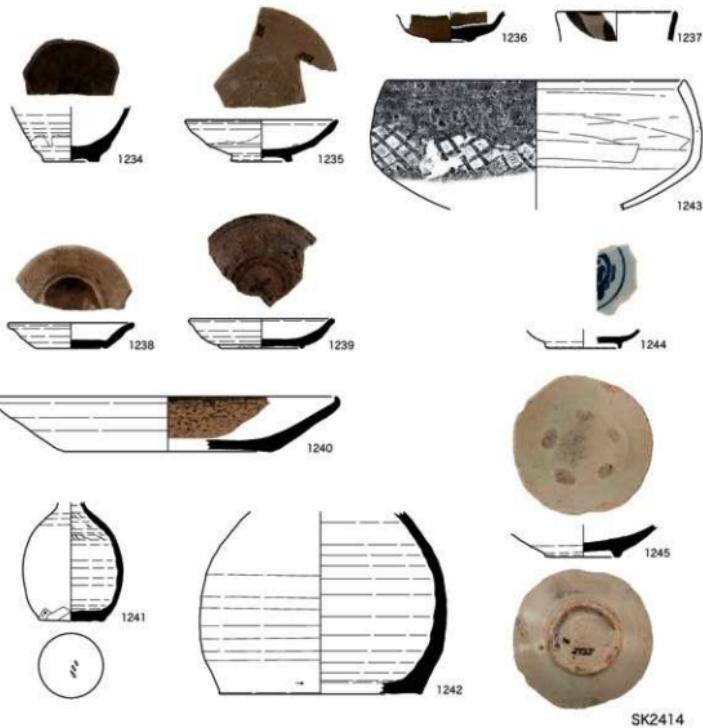


図55 関屋町地区出土遺物実測図24

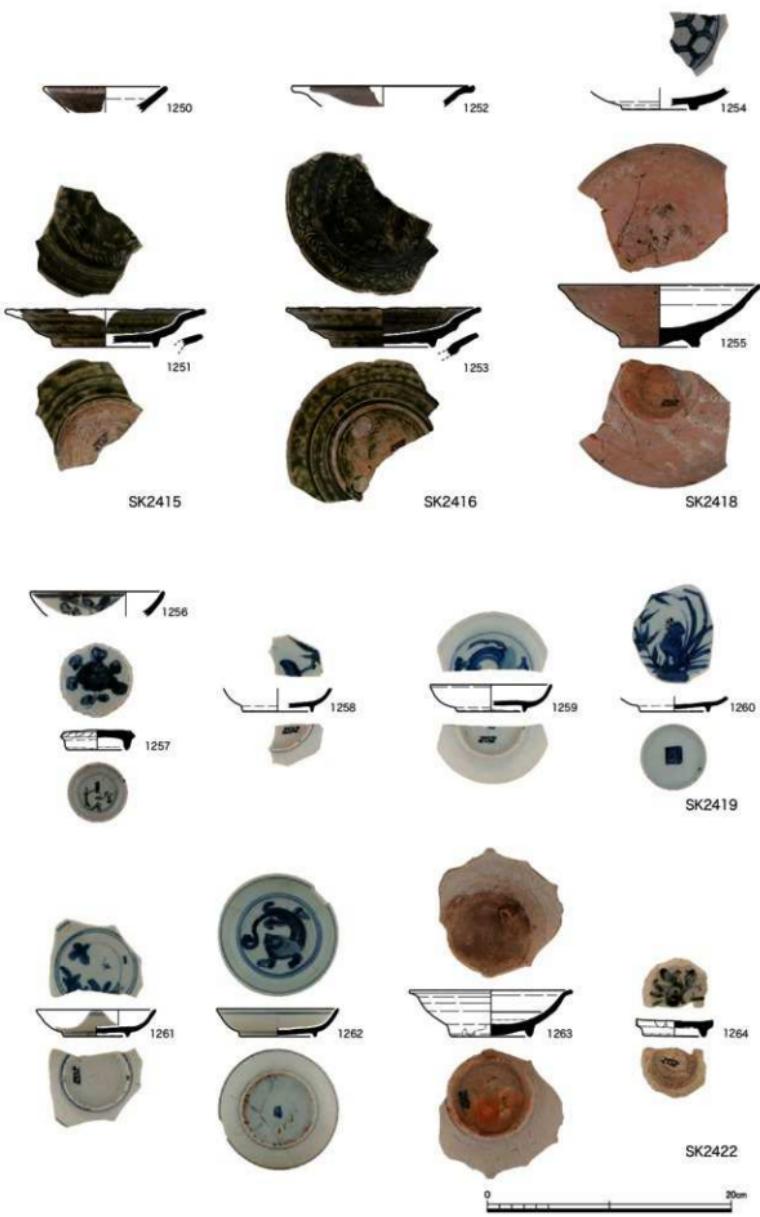
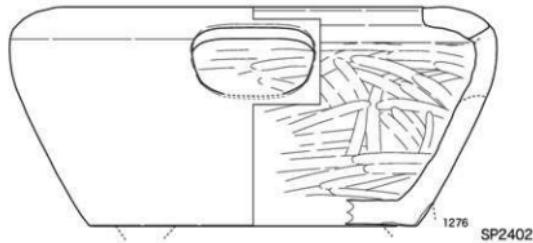


図56 関屋町地区出土遺物実測図25



0 20cm

図57 間屋町地区出土遺物実測図26

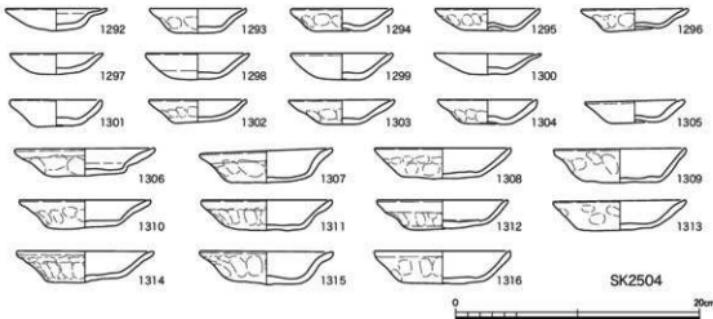
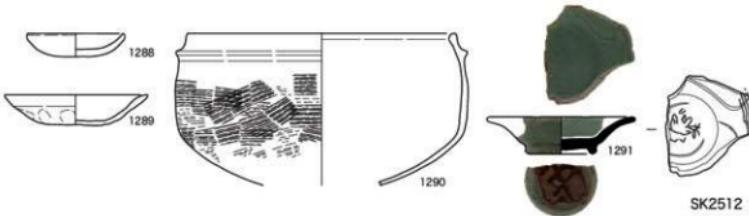
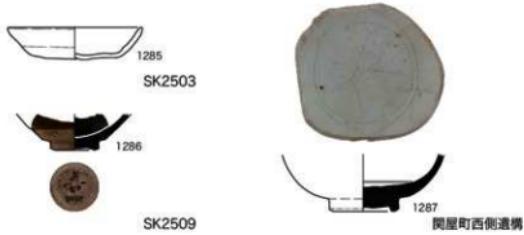
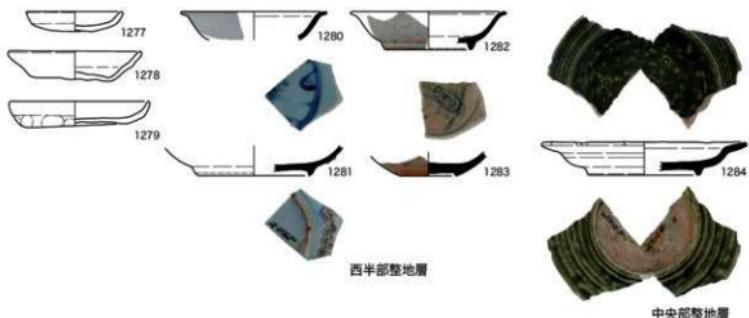
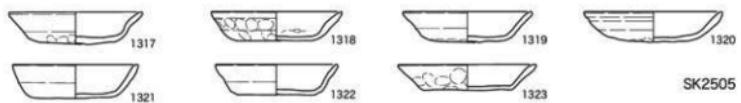
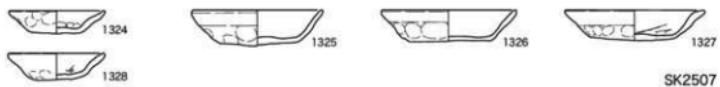


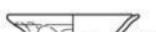
図58 間屋町地区出土遺物実測図27



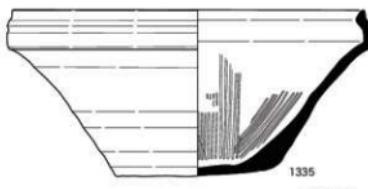
SK2505



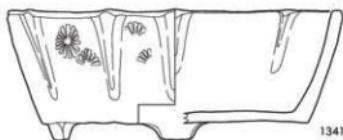
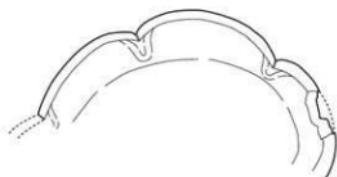
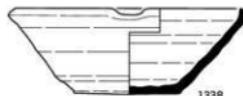
SK2507



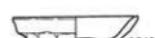
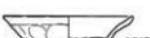
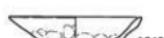
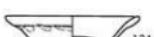
SE2502



SE2501



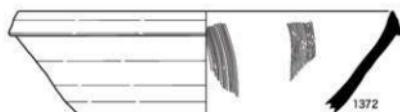
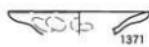
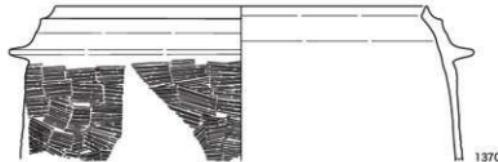
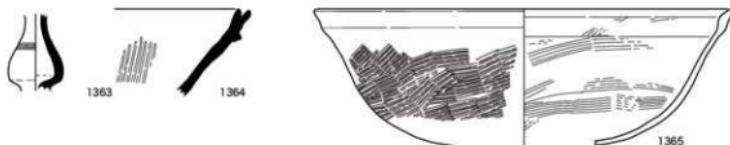
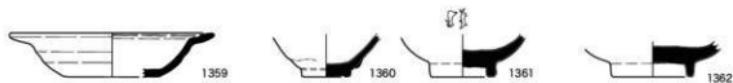
SE2503



SE2505



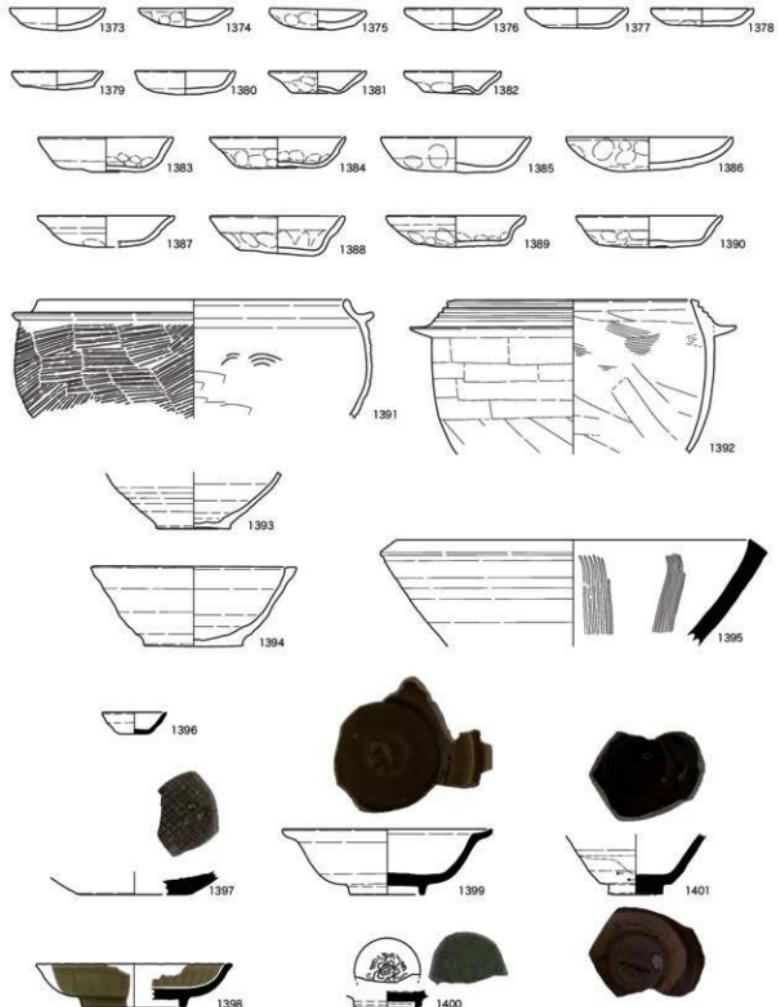
図59 関屋町地区出土遺物実測図28



SX2501



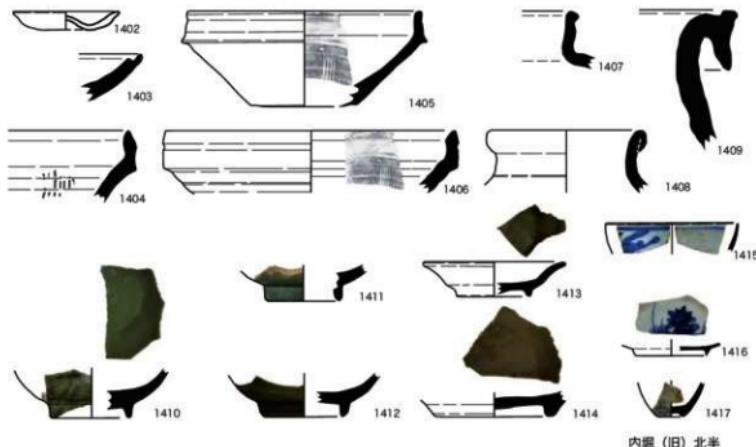
図60 開屋町地区出土遺物実測図29



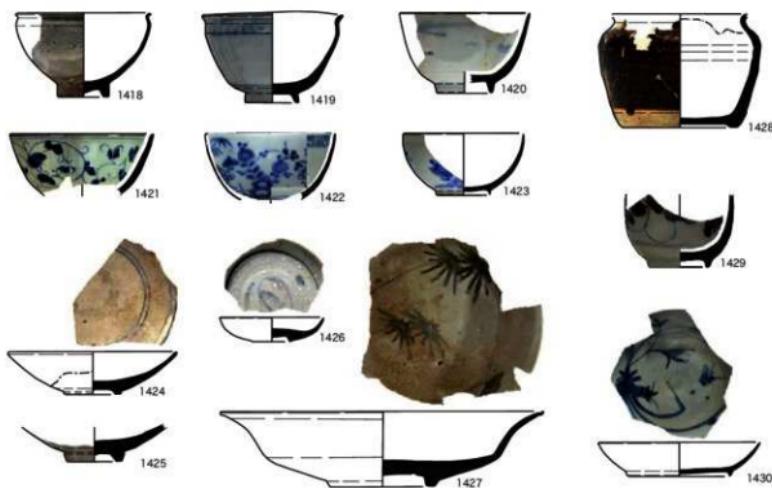
西半部下層整地層



図61 関屋町地区出土遺物実測図30



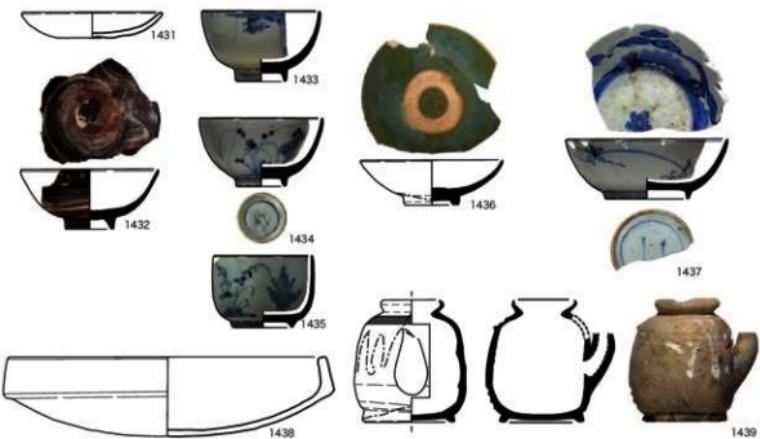
内堀(旧) 北半



内堀(旧) 南半



図62 兵庫城地区出土遺物実測図1



内堀（新）北半



図63 兵庫城地区出土遺物実測図2



図64 兵庫城地区出土遺物実測図3

内堀(新) 南半

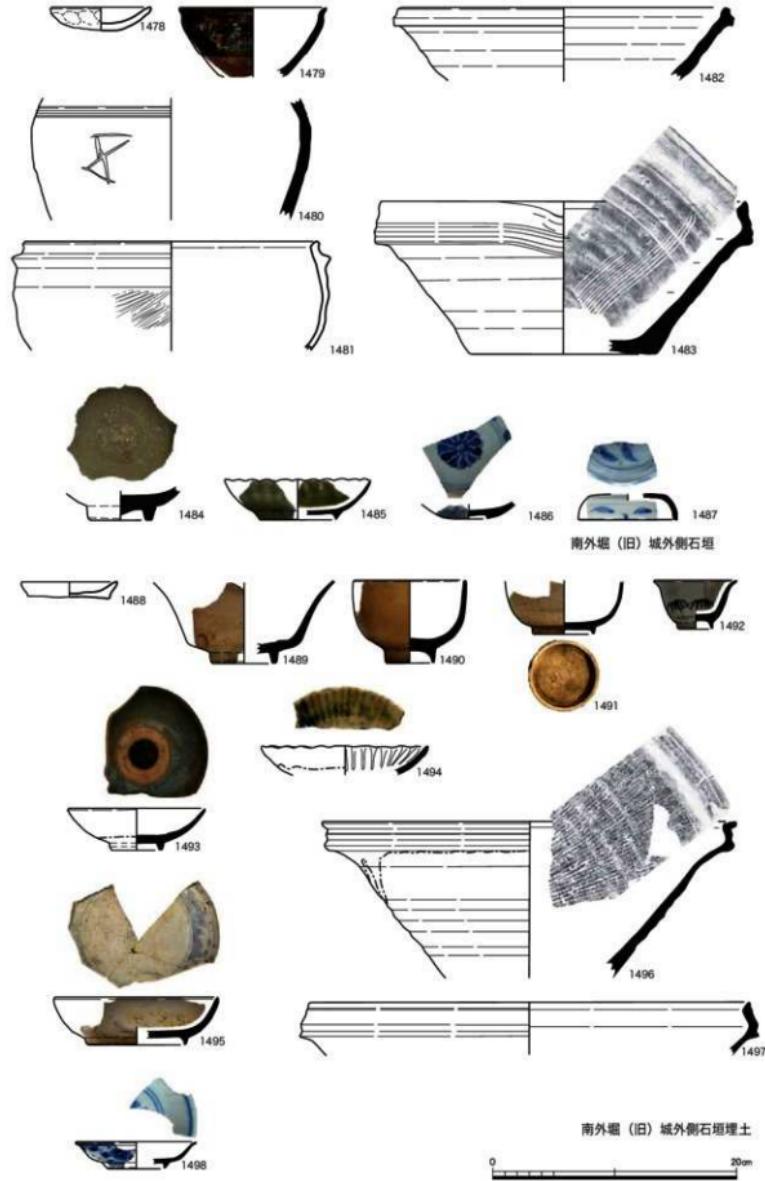
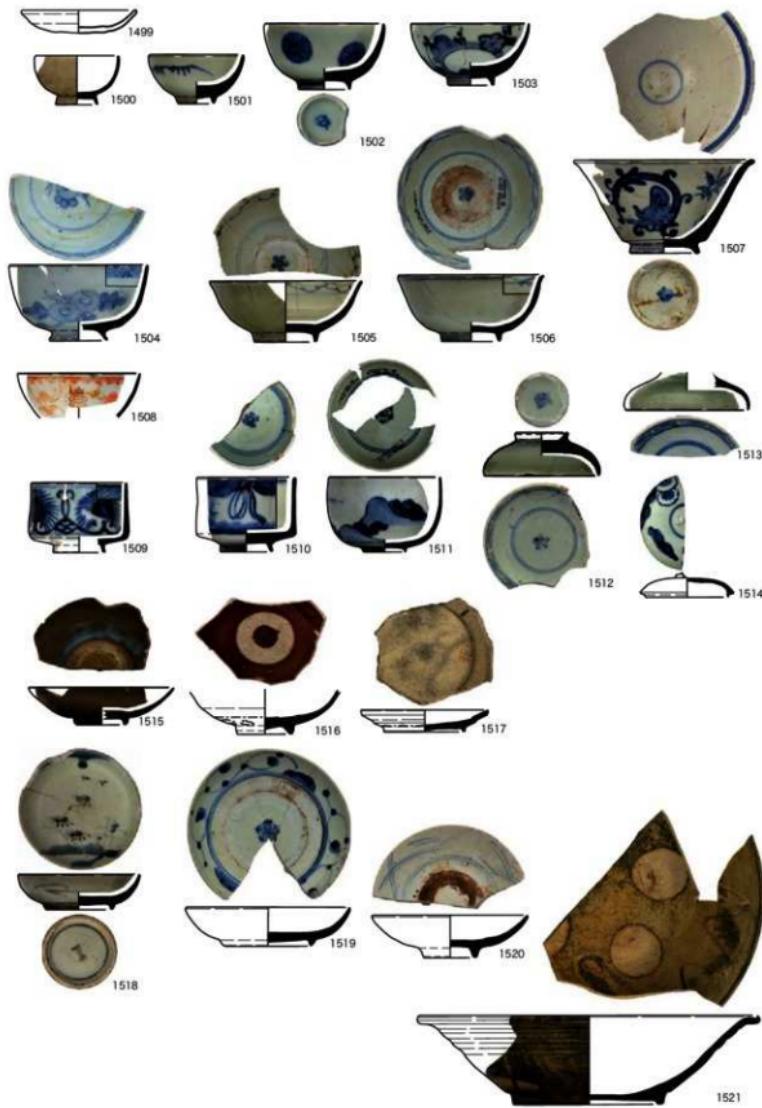


図65 兵庫城地区出土遺物実測図4



南外堀（新）上層



図66 兵庫城地区出土遺物実測図5



南外堀（新）上層



南外堀（新）下層



図67 兵庫城地区出土遺物実測図6



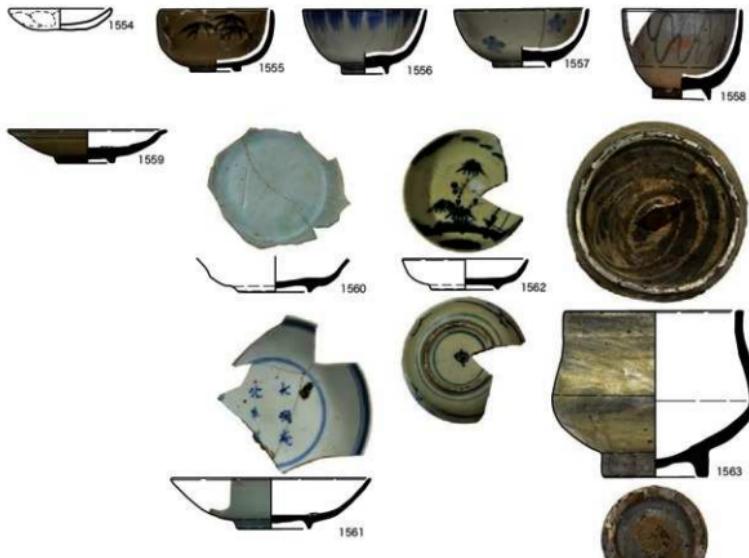
南外堀（新）下層



図68 兵庫城地区出土遺物実測図7



南外堀（新）最下層



南外堀（新）埋土・掘形



図69 兵庫城地区出土遺物実測図8

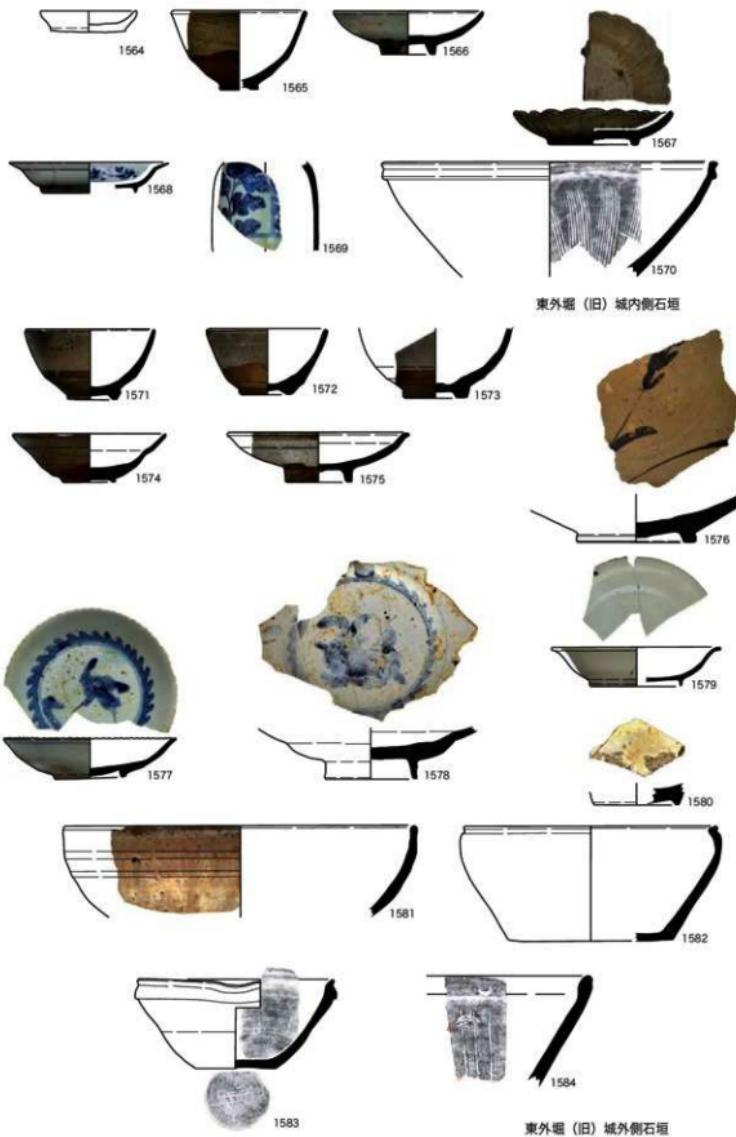


図70 兵庫城地区出土遺物実測図9

0 20m

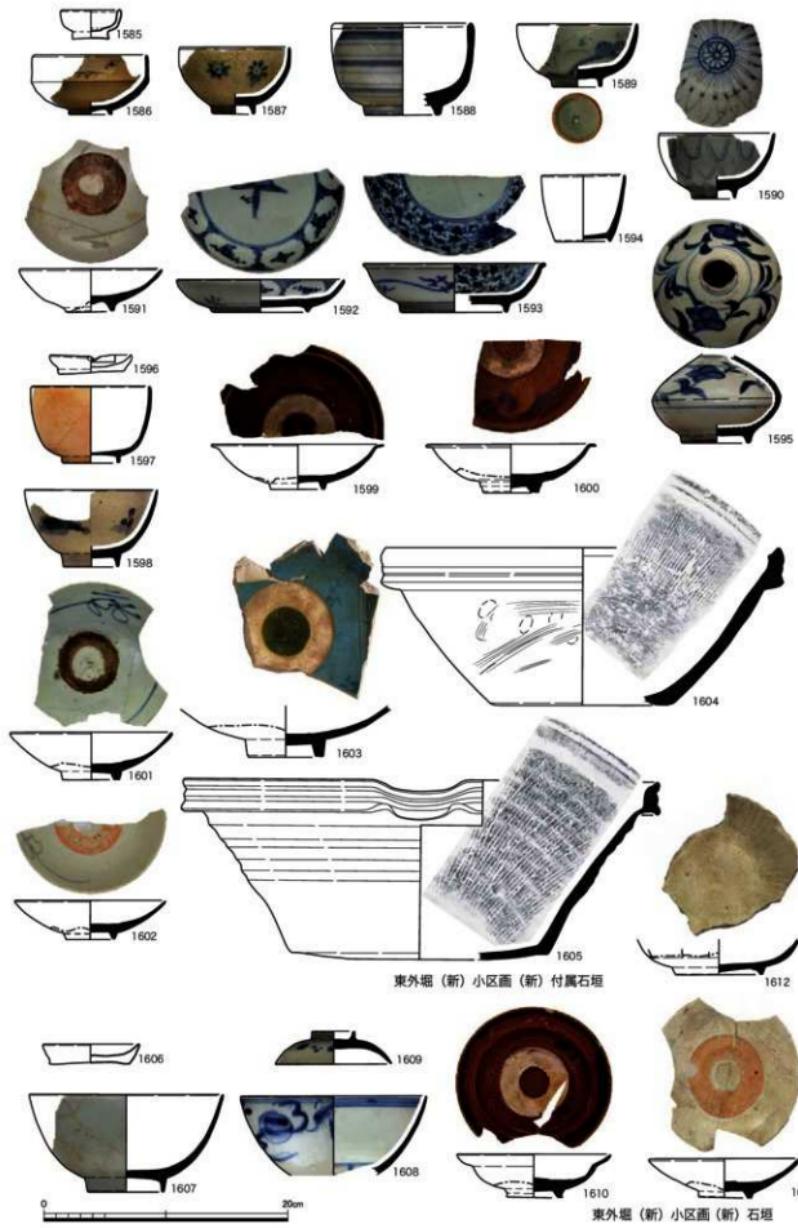


図71 兵庫城地区出土遺物実測図10



図72 兵庫城地区出土遺物実測図11



図73 兵庫城地区出土遺物実測図12



图74 兵库城地区出土遗物实测图13



東外堀（新）下層

0 20cm

図75 兵庫城地区出土遺物実測図14



図76 兵庫城地区出土遺物実測図15

0 20m

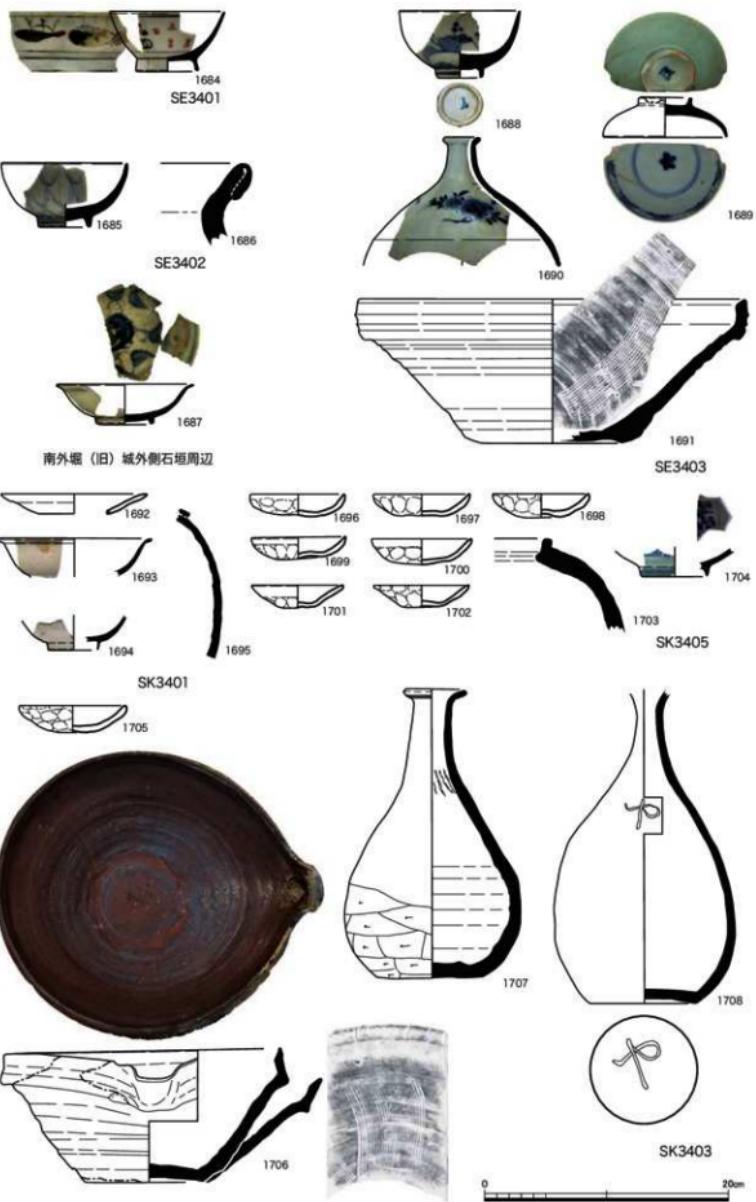
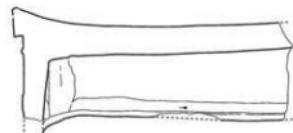
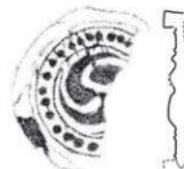


図77 兵庫城地区出土遺物実測図16



1714

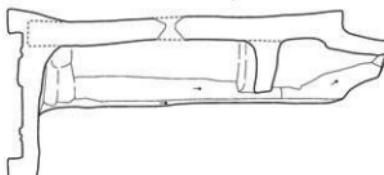
1715



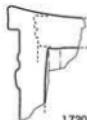
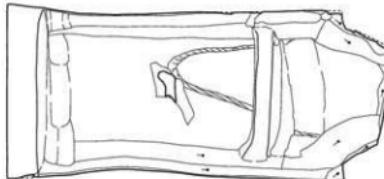
1717



1718



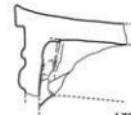
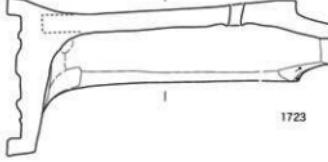
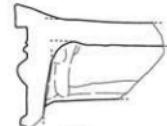
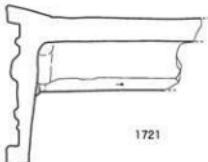
1719



1720



図78 新町地区出土軒丸瓦実測図1



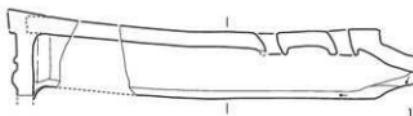
1725



1728



1730



1731

0

20cm

図79 新町地区出土軒丸瓦実測図2

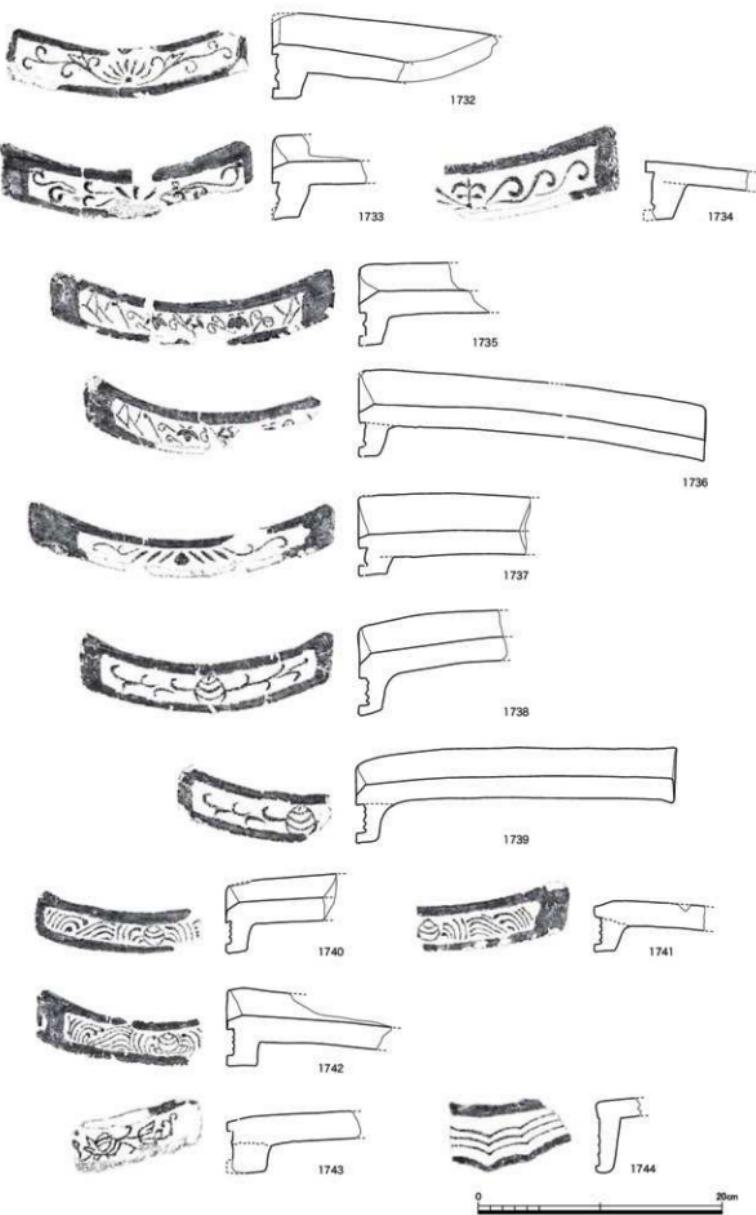


図80 新町地区出土軒平瓦実測図

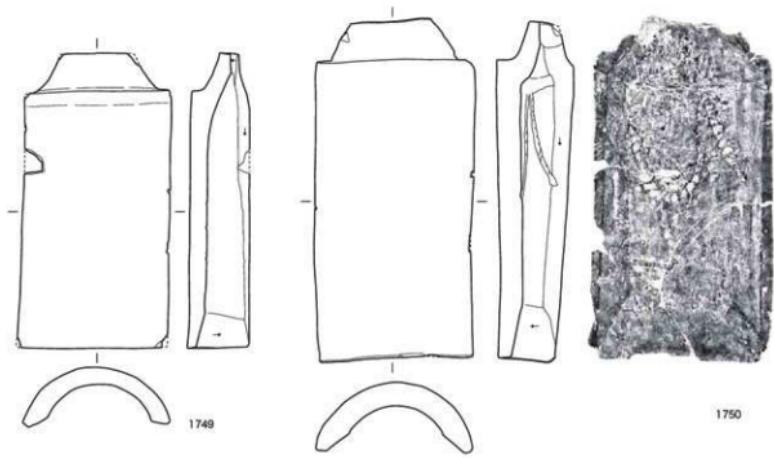
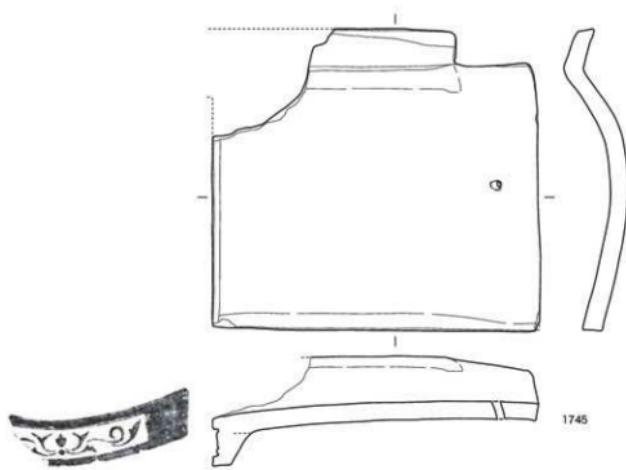
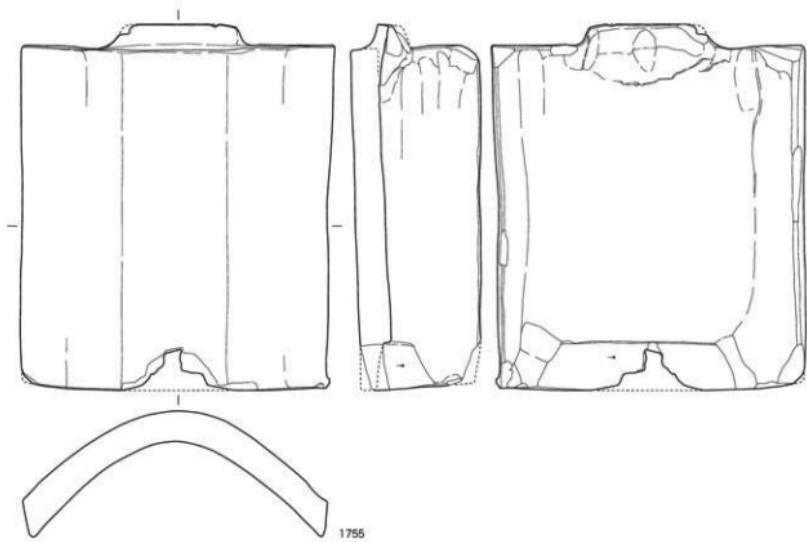
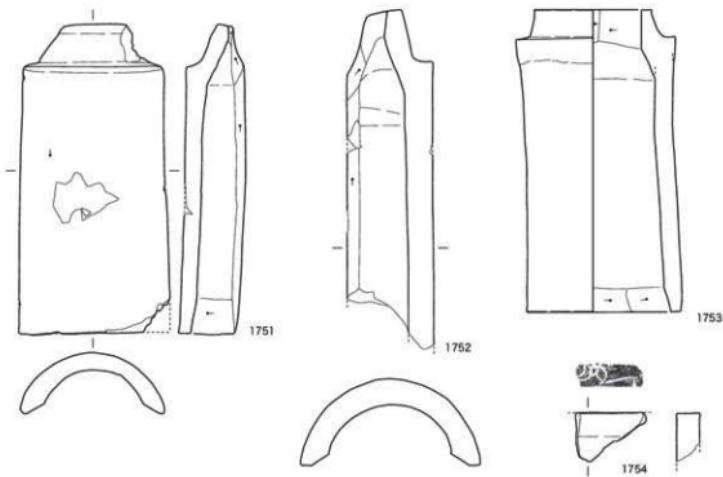


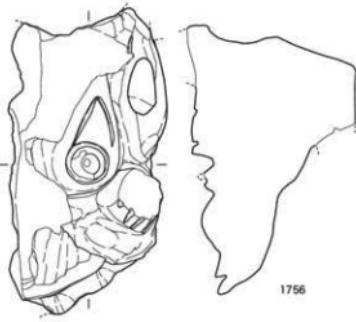
図81 新町地区出土軒平瓦・丸瓦実測図

0 20cm

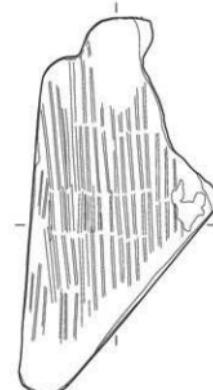


0 20cm

図82 新町地区出土丸瓦・瓦管・雁振瓦・刻印実測図



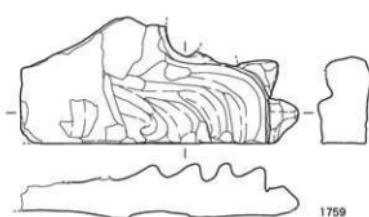
1756



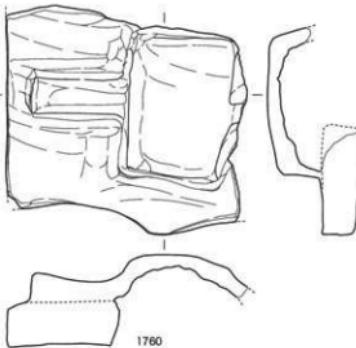
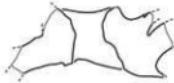
1757



1758



1759



1760

0 20cm

図83 新町地区出土鬼瓦実測図

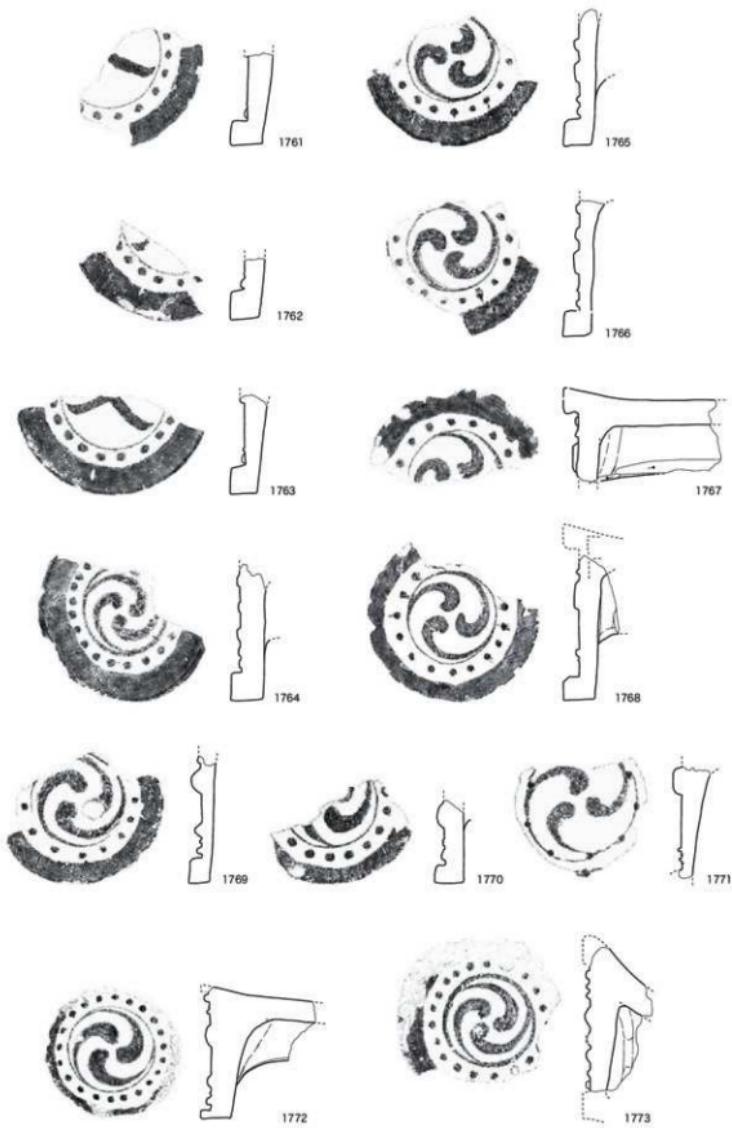


図84 関屋町地区出土軒丸瓦実測図

0 20cm

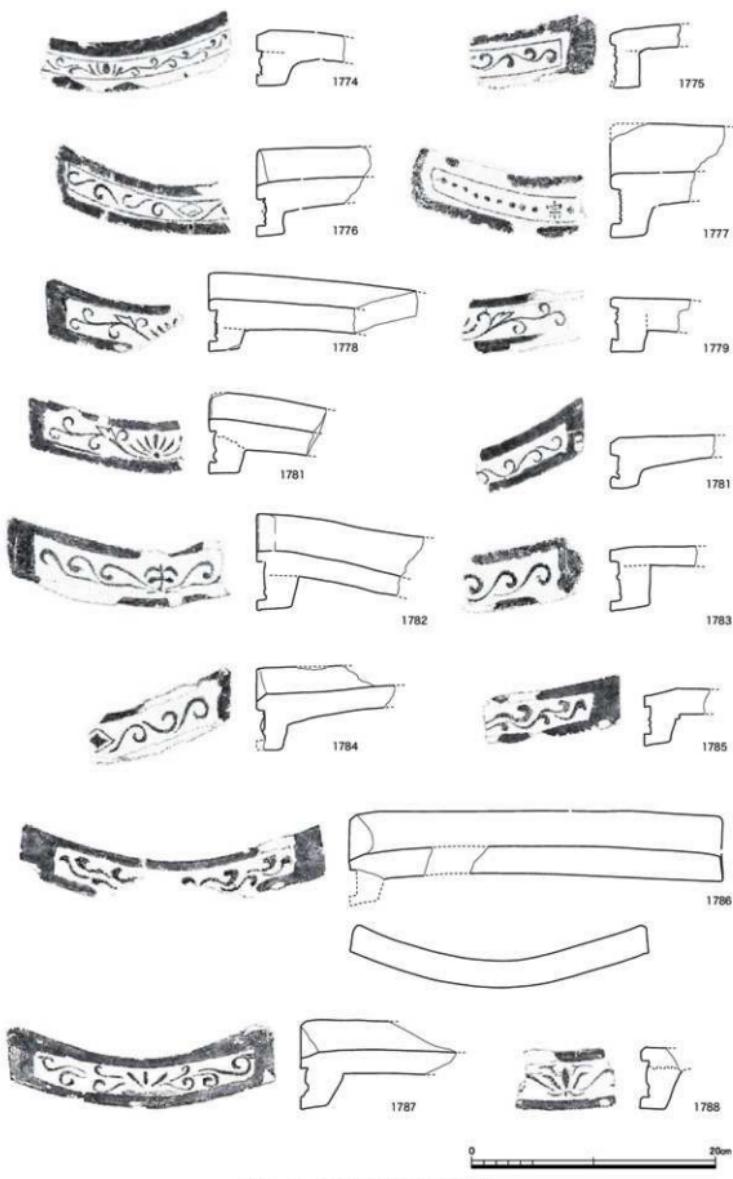


図85 関屋町地区出土軒平瓦実測図1

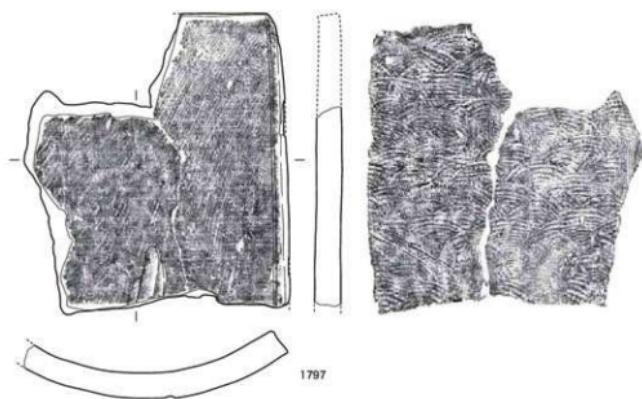
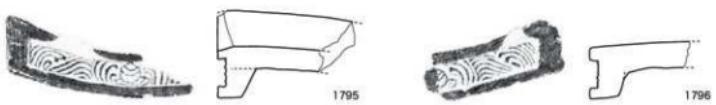
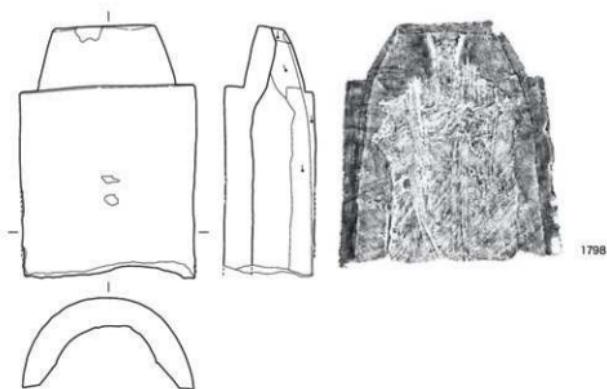
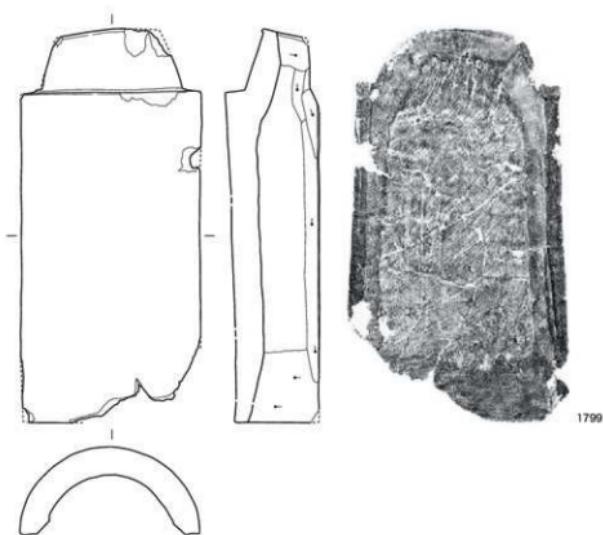


図86 関屋町地区出土軒平瓦実測図2



1798



1799



図87 関屋町地区出土丸瓦実測図

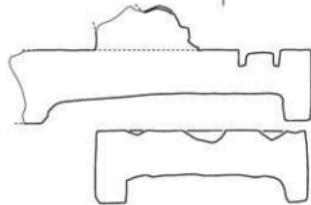
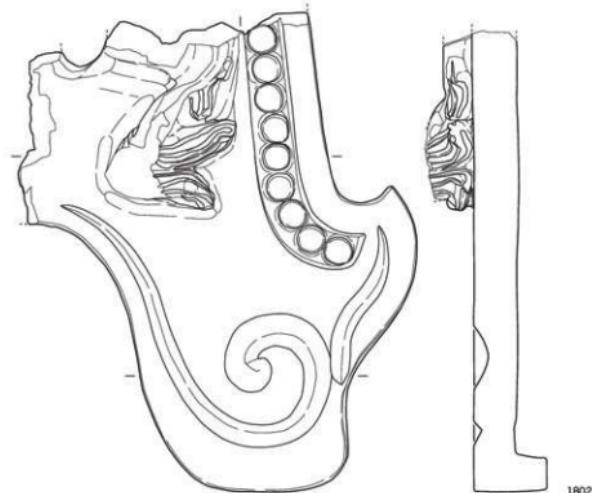
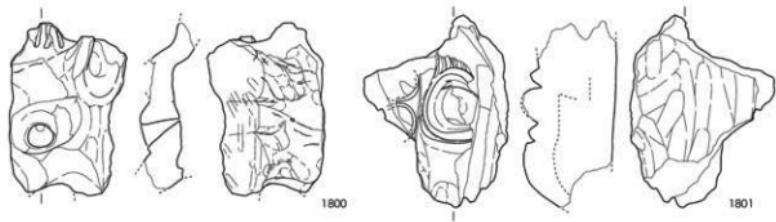
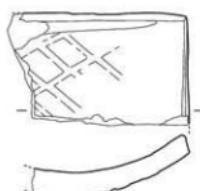
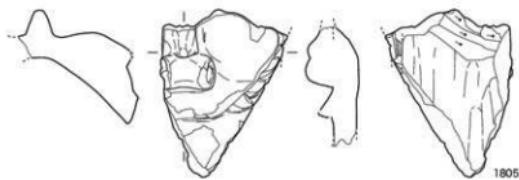
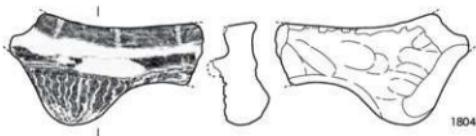


図88 関屋町地区出土鬼瓦実測図

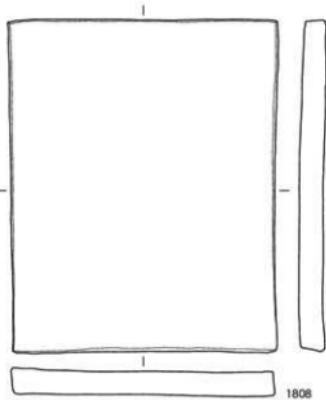
20cm



1806



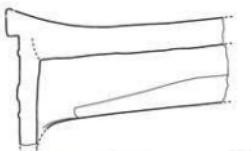
1807



1808



図89 関屋地区出土鬼瓦・平瓦・磚実測図

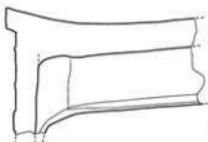


1809

1811

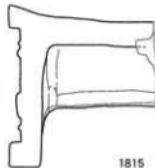
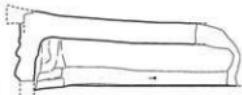


1812



1810

1813



1814

1815



图90 兵庫城地区出土軒瓦実測図1

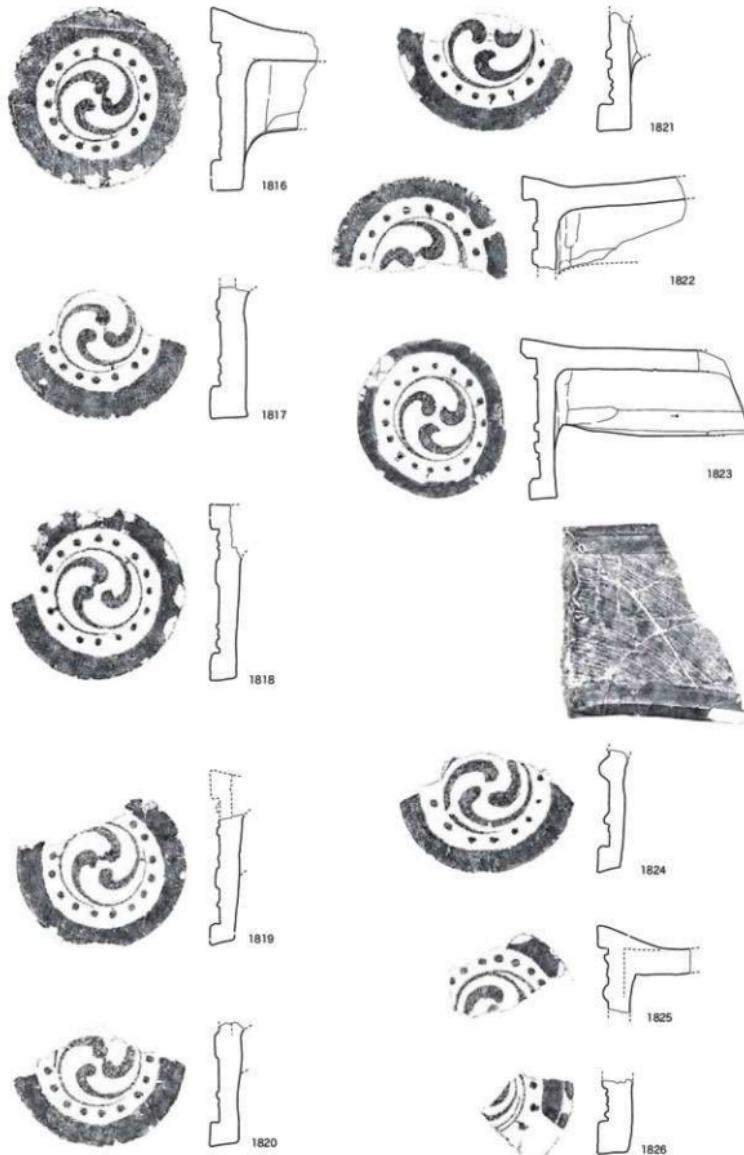


图91 兵庫城地区出土軒丸瓦実測図2

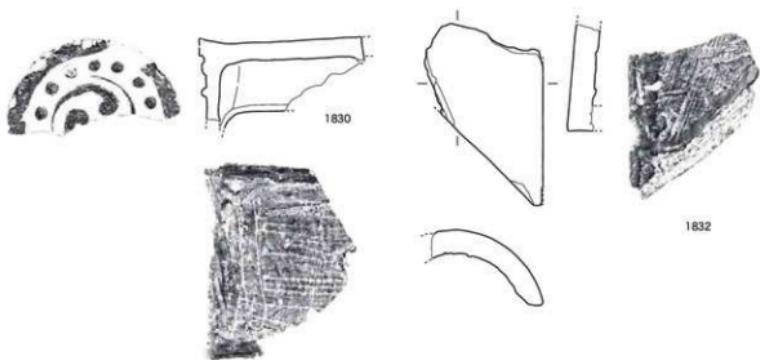
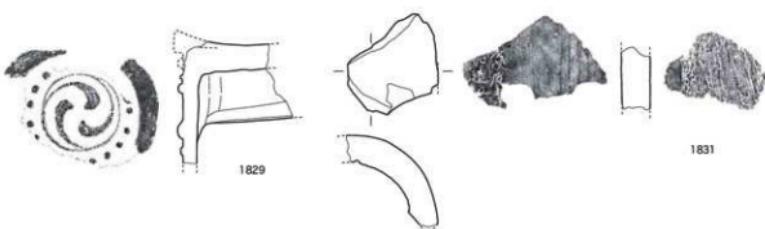
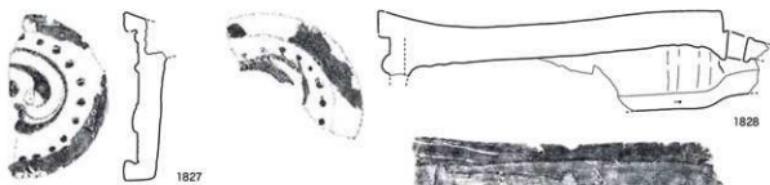


图92 兵庫城地区出土軒丸瓦等実測図

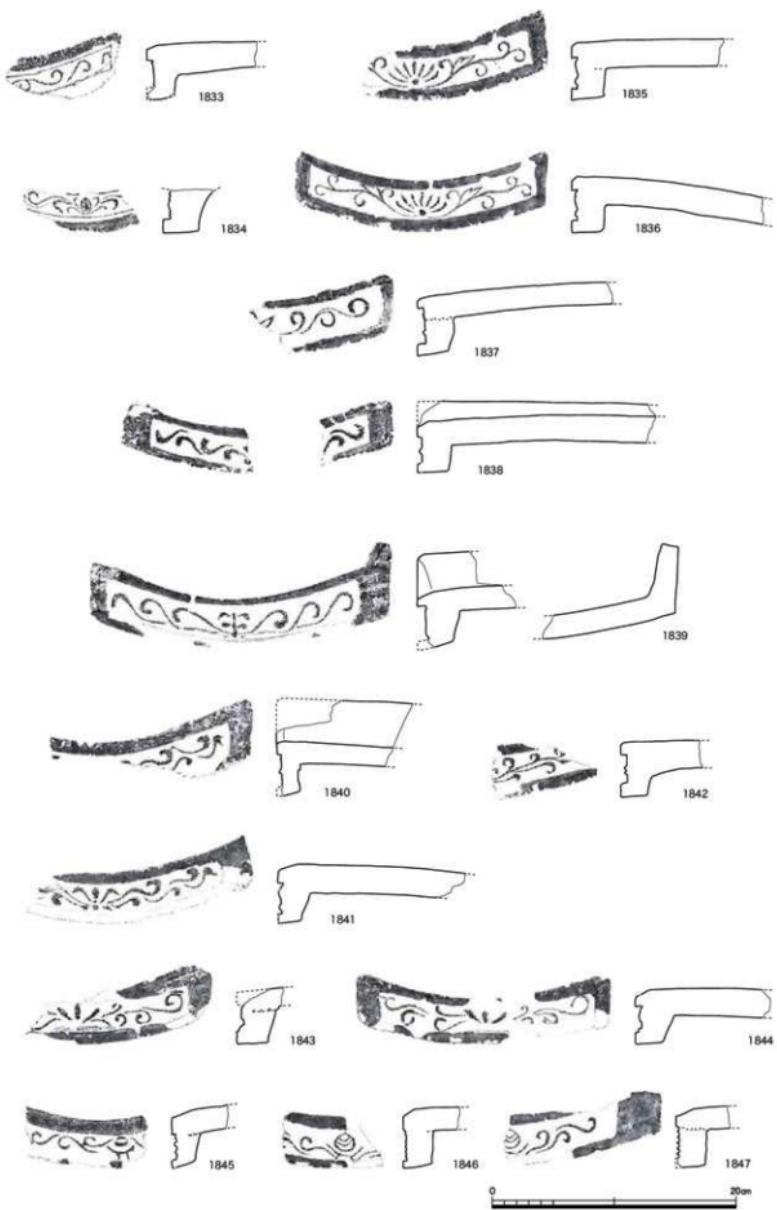
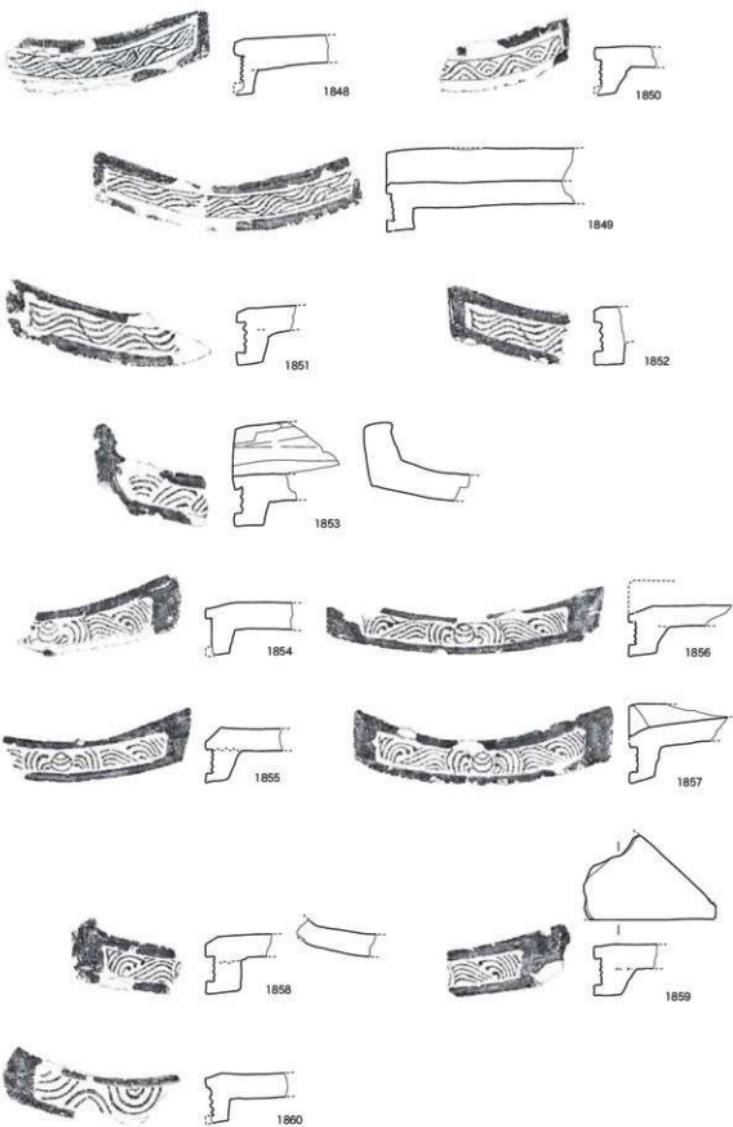
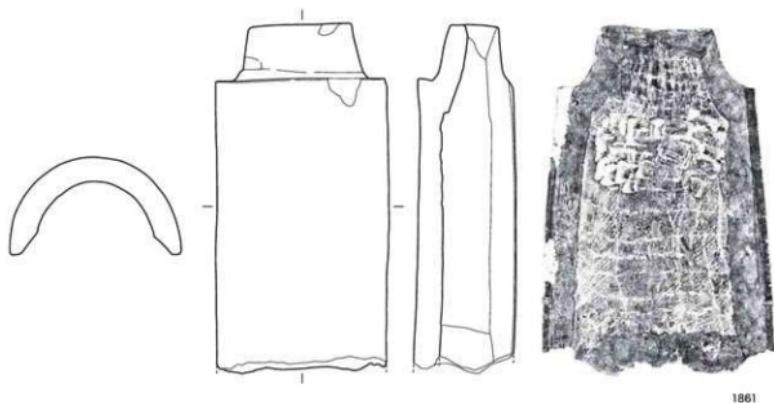


图93 兵库城地区出土軒平瓦実測図1

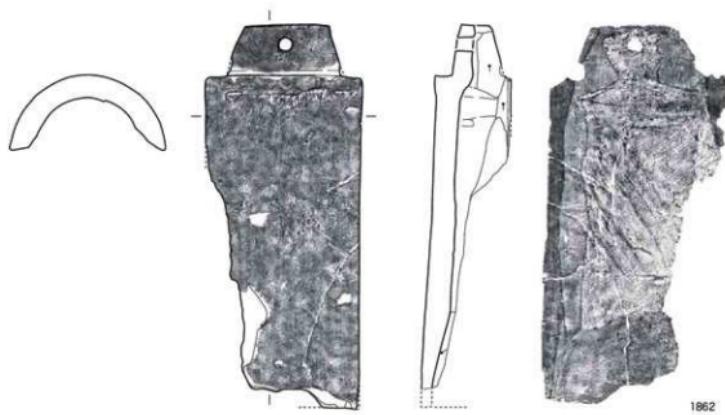


0 20cm

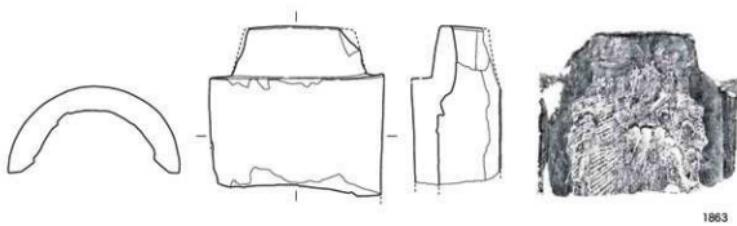
図94 兵庫城地区出土軒平瓦実測図2



1861



1862



1863



图95 兵库城地区出土九瓦实测图1

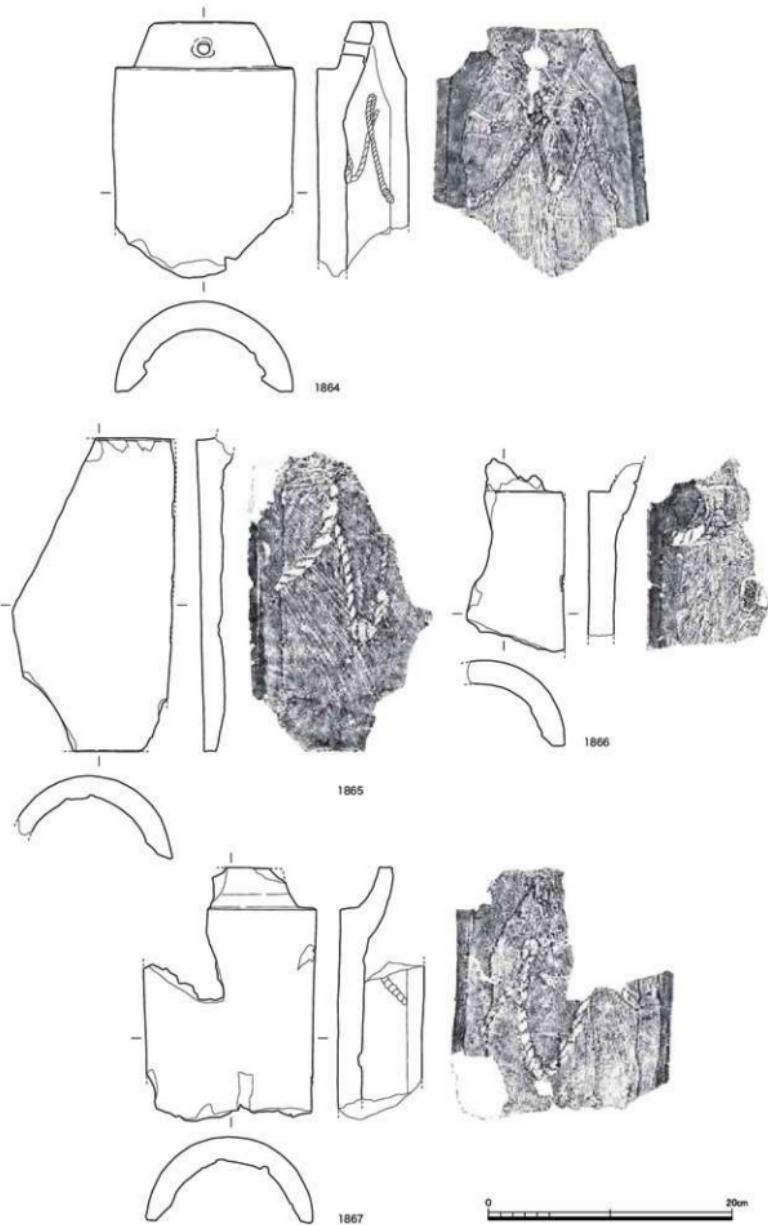


図96 兵庫城地区出土九瓦実測図2

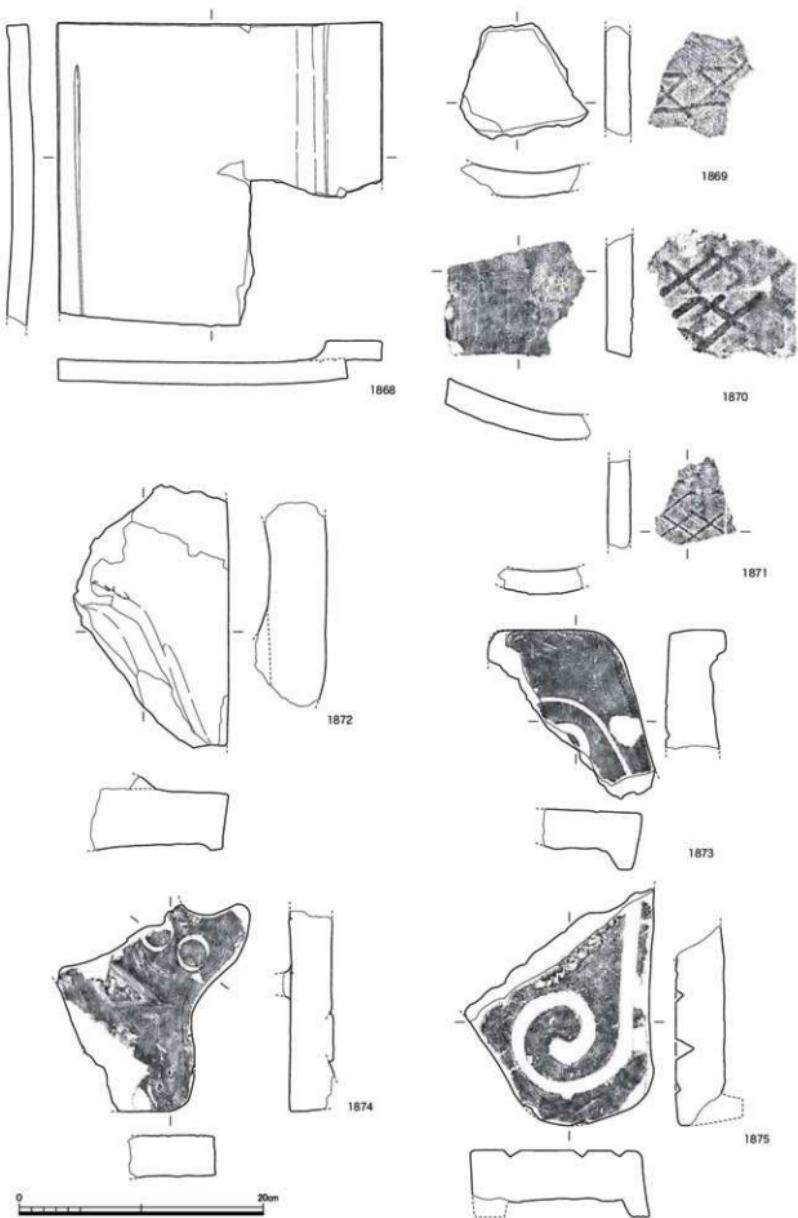


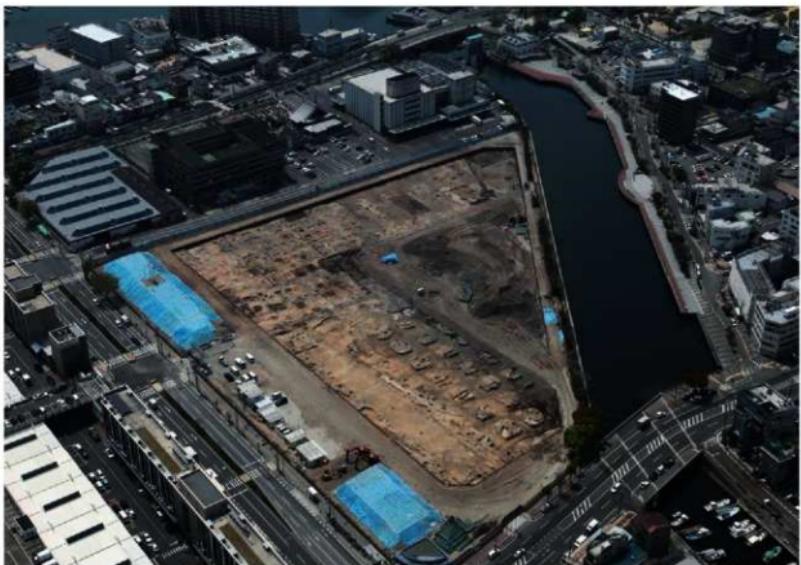
图97 兵庫城地区出土鬼瓦等実測図

## 写真図版



調査区遠景

写真図版1



1 調査区空中写真（北東から）



2 調査区空中写真（垂直）



1 新町地区 北部Ⅰ期遺構面(東から)



2 同左南西部北部Ⅰ期遺構面



3 SK1120(カマド)



5 SK1109(カマド)



4 同上 構築材



6 同上 構築材

写真図版3



1 SK1104 (カマド)



2 SK1105



3 SK1117



4 SK1108



5 SK1107・SK1101



6 SK1115



7 SE1103



8 SP1101～1105



1 新町地区　II 期遺構面全景 (北から)



2 同上〔北部〕(西から)



3 同上〔東部〕(北から)

写真図版5



1 SB1203



2 町屋群A(Ⅱ期)



3 SB1208・1209



1 SB1210・1252



2 街路2断面



3 同上

写真図版7





1 鋳冶遺構SK1213



2 石組遺構SX1201



3 SE1304

写真図版9



1 石列・貝殻集積遺構



2 同上細部



上 3 同上断面  
下 4 貝殻集積ピット



1 新町地区 III期遺構面全景 (北西から)



2 同上 (北東から)

写真図版11



1 町屋群A焼土面〔Ⅲ期〕



2 同上 宛掘状況



1 町屋群B  
焼土面〔Ⅲ期〕



2 同上 完掘状況



3 町屋群C〔Ⅲ期〕

写真図版13



1 町屋群D・E・街路2〔III期〕



2 町屋群D・街路2〔III期〕



1 町屋群D・街路2〔Ⅲ期〕



2 町屋群E・街路2〔Ⅲ期〕

写真図版15



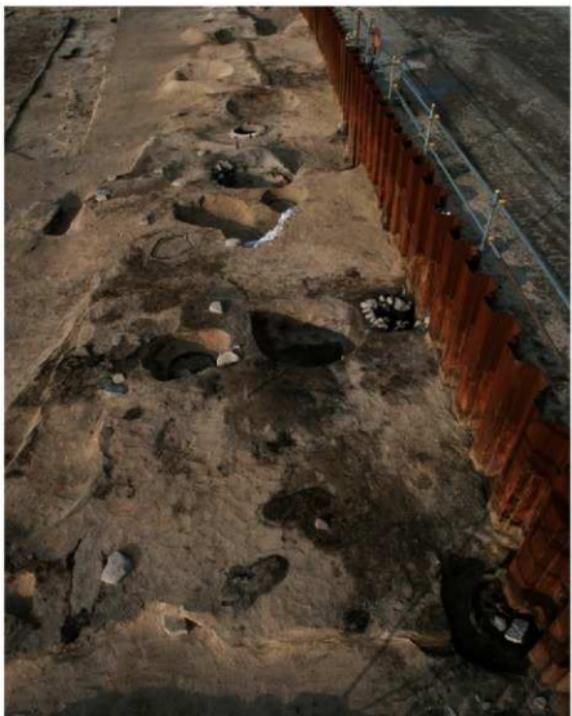
1 SB1314



2 SB1315



3 SB1325



1 町屋群F



2 SB1335

写真図版17



1 SB1334・1333



2 SB1332



1 SB1331焼土面



2 同上 遺物出土状況



3 同上 南西隅小区画



4 同上 イロリ



5 同上 間仕切壁

写真図版19



1 SB1331・街路2・SB1361



2 SB1331〔Ⅲ期〕



2 同上 細部



3 同上 断面

写真図版21



1 SB1453・1454  
上面瓦整地層



2 SB1453・1354



3 SB1455



1 SB1423・1424〔Ⅲ期〕



2 SB1424〔Ⅲ期〕

写真図版23



1 SB1413〔Ⅲ期〕



2 SB1414〔Ⅲ期〕



1 SB1415〔Ⅲ期〕



2 SB1416〔Ⅲ期〕

写真図版25



1 SK1333



2 SK1302



3 SK1305



4 SK1306



5 SK1201



6 SK1209



7 SE1306



8 SE1203



1 SE1310



2 SE1309



3 SK1313



4 SK1329



5 SK1315



6 SK1325



7 SK1327



8 SK1204

写真図版27



1 SB1463・1464



2 下層確認トレンチ1  
(北西から)



3 SB1482



1 下層確認トレンチ



2 SB1331・街路1  
断割りトレンチ



3 街路1  
断割りトレンチ

写真図版29



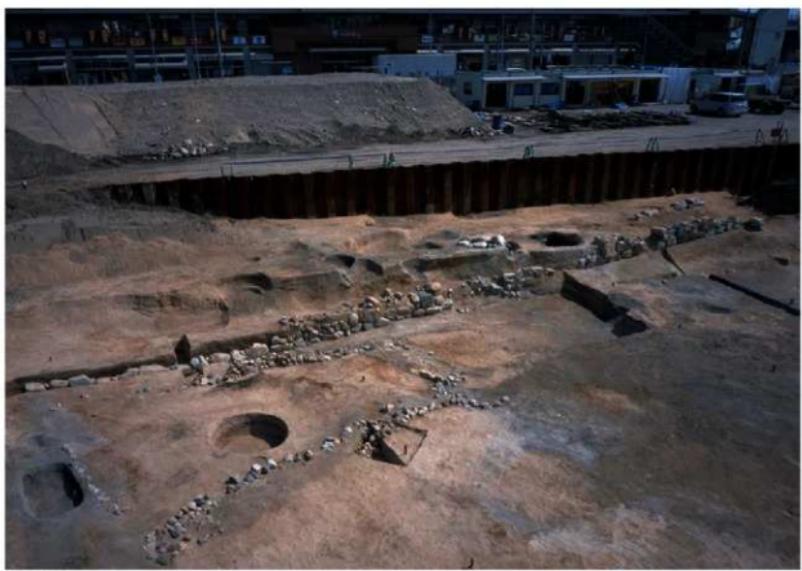
1 SX1304遺物出土状況



2 同上 完掘状況



1 SX1301



2 SX1301・1304

写真図版31



1 関屋町地区 I期造構面全景（北から）



2 同上（西部）



1 SK2106



2 SX2105



3 SK2102



4 SK2209



5 SK2208



6 SK2213



7 SK2203



8 SE2101

写真図版33



1 関屋町地区 二期造構面全景（東から）



2 同上（南から）



1 SB2201



2 町屋群J〔Ⅱ期〕



3 同左〔Ⅲ期〕

写真図版35



1 関屋町地区 Ⅲ期町屋群焼土面（北東から）



2 町屋群G・H（Ⅲ期）（北から）



1 町屋群I 焼土面〔Ⅲ期〕



2 町屋群J焼土面〔Ⅲ期〕



3 町屋群I・J焼土面〔Ⅲ期〕

写真図版37



1 町屋群G焼土面〔Ⅲ期〕



2 町屋群G・H周辺  
焼失壁材



3 SB2301



1 SB2302



2 SB2303

写真図版39



1 町屋群H〔Ⅲ期〕



2 SB2410〔Ⅲ期〕



1 町屋群I〔Ⅲ期〕



2 町屋群J〔Ⅲ期〕

写真図版41



1 SB2341



2 同上 イロリ



3 同上 カマド



4 同上 構築材



5 土間間仕切壁



1 SB2445



2 SB2446

写真図版43



1 SB2447



2 SB2445 間口部分石列



3 SB2447 カマド



4 SB2445 イロリ



5 SB2445 カマド



1 SB2324



2 SB2323



3 SB2324 カマド



4 SB2323 カマド

写真図版45



1 町屋群G〔Ⅲ期・古〕



2 町屋群H〔Ⅲ期・古〕



1 SB2401



2 SB2402



3 SB2403

写真図版47



1 SB2404



2 SB2405



3 SB2409



1 SB2410



2 SB2409 イロリ



3 SB2404 カマド



4 SB2405 イロリ



5 SB2409 カマド

写真図版49



1 SB2441~2443



2 SB2441



1 SB2445～2447



2 SB2441 カマド



3 SB2441 イロリ



4 SB2446 無文銭出土状況

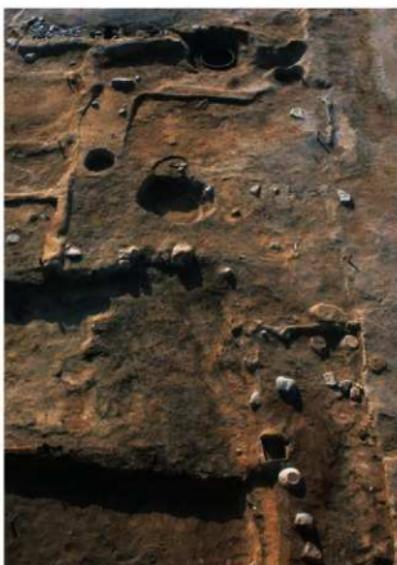


5 SB4445 転用礎石

写真図版51



1町屋群J〔Ⅲ期〕



2 SB2421



上 3 SB2422 カマド



下 4 SB2424 カマド



1 SB2422



2 SB2423

写真図版53



1 SB2451



2 同上 埼列



1 町屋群J下層確認トレンチ



2 同上

写真図版55



1 関屋町地区 中央部Ⅳ期遺構面全景



2 下層確認トレンチ [Ⅳ期]



1 関屋町地区西部V期遺構面全景（東から）



2 同上（整地土除去後の遺構 SX2501周辺 北から）

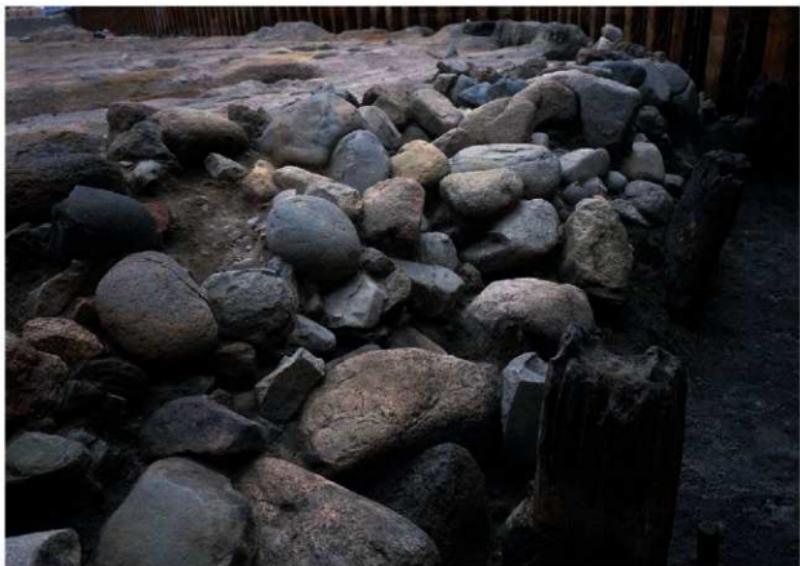
写真図版57



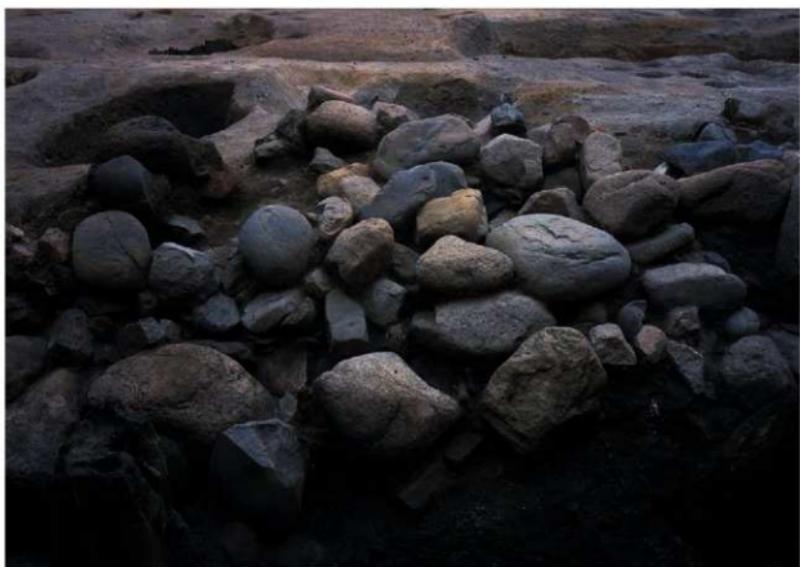
1 SX2501 (北から)



2 同上 土層断面



1 SX2501



2 同上

写真図版59



1 SK2501



2 SK2504



3 SK2505



4 SK2506



5 SK2513



6 SE2504



7 SK2514



8 SX2515



1 SD3101南側（新2）



2 SD3101南側（新1）（北東から）

写真図版61



1 SD3101東側（新1）  
中央部



2 SD3101東側（新1）  
中央部胴木組



3 SD3101東側（新1）中央部  
土留転用材〔船材〕



1 SD3101東側（新2）北部



2 SD3101東側（新2）北部



3 SD3101東側（新2）北部胴木組



4 SK3107



5 SE3101



6 SD3101東側（新1）中央部石積

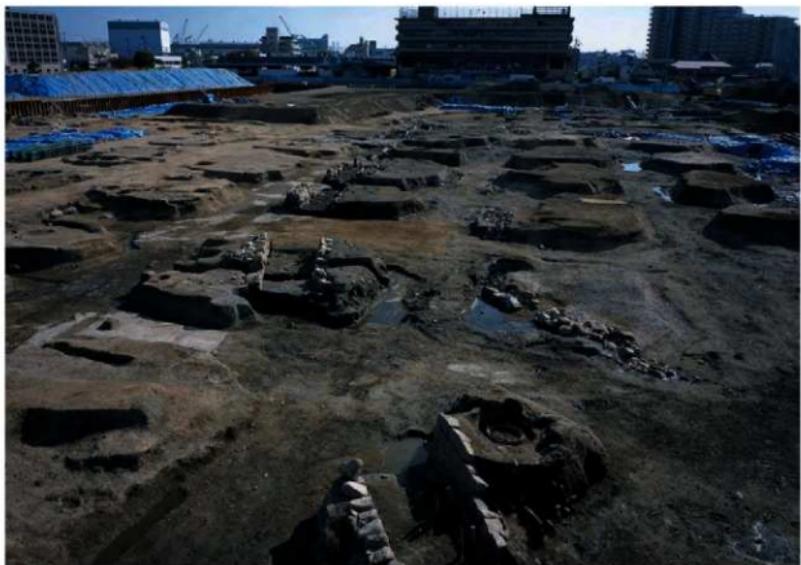


SD3101東側（新1）北部胴木組



8 同上 脇木組

写真図版63



1 SD3101東側（新1）（北から）



2 SD3101東側（新1）北部桐木組



1 SD3101南側(新1)中央部(西から)



2 SD3101南側(旧)中央部(南東から)

写真図版65



1 SD3101東側（旧）  
北部



2 同上



3 SD3101東側（新1）  
北部



1 SD3101東側（旧）  
北部



2 SD3101東側（新1）  
北部石積検出前



3 SD3101東側（旧）  
北部石積検出後

写真図版67



1 SD3101東側(旧) 北部



2 SD3101東側(旧) 中央部



1 SK3102



2 SK3103



3 SK3104・3105

写真図版69



1 兵庫城全景（南から）



2 同上（北から）



1 南外堀・内堀（南東から）



2 土橋1・副郭（東から）

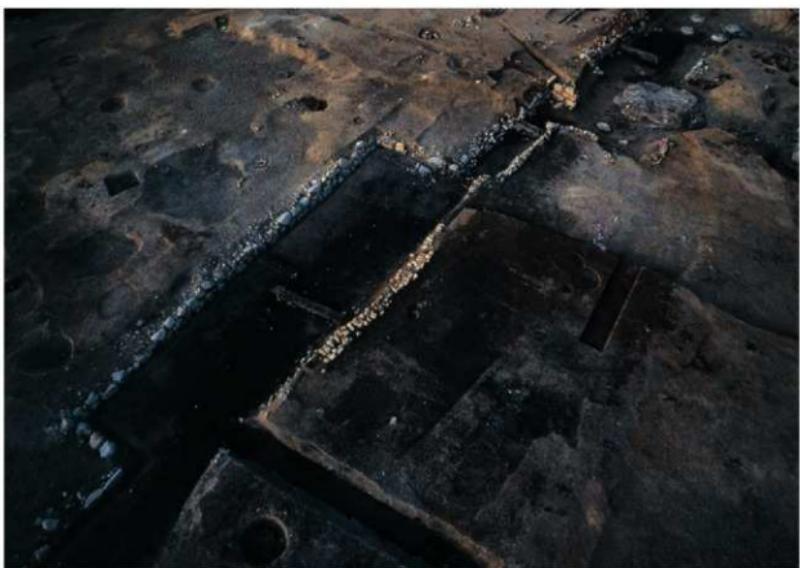
写真図版71



1 内堀（新）副郭側石列



2 内堀（新）副郭側石列下層



3 内堀（新）（南東から）

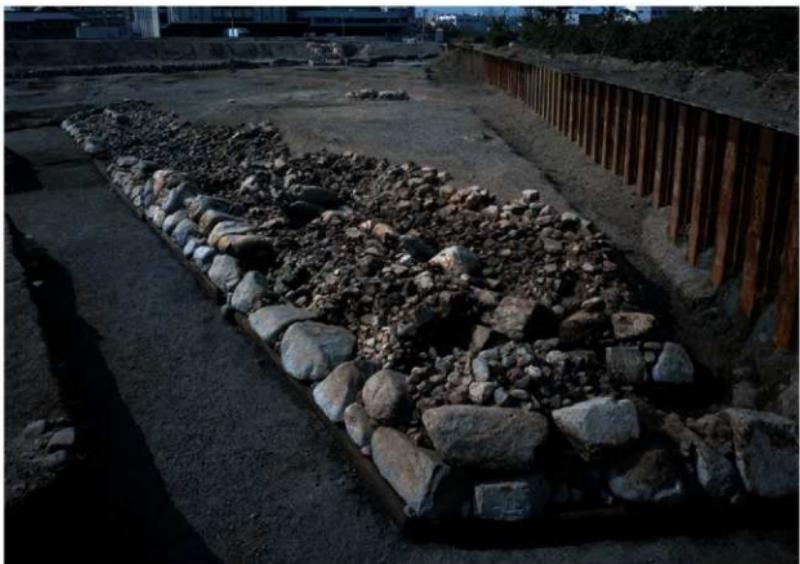


1 内堀（旧）主郭側石垣（北から）



2 同上

写真図版73



1 内堀（旧）主郭側石垣（北東から）



2 同上（南東から）



1 内堀（旧）主郭側石垣細部



2 同上



3 同上



1 内堀（旧）副郭側石垣（北西から）



2 同上細部



3 内堀（旧）主郭側石垣裏込



4 内堀（旧）・土橋2（北西から）



5 内堀（旧）副郭側石垣壘形



1 内堀（旧）・土橋2（北西から）



2 新内堀（新）・土橋3（南東から）

写真図版77



1 南外堀（西から）



2 東外堀（南東から）



1 南外堀城外側石垣（北西から）



2 出角部転用石材



3 転用石材〔石仏〕



4 同右上



5 同上

写真図版79



1 南外堀城内側石垣（南東から）



2 同上（南西から）



1 南外堀（新）堆積状況



2 東外堀（旧）城内側堆積状況



3 内堀（旧）堆積状況

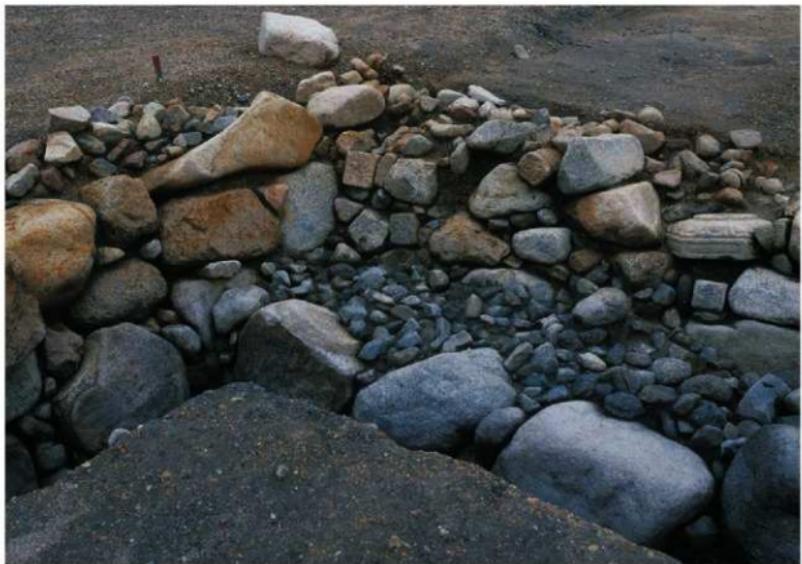
写真図版81



1 東外堀（新）小区画（新）（北東から）



2 東外堀（新）小区画（新・旧）



1 東外堀（旧）城内側石垣（北東から）



2 東外堀（旧）城外側石垣（南西から）

写真図版83



1 東外堀（旧）城内側石垣  
(南東から)



2 同上



3 同上



1 東外堀・土橋1(南東から)



2 東外堀(旧) 城内側石垣・土橋1南石垣(東から)

写真図版85



1 瓦敷遺構（南東から）



2 同上細部



1 東外堀・土橋1・副郭周辺〔上層〕(北西から)



2 副郭南部(北から)

写真図版87



1 SK3404



2 SK3405



3 SE3403



1 SE3402



2 SE3401

写真図版89



1 SE3501



2 下層土留遺構（北東から）



1 新町地区 江戸時代中期～後期 出土遺物



2 新町地区 SB1308・1309・1353・1355 出土遺物

写真図版91



1 新町地区 SB1304・1305・1310 出土遺物



2 新町地区 SB1311～1318 出土遺物



1 新町地区 SB1322~1325 出土遺物



2 新町地区 SB1331~1334 出土遺物

写真図版93



1 新町地区 SB1331 出土遺物



2 新町地区 石組遺構 SK1325 出土遺物



1 新町地区 石積遺構 SX1301 出土遺物



2 新町地区 大型石組遺構 SX1304 出土遺物



1 新町地区 下層 出土遺物



2 間屋町地区 下層 出土遺物



1 関屋町地区 江戸時代焼土層 出土遺物



1 関屋町地区 SB2341・2342・SB2441～2447 出土遺物



1 関屋町地区 SB2301～2305・2309 出土遺物



1 関屋町地区 SB2321～2327 出土遺物



1 関屋町地区 SB2421～2427 出土遺物

写真図版101



1 関屋町地区 SB2410・2413・2414 出土遺物



2 関屋町地区 江戸時代初頭遺構 出土遺物



1 関屋町地区 SB2341 出土遺物



2 関屋町地区 SB2441 出土遺物



1 関屋町地区 西半部下層整地層 出土遺物



2 関屋町地区 SX2501 出土遺物



1 関屋町地区 SE2504 出土遺物



2 関屋町地区 SK2504 出土遺物

写真図版105



1 兵庫城地区 SK3101 出土遺物



2 兵庫城地区 SK3103 出土遺物



1 兵庫城地区 SD3101 南側 出土遺物



1 兵庫城地区 SD3101 東側（新1）出土遺物



2 兵庫城地区 SD3101 東側(旧)出土遺物



1 兵庫城地区 内堀(新) 出土遺物



2 兵庫城地区 内堀(旧) 出土遺物



1 兵庫城地区 南外堀（新）出土遺物



1 兵庫城地区 南外堀（旧）出土遺物



2 兵庫城地区 東外堀（旧）出土遺物



1 兵庫城地区 東外堀（新）出土遺物



1 兵庫城地区 東外堀（新）小区画出土遺物



2 兵庫城地区 副郭南側遺構 出土遺物



1 兵庫城地区 SE3501 出土遺物



2 兵庫城地区 下層土留遺構 出土遺物



1 町屋出土輸入陶磁器（色絵）1



2 町屋出土輸入陶磁器（色絵）2



1 朝鮮王朝陶磁器



2 焼塩壺



1 土人形



2 ミニチュア土製品等



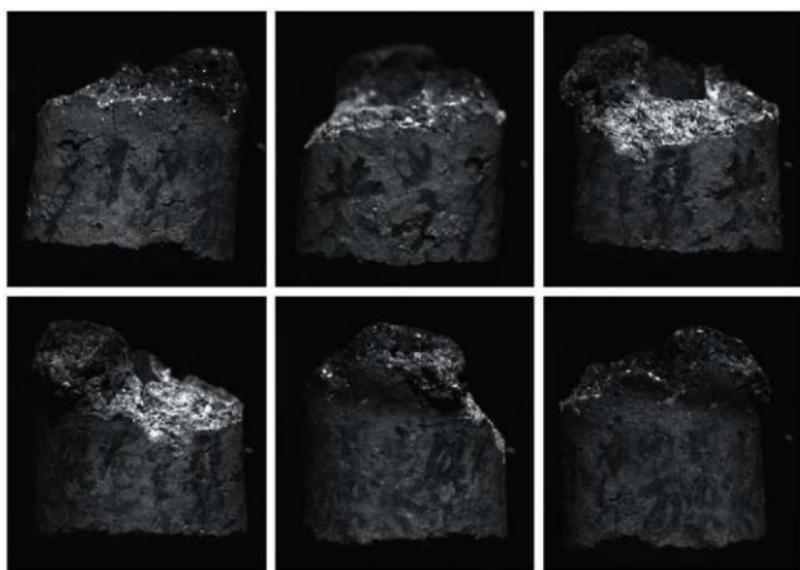
1 転用面子・有孔円盤



2 漁労具（土錘・蛸壺・浮子）



1 輪羽口



2 墨書羽口



1 町屋 出土瓦

写真図版121



1 町屋 出土軒丸瓦1



2 町屋 出土軒丸瓦2



1 町屋 出土軒平瓦1



2 町屋 出土軒平瓦2

写真図版123



1 SE1304 出土遺物



2 町屋及び兵庫城地区 出土平瓦（凸面タタキ）



1 兵庫城地区 出土瓦



1 兵庫城地区 出土軒丸瓦



2 兵庫城地区 出土軒平瓦



1 遺構出土 鬼瓦1 (表面)



2 遺構出土 鬼瓦1 (裏面)



1 遺構出土 鬼瓦2(表面)



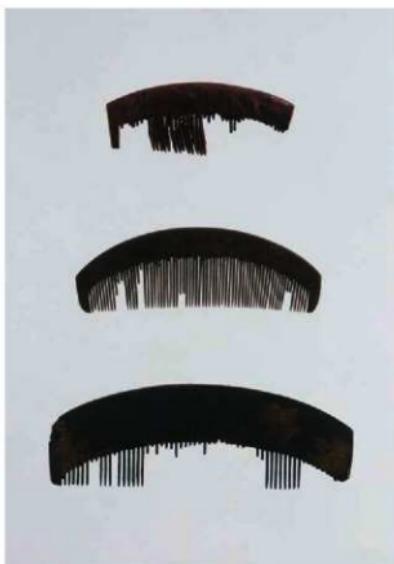
2 遺構出土 鬼瓦2(裏面)



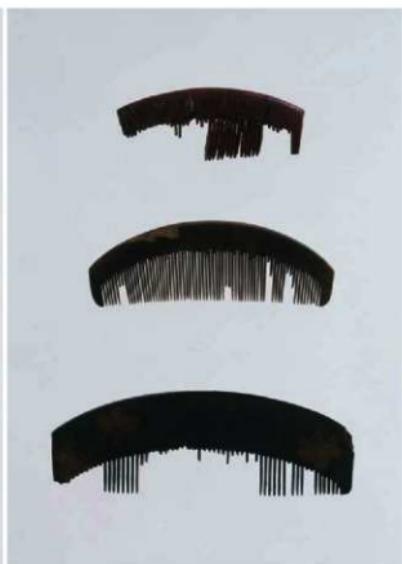
1 船材



1 漆器



2 横櫛（表面）



3 横櫛（裏面）



1 玩具類



2 和船（ミニチュア）



3 下駄



1 判子（侧面）



2 判子（印面）



3 各種木製品



4 鏡箱



1 工具



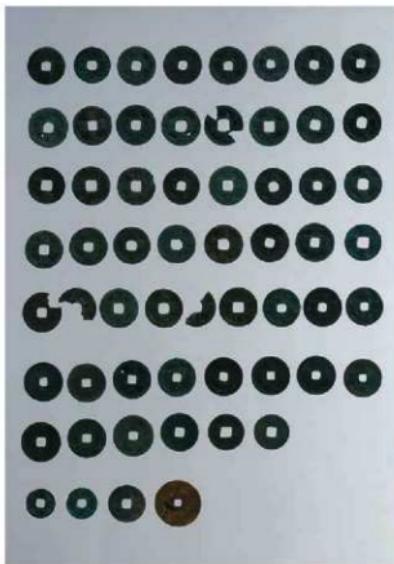
2 調理具



3 結合具



4 調度部品



1 銅銭



2 秤量具



3 武器・武具



4 文房具・遊具・祭祀具・容器



1 装身具・化粧道具



2 喫煙具



3 茶道具



4 漁具・不明品



1 水滴・硯



2 骨製品1(化粧道具)



1 骨製品2(玩具)



2 骨製品3(用途不明品等)



1 丸彫地蔵菩薩立像 (2131)

[正面]

[背面]



1 長足五輪塔(2124)と一石五輪塔



2 長足五輪塔(2124)と一石五輪塔



1 長足五輪塔 (2121)



2 同左部分



3 角塔婆 (2132)



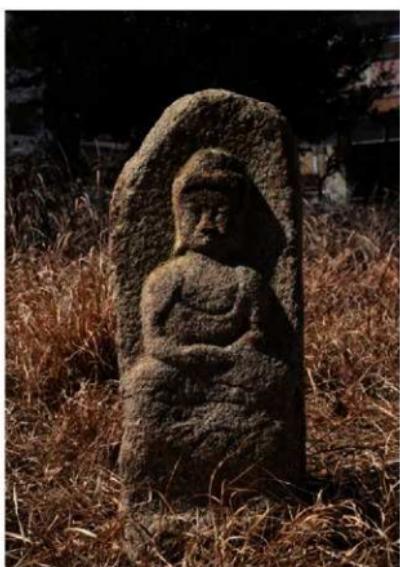
4 長足五輪塔 (2129)



1 長足五輪塔 (2148)



2 石龕仏 (2142)



3 石仏 (2123)



4 石仏



1 石五輪塔 (2143)



2 角塔婆 (2144)



3 長足板五輪塔 (2145)



4 角塔婆 (2147)

## 報 告 書 抄 錄

---

---

## 兵庫津遺跡 第62次発掘調査報告書

平成29年3月 印刷

平成29年3月 発行

発 行

神戸市教育委員会文化財課  
〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号  
TEL 078-322-6480

印 刷

デジタルグラフィック株式会社  
〒650-0043 神戸市中央区弁天町1丁目1番  
TEL 078-371-7000



City of Design  
**KOBE**

United Nations  
Educational, Scientific and  
Cultural Organization

Member of the UNESCO  
Creative Cities Network  
since 2008

## HYOGOTSU SITE

The 62nd Archaeological Excavation Report

March 2017

Board of Education Secretariat City of Kobe  
Hyogo Prefecture JAPAN